

天国には理想郷がありまして

空飛ぶ鶏°

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私、死んじやった？　ここは天国？　ある意味天国だけどこんな天国認めたくはない。嫌過ぎるでしょ、こんな川辺にゴミが落ちている様な天国。

そんな少し捻くれた主人公が、銀魂の世界へ落っこちた。

原作で『命』を救えなかった人達の救済を軸にした、ローテンポな恋愛物。

目次

貴方は天国を信じますか？

天国の存在確率 | 1

きらきらしくて | 7

犬も歩けば台風に当たる | 12

真実はいつもひとつ！ | 16

愚者と酔っぱらい | 21

適量な優しさ | 27

海と星とそして月 | 33

事件はターミナルで起こる | 36

帰宅 | 44

閑話 バタフライ・エフェクト | 47

天国のその上向こう

カルーセルとエルドラド | 53

一緒にどうだと誘われたから六月二十六日は攘夷記念日 | 61

魔力を失った役立たず | 69

愛は世界を回す | 77

星間飛光 | 85

砂の星から愛をこめて | 91

斬り捨てられたフラグ | 99

AからBへの手紙 | 106

命を絆ぐ | 113

閑話 坂田銀時の独白 | 119

水の星から愛をこめて | 125

天国と万事屋

モンスターとボール

127

馬鹿も風邪を引く

134

不等価交換

141

鬼のパンツはイチゴのパンツ

147

江戸に根を下ろし、風と共に生きよう

157

へびのあし

163

閑話 山崎退の監察日記

180

虹のたもとの銀の鍵

186

天国に咲く白詰草

褒めて殺す

193

小晴日和

204

命と選択を

217

もののけ侍

222

指を斬る

229

花束の女

239

三つ葉のクローバー

248

天国の中心でアイを叫べなかつた狐

閃光花火

255

水心あれば石に心あり

264

エレメンタル・パレード

268

ダンボールを持て余す

274

閑話 眼鏡を通して見たキリという人間

278

アルテミスはバツカスより多くの人を救った

285

エビでたい焼きを釣る

298

そして、たい焼きでマダオを釣る

305

薔薇には棘があり、苺にも種はある

Mパート 豚にフィギュア

Mパート ソールイーター

Sパート 地獄の旅の一里塚

ねこひろい

ホワイトフォックス

閑話 いちご畑に会いに来て

フォックスハンターハンティング(上)

フォックスハンターハンティング(下)

キツネを包む

メニー・マニー・メリー

天国、そして日は昇る……か？

一千回と死んだ猫

よだかの太陽

マミーコンプレックス

夜兎を追うものは殺される

フェイタルチルドレン

酒と泪と雲と月

閑話 ガムと風船

閑話 一万本の赤いカーネーション

天国に告ぐ

飴ふらし

シグナルはイエロー

相打ち御免

晴れ時々眼鏡

いと、いとわしく、いとおしく

糸繰りの歌

因果ハ応報ス

同族ハ嫌悪ス

寓話 かぐや月夜

天国に祝杯を

エリー、と

ハイオク満タン焼酎も

エネルギー保全の法則

汎用人型決戦兵器彼女

命と選択を

呉越同舟ただし泥舟

天国と釜の蓋

JKく常識とは考えるな感じろく

月に願いを

星に誓を

483

488

491

497

504

507

512

516

523

526

530

532

536

544

貴方は天国を信じますか？ 天国の存在確率

——ピー

最後に見た光景は、一直線を示す心電図。無機質な部屋で、静かに一人佇む私。気がつけば、上も下も右も左も、ずっとずっと続く先も、まっしろな世界にふわりと浮んでいた。何が起きたか考える間もなく、再び重力を得た私は落ちていった。

手足を動かす。冷たい水の感覚と、ざらつとした砂の感触。そんな、感じる筈のない感覚に目を開けると、水の中で揺らめく、サビつきひしやげた青い清涼飲料水の缶が見えた。

手と膝をつけて体を起こし、頭を上げる。

空には飛行船。古臭い、教科書でしかみたことのない街並み。土手の上には着物で行き交う人々と、異形の生物。

『銀魂』

一瞬掠めた考えを否定しようにも、じゃあ何だっというのだといえど、銀魂としか答えようがなく、目を閉じて「夢だ」を十回繰り返して再び開けてみても、やっぱりそれ等は変わることなくそこにあった。

常にかけていた息苦しさやダルさが消えていて、体がやけに軽く感じられる。そういえば長らく入院着だったから、普通の服を着るのは久しぶりだなあと思った。

「どーしますかね」

脳気を装って呟くが、事態が好転する兆しはない。水を滴らせながら、体育座りで川べりに座り直す。飛行船の轟音と、チャプチャプとした水音。背後から聞える喧騒の様な、生々しい生活音。

何が起こったのか？ 記憶は、病院のベッドの中で、今週のジャンプまだ読んでないやと思いつながら目を閉じた所で途切れている。その後、に続く不思議体験。

私、死んじゃった？ ここは天国？ ある意味天国だけど、こんな

天国認めたくはない。嫌過ぎるよね、こんな川辺にゴミが落ちている様な天国。現実には疲れたおっさんが自殺してここに辿り着いたら、きつともう一回自殺するんじゃない？

でも、もしさ、ここが銀魂だったらちよつとだけ見てみたいなあ、まるで駄目なおっさんでもいいからさ。ほら、私、銀魂好きだしね。で、ちよつとお邪魔して帰ってさ、何か面白い夢みたよーってそんな感じで終わればいいのになあ。

そんな事を考えていたら、少しだけ乾き始めた体が、生臭い匂いを漂わせ始めた。それに、切り離れた筈の現実を否応なく認識させられ、引き戻される。

既になくなった様な気がする幸せを、ため息と共に逃がし、能力とか力とか言っちゃやうと中二臭くて死にたくなるけど、そう呼ぶしかないものを使って、体の水分と汚れを取り去る。

水蒸気がフワツと立ち上り、服に染み付いた泥がスポイトで吸い取られる様にスルスルと何処かへ消えていった。

ややこしい詠唱も、魔法陣も、ついでに言えばMP消費なんて不便なシステムもいらぬ。

世界を超え、気がつけば使えるようになっていたソレは、多分何でもできる——魔法の力。

こざつぱりした所で立ち上がる。

きつとこれ以上ここに居ても何も変わらない。

残念な事に太陽は真上に位置し、活動限界を迎えるにはまだ早い。これが夕方や夜であれば、明日にしようなんて言い訳もついたのでなあーなんて思いつつ、もう一度幸せを吐き出し、気分を変えるために背伸びを——。

「オイそこのお前！」

——しかけた所で黒づくめの男に声を掛けられた。黒づくめと言ってもお酒の名前がついた奴等ではなくむしろ逆……。

「この辺で怪しい奴を見なかったか？」

土手の上から声を掛けてきた人物は、黒い隊服に身を包み、首に白

いスカーフを巻いていた。チンピラ警察——真選組。

黒ずくめが唾えた煙草から煙が立ち上る。無意識の内にその先を追っていた事に気付き、視界から外れた男に視線を戻す。

怪しい奴ねえ……。

「いえ特には」

取り敢えずそう答えた。見てはいないから嘘じゃない。

黒い髪の毛、瞳孔が開いた目、煙草とくればもう一人しか思い浮かばない。恐らくこの人は真選組副長土方十四郎^{ひじかたとうしろう}。

マダオでいいのにも思っていたら、こんな大物が引つかかるなんて、幸せは存外残ってるものなんだなあ。

「そうか……協力感謝する」

土方さんは感謝の欠片も浮かばない声でそう告げると、くるりと背を向ける。まあそんなものだよね。僅かばかりの接触到、少しだけ上がった心拍数が落ち着きを取り戻す。

けれど、それで私は残された幸せを使い果たしたのだろう。去っていくはずのその背が、不意に横に飛び退る^{すざ}。視界に入ったのは、その影から真つ直ぐこちらに向かい飛んでくる弾頭。

土方さんが何かを叫びながら——恐らく避けろとかそんな事を言っていたのだと思う——崩したバランスの中で振り向くその前に、避けきってしまった。

一瞬遅れて響く爆音。焦げた匂いと煙が立ち昇る。石砂利は飛び散り、焼け焦げた黒い跡が残った。

土方さんは、その直ぐ脇に立つ私と目が合うと、仏頂面を崩し、ニヤリと獲物を見つけた獣の様な顔をした。

「土方さん、死にやしたかい」

「総悟。今回だけは許してやる」

土手の向こうから歩いてきたのは、バズーカを構えた同じく黒ずくめの男。銚色の髪をしたベビーフェイスのドエス野郎——真選組一番隊隊長沖田総悟^{おきたそうご}。

名探偵になった覚えは無いが推理するに、先ほどの爆発は沖田さんの手に握られたバズーカが原因。意図していない行動にもサド成分

は含まれるんですね。

明らかに一般人では避けきれなかったハズの弾頭を避けてしまった私。

怪しい奴を探してたっけなあ……。誤魔化した先ほどの回答を身をもって撤回してしまった。でも結局どうしたら正解だったのかわからないそれに、信じてもない神を呪う。

「何モンだテメー……」

沖田さんを振り向きもせず、土方さんがゆっくりと土手を降りてくる。

「ただの一般市民です」

「それが本当なら何処の誰なのかちゃんと答えてみやがれ。安心しな責任もって俺が身元確認してやるよ」

やあ、現住所は次元の向こうにありましてね？　なんて言えるわけがない。

「屯所までご同行願いましょうかお嬢さん」

口を引きつらせた私に、土方さんはイヤらしい笑みを浮かべ、刀を抜き構える。

ってか問答無用？　探している人間ってそんなヤバイ奴なんですか？　まずったなあ。

「もう少しお話しませんか？　強引な人も嫌いじゃないんですけど、色々とお互い誤解が生じてると思うんですよ」

「全部屯所で聞いてやるよ」

両手を上げて、敵意がない事を示すが、まったく聞く耳を持たない。嫌だってそんなところ行くの。ってか何で不審者追ってるのかぐらい教えてよ。だからチンピラ警察だって言われるんだよ！

口には出せない悪態をつきながら後退り、逃げようとしたそこに刀が振り下ろされる。

砂利が弾け飛び、石つぶてが当たる。地味に痛い。

「いやいやいや、止めて下さい！　本当にちよつと運動神経がいい一般市民ですから私！」

「嘘をつけ！」

本当だから！ 反射神経と筋力その他諸々を不思議な力で底上げしているだけの善良な一般市民なんですってば！ 原理は説明出来ないけど！ そう続けて叫びたい気持ちを堪^{こら}える。

一般という枠組みから少しばかり外れてしまった様な気もするけど、一般市民の範囲に片足ぐらい入れたって許されるんじゃない？ 何も悪い事なんてしてないんだからさあ。

返す刀も避け、続けざまに振るわれる横薙ぎも紙一重でかわす。鋭くなる刃と目つき。殺気とはこういうことを言うのだろうか……肌の上を電気が走るような、ピリピリとした感覚を覚えた。

「何ちんたらやってんでさア」

そんな声に視線を上げると、土手の上で沖田さんがバズーカを構えていた。

「なっ!!」

土方さんの眉が上がり、細まっていた目が丸くなる。飛んでくる本日二発目の弾頭をお互いにつきに避け——その隙について逃げ出した。

「ありやりや、逃げられちまいやしたねエ」

「総悟テメエエエエエ!! ってか追え!!」

後ろからそんな声が聞える。追手が掛かるその前に、物陰に隠れ『空間を繋ぎ』跳んだ。

初めての行為で勝手が分からず、とりあえず遠くに見えた高い木の上に跳んでみたのだが、案外正解だったようで、枝葉が姿を隠してくれる上、江戸の街が一望出来た。下を見ると公園で、着物を着た子供たちが遊具を使って、かなりアクロバティックに遊んでいる。

それを見ながら枝に腰掛け足を投げ出した。

生まれて初めて向けられた、殺意に近い敵意。光りすぎて模造刀かと思つた刃。

木の幹に置いた右手はカタカタと小刻みに震えていて、感触すら曖昧だった。そして、右手を止めようと上げた左手すら震えている。

痛いほどに脈打つ心臓。

ちよつと、これ限界……。

いつの間にか浅くなっていた呼吸に思考がようやく追い付いてくる。

色々とはみ出た物はあるけれど、いわゆる一般とか普通とか日常とか、そんなニュートラルな感覚を思い出そうと、ゆっくりと深呼吸し、目を閉じる。

よくよく考えてみれば、今更あんなものを怖がるってのも変な話だよなあ。一直線を示す心電図が脳裏に浮かぶ。ほら、死んじゃったかもしれないのに、もう一度死ぬのが怖いなんて可笑しな話じゃない？

大丈夫な理由を思い描き、耳を澄ます。

子供の声、鳥の囀り、遠くに聞こえる車のクラクション。

暗闇の中に、何一つ変わらない世界が広がっていた。

ようやく取り戻した自分に目を開けると、お手本の様な空が視界を青く染め上げる。

遠くに見える高いビルはターミナルビルだろうか？

太陽の煌きを一心に受け、燦然と輝くそれは、江戸の象徴。

銀魂ファンだったらさ、一度見てみたいと思わない？ ターミナル

とか、江戸城とかをさ。

緊急事態にも関わらず、そんな事を考えてしまう私の脳細胞は、きつと紫色。

でもどうしたって止められない胸の高鳴りのままに、大江戸観光ツアーに出掛ける事にした。

きらきらしくて

あれから執拗に追いかけてくるようになった真選組を、真正面きつて相手するのも面倒臭く、『鳥』——私の目と耳を持った式神の様なソレを使いながら避け続けるが、隊士全員を完璧に避けきれぬ訳もなく、見つかつては追いかけてを繰り返す。

そんな日々の合間で江戸城を遠目に眺め、柳生邸や、恒道館、ついでに屯所も回って見た。危うく土方さんと鉢合わせするところだったけれど、それでもそのリスクを犯すだけの価値はあったね！

けれど、唯一回れていないのが万事屋。なんかこう、いざ行こうとするとダメなんだよね。あそこ。

きつと理想郷つてのは存在していると夢想していた方が幸せな気がする。夢は現実にするもんじゃない。運良くというか、万事屋の面々にも会うことなく過ぎることができている。これは神様がそーしといた方が良いよと言ってるんじゃないかなあなんて、呪った次は、責任を押し付ける。

次はどこを回ろうか。なんて考えながら、食べ終わったアイスクリームコーンの巻紙をクシャッと丸めて捨てる。ちゃんとゴミ箱にね。ポイ捨ていくない。

巷で評判のアイスクリーム屋さん。評判通り濃厚なバニラがいい感じだった。

「海行(うみゆき)かな〜」

ぎざざーんって白い波を上げる海が無性に見たくなった。黒いアスファルトを地道にテクテク歩き、波止場まで。途中、真選組に追いかけられたので、ちよつとだけショートカットする。

ついた波止場から見える海は、穏やかで温かく、チャプチャプキラキラ光るだけ。そんな海を見ながら、途中で買ったコーラのプルタブを、プシュツという音と共にこじ開けコクリと飲む。

んー、もつと激しい波を見たかったんだけどなあ。かめはめ波でもぶち込んでみようか？ なんて物騒な事を考えながら、見えもしない海の向こうに思いを馳せる。海鳥達はそんな私を嘲笑うかの様に群

れをなして飛んで行った。

ポップコーンでも持って来れば良かったかなあー。気軽へ飛んで行くそいつ等を引き止める術すべを持たない私は、それを黙って見送る。真選組は空気を読んでくれたのか、ここまでは追いかけてこなかったので、波止場にいる人間は私一人。気兼ねなく、海から連想される歌を熱唱する。

海はひろいなあから始まり、WAVEまで歌いきった所で、太陽が地平線に沈んでいった。

赤く焼ける空を見ながら、明日は何しようかなあーと考える。靴を飛ばして天気を占うと明日も晴れだった。

明日は山に行こうか、そして今度は山彦と会話をしよう。そう決めて、片足でびよんぴよんと表になった靴まで跳ねて行く。

だんだん大きくなる地響きの様な音に振り返ると、ドッパンツ!! と激しい水音を立てて船が着水する。波が飛沫しぶきを上げ、海が白く泡立った。そーそーこーこーという波を見たかったのだ。最後に見れたそれに満足して、星が瞬き始めた海を後にする。

帰りながら空を見上げ、流れ星降ってこないかなあーと、三回祈る。けれど、神龍シエンロンに願ねがい事の回数を増やしてくれとお願いする様なその行為は叶う筈もなく、代わりに見慣れた街明かりが遠目見えてきた。

山崎さん公認のアンパンをもしやりと齧かじりながら、相変わらず無茶な遊びをする子供たちを見つめる。いい加減夢だとか妄想だとか、そーいうのを考えるのは止めた。現実だねこれは。ようやく認めることができたそれに、公園のベンチにだらしなく座りながら一人頷く。

見たことのない江戸城も、屯所も、海も、山も、飛行船もその他諸々も妄想であんなにリアルに想像できやしない。お腹だつてすくんだ。死んでもいない? 本当? それは分からない。まあ、結局何でもいいのだ、コギト・エルゴ・スム的に考えれば。

さてと、やりたい事を済ませてしまった後は、さしあたって目標も

なく、やるべき事も特には見つからない。

不思議なマジカル的な力のお陰で、生きていくにも特に困りはしないし……。

戻れる気配も全くなくなって、どうしようかと再び子供達を見つめる。

ジャングルジムの上で鬼ごっこってよくやるよなあー。落ちたら痛そうじゃない？ その勇気と言うべきか無謀と言うべきか、本能に任せ動きまわる姿に賞賛を送る。

そんな事を考えながら、アンパンをもうひとかじりした所で、うっかりとそれを捉えてしまった。

視線の端、植え込みの向こう。

「銀ちゃん酔昆布買ってヨ！」

「昨日買ってやったじゃねエか。そんなお金うちにはありません」

「ふざけんな、パチンコ行ってたやつが何言うアル」

「ぐはっ!! タ、タツプ!!!」

「神楽ちゃん！ 銀さん落ちます。これ以上やったら銀さん落ちるかー!!!」

「このクソ野郎はもう落ちる所まで落ちてるアルヨ。これ以上何処に落ちるっていうアルか!! 地獄か？ 地獄に堕ちろこの野郎オオオ!!!」

「その落ちるじゃなくてエエエエ！ ストオオオープ！」

首の角度は変えずに、眼球だけをゆっくりそちらに向ける。公園沿いの道を歩く三人組。真っ白な着流しの背後から、伸し掛かる様に首を絞める赤いチャイナ服。それを止めようと手を伸ばす、青年になりかかった少年。

自分の心臓が一際大きく跳ねる音が聞こえた。光がそこに収束し、呼吸は止まり、瞬きすら出来なくなる。

その姿は憧れそのもので、とてもとても眩しくて自然と目が細まってしまう。

現実に失望するなんて事はない。むしろ焦がれてしまうような煌きを持っていた。

その銀色が余りにも綺麗過ぎて、その周りを回る二人が余りにも温かくて、なんだか……しまったなと少しだけ思った。きつと私はその眩しさと温度を二度と忘れる事ができない気がした。

視界の端に収める程度でも十二分だと思っていた筈なのに……綺麗過ぎて思わず手を伸ばしたくなる。

触れてはいけませんと注意書きがしてある——モナリザに恋する意味を知った気がした。それか太陽に焦がれるイカロスだ。

蠟の翼しか持たない私は焼け落ちる前に、そつと目を閉じる。それでも瞼の裏に焼き付いたかのようにくつきり浮かぶ彼等に、今度は声に出してしまったなと呟いた。

何度目の逃避行だろうか。もういい加減にして欲しいなあー。屋根の上から下の路地を覗き込み、走り去っていく隊士達を見送った。

「お前、悪い人間アルか？」

「!？」

あつぶねー。危うく屋根の縁に置いた手を滑らし、落ちるところだった。

背後から聞こえた声に振り向くと、紫色の番傘をさした、青い瞳が綺麗な女の子。番傘が作り出す陰の中で、その瞳は興味津々といった風にこちらを見下ろしていた。

『触れてはいけません』そんなフレーズが蘇る。

「違いますうー、善良な一般市民ですうー。ほら酢昆布上げるからあつちに行つて遊んでおいで」

手についたゴミを払いながら、立ち上がり、ポケットから赤い箱を差し出しシツシツと追い払う。

視界が上がり、今度はこちらが神楽ちゃんを見下ろす形となった。

「銀ちゃんが『知らない人間から物貰うんじゃねエ』て言つてたネ」

神楽ちゃんはその仕草に一瞬キョトンとした後、物欲しげな目でその箱を見つめる。

『ただで貰えるモンは取り敢えず貰つておいても損はねエよ』とかも

「言っていない?」

酔昆布の箱とその間で揺れる神楽ちゃんの背中をちよつとだけ押しあげてあげる。

「銀ちゃんの事知ってるアルか?」

「知らないよ、全然」

眩しいぐらいに真っ白な着流しを思い出す。あんな真っ白な物を私は知らない。

その答えに納得したような、してないようなそんな顔を浮かべる神楽ちゃんの手の上に箱を乗せる。

「お前いいヤツアルナ」

捨て台詞は心なしか嬉しそうで、傘をくるくる回しながら元気よく屋根の上を駆けてく姿を見送った。

あーあ……本当もう勘弁してほしいなあ……色々と。

「チャイナ! テメエ人の頭踏み台にすんじゃねエ!」

「そんな所にいるお前が悪いアル」

遠くから、そんな声が聞こえる。

その声を追って響くバズーカの爆発音。

本当勘弁して欲しい。手を伸ばしたくなる煌きを思い出してしまおうじゃないか。

犬も歩けば台風に当たる

本日も快晴！　と言いたいところだが、不穏な雲が広がる空の下で鬼ごっこは続けられる。今日は公園の木の上に隠れて真選組をやり過ごす。がさりつと音を立てて枝が揺れ、青い瞳が葉っぱの間から顔を出す。

「酔昆布見つけー！」

ねえ神楽ちゃん、私の名前は酔昆布じゃないんだけど？　一度餌付けしてしまったのが悪いのか、私を見つけたら酔昆布が貰える、という何か勘違いした神楽ちゃんは私を見つけた度、そう強請^{ねだ}ってくる。鬼ごっここと隠れんぼを同時に出来るほど器用じゃない私は、度々にその強欲な瞳に晒されることとなる。

「あーあ見つかつちゃった。はいどーぞ、今日も元気に遊んでおいで」
まあ、そんな神楽ちゃんの期待に応えるべく、常時酔昆布を携帯している私も私んだけど、酔昆布の付属品扱いだから問題ないと自分に言い聞かす。

余談だが酔昆布はちゃんとお店で購入している。少し前に、作り出した金を、貴金属買取店で買って貰い、お金も入手済み。

店で買わずとも、酔昆布も同じ方法で作ろうと思えば作れるのだが……細かい作業が苦手なこの力、なんとか味が微妙なのだ。便利なのか不便なのか分からないコレは一体なんなのだろう？

「どうしたの？」

いつもは酔昆布をもらおうとそのまま駆けていく神楽ちゃんだが、今日は何か言いたそうにこちらをじっと見つめている。不思議に思いそう声をかける。

「銀ちゃんがもうすぐ台風来るって言ってたネ！　酔昆布は台風対策大丈夫アルか？」

わずかに首を傾けた神楽ちゃんは、嬉しそうにそう聞いてくる。台風が楽しみなのだろうか。私も子供の頃はそうだったからなんとなく分かった。

誰かとその気持を共有したい。そう透けて見える心に私も笑う。

「大丈夫だよ。神楽ちゃんこそ台風に巻き込まれないうちに帰るんだよ」

きつと台風の中でも笑って遊ぶ神楽ちゃんだらうけど、一応大人の嗜好^{たしな}としてそう注意をする。

「はいはいヨ。酔昆布もちゃんと帰れヨ〜！」

「うん。そーするよちゃんと」

神楽ちゃんは元気にそう言うと、来た時と同じ様に枝葉を揺らして降りていく。

『帰れヨ〜』という言葉に私はちゃんと笑えただらうか？ 風が枝を揺らし、湿った台風特有の匂いが強くなってきた気がする。あーあ面倒臭いなあ、今日はどこに泊まろう。いつも使っている橋の下は川が増水するかもしれないから使えないし。

いまだに私は帰る場所も住む場所も——居場所を見つけきれないでいる。真選組の件もいい加減にしないとそろそろ不味い。問題は山積みで、しかし能動的に何かをする気にはなれず、万事屋さん依頼ですよ〜と出来もしない他力本願的な事を夢想する。

『触れてはいけません』その言葉をゆっくり飲み込み、予備の酔昆布を齧る。風が泣いていた。

台風は予想以上の強さでやってきた。甲高い悲鳴の様な音を立てて風は空気を切り裂き、雨はバケツの水をひっくり返すという例そのままに降りしきる。その雨のせいで、案の定川は増水し、そろそろ慣れてきた寢床を失った。

そんな台風と呼ぶにふさわしい台風を、公園のアスレチックに隠れやり過ごす。ただし、コンクリートで出来た小山に穴が空いているだけのそれは、壁なんて無いも同然なので、雨は吹き込むし、風なんてその狭い隙間で増幅され、外より酷いかもしれない。唯一の利点は、こんな台風の日^に外に^{いる}しかない不審者を人目から隠してくれるというだけだろう。

それでも私は、神楽ちゃんに見習い台風を楽しもうと心に決めていた。後で傘を広げてメアリー・ポピンズ^ごでもしてみようか。

そんなつもりでいたのに……念のため飛ばしていた鳥が面倒臭い物を拾ってしまう。何やってるんだこの人は……。

増水した川に飲み込まれた犬。岸に引つかかった一抱えほどもある、折れ裂けた木の枝にしがみつくとソイツを、沖田さんは橋の上に止めたパトカーの窓から頑張れーとやる気のない声を上げしばらくの間見ていたが、流されかける犬に黒い隊服を脱ぎ捨て飛び込みやがった。

『触れてはいけません』何度も繰り返す。大丈夫きつと大丈夫……。橋の欄干から伸びた命綱を片手に、もう一方の腕で犬を捕まえる。暴れるそれに、暴れなさんなど、伝わる訳もない事を言いながら必死にロープを手繰ろうとしていた。

けれど、激しい流れに、ロープに掴まるのが精一杯の状態で、体をひきあげることができずにいる。

サボりなのだろうか、パトカーの中には、二人一組である見回り相手はいない。きつと、その犬を手放すのだろう。そうしなければいけない。そうなる筈だ……それでいい筈なのに……。あーあ、もうほんつつとう勘弁して欲しい。

心に張った立ち入り禁止のテープを乗り越え、跳んだ。

「しつかり捕まって！」

濁流に負けないように声を張り上げる。聞こえていても聞こえていなくてもやる事は一つ。欄干に結ばれたロープをゆっくり手繰り寄せる。食い込むロープに手が赤くなる。面倒臭い、面倒臭い、面倒臭い。そんな掛け声を心の中で上げながら、一手ずつ手繰り寄せ、ようやく届いた沖田さんに手を貸し、一人と一匹を引き上げる。

「何やってるんですか一体!!」

雨と風に負けないよう、声を張り上げる。

「ダメエーこそ何やってんでイ」

私とは対照的に、通常音量で放たれた言葉は風に流されかける。やる気が無い。まあ、流石に一番隊長といえど、しんどかったのだろう。欄干に持たれ座りながらダルそうにしている。私は、助けた犬を抱き上げ様子を見る。もう一度川に投げ捨ててしまおうか。そ

んな考えが過った。

じつと黙って見つめる私に不穏な空気を察したのか、抱き上げた犬は身を振り腕から逃げ出すと、ワンと威嚇するように一声鳴き、走って行ってしまった。思ったより元気だったようだ。

「イ又好きなんですよ、私！」

答えになっっているのかなっていいのかわからないのか不明な回答を返ししながら、白い毛むくじやらの超巨大犬を思い出す。嘘じゃない。

「とてもそうは見えなかったぜ。まあいい、屯所までご同行……といいてエところだが、手錠、川に流されちまったイ」

「そりやしようがないですね」

たちどころに雨に霞み消えていく犬を見ていた沖田さんだったが、そう言うゆつくりと立ち上がり、パトカーの運転席にびしょ濡れのまま潜り込む。

打ち付ける雨もあって、ぐっちよぐっちよになったそれを見ながら、誰が掃除するんだろう？ 山崎さん？ なんてどうでもいい事を考える。

帰りにコンビニで傘を買ってメアリー・ポピンズごっこをしてみたが、飛ぶ前にビニール傘はバリツベキツと不細工な音を立てて壊れてしまった。安物の傘はダメだなあ、買って十分の命だった傘に黙禱を捧げ、コンビニのゴミ箱にそれを押し込む。

出来るとはまるつきり思ってたそれだが、何か素敵な事は起こらないだろうかと少し期待してしまった。そんな気持ちを誤魔化すために、大声を上げて雨に向かって叫ぶ。スーパーカリフラジリス テイツクエクスピアリドーシヤス！

真実はいつもひとつ！

「おい、生きているか？」

ゆすられ起きてみればあたりはすっかり明るくなり、昨晚の台風なんて何処へ行ったのだろうかという快晴。

「おはよう、マダオ」

「いや、ちよつとまって今なんか不穏な呼び方されたんだけどオ！」

ゆすつた方を見てみれば臙脂色の作務衣に、グラサン。恐らくマダオもとい、長谷川さんだろう。最初にエンカウトする筈のその人は順序を間違えたのか、微妙なタイミングで現れた。

昨日はぐしよ濡れになった服そのままに公園に戻り寝てしまった。そのせいで、少し熱っぽい気がする体を無理矢理治す。微妙に便利だなコレ。

「気のせいだよ、マダオ」

流石に服までこの人の前で乾かす訳にもいかず、トンネルから抜け出し背伸びをした後、服の端をギュツと絞る。後でキレイキレイしようっと。

「何なの一体!? 何で見ず知らずの他人にマダオって呼ばれなきゃいけないの!?!」

「いやだって、そのグラサン、マダオ臭がしますよ」

無駄に遭遇率が高いのはなんなんだろうと思う。マーフィーの法則？

「えっこのグラサンせいなの!?! 明らかに俺よりダメそうな人間にダメ出しされる程!?!」

そう騒ぎ立てる長谷川さんを放置し、どーしようかと考える。どう考えても昨晚のアレは私のせいだよなあー。

一番隊の隊長がわざわざ見回りに出る必要性を感じなかった昨日。そろそろ無理だな、自分を誤魔化すのに限界を感じた私は、鳥を飛ばす。

その後も長谷川さんが何やかんや煩かったので、公園から抜け出し、ピロロロロツと電子的な音を立てながら開く自動ドアを潜る。

ガラスに白地で『でにいす』とロゴが描かれていた。もちろん途中で服はキレイキレイ済み。

ぐるりと席を見渡し、案内しようとするお姉さんに「こつちでもいいですか？」と断りを入れて白い後ろ姿が目に入るような席に座る。ストーカーじみているなあ〜と思いつつも、鳥情報からついでにゲットした、白い頭の君の場所。チョコレートパフェを頬張る後ろ姿を見過ぎない様に眺めつつ、オムライスを口に運ぶ。

真選組が私を追いかける理由。

私が現れるより少し前。過激派攘夷浪士かげきはじょういろうしによるテロが発生していたらしく、その下手人があの河川敷に隠れているという通報があったらしい。それに間違われた私は追われる羽目になったと、偶然とは恐ろしい。

ここまでではやる気も起きない逃走劇の間に拾っていた情報。それ以上拾うと、手を出してしまいかねないという不安もあってあえて調べなかった。

それに、別段証拠がある訳でもなしに、私は偶然その場に居合わせただけである。いい加減諦めて、方針転換を図ると思っただけで、中々しつこい真選組れんちゆうに私の方が方針転換を強いられる羽目になるとは……。しつこい男はモテナイよと、どっかのマヨネーズ野郎に文句を垂れる。

方針を変えたことにより追加された情報。テロのあった天人が権力者の親縁で、犯人を中々挙げきれない真選組が吊上げられている事。そして、その火消し役に近藤さんが東奔西走中という事。

しよーがないかなー。行儀悪く、スプーンを啜えたまま、変えた針の方向を考える。

コップの氷がカランと鳴った。その音に意識を取り戻し、ふと視線を巡らすといつものまにか白い人もいなくなっていた。それに習い、私もそろそろ席を立とうとした。

「お客様困りますー」

そこそこ賑やかな店内でも一際高い声上がる。

「いいじゃねーか。端数なんて細かい事。別にアレだよ？ ジャンプ

買ったの忘れてて、お金が足りないとかそーいうんじゃないからね？
ここは大人同士そーいう細かい事を気にしないでいこうじゃねエ
か」

「大人なら、自分の食べた代金ぐらいきつちりかつきりお支払いをお願いします」

「大人だから払わないといけないってのはアレですか？ 子供だったら払わないで良い訳？ 俺アどーかと思うねえーそういう年齢を理由に差別する様な発言。店長には黙っておいてあげるからさア、代わりにそれ払っておいてよ」

「うっさい！ いいから払えつってんだよこの白髪頭！」

そちらに目を向けると、あろうことかカウンターの前で銀さんが代金を踏み倒そうとしていた。いやいやいや、私そーいう姿見に来たんじゃないよ？ 居たたまれなさにそつと視線を逸らす。

しばらくそういう押し問答を繰り返していたら、ガタイのいいおっさんが奥から出てきて銀さんはそれに連れて行かれた。『触れてはいけません』その言葉を言い訳に私はそれを見なかつたことにする。

日が暮れ、真つ白な月が空に昇る。最後の一押しとなる証拠を手に入れるのに、手間取ってしまった。

「こんばんは、月が綺麗ですね」

夜回り中の土方さんと沖田さんに、公園の入口から声をかける。意外そうな顔をしている沖田さんとは対照的に、土方さんはまなじりを上げてこちらを睨みつけていた。

「大丈夫ですって、もう逃げませんから。ここではなんですし、少しいてきて頂けませんか？」

それにヘラリと笑い手招きする。

公園の奥へと歩みを進め、ちょうど中央に位置する、噴水の淵に腰を掛ける。噴水は夜間という事もあり、停止しており、台風の影響からか落ち葉やビニール袋などのゴミが多数水面に浮いていた。

二人は、三步ほどはなれ、正面に対峙するように立つ。

「犯人、私じゃないですよ」

何か言いたそうな顔に口火を切ってあげる。それに土方さんはチツと舌打ちをした。なんとなくそうじゃないかとは思ってくれてみたいだ。沖田さんは相変わらずのポーカフェースで、やる気のないまま突っ立っている。

「これ差し上げます」

鞆から書類を取り出し、土方さんに渡す。それをパラパラとめくる土方さんの眉に皺が増えていく。最後まで読んだのを確認して説明を加える。

「それ、テロに使用した武器・弾薬類を木乃目組が横流しした証拠書類。本当の犯人はそこに記載された過激派攘夷グループですよ。そいつらは現在、十六番街に潜伏してます」

そこで言葉を区切り、「武器と弾薬の種類、状況証拠と一致しています？」と確認すると「ああ」と短い返事が返ってきた。

「で、ここからが本題ですが、テロにかこつけた本来の目的は、田宮厭衛門たみやいゑもんという幕僚による政敵に対する牽制。巻き込まれた人間の中にそういう人間が含まれている筈です。情報が錯綜していたのは田宮による妨害が原因なんですが……そちらをどうするかはお任せします。木乃目組のお金の動きを洗えば、『証拠』出ると思いますがどね」

私に対する通報も、その田宮の手によるもの。本当に偶然とは恐ろしい。

他に質問は無いですか？ とにつこり笑えば、土方さんは苦虫を十匹ほど噛み潰したような顔をしていた。

「テメー、最初から知っていたのか」

「ギアねエ」

某中二病を真似て笑って誤魔化す。ククツという含み笑いは似合わない事この上ないので止めておく。

「もう用はないでしょう？ それじゃあコレにて失礼」

慇懃無礼いんぎんぶれいに大げさに腰を折って一礼し、背を向ける。

「オイ、待て！」

「まだ何か？」

振り返ると気持ち顔を下に向けた土方さんが、頭をガシガシ掻いていた。

「送ってやる。家はどこだ」

詫びのつもりだろうか、引き止めてしまった言い訳のように付け加えられた。

「早く行かないと攘夷浪士逃げちゃうかもよ？」

間を開けずに返せたのは奇跡だった。送ってくれるといつてもどこに？ 帰る場所なんて見当たらない。じんわりと広がる喪失感を無理矢理やり過ごし、へらりと笑う私に土方さんは、聞えるか聞こえないかぐらいの声で済まなかったなど言い、私を通り越し公園の出口に向かい歩いて行った。

「お前エ、名前は何てエんだ？」

「酔昆布」

その後ろを着いて行く沖田さんから聞かれた問いにそう応えようと、沖田さんは一瞬虚をつかれた様な顔をして「何でイそりや」と呆れたように笑った。

二人を見送り今日のねぐらを探す。公園はマダオがいるし、橋の下は台風のせいではびちよびちよのゴミまみれ。星が瞬く夜空の下を気が向くままに歩いていたら、万事屋銀ちゃんの看板を見上げていた。ほんの少しだけお借りしよう。『触れてはいけません』それに対する合理的な反対意見を思いつけないままに、屋根の上に登る。とても月が綺麗だった。

愚者と酔っぱらい

物珍しい江戸の町は興味が尽きない。オバQと長髪の二人組の呼び込みを遠目に眺めたり、マダオ観察日記をつけてみたり。別段困ったこともなく、気ままにその日暮らしを楽しむ。真選組に追われる事がなくなった私は、時折接触しそうになる神楽ちゃんを避ける余裕もでき、肩の荷も降り、何も問題は抱えておらず気分はきつと晴れやか。それなのに、なんでだろうな……酔昆布ちやんと買ってもらえてるかなあと、揺れる心の原因を差し替え、元の世界よりもよく見える星空の下、夜のかぶき町を散歩する。

赤、緑、青、紫、様々な色のネオンサインに、派手な女の人や、ホストクラブのお兄さん。時折見かけるオカマのお姉さんだかお兄さんだか分からない人達。かぶき町は夜も楽しい。

本当ならば、人から離れるべきなのに、私はそうやって危険性を顧みず、人に紛れようとする——いじましい——浮かんだ考えを誤魔化し、歩き続ける。

それなのにそんな楽しい散歩に水をさす人間が一人。

一方通行の細い車道のご真ん中で、死体よろしく行き倒れている人間。遠目にチラリと白い物が見えた時には、既に嫌な考えが浮かんでいたが、近付いてみるとそれは見間違え事なく、私が一方的に遠ざけてきたその人で、キープアウトの黄色いテープをその死体の周りに張り巡らし、ついでに白いチョークで枠を付けて、『マダオの死体』そんな落書きを加えたくなる。

「地面がない……あれ地面が立ってる？ 立ってるの俺？ 俺立ってる……？」

銀さんはそんな意味の分からない事をブツブツ呟きながら地面を泳ぐように手を藻掻き動かすが、全然前に進めてない。本当何やってるんですかアンタ。見なかったことにしよう。よくあるかぶき町の風物詩だと自身を誤魔化し通り過ぎようとした。

「イてえ……頭割れる、割れる気がする、いやきつとコレ割れた。……やべえ……苦しい。誰か……なんとかして……へるす」

したのに……なんでそんな声拾ってしまったのだろうか私は。

ヘルスつてヘルプのつもり？ 公然わいせつ罪で捕まっちゃおうよ？ 銀さん？ 足を止め、腰を下ろしその顔を覗き込むと、言葉にならない唸りを上げていた。

ただの酔っぱらいのたわ言。本当に助けて欲しいなんて思っちゃいないだろうに。

月の重力は地球の六分の一、理科の授業で習ったそんな事を思い出した。けれど、私は本来いるべき地球ばしよから遠くはなれた月の重力に強く惹かれてしまう。

ねえ、銀さん。ほんのちよつとだからさ、助けてもいいかなあ。

本当に助けてもらいたいの誰なのか……そんな自分を誤魔化し、返事のない事を良いことにその腕に触れる。生暖かい生物としての温ぬるさを感じ、躊躇する。やっぱり捨て置こうか……。

そんな惑う心を見透かした様に、銀さんは触れた腕を、その大きな手の平で掴み引いた。

——無意識下の行動。

だからこそそのそれに、全てを諦め、腕を肩に回し担ぎ上げる。

身長が足りないせいで銀さんは若干足を引きずる。酒臭い息と生暖かい体温——実にリアルな他人の温度に、ザワザワ揺れ動く心みだを宥める。

「少しは歩いてくれると助かるんですけどねえ〜」

「頭が揺れる、ちよつと揺らさないで、お願い、もっと優しくして……何か出る……出ちゃう」

「ちよつ……分かった、分かったから待ってお願いだから！」

出ると言う単語に嫌な現実が脳裏に浮かび、ご要望にお応えして物陰に隠れた私は、人がいない事を確認して万事屋まで跳んだ。二階に上がる階段がある裏路地。

「坂田さん、つきましたよー」

「え……もう？ 早い、早すぎない？ 君、早漏？」

セクハラで訴えても許される気がするが、死んだ魚を更に殺した目をした銀さんは、もはや何処を見ているのかも分からない。酔っぱら

い相手だと思いい我慢する。

「早漏でも遅漏でもいいからちやんとお家帰って下さいね、坂田さん」
「俺はノーマルだああああ……うっぷ吐きそう……」

そりやー良かった。だけど自分で声あげて吐きそうになってたら世話ないからね。

青ざめた顔で、両手で口を抑える姿に、念の為半歩さがる。

しかし幸いにして吐くことはなく――。「帰る……俺はもう帰るぞー」と言いながら、ふらふらゆっくり階段を登っていく姿を見送ろうとして……止めた。

「死ぬねこれは流石に」

酔っぱらいを舐めていた。ふらつき、階段から仰向けに飛び降り自殺を凶ろうとした銀さんを抱きとめる。途中で放り出すなら最初から背負い込まないんだっけねえと会話にならない相手に呟く。

玄関の前まで一緒に上り、それでも心配だったので、ブザーを鳴らす、鳴らない。壊れてるのか。しようがなく、ガンガンと玄関の引き戸を叩く。

「一体何時だと思ってるアルか！ このクソ天パ!!」

ものすごい勢いで開いた戸に「やあ」と片手を上げて、久しぶりに会った神樂ちゃんに挨拶する。

「何で酔昆布が銀ちゃんと一緒にいるアルか？」

「ちよつと色々あってね、じゃあ後はよろしくね」

不思議そうな神樂ちゃんに銀さんを預ける為、重心を移動させたそのタイミングで、当の銀さんが何を思ったのか「神樂ア、銀さんいま帰ったぞおおお！」そう叫び強く私の体を押す。

「うわっ！」

堪らず尻もちをつく。勿論、銀さんが一人でバランスを保っていられる訳もなく、後を追って倒れこんでくる。

「うおつと……あつ……ダメ……」

何がダメなのか。それは、オボロシヤアという擬音語が答えてくれた。

「風呂借りるアルか？」

生まれて始めての最悪な出来事に、私の何かは折れたというか、挫けた。何重にも発する警告を無視し、お願いしますと酸っぱい匂いを漂わせながら頭を下げた。

「銀ちゃんので悪いけど、それ着とくネ」

洗濯機の中に放り込まれた服の代わりに、太陽の匂いがする甚平を借りる。ずり落ちそうなそれを安全ピンで止め体裁を整える。

「ありがとう……えっと」

危うく神楽ちゃんと呼ぼうとした声を止める。そーいやまだ名前聞いてなかった。

「神楽アルヨ。そういえば、私もお前の名前聞いてなかったネ、なんていうアルか？」

「キリだよ」

キリ、キリと何度か呟いた神楽ちゃんは「きーやん！」と何か思いついたような顔で嬉しそうに笑う。久方ぶりに呼ばれた名前がなんだか苦しくて、「それ私の新しいアダ名？」と笑って返すのが難しかった。

見渡せば何度も見たことのある、糖分と書かれた額縁。積み上がったジャンプの雑誌……銀さんがよく座っているデスクとチェア。そして、案外堅いなと思った、がっしりとしたソファ。煌きはしっかりと散りばめられていた。

「今日は泊まってくネ」

洗われて濡れた服にそうするしかなく、お言葉に甘えソファをお借りした。あの天パなら廊下にも転がしとけばいいヨと言ってくれたが、それを押し留めてソファを借りる。怖かったから。何度も呟いた言葉を踏み潰し、ここにいる私。

「弱いなあ……」

真つ暗な鎮まり返った万事屋の天井を見つめ呟く。隕石降って来ればいいのに……。

「おはようございます」

夢現で聞いた玄関の引き戸が開く音と、礼儀正しい声に飛び起きる。しまった寝過ごした。頭を振りながら廊下の方向を見ると、袴姿の新八君と目が合う。出勤してきたのか。んー。出勤とっていいのかコレは？

「お邪魔してます」

ペコリと頭を下げると、「どうも」と黒い髪を揺らしお辞儀を返してくれた。時計を見ると九時を少し回ったぐらい。いつの間に起きていたのか、身支度を済ませた神樂ちゃんが「おはようヨ」^ヨと新八君の後ろから顔を出す。

「ほんつとオオオ済みませんでした!!」

「君が悪いわけじゃないからいーよ」

私がここにいる理由を説明すると、土下座せんとばかりに新八君は頭を下げる。それに、パタパタと手を降つて、「いいよいよ頭上げなよ」と促す。朝ご飯をお詫びにとご馳走になりながら、服が乾くまで時間を潰させて貰うことにした。あれだけ避けていたのに、こうやって万事屋に上がり込んでしまつている自分にため息をつく。

本当は無理矢理にでも出て行くべきなのだろうなあ……。窓の外にパタパタとはためく服を見ながらそんな事を思う。出来なくもないのだし。理由なき反抗の声が心の中で上がる。私はそれを持って余し、理由を探してしまう。

「……新八イ……いちご牛乳くれエ……」

地獄の底から響くような声と共に襖が開く。

見てはいけない。窓の外から視線を移さず、何でもないふりを装う。

「アンタ今頃起きてきてそれですか!」

「どなるんじやねエ……頭割れそう、いちご牛乳早く……」

「まず水と薬でしようつたくアンタは!!」

「……痛い割れる……お願い勘弁して」

見なくても浮かぶ光景に、どうしたらいいか分からなくなる。

——ジンジン

デスクの上にあるレトロな黒電話が鳴った。

「新八イ、早く取れ〜頭に響く〜」

「はいはい……まったくなんだっていうんだ。え？ そんな人間知りません。お金なんてこつちが欲しいくらいですよ。はい、じゃあ」

——ガチャン

「なんだって？」

「間違い電話でしたよ。それよりハイ」

「なにこれイチゴ牛乳つっただろ」

「二日酔いの人間が何で、イチゴ牛乳なんて飲むんですか」

「いちご牛乳は万物に効く万能薬なんだよ！ あゝあゝ〜頭痛エ……頭の中でカトケンが五人ぐらいサンバ踊ってるってコレ」

「夜中にぶらぶらになって帰ってきた拳句、人にゲロ吐きかけた人間が、次の日はそんなんアルか。酔っぱらいつてのは本当に最低アルナ〜」

「あ？ 知んねエよ、酔った時の事なんていちいち覚えてられつかよ。無礼講って言葉がこの国にはあんだよ。そんな汚い記憶の代わりに、この言葉でも脳みそに詰めとけ」

「その汚い記憶は誰のせいネ。それに私にじやないアルヨ」

白い視線がこちらを向いた気がした。

「アイツ誰だ？」

「えっ、銀さん覚えてないんですか？」

「え？ 俺の知り合いなの？」

「最低ですね」

「最低ネ」

一生知らないまままでいてください。

もう一度寝直すといつて和室に入っていた銀さんを横目で確認し、安堵の溜息をつく。

適量な優しさ

時間を潰すといってもやることはなく、つけっぱなしのテレビをダラダラと見つめる。

隣で、新八君がお通ちゃんのCDを聞いていて、少し羨ましく思った。貸してって言ったら喜んで貸してくれるんだろうなあ。でもなあ。これ以上踏み込む事は戸惑われて、マヨネーズ屋さんが主催する料理番組を見ている。

適量のマヨネーズをと、少し小太りなおばさんが、スプーン一杯程のマヨネーズをガラス容器に入れたところで、適量がそんなものでは済まない人を思い出す。土方さん元気でやってるかなあ。もう会う理由もなくなつた真選組の面々。

イカンな、やっぱり万事屋に居てはダメだ。生乾きでもいいから、適当な事を言つて出よう。そう決めた時だった。

玄関のドアが乱暴な音を立てて鳴った。

「新八出るヨ」

「えー、もうしょうがないなあ。はいはい、どちら様ですか？」

ソファアに寝そべつた神楽ちゃんがそういうと、ヘッドフォンを外して新八君が玄関に向かう。お客さんかな？ 丁度いい、それを理由に出よう。神楽ちゃんに声をかけようと、そちらへ向く。

「神楽ちゃん！」

「えっ、ちよつと勝手に入つてこられては困ります!!」

私の声じゃない、野太い……聞き覚えのある渋い声と、焦る新八君の声。

廊下から現れたのは、特徴のある、砂色のダボついた衣装を身にまとつたガタイのいい中年オヤジ。星海坊主^{うみぼうず}さん？ あれ、髪形……バーコード？ カツラなの？

「ぱ、ぱびー?」

「えっ、この人神楽ちゃんのお父さんなの!?!」

「神楽が世話になつたな」

戸惑う新八くんを置いて、星海坊主さんはそういうと、神楽ちゃん

の真向かいにドカリと座った。出て行くタイミングを失った私は端で縮こまりそれを見つめる。

「パピー何言ってるアルか、私が世話してやってんのヨ」

「相変わらずだな、神楽ちゃんは」

「本当に神楽ちゃんのお父さんなんですね、あ……銀さん起こさなきゃー!」

「銀さーん」と言いながら、和室の襖を開け、寝ている銀さんを起こす新八君。「銀? 誰だ?」そんな事を言う星海坊主さんに、神楽ちゃんが順序立てて説明している。

「今のダメな眼鏡が、新八ヨ。あっちで寝ているダメなモジヤモジヤが銀ちゃんネ。両方私が地球こつちで面倒みてやってる連中ヨ。パピーも挨拶するヨロシ」

もうここまで来たら嫌な予感に確信に変わっていた。息を潜め、こつそりと鳥を飛ばす。

「神楽の父親だあ? このうつすらした奴が??」

二日酔いでテンションの低い銀さんは最初から喧嘩腰で、それから星海坊主さんと銀さんが大喧嘩を始めるのにはそう時間はかからなかった。

「こんなところに、うちの神楽ちゃんをおいておく訳にはいかねエ。連れて帰るからな!!」

「今まで散々家庭をほっぽりだしておいて、勝手に決めないで欲しいネ!」

そのテンションに釣られ、神楽ちゃんもヒートアップしていき、とうとう星海坊主さんと神楽ちゃんは外へ飛び出していった。

「銀さん不味いですって! あんな二人が暴れたらめちやくちやですよ!!」

「親子喧嘩は犬も喰わねえって言うだろ、ほつとけよ」

「それを言うなら夫婦喧嘩ですって!! そんな事言わないで止めて下さいよ!」

ドガン! ガシャンと激しい音が外から聞こえてくる。

「ああもうクソ面倒臭いなあ、オイ」

そんな事を言いながら、新八君と銀さんは外へ出て行った。残された私はつけっぱなしだったテレビから流れるアナウンサーの言葉を、人ごとの様に聞く。

——本日大江戸銀行を襲ったえいりあんによる負傷者は……。

本来はこの銀行でえいりあんに襲われた神楽ちゃんを助け、星海坊主さんとは出会う筈だった。新八君が取った電話……あれが拙者拙者詐欺の電話だったのだろうか。神楽ちゃんが銀行に行く理由のそれは切れてしまい、本来の未来に繋がらなかった。

どこでボタンをかけ間違えたのだろうか。
違う方向に進み始めた未来。

——バタフライ・エフエクト

蝶の羽ばたきが、地球の裏側で台風が変わる事を指す言葉。

真選組の件も、もしかしたらそうだったのかもしれない。最重要容疑者^わなんていなければ手なんて貸さずとも、もっと早くに真実に行き着いていたのではないだろうか？

テレビは半壊した銀行を映し出している。こんなに壊れてたっけなあー。

テレビから聞こえてくる他人の不幸は思ったよりも小さくて、ほっとした。

海鳥達と一緒に飛んでいけば良かった。いつかの海を思い出す。想定外だったと言いつてもできない、だって私は私が蝶である可能性をずっと恐れていたのだから。

赤い光が窓から差し込む頃、銀さんが一人で戻ってきた。新八君はそのままお家へ、神楽ちゃんは星海坊主さんと一緒に行ったらしい。念のために飛ばした鳥で知った舞台裏。

「まだいたのお前」

「鍵を開けっ放しに出て行く訳にも行かないですからね」

よっこいしょと声を上げ、寝転んでいた体勢から上半身を上げる。とっくに乾いていた服はとり込み、着替えも済んでいる。もう万事屋^こに用はない。

「……昨日は悪かったな」

誰から聞いたのだろうか……神楽ちゃんか、新八君か。どちらにせよ、違和感を感じた。銀さんってこんなに簡単に謝る人だっけ？ 赤い夕陽が銀さんの白い着流しと髪を染めていた。

『お前にややつぱ地球は狭いんじゃないやねーの。いい機会だ、おやじと一緒ににいけよ。これでさよならとしよーや』

そんな言葉を思い出した。ああ、この人も弱っているのだ。困ったなあ……。酔っぱらいに肩を貸す事はもうできやしないのに。

だからへらりと笑う。

「次から飲み過ぎには気をつけて下さいね」

トンと一步距離を置いたのが銀さんにはわかったのだろう。わずかに見せた弱さを隠し、「そーするよ」と引いてくれた。それでいい。私にはもう銀さんを助けられないんだから。一人で立つのが精一杯の私には何かを背負い込む余裕なんてありはしない。重力に引かれた心を引き剥がす。

「それじゃこれで」

「なあ……お前、神楽のダチなんだろ？」

出ていこうとした私にかけられた言葉はなんだか生ぬるくて、笑うのに失敗してしまい振り返れなかった。

「あいつ、行くってよ。父親と……見送りぐらいしてやれよ」

銀さんはいかないんだね。本来の未来と同じ行動にほつとする。同時に、自分を置いて私にそれを勧めるこの人を無性に殴りたくなつた。そうやって必要な所に、必要な物を分け与えて、右から左へと……それでいいの？ 銀さん。だけど、私にはどうすることも出来ず、希望を口にする。

「坂田さん、違うよ。私は……私はただの酢昆布の付属品ですよ」

そうなりたい、そうありたい。そんな気持ちを込める。ただのオプションパーツ、代替の効くそんな存在でいたい。

「アイツ、そんな事言われたら泣くぞ」

「神楽ちゃんが？ どっちかっていうと怒ると思いますけど？」

「そんだけ知ってりやあ十分ダチだろ」

嵌められた。きつと銀さんはニヤツと笑ってるのだろう。困った

なあ……どうしろと言うのだ私に。

「気が向いたら、見送りに行きます」

侍じゃないけど、出来もしない約束はしたくなくて、曖昧に誤魔化し万事屋を出た。

かぶき町のゴミゴミとした人混みの中を歩く。客引きに腕を取られそうになるのを、そつと避ける。もう万事屋の屋根を借りる気にはなれなくて……次はどこへ行こう。あてもなく歩き続ける。

夜の蝶になろうか、その羽ばたきで何を引き起こそう。

「隕石降ってこーい！」

そう大声をあげたら道行く人々の視線を集める事ができた。そして後悔をする……。

だって私は嫌いじゃないんだこの世界が。

「こんな夜更けに何やってんだ？ 補導すつぞ」

「あぁー？ 出来るもんならやってみるよー」

行くところなくて、非常灯が緑に光る、雑居ビルの外階段に腰掛けてたら、土方さんに絡まれた。いつになくササクレた私は柄にもなく絡み返す。

「仕事のジヤマだどつかいけ」

お仕事……ね。この近くで討ち入りでもあるのだろうか？ それならもう手も足も出ない。よつこらしよと腰を上げる。

せつかく見つけた居場所もこうして追われる。まあ、慣れてるからいいんだけどね。次はどこにいこうか。

「そごどいて下さい。邪魔ですよ？」

少し八つ当たりも込めて、階段の踊り場のど真ん中に立つ土方さんにそう言い返すと、肩透かしを食らった様な顔で「ああ」とか「おお」だとかそんな事を言っただけで半身をズラしてくれた。あっさりとした場所を譲られ少し気まずかったのだろう。その殊勝な態度にすこしスツとした私はその脇を通って階段を降りる。カンカンと堅い音が響く。

「お前……行く宛がないのか」

気遣われる様に言葉を選んだ問い。

奇跡は二度も起きてくれなくて私はそれに返事をし損ねる。こちらを煽る様な、ホームレスだとか、家なき子とかそういう分かりやすい言い方をしてくれれば、すぐに否定出来たのに。それが回答になってしまったのだろう。

「宛……世話してやろうか？」

聞こえなかったふりをして、余計に音を立てて階段を駆け下りる。流石フオロ方十四フオロー。でも、時と場合を選べよコノヤロー。危うく零れそうになった何かをのみ込み、駆ける。

隕石降ってこいよ超特大の!!

海と星とそして月

もう一度海を見たくなかったので、波止場に向かう。今度はショートカットする理由もなかったの、黒いアスファルトの道を地道にテクテク歩く。この一歩一歩が何かを引き起こすのだろうか？ 防ぎよのないそれが怖くなって足を止める。やっぱり跳ぼう。物陰に隠れ、誰もいない海に跳んだ。

台風の影響がまだ少し残っている海は、この前よりも少し荒れていて、なんだかそれが心地よかった。時々光る灯台の明かりと、星の光。遠目に見えるのは飛行船ではない、普通の船。当たり前だけれど、飛行船以外の船もあるのだとこの時始めて知った。

元の世界との違いや、知らないものばかり探していた私は、どうやらそれを見落としていたらしい。

この世界にもあるごく普通の物達。なんだかそれを探しに旅に出たくなった。私だけが分かる『ごく普通の物達』を探しまわる旅。

ぷらんぷらんと埠頭の先から投げ出した足を揺らす。

まず初めはどこに行こうか。知っている地名と言えば武州……：白いベッドで寝ているあの人が蘇る。星海坊主さんが神楽ちゃんを連れて行ったって事はまだ生きているのだろう。犬を捨てきれなかった私が、目の前のあの人を見捨てれるとはとても思えない。

首を降ってダメだと思い直す。じゃあ……：京都、蝦夷……：長州。知っている場所はどれもこれも彼等に関わりのある所ばかりで、自分の腐り具合に笑ってしまう。

またたく星を見上げる。神楽ちゃん戻ってこれるかな……。変わってしまった未来に覚える不安。えいりあんちゃんと処理できるかな？ こつそり見に行ってもいいよね？ だってさ私のせいかもしれないんだから……。言い訳をつけて弱い心を少しだけ許す。

「何か良いモンでも見えないの？」

何なのだろうこのエンカウント率。チートコードで率を変更してるんじゃないかと思う。けれど、その気持ちには心当たりがあったので、あながちチートコードのせいとも言いきれない。

軽い調子でかけられた声になんと答えようか思考を巡らす。

「見えますよ。馬鹿には見えませんがね」

今は絶対に顔を見られたくなくて、涼しい声で正面切ったままそう応える。けれど、その声の持ち主は、それすら見透かしてしまうのだろう。なんとたつて銀さんなのだから。

「……それ暗に俺を馬鹿にしてる？」

「そー聞こえました？ それは失礼」

「軽いな、オイ。謝るならもうちつと心を込めろよ」

「口だけの謝罪ってどうしても軽くなりますよね」

「口先だけって認めてんじゃねーかよ」

冗談の中に含めた拒絶を聞いているのか聞いていないのか……。銀さんは、横に座る事もなく、適度な距離を保って後ろに立つ。声の遠さから分かるその距離。

波の音が空間を支配する。

「万事屋銀ちゃん、万のことも何でも承るぜ？ 神楽のダチだからって

依頼料は負けてやんねーけどな」

その支配から先に逃れたのは銀さんだった。

なんでこの人はこうもそうなのだろうか。自分だって海を見に来たくせに。右から左へと……。ただ酔っぱらいに肩を貸しただけの私に。

「生憎と、他人に頼らないと生きていけない様な人間じゃないので」

「でも、死なない程度には困ってんだらう？」

言葉のキャッチボールに失敗したかのような会話に、死んだ魚の目が少し開いているかも知れない、そんな事を少しだけ思った。その優しさに対する依頼料は何を差し出せばいいのか。手持ちにあるのは酢昆布の赤い箱だけ。甘党の銀さんが甘くないそれを欲しがると思えないし。

「坂田さん、股間にミミズ難の相が出てますよ」

「あ？ ……なんだそりゃ」

これぐらいは許されるだろう。陸も追われ、海すら追われる私は鳥になろうか、お気をつけてとそう声を掛け立ち上がろうとしたのに

……。 「まあ、もうちよつというや」と後ろから頭を抑えられた。

大きながつしりとした手が温かくて、咄嗟に払いのけそうになった。けれど、私と同じように何かを抱えてここに来た銀さんを、これ以上邪険に扱うこともできず――。

「月、綺麗ですね〜」

「ああ、そうだな」

受け取ってしまった。

朝日に溶けていく星と沈んだ月。

最後まで銀さんは隣に座ることなく、私の後ろにいた。もしかしたら、銀さんは海じゃなくて、星を見に来たのかもしれない。ふとそう思った。かぶき町よりは、このの方が良く星が見えるから。

「見事に徹夜しちゃったなあー。お肌が心配」

背伸びをして朝焼けに目を細め、うにうにと頬を揉む。あれ、潮でザラザラしているような気がする。ちよつぴり本当にお肌が心配になった。

「いくんだろ?」

断言をする様な声にコクンと頷く。

「付き合って貰ったからね」

一晩一緒にいた事で、距離感を見失った私は、少し碎けてしまっている事を自覚しながら、取り戻せない距離を探す。

「お前は、何も言わないんだな」

「言わないよ、だって決めたんでしょ」

ようやく顔を合わせた銀さんは、少し眠そうに笑っていた。私は銀さんがそうである事が無性に腹立たしいと思うと同時に、好ましいとも思ってしまうのだ。だから何も言わない。

「じゃあね」

あつさりとした別れに、幾分気持ちも軽くなった私はターミナルへと向かう。会うかどうかは別としてこの物語を最後まで見届けないといけない、そう言い訳を呟いて。

事件はターミナルで起こる

ゆっくり浮き上がる船。こつそり忍び込んだターミナルの転送ドックで、神楽ちゃんが乗っている船を見つめる。最後に会った神楽ちゃんは「きーやん来てくれたアルか!？」と、勢いよく飛びついてきてくれた。

最後まで迷った。でも、結局、付き合ってくれた銀さんに全ての責任をなすりつけ、賞味期限切れちゃうしと、ありったけの酢昆布を渡すために会いに行った。弱いなあーと自分を笑い、その寂しそうな顔に手を降って別れた。

そんな転送ドックの片隅。一際騒がしい一角に視線を移す。

「神楽ちゃああああん!!!」 どこ行くだアア!! あの銀さんに何を言われたのか知らないけど、言うこと聞く必要なんてないんだから!! 僕一人じゃあの銀さんは手に追えないよ!! だから! 帰るなよ!!」

遠く高く伸びる鋼の壁に作り付けられた、剥き出しの鉄梯子。それをよじ登りながら新八君は、神楽ちゃんを引き止める為に必死に叫び、訴える。下から警備員に追われながらも、懸命に、不安定な梯子に臆することなく叫びを上げる。

戻りつつある未来に心を緩ませる。うねり船にまわり付く『えいりあん』を見ないようにしながら。

巨大化したえいりあんが、紫色のうねうねとした触手で船を絡めとる。バランスを崩した船は頭から壁に突っ込んだ。

脳を直接揺すぶられるかの様な激しい轟音。余りにも激しい衝撃に、ターミナル全体が揺れる。

瓦礫と、粉じんが降り注ぐ。

予想以上の光景に、やまない耳鳴りをこらえ、慌てて新八君を探す。立ち込める煙の中見つけた新八君は、バランスを幾分崩しながらも、ちゃんと梯子に捕まっていた。

ほっと一息付き、先に行くねと心の中で声をかけ、船に跳ぶ。

星海坊主さんと離れ離れになった神楽ちゃんが一人、ハタ皇子とじいを護るため、えいりあんと戦っていた。薄い煙が立ち込める船内で、神楽ちゃんの背に護られ二人は丸くなり震えていた。

「お前ら今のうち避難するヨロシ!!」

「む、無理だ。こ、腰が抜けて!!!」

「それでは、皇子。私はご両親へ皇子の最後をお伝えするという仕事があるので……これで」

「ま、待つんじゃない!! お前それでも余の部下か!」

「えええい! 離せエエエエ!!」

必死で闘う後ろで、お互いの足を引っ張り合って、二人はコントを繰り広げる。二人なりの役割があるとは知ってはいるものの、一遍絞めておこうかという思いが過る。

いやいや、手を出さないと決めたじゃないか。首を振り安全圏からそれをこっそり盗み見る。

「皇子危ない!!」

「危ないのはお前だああ!!」

神楽ちゃんの傘から逃れた一本の触手が唸りを上げて、二人に迫る。細い触手は頑張れば二人でもどうにかできる様な気はするのに、お互いに相手を盾に差し出そうとするせいで、どうする事もできず……咄嗟に飛び出した神楽ちゃんが盾になり——脇腹を触手が抉る。力を振り絞り傘でその触手を断ち切るも、痛みで顔を歪め膝をつく。

「お前らバカダロ……折角私が護ってやってるのに。早く逃げろヨ」

脇腹から血がダクダクと流れ出る。ズルリとその場に崩れ落ちた。

えいりあんは寄生型。怯える弱い二人に取り入っても無駄だと悟ったのだろうか、それ以上触手を伸ばすのを止め離れていく。ギリツと手を握りしめる。

ここで手を出したらどうなる? 星海坊主さんは神楽ちゃんの護ろうとする心を知らないまま、神楽ちゃんを連れて行く?

何も出来ない己に臍を噛む。見てるだけだ……ちゃんと正しい未来に行き着くように。

どのぐらい経ただろうか……ずいぶん長い時間が過ぎた様な気がする。止血もされないまま、神楽ちゃん血を流し続ける。

これ以上はもう……。何度そう思っただろうか、ようやく星海坊主さんがハタ皇子等を見つけ飛び込んでくる。きつともう大丈夫……肩の力をゆつくり抜き、そつとその場を後にした。

ターミナル全体に触手が巻きつき、揺れる。梯子に捕まった新八君は振り落とされそうになりながらも、必死で船に向かい、梯子を登っている。上を見上げると、触手が梯子の上を通り、船に届いていた。それを伝いこの船を目指そうというのだろうか？

近くにあった触手の表面を撫でる。引つ掛かりのない触手はツルリとしていた。

新八君は助けても大丈夫？

手を出さないことが正しいとは知っていても、不確かな予想で手を伸ばしてしまう。脳裏に浮かぶのは血を流し倒れる神楽ちゃんの姿。『贖罪』そんな言葉を思い浮かべ、自分を許すために生まれたその考えを吐き捨てる。隕石降ってこればいいのに。

「新八君！」

「キリさん!? 来てたんですか! うわああ!!」

船の甲板の先に立って声を掛けると、新八君が気付き振り向く。

また、ターミナルが揺れる。ギシツと音がなりそうな程梯子に掴まる姿に、躊躇^{ためら}いを捨て、助走を付けて飛んだ。

「え!? ちよつと!!」

——ダンツ

目を見開き、驚く新八君の丁度真上に捕まる。

「新八君ちよつと痛いけど我慢してね。頭抱えて」

「えっ、何するきですか!」

「投げる」

「えっ? ええええええ!!」

その腰帯を手繰り寄せて、しっかり抱えると、反動を付けて放り投げる。

痛そうな音を立てて、着地した新八君に男の子なんだから許せと謝

罪する。新八君がゆっくり立ち上がったのを見て、私もそちらに向つて飛ぶ。

「えっ!? あ、ちよっ!!」

「わああああ!!」

——ガラガラガシヤン

「いったー……」

「だ、大丈夫ですか?」

綺麗に着地を決めようと思ったのに……受け止める様に飛び出してきた新八君を巻き込んで無様に打ち付けた腰をおさえる。余計な事と思うのに、受け止めた痛みをこらえて私を心配するその姿に何も言えなくなる。もう何なんでしょうね、コレ。その優しさが今はとも痛い。

「キリさんって意外と力持ちだったんですね……」

「裏ワザ使ってるからね……それより来たよ。けっこうイケる口なんですよ? 君も」

「勿論ですよ。これでも僕、道場の跡継ぎなんですから」

知ってるよ、君がやれば出来る子なんだってのはと、心の中だけで呟いて、転がっていた鉄パイプを渡すと、ざわざわと寄ってきた触手に新八君は綺麗な構えで相對する。その肩越しに神樂ちゃんが触手に攫われ、茂ったその向こうに消えていくのを見た。

銀さんが手を必死に伸ばし、届かない手に——。

私はそれを見ながら何でもないフリを貫く。

「数が多いねっ!」

見よう見まねで私も鉄パイプを使って触手をぶつ叩く。新八君と違い、本当にもぐらたたきの様に叩くだけだ。それでも力に任せたそれは一定の戦果を上げる。けれど、一生懸命さを装った行動は単なる時間稼ぎ。

裂けた壁の隙間から曇り空が見える。分厚い雲を背景に、ゴマ粒程の黒い点々がやがて大きくなり——黒塗りの船に形を変える。きたか……。

「何かに掴まって!」

そう警告を発した直後、一際大きな揺れと共に、ターミナルの外側に突き出ている船の底が抜け、赤い心臓の様な核がむき出しとなる。そこから伸びる赤紫色の触手が、遠目でも分かる赤い服を着た女の子をその核に取り込もうと、醜く蠢いている。血を失った神楽ちゃんは、ただでさえ白い肌がもはや薄く青く見えた。

「神楽ちゃん!!」

目を見開き、新八君が叫ぶ。だが、その叫びも虚しく、緑の触手が波打ち真つ赤な核の奥底へ神楽ちゃんを押し込んでいった。

駆け寄ろうにも、触手が前を塞ぎ行く手を阻む。その数を計算しながら倒していく。

「次から次へと!! ゴキブリかよ! 害虫は害虫らしく地べたに這いつくばつてろコノヤロオオオオ!」

新八君の先ほどまでの綺麗な太刀筋がブレ、焦りがその剣筋に乗る。それでも私は……握りこんだ鉄パイプが歪む。私は見守るだけだ。

神楽ちゃんを取り込んだ核が壊せない今、星海坊主さんは神楽ちゃんと一緒に死ぬことを覚悟しているだろう。銀さんはそんな星海坊主さんに、神楽ちゃんを『信じる』という事を伝えようとしている筈だ。魂を賭けて。

そんな闘いの意味をなくすような事がどうしてできようか? それがなければ行ってしまおう神楽ちゃんにどうして手出できようか? 海に来てしまった銀さん。私は何も出来ない。蝶の羽ばたきなんてそんな物がなくても、私はきつと何もできない。

「銀さアアアアン!!」

新八君の悲痛な声。

その視線の先で、銀さんが神楽ちゃんを取り戻しに自ら核に取り込まれていく。

新八君と一緒に甲板の上を滑るように駆け抜け、核に飛び移る。頃合い良く薄くなった触手に、計算通りとほくそ笑む事が出来れば良かったけれど、そんな気持ちの余裕は見いだせなかった。

やっとたどり着いた核の上で、定春に啞えられ、連れて来られたバ

カ皇子が自分から人質になるのだと言い出した。

空に浮かぶ黒船に向かい、新八君とバカ皇子が懸命に砲撃を止めるようにアピールする。

私はそれを横目に見ながら意識を集中して、核の内部の探る。大丈夫まだ神楽ちゃんも銀さんも生きています。もしどちらかの鼓動が止まるようなことがあれば、私は……。

アピールの甲斐なく、黒船の中心に設置された巨大な砲身——松ちゃん砲——の充填が始まった。

まだか……。まだか……。一秒一秒がとてつもなく長く感じられる。

「それ私の酔昆布ネエエー！」

緑色の噴水と共に、神楽ちゃんと銀さんが飛び出てきた。安堵で膝をつきそうになる。でも、まだ気を抜いちゃいけない。

飛び出てきた神楽ちゃんを確認した星海坊主さんが、銀さんと共にえいりあんに止めを刺す。

その振動で、新八君はメガネをなくし、メダパニにかかっている神楽ちゃんに星海坊主さんの毛根が根こそぎ取られ……。そうやっている間にも松ちゃん砲の砲身にエネルギーが充填されていく。

万が一星海坊主さんが防げなかったら私が……。コンマ一秒の世界に神経を尖らせる。

口の中はカラカラに乾いて水分は見つからず、無駄に喉をコクリと鳴らした。足だけじゃなくて手まで震えてくる。

そうやって身構えていた発射の瞬間、震えるその手が引き寄せられ、押し倒される。

なっ!! バカツ! 心臓が凍り付いた。

劈くような音と、網膜を焼くような光が収まり、目を開けると、白い着物に神楽ちゃん共々抱え込まれているのが分かった。

「星海坊主さん！」

仁王立ちで傘を構える背に慌てて駆け寄ろうとするも、凄まじい力で腕を掴まれており抜け出すことが叶わない。

「坂田さん離して！」

抗うように声を上げると、ようやく腕の力がゆるむ。そんな銀さんを押しつけ、星海坊主さんに駆け寄る。

触れた瞬間崩れ落ちる。

「ハゲツ!!」

「ボウズさん!」

銀さんと、新八君が叫ぶ。

傘は赤く焼け、皮膚が張り付くような温度になっていたのが見とれた。それを持っていた手袋ごと外す。

重みを増す体を支えながら、恐る恐る胸に手を当てると、力強い鼓動がとくんととくと脈打ち、皮膚が、内臓が凄まじい速度で治っていくのが感じられた。つめていた息を吐き——命に関わるような臓器の損傷は見られないが——念のため焼けた肺や呼吸器系を少しだけ治癒する。

ようやく終わった……。気が抜けた瞬間、足から力が抜け、星海坊主さん共々倒れそうになる。

それを銀さんと新八君が慌てて支えてくれた。

「大丈夫か?」

「気を失っているだけみたい、命に別状はないよ」

「ちげーよ、お前だよ。こんなハゲ1ミリも心配しちやいねーよ」

「大丈夫……。それより神楽ちゃんは?」

「さっきの暴れっぷりみただろう? あんだけ暴れられりやあ大丈夫じゃねーの」

「よかった。坂田さん、星海坊主さん支えて」

支えていた星海坊主の腕を銀さんの肩に回す。そして、そのままへたり込む。

「おいおい、全然大丈夫じゃねーだろ」

「大丈夫大丈夫。力が抜けただけだから。新八君大丈夫? 本体どっかいっっちゃったみたいだけど」

「メガネは本体じゃねーよオオオオ!」

「そっかー違うのか。でも大丈夫そうで良かった。定春とバカ皇子達も大丈夫だね。良かった良かった」

パトカーのサイレンが鳴り響く。

「おい、あんま端までいくと落ちんぞ」

「じよぶじよぶ。真選組の皆も大丈夫そうだね」

ずりずりと這いながら下を覗き込むと、顔までは分からないが先頭に立って指揮をしている黒頭はきつと土方さんだ。その後ろで棒立ちしているのが近藤さん。戦車にもたれて寝ているのがきつと沖田さん。

夕日に照らされた江戸はとても綺麗で、センチメンタルな気分になつてしまい、情けない顔をしているのが自分でも分かる。

でも一番端にいる私は誰にも顔を見られないという特権を得ているので大丈夫。

帰宅

しばらくすると、救助用の飛行船が横付けされ、ようやく地上に降りることができた。

大立ち回りの結果、銀さんは片腕負傷、星海坊主さんは全身に火傷及び多数の打撲、神楽ちゃんは脇腹の裂傷、新八君は打撲等々、全員満身創痍である。

唯一の無傷と言ってもいいのが、私とハタ皇子とじい。

エイリアンの死骸が巻きつき、大きな穴が空いたターミナルを、コンクリートの壁にもたれ、ぼーっと眺める。特大の羽ばたきをしてしまった気がする。耐え切れず手を出してしまった……弱い自分が痛い。やっぱり来るんじゃないかなあ……。

喉元を過ぎればなんとやら。銀さんと別れた時の心境なんて薄っすらとしか思い出せない。あの時はそーしても良いと思ってしまうんだけど今はもう、それが誤りだったとしか思えない。

遠目に何かをしゃべっている銀さんと星海坊主さんを見る。星海坊主さんはしばらくした後、神楽ちゃんに背を向け歩いて行く。それを見ていた銀さんに、新八君が何かを語りながら通り過ぎていった。

神楽ちゃんの手紙タイムと新八君の家族発言タイム。混じれないな……そう感じたけれど、不思議と寂しさとか、悲しみとかそういう物は胸に浮かばなかった。ただただ眩しい憧れ。触れてはいけない綺麗なモノ。夕焼けが眩しかった。

神楽ちゃんと別れた星海坊主さんがこちらへ向かってくる。何か用だろうか？ 明らかに私に向かってくるその人に首を傾げる。困ったなあーこれ以上羽ばたきたくはないのに。

「何か用ですか？」

壁から身を起こす。

「なに、世話になった札にな。神楽から聞いた、友達なんだってな」

そう言いながら胸を二度とんと叩いた星海坊主さんは、何を指して世話になったと言っているのか……。

きっと両方なのだろう。ばれてないと思ったのに。

「すみません。それ内緒でお願いしますね」

「お前がそうしたいのならな」

物分かりのいい大人で助かった。ふと閃く。

「星海坊主さん。お願いが……私を宇宙に連れて行ってくれませんか？」

眉を潜め怪訝な表情を浮かべる星海坊主さんに、他人の台詞を丸パクリする。

「地球は私には狭すぎて……お願いします」

深まる眉に失敗したかな？ と少し焦る。けれど闘い方は人それぞれだと思ってくれたのだろう。

「神楽が寂しがるなあ」

それだけ言うのと納得してくれた。物分りの良い大人で本当に助かった。

「ありがとうございます。後、私パスポートとかないんですけど何とかなりますか？」

「そうか……まあ大丈夫だ。えいりあんばすたー星海坊主の名前は伊達じゃないんだ」

「良かった」

「それにしてもターミナルがああの状態じゃな、しばらく時間がかかるぞ？ 追って日にちは連絡するが……連絡先は？」

考えてなかった……どうしよう。鳥を飛ばして常時見張るなんて事はしたくないし。

「万事屋に伝えてくれませんか？」

郵便ポスト代わりに使うのは気が引けたが、それぐらいしか手は見つからなかった。

「わかった」

そう言っただけで別れたその人の背は少し寂しそうだ……。この人も海へ行くのだろうか。『信じる』きつとそれを知ったこの人は海になんて行かない。きつと星の海で待つのだろう。星海坊主だけに。全然まったく上手くないね。浮かんだ考えにセルフでツツコミを入れる。

「きーやあああん!!」

ふと顔を上げると、神楽ちゃんが大きく手を振りこちらへ歩いて来た。

手を上げ返すと笑いながら駆けてくる。『触れてはいけません』そんなフレーズを蹴飛ばすような勢いに苦笑する。

「パピーと何の会話してたアルか？」

「ん〜……今は内緒。後でね。ちゃんと教えるから待っててね」

「わかったアル」

神楽ちゃんの頭を思わず撫でてしまう。

父親と別れる決心をしたばかりの神楽ちゃんに、星海坊主さんと宇宙に行きますと告げるのは少し難しかった。

「よし、帰るか」

「はい」

「キャウン」

万事屋リーダーの掛け声でぞろぞろと歩きだす皆。

その背を見つめ私は何処に帰ろうかと考える。

閑話 バタフライ・エフエクト

バタフライ・エフエクトⅠ

かぶき町をアテもなくぶらぶらと歩いてる時だった。ふと見ると、道端のダンボールにうづくまり、ブツブツ何かを呟き、肩を震わせてるホームレスもとい長谷川さん。

——俺は何も見えない。

けれど無視してその脇を通り過ぎ立ち去ろうとしたら、ムズッとダンボールから腕が伸び、着流しを掴まれた。

「酷いよ銀さん」

「離せよ」

「そうなんだよ、酷い話なんだって。先日さア」

「その話せじやねーよ、離せつつてんだよ」

「そんな事言わないで聞いてくれよおおお!! もう俺には銀さんしかないんだあああ」

「気持ち悪いこというんじやねええええ、いいから離しやがれ」

結局押し問答の末に「酒、奢るからさア。話、聞いてくれよオ」という言葉に負けて付き合うはめになった。

場末の安い屋台。軒に吊るされた赤い提灯は、色が滲み破れており、ザラついたカウンターからは釘が飛び出している。一応気遣ってか無理矢理曲げてあるが、曲げ方が雑なせいで、うっかりすると着物の袖口でも引っ掛けてしまいそうだった。「この寂れ具合が愚痴をこぼすには丁度いいんだ」と強がる長谷川さんに、「へーへー、アンタの財布の中身にもな」と、自分の財布の中身を棚に上げてそう言うところには言わない約束だよ銀さん」なんて泣きつくもんだからもう面倒臭くて、ちびちびと黙って酒を舐めることにした。

「で、どうしたの今度は」

いい感じで酒も入り、聞く体制ってのが整った所で水を向ける。

「それがさア。俺がいつも寝ている公園あるじゃん？ その真ん中の小山分かる？」

「あのコンクリートで出来た、ペンキが所々剥がれてる奴だろ？ そ

れがどうしたんだよ」

「そーそー、子供達が良く秘密基地作ってる小山、何べん俺のダンボール取るなつっても聞かねーんだよアイツ等。じゃなくて、先日台風の後、その穴の中で女が転がってるのを見つけてきた」

女ねえ……。手エ出したとか言われても知らねえぜ？ そんな事を思いながら話の続きを促す。

「何があつたのか知らないけど、びしょ濡れで倒れててこりややばいと思つて、ゆすり起こしたんだけど……。起き抜けの挨拶が『おはよう、マダオ』つて。なんで見ず知らずの女にマダオつて言われなきやいけなの!? あれ銀さんの知り合い!? 知り合いなんですよ!! グラサン||マダオつて町内に触れ回ってるの!」

「うおお……。零れる零れるつて。グラサン・マダオいいじゃねえか今度からそんな名前で売りだしてみれば？ 大体なにそのダメそうな女。アンタよりダメそうな奴なんて俺ア知らねーよ」

「嘘をつけえええ、そうやって皆、俺の知らない所で俺の事馬鹿にしてんだろおおお」

襟首を捕まれ、危うく零しそうになつた酒を遠ざけると、両手でガクガク揺すぶられる。

「苦しい、苦しいつて」

「俺の苦しみが分かるか銀さん」

「分かつた、分かつたから手エ離せ」

それから長谷川さんをどうにか宥め、ひたすら愚痴のオンパレードに付き合ひ、気がついたら万事屋の布団に寝ていた。

昨日どうやって帰つたんだっけ？ やたら痛む頭を抱えながら襖を開ける。

「……新ハイ……。いちご牛乳くれエ……」

バタフライ・エフエクト2

「そつちの様子はどうだ」

——問題ありません……。ザー……。逃走経路封鎖……。ザー……。見張りと思しき者、三名確保済み……。ザー……

情報通りに潜伏していた奴等を一網打尽にする為に、包囲網を張る。無線から聞こえてきた声はそれが終わったという意味。

通称十六番街と呼ばれる倉庫街。その一角にある一見、他の倉庫と何ら変わりのないソレ。けれど、分厚い防弾仕様の扉、巧妙に隠蔽された下水に伸びる地下通路、見張りと思わしき怪しい浪人。全てが黒だと物語っている。

「いくぞ」

ヌラリと刀を抜き、合図を飛ばす。その合図に暗がりにも紛れていた黒服が音も立てずに姿を現す。

「御用改である！ 神妙にしろ！」

用意しておいた爆薬を使って扉を吹き飛ばし、飛び込んだ先には二十と少しの浪人。油断していたのだろう。ダラシなく木箱や、壁に持たれた格好で突然響いた爆音に凍り付いている。

だが、直ぐに体勢を立て直し「真選組だ！」「どっから漏れたんだ」と声を上げ、手に手に武器を取る。迷いのない訓練された動作——間違いのない——疑う余地はなかったが実際目にしてみるまでわからないのが現場という奴。そこから始まるのはいつも通りの仕事。

「首実検用に幾つか死体引っ張っつけていけ、あそこに転がってんのが多分主犯格だ、下手に傷つけんじゃねーぞ」

一瞬の遅れが生死を分けた。血に塗れた現場を確認しながら指示を飛ばす。何名か背後関係を洗うために生かしておいたが、それもパトカーに押し込められ、現場調査の為に数名の隊士を残し、引き上げていく面々。

潮が引くように静かになる現場。共鳴するかの様に、胸に溜まった鈍い熱もゆっくり引いていく。いつもより高ぶることなく終わった。いつもより遥かに楽な仕事。

外に出ると真つ暗な空に、糸の様な細い月が浮かんでいた。鉄臭さに錆びついた鼻が、僅かな潮の匂いを捉える。埠頭が近かったけなと脳裏に地図を描く。

「土方さんあいつ何者でさア」

掛けられた声に振り向くと、総悟が僅かに跳ねた返り血とは対照的

に、つまらなさそうな顔をして立っていた。

「総悟か……。さあな、少なくとも今回の件は白って所だな。仲間を売ったともあの感じじゃ考え難い。つーかお前何持ってたんだ？」

暗闇に紛れ初めは何か分からなかったが、どこから見つけてきたのか手榴弾を三つばかりお手玉にしている事に気づき、「ピン抜くんじゃねーぞ」と念を押す。

「だからいったじゃねーですか、アイツには無理だつて。血の匂いがしねエ」

その忠告を聞いてるのか聞いてないのか、器用に総悟は危なげなくそれを次々と放る。言いたい事は分からなくもない。こういう仕事をしていると何となく分かる匂い。

「そんなあやふやな勘で白とか黒とか決めつける訳にはいかねーんだよ」

口ではそういうものの、本当は殆ど手掛かりもなく、錯綜する情報に追わざるを得なかったと言うのが実情だった。田宮と言ったな……。それが全て、いけ好かないあの幕臣の手によるものかと思うと腸が煮えくり返る。

改めて手元の紙を見る。いつの間にか証拠書類に紛れた『おまけです』と少し丸い字で書かれたそのメモには、メンバー構成、所持している武器の種類、倉庫内の見取り図そう言ったものが逐一細かく書き記されていた。明らかに素人が書いたといったそれだが、十分に役に立った。というか本職の監察を動かしても事前にここまで調べきれぬ事は少ない。総悟の台詞ではないが、本当に何者なのだろうか？

「総悟、そーいやお前アイツに名前聞いてたな。何つーんだ？」
「酔昆布でさア」

スコンブ？ 酔昆布？ 何度唱えても人の名前には聞こえずどうしたつて、チャイナ娘が啞えている赤い箱しか思い浮かばない。

「ふざけてんじゃねーぞ、どこのチャイナ娘むすめ二号だ、オイ」
「俺じゃねエですぜ、本人が言ってたんでさア」

舌打ちし、煙草に火をつける。

「あ、手が滑った。土方死ねコノヤロー」

視線を上げるとピンの抜かれた手榴弾。やると思ったが本当にやりやがった。

「お前が死ねええええ」

慌てて避けると遅れて聞こえる爆音。そーいやアイツと合ったのも総悟のバズーカが原因だったな……。

バタフライ・エフエクト3

「きーやあああんー！」

夕日に一人でいるきーやんに駆けていくと少し困った様な顔をして手を上げてくれた。きーやんはいつもそう。何か困り事アルか？と聞いても、大丈夫だよと言いながら、笑いながら酔昆布をくれる。今はその顔を別の物に変えたくて、勢いにまかせ突撃する。

「痛いよ、神楽ちゃん」

痛みに顔を歪めながらも笑う顔は、さっきの困った顔より大分いい。

「パピーと何の会話してたアルか？」

「んく……今は内緒。後でね。ちゃんと教えるから待っててね」

「わかったアル」

困った顔を浮かべて柔らかく笑う。けれどその理由は先ほどの困った顔とは別の理由。何となくだけどそう思った。

だからそれはいいと自分のルールで見逃してやる。それでも助けに来てくれたお礼に「あげるネ」と酔昆布を差し出すと、「それ私があげたやつだよね？」と苦笑しながらも受け取ってくれた。

「貰ったもんは全部テメーのモンって言うネ。この神楽様が酔昆布をあげるなんて光栄に思えヨ」

「ははー。ありがたき幸せ」

おどけた調子で笑うきーやん。今は笑ってるといいネ。きーやんが何か深い悲しみを抱えていてそれに手を出して欲しくない事もグラさんは全部分かってるヨ。全部話してくれる時まで私は一緒にいるネ。だから心配しないでヨロシ。トモダチンコだからナ。

ニシツと笑うと、ニシツと笑い返してくれた。今はそれでいいネ。

バタフライ・エフエクト4

薄曇りの空の下、一匹の犬が舗装されてない道を歩く。薄汚れた身なりの犬は野良犬なのだろうか？ 時折眉を顰められながらも気にする風もなく、テクテクと歩く。

「あれ？ あの犬ご隠居の所の犬じゃない？」

長屋の前で井戸端会議をしていた一人の中年女性が声を上げる。小太りなその女に対して、背の低い女が、不思議そうな顔で「ご隠居？」と首を傾げる。

「ああ、アンタは来たばかりだからわかんないんだね。ほら、あそこに住んでいる……って、それより早く知らせて上げなきゃ」

そう言うとその女は「ご隠居！ お宅のワンちゃん見つかりましたよ！」と、一軒の長屋に駆けて行き大声を上げる。

けれど、その犬は余計なお世話とばかりに、自分の足で戸の前まで歩いて行くと、ワンと鳴き声を上げ、ぺたりと座る。薄汚れ、どこか疲れきった体をしながらも、頭をきちんと上げ、犬は真つ黒な瞳をじつとその戸に注ぐ。大人しくそれが開くのを待つその姿は、自分が帰らなければいけない場所がちゃんと分かっているかのようなだった。

しばらくして顔を出した初老の男は、犬を見るなり顔を綻ばせて、「どこへ行ってたんだお前」と自身が汚れるのも構わず、その犬を抱きしめる。

嫁と娘を相次いで亡くし、男に唯一残された家族だというのを背の低い女が聞いたのは、その後の話。

天国のその上向こう カルーセルとエルドラド

ターミナルからの帰り、つい万事屋連中の後ろをついて来てしまつたが、別に帰る道が同じというわけでもなく、というか帰る道なんてあつてないようなものなので適当な言葉で別れる事にした。奇跡はもう期待できなかつたので、「送りますよ」という新八君の言葉を「途中で買物あるから」と予め用意していた言い訳で断る。

疲れて寝てしまった神楽ちゃんを背負い、無表情を取り繕う銀さんをこつそり笑いながら。

人のいない場所、人のいない場所へと流れていけば、手入れのされてない並木道。

江戸の街では珍しい洋風の赤レンガが敷き詰められた道。その脇は、元は白樺だけだつたのだろうか？ 立ち枯れた灰色の街路樹に代わり、野草が青々と生い茂っている。

そんな並木道の終着駅、有刺鉄線が巻かれたフェンスの向こうに見えるは、今にも倒壊しそうな観覧車と、色あせたメリーゴーランド。ゴーカートの広場には、タイヤと壊れたままのカートが散乱している。それら全てが長らくここに人が訪れていない事を示していた。いいじゃんここ。

誰もこんな所に用事は無いだろうし……。それに、少しだけ子供の頃に行つた遊園地に似ているような気もした。

ここから先私有地につき侵入禁止、許可無く侵入した者には――を申し受けます。肝心の金額が掠れ見えなくなった看板を尻目に、フェンスを乗り越え、割れたレンガの間から飛び出した草を踏みつける。

「しばらく厄介になるね」

目星を付けたその場所までそうやってたどり着くと、元の色が分からなくなった馬に声をかける。白く日に焼けたメリーゴーランド。

ようやく見つけた仮住まいに機嫌を良くし、箱馬車の中を住み心地

良く飾り付ける。なんだか少しだけ離れがたくなってしまった気も
しないでもないが、許容範囲だろうと、そんな気持ちを笑い飛ばした。

「ごめんくださいーい」

相変わらずベルが壊れたままの万事屋の戸を叩く。昨日の今日で、
連絡が来ているかは分からないが、郵便ポスト代わりにした事すら伝
えていないので、それも踏まえ、こうやって足を運ぶ。

あ、これも依頼になるのか？ 依頼料について考える。払えるもの
であればいいけれど。

「はいはい、あれキリさん？」

ガラガラと開いた戸を開けたのは新八君だった。「こんにちは」
「まあまあ、玄関先でもなんですよ、どうぞあがってください」という
日本的な会話の末に居間に招かれる。

「どうしたんですか？ あ、神楽ちゃんなら遊びに行っちゃって、今は
いないですよ」

「んー、そうじゃないんだけどね、坂田さんは？」

見渡す限りそれらしき姿は見えない。

「銀さんなら多分パチンコか……いや、依頼料入ったのずいぶん前だ
から、どつかぶらついているのかも」

こっそり見えた苦労の跡に、思わず色々大変だね。と分かっている
かの様に相槌を返す。んー、困ったなあ……。出直すか？ そう思っ
た時、玄関が開く音がした。「けーったぞー」間延びしたかったるそう
な声に、「噂をすればなんとやらですね」と新八君は笑う。

噂をすることすら羽ばたきになるのか……考え過ぎだとは思おうが
一瞬、そう思ってしまった自分に、イカンなあーと溜息を付く。

「どーしたんだ？」

「あー、依頼……デス」

銀さんの顔を見てほっとしたというか、終わりなんだなと思ってし
まったというか、少し気が抜けた返事をしてしまった。そして結構気
合いいれちゃってたんだなという事に気づく。なんだかなあー。万事

屋への依頼ってそんな気張るもんじゃないっしょ。「空耳か？」とも言いそうな銀さんに、ヘラリと笑う。

「それじゃあ僕買い物行って来ます、今からタイムセールなんで」
そう言っつて新八君は出て行ってしまった。銀さんと二人つきりというのは距離感に迷うのでやめて欲しいのだが、新八君を引き止める術は見当たらない。仕方なく黙ってそれを見送った。ポップコーンじゃ釣れないよな……。

「お前が依頼ねエ……」

疑うような目つきで見られる。

「星海坊主うみぼうずさんから、私宛に伝言が届くと思うんで、代わりに受け取っておいて貰えないですか？」

「んな面倒臭い事しねーで、自分で受け取れよ」

「商売っ気がないですね。そんなんだから新八君も苦勞するんですよ」

面倒臭そうな銀さんに笑いながら「私、一人暮らしなんで、男性が訪ねてこられるとご近所の目が煩くて」と言い訳を付け足す。白いお馬さんの目を思い出し、彼等が生きていたら何を言うのだろうかと思う。メルヘンに生きる彼等だから、はしたないとか、破廉恥だとかそーいう乙女チックな事を言うのだろうか？ 依頼料と聞いたら後払いでいいと言われた。

「大体な……」

気まず気な空気を消したくて、へらりと笑ってみても、銀さんは死んだ魚の目を崩さず、こちらを見つめる。

「なんつーか、アンタが素直に依頼たすけを求めると思えねえーんだよ。その伝言とやら碌なもんじゃねーだろ」

「碌なもんかどうかは……でも受けてくれるんですよ？」

相変わらず敏いなあーと思う。けれど、依頼料を受け取るつもりでいてくれるのだ、それを考えればそう恐れる事はないかもしれない。

「で、なんなんだその伝言とやらは」

「宇宙に行く日を……。私、星海坊主うみぼうずさんと一緒に宇宙に行くことに

しました」

「お前が行くつーなら俺は止めねエけどな、神楽が泣くぞ」

「泣きますか」

「多分な……」

自信を持つて今度は怒るとは断言できなかつた。でも、きつと銀さんがそう言うつて事は泣くのだろう。

追加で依頼を……泣いた神楽ちゃんを頼むとはいえなかつた。

「アンタは距離の取り方が下手クソなんだよ」

少しだけ自信のあるソレを、自分以上に卒なくこなす人に貶された気がして、少しだけ心がザラついた。

「そんな事はないと思いますよ、そもそも距離なんて取ってるつもりはないんですが」

だから、回答が少し硬くなつてしまったのも、しょうが無いと言いつて訳をする。泣かせてしまう事になるなんて思つてもいなかつた。そうなつてしまったのは結果論であつて、下手を打つてしまったと言われればそうだが、だからといつて全面的に私が悪い訳じゃない。

「そういうところが下手くそなんだよ。やりたくもねーことをしようとしてる様な違和感つーの？ わざとだろ？ 遠ざけようとしてんのは」

真つ黒な海に浮かぶ白い月を思い出す。確かにあの日は今より銀さんに近かつた。再び距離を取つたことで漏れてしまった心。嘲り笑いながら、しょうがないと自分を慰める。

「坂田さん私は……」

「その坂田つーのもな、なんだかわざとらしいんだよ。名前で呼べよ」
言い訳を思いつけないまま、否定だけを口にしようとした私。それを遮り銀さんは挑むような目でそう言つた。けれどそう呼べない私に、銀さんはそらみると言わんばかりに鼻を鳴らす。それがもう全てを物語っている様で、空気の粘度が増し、苦しくなる。

「それを変えない限りアイツは泣くよ」

黙つてしまった私にかけられる銀さんの言葉。それは神楽ちゃんの為でもあり、私の為でもあるのだろう。結局、そこに行き着くのか。

酔昆布の付属品、もしくは、いちご牛乳のおまけ、それでもいい。今更ながらそうなりたいと願う。

「坂田さんと私は神楽ちゃんを通した知り合いですよね？」

言外に踏み込むなど釘を刺す。そうやって神楽ちゃんの為だという行為は、巡り巡ってそうではなくなるのだから。

「お前はさ、何をそんなに怯えてんだ？」

灰色の瞳がどこまでも見透かすように怖くなった。

「いちご牛乳」

「あ？」

「私、いちご牛乳が怖いので、そろそろお暇しますね」

これ以上はもう誤魔化しきれぬ自信がなくてそう言っただけで立ち去る。それ以上銀さんは追ってはこなかった。その距離感に安堵する。誰か枕元にいちご牛乳を沢山置いてくれればいいのになあ。

結論から言うと、神楽ちゃんは泣かなかつた。銀さんも私も外した予想。けれど、それに予想よりも深く傷つけた事を知り溜息を付く。引きこもるべきではあるのだけれど、傷つけた事に対する対価を支払う為にはそうも言っていられなくて……。

「坂田さん、神楽ちゃん泣きませんでした」

結局この人を頼ってしまう。

今日もやっぱりお金がないのか、公園のベンチでぼけーっと銀さんは座っていた。

「そうか」

やる気のない返事は、そういうフリ。それを知っているから安心して言葉を続ける。

「自分で言っていればマシだったんでしょうか」

「さあなあー。でもテーマがそうである限り大なり小なり一緒だっただろうよ」

私が言う前に星海坊主さんから私が宇宙へ行くと言うことを神楽ちゃんは聞いてしまった。

『黙って行くつもりだったアルか？』

表情を凍らせて、泣きもせずじつとこちらを見つめるその問いに、即答出来なかった。言う機会は何度かあったにも関わらず私は言わなかったのだから。そう出来ない事を知っていてそう出来れば良いと思ってしまうた迷い。最悪の回答を出してしまったのは私の弱さなのだろう。

『きーやんはいつもそうアルな、私が何も知らないとでも思ってるアルか？ 私も万事屋ヨ、なのに何で何も言ってくれないアルか？』

そのまま振り向きもせず神楽ちゃんは去っていった。無力な己に傷ついた様なその姿。胸を刺す鈍痛を誤魔化すために「痛恨の一撃。キリは致命的なダメージを受けた」そう茶化して呟いてみても上手く笑えず困ってしまった。

「知らなければそれが一番いいと思っただんですけどね」

「お前は馬鹿だろ。そーいう気遣いが一番相手を傷つけんだよ」

ぐさりとくる言葉で、心底馬鹿にした様に銀さんは視線だけをこちらに向ける。それに思わず「最後までバレなきやいいじゃないですか」と言おうとした口を閉じる。そう出来ないことはなにより私が知っていた。

「坂田さん……もしですよ。六が出ると決まったサイコロがあって、それを蹴飛ばしてそれ以外に変えてしまう人間がいたらどうしますか？」

「あ？ どうもしねーよんなもん」

突然変わった話によくやくこちらを向いて、突然何を言い出すのだとそんな表情を浮かべる。例えば方が悪かったのか、イマイチ要領を得ない回答に更に条件を付け足す。

「六が出たらイチゴパフェが貰えるとしても？」

「六以外が出たら何が貰えるんだよ」

「何が貰えるんでしょうね……」

そして失敗する。や、私銀さんみたいに口回らないからね。上手い喻え話なんて知らないんですよ。

「大体決まりきったサイコロなんて八百長だろ。んなもんいらねー

よ」

その答えに違和感を覚えた。その違和感は銀さんに対してじゃない私にだ。喉に何か小骨が引っかかるような、大切な何かを見落としてるような。

「で、そのサイコロ蹴飛ばすのはテーマなのか？」

「いや、サイコロじゃなくてアミダだったのかも、イチゴパフェじゃなくていちご牛乳の方だったかも」

「はあ？」

色々と面倒臭くなったので、相変わらず敏いこの人を置いて、公園を出る。

結局私は何のためにそれを忌避しようとしていたのだろうか？

結局頼った割には何も解決していなくて、取り敢えず謝ろうと思えば神楽ちゃんの元まで歩いて行く。でも、謝るって何を？ 知られなければいいと思つた事は嘘じゃなくて、優しい彼等に頼りたくはなくて、その上で何を謝るといふのだ？ 『あやまち過て改めざる、これ是を過ちあやまちといふ』そんな言葉が脳裏に浮かぶ。何度だって私は間違いを犯すだろう。

鳥が拾ったのは、河川敷で傘をさして座り込む神楽ちゃんの姿だった。

「神楽ちゃん、ごめんね」

記号だけの謝罪をその背にかける。口にして気付いた『許して欲しい』という感情を見なかつた事にする。

「もういいネ」

無理に笑って振り向いた顔に、もう一度「ごめんね」と繰り返す。

「私はきーやんが思ってるよりも丈夫ヨ。安心するヨロシ」

「夜兔だしね」

「そうヨ」

ニカッと笑った顔は本当の笑顔。太陽の様な笑みに、ふわりと心を引き上げられる。「酢昆布買いに行こうか」というお礼と謝罪が入り

混じった言葉に、神楽ちゃんは「ひゃっほい」と嬉しそうに声を上げる。

「そうと決まれば善は急げネ」

「それ、正しいけど微妙に使い方間違ってるよ」

土手を駆け上がる神楽ちゃんはそう言うと、笑いながら私の手を取り引く。温かな体温に、私はこんなにも冷たくなっていたのかと気付いてしまった。

一緒にどうだと誘われたから六月二十六日は攘夷記念日

あの日から今日の今まで万事屋に足を運ばずにいた。ターミナル復旧まだしてないし、とか、天気が悪いから、なんてどうでもいい理由をつけて避けて避けて避けて続けたしまった。

神楽ちゃんは私を許してくれたけれど、結局その根本は解決できないまま、彼女の自己助力に頼ってしまった。それが後ろめたいというのも勿論あるが……。

銀さんの会話に私は、きつかけを求めているのだ。記号だけの謝罪に意味いいわけを付け加える為の言葉を求めていた。あそこでぶん殴るとか、蹴り倒すとかそーいう答えを貰えれば、それを理由に、白々しい謝罪も意味を持ったのだと思う。それなのに期待した答えは返って来なかった。

全て自己都合なのだ。それが悪いとは思わない、人間ってのはそーいうもんでしょ？ それを否定できる人間がどれだけいるつていの？

「——であるからして、攘夷というのは肉体と同時に魂も鍛えることができる素晴らしい活動だということ……」

そもそも宇宙へ行こうという行為ですら自己都合だという事に気付いてしまえば、私はもうどうしたらいいのだろうか？ 六の目が出るサイコロなんて要らないと銀さんは答えた。きつと私の知る全ての人間がそんなもの欲しないだろう。それを私は知っている。そんな物を欲する様な人達じゃないという事は嫌という程知っているのだ。

それを踏まえた上で、それを欲しがっている自分に気付いてしまえば、本当どうしたらいいのだろうか？

「聞いたのか貴様はー！」

「あ、はいはい聞いてますよ」

そして、どうして私は桂さんに捕まってしまったのだろうか。

けれど、自分以上に自己中心的な人間を見ていると、自分なんて実はまだマシな方なんじゃないか？ という幻想を抱ける気がした。

それは、流石に限界だなど、重い足を引きずって万事屋に向かう途中。長屋が軒を連ねる細い路地。近道をしようと思ったのが悪かったのか……。

「貴様か、真選組から逃げおおせてるという指名手配犯は」
「人違いです」

銀さんも羨むというか、私も羨ましいぐらいの艶やかな長髪ストリートが前に立ち塞がる。とっさに踵を返し道を変えようとすると、気が付けば背後には白いでかい物体。疑う余地もなく、狂乱の貴公子こと桂小太郎と、謎の宇宙生物エリザベスの二人組。

エリーの真っ黒な瞳がこちらをじっと見つめている。薄暗い路地の雰囲気と相まって中々に怖い。

「あの、本人違いなのでそこ通して頂けないでしょうか」
『潔く認めな』

遠慮がちに伝えると、エリーは真っ白なプラカードを掲げ、反対の手で、とつくに時効となった筈の指名手配書突き出す。相変わらず、無駄によく書けてるなあ。

「しらばっくれてもこの桂小太郎は騙せはせんぞ」
「いや、本当勘弁して下さい」

攘夷活動の一貫とか攘夷入隊の誘いとかどーせそういうのでしょ？ 結構だから。いや結構とかいう曖昧な言葉を言ったらこの人の事だ、良い方に捉えるに違いない。

「先急いでいるので、失礼します」
「まあ待て。この話を聞けば、その辺の雑事など芥あくたのように感じるに違いない。人間じんかん五十年。短いその中で何を取捨選択するのが重要だと思うぞ」

ああ、何を言っても、無駄なんですな。逃げ出そうにもエリーの真っ黒な瞳が、不気味にこちらを見つめている。無表情で見つめる瞬

きもしない目というのがこんなに怖いものだとは……。それから永遠諾々と続く、いかに攘夷活動が素晴らしいかという話。いい加減そろそろ終わって欲しいなあ。

「……というわけだ。その手腕を見込んで、一緒にJOYしようじゃないか」

「いや、しません」

「これだけ言葉を尽くしてもまだ理解出来ないというのか!? 何故だ!?」

桂さんは目を見開いて信じられないという顔をしている。何故かと言われたら答えるのが世の情け? いやいや、それはもう一人の方だ。一方的な会話に疲れ、思考が明後日の方に飛んで行く。

「そもそも私、興味ないんでそういうこと」

「興味ないだど! これが今流行の三無主義というやつか! この国を担う若人ともあろうものがなんと嘆かわしい」

「いや、どこの流行りですか、聞いたこともないですよ」

「よく見れば何事にも関わりを持つとうとしない、友達がいなさそうなダメ人間。致し方あるまい、人一人救えずして国を変えることなどできようか? 否! 不肖桂、この可愛い子猫ちゃんの腐り落ちた魂を救うと天地神明に誓おうぞ!」

「うっさいよ、友達いないとか地味に人の心決るの止めて貰えませんか? 子猫ちゃんって言葉のチョイスおかしいでしょ、大体、魂腐らせた覚えなんてないよ? 賞味期限まだまだあるって聞いてますか? 本当結構なんですって、あつ、結構って言っちゃったじゃないか」

「何をぐちぐち言っておる。四の五の言わずについて来い、行くぞエリザベス!」

「いや、ちよつちよつと! 人攫い!? ちよつと!! 誰かあああ!!」

一人何をどう納得したのか、熱くなる桂さんに、ぐいっと腕を引かれ、いかにも治安が悪そうな薄暗い道に連れて行かれる。

何このゴーイング・マイ・ウェイ。ってか桂さんのこと知らないと本当恐怖だよ。背後からなんだかペタペタという足音が付いてくるし、微妙な圧迫感あるし。気にはなるが、極力見ない様にする。見た

ら最後、黒い事が書かれたプラカードを差し出されるに違いない。

「かくつくらアアアアアア!!」

「ちっ! 見つかったか、逃げるぞ!」

ゴミ袋が積まれた路地の曲がり角を曲がった先にいたのは土方さん。グッドタイミング! この人攫いひとさらいどうにかして下さいって!

そう思うのに、何故か桂さんは今までよりも強く手を引き走りだす。

「ま、待ってください!!」

「そう心配せずともこの桂がついている限り、真選組に後れは取らん!」

「違うって、私、逃げる必要ないから! お一人でどうぞ!! って巻き込むなあああ!!」

「待ちやがれ!! オイ、お前等回り込め!!」

土方さんが腕を回し、見えない誰かに合図を送る。おいおいおい! 本当関係ないから! ってあの! バズーカーとか構えるの止めてその沖田さん!!!

どこから現れたか、沖田さんがバズーカを構え行く手を遮る。左右を木の扉で囲まれ逃げ場はない。咄嗟に桂さんを突き飛ばし、避けた。黒々とした硝煙が立ち上る。

「くっ……このままでは、俺が囷になるから貴様は逃げろ」

いや、一人何シリアスしてるんですか。飛んで火に入る桂さん?

いやいや、どんなバタフライだよ。

あーあーもう面倒臭い。

「今から退却路作るんでちゃんと逃げて下さいよ。因みに、助けるのは今回だけですからね」

きつと無駄だとは思っけれど念を押す。桂さんを置いて、沖田さんに向かい走る。背後には隊士が数名。前方がまだまだと踏んだ。

次弾を装填し、躊躇なくそのトリガーに指を掛ける……。だけど……残念。

薄い瞳が大きく見開かれる。トリガーが引かれるその前に、間合いをつめ、構えたバズーカを手で払い、足で踏み抑える。バズーカを奪われ中途半端に空を泳ぐ腕を取り、捻り上げ壁に押し付ける。

「くっ」

「アディオス！」

『じゃあまたな』

その隙をついて背後を、桂さんが駆け抜けていった。その後を白いプラカードを掲げたエリーが続く。中身何入ってんだろう本当。

「隊長！ 貴様アアアア！」

「その腕を離せ！」

気がつけば真つ黒な集団に取り囲まれていた。足元には、踏まれ歪いびつに歪んだバズーカが転がっていた。なんかこれ私の体重が重いみたいじゃないか。

腹いせにそれを蹴飛ばし、腕を放す。

「てめーは……」

感触を確かめる様に、腕を擦りながら沖田さんがこちらを睨みつける。

「今度はちゃんと言聞いてもらえませんかねえー」

両手をハンズアップするも、刀が次々と抜かれていく。今日は厄日なんでしょうか。

「いや、だから知りませんって」

「嘘をつくな、桂とはどういう関係だ」

「ナンパされてたんですよ。それをどう勘違いしたのか分かりませんが、追っかけ回してくれちゃって……。何？ 嫉妬ですか？ 男の嫉妬は見苦しいって知ってました？」

「現実ツラ見てからものはいいやがれ。鏡、貸してやろうか？」

「やめといた方がいいですよ。美しさに耐え切れずに割れちゃいますから」

「あ？ 鏡の代わりに足りないドタマかち割ってやろうか!？」

切れる土方さんと、私。かれこれ一時間ばかりこういうやり取りを続けている。土方さんのふかす煙草のせいで、狭い取調室が煙けむっている。ギシギシと軋むパイプ椅子に腰縄で結ばれ、目の前には黒いシミが付いていた、がっしりとした机が置かれている。そのシミの元が何

であるかなんて事は考えない。

「足りないって失礼な。土方さんよりは色々足りてると思うんですがねえ、忍耐力とか忍耐力とかとかか。それよりいつまでか弱い一般市民を繋ぎ止めて置くつもりですか？ 弁護士。弁護士はいらっしゃいませんかー」

「いる訳きやねーだろ!! いい加減真面目に答えれば弁護士でも何でも呼んでやるよ!」

バンツと叩いて机の上の白い紙を示す。白紙答案ならぬ、白紙調書。そこには、名前欄に“ 酢昆布 ”とだけ殴り書かれている。住所の欄も生年月日の欄も何もかもが全て空白。これがテストならば赤字でゼロの字が刻まれるだろう。

突きつけられた現実から目を逸らし、できうる限りの蔑んだ目を作る。

「そんなに怒ったら血圧上がりますよ、ただでさえ毎日マヨ井いぬのえきなんて食べて、塩分過剰摂取気味なんですから。土方さんみたいな人間が年を取ったら急に来るんですよ?」

「余計なお世話だ!! つーか何でテーマがマヨ井れを知ってんだよ」

「さアねエ」

「ぶった切るぞ!」

何度目かの絶叫が響き渡る。こんな事している暇はないんだけどなあ。早く万事屋いかないと。青筋をビキビキ立てて今にも殴りかかりそうな土方さんに視線を合わす。

「一つだけ言っておきます。私、本当に、桂さんとは関係ありません。分かったらさっさとこれ外して下さい。でないとそろそろ暴れますよ?」

「上等じゃねーか、暴れてみるよ。取り押さえる為に多少手荒な真似するかもしんねーけど文句言うんじゃねーぞ」

一つどころか勢いに任せて二つも三つも言葉を足してしまった。

ジリジリと私と土方さんは睨み合う。その中心に可燃物でもあれば自然発火するに違いない。

「土方死ねコノヤロー」

「ああああ!!?」

キイと油が足りなさそう音を立てて、鉄でできた取調室のドアが開き、沖田さんが顔を出す。

「酢昆布、テメーの保護者が来たぜ。とつとと帰りやがれ。つたく人の仕事増やしやがって、後で覚えておけよ」

保護者……? 一瞬思い浮かべたあの人はここにいる筈もなく、と
いなか居てはいけない訳で……。

「総悟テメーはまた勝手に!」

怒鳴る土方さんを無視して、沖田さんは慣れた手つきで勝手に腰紐を解き、ほらいけよと背を押す。

「いや、いいの?」

「何言つてやがる、おめエがもう少し素直だったら、こんな手間すら要らなかつたんでイ」

とぼつちりを食らう筈の土方さんをチラリと見ると、忌々しそうな目をしているもののそれ以上引き止めはしない。本当に大丈夫なのか? それより保護者って……? そんな人間なんて……。何でも
ないフリを装いながらドアを潜る。

切れかかった蛍光灯がちらつく打ち付けのコンクリート。その先に居たのは何故か、白い着流しを付けた——銀さん。

「つたく、何やってんだよ。ほらとつととけーるぞ」

いやいやいやいや? なんで一瞬そうだよなあ、なんて、残念な感じに思ってしまったのよ。

「いつから私の保護者になったんですか? どうせなら、もう少し甲斐性のある人間を希望したいんですが?」

それを誤魔化す為の憎まれ口ですら、心を置き去りにしてしまった
ままでは覇気がなく、平坦な口調になってしまふ。

「贅沢言うんじゃねーよ」

「頼んでないよ、私。大体なんでここにいるんですか」

「俺が連れてきてやったんでイ。這いつくばって感謝しろイ」

背後から沖田さんの声が聞こえた。

どうして私が万事屋と繋がりがあつて知つているのだろうか?

神楽ちゃん経由？ いや、きつとターミナルで一緒に帰るところを見られたんだな。

振り向くと、沖田さんが透明な空気を身に纏い立っていた。

「なんで……私、桂さんの仲間かもしれないじゃん。何してるんですか」

「折りかけただろ、腕」

心臓がきゆうと締め付けられる。

あの時——腕を取り、壁に押さえつけた時——加減を誤り危うく折りかけた。骨の軋む音、手の平に伝わった鈍い感触を覚えていた。逸らしてしまいそうになる顔をそれでもまっすぐに向ける。

「本場に攘夷浪士かつらのなかまなら躊躇なく折ってるゼイ？ なんせ、真選組の一番隊長をしばらく使用不能に出来るまたとないチャンスだ。貸し借り、これでチャラにしておいてやらア」

台風のあの日の借り、それを精算したつもりなのだろう。余計な事を……。いや諸々を考えるとそれで良かったのか？ だけど……。イマイチ煮え切らない私に、銀さんはもう一度「帰るぞ」と声をかけ、返事もしないうちに背を向け、行ってしまった。

「チャラにしておいてあげるってのは私が言うべき台詞なんですけど……。まあ、この場は取り敢えずそうしておいてあげますよ」

『ありがとう』その語源ともなった、有り得ることが得難い助けではあったけれど、素直にそれを認めるのはいささか難しく、見えなくなってしまうた白い人を追いかけた。

魔力を失った役立たず

夕方というには早く、昼というには遅い。屯所の門から出たのはそんな時間だった。

舗装されていない砂利道。万事屋への近道である細い筋道を、銀さんの後について歩く。

銀さんは私がお前の後について歩く事を疑いもせず、スタスタと歩いて行く。

「俺はお前の保護者じゃねーんだけどなあ」とか、「意地はらずに素直になってりゃこんな面倒臭い事になりやしねーんだよ」とかそういった類の事は何も言わなかった。

そういう建前上の口上を必要としなかったのだろう。私はそんなもので誤魔化されやしないのだから。

「坂田さん、あいつに何頼まりました?」

言葉は濁していたが、結局は何かを頼まれたのだろうという事は察しがつく。

くるりと跳ねた白い一房。丁度後頭部のご真ん中辺りで跳ねた、寝癖なのかパーマなのか分からないそれを見ながら問いかける。

「何も頼まれちゃいねーよ。ただ野良猫が一匹迷い込んだつーんで見に来ただけだ」

通りがかった三毛猫がニャアと声を上げる。白髪頭がそちらを向き、それに合わせて、跳ねた髪も左から右へと移動する。

まるで最初からそうであるかのような、今思いついたであろう理由^{いいわけ}。上手な嘘だなと思った。

真実を少しばかり捻じ曲げた弁解を信じてくれたのかは分からないが、結果だけを見れば私は桂さんを庇ったのだ。無条件でこうもあつさり開放される訳がない。保護者という名の身元引受人か、そういう類のものをきつと頼まれたのだろう。頼りたくはないのに。

沖田さんには前貸し分があつたからいいとして、この人には何を返せるのだろうか。

「宇宙……結局、神楽ちゃんも行くんですか?」

「知ってたのか？」

顔だけをこちらに向け、僅かに片眉を上げた銀さんは、それなら話は早いと「三日後だ」と出立の日を告げる。

「お礼という訳ではないんですが、神楽ちゃんの事頼まれてあげますよ」

空っぽの手にはそれぐらいしか返せるものは見当たらなかった。神楽ちゃんがちゃんと戻って来れるように。誰の為かなんて事よりも、それで返せる借りの方が今は重要だった。

「頼まアと言いてーとこだが、お前には少し荷が重すぎんじゃねーのか？ 俺にはお前にアイツを背負い込めるとは思えねーんだがな」けれど、そんな想いはあっさり切り捨てられる。

最初に距離を置いたのは自分なのに、突き放された様で——息継ぎを忘れ、溺れる。それを、一呼吸だけに押し留め、余裕を取り繕う。「見損なわないで欲しいですね、神楽ちゃん一人ぐらいちゃんと面倒見れますって」

首だけを回した格好だった銀さんが、ゆっくりと体をこちらに向けた。

「ぐらいねエ……」

分かってんのお前？ そんな事を言い出しそうな表情で、銀さんは目を細めていた。

護るという事をお前は何も分かってない。そう言いたいのだろうか……。それはまるで、お前に出来るわけないだろう？ と遥か頭上から未熟な己を馬鹿にされてるようで悔しくなる。

歩みを止めた頭上を、飛行船がゴオオオと鈍い音を立てて飛んでいく。

「自分の事すら手に余ってるのに他人を背負い込もうなんざ、甘いんだよ。チョコレートパフェより甘い、激甘だ」

暗く淀んだ路地裏で、銀さんの着流しだけが白く、絶対的な正しさの証明のように浮いていた。

「良かったじゃないですか、好きなんですよ甘い」

その正しさを否定したくて、口が動く。

自分の事ぐらい自分が良く分かっている、余らせてなんかいない。迎えに来てくれた事は感謝しているが、それを捉えて手に余ってるなどと言うのは勘違いも甚だしい。一人でだって、どうにでもできたのだから。

続けて喉元まで出かかった言葉の数々を飲み込む。そんなものを漏らしてしまえば、己が未熟である事を認めるにも等しく思えた。

じつと見つめる灰色の瞳をへらりと笑って躲す^{かわ}。

「作り笑い。全然上手くねーんだよ。鏡貸してやろうか？」

躲した筈なのに、避け損ない、ぎっくりと斬られる。

「やめといた方がいいですよ？ 鏡割れますから」

咄嗟に返せたのは使い回しの台詞。心の余白が使い潰されていく——それを錯覚だと打ち捨てる。

「割れるかよ。そうやって何もかもから必死に目エ逸らして、自分自身身の事すら見ないふりしてるテメエにや、誰も助けらんねーよ」

「そんな事ない！」

やってしまった。思わず上がった語尾に口元を手で抑えた。

「いや、違うんです、ただ少しほらえつと……飛行船が煩かったから」

愚にもつかないみつともない言い訳。ますます墓穴を掘る行為に焦りが生まれる。

「お前が何抱え込んでるかなんてしんねーけどな、テメーがテメーを見てやらねーでどうすんだよ。そんな不細工な面まじまじと見てくれるのはテメーしかいねーだろうがよ」

「……」

全てを見透かすような言葉に、誤魔化そうとした言葉は続かず、顔が強張るのが分かった。

いやいや、だからそれじゃあ認めてるも同然じゃない。一拍も二拍も遅れて感情に思考が追いつく。少し冷静になれよ、そういうの得意でしょ？ 誤魔化し、見ないふりをするのは得意だったじゃないか。大丈夫、「言うに事欠いて、そんな事言うからモテないんですよ」今からでもそう言って笑えばいい。自己暗示をかける。

「また誤魔化そうとしてんだろ？ 見え見えなんだよ」

生暖かい視線で薄っすらと笑う銀さんに、グルグルと胸の内ですぐはく鳴く。

貶す様な言葉に対抗するための、攻撃的な衝動。それを抑えこみ、バレないようにゆっくりと息を吐く。銀さんと喧嘩がしたい訳じゃない。

慎重にへらりと笑う。

「誤魔化してる訳じゃないんですよ」

一歩だけ踏み込んだ。ミリオーダーの難しい位置調整。踏み込み過ぎず、踏み込まれないそんな距離を探る。

「じゃあなんだってんだよ」

「ゴギト・エルゴ・スム、我思う故に我ありって知ってます？」

「なんだそりや、中二の夏かよ」

「そう、真夏真つ盛りという言葉。だけどね、世界で唯一の真実なんだって。世界は夢かもしれないし、幻かもしれない、けれど考える私だけが唯一の存在証明」

「そりや単なる妄想だよ」

「そうかもしれない」

口では肯定するものの、この世界に来てしまった私には妄想と現実の堺が酷く曖昧に思えた。

しかし、それは今この場では重要ではないし、私以外にその感覚を分かって貰おうと言葉を浪費するのは無駄な行為と思えたので、それを認め、代わりにその本質の為に口を開く。

「だけど重要なのはそこじゃない。そうであっても誰も困らないって事が重要なんですよ。貴方は貴方が信じる物を信じればいい。私は私が存在して欲しいと思うものだけを世界だと認識して、それ以外は夢かもしれない幻かもしれないと信じる。それって誰か困ります？」

「そのどっこが誤魔化しじゃないっーんだよ」

「それを信じてても誰も困らない、否定する要素なんて何処にもないって事が重要なんですよ。だから、私はそれを信じる事ができる。そうすればそれはもう誤魔化しじゃない。嘘から出た真つて言うでしょ？ さっきのを逆説的に言えば、私は、私にとって都合の悪い物の一

切を信じない。そーいう事にしてるんです。便利な考え方だと思いません？」

へらりと笑う。

冷静になってみれば、なんでこんな事を銀さんが言い出したのかが分かる。きつと私の為だ。

社交辞令のそれでもいいから単に頼むと銀さんは言えば良かった。それだけでこの面倒臭いやり取りは発生しない。

銀さんは優しい人だから、むやみに人を傷つける様な言い方はしない。それに器用だから拒絶したければ、傷つけぬようにやんわりと拒絶する術だつて持つている。それをしなかったのは、私が意地を張り続けるから。

それに気付いてしまえば後は簡単だ。大丈夫な理由を証明し、笑えばいい。

「だから私は大丈夫なんです。神楽ちゃんのこと、勝手に頼まれましたから。それじゃあ、また会う機会があれば」

へらりと笑つて、手を振り背を向ける。

「馬鹿だろお前、そんな理屈こね回しても、あるもんがなくなりやしねーんだよ」

真実を告げるような声に、絶対だと信じていた魔法が無効化され、パキリと世界が音を立てた気がした。

聞き流せ、聞こえないふりをしろそう頭が警告を発する。

「大体その言い分じゃあ、テメーはそれが単なる言い訳だつて事に気付いてるつて言ってる様なもんじゃねーか。必死に目を逸らして、蓋をしてりゃあやり過ぎせると思ってたんだろ？ そんな事できやしねーよ。結局は単なる誤魔化しだよ。賢いフリしてテメーは何もわかつちやいねーよ。そーやって傷口を変にこね回すから、傷が膿をもつちまうんだよ」

「そんなことー」

思わず振り向いてしまい、後悔をする。薄っすらと馬鹿にするように笑っていればよかった、それかせめて、引つかかったなどニヤリと笑ってくれてれば良かったのに……。

薄い灰色がまるで私を可哀想な奴だとかの様に見つめている。止めてよ！ そう思われたら、まるでそうなつてしまえばいいじゃないか！

「そういうの止めて貰えませんか……」

誤魔化せなくなった軋みが悲鳴を上げる。

「認めるよ」

「だって……そんなのは」

どこか心の片隅で、誤魔化しだと分かっていた事を突きつけられ否定出来なくなる。本当に信じていたのは嘘じゃない、でも、それが真実であれば、私の世界はとても冷たくて苦しいのだ。

神楽ちゃんの悲しみが、銀さんの優しさが、新八君の気遣いが全部夢や幻で存在しないと否定するのは、とても苦しいのだ。

誤魔化す為には、その苦い物を飲み込まないといけない。嘘であつてほしいと願う気持ちだが、世界を真実から嘘に変えようとする。

でもそれを認めてしまうには私は……。

「怖いのか？」

怖い？ そりやそうだ。

永遠に隔離された檻の隙間から、届かぬ温かなモノを見つめ続けなければいけない絶望と、解決する術を持たない閉塞感に恐怖しないモノなどいるだろうか？

だけどそれを怖いと認めてしまう事はどうしてもできなかつた……。それは私が弱い事を認めるに等しかったから。

「怖くなんかないよ」

まったく誤魔化せてない怯えを含んだ声に、銀さんはせせら笑うかと思つた。

笑つてもいいのに、こんな惨めな自分なんて笑い飛ばして馬鹿にすればいい。そうすれば拒絶できるのに……なのに……鈍い灰色の瞳が温かい色を灯す。

「そうだよ怖くねーよ。ちゃーんと見りやあそんなもんかっと思つものなんだよ。変に怖がつて見ないふりをするから、枯れた尾花も幽霊に見えるんだよ」

細められた目と、僅かに上がった口角。そんなのズルいだろ……。ピキピキと世界が割れる。

「それになあー。無理して片意地張って一人で生きてく理由なんてどこにもねえーんだ。それはお前が勝手にそうしなくちやいけないって、思いこんでるだけなんだよ」

銀さんにしか出せないようなゆるい調子。

それはまるで一人で孤独に怯えてる必要なんてないんだと言ってるようで、縦横無尽にはしつたビビに耐え切れなくなった世界は砕け散る。対して、冷静な頭の一部は溢れかえる感情を抑えこもうと必死で色々な言い訳を撒き散らす。

「だから、いい加減言えよ『助けて下さいお願いします』って」

「嫌だよ……そんなのだって」

そんなのは嘘だ。だって……そんなのは嘘なんだ。今まで、誰も助けてくれなかったじゃないか！ 他力本願で、温厚無知で、浅ましい、醜い自分が顔を出す。そんな自分でいたくない。とっちらかった心のまま、経験と記憶がそれを嘘だと決め付け、感情がそれを嘘じゃないと求める。

「お前は……。本気で世界に自分一人しかいないとでも思ってるのか？ 神樂はお前がどう思ってるのが見捨てやしねーよ、助けて欲しいと素直に言えば手エ差し伸べるぐらいの度量はあんだよ」

酷く柔らかい口調で追加された「俺だってな」という言葉。今までずっと否定し続け、それでも求めていた冷たくない、温かい世界がそこにはあった。

とうとう最後の一欠がパリンと乾いた音を立てて砕ける。

好き勝手暴かれて、弱い自分を無理矢理引き出された拳句の今だが、せめて情けない顔だけは見られたくなくて背を向ける。

「お前本当に馬鹿だなあ」

ニヤリと笑うその顔をきつと赤くなっているであろう瞳で睨みつける。このクソ天パ！ なんてことをしてくれたんだ。二度と魔法

が使えなくなってしまうたじやないか！ 冷たいけれど傷つくことのない幻想の世界は碎けて散ってしまった。

「神楽待ってっぞ」

「銀さんのクソ天パ」

強力無比な絶対魔法を封じ込められた私は感謝の言葉なんて言えなくて、返事代わりの憎まれ口を叩く。

愛は世界を回す

久しぶりに見上げる万事屋銀ちゃんの看板は相変わらず眩しくて、その階段を登るのに苦勞する。

「銀さんが帰りましたよー」

そんな戸惑いを見無視するかのようには、銀さんは躊躇なくガラガラと引き戸を開けてしまおう。このクソ天パめ。本日何度目かになる悪口を呪詛の様に唱える。

「きーやん!!!」

飛び込んできた赤い固まりを、咄嗟に抱きとめる。空気が全て吐き出されるような勢いに、肋骨が軋む。

痛みを伴う抱擁。けれど、あれだけ避けていた筈なのに温かく、心地良いとすら思えた。

「神楽ちゃんごめんね」

「全然、気にしてないネ。いい女は心も広いアルヨ」

抱きしめる力が増す。冷たい雫が服を通して肌に触れる。

「本当にごめんね」

許して欲しいそんな気持ちではなく、悪かったと心底思えた。傷つけてごめん、頼らなくてごめん、何も言わずに避け続けてごめん。色んなごめんを込めた謝罪を神楽ちゃんは「酢昆布一年分献上するヨロシ」と笑って受け取ってくれた。

いつまでも玄関口にいるのも迷惑なので上がらせて貰う。

「どうぞ」

「ありがとう」

コポコポと音を立てて、新八君が淹れてくれたお茶を啜る。なんだか憑き物が落ちた様な、どこか照れ臭い様な、そんな気持ちで改めて万事屋を見渡すと、机についた傷や、白い定春の巨体が胸にほっこりと跡をつける。

「んで、テメーは何にそんなに困ってたんだよ」

「え？ あ、いや、言われてみれば特には何も?」

「はああ!?!」

盛大に驚いてくれるところ悪いが実際の所、何かに困っている訳ではないのだ。

「きーやん……」

青い瞳がこちらを見つめるが、本当に何も無いのだ。ただ、僅かに胸に引つかかるそれを言葉にするとすれば――。

「んー?? しいて言えば、神楽ちゃんと友達になっても良いかな? と」

伺いを立てるように神楽ちゃんに顔を向ける。

「きーやん……お前馬鹿ダロ。とつくの昔にきーやんと私はともだちんこヨ」

「とつくの昔にともだちんこデシタか」

「そうヨ」

ニヤツと笑う神楽ちゃんに私もニヤリと笑い返す。あーあ馬鹿らしいとばかりに銀さんはジャンプを読み始め、新八君は良かったですなと目を細めていた。

「ねえ、二人とも友達になりたいって言ったらダメかな?」

「とつくに僕は友達だと思っただけだよ?」

「何いってんだばーか、ダチつてのは宣言してなるもんじゃねーんだよ」

小馬鹿にした口調で銀さんはそう言うと、鼻くそを飛ばす。汚いなもう。

新八君は「良かったら一緒に夕飯食べていきませんか?」と誘ってくれた。万事屋の台所事情を考えると、きつと遠慮すべきなのだろうけれど、そうはしたくなくて「いいの?」と聞けば「大したものではないけどね」と少し恥ずかしそうに笑ってくれた。

傷だらけのテーブルに、白いごはんが並べられる。おかずは具なしの味噌汁と、もやしだけ炒め。

数少ないおかずを銀さんと神楽ちゃんが奪い合い、新八君が煩くてもめんなさいと謝る。久しぶりに食べる誰かとの食卓はなんだかとても美味しく感じられた。

「ご馳走さまでした」

手を合わせて頭を下げ『ご馳走さま』の意味を胸に刻む。

「折角遊びに来てもらったのに、こんなんで済みません。何せウチはいつも開店休業状態な上、碌に仕事もしない社長がいるもんですから」

新八君は眼鏡の下からじつと銀さんを見つめるが、銀さんはまったく意に介さず「違いますう、お金がないのは、大飯喰らいを抱えてるからですよ」と懐事情を神楽ちゃんと定春に擦り付ける。

確かに神楽ちゃんの食べっぷりには、幾ら稼いでもブラックホールに吸い込まれるが如く、食費が消えていくとは思いはするも……きつと原因は二人と一匹の相乗効果なのだろうと思う。

「ぜんぜん。本当に美味しかった。ありがとうね」

質素な食事だったけれど、どんなご馳走よりも美味しく感じられた。素直にそれを伝えれば、銀さんが呆れた様に「どういう食生活してたの今まで」とジト目でこちらを見つめる。

「聞いちゃいけないね銀ちゃん。きーやんはホームレスアルヨ？ 残飯あさったり、腐った飯食ってるに決まってるネ」

「ゴホッ……ゴホッ……神楽ちゃ……待って」

危うくお茶を吹く所だった。

それなのに、咽る背を新八君が撫でてくれながら、「そんなドストレートに言っちゃダメですよ」なんて言うものだからダメージが倍でドン。

「誰がそんな事を!!」

「クソサドが言ってたネ、ホームレスが一人問題起こして引き取り手がいないからお前等引き取れよって」

「まさか若い身空でホームレスしてるとはなあー」

沖田さんか！ 沖田さんなのか!? あのクソドエスなんつー置き土産を残して行きやがった。つてか何処から漏れた！ 土方さんか!! 土方さんだろ！ 土方さんしかいない！ 二人共次会ったら覚えておけよ!!!

「違うんですか?」

私が心の中で二人を血みどろ祭りに祭り上げてるなんて知らない

新八君は「失礼な事を言つて済みません」と見つめてくる。そんな純粋な瞳で見られたら嘘も付けず……。

「ホームレスなんて呼び名止めて欲しいんだけど？　借り暮らしですよ、借り暮らし」

「なーんだ合つてたんじゃないんですか」

「きーやん、言い方変えても結局は一緒ネ」

「何かツコつけてプライド護ろうとしてんだよ。そーいうのが一番恥ずかしいんだよ」

三者三様に馬鹿にする。いやいやいや、お前等も一遍世界超えるよな体験して見ろよきつとホームレススタートだから!!　なんて事は言えず、私が悪うございましたと拗ねるしか手は無かった。

新八君は姉上が今日は休みなんで先に帰りますねとあの後直ぐに帰ってしまった。

そろそろお暇すべきなんだけど、なんだかこの温かい空間から出たくなって、ぐずぐずと神楽ちゃんにひつついてテレビを見ていたら、いつの間にか神楽ちゃんは寝てしまった。風邪を引かさないうちにと抱き上げ押入れに寝かす。

「いつちよ前に悩んでやがったぜ」と寝てしまった原因を教えてくださいました銀さんに、ごめんと謝る。

「お前……結局行くのか？」

『三日後』そう告げた銀さんの言葉が蘇る。

「そうだね……行くよ」

温かい三人と一匹が笑う未来、そんな『絶対的』な未来が欲しい。それを誰も望まなくても私はそれを欲しいと思ってしまう。ここに居てはいつか私はそれを壊してしまうだろう。

「俺等はやっぱり頼りになんねーか？」

「そうじゃないよ。別に困り事つて訳でもないし、それは解決すべき問題とかそういう類の物でもないし。ただ単に私がそうしたいってだけ」

「そうか……それなら俺はもう何も言わねエよ……神楽を頼まア」
ハツキリとした事は何も言えなかつたけれど、それでも銀さんは分かつてくれた。

少し寂しそうに笑う顔に、海で見た銀さんが重なる。

「しかと頼まれたよ」

作り物じゃない笑顔を浮かべて請け負う。ちゃんと貴方の腕の中に戻るように頼まれた。背負い込んだずっしりとした重さの重要性を噛みしめ、言葉にできない思いを大切に受け取る。

鈍い痛みを誤魔化す術はないけれど、その温かさを知ったから、もう誤魔化さずとも平気でいられる気がした。

天人や、地球人、色とりどりの人々が行き交う。真っ白な磨き上げられたタイルにそれが映りこみ、左手の明るい大きな窓からは飛行船が上下に行き交う様子を見ることができた。

そんなターミナルのロビーで、一際目立つ砂色のマントを見つけた。

「星海坊主さん！」

私の声に振り向いたその人は、厳つい顔を少し綻ばせ「来たか」と返答を返す。

神楽ちゃんは照れが勝ったのか気付いている筈なのにそれを無視して「いい年こいた大人がはしゃいでんじゃねーヨ」と大きな旅行かばんを引いた観光客相手に毒舌を撒き散らしている。

そんな素直じゃない神楽ちゃんの背を少しだけ押す事にした。

「神楽ちゃん、あそこでいい年こいた大人が寂しがってるよ。ここは神楽ちゃんが大人になってあげるべきじゃないかな？」

「ふ、ふふん。しょうがないアルナ」

それでも、駆け出したい足を堪え、ゆつくりと傍に寄り手をつなぐに留める神楽ちゃんを笑う。

「羨ましいですね」

一瞬心を読まれたのかと思った。隣を見ると私と同じく、新八君が

羨ましそうに二人を見ていた。新八君も幼い頃に両親を亡くしていたんだったな……。

障子から覗く青い空と飛行船の映像と共に『侍の国。僕らの国がそう呼ばれていたのは、今は昔の話』そんな言葉を思い出す。きつともう一度呼ばれる様になる未来、そんな未来を願う。

星海坊主さんは繋がれた手に、嬉しさをこらえるような挙動不審な態度をとっていたが、やがて、回りを見渡してもう一人の姿を探す。

「あいつは来てないのか」

「仕事とかで……つたくあの人は……」

雑踏の中でも目立つ白髪。それを見つけきれなかった星海坊主さんは、やっぱりかという様な口調でそう言うと、「まだまだ青いな」と鼻を鳴らす。

「銀ちゃんは、髪の毛と同じで性格がねじ曲がってるアル」

「素直じゃないんですね、本当」

神楽ちゃんと新八君も、それを分かっているしやうがないと笑う。そんな理解者を迷いなく手放す、相変わらずの右から左つぶりに、私が少し嫌がらせをしてやろうと思ったのは仕方がないことだと思う。

「少し、う〇こ行ってくる」

「キリさんンンン!!? なに突然爆弾発言してんですか」

「爆弾の様に産み落とされる事にかけてるの? 上手いねえ新八君」

「違いますから!! ってかそんな事大声で言わないでいいですから!!」

「う〇こ如きで狼狽えるなよ。だから新八なんだよお前は」

「なんで標準語!!? そして新八って何!!? 悪口なの!!? 新八って悪口なの!!?」

ギャーギャーと騒ぎ出した二人を置いて自販機でいちご牛乳を買う。

ガコンと音がして出てきた冷たいパックを手に、少し離れた観葉植物の影に座る、スーツ姿のサラリーマンに声をかける。

「こんな所で覗き見とはさてはポリゴンですかね?」

「ポリゴンじゃねーよ、ただのリーマンだよ」

「ハイハイ。髪の毛と同じで性格がねじ曲がつてる銀ちゃんでした
ね」

「気まずそうに新聞を下ろした先にあつたのは、髪をオールバックに
撫でつけて、メガネをかけたサラリーマン銀さん。んだよと悪態をつ
くも、その気まずそうな目が全て台無しにしている。

「そんな事を神楽ちゃんが言ってたよ」

「あの怪力娘……銀さん髪の毛は天パでも、心は素直な少年なんだ
っーの」

「いちご牛乳のパックからベリツと音を立ててストローを剥がすと、
プツツとそれを突き立てる。

「あ？　くれんの？」

「嫌ですねえ、これは私の分ですよ」

「チュウーとこれみよがしに目の前でそれを飲み干す。

「……普通、銀さんへお礼にくって差し出す所じゃないの、それ」

「お礼なんてすべき事、何かありましたっけ？」

「恨めしげなその目を笑い、握りつぶした紙パックをゴミ箱に放る。

「どいつもこいつも恩を仇で返しやがって、碌な奴じゃねーな、くそ」

「そりゃー銀さんが碌な奴じゃないですからね、まあ一宿一飯の恩ぐ
らいはあるんで、これ差し上げますよ」

手のひらサイズの銀細工が施された丸い円盤。

それを受け取った銀さんは、留め金部分に指をかけ開く。

「なんだこれ？」

「鏡……だったもの。荷造り中に割っちゃってね、いらなから上げ
る」

「ただのゴミじゃねーか！　いらないもん押し付けんじゃねーよ！」

「黒く何も映しだすことのなくなったそれに銀さんはゴミ認定を下
す。」

「いらなかったら捨ててもいいよ」

それは一度だけ銀さんを護ることができるとお守り。私が起こした
何かで変わってしまったであろう未来から銀さんを護るもの。捨て

られても、返されてもどちらでも良かった。銀さんはそれが何であろうと別に困らないのだろうから。

「ったくよ……まあただでくれるって言うんだったら貰っといてやるよ」

それでもそう言ってくれる銀さんに笑い手を振る。気だるげに挙げられた手がそれに応えてくれた。

それで十分だと思った。

星間飛光

搭乗口で列をなして並んでいる天人や、地球人。家族連れやら、仕事だろうか？ スーツ姿で忌々しそうに前方を睨みつける人。そんな人達の中央に立ち、パンフレット片手にメガホンで、持ち出し禁止条項を読み上げる入国管理官。

「えー、このリストに記載された物は持ち込みを禁止されております。悪意を持って持ち込んだ場合、宇宙法に則り罰せられる恐れがあります。ご注意ください。まず火器類、第一種宇宙薬事法適用薬物、その他地球固有生物。特にゴリラ、ゴリラの持ち込みは禁止されています」
ごりら？ 一瞬間こえた単語に耳を疑う。

「はい、その人！ ゴリラの持ち出しはダメって言ってるじゃないか！」

「いや、俺は……」

「近藤……。お前、ゴリラに間違われるの今日何度目だ？」

どこかで聞いた声がすると思ひ振り向くと、黒い着流しに、赤いマフラーを巻いた、サングラスを付けた渋いオジさん。その隣には同じく着流しを付けたゴリラに良く似た人間。松平のとつつあんと、ゴリラ……もとい近藤さんだろうか？

困惑した顔で俺？ と自身を指さす近藤さんに、呆れた様にとつつあんはそれを見つめる。

メガホンで呼びかけてた人が、「済みませんそこ通して下さい」と、人混みを掻き分けてそちらに向かう。

「ちよつとこつちに来なさい」

とつつあんの腕を引く管理官。

「あ、オジさん関係ないんで、これ野良ゴリラです。勝手についてきて困ってたんですよ。おたくらで処理してくんない？」

とつつあんは警察手帳をチラ見せしながら、あっさりとな近藤さんを見捨てた。

「これは！ た、大変失礼しました！ 丁重に処理させて頂きます!!」
警察手帳とその言葉に、メガホンの人は慌てて腕を離し、最敬礼を

取る。

「ああ、いいよいいよ、オジさんそーいう堅苦しいの嫌いだから。悪いけど後よろしく」

とつつあんはそう言うと、管理官の背をぽんと叩き、一人、進んだ列の先へ歩いて行く。

「えっ！　ちよつと、とつつあん!？」

取り残された近藤さんは、メガホンに肩をガシツと掴まれる。

「大丈夫、怖くないよ。暴れない暴れない」

「とつああああん!!!　違う、俺ゴリラじゃないから!」

「はいはい、ゴリラは皆そんな事言うんだよねえ」

「言うわけねえーだろおお!？」

必死の抵抗も虚しく、どこから現れたのかももう一人の管理官と、メガホンの二人に脇を固められ、近藤さんは引きずられ行ってしまった。

「あーあ、これでスッキリした」

やけにスッキリした顔で、とつつあんは首を回している。大人つて汚い……。

「きーやん何してるアルか。またうんこアルか？　ゲリか？　ピーリアルか?」

呼びかけられ振り向くと、星海坊主うみぼうずさんと手をつないだ神楽ちゃんが、「早く行くアルヨ」と別枠で設けられたゲートの前から呼んでいた。

「いやちよつと野良ゴリラがいたから珍しくて」

「まぢでか!?　どこアルか？」

「もう行っちゃったよ」

「そうアルか、少し見たかったネ」

「まあ、また見る機会あるんじゃないかなあ」

神楽ちゃんは残念そうに眉を下げる。

きつとまた見れるよ、見れるといいねってか見れるよね……?　若干の不安を残しつつ、私もとつつあんに見習い、それをなかつたことにする。まさか本当に間違われるなんて……ねえ?

神楽ちゃんの後に続き、そんな人混みを尻目にゲートを潜る。

星海坊主さんが見せた身分証の他には、手荷物チェックも、パスポートチェックもなかった。これがえいりあんぼすたー特権か……凄いな。

乗り込んだ船は3人掛けの座席で、窓際を神楽ちゃん、真ん中を星海坊主さん、通路側に私という順に座る。

「きーやん！ きーやん！ 見て見て地球ごっさ綺麗ヨ!!」

「綺麗だねえ。神楽ちゃんの瞳みたい」

キラキラした青い瞳とその向こうに見える地球はとても綺麗で本当にそう思った。

「何うちの神楽ちゃんに色目使ってるの!?!」

「なに言ってるのパピー？ 気持ち悪いよ」

「神楽ちゃんンンン!?!」

しばらくの言葉の応酬の後、はしやぎ疲れたのか神楽ちゃんは寝てしまった。

昨日は眠れなかったみたいだしな……。

「銀ちゃん……それ私の酔昆布ヨ……」

漏れ聞こえる寝言に思わず笑ってしまう。

「神楽ちゃんが起きるだろ」

不機嫌そうに言う星海坊主さんが面白くて、更に笑ってしまう。

「星海坊主さんの声の方が大きいですよ」

「くそっ、このまま連れて行ってしまおうか」

星海坊主さんと神楽ちゃんの旅程は一週間。夜兎でも大丈夫な人工太陽が浮かぶりゾートの星が目的地。想定外の事態になるかと不安に思っていたが、なんの事はない予定調和通りに進んでくれてほっとする。それは多分銀さんへの星海坊主さんなりの嫌がらせなんだろう。

居なくなれば銀さんも少しは素直になるかなあ。ヒロイン争奪戦を思い起こして笑いが止まらない。

無性に神楽ちゃんの頭を撫でたくなかったが、届かない手に諦め、再び窓へ視線を移す。

「星海坊主さんアレ……」

甲板端から僅かに見えた紫色の触手。もしかして、二度ある事は三度あるって言う奴?? 位置的にまた性懲りもなく船の下にへばりついているのだろうか。

「オイオイ……入管なにやってんだあ!?!」

慌てて傘を手に取り、席から立ち上がろうとする星海坊主さんを手で制し、止める。

「私ちよつとおっきなビチグソ掃除してくるんで、神楽ちゃんお願いしますね」

「お前……」

本来はどうあるべきかは知らないが、頼まれたのだ。だから……。ヘラリと笑って席を立つ。

「すみません、おトイレ何処ですか」

スチュワードス風の美人なお姉さんに声をかけ案内して貰う。個室に入り鍵を閉めた私は……跳んだ。

「うわつと……」

上も下も右も左もない宇宙空間でバランスを崩す。くるくる回る己を止める手段を模索し、数回回った後、ようやく止まることができた。重力がないというのはとても不思議な感覚だった。

安定性の欠けたそれは……理由のない恐怖。人間は重力がないと生きていけないのだとしみじみ思う。

「君ストーカー? いくら神楽ちゃんが可愛いからってそれは頂けないなあ」

耳があるかないかという以前に、空気のない宇宙で声が伝わる筈もないけれど、そう声を掛け、えいりあんの頭らしき部分を掴み引き剥がす。軋む船。慌てて手を放す。

なんつーモロイ船なんだ。己の馬鹿力を棚に上げて、思案する。しゃーないかあ。地道にえいりあんを部分解体しながら、一本一本触手を千切っては捨てる。その度に別の触手が襲ってくるけれど、空間を歪ませそれも切り飛ばす。

地味だし、超絶面倒臭い……。

恨めしげにも見える最後に残った頭を放り投げると、お掃除は終了。思ったよりも時間が掛かった。

甲板を見上げるといつからいたのだろう？ 星海坊主さんが宇宙服に身を包みこちらを見ていた。心配性だなあ。手信号で船に戻る事を伝え、先に跳ぶ。

「お客様大丈夫ですか?！」

長いお手洗いを心配したスチュワーデスさんに、ドアの外から声をかけられた。

「あー大丈夫です。なかなかしぶといビチグソだったんで」

「そ、そうでしたか……」

あれ？ 若干引かれた？ まあいいや。ジャーと水を流し外に出る。

席に戻ると相変わらず気持ちよさそうに神楽ちゃんは寝ていた。星海坊主さんが居ないおかげで、届くようになった手でその頭を撫でる。

戻ってきた星海坊主さんは、ちやつかり席を交換した事すらツツコまず、黙って元私の席に座る。

「言ったでしょ？ 私には地球が狭すぎるって」

ハラリと笑う私に、「そうだな」とだけ言い、それ以上は何も言わなかった。何か言われるんじゃないかと恐怖した私は、その適度な距離感に助けられる。本当に大人なんだなとつくづく思った。

「星海坊主さん。結婚してください」

「ごめんなさい」

「即答ですか!」

唐突なそれにも動じず即頭を下げる。やりますな……。

「俺は死んだ母ちゃん一筋だから、小便臭いガキなんてお呼びじゃないんだよ。それに……娘を置いてどっかに行っちゃまう母親なんてなお更ゴメンだ」

「そりゃ、残念」

星海坊主さんは、諦めの悪い私にそう言うと、嫌そうに顔をしかめ

る。

神楽ちゃんのいつの間にかお母さん作戦は失敗した。色仕掛けからのプロポーズだったら良かったのかなあ。失敗失敗。重力のない恐怖。温かい物でそれを埋めようと神楽ちゃんの頭をもう一度撫でる。

それからしばらくして、分岐点となる中継ステーションについた。ここで本当にお別れだ。

「きーやん……きーやんはどこに巣を作るアルか？」

「きーやんは巣はもたないのだよ、神楽ちゃん」

何度もやり取り取りされるどこに行くのかという会話。手紙を出すから、会いに行くから様々な理由を付けて聞き出そうとするこの子をふわりふわりとかわす。

「それとね神楽ちゃん、お父さんに聞いても場所は教えてくれないよ。私が脅して口止めしちゃった」

悪女を装いニヤリと笑う。これから向かう先は夜兔が存在できない星。

神楽ちゃんが可愛い星海坊主さんは決して口を割らないだろう。

「だから、お父さんに聞いてもダメだよ？」

「きーやん……」

メツと人差し指を立てて冗談めかして言えば、青い瞳を暗くしてこちらを見つめる。

泣きそうな時、辛い時神楽ちゃんは無表情になる癖がある。

その顔を崩したくて、頭をくしゃくしゃに撫でる。

につこり出来るだけ上手な笑顔を浮かべて、手を振る。

「元気でね。神楽ちゃんバイバイ」

「バイバイ、きーやん」

目的地に行く船に乗り込み、三列シートに一人で座る。

窓から見える星空がとても綺麗だった。

砂の星から愛をこめて

酸素も水も存在しない白い砂だけの星。

そこには夜は存在しない。生物も存在しない。夜兔なんて存在も許さない。神楽ちゃん……神威——春雨——対策。

船も、近くの星からチャーターせずには辿り着かない辺境の地。

月の昇らない星で、銀色の月が懐かしくなる。

大量に撒き散らした本の中で、膝を抱える。私は耳と目を閉じ口をつぐめる人間になりたい……なんてね。バツと大の字になり寝転がる。

夜のない星に作った仮宿。万事屋と同じ大きさのドームにいくつかの部屋。一人暮らしには十分な広さのそこは畳敷き。

このまま昼寝したら畳跡つくんだろうなあ、でも誰も見てないしいかなあ、なんて思いながら、視線の先にある、ハメ殺しの窓を見る。そこから覗く空は大気が薄いせいで、白く眩しい。水がないので雲もできない。何も見えぬ空で青い星を探す。

孤独は死に至る病だと誰かが言った。嘘じゃないか。こんな星に一人孤独に生きていくこともできる。

それに、「一人には慣れてるしね……」そう呟いてゴロンと寝返りを打つ。視界が反転し、今度は読み散らかした娯楽本が目に入ってくる。そろそろ読み飽きたなあ、と追加購入先について考える。快援隊、出張販売してくんないかなあ。何が羽ばたきになるのか分からないまま、手を伸ばそうとする弱さ。

キーンとガラスが振動するような音を立て、畳の上に放り投げたくすんだ鏡が像を結ぶ。それは残してきた鏡の欠片。銀さんが闘いを始める合図。

本当は身代わり人形リバースドールが作れば良かった。でも加減の知らないこの力で作れたのは、物理ダメージ百%無効のプロテクトリング。思わず投げ捨てたよ。誰がそこまでしろうと思った……。ため息を付いて、代わりに作ったのがあの鏡。全てを見続け、平気でいられる様な強さは持っていなかったから、必要な時だけ助けられるように。

必要以上の干渉はきつと欲しくないだろうから、一度だけ、助けようと決めた。でもその一度ですら、本当は自分の為なのだ。激甘です
ねえと笑う。

赤ちゃんを抱いた銀さんが浪人相手に大立ち回りを繰り広げる。
浪人を相手取る間、放り投げられた赤子は、泣き声一つ上げず再び銀
さんの腕に戻る。

目つきや髪が銀さんそっくり。かんしちろう 勘七郎君だ。

おかだにぞう 岡田似蔵。もうすぐ銀さんは彼の人に斬られてしまう。痛いだろ
うか、痛いのだろう。そんな大怪我をしたことのない私は痛みが分か
らない。

勘七郎君を背中に背負い、銀さんが橋田屋に乗り込む。

思ったよりもあっけなく斬られてしまった。飛び散る血は赤く、膝
を着く銀さんは痛そうだった。

ここでもし私が似蔵を殺したら紅桜篇はどうなるのだろうか？
あんな大怪我を銀さんはしない？ 鉄矢さんは紅桜を諦める？ も
しかして、もしかして高杉と桂さんは仲直りできちちゃったりする？
それとも……江戸は大炎上するのだろうか。
もうすぐ始まってしまふソレに心が揺れる。

無事勘七郎君を取り戻した銀さんは、いちご牛乳とミルクで乾杯を
する。

そこで私は映像を切った。

鏡が像を描く度、心がすり減っていく気がする。もう十分じゃない
か、そう思うことすらあった。

私を感じなければ世界は存在しない。そうでしょ？ 銀さんが否
定してくれた世界がもう一度形を作ろうとする。

それを拒絶する。分けてもらった温もりが、夢や幻だとは思いたく
はないから。

再び鏡が鳴く。

相手は似蔵。とうとう始まった紅桜篇。

路地裏に置かれたポリバケツの傍に横たわるのは、内臓を撒き散ら

した御用聞きの役人。私が見捨てた人……。確信犯的犯行。確実な未来に乗っかるための必要な死。心電図と私と無機質な部屋。黒い画面に浮かんだ緑が、平坦な線を描く。フラッシュバックする。

私は死というものを知っているはず、だから大丈夫？

——そんなものは嘘だ!!

誤魔化すのを止めた心が悲鳴を上げる。こんな死に方を私は知らない。自分が死ぬことなんて頭の片隅にでもあつただろうか？ 大切な人に別れの挨拶も出来ぬまま、死んでいく事の悲しみを私は知らない。ギリツと噛み締めた歯が鳴った。

白刃の刀紅桜と、洞爺湖と彫られた木刀が橋の上で相對する。

刀から、うねうねとした触手が似蔵の腕にからみつき、一体化している。名刀と呼ばれた、からくりと刀の融合体——紅桜。

似蔵の振り下ろした刀が橋に大きな穴を開け、その破片もろとも銀さんが川に叩きつけられる。

『おかしいねオイ。アンタもつと強くなかつたかい？』

『おかしいねオイ。アンタそれホントに刀ですか？』

欄干に立つ似蔵の腕に巻き付いた紅桜の侵食が進み、脈打つ。

『……生き物つてより、化ケ物じゃねーか』

水を滴らせながら立ち上がった銀さんの言葉通り、銀さんを追って川に飛び降りた似蔵は、水の抵抗をもともせず、化け物じみた速度で迫り狂う。

一合、二合、鏢競り——死角から放った銀さんの蹴りに似蔵が水しぶきを上げて倒れる。

『喧嘩は、劍だけでやるもんじゃねーんだよ』

倒れた似蔵に、銀さんはそう言うと、馬乗りになって刀を振り上げる。

紅桜から触手が伸び、それに刀を取られた銀さんがバランスを崩す。

『喧嘩じゃない殺し合いだろうよ』

似蔵がバランスを崩した銀さんに刀を振るう。木刀が折れ、胸を切

られ、血飛沫が上がる。
似蔵からの追撃が迫る。
脊髓反射だった。

気がつけば、月の下。バシヤバシヤと水が足を打ち付ける。

冷たい鉄の塊が背中から腹に突き抜けていた。無機物が体の中心を通る、得も言われぬ感覚に、吐き気を催す。

痛みは後からやってきた。気が狂いそうな痛み、生物としての本能的なモノが私を突き動かし、痛覚を遮断する。ブツリと激痛が途切れ、体の真芯を通る刀の気持ち悪い感覚だけが残った。

「キリッ!？」

「キリさん!!」

銀さんと……頭上から新八君の音がする。

しまったなあ……こんな姿を新八君に見せたくはなかった。そう思っても後の祭り。咄嗟に空間を繋ぎ跳んでしまった。銀さんに向かい合う形で、似蔵を背に。向きや姿勢なんて考えている暇はなかった。

「殺し合いに水を指すとは無粋だねエ。それにしても、このお嬢さんはどっから現れたのかな？」

背後から冷たいゾクリとする音がする。触れそうなほど近くにある声。その声が、蛇の様に心に絡みつく。

血を流したせいなのか、心を縛られたせいなのか、体が冷たく動かない。

「離せっ!」

石積みの橋台に押さえつけられた銀さんが私に向かって叫ぶ。近距離で見開かれた目に、本当に時々きらめくのだなあ〜と場違いな事を考えた。

そんな銀さんは、出血量が不味い域に達しているにもかかわらず、なお戦おうとしていた。それを、力を込め押し留^{とど}める。刀の折れた状態でどうするというのさ。

ズブリと刀が押し込まれ、似蔵が力を込めたのが分かった。私ごと

銀さんを刺し貫くつもりだろうか。

届かせない。

銀さんの肩を抑えていた片手を離し、刀を握る。反対の手のひらから伝わる温度が恐怖に抵抗を示す。

「固いねえ。人間かイお前さん」

心底不思議そうに、蛇が舌なめずりするのが聞こえた。

「離せエエエエ！」

体をよじり、銀さんが必死に拘束を抜けだそうとする。足元の水が波打ち、血が噴き出る。だからダメなんだってば。

「動かないで……死んじゃうよ銀さん。大丈夫だから……」

吐息のような声しか出ない。聞こえただろうか……？

銀さんの顔が歪む。そんな顔やめて欲しいなあ……。本当に大丈夫なんだってば。

「後悔しているか？ 以前俺とやりあった時なぜ殺しておかなかったか。俺を殺しておけば桂もアンタも、その嬢ちゃんもこんな目には遭わなかった。全てがアンタの甘さが招いた結果だ。白夜っ!」
何かに察知して、押し込まれてた剣が反転して引き抜く方向に動く。

抜かせない。体の中をミキシングされるような感覚。痛みはないが、逆にそれが悪寒を増大させる。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ！」

新八君の声が空から降つてくると同時に、激しい着水音。

ビチャビチャッと暖かいモノが背中にかかり、刀から力が抜けた。

流石とっておきのもう一本……。

——シュル

全身が粟立つ。咄嗟に背に手を回し、突き刺さった刀を抜き、投げ捨てる。

最低の最低にいると思っていたが、更に最低があった。紅桜に侵食されかけた。

刀が抜けた傷口から血が吹き出て、川面を赤く染めた。

「腕が取れちまったよ、酷いことをするね僕」

「それ以上来てみるオオ！ 次は左手を貫う！」

背後からそんな声が聞こえる。

視界が霞み、限界を迎えた体が崩れ落ちる。血まみれで、少しだけ白さの残った着流しがその体を抱きとめる。

——ピイイイ

甲高い呼び笛の音がする。

「チツ、うるさいのが来ちまった。勝負はお預けだな。まあ、また機会があつたらやり合おうや」

バシヤバシヤという水音に、似蔵が去っていったのが分かった。

遠くなる意識。キリと呼ぶ声。気を失ってはダメだ……。

外傷はそのままに、中身だけを治す。潰れた幾つかの臓器を修復、流れた血液を補充する。

呼吸がし辛く、浅い息に、汗が滴り落ちる。

「……バカヤロー」

そんな声がある。バカヤローは銀さんの方だよ。ゆっくりと息を吐き、意識をクリアに。

顔を上げると、銀さんはなんだか怒るのに失敗した様な顔をしていた。

自分こそふらついてる癖に、なに人を支えようとしてんだか。自分の事すら手に余ってるのに、他人を背負い込もうなんて……甘いんじゃないの？ 銀さんらしいその行動を少しだけ笑い、支えてもらった腕を逆に抱え直す。

「銀さんの手当早くしてあげて」

背後にいるはずの新八君に声を掛け、石砂利の上までパシヤパシヤと進む。

銀さんが抵抗を示すが、その力は弱く、失った血液の量を物語っていた。

「キリさんの方が！」

「私は大丈夫」

やっとたどり着いた岸边に銀さんを下ろす。眼鏡の奥で新八君が泣きそうにしていた。慰めるように頭を撫でようとして、血まみれの

手に気づき、諦める。

一方の銀さんは意識はあるが、体が動かないようで悔しそうな目だけでコチラを睨んでいた。

黒い川面に反射した明かりが近づいてくる。人が集まってきた。行かないと……。

「バイバイ、銀さん。これ返してもらおうよ」

「新八……キリを止めろ……」

「新八君止めた方がいいよ。そんなことしたら銀さん死んじゃう」

「キリさん！」

「銀さんをお願いね？」

新八君の声に心配ないよ大丈夫とできるだけ優しく笑い、手を振る。

川べりを歩き、階段を見つめる。誰もいないことを確認し、座ったそこで体を治療する。

なにもないところから突然現れるようなおかしい現象を見せつけていながら、未だに私は隠したがる。弱いなあ。自嘲するように笑い、奪ってきた鏡を見つめる。

銀さんは咄嗟に庇ったのだ。懐に仕舞ったこんなものを。あの角度は本当に不味かった……。じやなきや、シヨックを受けているとはいえ、咄嗟に飛び出すなんて対応は取らなかった。

バカヤローはお前だ、銀さん。お守りを護ってどうするの？ ゴミじやなかったの？

なんというバタフライ。しでかした失敗に後悔が浮かぶ。

だけど、蹲うずくまってばかりはいられない。

立ち上がり向かうは、高杉の船。

私のデータを取った紅桜は回収しないといけない、どんな化け物になるんだろうか。

薄っすらとした恐怖を抱く。

高杉の船から銃の撃ちあう音がする。きっと神楽ちゃんだ。

走りだそうとしたとき、建物の陰からヌルツと抜け出す影。それは

人影を取り、月の光に照らされ、刀を構える似蔵となった。

紅桜のおかげか片腕の血は止まっている。

「あれで生きてるとは。本当に人間ですかイ？」

「早くその刀をこちらに寄越して」

蛇の様な声と、凍りつく様な殺気が、つま先から頭の先まで舐めるように纏わりつく。

「侍に刀を寄越せとは、だいぶ剛気だねイ。白夜又との続きお嬢ちゃんがやってくれるかい？」

言い終わるか終わらない内に飛び込んでくる。利き腕とは真逆の腕で構える刀。それでも先ほどより速度が上がっている。

威力も！

硬質化させた手のひらで刀を受ける。触手が伸びてくる。振り解き、飛び退る。

「人間辞めてたのは俺だけじゃなかったみたいですねい」

したり顔の似蔵。そんな事言っている場合じゃない！

「それ早く寄越して！ じゃないと」

言い終わるか終わらないかのうちに触手が膨れ上がる。

「ぐっ」

「だからっ!!!」

紅桜は新たな宿主を求める為に、古い体を取り込もうとしていた。

似蔵が目の前で変貌していく。残る片腕を鎌鼬を飛ばし、切り離す。それでも侵食は止まらない。

「だから……言っただのに!!!」

「はっ……ぐっ」

似蔵が触手に飲み込まれ、すぐに見えなくなる。触手に包まれ、ピンク色の繭の様な形になった紅桜は、一度落ち着いたかに見えた。

——ブワッ

突然溢れだす。動揺している場合じゃない！ 伸び狂う触手を切り飛ばしながら、侵食されないよう注意を払い、中心をかき分ける。

そこには——。

全てを諦め焼いた。

斬り捨てられたフラグ

似蔵の事も嫌いじゃなかった。盲目であるが故の焦がれる思いを知っている。似蔵は銀さんに斬られる瞬間、救いを見出し出していたんじゃないだろうか？ 一本の剣として斬られたそこに美学を見い出せていたのではないか？ 銀色の光、それが似蔵を救ってくれた筈なのに。

それを私は……。

かつて約束された未来は、遙か遠く彼方へ行ってしまった。

思いを振り切るようにして、忍び込んだ船内は既に鎮まり返っていた。

鳥を飛ばし船内を詮索する。神楽ちゃんは独房でいびきをかいてぐっすり寝ていた。良かった……。

ここからでもまだ、元に戻せるだろうか？ 脳裏を過るのは、臍物を散らし死んでいった御用聞きと、諦め焼いた……似蔵だったもの。ここで同じ大量の死が始まる。

どうするべきなのか私は……。

未来を知っているのに、何でも出来るはずなのに、無力感しか感じない。

長い夜が明け、船を揺るがす轟音が響き渡る。桂さんの仲間達が報復攻撃を始めたのだろう。

鬼兵隊の連中が取引に使おうと、十字架に縛り付けられた神楽ちゃんを運びだそうとしている。

もう、いいんじゃないか？ 似蔵が死んだ今、ストーリーは戻りようがない。

何も覚悟は決まってくれないまま、私は神楽ちゃんを取り戻す。

「万事屋のマスコットアイドルに対する扱い、ちよつと酷いんじゃないの？」

運んでいた鬼兵隊を殴り倒しながら、神楽ちゃんを奪い取る。

「きーやん!!」

「久しぶり、神楽ちゃん。助けに来たよ」

神楽ちゃんの嬉しそうな笑顔は一切の曇りがなく、今の私には眩しすぎた。太陽の下に引きずり出された化ケ物。そんな自虐思考を振り切り、ワラワラと出てくる鬼兵隊を張り倒す。きりが無い。

ギギギッと軋みを上げ船が斜めになる。慌てて神楽ちゃんを拘束具ごと抱え、壁に走るパイプに捕まる。反応できなかつた連中が廊下の先へ転がり落ちていった。手間が省けた。

「舌、噛まないようにね」

再び船が水平になる。

神楽ちゃんに忠告し、新八君が来ている筈の甲板を目指し駆け出す。

甲板につながるドアをわずかに開け、外の様子をこっそり伺うと、そこは、大勢の人間がいるにもかかわらず、しんと静まり返り、独特の雰囲気にも飲まれていた。

その空気を作り出しているのは、中心にいる——高杉。

ピリピリとした空気が漂う。

高杉の正面には、鬼兵隊に囲まれた新八君と、庇う様に立つエリザベス——中身は多分桂さん——。

その空気を断ち切る様に、高杉の刀が抜かれ、エリザベスが切り裂かれる。

「オイオイ、いつの間に仮装パーティー会場になったんだ、ここは。ガキが来ていい所じゃねーよここは」

ニヤツと獣の様な表情で高杉が笑う。

けれど——。

「ガキじゃない……」

そんな高杉の隙をつき、切り裂かれたエリザベス中から桂さんが飛び出す。

「桂だ」

予想外の人物に硬直した高杉は、そのままに斬られ、倒れこむ。

「晋助様アアア！」

また子の悲鳴が響き渡る。

その悲鳴をかき消す様に砲撃音が響く。似蔵が船を落とさなかつたせいで、未だに砲撃は止まない。

知ってる未来と知らない未来が交差する。

物陰に隠れ、背負っていた十字を降ろす。拘束具を外すと、神楽ちゃんは手首を確認する様に、プラプラと振り動かす。撃たれたであろう傷口もふさがっており、怪我はなさそうだ。

「神楽ちゃん、後は大丈夫だね？」

神楽ちゃんの無事を確かめた後、そう声をかける。見上げた青い瞳は不安に揺れていた。

「きーやん……。どこ行くアルか？」

「熱烈な桂ファンクラブを諫めにだよ」

「ヅラにそんななんいる訳ないネ」

「どこの世界にもコアなファンってのはいるもんなんだよ、神楽ちゃん」

笑って頭を撫でて、神楽ちゃんの不安を消せなくて、「ごめんね」と何度目になるか、もう分からない謝罪を繰り返す。

再び船が揺れる。

「そんな心配しなくても大丈夫だよ。ちゃんと戻るから」

侍にはなれないけれど、出来もしない約束はしたくはない。だから、そう告げた言葉は嘘じゃない。例えもう一度別れる事になって、嘘じゃない。それは誤魔化しだろうか？ ズルい大人の言い訳を知ってか知らずか、「約束ヨ」と神楽ちゃんはようやく笑ってくれた。上空に漂う船を見上げる。止めないとこの船が落とされる。桂さんの仲間が乗る船をどう止めるか。

格納庫に向かい走る。似蔵が乗っていた小型機があるはずだ。

一際大きく船が揺れる。砲撃？ いやこれは、きつと武器庫が爆発した音。確かめるように辺りを見渡すと、遠目に黒い煙が立ち上っているのが見えた。

船が傾く。小型機なんて乗っていたら間に合わない。

上空の船に跳ぶ。

姿を見られるよりも早く、広範囲に電撃を打ち込む。倒れ伏す攘夷浪士達。何が起きたかも分からないままだっただろう。

砲手を失い砲撃が止む。

操縦者を避けてなんて器用な事ができる筈もなく、操縦不能に陥った不安定な船をしばらくの間、固定する。

そうやって何度も同じ方法で転移を繰り返し、すべての船を沈静化させた。

全てが寝静まる船。最後の船だった。辺りを見渡しても、動く影はない。高杉の船に戻らないとな……。足が竦むような、忌避感を感じていた。

鳥からの映像では、高杉の船は既に血まみれで……。そして銀さんと対峙しているのは、むらたてつや村田鉄矢——紅桜の製作者——。大きな声わずらが煩わしいけれど、剣にかける情熱は誰にも負けない、そんなまっすぐな人だった。それ故に……。似蔵という試験体を失った鉄矢さんは、紅桜を自身に融合させてしまった。

想定外だった。似蔵が死んだことで完全に安心しきっていた。唇を噛み締める。救えないのか……。

「兄者アアア、もう、もう止めて!! 兄者の作りたかったモノはこんなものなの!?!」

鉄子さんの泣き叫ぶのような声が響く。

「もっとだ、もっともっていけ紅桜アアア! 余分な物を捨て去るんだ!」

「無駄つってんのが分かんねエのか! いい加減止まれつってんだよ!!」

体の半分を侵食されながらも、鉄矢さんは紅桜に全てを渡そうとする。

素人目でも、似蔵にはるかに劣る鉄矢さんに、銀さんは攻めあぐねていた。

銀さんは……。鉄矢さんが人として意識がある限り、斬れないだろうきつと。

「キリッ!!」

船の中央にあるブリッジ、その屋根の上で、破片を撒き散らしながら銀さんがこちらに気付き私を呼ぶ。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん」

できる限りの軽さを装いながら、銀さんと、鉄矢さん——紅桜——の間に割り込む。

「下がってて、銀さん」

「ぎげんなー!」

「邪魔だからどいてて」

銀さんは私を制しながら前に出ようとする。思わず上げてしまった冷たい声に、自分でもビツクリする。銀さんはその声に動きを止めた。

常に余裕をもって優雅たれだっけ? フォローするように「大丈夫だから、少し下がってて」と柔らかく伝えようとするが、硬さが残ってしまった。

その間にも鉄矢さんの侵食は進む。

紅桜を振るう腕を掴み、固定する。拘束から逃れようと、無理な姿勢を取る鉄矢さんの体からブチブチと筋が切れる音がした。構わず、力任せに抑えながら、介入し、侵食を止める。

「どおした紅桜アアアア!!」

体の侵食が止まったことに気付いた鉄矢さんが、暴れ狂う。

触手がのたうち足場が崩れ、堪らず、鉄矢さん諸共、瓦礫を巻き込みながら下の階層に落下した。

「キリイイイイ!」

銀さんの叫びが聞こえる。瓦礫が崩れ落ちた先にいた武市とまた子を、ドサクサに紛れてなぎ飛ばす。

「きーやん」

「きりさん」

神楽ちゃんと新八君が駆けて来るのが視界の隅に見えた。武市とまた子を相手取っていたのだろう。頑張ったねと褒めてあげたいところだけど、そんな余裕はなかった。

手を離してしまった時に侵食が進んだのか、触手が大量にのたうつ。

埋もれる様に存在する本体を抑える。侵食を止め、電流を流し込み、無力化を図る。

「だけど、紅桜は止まらない。似蔵の姿が重なる。

「くそっ、鉄矢さん聞こえてる!? 貴方の作った刀は凄いいよ、こんなに凄いい刀見たこと無い。でも! 大事な人を泣かせるような刀なんてダメだ」

「そんなことはない! 斬れない刀など意味が無い! 斬れば良いのだ! それ以外大事なものなどない!!!」

それこそが唯一無二の真実であるかのように言い切る鉄矢さんに、殴りかかりたくなる衝動を抑える。

「あるだろ、大事なもの! 命をかけて貴方を迎えに来た人がいるだろ! 私はもう無くしてしまった。無くしてからじゃあ遅いんだよ! 気づけよ、このバカヤロウ!」

神楽ちゃんが、新八君が触手を切り飛ばし、跳ね飛ばし私を護ってくれる。銀さんが、傷口が開くにも関わらず、触手の雨を掻い潜りこちらへ向かう。

その暖かさをなぜこの人は分からないのだろうか。

「もう止めてお願いだから!」

懇願する鉄子さんの声が聞こえる。手を伸ばしても届かなくなっ
てからでは遅いのだというのに。

「貴方を護ろうとして打つ剣は、打った人は意味がないというの!?

斬れなくても護れる物はあるんだってなんで分かるうとしないの!!」

「ギーやん!!」

——ビュッ……ドスッ

「ぐっ……ふっ……」

神楽ちゃんの悲鳴と共に、弾けなかった一本の触手が唸りを上げて脇腹に突き刺さる。

侵食を止め、身体制御を行い……頭上に浮かべた数十の船に力が臨界点を迎える。

焼けつく様な痛みが襲い、そこから逃げ出したいと泣き叫びそうになる。

「だけど……ちゃんと、届けないと……。」

「聞け！ 貴方……はまだ……戻れる。ちゃんと……見て」

口を開けば痛みが遠くなる。

「うるああああ!!」

「兄者アアアア!!」

上から降ってくる白い着物と突き刺さるとぐろ竜を鏢に持つ刀。

届かな……かつた……？

力が抜ける……。視界がブラックアウトした。

AからBへの手紙

目を覚ますと、見たことのある天井だった。
途端に襲う痛みには神経を絞る。

万事屋……？ 白いシートと掛け布団。傷んだ箇所を触ると、包帯のサラリとした感覚がした。

血が足りないせいかな、少しフラツとする。

「キリ！」

「きーやん!!」

「キリさん！」

起き上がると三者三様の声がして、赤いチャイナ服が飛び込んできた。倒れながら抱き止める。

ちよつ、けが人にこれやったら普通死ぬよ!?

「か、神楽ちゃん!!」

「ご、ごめんヨ。大丈夫アルか?」

新八君の声に慌てて温もりが遠ざかる。

枕元に膝をついて神楽ちゃんがこちらを覗きこんでくる。

その心配そうな顔に、大丈夫だよと笑い、頭を撫でる。温かな安心するような、そんな気持ちが湧く。陽だまりの中にまろび出たような、久方ぶりの感覚だった。

「これ痛み止めです、あとコレは化膿止めと……」

再び起き上がると、新八くんがザラザラとお薬を掌に載せてくれた。「はい」と言つて渡してくれた湯のみには、人肌に暖められた白湯が入っていた。

全て私には不要なものだけど、その優しさを断れなくて、飲み干す。

「お久しぶりです」

視線を上げ、空になった湯のみを抱えたまま、柱にもたれている家主に頭を下げた。

「久しぶりたー水くせエな」

「そうですよ」

「ただいまつて言えヨ」

二人の太陽の様な笑顔。銀さんですら、口角を片方上げ、薄っすら笑みを浮かべている。あの日見た、煌きを思い出す。混じることの出来ない、遠い煌き。

「どうかしました?」

新八君がそう聞いてくるが、なんでもないよと笑って返す。

「傷、大丈夫ですか? 痛みませんか?」

湯のみを返すと、新八君は受け取りながら気遣ってくれる。『大丈夫ですか?』その言葉に一瞬手が固まった。似蔵に刺された傷が無いことに気が付いているだろうか……。

「んー。大丈夫。多分? きつと、おそらく?」

恐怖を押し隠しへらつと笑ってみる。

とたん、頭を後ろから抑えられ、わしゃわしゃとかき混ぜられる。何!?

「キリもこういつてるんだ。お前らもう寝ろ。昨日から寝てねエだろ」

続けて降ってきた万事屋社長の声は絶対で、「嫌アル」とか、「もう少し大丈夫です」という声は蹴散らされ、二人は部屋から追い出された。

「何かあったら遠慮なく銀さんに言ってくださいね」

新八君の言葉を残して、襖が閉じられた。

「本当に大丈夫なのか?」

「怪我なら大丈夫」

「そうか……なら良かった……良かった」

布団の傍に胡座をかきながら、銀さんは前髪をバリバリと搔く。

その声にどれだけ心配を掛けたのかが分かった。

「ごめん」

言った後に気付く、何のための謝罪? けれど銀さんはそれに対しても何も言わず、何も聞かなかった。知っている筈の似蔵から負わされた怪我の事も、突然現れた私の事も、なぜあの時、高杉の船にいたのかも。

「……何も聞かないの?」

恐怖に耐え切れず、自分から切り出す。

「聞きたいか、聞きたくないかつたら、聞いておきたい。でもお前が無事であれば、別にいい」

『聞いておきたい』その言葉に銀さんの優しさが詰まっていた。神楽ちゃんを傷つけ、勝手ばかりする私をまだ護ろうとしてくれた。

「銀さん。あのね……怪我治せちゃうんだ私。しかも結構簡単に。似蔵に人間辞めたのかって言われちゃった」

「人間だよ」

「そーだよ。失礼しちゃうなーもう」

へらへらと笑う私に、笑うなど言うだけで、本当に何も聞かない。その優しさに胸が苦しくなる。

「神楽ちゃんや、新八君も知ってる？」

動揺が悟られないように慎重に発音する。

「ああ。神楽も知ってる。傷の手当の時、新八の奴が騒いだからな」

「そっか」

銀さんは視線を逸らさずに、別だんだん大した事ないという風に答えてくれた。

「銀さん……。私には地球がちよつと狭いみたい」

うみぼうず
星海坊主さんにしたのと同じ言い訳。

「テメーみたいなちんまいのが何言ってるやがる」

「ちっこくても夢がいっぱい詰まってるんですよって何言わすんですか」

「テメーが勝手に言ったんじゃねーか」

じつと胸周辺を見てそういう銀さんに、思わずノってしまった。緩む空気に、胸に詰まったつつかえが和らぐ。

「また行くつもりか？」

「……うん」

冬の寒い朝、布団からなかなか抜け出せないように、温かいこの場所から抜け出すのは少しだけ辛くて、回答がワンテンポ遅れた。

一度だけ助けると決めた、私がしでかした何かから生まれた台風から。まさか護るためのお守りがそうなるとは思わなかったけれど、一

度は一度。後は銀さん達の運命だ。それ以上は例え私のせいで何かが起こっても手出しはしないと決めた。それが私のボーダーライン。けれど、必要以上に羽ばたきたくはないから、行こうと思った。その答えに「少し待ってろ」と言って銀さんはタンスを漁りだす。賤別でもくれるつもりだろうか？ その考えはある意味合っていて、ある意味間違っていた。

「ほらよ、お前宛だ」

ほんと投げ渡されたそれは、クッキーの缶。糖分？ 受け取った瞬間、中で紙のようなものがカサリと動くような音がした。外見と中身は違っているようだ。

開けてみるとそこには「きーやんへ」と書かれた色とりどりの便箋が入っていた。「き」の字が鏡文字になっているそれは、差出人なんて見ずとも、神楽ちゃんからの物だという事がわかる。

「これ……」

「ったく、切手も貼らず、宛先もかかねーでどこに送ろうとしてたんだろうなあー。毎回宛先不明で戻ってきやがる。飛脚の連中も困っただろうよ」

開くと、「きようはよっちゃんとかきゆうをしました……」「あしたは山にきやんぷにいきます……」「きのうは銀ちゃんが……」そんな便箋と同じような色とりどりの言葉で綴られていた。けれど、最後は必ず「今度はきーやんも一緒に……」で締めくくられている。

「泣かねえんだな」

それを黙って見つめる私に、銀さんはそう聞いてくる。

「ねえ……私が今泣いたら何の為に泣くんだろう？」

「テメーの為だろうよ」

「そうだね」

何を当たり前の事をというように答える銀さんは、それがそんなに悪い事だとは思っていないようだった。

何度も口にした「ごめんなさい」。改める事ができないその言葉に、怒りもせずこんな手紙を神楽ちゃんは届けようとする。泣く権利なんて私にはあるのだろうか？

「銀さん、私はさ、神楽ちゃんを傷つけたくなくって護りたいと思ってた」

本当は誰も傷つけたく無かった。でも私のせいで似蔵は救われなかった。鉄矢さんは救えなかった。

銀さんは次の言葉を促す様に、黙ってじっと見つめていた。

「銀さんが言ってた『膿を持つ』って意味がようやく分かった気がするよ。感情ってのはスライド写真みたいなもので、連続してはくれなくて、その場その場でちやんとその理由をはっきりと示さないと、後から見たらそれが何から発生したモノなのかわかんなくなるんだ。私はさ……誤魔化してばっかいたせいで、それが今では良くわかんなくなっちゃった。護りたいものがあつた気がする。でもそれは本当は、背負い込みたくなかつただけなんじゃないか？　って今は思うんだ。だからこうして結果的に神楽ちゃんを傷つけることになってしまった」

口にすることで、ぼんやりとしていたものが形を作る。護ろうとした思いは嘘じゃないと思っていた、でも本当は私が存在する事で変わってしまった未来を背負いたくなかつた。ただそれだけだったのかも知れない。

フラフラとその場その場の感情を誤魔化して、痛くない方法ばかりを気にしていた私は、もうそれが何処から来た何の為のものだったのか、分からなくなってしまった。真選組の件も、壊れた銀行の件も、えいりあんも、似蔵も鉄矢さんも……全部全部背負いたくなかつただけなのかも知れない。

田宮の一件を探る内に偶然、帰り道を知ってしまった。結局行き止まりの道ではあつたけれど、なんで私はそれを積極的に探さなかつたのか、もう今は知る術はないと思つた。

帰りたくないから探さなかつたのか、帰れないと知るのが怖かつたからなのか。私だけが分かる普通の物達を探そうと思つた時、子供の時行つた遊園地を思い出した時、私は何を思つたんだろう？　後から推測すると悲しかつたとか、寂しかつたとか、帰りがかつたとかそんな理由が浮かぶけれど、それは粘土を型枠に嵌めて形作る様な行為

で、本当の形を歪めてしまうだけの行為にしかならない様な気がした。

私にはもう何も分からなくなってしまった。誤魔化した代償だと思えば自業自得のそれだが、なんだかとても苦しかった。

「お前は神楽を大切にしてたよ、ちゃんと。見送りに行ったのも、頼まれたのもそーいうことだろ？」

「違うよ、それは弱さなんだよ私の。傷つける事で、傷つきたくなかった」

私には、脳天から股間まで突き抜ける器官なんて存在しない。だから一度決めたことも守れず、フラフラと迷う。何度も呟いた『触れてはいけない』という言葉と、綺麗な煌きその間で迷い、手を伸ばし、つけてしまった傷を埋めようとしただけ。

「前にお前は言ったろ？ 認めないとかなんとかさ。傷つきたくないんだったら神楽を否定すれば良かったんじゃないか？ でもそーしなかった。いつだってお前が否定してたのは、お前の中に存在するものだけで、他人を否定しなかった。それは弱さじゃなくて、優しさって言うんじゃないかな」

優しい人間になりたかった。誰も傷つけない様な優しい人間に。少しはそうなれていたのだろうか。

「優しさかな」

「わかんねーんだったらそうしておけばいいじゃないか」

粘土を型枠に嵌めるどころか、粘土を投げ捨てる様な言葉だけでなく、銀さんがそういうと、なんだか正しくそうであったように聞こえるから不思議だった。

「銀さん。私、寂しかったのかも」

「あ？」

「ちよつと迷子になっちゃってね、神楽ちゃんがあんまりにも優しいから頼っちゃったのかもしれない」

手をのぼそうとした煌き。その理由。

「お前がそう思うんだったら、きつとそーじゃねーの？」

今度はそうだと断言してはくれなかったけれど、そうであった気が

した。

「今はどう思うんだ」

「今は、背負い込みたいとか、護りたいとかよりなんだろう、一緒にいたいって思うんだ。ダメかなあ〜」

優しい人間になりたかった。誰も傷つけない。ほんのり温かい気がするクツキーの缶を握りしめる。

「テメーがそーしたいならそうすりゃあいいじゃねーか。誰に断りが必要なんだよ」

「誰だろう？ 偉い人？」

「誰だよ偉い人って」

「誰だろう？」

「お前……時々電波だよな」

「えー、そうかな？」

「そーだよ」と言われるとそうである気がするかああああ!!! 全力でそれを否定して不貞寝する。

電気をパチリと消す音、布団の合間からこつそりと顔をだすと、襖の間にひらひらと揺れる、白い着流しが消えていった。

命を絆ぐ

窓から差し込む光で自然と目が覚める。

襖を開けると、万事屋は柔らかな朝の光に包まれていた。少し古ぼけたレトロな黒電話、傷だらけのテーブル、わずかにヒビの走った壁、糖分の額縁に、積み上げられたジャンプ。柔らかい光のおかげか、それとも、そもそもがそうなのか、とてもやさしい空気に包まれていた。

ソファで寝る、新八君と銀さん。銀さんの白髪が窓から差し込む光に反射して、銀色に見えた。

L字の指を窓に見立ててその風景を切り取る。赤が足りないなと思っただけれど、その為だけにまだ寝ているであろう神楽ちゃんを起す事はできず、両手を下げる。きつと沢山の機会が今から訪れるだろうから、それを待つことにする。

否応なしに変わっていく未来。背負い過ぎず、逃げ出さず、そんな事が私に出来るであろうか？ 少し前の私であれば、即座に否定していた問題。けれど、この温かな空気と一緒に歩んでいく事を考えると、大丈夫……そんな気がした。

「あれ、キリさん起きてたんですか？ って起きて大丈夫なんですか!？」

身を起こした新八君が慌てる。その声に銀さんが起きて、神楽ちゃんも釣られて起きてくる。

「おはようヨ」

「おはよう、神楽ちゃん」

寝癖がピンピン立っている神楽ちゃんの髪をなでつける。

「お前大丈夫なのか、起きて」

あえて答えなかった新八君の問いを、今度は銀さんが口にする。

少し眠そうな神楽ちゃんの頭に置いた手。その体温が手のひらを伝わって、心臓に届いた気がした。

「大丈夫。ご飯にポンドかけて食べてるから、もうくつついちゃった」
「寝ぼけてんのか？ 聞かなかった事にしてやるよ」

「銀ちゃん、何言ってるアルか、きーやんはいつもこのちよーしヨ」

「ツッコむ気も起きないですね」

見事なダメ出し。止めは新八君が刺してくれた。

「皆酷いなあ。銀さんもボンド食べてる癖に」

「何を……言つて、アレ？ くつついてる。つて！」

自分の胸元を見た銀さんは、次の瞬間驚いた様にこちらを見つめる。払いそこねたいくつかの依頼料代わりだと嘔うそぶき笑う。

「本当に大丈夫なんだ。ねえ神楽ちゃん、今度はいつ野球やるの？一緒に混ぜてよ」

再度そう言つて笑うと、赤い弾丸特急が飛び込んできた。足りないと思つていた赤はとても温かくて、子供特有の甘い匂いがした。

だから……沢山の「ごめんね」の代わりに、「ありがとう」と口にする事が出来た。

傷だらけのテーブルの上に、甘い卵焼きと、白いご飯が並ぶ。

「お前、これからどうすんだ？」

「……今まで通りだよ？」

口の中のご飯を飲み込み、銀さんの問いに答えるが、今までというのがどの事を指すのか、流石に説明不足だったと思ひ付け足す。

「偶に遊びにきてぶらぶらと？ あ、ちよつと玉子焼き!!」

隙をみせた瞬間、神楽ちゃんに三つしかない玉子焼きの一つをかつさらわれた。くそつ……。大きな口に放りこまれる玉子焼きを恨めしげに見つめても、ニシツという笑いしか返つてこない。可愛いなコンチクショー。

「うち来るか？」

諦めて次の玉子焼きを取ろうとした赤い塗り箸が止まる。視線を上げられなかった。こんな時、どういう顔をすればいいのかわからないの？ つて奴？ 笑えばいいと思うよつて言われても、上手く笑う自信がなくて、本当困る。

半分の半分の半分に切つた、黄色い玉子焼きは、茶色の平皿の上でぐしゃつと潰れてしまった。

「大丈夫ですよ、一人ぐらい無駄飯喰らいが増えたつて大して変わり

「ませんから」

「そうヨ。銀ちゃんが無駄飯喰らいなのは今に始まった事じゃないネ」

「ちげーよテメーの事だよ。この胃拡張娘」

ワイワイギャーギャー騒ぎ出す三人が眩しくて、本当に困る。

ようやく自信を取り戻した私は顔を上げる。

「折角だけど遠慮しておくよ。銀さんが私の魅力に惑わされて、うっかりジョイスティック突き立てちゃっても困るしね?」

「生言ってんじやねーよ。そーいう事はあとツーカーカップ底上げしてから言いやがれ」

「ワンカップって言わない所が生生しくて嫌だ。変態」

「男はいつだって変態なんだよ! アレ?」

「自爆?」

「アンタ等朝から飛ばし過ぎだから!! ツッコミ追いつかねーよ!」
傷つけない言葉を選んだつもりだった。それでも、青い瞳は揺れる。

「玉子焼きみつけ」

「あっ! きーやんそれ私の!」

行儀悪く刺し箸で玉子焼きを一つ掠め取る。

「食卓は戦場なんだよ、神楽ちゃん」

そうやってニシツて笑うとようやく笑ってくれた。

でも、そうやって油断していると、無事な玉子焼きを一つ掠め取られて、ぐしやぐしやになった玉子焼きだけが残った。可愛い正義とか言ったの誰だよ……。くそつ。

長々と居座ってしまったが、そろそろ帰る事にする。「今日ぐらい泊まって行けヨ」という言葉に、また明日遊びに来るからと約束し、その言葉を躲す。

長居した分際で言うのもなんだが、あまりズルズル居座ってしてしまっは、出れなくなってしまっそうだから。

玄関に立つ私を、三人が上り框あががまちの上に立って、見送ってくれる。

「本当いいのか？ お前」

繰り返される銀さんの言葉。

そもそもだ、いい年の男女が一つ屋根の下で？ 銀さんがそーいう事はちやんと弁える人で、私がそーいう物の対象だと思われていないとは分かっているが、なんかこう、色々面倒臭そうじゃない？ 世間の目とかさ。

それにさあ……なんだか……混ぜられない。そんな気がした。ここは綺麗で、温か過ぎて、ぐずぐずに溶けて、甘えるだけの存在になつてしまいそうになる。でも、そんな理由は傷つけるだけだから、言葉を半分に分けて崩す。

「しつこいよ、銀さん。えっ、何？ 本当に体目当て？ うわー引くわ。神楽ちゃん、気をつけてね。今だけだから安全なのは」

「わかったアル！」

「ちげーよ！ てめーは、何教えてんだよ!!」

声を上げて怒る銀さんから、ガラガラと戸を開けて逃げ出す。「またね」という言葉に神楽ちゃんが、『万事屋銀ちゃん』の看板の上から手を振ってくれた。

夕焼けが道を染める。赤い道に長く影が伸びる。見上げると赤と青が混じった空に一番星が光っているのを見つけた。

隕石降つてこないかなくと呟いたら、きらりと流れ星が流れた。なんだかとても良いことがありそうな気がした。

——ピンポーン

数日後、約束どおり今日も万事屋へ遊びにきていた私。ヘッドフォン越しにドアベルが鳴るのを聞いた。

私が宇宙むしゅうに行つてる間に、ようやくドアベルは直されたようだ。

「私が出るアル！」

トタトタトタと軽い足音を響かせて神楽ちゃんが駆けて行く。

「なんだよありや、キリがいるからっていい子ちゃんになりやがって」
銀さんがつまらなさそうに鼻をほじくりながら、消えていった廊下

に目線だけ向ける。

「キリさん戻ってきて嬉しそうですね。神楽ちゃん」

和室で洗濯物を畳んでいる新八君がにっこり笑いながらそう言う。私はソファで新八君から借りたお通ちゃんのCDを聞いている。

元の世界で聞いたことあるのは、「浮世のことなんて今日は忘れて楽しんでいってネクロマンサー」収録曲だけだったから、知らない曲がいっぱいあってとっても楽しいです。今度つんぽ——河上^{かわかみばんさい}万斉——にファンレターでも出してみようか。

「銀ちゃんお客さんアル」

そう言って神楽ちゃんの後ろから現れたのは鉄子さん。

耳元でなる賑やかな音も、暖かい日差しもなくなってしまったように感じた。

「×××××」

口だけが動き、聞こえない声に、我に返る。慌ててヘッドフォンを外して居住まいを正した。

「久しぶりだなー」

ジャンプを閉じて、立ち上がった銀さんはソファに座るよう、鉄子さんに勧めながら自身も向かい合う位置に座る。

つまり私の隣へ。

お茶淹れてきますと、新八君は台所へ向かった。

残された神楽ちゃんは、私を銀さんと挟み込む様に腰掛ける。

「あの節は大変お世話になりました」

愛想のないというと語弊があるかもしれないが、いつも通りの無愛想な顔で、鉄子さんはペコリとお辞儀をする。

「世話なんてしてねエよ。勝手にこっちが首突っ込んだだけだ」

そう言って銀さんはペラペラと手を振る。

「それでも助かったのは事実なので、今日はお礼に。色々ありがとうございました、今は元気でやっています。本当にありがとう」

そう言ってくれるのか……。救えなかったのに。

穏やかな雰囲気壊したくなくて、叫びたいのをこらえ、静かに膝の上で手を握る。

「で？ うるさい兄貴の方はいつ退院すんだ？」

「来週頃には退院できそうです。ただ……もう刀を打つことは……」

「生きて……いるの？」

にわかには信じられなくて、思わず言葉を挟んでしまった。それにびっくりしたように、鉄子さんと銀さんがコチラを向く。

「私……殺してしまったと……思って……」

ボロボロ溢れる涙の向こうで、銀さんが慌てているのが見えた。

「わっ、キリさん！ ど、どうしたんですかコレ！」

戻ってきた新八君が、心配そうに身を乗り出す。

「銀ちゃん言っただけじゃなかったアルか!？」

「こ、こういうのは新八お前の仕事だろ」

「どういうことですか!?! ってか何!?! 何の話!?!」

生きてた……生きてたんだ……。

良かった……。

しどろもどろになりながら銀さんが話してくれたのは、銀さんが突き刺したのは紅桜の本体だったこと。

鉄矢さんは救急搬送されて一命を取り留めたこと。侵食がもつと進んでいれば危なかったこと。

片腕をなくしたこと。攘夷志士の内部抗争に巻き込まれた一般人として罪には問われないこと。

最後に鉄子さんから言伝を貰った。

『お前等の言葉届いた。刀は失ったが大事なものは失わずに済んだ。ありがとう』

その言葉にまた涙が止まらなくて、あやすように銀さんが背中を撫でてくれた。

閑話 坂田銀時の独白

埠頭で足を海に投げ出し、一人座るキリを見た時、海に溶けて泡になつてしまふ、そんな物語を思い出した。そのぐらい、今にでも消えてしまふような儂さを持つていた。

神樂がなぜコイツにこんなにも構うのか、その理由が少し分かった気がした。

「何か良いモンでも見えんの？」

泡にならないよう、慎重に声をかける。

「見えますよ。馬鹿には見えませんがね」

その声に反応したコイツは即座に鎧を身にまとい、その姿を一変させた。

返す言葉にすらそれは一切含まれていなかった。『酢昆布の付属品』そう言ったコイツを見ていなければ、危うく騙されるところだ。

振り向けない癖に、そうやってコイツは一人ただ生きていくのだと思つた。だから続けて聞いた問いかけに対しても、否定を返すのがなら不思議には思わなかった。

一部意味の分からない回答が混じっていたがまあ、神樂の友達だしなどその時は聞き流した。

けれど、神樂が旅立った後、その言葉を思い出し、予言？ まさかな？ と考えた俺がいた。

宇宙に行くといったキリ。結局誰にも頼らず一人で旅立とうとするコイツをどうにかしてやりたかった。だから、距離を置き、隠そうとするその感情を引き出すために、あえて傷つける様な言葉を投げつけた。

けれど、怒りも、受けた傷も全て飲みこみ『私は私にとって都合の悪い物の一切を信じない、だから大丈夫なのだ』と笑つた。なんて悲しい考え方なのだろうと思つた。その考えに至る過程を考え、お前に何があつたんだ？ そんな言葉が喉元まで出かかった。

しかしそれを口に出せば、きっとコイツは笑って「何も無いよ」と答え、更に距離を置くに違いなかった。だから、それは言葉でできなかった。

どうにかねじ曲げさせたその考え。

馬鹿だなど笑ってやると、聞き慣れた悪口を口にしながら、どこか吹っ切れたコイツに少し安心した……。

なのに……。

「銀ちゃん……きーやんは一人で行っちゃったアルヨ」

神楽は一人で戻ってきた。一人にならないように乗せた筈の重石は返され、行方の分からなくなったキリに怒鳴りつける事も出来ず、日々が過ぎていく。

「喧嘩じゃない殺し合いだろうよ」

——ガシン……パキイ

「ぐふう!!」

木くずが飛び散り、木刀が折れる。橋台に叩きつけられ、衝撃で息が漏れた。

「銀さんんん!!」

「ぐっ」

新八の叫び声に、痛む体を無視して、立ち上がろうと、力を込める。

——ブシュ

なんだこれは。吹き出す赤い血を他人ごとの様に眺める。

「オイオイ、これヤベ……」

遅れて斬られたことに思い至った。失血から来る特有のダルさ。化ケ物じみた似蔵の強さにそれは致命的だなど思いはするも、それをどうにかする暇などなかった。追撃が来るのが見えて咄嗟に避けようと思った体は不味い方向に捻ってしまい。

終わったな。

そう思ったのに、終わりはこなくて、代わりに自分のものではない生暖かい雨が全身を濡らした。

目の前にはどてっばらに刀を生やした、ここにはいないはずの人物。

「キリツ!」

どこから? どうやって? そんな考えは頭になかった。ただ分かるのは目の前のキリから失われていく血^{いのち}。

救えないものがあるなんざ嫌というほど分かっていて、そんな覚悟なんてとうの昔に出来ていた。

だけど、誰かに護られて、その護った奴が死ぬなんて事は、それがゆつくりと目の前で死んでいくななんて事は——斬られた痛みも、自身の死の恐怖も全て忘れてしまいうぐらいの怖さだった。

似蔵の殺気にあてられたキリは、恐怖でカタカタ震えていて、震えるぐらいならくんじゃねーと怒鳴りつけたくなってしまう。他にも沢山怒鳴りつける理由があつた筈なのに、それすら言えずに失われていく事が怖かった。

死の臭いが濃くなっていく。

「離せっ!」

必死でもがくも、夜兎なんじゃねエかと思うほどの力で抑え付けられる。

押し返そうとした手は血でヌメル。

そのヌメリはどちらの血なのか、混じりあつた血はもう誰のものか分からなかった。ただ分かるのは俺の血よりもこいつの血の方が多いということだけ。

「動かないで……死んじゃうよ銀さん。大丈夫だから……」

笑いながら遺言の様に囁かれたそれが耳障りで、必死で抜けだそうとする体は血を失い、力を失い。

「後悔しているか?」

そう似蔵の台詞に不覚にも頷いてしまいそうになった。後悔なんざ嫌というほどしてきたが、他人に言われて自分の決断を後悔するなんて初めてだ。

それでも、押し込まれる刀をがっちり抱え、届かせないように踏ん張るキリに怒りすら湧いてくる。

そんなことしてんじゃねえ、だから馬鹿なんだよテメーは。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ！」

新八が奴の片腕を切り飛ばす。

刀から触手が伸び、キリを取り込もうとする。

迷わずにキリは刀を抜いた。

一瞬だった。

——ビチャビチャ

人間の体にこれ程までの血があったのかと思うほどの血を流し、倒れこむ。

力が抜け、倒れこんできた身を咄嗟に抱き止める。

もうわずかししか残されていない血が、体温を薄く伝えてくる。

「キリ！ 目を開けろ、寝るんじゃねエ」

僅かばかりに残された可能性。いや、わずかも残されていない可能性を手繰り寄せようと必死で声を上げる。戦場で、依頼先で、数多くの死を送ってきた。こいつがそれに含まれてしまうことが酷く恐ろしかった。

その声が届いたのかわからないが、ぴくりと体が動く。

ぐっと増す体重。遠のく死の臭い。

何をした？

死に体だったはずのキリがぐっと起き上がる。

「びっくりさせんじゃねエ、バカヤロー」

諦めていた自分を誤魔化すために憎まれ口を叩く。

確かに死ぬはずだった現実を覆される。いつの間にか身についた、受け入れる為の儀式的な心の流れを強制終了され、そこで思考が停止する。

そんな事お構いなしに、増した体重に俺がふらついているのに気付いたこいつは、逆に体を支えるように岸に運ぼうとする。

何をやっているんだ？ 死にかけて癖にそんな事してんじゃねエ。

そんな思いで必死に抵抗するが、まったく力が入らない。

失血のせいか、極度の緊張から脱した特有の倦怠感のせいか、五感全てが酷く鈍く、そのせいで現実が遠く感じる。

「銀さんの止血を早く」

新八に預けられる自分の体は相変わらずいうことを聞いてくれる。聞いてくれる。悔し紛れに睨みつける。

「バイバイ、銀さん。これ返してもらおうよ」

そんなものは無意味だという様に、すつと離れていった熱と、懐から盗まれたソレを目で追う。遅れて、ああ、あの時のアレはコレを庇ったからかと気づいた。そのまま行ってしまうとするキリを引き留めるため、重い腕を上げると、スルリとそれを避け、距離を取られる。

「新八……キリを止めろ……」

「新八君止めた方がいいよ。そんなことしたら銀さん死んじやう」

届かない体に必死で出した声も、にへらと笑われ無意味にされる。

「キリさん！」

「銀さんをお願いね？」

そう言つて血の跡を地面に残しながら、手をピラピラ振りながら歩く足取りは不思議と死の不安が感じられなくて。

後ろ姿が消えていくのを見送るしか出来なかった。

高杉の船から連れて帰ってきたキリを見る。

似蔵に刺し貫かれた傷は既になかった。

人間に必要な臓器を幾つか巻き込んで、出血量は致死量に達していたソレは元から何もなかったとでも言うように綺麗さっぱり消えていた。

代わりに、別の怪我をこさえ、こうして寝ている。

俺はこいつに何をした？ 何をしたからこいつはこんなに必死になつて、死に物狂いで他人を助けようとする？ 神楽なら分かるが、俺を護るべき理由なんてこいつにはない筈だった。わずかな接触。それだけでコイツは他人の為に命を投げ出すのか？

人は本能的に自分の身を護る事を優先する。それを覆す場合、自分の身がさして重要じゃないか、それをしても尚、護りたいと思う気持

ちがあるかどちらかだった。

キリの場合、明らかに前者だった。『私は私にとって都合の悪い物の一切を信じない』そう全てを否定する様になった原因が、ここにもゆがんだ跡を残している気がした。

「銀さん……。私には地球がちよつと狭いみたい」

そう呟いたキリに、宇宙へ行つた理由を見た。けれど、それが全てじゃない。なんとなくそう思ったが、やっぱり口にはできなかつた。スルツと手のひらから溢れてしまいそうで。

水の星から愛をこめて

夜風に吹かれて、メリーゴーランドが軋み声を上げる。久しぶりに聞いたキイキイという耳障りな音は、なんだか懐かしく思えた。

馬車の窓から見上げる空は真っ黒で、星がよく見える。

ジェットコースターも、観覧車も、サビつき朽ちた全部が全部、星達の淡い光によって、かつての姿を取り戻す。優しい星の魔法。

人は死んだら星になると皆が言う。けれど、私はそんな綺麗なお伽話を信じる事はできなくて、人は死んだらゼロになるんじゃないかと思っていた。

人体の構成成分は、水、三十五リットル。炭素、二十キログラム。アミノ酸、四リットル。石灰、一・五キログラム。リン……何グラムだっけ？ 後は忘れたけれど、とにかくまあ、人間というのはそれ等が起こすただの化学変化で、脳の動きでさえ、シナプスを通るただの電気信号でしかない。

だから私という存在すらも、その電気信号でしかなく、死というのは、それが途絶えるだけ。

偉大で絶対的な世界で唯一の真実も、実はアナログ的な電流で表現される、そんな陳腐な現実^{リアル}。

私はそれを信じていた。

何の夢を見ていたかは思い出せない。だけど鉄臭い、でも鉄とは違う生臭さの混じった……血の匂い。そんな匂いが、まだしているような気がする。

目を閉じるとはつきりと思い出す。

桂さんが斬り殺した高杉の仲間達。

逆に斬り殺された桂さんの仲間達。

似蔵。

私のせいで救われなかった人。

私が……殺した人。

嫌いじゃなかった。

これを一つつづつ拾って私は背負っていかなくちやいけないと思う

と、とても胸が重くて抱えきれないと思った。

『それまで仲間を皆を護つてあげてくださいね。約束……ですよ』

でも、それ以上の痛みを背負って微笑んでいる人がいる。

「死は……怖いね」

銀さんなら……なんと答えるだろう？ 「そうだな」と慰めを口にしてくれるだろうか？ それとも「それが分かるのは死んだ奴等だけだよ」と、誤魔化さず、いつもの様に正しい答えをくれるだろうか？ けれど私はそれを聞くことはないだろう。

背負ってくれるだろうから。背負ってしまおうから。

私は死んだのか生きているのか、それは分からない。だから死が怖いのか、その正しい答えを出すことができない。

一直線を示す心電図。それが死を意味するのであれば怖くない。だって……その先に温かいものがこんなにもあるのだから。

ねえ、私、死んじゃった？ ここは天国？ それとも……ここは現実？

答えの出ない問題の代わりに、空を見上げ綺麗なお伽話を考える。人が星に向って呟いた言葉はどんどん空に昇って行って、何万光年も旅して……そしていつか遠い未来、星に届く。そしてその返事はまた何万光年も旅して瞬く光と共に返ってくる。

今降ってくる光はいつか誰かが星に聞いた答え。

遠い遠い昔の返事だから、言葉が変わっていて、私達にはもうはつきり聞き取れないけれど、星の光のように優しい言葉が沢山降ってきている。私達が星に呟く言葉は、未来の誰かの為の言葉。

そんな綺麗なお伽話。

今は、そんな陳腐な現実リアルよりは、綺麗なお伽話の方が良いと思う。

コギト・エルゴ・スム。世界は私で出来ている。それは私が信じた物を信じれば良いという、魔法の言葉。

死は怖い……。だけど今は……。

天国と万事屋 モンスターとボール

ピーカンの青空、沸き立つ入道雲、そびえ立つ高いフェンス。
土煙が立ち込める。

遠く離れた赤は二度首を振り、頷く。その顔は目深に被った帽子の影に隠れ、表情を読む事はできない。

これは女の意地を掛けた一対一の勝負。

「きーやん！　いくアルヨ！」

「おっしやこい!!」

——ブンツッ！　ボスンツ

「スリーストライク！　アウトオオオオ！」

「ありや」

「この下手くそおおお!!」

キャッチャーミットを振り返り、見事に吸い込まれた球を見ていると、背後から盛大にツッコまれた。少し小太りな、元かぶき町の帝王よっちゃん。ちなみに今はかぶき町の女王にその座を奪われてしまった。

そんな元帝王が帽子を地面に叩きつけて怒りを表している。もともとが色白なので、怒ると直ぐ顔が赤くなるのが面白い。

現在、神楽ちゃんと一緒に野球中。

「お前これで空振り三振何回目だよ！」

「んー。三回目？」

「真面目に答えてるんじゃないよ！　少しは進歩しろ！　遅いんだよ、もっとバットは短く持て！　飛ばなくてもいいからせめて当てろよ!!!」

指導一本入りました。

いやあく。だってねえ？　野球なんてしたことありませんよ。ルール知ってた事を褒めて欲しいぐらいなんだけど？

「了解キャプテン、次こそは必ず！」

「テメーに次なんてねーよ！ チエンジだチエンジ!!」

そんな言い訳を並べ立てるのも、大人としてどうなの？ と熱意をアピールしてみたが、余計に怒らせてしまったようで、ぶんすかと怒ったよつちゃん、ビシツとベンチを指さす。ところどころ赤いペンキが剥げ、茶色い木目がむき出しになったベンチ。戦力外通告を受けた私は哀愁ただようソコに座る。

カキーンとかつこ良く、左右間？ なんかそんな名前だった気がする場所に球を飛ばしたよつちゃんは、墨を回る。いいなー、私も白いベース踏んでみたい。

「きーやんへたっぴアルな」

よつちゃんの活躍を見ていたら神楽ちゃんが戻ってきた。神楽ちゃんの球は余りにもアレなので、1ゲーム5回までという取り決めがあるらしい。子供も色々考える物ですね。

それに対して、どうせ誰もまともに打てないからと、代打を許された私の立場。世知辛い。

「神楽ちゃんの豪速球を打てる人なんていないよ」

悔し紛れの台詞。

「あれでも手加減してるつもりヨ？ 他の子なら当てるぐらいはしてるネ」

「全力で投げると誰も取れないからナ」と言いながら、木陰に入った神楽ちゃんは帽子をパタパタうちわの様に仰ぐ。どうやら十分に手を抜いてくれてたらしい。神楽ちゃん……そーいう事はいつちやいけないってのが世の中なんですよ。

「くそっ………こうか？ こうなのか？」

ベンチから立ち上がり短くバットを持ち、二三度素振りをする。心なしか、早く振れる様になった気がする。

「脇があめーなあー。もつとしめろー」

「こうか？ こうか!? ん？」

「銀ちゃんー!」

神楽ちゃんが嬉しそうに立ち上がり手を振る。その先には鼻に指をつっこんだ銀さんが、ベンチの裏にあるフェンス、その向こうに

立っていた。いつもの様に着流しから片腕を抜き、気だるげだ。

「銀ちゃんも一発どうネ？」

色々アウトな発言に聞こえたのは、私の脳みそが腐っているだけのだろう。

バットをくるくる回している所を見ると、どうやら野球の誘いらしい。

「俺が打つのは銀色の玉だけだ、白い玉にや用はねーよ」

「なんかわからんけど、白より銀の方がかっこいいアルな。私も銀の玉欲しいネ」

「ダメダメ。銀の玉は大人になってからだって」

「何言ってるアルか。私も立派なレディーヨ！」

「神楽ちゃん騙されちゃダメだからね。かつこ良く言ってるけどそれ単なるパチンコだから」

片方だけ口角を上げ、無駄にいい表情を浮かべる銀さんに、目を輝かせる神楽ちゃん。

『の』を抜けば世界を示す単語になるのにおしいなあ〜なんて思いながら、その会話を見ていたが、耐え切れなくなりツツコむ。

「まじでか！ 銀ちゃんまたパチンコアルか！ 給料ろくすつぽ寄越さない癖に！」

「まあまあ、神楽ちゃん。意外と下手くそだつたりするんだよこーいう人に限って、そーやって誤魔化そうとしてるんだよ。ここは誤魔化されてあげよう？」

何でも卒なくこなす銀さんが野球ベタだとは思わないが、万が一とこの事もある。

私以上の野球ベタを探すべく、神楽ちゃんを宥めながら、銀さんに挑発を飛ばす。

「ばーか、そんな挑発乗るかよ」

しかし、そんな安すぎる挑発は銀さんの鼻息でもって弾き飛ばされる。

その回答に神楽ちゃんは不満そうな表情を浮かべる。

それに気づいたのか、銀さんは抜いていた腕を着流しから出し、頭

をボリボリと搔く。

「だけどもあ……たまにやいいだろう」

「玉だけに？」

「……………」

ツツコミの不在というのは、かくも悲しいものなのか……。

ぐるっとフェンスを回ってきた銀さんは、「代打く坂田銀時く」と自分で名乗りを上げながら、断りもなく、神楽ちゃんが立つマウンドに向かい合う。よっちゃんやその他の子供達は慣れているのか、天パがきたぞーとか、打てく天パくとか声を上げている。

「見せてやる！ 代々坂田家に伝わる一本足打法！」

ホームについた銀さんは、色々怒られそうな事を言いながら片足を上げ、ギツと神楽ちゃんと向かい合う。

なんだかんだと言いながらノリが良い。

「フフン、この神楽にそんなものが通用すると思ってるアルか！ 夜兔秘伝のトルネードハリケンサイクロンジェット大リーグボール……なんたらかんたら魔球を受けてミロ！」

対する神楽ちゃんもノリノリである。台詞はグダグダであるが……。

皆が固唾を飲む中、神楽ちゃん目がキラリと光る。フンツという掛け声と共に放たれる白い球。先ほどの球とは比べ物にならない球速。

「どるあああああ!!」

ミートした瞬間、摩擦で煙が上がる。拮抗する木刀と野球ボール。鈍い音と共にボールが競り負け飛んで行き、ガシャンとフェンスにぶつかる。

「ほーむらん」

格好を付けて銀さんはビシツと木刀をフェンスに向けて指す。何度も言うが『木刀』である。

「ハイ退場く」

審判役の子から退場命令が出た。

「なにやっつてんだよクソ天パ!!! なんでバットじゃなくて木刀で打つ

てんだよおおお!!」

「侍はなあ、獲物をそう簡単にかえたりしねーんだよ、覚えとけ坊主」
「なんだか格好いいことを言っているが、ルール違反はルール違反である。よつちゃんに怒られながら、銀さんもベンチ入りを果たした。」

「こんなところで会うなんて奇遇ですな〜」

「くそっ、子供の癖に頭固すぎだろう。バットだろうと木刀だろうと同じ木じゃねーか。最近の子はゲームばっかやってっから、柔軟性がなくなんだよ」

「いや、銀さんのは柔軟じゃなくてフリーダムって言うんですよ」

「そうやって二人寂しくベンチを温めていたら、マウンドはいつのまにかゲームそっちのけで、いかに神楽ちゃんからヒットを取れるかという遊びに変わった。」

「よし、いつちよ私も練習の成果を見せてやりますかね！ 再び混ぜて貰えそうな雰囲気、意気揚々と席を立つ。」

「列に並び、しばらく待つと打順が回ってきた。」

「きーやんも懲りないアルナ、打てるようにゆっくり投げて欲しいアルか？」

「馬鹿にする様に笑う神楽ちゃん。」

「それを睨み返す私。」

「抜かせ！ 栄光の星に！ 私はなるっ!!」

「よくぞ言ったネ！ それでこそ我がライバルきーやん！ この魔球受けてみるアル！」

「よっしやこい！」

「——ブンツ！ ボスンツ」

「まだまだ！」

「——ブンツ！ ボスンツ」

「くそっ！ 次こそは！」

「——ブンツ！ ボスンツ」

「スリーストライク！ アウトツ！」

「よし！ 皆、私の屍を越えて行くんだ！」

「じゃねーよ!! 何も変わってねーよ!!」

よつちやんの声が響き渡る。まあ、世の中そんなに甘くないよね。

赤焼に空が染まる。

銀さんは頑なに木刀にこだわり、折れた子供達が最後は木刀を許すという事態に……。まったくどつちが大人か分からない。

でも、その御蔭で熱くなつた神楽ちゃんにキャッチャーが二人倒された。ナンマイダー。

そして私は、最後まで神楽ちゃんの球を打てることは無かった。そんなグダグダな野球もどきであつたが、とても楽しかった。

「お腹ぺこぺこアルヨ」

「確かにお腹空いたね」

何を食べようか、バトルロイヤルホストのオムライスも、でにいのオムライスも、ボムの木のオムライスも食べたし。

脳内の大江戸オムライス観光マップに残つた場所を検索する。

「ウチきて食うか？」

万事屋が一件ヒットしました。つて違う。

見上げた銀さんは、神楽ちゃんを首にぶら下げながら「重いんだよテメーは」と言つて「レディーに重いとは何言つてるアルか」と自分の首を締めていた。文字通り締まっているソレは本当に自業自得である。重なり合つたせいで、二人の影はいびつな形を取り、まるで一匹のモンスターだ。

領こうと思つたが、なぜか素直に領けなかつた。

前よりは縮まつたとはいえ、ある一定の距離を保つていた筈の銀さんとの距離。こんなストレートな親切を施されるような距離ではなかつた筈。せめて「どうせまた外食だろ？ 太るぞ」とか、「神楽と比べりゃ一人ぐらい増えたつて一緒だよ、この際纏めて面倒みてやるよ」とかなんとか、上手く浮かばないけれどその辺り。小馬鹿にするか、神楽ちゃんをダシにして誘つてくれるような感じ。

思えば、うちに来るか？ とかなんとかも……。銀さんらしくないっちゃ、らしくない気がする。私が考える様な、世間体がどうのとかそーいう事も、銀さんだつたらちゃんと織り込み済みの筈。それを踏

まえなお誘う事が、なんだか変。

私の知る坂田銀時という人物と、目の前のこの人との行動に差異を覚え、消化不良を起こす。消化しきれなかった何かは、甘いモノを食べ過ぎた時の様な胸焼けをおこし、居心地の悪さを感じてしまう。

「ん〜、たいようけんのオムライス、開店十周年とかで割引今日までだった気がするからいいや」

「またオムライスかよ。お前だけオムライス好きなの」

そんなにオムライス、オムライスしてたっけ？ あーでも昨日会った時、なんかの話題でオムライスを昼飯に食べたとか言った気がする。

一人歩く私の影は、きちんと人型を保つ。

「銀ちゃん！ 私もオムライス食べたいヨ〜」

神楽ちゃんが脅すように絞める首に、銀さんはぐえと声を上げる。

「分かった分かった。今日はオムライスな！ いいから首離せ！」

「ひゃっほいー！」

どうやら今日は銀さんが食事当番だったらしい。

銀さんの首から飛び降りた神楽ちゃんは、嬉しそうに私の手を掴みくるっと回る。

人型を保っていた影が合わさり、なんだか良く分からないものに変わった。

万事屋の夕食メニューを変えることに一役買った私は、途中で道を別れ、どこのオムライス食べようかな〜と再び脳内検索を始める。たいうようけんは昨日行つたし。南極星……まだ行つてなかつたっけ？

行く店を決めた私は、そこへ向かい方向を変える。

もう一度人型に戻った影は太陽を失いかき消える。

パチパチと音を立てて街灯が灯る。二重三重に灯されたその光源により、かき消えたと思つたそれは、影分身を始めた。

馬鹿も風邪を引く

どうも銀さんが風邪を引いたらしい。らしいというか、いつもの様に遊びに行くと、這いずりながら出てきた銀さんが、「悪い、いちご牛乳買ってきて」と死にそうな声で呟き、千円札を渡して倒れた。

いつぞやの、いちご牛乳は万能薬発言を思い出し、「いや、アンタそれ、いちご牛乳で治す気ですか?」と、ツッコむけれど答える声はなく、重症具合に少し引いた。

倒れた銀さんを見ながら、玄関から新八くーん、神楽ちゃんと声をかけるも、誰も返事をしない。放って置くわけにもいかず、一応、断りを入れて上がり込む。

和室に続く襖を開けると、空っぽの布団が一組と、仲良く熱で魔さされている新八君と神楽ちゃん。

銀さんだけでなく、三人お揃いですか……。

とりあえず、引きずってきた銀さんを空っぽの布団に押しこむ。

顔を赤らめている神楽ちゃん、苦しそうな表情を浮かべる銀さん、「眼鏡」と寝言でアイデンティティを主張する新八君。いや、そこまですなくても君のアイデンティティは奪われないよ?

んー……命に別状がないなら、免疫的にも放っておいた方がいいかと判断し、一瞬空を彷徨させた手を降ろす。

改めて手元の千円を見つめる。いちご牛乳で治す気であろう馬鹿は放って置いて……廊下を引き返し、台所を覗きこむ。

カラカラに乾いた流し台、使い込まれたコンロ。当たり前だけけれど、すぐに食べられそうな物なんて存在しない。

薬飲むためにも何か必要だよな? 気の利くキリ様としては、見舞いがてら食料でも買ってあげましょうか、という気になるものもある。

戸を閉める直前に目に入った万事屋。しんと静まり返り、外が明るいせいで薄暗く見える。その落差で強調された暗さに、なんとも言い表せない寂しさを感じた。

階段を一段飛ばしに駆け下り、近くのスーパーへ向かう。

スーパーで必要な物をかごにぶち込んで、レジカウンターに置くと、目の前にはマダオ。今月の仕事先はここかと脳内メモだけして、私自身はイジってやるつもりもなく、素通りしようとした。

それなのに、マダオはそんな人の親切を足蹴にして、「お前はいつぞやのダメ女！」と騒ぎ出しやがった。

「なにこのマダオ臭する人。突然人の事指さして。どういう教育してるんです？ 店長さん」

隣のレジがスムーズに進んでいる分、その対応に少しイラツとした私は、たまたま通りがかった、店長という名札を付けた人に話を振ってみる。

そうすると名札をつけたその人は、マダオをしばき倒した後、お会計を値引きしてくれた。やったね。

『その後、マダオの行方を知る者は誰もいなかった』というナレーションが脳内で流れたが気にしない。例え、折角見つけた仕事が今日限りだとしても、自業自得である。

「お邪魔しますよ〜」

カラカラと音を立てて開けた万事屋は、やっぱり少し寂しかった。薄暗く、冷たい廊下。積み上げられたジャンプの雑誌が、うつすらとホコリを被っている。

返事なんてないものだと思っていた。

けれど、予想に反して「ごほつ……いちご……ごほつ……牛乳……早く……」というなんだか必要性のない事に死力を尽くす、銀さんの返事が返ってきた。

冷たく見えた廊下は涼しげに、ジャンプの雑誌はただのゴミに変わる。

勝手知ったる他人の家。台所を漁り、買ってきたいちご牛乳をコップに移し、持っていく。

銀さんだけでなく、新八君と神楽ちゃんも起きた様で、「銀ちゃんばっかズルいアル」という言葉に、酢昆布を渡す。

新八君には「プリン冷蔵庫入ってるから」と伝えると「僕にまで済みません」と他の二人を見習わせたい程、謙虚な返事が返ってきた。「ご飯たべれそう?」

新八君に確認を取る。

酔昆布をくちやくちやいわせてる神楽ちゃん、「いちご牛乳があれば何でもできるー」と言ってる、脳が病に侵アされている銀ホさんは放っておく。気を遣うだけ損だ。

「なんとかか……あ、でも何も準備してないから……」

「まあまあ、キリ様に任せなさい」

戸惑い起き上がろうとする新八君を布団に押しさえつける。

そうやって再び台所に向った私は、閉めた襖の向こうで――。

「なあ、オイ……。キリつてまともに料理できんのか?」

「なんだか僕……。嫌な予感がするんですが……」

「きーやん、この前、外食食べ飽きた言ってたアル」

「俺、食欲ないって言っておいて……」

「何一人逃げようとしてるんですか!! 僕も! 僕もなんだか吐き気が!」

そんな会話がなされているとは、知る由よしもなかった。

「できたよ」

鍋いっぱいのお粥。神楽ちゃんがいるからこのぐらいの量はきつと必要だと思った。

「やけに早くねえ? 大丈夫なのかよ……」

「見た目はまともですね……あと匂いも」

なんだかコソコソと失礼な発言が聞こえた。

手を滑らせてやろうか……。一瞬そう思ったが、お粥が勿体無いのでその案を棄却する。

神楽ちゃんには鍋ごとの方が手早いだろうと、銀さんと新八君の分を取り分けた後、まるっと渡してあげる。

「まともだ……」

「奇跡的ですね」

何やらぶつくさ聞こえるが、無視する。

感謝しろとは言わない。でも、何も文句を言わずに食べる神楽ちゃんを見てみると言いたい。

「ベチヨベチヨアルなー、もっと固めが私好きネ」

……聞こえなかったことにする。

お腹を膨らませ、満足そうな神楽ちゃんの首筋に手を当てる。今日いっぱい寝ればきつと大丈夫かな？

体温に比べ、少し冷たいであろう私の手が気持ちいいのか、神楽ちゃんは目を細める。

「なんだか今日のきーやん、マミーみたいアルナ」

少し恥ずかしそうに笑う。遠い星で眠っているであろう神楽ちゃんのマミー。その代わりになれたら良いんだけど。

頭を撫でてあげると、うとうとと目を閉じ、やがて寝付いた。

隣を見ると、銀さんと新八君も寝てしまった様で、穏やかな空気が流れる。

川の字で眠る三人。

なんだか良いなー、自分の口角が上がってるのが分かる。や、風邪でダウン中だというのは分かるんですよ？ それでも、この穏やかな空気がとても良いなと思ってしまうのは、仕方ないじゃないですか。

「オイ、お前まで風邪引くぞ」

ふと目を覚ますと、壁にもたれ、私まで寝てしまっていた様で、マスクと冷えピタで顔の半分を隠した不審者……もとい銀さんに起こされる。

涎たれてないよね？ 思わず口元に手をやるが、乾いてるそれに安心する。

「体調どう？」

「まだ本調子じゃねーけど、まあ、なんとかならア」

動きこそ鈍いものの、フラつかずに歩く姿は大丈夫と言えよう。襖の向こうに消えていくのを見送る。

窓の外はそろそろ日が落ちようかというところ。けっこう長く寝ていたようだ。

まだ寝ている神楽ちゃんを見ると、熱はもう下ったようで、手量りだが平熱に戻っている気がした。

「おはようございます。今何時だろう。あれ？ キリさん、銀さんは……？」

話し声に起きたのか、ゴソゴソと眼鏡を探し、かけた新八君は、空いている隣の布団を不思議そうに眺める。

そういえば、トイレかと思っただけに戻ってくるのが遅い気がする。もしかして倒れた？

「さっきまでいたんだけど……ちよつと見てくるね」

「お願いしても……コホツ……いいですか？」

この中で一番重症なのは新八君かもしれない。「もう少し寝ておきなよ」と声をかけ、私はそつと和室を後にする。

ガサゴソと音を立てているのは台所。糖分補給？ そう思って覗きこむと、ダルそうに野菜を切ってる銀さんの後ろ姿が見えた。

木のまな板に打ち付ける音が規則正しく刻まれるのは、流石侍といったところ？ 関係ない？

「何してんの」

「見てわかりませんか？ ガキ共に飯作ってやってんの」

そういえば夕飯までは考えてなかった。

包丁にへばり付いた人参が、コロンとまな板から逃げる。

「私やろうか？」

ダルそうな様子に、バトンタッチを申し出る。

「これ見て任せられる程、俺は勇者になれねーよ」

けれど、銀さんは呆れた様に、レトルトの空パックが、これでもかといつめ込まれたゴミ箱を指さす。短時間で大量のお粥を用意できたマジックの種明かし。

さした指は、逃げた人参をまな板の上に連れ戻し、再び音を刻む。

「柵にあった物を全部買い占め、冷たい視線を潜り抜け帰ってきた私は勇者だと思う」

「その榮譽だけは讃えてやつから、黙って大人しく待ってろ」

誤魔化す為に叩いた口は、叩き返される。や、そりゃね、料理なんて生まれてこの方、一度もした事ないけど、そこそこ味には煩い訳で、つまりなにが言いたいかと言うと。

「味覚は普通だよ、私」

「オムライスばっか食ってる奴の言葉なんて信用できるかよ」

素気なく却下。一昨日、三食オムライスを食べたとか口走ってしまったのは失敗だった。実はそれが三日続いているなんて言った日には、もつと馬鹿にされるだろう。

そう思っている間にも次々と野菜は切り刻まれ、哀れ鍋に投入される。

チチチチツツ……ボツという音を立て、コンロに火が点く。

鍋があたたまる間に、油揚げを刻む。慣れた手つき。

なんだかそれは、彼がここに根を生やし、生きている事を示している様で、フワフワと漂う己と照らし合わせ、不思議な感覚を覚える。

「んだよ」

じつと黙り込んだ私に、眉を潜める銀さん。

「いや、意外とまともだなあーと」

「なに、お前は俺がまともなのが不満なの？ それとも何ですか、鍋でも爆発させて欲しい訳？」

その回答が銀さんにとっては不満だったのだろう、眉を寄せ、不機嫌そうな表情を浮かべる。そうしながらも手は棚をゴソゴソ漁り、見つけた粉末ダシを鍋に入れると、トポトポと目分量で醤油を垂らす。

「そーいう訳じゃないけどね」

曖昧に誤魔化し、醤油が水にじわりと混じる様を見つめる。

「食ってくんだら、飯」

銀さんはその回答に納得したのか、不機嫌を収めて、ゆるりとお玉をかき回す。滲んだ醤油が水と交じり合い、薄く鍋を染める。

「……銀さんってさ、私に惚れた？」

ガゴンとお玉が鍋にぶつかり音を立てる。鍋が揺れ、湯気を立てた汁が、とぷんと縁ギリギリを回る。

危ないなあー。

「……飯の話がどーいう思考回路を辿たどったらそういう回答になんだよ、冗談にしても寒すぎるわ！」

「風邪のせいでもー感じるだけですよ」

「んな訳あるか！ 俺は一遍お前の脳みそを輪切りにしてみてもーよ」

銀さんは激しく抗議の声を上げ、最後は呆れた表情を浮かべる。

ま、そーですよ。私も言っていて歯が浮いた。未だに気持ち悪い。だけど説明がつかないのだ、銀さんが私に対して優しい理由が。

「銀さんが優しくくてキモい」

「なんなのもーさつきから。俺がまともだったたり優しかったりするのがそんなに悪いんですかっ……ゴホッ」

「あんまり怒鳴ると、また熱上がるよ？」

銀さんはため息をついて、「一体誰のせいだと……」とブツブツ言いながら、お玉をやや乱暴に小皿の上に置く

火にかけて鍋を、二人で黙って見つめる。

濁った泡が浮かんでくる。

銀さんは再びお玉を取り、浮いてきた灰汁を丁寧に掬い、水の張った器に捨てていく。

醤油のいい匂いが漂ってきた。

お腹空いてきたなあー。

「ご飯一緒に食べてもいい？」

「勝手にしろ」

銀さんは目線を鍋と器の間で行き来させながら、ため息混じりの回答を返してくれた。

そーいう親切は居心地が悪いというか……。座りが悪いのだが、嫌ではないのだ。

やがて出来上がった野菜のごった煮。神楽ちゃんと新八君を起こし、盛るのを手伝う。

ほっこりとした優しい味がした。

不等価交換

お昼ごはんを食べようと公園に来たら、マダオがベンチに腰掛け項垂^{うなだ}れていた。

「俺はもう何をやってもダメだ……どうせ俺はマダオなんだ……」

そんな声が聞こえる。先日のおスーパーの件が尾を引いているのだろうか。自業自得とはいえ、哀愁ただようその背は可哀想なものがある。

「マダオ、アンパン食べる？」

手に持った紙袋からガサゴソと音を立ててアンパンを取り出し、目の前でプラプラと振ってみる。グラサンの奥に透けて見える胡乱な瞳。見えてるだろうか？

しばらく反応もなく、ぼんやりそれを見つめていたマダオはゆっくり視線を上げる。

「ああああああ!!! お前は!!!」

アンパンを差し出しているのが私だという事に気付いたのか、突然大声を上げる。耳が痛い。

「お前の所為でなあああ！ 折角見つけた仕事がパーだ！ どうしてくれんだよ！ それにな……」

顔を上げたマダオは、どこにそんな気力が残ってたのかという勢いで、捲し立て始める。それを私は右から左へ聞き流し、アンパンをもう一度振る。

「いらなの？」

「誰がお前なんかから！」

ぐうーと情けない音が鳴る。

「いらなの？」

「だ、誰が……!」

ぐぎゆるるるるぐうー。あ、少しさつきよりも長くなった。

「いらなの？ 食べちゃうよ？」

「くそおおお!!」

人として大切な何かをかなぐり捨てたマダオは、アンパンを奪い取

り、泣きながら貪り始めた。今日は機嫌がいいので、その態度も勘弁してあげよう。

マダオの隣に座り、入れてくれたペーパーを使い、紙袋からカレーパンを取り出す。

まだ熱い。

火傷しないようザクツと音を立てて二つに割る。すると、焦げ茶色のルーに混ざり、艶やかな半熟の黄身がとろりと垂れ、食欲をそそる匂いが漂う。

運良く揚げたてに出会えた。運命を感じる。機嫌がいい理由。

脇に置いた、紙袋が風揺れカサリと音を立てた。黒く描かれたロゴは、最近見つけたパン屋さんの物。

木の棚に、飾りつけのない白のプラチックのトレイ。その上に仲良くパンが並べられているそこは、少しボロくて、全然おしやれじゃないんだけど、毎日食べても飽きの来ない、普通に美味しいお気に入り。

「感謝しろよ」

はみ出し、指についたルーをペロツと舐める。

「くそお……こんなしよっぺえアン。パン初めてだ……」

グラサンから流れ出る涙。泣くほど感謝されるとは……。良い事をした後は気持ちが良いなあ。

カレーパンを食べ終わり、ジャムパンを取り出す。

んー、喉乾いたなあ。

手についたパンくずを叩いて、ポケットからお釣りを取り出す。

チャリつという音に視線を動かすマダオ。貧窮してますね。そんなマダオに指令を下す。

「マダオ、飲み物買ってきて」

「なんで俺が！」

「もう一個食べる？」

取り出した、コロツケパンにちくしよーと泣き声を上げながら、自販機に走って行くマダオ。そんなに頑張らなくても、ちゃんと取っておいて上げるのに。

「……ほら、寄越せよ」

「ん、ぐく苦勞ぐく苦勞」

忌々しそうに差し出す、冷たいペットボトルをコロツケパンと引き換えに受け取る。

嫌がらせでお汁粉ドリンク(ホット)とか買われるかと思っただけど、意外と普通にお茶だった。

キャップをクキツと開け、一口飲む。ちやっかりマダオも自分の缶コーヒーを買っていた。まあ、いいんですけどね。

食後の煙草だろうか？ それに火を付けるマダオ。シケモクつてのがいかにもって感じだけけれど、こちらに煙がかからないよう、そっぽを向いて吐き出す姿に、少し認識を改める。

「ねえ、マダオ。どつかにボロい仕事落ちてない？」

「ごほつ！ 落ちてる訳ないだろおおお!! おじさんの姿見てそれ言ってるの!?! 嫌味なの、それ嫌味なの!?! ねえ!」

咳き込み、危うく取り落としそうになった煙草を寸前で手に取り、声を上げる。

「やー、万が一って事もあるしき、一応念の為に。ま、知らないんだつたらいいや、あんがとねマダオ」

お昼も食べたし、そろそろ行こうかな。空になった紙袋を折り曲げ絞り、立ち上がる。

「あのね……そのマダオつての止めてくんない、地味に傷つくんですけど。おじさんこう見えて結構繊細なのよ。長谷川泰三はせがわたいぞうつてちゃんとした名前があるから、そつちで呼んでくんない?」

視線を上げて、半分諦め口調で伝えられた希望。

まあ、最初から名前知ってましたけどね。しょうがないなあー。

「りよーかい、長谷川さん」

「なあ、アンタ名前は？」

酢昆布と答えようとして、真面目にそれを呼び続けられても困るの
で、「キリだよ」そう言って公園を後にする

グラサンの隙間から僅かに見えた瞳は、少し元気を取り戻した様
だった

それにしても、ボロくて楽な仕事、降ってこないかなあー。

長谷川さんと別れた後、バイトマガジン置いてあったよなあーと、近くのスーパーに立ち寄る。

記憶通り、スーパーの入り口に置いてあるそれをパラパラと捲る。んー……どうしようかな。

なんでこんなに職探しに奔走しているかという数日前に遡る。

万事屋のソファア―に座り、銀さんから借りたジャンプを読む私。

「なー、きーやん。きーやんの仕事って何アルか？」

何がきっかけだったのかは知らないが、神楽ちゃんが唐突にそう聞いてきた。

「……借り暮らしですよ」

「狩り暮らしって何するアルかー、狩りするアルかー？ クマと闘うアルかー？」

ねーねーと、顔を覗き込む神楽ちゃんから必死で目を逸し、ジャンプの文字を追う。

ギンタマンやっぱりつまんないよねー、一文字違いなのにどこかの漫画とは大違いだ。わんぱーくの方が好きだわ。

何気なさを装い、神楽ちゃんに背を向ける。

「きーやん聞いているアルかー？ オイ、聞けヨ、人の話はちゃんと目を見て聞きなさいって習わなかったアルかー」

回り込みジャンプを引っ張る神楽ちゃん。負けじと引っ張り返す。能力の無駄遣いそんなタグがチラリと脳裏を掠めるが関係ない。死活問題である。人間としてのの。

「聞けヨおおお!!」

「何も聞こえませんンンン!!!」

大岡裁きと違い、愛情の足りなかった私達の間でジャンプはバリツと二つに裂ける。

これが大岡裁きほんものだったらR21のsprattだ。良かったね! じゃない!

「あああああ!! まだ読んでたのに!!」

「読んでたのにじゃねーよ!!! 何してくれてんだよ!! 後でもつかい読み返そうと思ってたのに!」

「あ……」「いい機会ネ、そろそろ銀ちゃんもジャンプ卒業しろヨ」
「ジャンプに卒業とかねえよ。そーいうのはどっかのアイドルに任せときゃーいいんだよ。ったく」

ジャンプの残骸に悲しみのため息をつく銀さんに、鼻をほじって悪態をつく神楽ちゃん。

「お前等暴れるなら外に行ってこいよ」

そう言つて銀さんは、ゴミ箱にジャンプを突っ込み、ソファーに突っ伏す。あーあ、謝るタイミングを逃してしまった。ここで謝るとムキになって捻くれる姿が目に見えぬ。

どうしたものか、ゴミ箱につつまれたジャンプと銀さんの間で視線を彷徨わす。

「定春、散歩行くアルヨ」

「きやうん」

あ……ズルい。下手人の一人は定春を引つ張つて外へ行つてしまふ。一瞬悩んだが、私もそつとその後を追ひ、気まずい空間から逃げ出した。

という事がありました……。まあ一応あの後時間を置いて謝ったけどさ、いちご牛乳つきで。

でもさあ、よくよく考えたら神楽ちゃんもちゃんと働いてるんだよねえ……。現に、今日は万事屋の仕事があるって行っちゃったし。

働いたら負けとか言つてみちやう？ それで押し通す？

パラパラとまくったバイトマガジンを、棚に戻す。

「すみませーん、ここでレジ募集してるって聞いたんですけど、まだ募集してますか？」

『急募 レジ募集(※時給要相談)』そんな壁に貼り付けられたチラシを横目に、店長と書かれた名札の人を捕まえる。

「ああ、まだ募集してるよ。君土日勤務大丈夫？」

そんな事を言いながら思案する店長さん。どうやらこっちの顔は

覚えてない様で、というかこの人天人だから地球人の見分けがついていないかもしれない。文字通りアンコウ顔の店長はぴよこぴよこと触手を揺れ動かす。

「土日祝日全然おーけーですよ」

「じゃあよろしく頼むよ。実はねえー前の担当者が客とトラブル起こしちゃってさ、本当困ってたんだよ」

それは大変でしたねえーと白々しく相槌を打ち、長谷川さん、貴方の尊い犠牲は決して無駄にはしないと胸の内で手を合わせる。

人は何かの犠牲なしに何も得ることはできない。その真実に従い、私はアンパンとコロツケパンで良心の呵責を相殺し、職を手に入れた。

鬼のパンツはイチゴのパンツ

ペラリと一枚の紙を太陽に透かす。一応決まりだからと書かされた履歴書。真選組けいざつと違って裏付けなんて取るはずもないと、住所、生年月日、その他諸々を適当に書き込んだ嘘八百。

「電話番号……どーしょ」

空白になった住所欄の下の黒枠。流石に連絡先もなしに働くのは無理だろう。携帯電話、そんな精密機器を作れる様な器用な力ではない。たすきに長し帯に短し？ 少し違う？

携帯電話を正規の店で契約しようにも、身分証の提示求められる始末。なんかいい方法ないかなあーとやってきたのが、『地下都市アキバNEO』。江戸一番のからくり街だと聞いて来たんだけど……。

「いいのかな、こんなん売ってて」

アイドル生写真！ とポップが打たれているそこで売られてるのは、真選組の生写真。アイドル？ まあ顔だけはいいからね奴等。明らかに盗撮だと思われる写真が多数吊り下げ売られている。それに紛れ売られている桂さんの写真。なんでも有りなのか。

他にもトモエ5000のフィギュアや、良くわからないアニメのDVDやグッズ。表通りはそんなオタクの聖地と呼ぶにふさわしいもので溢れかえっている。

面白いではあるけれど、私の用事はそこにはない。一本入った通り。そこは表のチャラついた雰囲気を一変しギークな装いを身にまとう。電気コードと精密部品を細かに並べた店舗、ジャンクと銘打たれた箱にコレでもかと突っ込まれたからくり部品の数々。

店員は皆、見て分らない奴はとつとと帰れと言わんばかりにカウンターで部品を磨いていたり、何かを組み立てたりしている。んー……失敗したかなあー。誰か案内役が必要だったかもしれない。

そんな、人付き合いよりも、からくりを愛する人達のお店が並ぶ一角。そこだけは表の浮ついた雰囲気を少しばかり残していた。

「今月分入荷致しました。数量が限られてるので早いもの勝ちですよ」

そう呼び声を掛けてるのは金髪のリーゼント。和柄のスカジャンと金のネックレスが小物臭を増大させている。

箱のなかには大量の携帯電話。スマホはないのか、ガラケーが並ぶ。どれもこれもシヨップで見た携帯よりもかなり高めの金額が設定されている。

「すみませーん、携帯売ってるんですか？」

「おねーちゃん携帯いりよう入用？ いいの揃ってるよ。ここのはどれも買ったら直ぐ使えるから便利だよ」

買ったら直ぐ使える？ 通話料を引き落とすための口座も何もいらないのか？

「購入するのに身分証とか何か必要です？」

「いらない、いらない、そんなの。前払い制の特別な携帯だからね」

分かるだろ？ という風に笑うリーゼント。まあこの際、使えれば何でもいいんだけどね。値段が高いのは通話料が含まれてるって事だからだろうか？

「じゃあこれ一つ」

目についた黒い携帯、それを手にしようとした時だった。

「おお!! キリ殿ではないか!! いや奇遇だなあこんな所で会うとは!!」

バシンと背を叩かれる。いったく。

背中を擦りながら振り向くと、片腕には大量のからくりを抱えた鉄矢さん。あれ？ じゃあ今叩いたのは？ 包帯に巻かれた右腕が半着の袖から顔を覗かせている。

「先達は直接礼もできぬまま済まなかった！ ここで会ったのも何かの縁、是非茶でも馳走させてくれ!!」

「あ、いえ。お礼なら鉄子さんから頂いてるので、それよりその腕……」

「しかし今は師匠に買い物を任されている身……。そうだ一度キリ殿も師匠に会っていかれよ！ 癖はあるが面白い御仁であるぞ」

「いやいや、待って私も用事がって人の話聞いてます？」

「何をしておる、こつちだ」

グイツと手を繋がれ引つ張られる。アレ何このデジャブ。何で銀さんの周りは人の話を聞かない人間ばかりなの？ それは銀さんが人の話を聞かないからだよって納得できるかああああ!! 強引に引つ張られる腕を振り切る事もできず、仕方なしにそのまま連れて行かれたのは道にまでからくりが溢れだした、からくり塗れのボロ屋敷。ここは……。

「師匠!! ただいま戻りました!!!」

「うっせー!! いちいち怒鳴んなくても聞こえんだよ!!」

「がはっ」

飛んでくるスパナで強制的に黙らされた鉄矢さん。奥から聞こえてきたのは、聞き覚えのある声。やはりここは江戸一番のからくり技師、平賀源外ひらがげんがいの工房、『からくり堂』だ。

工房の奥にある生活スペースに招かれた私は、約束通り鉄矢さんが淹れてくれた、苦くて熱すぎるお茶を苦勞しながら啜る。鉄矢さんらしいお茶はお世辞にも美味しいとは言えなかったが、こうやって憂いなく、ちやぶ台を囲んでお茶を飲めるというのは、存外悪くないものだった。

「そうだったか、お主が銀の字の所のな。話は鉄の字から聞いておるよ」

「所というか、銀さんとはまあ友達ですね。鉄矢さんは何でここに？」

「よくぞ聞いてくれっぐはっ!」

「うっせーっつてんだろっが!」

鉄矢さんを容赦なくぶったたく源外さん。人の話を聞かない人間は、強制執行しかないんですね。勉強になった。流石年の功。

ぶったたかれた頭を擦りながら、鉄矢さんは声をワントーン落す。それでも人より十分大きな声であるが。

「これを見て欲しい」

そう言っつて、包帯をスルリと解くと鈍色に光る、義手？

「刀匠としての俺はもう死んだものだと思っつていた……。己のしでか

した不始末故、それで構わないと思っていた。刀を諦め別に生きる道もあると……」

膝の上に置いた手が握られる。

「そんな中、師匠に出会い一筋の光を見つけた。迷ったが、やはり俺は刀を諦める事ができない！ すまない!!」

一歩引き置に頭を擦り付ける鉄矢さん。

「キリ殿には迷惑をかけたと思っっている！ だが俺はどうしても!!」
「鉄矢さん、私は私のやりたい事をしただけだよ。鉄矢さんも自分のやりたい事をやりたい様にしたらいい。それには誰の断りも必要ないよ。それより止めてくれない？ なんかこつちが居た堪れないんで、それ」

大したことをしたつもりはない。たまたま私には私にしか使えない裏ワザが存在していて、たまたまそれを使えるタイミングに居ただけ。だから、そんなに平服されるのは本当に居心地が悪いのだ。

「キリ殿!!」

ガバツと顔を上げた鉄矢さんは熱苦しい涙を浮かべていた。もうなんだコレ、スポ根ばりに熱苦しい。そーいうキャラじゃないんだってば、私。

「刀とか食べられないもんに私、興味ないよ。それよりお茶おかわりくれない?」

「あいわかった!!」

立ち上がった鉄矢さんはどたと急須を持って奥に下がって行く。思わずちやぶ台につつぷす。少し冷たいちやぶ台がほてった頬に気持ちいい。

「照れておるのか」

「うっさい黙れエロじじい」

ニヤニヤする源外さん相手に、口が悪くなるのも仕方ない。渋いお茶はもう一杯呑まないといけないし、源外さんはエロいし、スポ根は趣味じゃないし、もうなんだコレ。

「そーいえば何で鉄矢さんは源外さんの事を師匠と?」

ここに理由は分かっていたけれど、刀匠に戻るのだったら、何で源

外さんを師匠と？ からくりと刀……もう一度紅桜を作るつもり？
いやそんな馬鹿な。熱苦しかったが、下げた頭はそんなものの為に許しを請う頭じゃなかった。

「あの義手は未完成なんだよ。刀を打つにはもうちつと色々必要なんだが……全部自分でやると言つてな。その罪を今一度見つめなおすと」

普通に考えれば、回り道だと思う……。だけど、悪い事じゃない。全てを捨てたのなら、もう一度拾って歩けばいい。銀さんならきつとそう言う気がした。

「それよりお前さんもからくりが必要か？ からくり通りに居たとか……。あそこはお前さんの様な人間じゃあ、探しもんをするのにも苦労すんだろ？ ここで揃うものだったら用意してやるよ」

「忘れてた。源外さん、直ぐ使える携帯電話つてあります？ つて無理ですよ。どーしよう、買いそびれちゃったなあ……」

「直ぐに使える携帯電話なア……あー、それを売っている店員は何か言つとらんかったか？」

「あ、えつと確か、特別な携帯電話だとかなんとか」

「恐らくそれは、飛ばしつってな、闇携帯だ。持っているだけでコレだぞ」

そう言うとき源外さんは目の前で両手を合わせる仕草をする。うわー……危なっ。そんなの普通に売ってたりするんだ。なにそれ江戸怖い。まあ攘夷浪士が潜伏する様な場所だし、ありっちゃありなのか……。

「後で鉄矢さんにお礼言つておこう……」

それは置いておいてじゃあどーしよう。そう悩んでいたら、源外さんは箱の一つを漁りだして白い折りたたみ式の携帯電話を取り出す。

「お前に必要なのはこっちの方じゃねーのか」

「これは？」

「プリペイド式の携帯電話。ちと細工はしてあるが、合法的なモンだ」

「いいんですか？」

「……出来の悪い弟子が世話になった礼だ、持ってけ」

息子が……。三郎さんを思い出す。

そーいうことならと、使い方を説明してもらい、それを懐にしまう。有り難く使わせて貰う事とした。

手にした携帯電話を見つめる。お試しにどこか掛けてみようか。

迷子になつてき、携帯電話持ってたらどこに電話する？ 警察？

万事屋？ それとも……。お家かなあ。

空そらでも言える番号を思い浮かべパカパカと携帯を開け閉め。

そんなことを考えてたら、気がつけば河川敷。初めて土方さんと出会った場所。それはつまりそーいう事で。

「一番繋がりそうとか思っちゃったんだよね」

思わず口に出してしまった、頭の悪そうな考え。馬鹿だなあ。そう思うのに開いた液晶に映るデフォルトの壁紙を仕舞えずにいる。フル充電を示すメモリ、アンテナはきちんと三本立っていて、キャツシユのチャージも済んでいる。

親指が慣れた番号を押し、緑の受話ボタンを押すのを、何処か遠くに置いた頭が眺めている。

『お客さまのお掛けになった電話番号は現在使われておりません』

そんなアナウンスを想定した。けれど聞こえてきたのは……。トルルルルというコール音。

イタ電になっちゃうのかなあ、なんて言おう。定型文はおねーちゃんパンツ何色ですか？ おっさんだったらどうしよう。ブリーフ派ですか？ トランクス派ですか？ 切ればいいのにそんな事を考えてしまう。

繋がったらどうしよう……。なんて言おう。

『はい、万事屋銀ちゃんです』

何たる偶然、何たる奇跡。声に出して笑いたくなくなった！ これはもうネタにするしかないでしょう！ 携帯買って、試しに適当にボタンを押したら万事屋繋がっちゃいましたって！ すごくない？ どんな確率だよ！ って笑ってそー言おうと思ったのに……。しゃがみ込み口を抑える。

『おーい、もしもしー？ 無言電話ですか、今どき古いよそーいうの。もう少し手の込んだイタズラにしてくんない？ こつちも暇じゃないんだからさ。スリーサイズを上から言ってみるとか、パンツの色指定させてくれるとか、あ、これ綺麗なおねーちゃん限定な。おっさんは及びじゃねーんだよ。ねえ聞いている？ もしもーし』

普段電話なんて取らない銀さんが偶然取る奇跡。なんだよコレ、ヤラセですか？ これが漫画だったらご都合主義で読者からクレーム殺到だよ馬鹿！

『もう切るよ？ 切っちゃようよー？ 聞いてますかー？』

聞かないでいいから切れよう！ 口を抑え、頬を伝う何か伝わらないような心のなかで叫びを上げる。どうしろというんだ。私、銀さんのパンツなんて興味ないんだって。

『なあ……お前もしかしてキ』

思わず終話ボタンを押す。馬鹿じゃないの……本当に馬鹿だ。大切なものなんて何も無いと思ってた、だから未練なんてなくて、少し寂しいなぐらい。

大切があるとしたら、後で食べようと思ってた冷蔵庫のプリンとか、最新刊を待っていた漫画とか、クリア直前で止めてしまったゲームのセーブデータとか、せいぜいそのぐらい。それなのに……そんなもの一つ一つがとても大切なものだったような気がして。それなのに、繋がった所で伝える言葉なんて何も思いつかなくて、生きているにしろ、死んでいるにしろ何も何もなくて……。どうしよう苦しい。

まるでそこで石になってしまった様に、このまま苔が生えて、誰にも見つけてもらえなくてそのまま。ぐるぐると思考があちこつちに飛ぶ。悲劇のヒロインにでもなったつもり？ いつまでそーやってんの。そーやってても、何も世界は変わらないよ？ そう言い聞かせても動けずに……。

助けてよ銀さん。

無意識下に求めている物に気づき、自己嫌悪に陥る。何を助けるっていうの？ 帰り道？ それはもうないって知ってるじゃないか、無茶ぶりもいいところだ。銀さんのことだから言えば助けてくれるだ

ろう。それは必死になって、見つからなくても何か道を示してくれるだろう。だけどそんな事して欲しくなくて……。本当……。馬鹿だ。

そう思うのにやっぱり立ち上がれない……。

「何やってんでイお前エ」

降ってきた声は、求めたものとは違って。本当に嫌だ。こーいう姿は誰にも見せたくないのに。取り繕う事ができない。答えられない私。無視して去っていけ、そう強く願う。もう一回ぐらい奇跡を起こせよバカヤロウ。

そんな祈りも虚しく、頭に被せられる黒い上着。掴まれ強引に引つ張られる腕。

「痛い……」

「文句いうんじゃねーよ」

そして、蹴り、押し込まれたパトカー。やがて走りだす。

「気持ち悪い」

「オイオイ、車酔いかイ、吐いたら殺すぞ」

「違う！」

腹いせに運転シートを蹴飛ばす。

「つてーな」

仕返しに急ハンドルを切られた。勢い良く窓枠に頭をぶつけ、痛い。

「沖田さんが優しくくてキモい」

「俺ア、優しくした覚えなんてねーぜ」

「嘘つき」

「嘘じゃねーよ。テメーと違って真っ正直に生きてんでイ。人の嫌がることを進んでやりなさいってかーちゃんに習わなかったんでイ」

沖田さんが言う『嫌がること』というのはそのままの意味だ。

私は、誰にも頼りたくなかった。一人で立てることを証明したかった。

「……知った上でとかサド過ぎる」

「サデイスティック星の皇子様だからな」

紫色の空とネオンサインが窓ガラスに反射する。二重に遠回りを

して辿り着いた万事屋。わざと乱暴にドアを閉める。

「この借り、倍にして返すから」

「期待しないで待ってるぜい」

白と黒のパトカーはそのまま夜の街に消えていった。

階段を上がり戸を開ける。

「今日の夕飯なにー」

「肉じゃが。それより今日イタズラ電話があつてよー」

「えー何それ？ パンツの色聞かれた？」

「聞かれた聞かれた、履いてないって答えた」

嘘つきはここにも一人いた。温かいそこは居心地が良くて傷を癒してくれる。

『総悟!! 総悟!! 聞いてんのか!!』

ポリウムを元に戻した無線から土方の野郎の怒鳴り声が聞こえる。

「あーすいやせん、なんか無線ちよーし悪いみたいで」

それに応える説教をラジオ代わりに車を走らす。偶然知り合いを見つけて、泣いてるようだったから、からかいついでに、その泣きつ面でも拜んでやろうと思った。助けるつもりなんてこれっぽっちもなかった。

それなのにどうしてだか浮かんだ姉上からの手紙。ちつとまじな事をすれば、まじな事が返ってくるんじゃないかと思つたのに、返つてきたのは運転席を蹴り上げる、行儀の悪い足だった。

「可愛くねーの」

『なんか言つたか！ それより今何してんだ』

「迷子送つてたんでさア」

『迷子お!! 嘘つくんじゃないやねー!! どうせまたサボつてたんだろ!』

「土方さん、俺がいつもサボつてると決めつけるのはどーかと思いやすぜ？ そーやって素直な少年の心はぐれていくのであつた」

『テメーの心がいつ素直だつたつーんだよ！ 御託はいいからとつと

と戻ってこい』

切られた無線。情けは人の為ならずたア誰がいったんでイ。全くもって回ってきやしねエ。

江戸に根を下ろし、風と共に生きよう

長谷川さんにも出来るのだからと舐めて掛かったバイト。だが世の中そんなに甘くなかった。意外と覚える事が多く、苦勞する。幸いにして物覚えが悪くない事を自負する私は、大きな失敗をすることなく、なんとかこなすことが出来ている。今後長谷川さんを馬鹿にするのは控えよう、その内、特大のブーメランで返ってきそうだ……。

そんな事を思いながら、バックヤードにある、取り置き商品棚の整理をしていた時だった。

乳白色の液体が入った、おしゃれなお酒の様な瓶。聞きなれない商品名に気になり後ろをくるとひっくり返し、原材料表記を見ると、名称：調味料、原材料：食酢、水、塩、カプサイシン水溶樹脂。んー？ カプサイシンって確か唐辛子に含まれる成分だよな？

「すいやせーん、取り置きして貰ってる商品取りに来やしたあ〜」

「これはこれは、いつもご贖いにして頂いて……」

「長つたらしい挨拶はいいんで、とつとと商品出してくんませエ」

「し、失礼しました！」

店内から聞こえるそんな声に改めて取り置き人の名前を見る。

「店長、そのお客様の商品ってコレですか？」

ダースで揃えられたソレを箱ごと抱えてレジに向かう。あまり待たせると面倒臭いことになるに違いない。だってこれは……。

「お前、何やってんでイ」

「見て分かりませんか？ お仕事ですよ、隊長殿」

沖田総悟。そう書かれた伝票をペラリと剥がし、レジを打つ。

先日の件は不本意な事に違いないのだから何もなかったという顔を作る。沖田さんもそれに合わせてくれているのか、そもそも覚えていないのか、いつものポーカーフェイスでそれを見ている。

隊服を来てこんなスーパーに来る理由なんてさっぱり分からないが、十中八九サボりに違いない。かごの中に入れられた大量のマヨネーズとカプサイシンたっぷりの調味料。この組み合わせで公務だというのならば、真選組は副長の胃壁強化に向けた、新たな修行方法

でも思いついたに違いない。

「領収書、土方で切ってくれい」

「承知しました」

しがたない店員である私はお客様に逆らうことはできない。たんと領収を切る。自腹で自分の腹を痛める土方さんに合唱。あれ少し上手いこと言った私？

割れないように袋に詰める。犠牲者は土方さん一人だいいんだけど……。しばらくは食べ物の出処に注意する事を心に決め、袋詰した大量のマヨネーズと、瓶をカートに乗せる。

「君、お車までお運びしなさい」

へこへこと腰の低い店長に促され、内心ため息をつきながら、カーを駐車場まで押す。勤め人というのは辛いんだなあ。そーいえば昔隣のベッドで寝ていたおっさんが言っていた「仕事が楽ならお金なんて貰えないんだよ。辛いからお金が貰えるんだよ」と。等価交換の法則はこんな所でも働いてるんですね。

駐車場に止められたパトカー、そのトランクに購入した商品を収める。何気なく見えた鞭や鎖が何に使われるかなんて私には分からない。だって私、少女ですからね。

パタンとトランクを閉め、一礼。店に戻ろうとしたらグイツと髪を引つ張られた。痛いのですが。

「お前どうやって戻ってきたんでい」

「何の話？」

痛む頭皮を抑え、振り返ると冷めた目でこちらを見つめる沖田さん。

「宇宙。行ってたんだろい」

「そりや、宇宙船で戻ってきたに決まってるじゃないですか、何言ってるんですか？」

ヘハリと笑うが、薄い瞳はその温度を変えない。紅桜の事件後、気づけば着くようになった監察——山崎退——やまざきひるがね。鉄子さんが訪ねてきたあたりで外れたが、銀さんよりもこちらを重要視した、土方さんの勘の良さには脱帽だ。

誰かに聞いたのか、調べたのか。どういう気まぐれだろう？ 沖田さんが真面目に仕事するとか、明日の天気は槍でも振るのだろうか？「テメーの入国手続書類が一切ねえーんだよ。ターミナルの監視カメラにも映ってねえ。なあ、アンタ本当にナニモンだ？」

周りくどい事が嫌いなのだろう。沖田さんらしいストレート直球勝負。

化ケ物^{モン}だよ、笑って答えようとしたその言葉を飲み込む。

「一般市民ですよ。今はスーパーで働くね」

それ以上の回答方法なんて知らない私は、お決まりのパターンを繰り返す。「運転お気をつけて」そう笑えば、諦めパトカーの運転席に乗り込んだ沖田さんは、そのまま車を発進させる。シートベルト、いいのかなあ〜お巡りさんなのにな。

監察のお陰で桂さんと鉢合わせしないようにしたり、色々と面倒臭かったんだけど。なんでこーも真選組ってしつこいんだろう？ ああ、あれか局長^{トップ}がストーカーだからか。思わず納得してしまった理由にどうすることもできず、必要も無いのにサイレンをならし走って行く。パトカーを見送った。

万事屋から近いという事は、まあ普通に銀さん達も買い物に来るわけだ……。

「何してんのお前」

何してんのブームですか？ ってか私が働いてるのがそんなにダメなんですか？ かがいっぱいに豆パンを詰め込んだ銀さんが不思議そうな顔で聞いてくる。

「お仕事ですよ、見て分かりませんか？」

いい加減飽きて来る。ピツとバーコードを通し、半額の値札を見ながら割引操作を行う。

「今日の夕飯豆パン？」

「しゃーねーだろ。今月ピンチなんだよ」

「今月『も』ね」

訂正を一つ入れ、袋にパンを詰めていく。そーいや私、本当にタダ

飯喰らいだ。袋に入れる手を止める。

「ねえ、銀さん。あと少して仕事終わるからちよつと待っててくんない?」

パンパンに膨らんだスーパーのビニールを銀さんに持たせ、私は手ぶらでその後を追う。歩道に敷かれた色違いのタイル。同じ色だけを踏む遊び。幾何学模様を描くそれは幅が不規則で、時折軽く飛ぶ。

「♪♪♪」

機嫌よく鼻歌でリズムを刻みながら踏み外さない様注意する。がさりと音を立て、銀さんが振り向く。緩んだ歩調に危うくぶつかりそうになる。踏み外すタイル。チャレンジ失敗。赤いタイルはマグマだ。キリは30のダメージを受けた。

「お前働いてたんだなあー」

「何それ、私が働いちや悪いか!」

先週からという期間は敢えて伝えずに悪態をつく。

一度失敗するとどこでも良くなり、普通に歩く。それでもタイルの繋ぎ目を踏まないような悪あがきをするぐらいはいいだろう。

「いや、悪くねーけどさ」

歯切れの悪い銀さんの回答。地面ばかり見ていた視線を上げる。その御蔭で悪あがきすら失敗する。

「じゃあ、その不思議そうな顔はなんなんですか」

「なんつーかさ、お前ってフラフラしてっから、そーいう姿見ると、なんか普通に生きてんだなあーって思った」

普通に生きる。銀さんも私と同じだ。

いつの間にか夕食と一緒に食べることが当たり前になった。

気になっていた、違和感の正体。それは私が外側から見た『坂田銀時』しか知らないわけで、内側から見た『坂田銀時』を知らないから。距離感を測りそこねたのは銀さんではなく、私だ。

刀の届く距離。それが銀さんの世界で、私は私の物差しでその世界観を測ろうとして失敗しただけ。

「銀さんと違って私は一般市民ですから、そりゃ普通に生きますよ」

もう普通がゲシュタルト崩壊を起こしてる様な有り様だけれど、そ

れでも私の普通は私の物差しで測るしかなく、『坂田銀時』の内側に入るなど想定外でしかなく、距離を測り間違えるのも仕方ない。そもそも、三十センチ物差しで銀さんを測ろうとする行為そのものが間違っている。そんな身も蓋もない意見もある。

「それは俺が普通じゃないみたいない方だな、オイ」

「パチンコに明け暮れて、糖尿病一歩手前の大人を普通っていうんですかー、ほうほう」

「そーいうテメーこそ、住所不定の無職じゃねーか」

「無職はこの前までですよ」

マグマ認定した赤いタイルだけはなんだか踏むのが嫌で飛び越える。

「銀さーん、それで何作れるのー」

パンパンに膨らんだスーパーの袋の中身は言われるがままにカゴに投入した食材もろもろ。豆パンはご返却した。マダオ辺りが買ってくれることを祈ろう。

「ハンバーグか、肉豆腐か、ロールキャベツか、その辺」

「じゃあハンバーグがいい」

「新八に言えよ、今日はあいつが当番だ」

は、ん、ば、ー、ぐ。ケンケンパの要領でタイルを踏む。

「お前さつきから何してんの」

「マグマに落ちないゴツコ」

一瞬怪訝な顔をしたが、私が赤のタイルを避けていることに気付いた銀さんは、ああと納得した様な表情を浮かべる。

「危なっかしいから普通に歩けよ」

「はーい」

私は再び、タイルの線を踏まないよう歩く。銀さんはそんな事お構いなしに自分の歩調でスタスタ歩いて行く。私と銀さんは同じだと言っただけ、きっと私と違って銀さんは何の影響も受けずに、ただ自分の信じる道をそうやって歩いて行くのだなと思った。それがなんだか羨ましくて、私も真似して、タイルの線も、赤いタイルも全部無視して普通に歩く事にした。

本来重ならない筈の世界を擬似的に重ねあわせて、私はここに生きているんだと体に覚えこませる。うっかりと道を踏み外さないように。

へびのあし

シトシトと朝から振り続ける雨。傘の先から水滴がつーつと垂れる。わずかに傘を傾け空を見上げると分厚い雲。

こりや午後になつても晴れないなあー。

少し憂鬱になりながら、薄汚れた水たまりを避ける。

バイトは休み。それなのに、雨が振っていれば暇つぶしの手段も限られていて、定例と化した暇つぶし場所、万事屋へと向った。

「ごめんくださいーい」

「勝手に上がれ」

「上がれヨ」

面倒くさそうな銀さんの返事と、神楽ちゃんの返事だけが返ってきた。一つ足りない。

買い物にでも言ってるのだろうか？ この雨の中を一人で？ 手伝ってあげたらいいのに。

けれど、私も面倒臭いのが勝って迎えになんて行かない事に鑑み、まあ、万事屋のお母さんだしなど、理由にならない理屈をこねる。

投げやりな返事の元、勝手に上がらせて貰い、居間に行くと、銀さんと神楽ちゃんは向い合ってオセロをしていた。銀さんがカチャツと白を置く、パタパタと返される黒に、神楽ちゃんの顔が引きつる。

「新八君は買い物？」

迎えに行くつもりは無いが、興味本位で一応聞いてみる。

「ああ？ 知んねエよ。無断欠勤だ。クビにすんぞ……。ったく」

無断欠勤？ あの新八くんが？ いや、神楽ちゃんとオセロやっている場合じゃないんじゃない？ 何かあったのか？ あ、いやでも、何かあったのならそれこそ本当に銀さんはここでオセロをやっている筈はなく……。

「ねエ、銀ちゃん。アネゴもう帰ってこないアルか？ アレから一度もウチに帰ってきてないって……。なんか修行しているから帰れないって手紙がきたんだって」

神楽ちゃんが不安そうに銀さんを見つめる。対する銀さんはいっ

ものごとく、死んだ魚の目で碁盤を見つめながらダルそうに、カツカツと白黒の石で机を叩く。次の一手を考えているのだろうか？ それとも別の何かを？

「花嫁修業。嫁ぐ前に色々勉強しなきゃならねーんだろ。なんせ柳生家つちや名家中の名家だからな、玉の輿だよ」

カチャと石を置いた銀さんは、「肩凝った」といいながら、いつもの椅子をギシツと軋ませ座った。その隙に神楽ちゃんが、パタパタとルールを無視して白を黒にひっくり返す。

妙さん、花嫁、柳生家。あーこれは例のアレか。

柳生九兵衛——九ちゃんからお妙さんをぶんどるお話。ようやく思い至ったそれに、しまったなと一人焦りを浮かべる。先日の豆パン、フラグだったのかあー。気づけなかったそれを回収してしまった事に不安を覚える。そう言えばこの前、どつかの料亭の屋根直すって言ってたから、あれがバブルス女王の件だったのだろう。

オセロの碁盤を全て黒にした神楽ちゃんは、満足気に笑うがその笑いに無理が混じっている気がした。

雨の音だけが響く万事屋。

「ジャンプ買ってくる」

もう一度椅子を軋ませ立ち上がった銀さんはそう言って出て行った。

ソファアーに放り投げられた今週号のジャンプ。

「ちよつと散歩いってくるアル」

「雨、面倒臭いアルなー」と先程までため息をついて、窓の外を見ていた神楽ちゃんが出て行った。

私はどうしょ？ 結論を知っている身としてはどうしたら良いのか。

参加するには人数の問題があるし、大体わざと負けなきゃいけないようなもんに手出しもできない。銀さんがいるんだし、私なんて手出ししなくてもきつと上手に纏めてくれる。頭で考える言い訳のオンパレード。

だけど……。プリン一つに申し訳無さそうな顔を浮かべる新八君。

いつもこんなのでごめんなさいと言いながら、質素な夕飯を作ってくれる新八君。美味しいお茶を淹れてくれる新八君。

「私にも……何かできることあるかなあー」

感情のままに、一歩だけ進めた世界。

かつて観光目的に辿った道を、記憶を頼りに歩く。石積みの階段、大きな門構え。

けれど記憶と違い、他者を拒絶するかの様に閉ざされていた門は大きく口を開けていた。

もう、始まつてるのか。二段飛ばしで階段を駆け上がり、門の影から中を覗き込む。

近藤さん、土方さん、沖田さん……銀さん、神楽ちゃん、新八君。間違いなく、みんな揃っている。

帰ろうか、一瞬そんな事を考えた。

「ギリさんまで！」

新八君が振り向きざまに、柳生流の門下生を倒す。

見つかつてしまつては仕方ないと諦め、徒手空拳のまま、新八君の後ろから襲いかかってきた門下生の腕を取り……足を払い転がす。今一イケてない。

でも、鳩尾やら顔面やら急所を狙って大怪我をされても困るし……。力任せに投げ飛ばして、固い地面に打ち付けて無事かどうかの判断もつかない。手加減も効かない。しまったなあー。やっぱ来なきや良かった。

横を見ると、神楽ちゃんが、傘で相手を受け、力任せに吹っ飛ばしていた。

銀さんも危なげなく、相変わらず、どうやったらそうなるのか分からない動きで相手を翻弄し、倒していく。

その動きを真似しようかと、見つめるが直ぐに諦める。一朝一夕でできるもんじやない。

「テメーなに、サボってんだ！」

仕方なく奪いとった刀で、避けたり受けたりしながら誤魔化していたら、とうとう土方さんに目を付けられ怒られた。

「生理痛が酷くて」

「オイイイ！」

「三十路のおっさんが顔赤らめない。キモいよ」

「赤らめてねえーし！ まだ三十路じゃねエエエ！」

ツツコミと共に五、六人まとめて吹っ飛ばす。

「流石副長殿、やりますねえー」

「だからテメーも働けよ!!」

「か弱い乙女なんで、こーいう荒事は少し苦手で……」

「さつきと言ってることちげーだろうがよおお!!」

そうやって土方さんをからかいながら誤魔化すうちに、柳生流はその数を減らしていく。

そして残った手勢も敵わないと悟ったのか、伸された仲間を背負い退いていった。

「なんで……」

新八君に、近藤さんに理由を問われ、皆それぞれ捻くれた言い訳を口にする。温かな思いが、信念が伝わってくる。

私は……明確な理由なんて見つけきれなかった。それでもここに来てしまった。それは理由になるだろうか？

「銀さん」

それぞれの言い訳に答えるように、呟かれた新八君の声は少し震えていた。

「僕は、姉上が幸せになれるならだれだって構やしないんです。送り出す覚悟はもうできています。泣きながら赤飯炊く覚悟はもう、できています。……僕は仕方ないでしょ。泣いても……。そりや泣きますよ。でも……泣いてる姉上を見送るマネだけは、まっぴら御免こうむります。僕は姉上にはいつも笑っていてほしいんです。それが姉弟でしょ」

雨でごまかせない涙を流しながら悔しそうに語る新八君……。

ちらりと沖田さんを見る。相変わらずのポーカフェイスでその考えは読めないけれど、人一倍自分勝手な言い訳裏には、ミツバさんへの思いが隠されてるのではないかと、そう思った。笑った姉上を送り

出す。叶わない願いにこの人は何を思うのだろうか。

「銀ちゃん、アネゴが本当にあのチビ助に惚れていたらどうなるネ。私達、完全に悪役アル」

「悪役にや慣れてるだろ。新八覚えとけよ。俺達や正義の味方でも、テメエのネーちゃんの味方でもねエよ。テメーの味方だ」

少し惑うような神楽ちゃんの言葉。

けれど、銀色の侍は相変わらずの調子で、一寸の迷いもなく先陣切って歩いて行く。

その後ろに見える気がした真っ直ぐな道。

皆好き勝手な事を言いながら、その道に続いていった。

一人取り残された私は……私も私の味方になっていいのだろうか？

「ぼさつとしてんじゃねーよ」

「あ、うん」

飛んできた銀さんの声。良く見ていらっしやる。

けれど、それはその迷いすら見透かされている様で、振り切る様に迷い戸惑う足を一歩進める。

侍に成り切れない私は、侍の作った道を歩く事で侍に近づこうとした。

道場の戸を開けた瞬間、卵かけご飯が飛んできた。

一番槍に名乗りを上げた神楽ちゃんはモロにそれを被り、服に生卵が垂れる。

「オイ、チャイナ股から卵たれてるぜイ。排卵日かい？」

何かが切れる音がした。怒りに任せて頭を掴まれた沖田さんは、神楽ちゃんにぶん投げられる。沖田さん……意外と後先考えないよなあー。

投げられた先にいるのは、東条さん、北大路さん、西野さん、南戸さん。柳生流四天王の面々。

そのまま、四人に沖田さんが人質に取られてしまう。

「……オラ、獲物捨てな。人質が……」

南戸さんが言い終わらないうちに、一斉に沖田さんに向かって武器を投げ放つ、皆。

真剣が含まれてるのに、躊躇ない。沖田さんはこれを期に、少し日頃の行いを改めるといい。大量購入された調味料を思い出す。

私は後が怖いので徒手空拳を理由に何も投げなかつた。大量のアレが既に使い切られたとは思えないし。

ギャーギャー騒ぐ皆を一步離れて見ていたら、入り口に人影が差す。

黒い絹のような髪、白い羽織。凜とした佇まい。空気が変わる。『清廉』そんな言葉が浮かんだ。

九ちゃんだ。

「やめろ！ それは僕の妻の親族だ。手荒な真似はよせ」
「若!!」

その言葉に沖田さんがこちらへ返される。

土方さんから飛ぶ小言に耳に指をつつこんで聞こえぬフリをする沖田さん。悪びれない飄々としたその態度は暖簾に手押し、糠に釘そんな言葉が相応しい。

私はその姿を見ながら、そつと姿を消す事にした。私にできることは、ここには無い気がして……。

広い屋敷。いや本当に広い。東京ドーム、行ったことないけど、それと比較してもいいぐらいに広いのではないだろうか？ 鳥を飛ばし、自身の足でも探しまわり、ようやく見つけた離れの奥座敷。

「こんにちは、お妙さん」

障子を開け、中を覗き込む。

ヒツクリ返された机、爆心地と揶揄された料理の数々。見渡すと敏木齋さん——九ちゃんのおじいちゃん——はいない様で、もう出た後なのだろうか？

茶碗を拾い集め、荒れた部屋を片付けていたお妙さんが顔を上げた。

「あら？ 貴方は確か……」

「キリです。いつも新八君にはお世話になってます」

何度か顔を合わせた事はあるけれど、直接話をするのは実は初めてだったりする。

「なんで貴女がここに？ まさか忍び込んだんじゃあ」

「まあ、色々。大丈夫ですよ、ちよつとした裏技使ってますから」

心配そうに落とした眉にヘラリと笑う。その言葉に、「変な人」と、優しく笑うお妙さん。

強いなあーと思う。

「まあ、汚い所だけど、上がってちようだい」

そう言って部屋の片隅に置かれた、被害を受けていない座布団を払い、出してくれる。

「それじゃあ失礼して」

座ると、机を元に戻し、お茶を淹れてくれた。恐る恐る口をつける和一応まともな味だったので、ほっと一息つく。

「どうしてこんなところ？」

開け放たれた障子から見える庭を眺め、優しく問いかけるお妙さん。

「散歩してたら、ついうつかりと迷い込んでしまいました」

何か助けになりたかったけれど、できる事が見当たらず、ついつい顔を覗きに來ました。

そんな心情を暴露するのはいささか情けなくて、へらりと笑い誤魔化する。

「ふふっ。帰りは迷わない様にね」

けれど、お妙さんは、そんなあからさまな嘘も、弱さも全部笑って受け止めてくれた。

「ねえ、新ちゃん……新八は元気にやってますか？」

ほんの少し、影が混じった笑い。元気でやっていますよ。そう答えようとして、一つ思いつく。

「お妙さん……もし、ですよ？ もし過去に戻って、一つだけ何かをやり直せるとしたらどうします？」

唐突な、質問とまったく関係のないその言葉に、お妙さんは戸惑いを浮かべるが直ぐに強い笑いを浮かべる。

「そうねえー。近藤さんに尻毛ゴリラは愛せませんと言いつつかしら」

「お妙さん……私が言いたいのは……」

「キリさん」

優しく強い瞳が、諭すようにこちらを見つめる。

「過去というのは現在に続く大切なものよ。その御蔭で今、私はここにいるの。だから、今更それをどうこうつてのは特に思わないのよ」

「……強いですね」

「私は全然強くないわ……」

全てを受け入れ強く生きる人だ……。そう感じた。

「お茶ご馳走様でした、そろそろ行きますね」

「そうね、見つかったら大変よ。気をつけて帰ってね」

「新八君、元気にいつもどおりにやっています」

「そう、良かった」

閉じられる襖。最後に見た笑顔だけは、嘘の混じっていない本当の笑顔だった気がした。

「銀さんみーつけた」

迷いながら歩いた屋敷の一角。母屋から離れた別棟の台所で、何かを探している銀さんを発見した。

人様の家の冷蔵庫を勝手に開け、首を突っ込んでいた銀さんは、私の気配にその首を冷蔵庫から引き抜き振り向く。

「なんだお前か」

けれど、それが私だという事を認識した銀さんは、冷蔵庫を閉じ、茶筌を漁りだす。

「何探してんの？」

「糖分」

「さいですか」

銀さんらしい回答に笑いながら、その姿を見つめる。銀さんは……

戦わないのだろうか？ 九ちゃんが女の子だと知っているから？
見えない未来に不安はないと言ったら嘘になる。けれど平気だと今は信じている。

「お妙さん元氣そうだった」

「そうか……」

一瞬止めた手。節くれだつて傷だらけで、お世辞にも綺麗とは言えない手だけれど、沢山の物を護ってきた手。私の知らない沢山の傷跡。それが信じるに足る証拠^{あかし}。

一緒に糖分を探してあげるために、下段の飴色の引き戸を開ける。

「お前、何で参加しなかった？」

逃げ出したことを咎めるような響きは混じっていなかった。単純な疑問なのだろう。

銀さんはその身長をいかし、上の棚を探る。

「んー。生理痛が酷かったから」

「バファリン飲んでけ」

「薬ってなんか飲むの躊躇するよね」

「わがままだなテメーは」

結果が同じでも、押し付ける行為がどうしても正しい事だとは思えずなくて、皆の思いを知っていながら逃げ出した。

それを誤魔化す為のあからさまな言い訳を、銀さんは否定することなく、しょうが無い奴だとも言う様に笑ってくれた。

「ねえ銀さん。私にできる事、一つ見つけたんだ。でもそれが正しいかどうか分かんない。誰も求めてなくても、それを押し付ける事は正しいかな」

「正しさなんて人に聞くもんじゃねーよ。テメーがそうしたいなら、そうしりゃーいいじゃねーか」

「……」

思わず黙りこんでしまった。私は……どうしたいのか？ どうすべきなのだろうか？

「ただ、まあ……覚悟がねえーならやめておけ」

手を止め銀さんがこちらを向くのを視界の隅に捉える。ガリガリ

と頭を掻きながら付け加えられた言葉。

覚悟、背負い込む覚悟は未だ決められない。侍にはなれない。

そして、エゴの押し付けを肯定する理由も見つけられない。宇宙に行った時はそれが正しい事だと信じていた、でも今はもう……。

混ざれないそう思った、あの時の判断が今正しかつた事を認識する。混ざってしまったえば綺麗な煌きが濁ってしまう、そんな妄想。

「……なあお前は」

灰色の目がじつとこちらを見つめている。

何かを言いかけて、それは言葉にならずに消える。口の回る銀さんにしては珍しく、私は黙ってその続きを待つが、銀さんは諦めたようにそれ以上何も言わず、再び糖分探しを開始した。

「饅頭発見！」

引き戸の奥、お茶っ葉の袋に紛れ見つけた箱を取り出す。

「お、いーもん見つけてんじゃねエか」

まるで、それが自分の口に入る事が当たり前の様に、ニヤニヤ笑う銀さん。

「ねえ、銀さん……やっぱやめた」

「あ？」

「食べ過ぎに注意してね、血糖値上がっちゃうよ？」

一瞬細工しようかと考え、取りやめ、そのまま渡す。信じているから。

腐った豆パンを食べてトイレに引きこもる本来の道。それから逸れた道筋。

「じゃあ、私行くね」

「オイ！」

「大丈夫、また後でね」

侍の道は、侍に任せ、何も見えない道を一人で歩く。それが強さだと信じて。

銀さんと別れ再び歩く柳生流道場の敷地。鬱蒼とした木々、時折、羽虫が横切り、鳥の鳴き声すら聞こえる。

一見平和そうなその奥。

「はっ!!」

「がっ……!!」

交差する黒と白。ガンツ……ガリツと木刀が打ち合わせられ削られる音が響く。

防戦一方の土方さんと、超人的とも言える剣速で相手を翻弄する九ちゃん。

額から流された血、打ち付けられた青あざ、荒い息。それらは全て土方さんの物で、九ちゃんはその白い羽織を汚すことなく立っていた。

ザリツとわざと足音を立てて近づくと、双方気付いた様で一瞬だけこちらに目を向ける。

「こんな所でどつき合いとは若いっていいですねー。青姦？ 私も加えて3Pのマニアックなプレイに挑戦しませんか？」

「巫山戯た事を！」

「テメーは自分で何口走ってるか良く考えろよおおお!! くっ」
軽口を叩くがまったくもって手は止まってくれない。

私と違って、二人共無駄がなく、綺麗な剣筋をしている。

「あーあ、フラレちゃったってことで、2Pですかね。土方さん少し眠っててくださいね」

間に割り込み両手で双方の木刀を受け止める。

「なっ」

「テメーっ……」

九ちゃんの瞳が未開かれ、土方さんから鋭い視線が飛ぶ。込められる力を受け流し、木刀を受け止めていた手を離す。

地面に叩きつけられる刀。

再びその刀が上がる前に、土方さんに電撃を打ち込む。

「おまつ……」

ずるつと倒れこむ土方さんを受け止め、そつと寝かせ、皿を割る。これ以上の戦いは意味が無い。とは言え……倒れこむその前に見た瞳は怒りに満ちていた。後が怖いなあーとぼやく。

「なんのつもりだ」

「少しお話しません?」

切っ先を油断なくこちらへ向ける九ちゃん。

敵意がないことを示すために両手を上げると、ゆっくり刀を下ろしてくれた。

「ねえ、九ちゃん」

「どうして僕の名を……それに君は」

「九ちゃんの名前は……あー、お妙さんに伺いました。私は新八君に色々お世話になってる身で、キリと言います。今日は付き添いみたいなもんです」

うっかりしていた。それっぽい言い訳を口にしながらチラリと土方さんを見ると、納得した様な顔をしていたので大丈夫だろう。

「私は刀で語るとかそういう器用な真似は出来ないので、普通にお口でお話にきました」

へらりと笑う私に、怪訝な表情を浮かべる九ちゃん。

「私は、正直、愛とか恋だとかさっぱり分かりません。何それ美味しいの? って感じです。でも、本当に好きだったらこういう手段じゃなくてきちんとした形で、向き合って、妻問いするのが正當なんじゃないかなあーって私は思うんですよ」

「違います?」と笑う私に、鋭い視線を向けてくる九ちゃん。

「君に何が分かる!」

「偉そうにいえるような事は何も知りません。でもこの行為が間違ってるってのは分かります」

私は何も分かっているわけではない、九ちゃんの思いを汲める程、人生経験がある訳でもないし、話は知っていても、それは表面上の事で、こうやって向かい合うと伝わってくる熱気や、信念そういったものは何も解っていないのだ。

それでも……影を落としたお妙さんの顔。これが正しいとは思えない。

「九ちゃん……私は何も貴女の思いを否定しに来た訳じゃないんです」

「……」

侍はやはり刀でしか語れないのだろうか。揺らがない瞳に諦め、一つだけ私に出来る事を問いかける。

「九ちゃん。もし過去に戻って、一つだけ何かをやり直せるとしたらどうします?」

お妙さんに問いかけた問答を繰り返す。

「僕は、僕のやったことを後悔したことはない。だからその質問は無意味だ」

九ちゃんも強い人だ。私が立ち入る事のできない、絆。眼帯に覆われた古傷。

エゴイズムの元に癒やそうとした傷。

一切の迷いを含まない答えに、物理的にできる唯一の手段を封じられ、私はなす術なく敗退した。

「ありがとうございます。色々済みません。あ、土方さん預かっていきますね」

このまま放置して、地面と顔面をヤスリがけされるのも少し可哀想なので、拾っていく。

「僕も聞いていいか? 君は強い。なんで参加しなかったんだ?」

悔しそうに見つめる目は、強さへの憧憬か……。誤魔化しだらけの私に向けられるその視線は居心地が悪くて、土方さんを抱き起こす事にかこつけて、その視線から逃れる。

「私なりのルールがあるんですよ。よっこいしょつと。それと私は強くないよ……」

道に迷い、何一つ決めきれない心。剣筋もクソもない滅茶苦茶な剣。それが私の持つてるもの全てだ。強さなんて一滴も混じる余地はない。強さを手に入れたなんて勘違いだ、未だに私は独りで立つことすらできやしない。

そんな考えを振り払い、土方さんを抱き上げる。

お姫様だっこって身長差があると間抜けだね。特に男女逆だと。

「私は九ちゃんの事、かっこ可愛い素敵な女の子だと思ってるよ? だから今回の事は別として応援してるから」

「驚いたような顔をする九ちゃんを後に、土方さんを連れて母屋の方に歩いて行く。」

「土方さん!?!」

こちらを向いた新八君が、驚いた様な表情を浮かべる。傍に立つお妙さんもその声に、顔を僅かに上げてこちらを見る。

目尻に僅かに浮かぶ涙。誰も泣かせたい訳ではないし、その涙が必要なものだなんて言うつもりもないけれど……。

迷いのない黒い瞳を思い出しその考えを振り払う。

「ごめんね、私がやっちゃった」

「何してんのおお!?」

「ごめん、ごめん」

鋭いツツコミが返ってくるが、それも笑って誤魔化した。

縁側に土方さんを下ろし、改めて新八君に向き合う。

「そうそう、新八君。九ちゃんが可愛いからって、あんまり虐めちゃ駄目だよ? 好きな女の子虐めて許されるのは小学生までなんだからね」

「知っていたの?」

「どういうことですか姉上!」

お妙さんの言葉に、声を荒らげる新八君。

「そういう事だ……」

玉砂利を踏みしめる音に振り向くと、木刀を片手に、九ちゃんが立っていた。

「オイ、左目ってどういうことだ! それに女って……」

激昂した新八君が九ちゃんに突っかかる。

どう話を振ろうかと思ってたけど、自分から聞いてくれて助かる。「お妙ちゃん、そんな事をまだ、気にしていたのか。新八君、君は知らないと思うが、幼い頃僕は左目を失ってね。そこにお妙ちゃんも居合わせていたんだ。責任を感じる必要はないといったのに。僕はむしろ感謝している位なんだ。あの時があったから今の僕はある。左目

と引き換えに僕は強さを手に入れた」

凜と胸を張り、左目を失った痛みなど感じられない姿。

私の言葉に対しても迷いを持たない強い心。頑など言い換えてもいいかもしれないが、それですら私には羨ましく思えた。

「オイ」

傍らから上がる声、未だ流れる血を拭い、ゆつくりと土方さんが身を起こす。

「起きました?」

「テメーどういいうつもりだ」

立ち上がって、木刀を構える土方さん。

『アレは人一倍負けず嫌いだ手エなんて出したら殺される』

近藤さんの台詞を思い出す。一発殴られるだけで許してくれるかなあ。

それに……仕方なしに使ってしまった裏ワザをどう誤魔化そうか。

「お詫びに、膝枕でもしましよーか?」

挑発をかまして、裏ワザが有耶無耶になることにかける。

それには答えず無言で木刀の先が上がる。フツと消えるような、剣先。

しかし、風切り音を立てて迫った木刀は、寸前で止められる。

「どういいうつもりだ」

「ハンデとして一発入れさせて上げようかと」

ヘラリと笑い、再び挑発する。けれど土方さんは、舌打ちして背を向ける。

そーいやフェミニストだったつけ、失敗したなあ。冷静になったとき、思い出さないとくれるといいけど……。

そんな淡い希望を抱く。

「チンカスじゃぼけええええええ!!」

振り向くと、銀さんが、扉を飛び越え、重い一撃を敏木斎さんに入れる。思わず吹き飛ぶ……いや自ら飛んだのか。扉の此方側へ軽やかに着地する敏木斎さん。

不思議とその姿を見て安堵するような気持ちは湧いてこなかった。

というよりも、そうなる事を当たり前の様に受け止めている自分
がいた。

「貴様らアアア!! バカ騒ぎは止めろオ!! これ以上柳生家の看板
に泥を塗ることは許さん!!」

唐突に障子が開き、輿こしのり矩さん——九ちゃんのお父さん——が門下生
を引き連れて、こちらへけしかける。

時を同じくして、雪崩れ込んでくる、近藤さん、沖田さん、神楽ちや
ん。

それをフオローしながら横目で、銀さん達の試合を盗み見る。

本当に綺麗な太刀筋だ。

敏木斎さんと、九ちゃんはまるで舞を踊っているようで、銀さんも
押されてはいるが、なんでそう受けたのか? と思つたら、それが次
の動作に繋がっていた。

新八君は基本通りお手本見たいな動きで……。

けれど、分が悪い事は否めなく、とうとう新八君が障子を碎き、屋
敷の中に吹き飛ばされる。

「大将撃沈。これで終わりじゃ」

終わったとばかりの敏木斎さん。それに、鼻でもほじりそうな態度
で銀さんが向き合う。

「バカ言つてんじゃないよ。じーさんよ……アンタの孫は護りてー護
りてー自分の主張ばかりでテメーがいろんな誰かに護られて生きて
ることすら気付いちやいねエよ。そんな奴にや誰一人護ることな
んでできやしねーさ」

その姿に何かを感じたのか、吹き飛んだ新八君の方向を向く敏木斎
さん。

その勘は正しかった。止めを刺す為、後を追った九ちゃんが、今度
は逆に吹き飛ばされ、白い羽織を汚す。

「新八テメーにはよく見えるだろ護り護られる大事なモンがよ」

その声に応える様に、飛び出してくる新八君。

それからの一合一合は本当に綺麗で、力強くて……。

最後に立っていたのは新八君。

かつこいいいなあと思った。

「アンタは結局何しにきたんだ？」

片足を庇うようにして、沖田さんが興味のなさそーな、どうでもいい様なそんな口調で尋ねてくる。

「んー。野次馬かな？」

「そうかい」

結果的にそうなってしまったそれを伝えると、蟻の触覚程しか無かったのであろう興味を失い、「土方さーんおんぶしてください」と行ってしまった。

しようがねえなとブツクサ言いながら、それでもまんざらでも無さそうな土方さん。

しかし沖田さんは「こりやあ楽でいいや。そのまま一生俺の足として働いてくだせエ」と捻くれた事を言って振り落とされそうになっている。きつと照れ隠しなのだろう。

「オラ、行くぞ」

もう仕事は終わったとばかりに、ダルそうに声をかけてくる我らリーダー。

「お腹減ったね、今日は何？」

「お前食ってばつかだな、たまにはテメーで作れよ」

「銀ちゃん、そんなしたら大爆発アルヨ」

「えーそんなこと無いよ。精々小爆発で終わるって」

「結局爆発するんかい!!!」

九ちゃんを泣きながら抱きしめるお妙さんをチラリと振り返る。

結局何も出来なかったなと思いつながら、白い着流しを追う。

近藤さんの結婚式はバイトで行けなかった。

お妙さんが乗り込んで阻止したみたいだけど、バナナ入刀みてみたかったなあ。

閑話 山崎退の監察日記

桂と高杉の抗争。それに関わったんじゃないかと、キリちゃんを張るように副長から言われ、三日目。

そろそろアンパンも飽きてきた。

副長も無茶を言う。かつて真選組の威信をかけて追ったにも関わらず、その尻尾すら掴めなかったというのに。今更俺一人でと……。数えるのも嫌に成る程、見失っては追いかけるを繰り返した日々を思い出す。

現に今もまた見失ってしまった。本当にどうなっているんだろうか？

余りにも説明のつかない見失い方を繰り返すの内に、一時期は隊内で幽霊じゃないかと噂される程だった。

まさかね……いや、足ちゃんもあるし。監察が科学的根拠の無い噂に振り回されてどうするんだと首を振る。

「今日はお終いかなー」

頭を搔いて辺りを見渡すが見当たらない。紺色の絵の具を端から流した様な空を見上げる。雲すらその白さを失い、昇り始めた銀色の月が、今日という日に終わりを告げる。

必ず行方をくまますタイミング。それに気付くのに時間はかからなかった。寝床、きつとあの子にもあるのだろう。そこに戻るとき、決してその場所を知られないように、キリちゃんは姿を消す。まるで野生に住む動物の様に注意深く。

そして日が昇り、一日が始まると、どこからともなく姿を現す。昼間しか現れない幽霊なんて聞いたこともない。ダメだ、やっぱり噂に囚われている。そして、先入観はいけないなど、もう一度周辺を見廻る。単純に何か見落としただけなのかもしれないし。

日が暮れかけたとは言え、左右に商店が並ぶこの通りは、それなりに人通りは多く、仕事帰りと思わしき男や、これから街に繰り出そうとはしやぐ若者達が道を賑わしていた。

そんな雑踏に紛れた——買い物帰りなのだろうか——買い物籠を

抱える中年の女性と、その回りを回る兄妹と思われる十に満たない二人の子供。

キリちゃんにも、きちんとした家があるのだろうか？ その姿を見ながらそんな事を思う。人のことは言えないけれど、家族がいるとは思えない生活にやるせなさを感じる。そんな感情を抱いていると副長あたりに知られれば、きつとどやされるに違いないけれど、彼女を見ていると、自然とそんな物を抱いてしまう。

野良猫。一定の距離を保ち、誰にも近寄らせない、近寄らない。キリという人物を注意深く観察したのならば、誰しもが抱くであろう当初の印象。

それが、最近変化したのに気付く。

江戸を離れ戻ってきて以来、腹を見せ、日向ぼっこをするかの様な、飼い猫じみた行動を見せるようになった。

きつと万事屋の旦那の影響なのだろう。ともすれば酷くチャランポランで、どうしようもない人間に見えるが、その本質に触れれば影響を受けずにはいられない、不思議な人物。決して自ら認めたりはしないが、うちの局長や、副長……沖田隊長あたりも、その影響を受けてしまっているという事実。

真選組として少しどうなのかと思うが、俺自身も影響をまったく受けていないと言えるのかと言えば微妙なところだから、口をつぐむ。

店舗から漏れ出る光と、等間隔で灯された街灯。黄昏——誰そ彼——そんな言葉を払拭する様な科学の力に照らし出されたそこに、結局キリちゃんを見つけることは出来なかった。これだけ明るいのだ、見落としてはないのだろうか。

すっかり昇りきった月に諦め、アンパンと牛乳をコンビニで買う。アンパン生活はきつとまだまだ続く。

張り込みの神様がいるのなら、取り越し苦勞である証拠が見つかり、この生活が早く終る事を祈らずにはいられない。

借りたアパートの階段を上がる、きつと明日になればまたフラリと姿を現すのだろう。

「山崎じゃねーか、何見張ってんでエ」

「あ、沖田隊長」

公園の草むらに隠れ、キリちゃんを見張っていたら唐突に背後から声をかけられた。振り向くと、欠伸半分少し眠そうな沖田隊長。

オデコに愛用のアイマスクがかかっているのを見ると、大方その辺で昼寝でもしていたのだろう。

気配を隠さずに近付いてきた事に助けられた。驚いた素振りや、焦った素振りを見せればこの隊長の事だから、それをスイツチに何かしらの嫌がらせを始めるに違いない。

「酔昆布かい？」

俺の答えを待つまでもなく、視線の先にいる人物を見定めて眠そうだった目をわずかに開ける。土方さんも飽きねエなあーと言いなながら伸びをする沖田隊長にこちらはヒヤヒヤものだ。

「折角隠れてるっていうのに、向こうが振り向けば丸見えじゃないですか！」そう抗議の声を上げれば、馬鹿だなあーお前エはと呟く。

「ありや、気付いてるぜイ」

「えっ、そんなバカな！」

思わず上げた声に、わずかにキリちゃんが此方を向いた気がした。けれど、フツとその視線を不自然に逸らす。

「だろイ？ 氣イ使われてんだよ」

泳がされているのは此方だったのか……？ 子供達と一緒にドツチボールを始めたキリちゃんを再び見る。言われてみれば毎日必ずと言っていいほど、万事屋か公園どちらかに現れるキリちゃん。どちらかを張っていれば捕まえられるから楽だった。

疑われていると知っていて……？ 屈託なく笑う顔の裏を想像し、落ち着かなくなった。何を思っているのだろうか？ 何を考えているのだろうか？

追い掛け回した事に対する恨みや、憎しみなんて一欠片も抱かず、するつと何事もなかったかのように副長をからかうキリちゃんを思い出し、なんだかそれが嫌だなんて思った。

だってそれは、キリちゃんが、キリちゃん自身に対する重さを認識せずに、そんな事どうでもいいと思っっているに違いないのだから。

「それだから監察失格だって土方さんに怒られんだぜイ？」

その胸の内を読み取ったのか、それとも気づかれていた事を気づけなかった事に対してなのか、沖田隊長はそう言うのと、興味を失ったのか、背を向ける。

日光が足りないせいとか、下生えが生え揃わない雑木林。その間を走る獣道と行っているのか、踏みしめられた跡を歩く隊長。その肩に、チラチラと木漏れ日が落ち、隊服をまだら模様染める。

そんな姿が木々の向こうに消えていくのを見ながら、沖田隊長はキリちゃんの事をどう思っているのだろうか？ と考える。友達と言えるほど近くはなく、ただの重要参考人と警察と言うだけでは説明がつかない——万事屋の旦那を身元引受人に仕立て上げ、副長を巻き込みその事実を無かった事にした過去の捕物。

俺如きでは隊長の秋の空よりも移ろいやすい心を推し量る事はできず、その疑問を解決する術はなかった。

一際大きく上がる歓声に振り向けば、ドッチボールであてられ、いの一発で外野に追い出されたキリちゃん。要領よく生きている様に見えて、結構どんくさい。そんな事を一つ報告書に付け加える。

それは、江戸を出て何処へ行ったのだろうかかと足取りを辿る為、訪れた入国管理局。

俺の心情はともかく仕事は仕事だと頭を切り替え、バレているならば張っていてもしょうが無いと、別の方向から調査をすることにした。

白いカウンターの向こう側で、焦り恐縮する入国管理局の年若い役人。新人なのだろう。たどたどしい手つきで端末を操作している。

「済みません、その方に関する記録はありません」

「えっ、そんな馬鹿な！」

「念のためもう一度確認してみます」

思わず上げた声に、再び端末を操作し始めるが、「やはりありません」と回答が返ってくる。

もう一度確認して下さいと強く言えば、ベテランらしき人間を連れてきて一緒に操作を始めた。けれど、その甲斐なくやはり見つからないという同じ答えが返ってくる。

地球を出た後の記録を追えば、何度も乗り継ぎを繰り返して、最終的には宇宙船を丸々一隻個人チャーターするという、あり得ない手段を取られ、記録はそこで途切れた。

それならばと、戻ってきたルート^{たを}を辿る為、入国記録の照合を求めれば……それは存在しないという。

密入国。戻ってきた時期に丁度入ってきたと言われている、春雨——高杉一派が関わったとされる宇宙海賊——。副長の勘が当たっていたのか。まさかそんな……。そう考えるが、特例として出国した経歴を考えると正規の手続きでは帰ってこれなかったのかもしれないと思いとどまる。大体理由がないんだ。信じたくはないその事実を否定する証拠を探し、大量の監視カメラの映像を確認していく……。暗闇に映るモニター。何日も見続けたせいで、映像が網膜に焼きつく様に感じ、痛む眉間を抑える。見落とした可能性も考え、何度も確認した映像。けれど、そこにはキリちゃんらしき人物をついぞ見つけることは出来なかった。

もう一つ裏付けを取らなければいけないと、進まない気を引き締めて、宇宙船をチャーターした資金の出処を探る。春雨と無縁であつてくれよと祈れば、キリちゃんと思わしき人間が、大量の金を取引したという事実。

唯一の救いが、キリちゃんと思われる人物が大怪我を追い、高杉の船から出たという目撃証言。そんな怪我を負っているようには見えなかった。

結論としては、はっきりと断定は出来ない、黒に近いグレー。

その事実を監察として捻じ曲げる事はできず、報告書に纏め提出した。

翌日、別の案件が持ち上がり、調査中断の命が出る。問題の先送りではあるが、正直ほっとした……。

隊長の言葉じゃないが本当に監察失格だと思う。けれど、どうにもやり辛さを感じたのは事実なのだ。

虹のたもとの銀の鍵

バイトは午後からだだったので、時間を潰すために寄った万事屋。朝は晴れてたのに……。どんよりとした空が広がる。

降りそうで降らない。降ればいいのに、それか晴ればいいのに。開けた玄関から空を見上げ、雨に怯える弱虫の歌を思い出す。

こういうどっちつかずの空は中途半端で面倒臭い。傘を持って行ったらいいのか、降らない事にかけて持たずに行くか迷う。持つて行つて降らなかつたら損した気分になるし、持つて行かなくて降られたら後悔するし。

指針のためにツバメを探す。

「早くしねーと、バイト遅れんぞ」

傘を借りようかどうか悩む私に、見かねて銀さんが口を挟む。左手で原付きの鍵をちやりちやりさせながら、右手でヘルメットを器用にくるくる回す。

屋根のない原付きで送ってくれると言うからには、きつと銀さんは降らないと踏んでるんだろう。結野アナの天気予報が曇りと言っていたから。

「よし！ 降らない方にかけて！ 降ったら降つたで銀さんのせいに行けるし」

「なんなのその決め方。仮にも送ってってやろうという人間に対する態度かそれは」

ツバメに八つ当たりするよりも、銀さんに八つ当たりした方が心が汚れずに済む気がする。呆れた目でみつめてくる銀さんに「早く行かないとバイト遅れちゃう」と自分のことは棚上げして足音を立てて階段を駆け下りた。

結果的に行きは銀さんの想定通りだった。けれど帰りは――。

ザーザーとまでは行かないが、シトシトでもない……。かと言ってザーでも行き過ぎる。サーぐらい。そんな雨に二の足を踏む。

もう少し待てば雨足は弱まるかもしれないし、逆に強まるかもしれない。

一瞬跳ぶかという考えもよぎるが……あれは日常で使うようなものでもないと思ひ直す。

分厚い雲が陽の光を遮り、町が灰色に鈍く見える。視界は雨に遮られ、霞がかつた景色が、かつてブラウン管越しに見た京都に似ているなど、記憶を呼び覚ます。

余りにも似ていたから、このまま歩いていけばなんだか素敵な事が起こって、向こうの世界に繋がるんじゃないか。そう思つて一歩踏み出した。

けれどそんな事はなくて、冷たい雨がただ体を濡らすだけ。

なーんだと、安心したのか、残念に思つたのか分からない心のままゆっくりと雨に打たれて歩く。もしかしたらもう一歩だけ進めば繋がるかもしれない。そんな事を思つて。

「お前なにやってんの」

突然呼び止められて、振り向くと、呆れた様な顔で二本の傘をもつた銀さん。閉じた傘の柄をこちらに向けて、ずいっと差し出される。

受け取つた傘を開くとバリツとビニールが剥がれる音がした。

「鞆を頭に抱えるとか、ダッシュするとか、少しはそーいう濡れない努力しろよ」

「いや、なんか、雨に打たれるのも気持ちよさそうに思えて。それより迎えにきてくれたんだ？」

努力をしたくなかつた理由が上手く説明できないから、話を逸らす。

「勝手に俺のせいにされたらたまつたもんじゃねーからな」

出掛けにそういえばそんなことも言つたなと思ひ出す。

「思ひ出した。あーあー、もうビチョビチョだ。銀さんのせいだよ。早く迎えに来ないから」

「なんなのこの子はもー。世界はお前中心にまわつてねーんだぞ」

ブツブツ言う銀さんがうっとおしくて、受け取つた傘をくるりと回す。跳んだ水滴が銀さんの着流しに吸い込まれ、更に嫌そうな顔をされる。

今更傘を被つた所で意味が無いほど濡れてしまった体は乾く訳も

なしに、でも文句を言う割に銀さんの目が余りにも心配そうだったから、日常で使うもんじゃないという言葉を翻し、体を乾かす。

「迎えにくる必要無かったみたいだな。つか最初からそーしとけよ」

「言ったじゃん、気持ちよさそうに思えたんだって」

突然の出来事に驚くような素振りも見せず、無然とした表情を浮かべられる。

親切を無駄にする様な行為が気に入らなかったのだろう。

「ま、銀さんが来なかつたらきつと濡れて帰ってたから……ありがとうね」

「結局そーやってお前は何でもかんでも俺のせいにする訳ね」

寛大な世界観に拗われた心。

それを「ありがとう」という安っぽい言葉にくるみ、取り繕う様に言葉に添える。

けれど、それが軽く引き伸ばしたお礼混じりの謝罪である事を見ぬいた銀さんは、不機嫌そうな表情を浮かべる。

「まあまあ、拗ねない拗ねない。銀さんのおかげって事で」

「へいへい、感謝するならもう少し有難がれっーんだ」

不機嫌な銀さんを相棒に帰り道を歩く。

もしかしたら後一步で帰れたかもしれない。そんな根拠もない事を考える。

銀さんが迎えにこなかったら帰れなかったかもしれない。あと一步あと一步と町を彷徨う自分を想像し、それはなんだかとても痛くて、わざとパシヤンと水たまりを踏んでかき消す。

サーと降っていた雨がザーに変わる。

「流石にこれは気持ち良くはなさそーだねえー、ありがとね、銀さん」

「雨に濡れて気持ちいいとか発想がガキすぎんだろ。そーいうのは神楽ぐらいの年で終わらしとけ」

何度目かの謝罪でようやく臍の曲がり解いて、代わりに呆れた顔を浮かべる。

「いいじゃん、子供は雨の子元気の子ってね」

もう一度わざとパシヤパシヤと水たまりを踏み抜くと、「跳ねんだ

ろ！」とブーツで水たまりを蹴り上げられる。

仕返しにもやり返して、やり返され、二人共ずぶ濡れになって帰ると、「傘持っていましたよね？」と新八君に不思議そうに言われた。

雲ひとつない青空！　そういう事はできないけれど、八対二ぐらいの割合で青空と雲が広がる空はとても奇麗だった。

「布団干して貰っていいですかー？」

台所から新八君の声がした。「了解です。隊長！」と戯けながら神楽ちゃんと銀さんの布団をベランダに干す。

欄干から望む江戸は、昔ながらの瓦葺きの屋根と着物。色とりどりの天人達。未だに慣れないそれらに戸惑う事も多い。

銀さんの布団の上に肘をつき、憧憬と感傷を混ぜこぜにした感情のままに目を細めてしばらくそれを眺める。

「何か見えるアルか？」

窓枠に手を置き、青い瞳が不思議そうに此方を見つめていた。

ガラスに写った群青色の空と、サーモンピンクの髪の毛の対比が、綺麗に映る。

「んー。天気がいいなーって。後で定春のお散歩、一緒行こうか」

「いいアルヨ」

欄干から手を離しその綺麗な物を腕の中に閉じ込め、ぐしやりと頭を撫でる。

「わっ、何するアルか！」

突然の事に、目を閉じ、ほんの少しくすぐったそうに身を振る神楽ちゃん。

その暖かさに傷がゆっくりと埋められる。トロリと溶かされた飴。そんなイメエジ。

なんだか無性に甘いモノが食べたくなってきた。

「神楽ちゃん。公園にさ、美味しいクレープ屋さんがあるんだって、一緒に食べよう？」

「やつほい！　破産させてやるから覚悟するヨロシー！」

腕を離しそう言っていると、にやりと笑われ、びしつと指を刺される。

「三つ！ それ以上はご勘弁を！ 工場長！」

「しよーがないアル。それで勘弁してやるネ」

治療費だと思ひ、両手をぺしんと合わせて頭を下げれば、ふわりと笑う神楽ちゃん。釣られて私も笑う。

「お前等なに悪巧みしてんの？」

神楽ちゃんの頭上から頭をのぞかせる銀さん。おおかたクレープという単語に釣られてやってきたんだろう。

「女の子同士の秘密デスヨ。エロい顔して近づかないでくれますう」

「そうアル。銀ちゃんには関係ないネ」

必要以上に財布の中身を減らす理由はない。

それを死守すべく、神楽ちゃんと一緒に蔑んだ目で見てやる。一蓮托生。いいコンビになれそうだ。

「お前等なあ！ 傷ついた！ 銀さんは傷ついた！ 慰謝料としてクレープ一年分を請求する！」

やっぱりクレープ狙いで来やがったかコンチクショー。

「銀さんのハートがそんなもんで傷つく訳ないじゃん」

「まっさらな少年ハートだから！ ガラスのハートだから！」

「ガラスはガラスでも、防弾ガラスの癖して」

口ではそういう物の、果たしてそうだろうか、チラと紅桜に貫かれた私を見つめる銀さんの目を思い出す。これでいて何かと繊細なんだよな……。

「クソ！ 鳥頭の鶴でももう少し恩返しすんだぞ?! お前一応それでも哺乳類だろ!?! 冷血動物か!?! ウーパールーパーの仲間だったか! 似てるのは顔だけにしろよ、コノヤロー」

「誰がウーパールーパーだ！ はあ……もうしようがないな。一個だけだよ？ それ以上は予備軍昇格しちゃうからダメだかんね」

不器用代表各のこの人を少し甘やかしたいという思い。それも一種の甘えなのだろう。

グズグズに溶けて甘えるだけの存在になってしまう。そんな危機感を胸に抱きながらも、とろけきった心のままにそれを許す。

私が折れる事など期待してなかった銀さんは、なんだか気まずそうな表情を浮かべる。それをニヤつと笑ってやると、試合に勝って勝負に負けた気がするとブツクサいいながら部屋に引っ込んでった。神楽ちゃんと二人でそれを見てケタケタ笑う。

「僕まで本当に良かったんですか？」

「ま、あの二人だけって訳にもねえ？」

こうなったら新八君を置いていく訳にもいかず、三人揃えて面倒を見て上げようという事で、クレープを食べに三人と一匹を連れて公園までお散歩。

先頭を歩くは神楽ちゃんと定春。遅れて銀さん。その後ろを二人でついていく。後ろから見る白い髪の毛は、相変わらずのハネ具合。「あんまり遠慮とかしなくていいんですよ。あの二人見境ないんで……」

濟まなさそうな顔をする新八君。自業自得なんだけど、それを正直に伝えられる筈もなく、幾つか言葉を選んだ末「ま、偶にはいいんじゃないの」と濁した。

「キリさんって……時々人が良いですよね」

「時々って……キリさんはいつもいい人じゃないですか、新八君」

微妙に褒めているんだか貶しているんだか分からない言葉に、へらりと笑って返す。

「まったく……口が減らないですね。キリさんはね、微妙に食い意地張っているとるか、そういうどうでもいいところでしかムキにならない所とか、本当に譲れないところは笑って誤魔化すところとか……それを悪いと思ってるのに改めないところが悪い人なんですよ」
「私なんかよりよっぽど人が良いと思っていた新八君にチクリと刺される。どう返すべきか……しかたなしに、上手く回らない口で、「そうかなー」と視線を逸らし嘯く。

まったくもって誤魔化せていないそれは新八君を傷つけるだろうか？ そんな不安と共に返した言葉。それなのに――。

「そうですよ。それよりトッピングは幾つまでって指定なかったです

よね」

にこやかに笑われた。

「お財布ピンチなのでお手柔らかに」と、困った顔の理由をとぼける私に上手く誤魔化されてくれる新八君。

まったくもって甘えっぱなしの私は年上だとかそーいう威厳を取り戻せないまま、公園にたどり着く。

天国に咲く白詰草 褒めて殺す

一辺倒の「いらつしやいませ」と「ありがとうございます」を数えきれないほど繰り返した所で、ふと見ると知り合いの顔が列に並んでいるのに気付いた。

こちらが気付いたのと同時期ぐらいに、あちらも気付いた様で、新八君は軽く会釈をすると買い物カゴを、カウンターの upper に乗せた。

「今日は新八君が買い物当番？　つてか銀さんと神楽ちゃんが来る方が珍しいか……たまには任せればいいのに」

「あの二人に買い物をお願いすると、余計な事にお金を使いかねないんで迂闊に任せられないんですよ」

「酢昆布とか糖分とか？」

「それならまだいいんですけどね……銀さんに限っては食費を持ったままパチンコ行きかねないですからね」

深い溜息を付く姿はとても十六の若者には見えない。まるで駄目な夫に文句を言いながら付き合う熟年女房の様だ。

同情を禁じ得ないまま、カゴに入った商品をレジに通す。

「それにしても相変わらず大量に買うねえ〜」

「まあ、一食の量が量なんで」

店の売上が上がっても給料が上がる訳ではないので、大量に買ってくれたからと言ってテンションは上がらない。とはいえ、米を二袋と野菜、ついでに特売だった醤油を一瓶。三つも用意されたエコバッグに詰められた大量の食材は持って帰るのも一苦労だろう。

「大丈夫？　少し待ってくれたら持つて帰るの手伝うよ？」

「いえ、近いですし。それに最近万事屋の仕事が多くてあまり鍛錬もできてないから、これぐらいしなないと鈍っちゃいますよ。仕事が多いのは嬉しい事なんですけどね」

少し困ったように笑う新八君に、偉いねえと曖昧に返事を返しながらレジを打つ。

お金を取り出そうと財布を持つ左手。その手の平には、剣を握る人間特有のタコがある。

「ありがとうございます」

お金を払い終えた新八君は、本来私が言うべき台詞を横取りして、詰めた袋をひよいとまでは行かないが、危なげなく持ち上げる。

成長途中のしなやかな筋肉が、しっかりとついた腕。

「新八君！」

思わず呼び止める。

「なんですか？」

少し不思議そうな顔をして振り向いた新八君に言葉を迷わせるが、柳生での失態を思い起こし、迷う口を開く。

だってこのままでは、私は再び後悔する事になるだろうから。

「ねえ、私にも剣を教えてくれない？」

侍になれるとは思わないけれど……近づきたいと思う事は傲慢だろうか？

新八君は私の言葉に、バイトが終わるまで待つてくれた。

二人で日の暮れかけた道を歩く。

食料が詰められた袋は授業料の前払いだということ、笑って半分持つことを許してくれる。

「僕なんかで良ければ幾らでも教えますけど……キリさん今でも十分戦えるじゃないですか。別に型に嵌めた剣が必要って訳でもないんですよ？」

新八君の言葉は正しい。別に正しい構え方とか、正しい剣筋とか、そーいうものが必要という訳じゃない。

「んー、私のは裏ワザ的なモンだからねえ」

「なんですかソレ」

どう説明したら良いのか……。

「私、多分えいりあん相手だったら負けなと思う。だけど、新八君が相手だったら……違うね、勝敗以前の問題だこれは」

「？」

新八君は眉を寄せ、怪訝そうな表情を浮かべる。

物理的な問題を上げれば、加減が効かないから、大怪我を……もしかしたら死に至るような怪我を負わせてしまう。そんな理由が上がるけれど、それは本当の問題とは少し違う様な気がした。

戦うってのはそういうのを踏まえた上でやるものでしょう？ 真剣を手に取り似蔵に立ち向かった新八君の様に。

本当の問題は、私にはその気構えがまったくもって足りてない事だ。そんな私が剣を取った所で……交えた相手の魂を汚す行為にしかならない。

現に、私には銀色の光なんて少しも存在しないから、蛾は燃え尽きる前に、力尽き、落ちてしまった。蛾を薄汚れた死骸に変えてしまったのは紛れもなく私だ。

無力に震え、救えない物を救おうと必死になる人間からしたら、傲慢な考えなのかもしれない。それでも……押し付ける様な行為が正しいとは思えないのだ。

そんな気持ちを分かりやすく噛み砕いて伝えるには少し時間がかかって、選んだ言葉をゆっくりと吐き出す。

「あんまり上手く言えないけど、私には心構えとか、覚悟とかそういうのが全然足りなくて、そんな私が何も分からないまま剣を取るのなんだから間違ってる様な気がして。だけど、新八君が戦う姿を見てるとね、新八君は私と違ってそーいうのがちゃんと解ってる様に見えるんだ。だから、新八君が教えてくれる剣の中にそれを探したいな……と」

「……キリさんって恥ずかしい事をさらつと言いますね」

「んー？ そーう？」

視線を逸らした新八君の眼鏡が夕日に反射してキラリと光った。首筋が僅かに赤くなっているのは夕日の所為だけじゃないだろう。

その態度に、俄然エス心が擦られる。

「最初の話に戻るけど、型に嵌った剣って必要じゃないけど憧れるよね。『教科書通り』って言葉、今まで褒め言葉としては微妙だなあつて

思ってたんだけど、何度も繰り返し、それこそ魂に刻む様に励むからこそ、それが出来るんだね。この前それがわかったよ。新八君の剣つてそういう意味で教科書通り、本当綺麗だよ。ほら銀さんの剣は性格が出るのか捻くれてて、分かり辛いじゃない？ それに比べて、新八君の剣は真っ直ぐだから本当に綺麗に見える」

「はいはい、おだてても何も出ませんよ」

「おだててなんかいないよ？ キリさんはこーいう事に関してはお世辞なんて言わないからね？ つまり真正銘本音って事だよ」

「だからそーいうのはっ！ ああ！ もう行きますよ！ 僕、厳しいですからね覚悟しておいてくださいよ!!」

とうとう悲鳴を上げて、足早にズンズンと先へ行ってしまう。

昔からずっと憧れていたんだと伝えれば、殺すことすらできそう
だ。

青い袴が乱暴な足の動きに合わせてはためき、首筋は夕日で誤魔化せないほど真っ赤に染まっていた。その背を遅れないように私もやや速度を上げて追いかける。

新八君は振り向くことはないだろうから、噛み殺した笑いを隠す必要はないけれど、その言葉がエス心から来たものだけではない事を証明したくてゆるい笑いに変える。

本当にずっと憧れていたから。

今日はもう遅いからと目を改めて、天堂無心流の門を叩く。

相変わらず大きな門と、どこまでも続いて行く様な白い塗り壁。

ところどころ漆喰が剥がれ落ち、黄色いシミを浮かび上がらせている様が、かつての栄光を過去の物にしてしまっている。

けれど――。

「いらっしやいませ、さっそく道場の方に行きましょうか」

通された剣道場の床は深い飴色に磨き上げられ、壁に立てかけられた剣道具達も丁寧に補修が重ねられている事が分かる。

ゆつくりと息を吸い込むと、空間が生きているかのように呼吸した

気がした。

ちやんと息づいている、剣も魂もここに。

「よろしくお願ひします」

「こちらこそ、お願ひします」

キリキリと引き絞られた弦つるの様な居住まいで立つ新八君は本当に憧れそのもの——侍の姿だった。

数時間後、基礎体力からして全然違う新八君からの指導は、本人はそのつもりはないけれど、私の体力を削り切るには十分で……荒い呼吸を繰り返しその場にへたり込む。

「新八君。ごめん……限界」

「あ……済みません。誰かと一緒に稽古するの久しぶりだからつい浮かれちゃって」

最初は良かった。丁寧に剣の持ち方や道具の使い方やらを教えてくださいただったから。

けれど時間が経つにつれ指導に熱が入り初め、気がついたらこの有り様だ。

手の平をみると赤く豆ができているし、強張った節々は筋肉痛確実で、明日のバイトのシフトを思い出し少し憂鬱になる。

「……喉乾いたでしょう？ お茶入れたから、切りのいいところで飲みいらつしやい」

剣道場の外からお妙さんの声が聞こえた。

「休憩にしましょうか」

「お願ひします……」

痛む体を抱えて縁側に這いずっていく。

お盆に用意されていたのは熱い緑茶じゃなくて、冷たい麦茶。

さすがお妙さん……でもその隣の黒いモノはなんなんでしょうかな？

「姉上あの……」

「これは……？」

「お茶うけ、あつた方がいいと思って」

いやいやいや？ ない方がいいですとは言えずにぐくりと唾を飲

み込む。

誰が手を出すのか……。

新八君がムリムリムリとお妙さんに見えない所で手と首を振る。

これも卵、これも卵……本来の素材はオムライスと同じものが焦げただけだって、ちよつと見た目がアレなだけで……。物は試しと、自己暗示を掛けおそろおそろ指を伸ばすが、本能がそれを卵と認める事を拒絶する。

何かこのピンチを切り抜ける方法を……未だかつて無いほど脳内の細胞が活性化するのを感じた。

ピコンと閃く。

「あー……ここにいらっしやるゴリラさん？　ここに来て一緒にお茶しませんか？」

「え？　いいの？　じゃあ、折角だし邪魔しちやおうかなあ」

床下に向ってそう声を掛けると、隊服を蜘蛛の巣と土埃に汚した近藤さんが縁の下からのそのそと這い出てきた。

照れた様に僅かに頬を染め、頭を掻く姿に、新八君と私の間でアイコンタクトが交わされる。

「近藤さん、今日はそんな所にいらしたの……毎回毎回性懲りもなく……そんなにお茶が飲みたいんだったらそこで一生お茶していなさい！」

「ぐほっ!？」

お茶とお茶うけという名の狂気が、お盆と共に近藤さんにスパークングされた。

「ごめんなさい。代わりのもの持ってくるわね？」

お妙さんは泡を吹いて倒れる近藤さんを汚物を見る様に一瞥したあと、にっこりと振り返る。

この人を怒らすのは止めようと心に決めた瞬間だった。

「あ、姉上！　僕が！　僕が持ってくるんで姉上はここで休んでいて下さい」

「でも新ちゃん……疲れてない？」

「大丈夫です！　キリさんも姉上としやべりたいって言ってますし」

「そ、そう、前から一緒にお話したいなと思つてたんですよ！」

「あかべこの様に首を縦に揺らしながら同意する。」

「そこまで言うのなら……」

危なかつた……。腰を下ろしたお妙さんに安堵の溜息を付く。

台所に向かい歩いて行く新八君を見送った私は、縁側から足を投げ出ししばらく風に浸る。

丁寧に手入れされた中庭から吹く風は気持ち良かった。

視界の隅に入ってくる近藤さんは未だ痙攣しているが、きつと慣れているのであろうから大丈夫だと思ふ事にする。

「キリさん……この際単刀直入に言いますけど、この家に嫁ぐつもりでしたら、それなりの覚悟して頂かないと困りますよ？ 腐つても侍の跡継ぎ。武士としてのしきたりや作法は守つて頂かないと……」

「ふえ？」

少しだらけていた私に唐突に掛けられた言葉。思わず変な声が出てしまった。

中庭からお妙さんに視線を移すと、真剣な瞳がこちらを見つめていた。

「あの、お妙さん？ 何の話をしていらつしやるのですか？」

「何つて、キリさんと新ちゃんの話よ。私、新ちゃんはまだまだ子供だと思つていたけれど……昔は十五で元服、大人の仲間入りとしていたんですもんね。法律上は後二年必要だけれど、結納だけでも先に済ませた方がいいのかしら？ 年上の女房は金の草鞋を履いてでも探せて昔から言うものね。新ちゃんこの機会を逃したらまともに女の子とお付き合いできるかどうかも怪しいし、先に鎖で繋いでおくべきかしら」

「何気に貴方の可愛い弟君をデイスってません？ っつか色々ツッコミたい台詞がワンサカ混じってますが、私じゃ全部拾えませんかよ？ っつか違いますからね？」

「でも、こういう事に身内が口出しするのってどうなのかしら？」

困つたわ」

少し俯きながら顎に手を置き悩むお妙さんは全然こつちの言葉を

耳に入れてくれない。

そーいえば頑固というか、思い込みが激しいというか……突っ走るタイプだったよね。

「キリちゃんと新八君はそういう仲だったのか！　ってことは、俺にとつても妹……がはっ！」

どう訂正しようかと悩んでいると、近藤さんの声が聞こえた気がした。

しかし、声の聞こえた方向を振り向く前に、風切り音が鳴り、振り向いた時には、倒れ込んでいた筈の近藤さんの姿勢が変わっていた。

催眠術だとか超スピードとか……そんな奴？　いや、でも……視線を戻すと唯一の容疑者は、元の姿で悩み続けているし。

何が起こったのか。

ふと気がつく、その拳についた僅かな血糊――。

んー、隕石でも降ってきたんだろうか？　隕石に当たる確率って宝くじに当たる確率より低いらしいのに、ご愁傷様だ。

一連の流れをなかつた事にして、気を取り直す。

今は他人の不幸より、己の未来の方が大事である。

「あのですね！　お妙さん何か勘違いをしてらっしやるみたいなのですが、私と新八君は全然そんなじゃないですから」

このままだとなし崩しの話が進められて、気がついたら白無垢を着せられていそうで怖い。

「恥ずかしいのは分かるわ。でも、誤魔化さなくてもいいのよ？　そういうのちゃんと解ってるから。新ちゃんの剣どうでした？　立派に育ってました？　もしかして私、稽古の邪魔だったかしら。気が利

かなくて本当駄目ね」

「いやいやいや！　どんな稽古を想像してるんですか！　新八君の剣はきちんと鞘に収められますから！　まだ放たれてませんから！」

「そうよね、まだ二人に子供は早いと思うわ。鞘ゴムは大事よね」

「ちがあああああ！　弟さんの刀は永久保存版！　保存する以外に使い道なんてないから！」

「人のモンを勝手に保存用とか決めつけないで下さい！！　保護ファイル

ムが勿体無くて剥がしてないだけなんです！　そーいうことあるでしょ!!」

「新八君、剥が『せ』ないと、剥が『さ』ないは一字違いだけだけど、そこには日本海峽よりも深い溝があるんだよ？　気付いて？」

「アンタはどっちの味方なんだよ！」

ようやく戻ってきた新八君からツツコミが入る。

良かった……貴方の姉上をどうかして下さい。私の手にはもう負えません。

悪化した事態をツツコミ担当兼、フオロー担当に任せて、私は持ってきてくれたお茶を飲み遠い目で空を見つめた。

一体全体何が悪かったんだろうか……。

「まあ、私つたらとんだ勘違い。お話があるなんて改めて言うもんだからてつきり、ごめんなさいね。そう……キリさんが門下生にね」

「そーなんです、本当に剣術習ってただけなんです」

新八君の必死の説明により、ようやく解けた誤解に疲れがどつと出た。

「返事がねえーから勝手に上がらせて貰ったぞ」

聞こえてきた声に、庭先を見ると土方さんが煙草を啜え、立っていた。

「さつき電話しておいたんですよ。粗大ごみ回収してもらおうと思つて」

何で土方さんがここに？　疑問を浮かべる私に、新八君が説明してくれた。

未だ意識の戻らない近藤さんを見る。粗大ゴミ……ね。

近藤さんは嫌いじゃないんだけど、志村家での扱い悪さは自業自得なのでフオローのしようがない。

「人ん家の大将捕まえて、粗大ゴミたア酷エ言い草だな」

「あら？　毎度毎度飽きずに屋敷に忍び込むゴリラなんて粗大ゴミでも十分だと思いませんか？」

そう言うお妙さんの顔にはいつもの笑顔が浮かんでいたが、背後に

夜叉かスタンドでも見えそうな迫力があつた。

忌々しげな表情を浮かべた土方さんは、それには応えず舌打ちをし、近藤さんの傍にしゃがみ込むと肩を揺する。

「近藤さん起きてくれ」

「ん……ああ？ トシ？ 迎えに来てくれたのか」

目を覚まし、少し嬉しそうな近藤さんに対して、深い深い溜息をつく土方さん。

立ち上がった近藤さんの土埃を払っている姿がまるで出来の悪い父親を氣遣う息子、もしくは兄を氣遣う弟のようで、その身についた仕事に苦労の跡が伺える。なんだか少し可哀想に見えてきた。

「じゃあ、邪魔したな」

「ああ、そうだ祝言はいつ上げるんだ。聞いてくれよトシ、義理とはいえ俺にも妹が出来るんだ！」

「……テメエ等結婚するのか？」

目を見開きまさかという表情を浮かべる土方さん……。あーこの人の誤解まだ解けてなかつたや。

「なんだかもう色々面倒臭い……」

「新八君、後は任せた。私そろそろお暇するから」

「えっ、ちよつと待って逃げないで下さい！」

「頑張つてね、誤解されたまま沖田さんあたりに伝わるともつと面倒臭くなるよきつと」

「解ってるなら手伝って下さいって！」

慌てて私を捕まえようと手を伸ばす新八君を避ける。

「お妙さん、お茶美味しかったですありがとうございます」

「稽古だけでなく、遊びにもいらっしやい」

「はい、また近いうちに」

「キリさああああんん!!」

ゴリラの声は聞こえないとばかりに無視を決め込んでいるお妙さんにお茶のお礼を伝え、私はその場を逃げ出した。

「いやあ、妹かあ……前々から妹いいなあって思っていたんだよ。お兄さんと呼んで……あ、いやお兄ちゃん……いやいや兄上も捨てがた

い」

「身内に容疑者がいるのは……だが……」

後ろで脳天気な近藤さんの声と、フオロ方が一人悩む様な声が聞こえるが、知ったこつちやない。勝手に人を犯罪者扱いするの止めて欲しいんだけどねえ。

あーあ、今日はいいい運動したし、よく眠れそうな気がするや。

入ってきた時と同じ門を潜り、痛み始めた筋をほぐす。

久しぶりに銭湯にでも行ってみようかなあ。さすがに女湯には屁怒紹へどろさん居ないだろうし。

小晴日和

洋装ばかり好んでつけている己が悪目立ちしている。そう気付いたのは少し前で、締め付けられるのが嫌だとか、動きにくそうだとか、銀さんや神楽ちゃんも洋装つちやあ洋装だしとかとか、色々言い訳はあるけれど仕事でぐらいいはと諦めた。

ゴリラにでも覚えられる着付けの本。そんなものに助けられながら小物は揃えたので、一番の大物、着物を買いに街へと足を向ける。折よく晴れてくれたバイト休みの日。商店街の『着倒れ通り』と呼ばれる呉服屋が立ち並ぶ通りを私は歩いていった。

日除けが掛かった軒先や、ガラス張りのショーウィンドウには、可愛らしい浴衣から豪華絢爛な振り袖まで、色取り取りの着物や反物が飾られている。

仕事着だから、地味すぎず派手すぎず無難な物をと、お店を覗くが、ちつともさつぱりとも分からない。現代っ子ですからねと眩き、客層でお店を選ぶ事にした。

若い女の子が多く出入りする比較的大きめのお店。賑わいの見えるそんなお店に立ち入り、棚の前に立つ。

さてどれにしようか。

コンペイトウを散りばめた様な棚の中から、淡い藤色の一振りを手に取る。

これでいいかなあー？ 気になった帯と重ねて見るが、着慣れぬせいでイメージが湧かず苦戦する。こういう時こそプロにお任せすべきでしょうと、店員を探してみるが、別の客を相手にしてこちらに気付く素振りも見せない。

どうしよう？ そうやってしばらく悩んでいると、背後から柔らかく声を掛けられた。

「その帯に合わせるなら、こっちの方がいいと思うわ。それだと柄合わせが悪いから……」

振り向けば、はしばみ色の髪と琥珀の瞳。春の日差しを集めたその人は……ミツバさん。

私はからつぽの表情を飾る事もできず、息を止めてしまった。手に持っていた着物に僅かな皺が寄る。

そう遠くない未来にある程度覚悟をしていたとはいえ、まさかこんな所で出会うとは……。

「ごめんなさい、お節介が過ぎたわね」

しかしそんな私の行動を勘違いしたミツバさんは、申し訳なさそうに顔を曇らせ、頭を下げてしまう。

善意からの行動であるのはきつと確かで、だからこそ、一方的な思いでそんな表情をさせてしまう訳にはいかず、私は首を振り、否定の為の愛想を繕う。

「いえ、少しびっくりしてしまつて……ごめんなさい。丁度迷つていた所なので、もし良ければ選ぶの手伝つて貰えませんか？」

「私も田舎から出てきたばかりだから江戸の流行りは分からないけれど、それでよければ」

善意に対する行為としては卑怯だけれど、言い訳の為にその勘違いを利用すると、ミツバさんは再び顔をほころばせてくれた。

選んでくれたのは、白い牡丹ぼたんが可愛らしく飛んだ、撫子色なでしこいろの着物。

鏡の前に立つ私に、ミツバさんが優しい手つきで合わせてくれた着物は、特別美しく思えた。

「本当助かりました」

「いいのよ。私も楽しかったわ」

「もしお時間があれば、一緒にお昼でもどうですか？」

丁寧に包装された着物を抱え、せめてものお礼にと、お昼に誘う。

「そうね、少し弟にも聞いてみるわね」

ん?? 弟さんもご一緒だったんですか? 浮かんだのはミツバさんと本当に血が繋がってるのかと疑いそうになるサデイスト沖田で……。

迂闊だったと思いはしても、飛び出した言葉は戻らない。

「姉上、買い物はすみましたか？」

そして時は、店先で黒い隊服姿の沖田さんが、ミツバさんが買った着物を持つために手を伸ばしているところだった。

あどけないと言っても過言ではない笑顔を浮かべている沖田さん。

「これぐらい大丈夫よ」

「そんなこと言ってお体に障ったらどうするんですか」

「もう、心配性なんだからそーちゃんは。じゃあ……折角だからお願いね」

荷物を預けられ嬉しそうにしている沖田さんを見ると、なんだか見ているこつちがむず痒くなるが、それだけ大切な人なのだろう。

「ねえ、この方がお昼ご一緒しないかって、そーちゃんどうかしら？」

ミツバさんの声に、沖田さんがこちらを振り向き顔をしかめる。

「酢昆布、なんでテメエがこんなところに居やがるんでイ」

「あら、そーちゃんの知り合いなの？ お友達？」

「誰がこんな奴。野良猫みたいなもんです。近づいちゃいけません。変な病気が伝染りますよ姉上」

「そーちゃんったらまたそんな事を言ってる……」

私は検疫が済んでない動物か何かか！ けどまあ……それならそれでいいけどね。

「すみません、姉弟水入らずの所を邪魔してしまった様で……また機会があれば」

折角お近づきになれそうだったけれど、ひょうひょう飄々としたいつもの態度を崩し甘える沖田さんを見てしまえば、諦めもつく。

「ごめんなさい。この子照れてるのよ。大丈夫だから」

そのまま帰ろうとした私に、ミツバさんは少し困った様に笑い、首を振る。

「姉上！」

その姿に、沖田さんが抗議と懇願を織り交ぜたような声を上げた。

「そーちゃん駄目よ？ 人との縁は大切にしなさいって教えたでしょ？」

「……はい」

しかし、ミツバさんに優しく諭され、沖田さんはその僅かな抵抗すら止める。

「それでどこに連れて行ってくれるのかしら？」

につこりと手を合わせるミツバさんの背後から、沖田さんに睨まれた。

それに気づかないフリをして冗談めかせて笑う。

「それは着いてからのお楽しみって事で」

「ふふ。何かしら。楽しみにしているわね」

のけものにされた沖田さんが少しつまらなそうな顔をしていた。

落ち着いたレンガの壁が特徴的な、少しレトロなお店。通された席でミツバさんと向かい合う形で座る。

沖田さんは、ミツバさんの椅子を引き、先に座らせると言うサービスを付けた上で、その隣に腰を下した。

照れのないシスコンっぷりには頭が下がる。

けれど、そんな態度に一つの可能性が頭に浮ぶ。もしかして、既にミツバさんの病状に気付いている？

僅かにくすんだ目の下。眠れずに土方さんの死体を数えた理由がそれだとしたら……？

「流石江戸ね、武州にはこういうお店はなかったから、楽しみだわ」

オーダーを取ってくれた店員にメニューを返しながら、ミツバさんが楽しそうにしている。

「こちらに住むんでしよう？ これからは、いつでも僕が連れてきてあげます」

「そうよね……これからは江戸に住むんですもの。いつでも来れるわね。その時はお願いね？」

「はい」

少し気負う様な沖田さんにイタズラめいた瞳を向けるミツバさん。

これから、いつでも……ね。

「最近引っ越されたのですか？」

どこまで誰が何に気付いているかは知らないけれど、未来の話を今はしたくなくて、素知らぬフリで話の方向を変える。

「引っ越し……近いわね。この年で恥ずかしい話なのだけれど、今度

結婚するのよ」

「それはおめでどうございます」

「ありがとうございます」

祝福の言葉なんて思い浮かばず、テンプレートに則った言葉を送る。

笑う二人。その笑顔に陰りは見つからない。

沖田さんは裏が表の様な人間だからともかくとして、ミツバさんは？

ずっと疑問だった。聡明と称されるミツバさんがどうして蔵場の本性を見抜けなかったのか……。死を間近にした焦りが瞳を曇らせたのだろうか？

「どうかしたかしら？」

「いえ、花嫁姿きつとお綺麗だろうなあーと思って」

その疑問への回答を探りそこね、見つめ過ぎてしまったと気づいた時にはミツバさんから不思議そうな目を向けられていた。

とつさに返した言葉は、大嘘というわけではないけれど隣に想定したのは……。

「おまたせしました」

そんな思考は、湯気を立てて運ばれてきた皿に中断される。

コトンと置かれたタンポポ色の太陽は、自信を持ってお勧めする大江戸一番のオムライス。

「本当に美味しいわね」

嬉しそうなミツバさんが手に持つスプーンには、真っ赤に染まったオムライスが一盛り。

それを染め上げているのはケチャップ……ではない。机の上にコロンと転がるタバスコの瓶。向こう側が透けて見えるガラス瓶に、窓から差し込んだ日差しが反射して輝く。

そして……私の前にも三倍速で人を殺せそうな真っ赤な山が一皿。重要なので繰り返すが、これは私が自信を持ってお勧めする大江戸一番のオムライス……だったものだ。

柔かい、それでいて断ることのできない、不思議なミツバマジックを回避し損ねた道の果て。

未来を知っているのに、何でも出来るはずなのに、無力感しか感じなかった。

「箸が進んで無いようだけど辛いのはお嫌い？」

「……そんな事はないデスヨ？」

こちらを見つめるミツバさんの目に、逃げられないと諦め、ゴクリと喉を鳴らす。

昔読んだことがある、辛味というのは本来は味覚ではなく、痛覚を刺激するものであると……。つまりは痛覚を絞ればなんとか……。？

恐る恐るスプーンに盛られた殺戮兵器を口に運ぶ。

「……新鮮な味わいですね」

「そうでしょうか？ 気に入ってくれたようでよかったですわ」

そう言ったものの、何故か味がしない。味蕾が死んだのかこれは……？

喉元を通る熱と吹き出る汗。抑える事のできない生理現象に、認識できなかった不安を掻き立てられる。

そうやって戦々恐々としながらスプーンを動かす傍らで、姉弟の和気あいあいとした会話は進む。

「そーちゃんとうこうしてのんびりご飯を食べるのも久しぶりね」

「そうですね、離れてから随分と立ちますから……。でも僕、姉上の事を忘れたことは一日足りともありませんよ」

「ふふっ、嬉しいわ」

「ですがやつぱり記憶の中の姉上より、本物の方が何十倍も綺麗です」
「もう、そーちゃんったら。お世辞が随分と上手くなったじゃない？」

上がった体温は、タバスコのせい？ それとも目の前のラブラブな会話のせい？

頬を染めるミツバさんに、更に沖田さんが追い打ちを掛ける。

「世辞なんかじゃありません。本当の事です」

「じゃあ、そーいう事にしておくわ。ありがとう」

「もう、違うって言うてるのに。でも、僕、姉上のそういう謙虚なところ

ろも素敵だと思っんです。将来お嫁さんを貰うんだったら、姉上の様な人がいいな」

「私なんて……でも、そーちゃんだったらきつと素敵な花婿さんになるわね」

あれ、これ何ルート？ 沖田さんは何のフラグを立てようとしているの？

それは私がスプーンを置いてもなお続く。

「やだ、もー。そーちゃんったら」

「ですが、姉上……」

おつかしいなあー。きやつきやうふふのガールズトークが繰り広げられる展開を予想してただけだなあー。

届けられない会話とキャッチ出来ないボールに、孤独な侍の歌を脳内ループさせる。

お熱いのはお好きですかっ？ 今の私にそれは皮肉にしかない。

「それより姉上、これからどうされますか？ どこか行きたい所はありますか？ どこへでも連れて行ってあげますよ」

ようやく終わりを見せた会話に思考が戻ってくる。

「そうね……江戸のことは良くわからないから、そーちゃんのいつも行ってる所に行きたいわ。いつもお友達と何処で遊んでいるの？」

口元に手を当て悩むミツバさんの出した答えに、押し黙る沖田さん。

このボツチめと蔑もうかと思ったが考え直す。今のタイミングで言うとなんだかアレだ。僻ひがんでいる様な響きになりそうで嫌だ。

「私、いい場所知って」もしもし？ あ、俺です、沖田です。……ちと頼みがあつて」

仕方なしに、助け舟を出そうと口を開いた瞬間、見越したように沖田さんは携帯を取り出し、携帯相手に喋りだす。

視線が合うと、ミツバさんからは見えない角度でふつと笑われた。

うわっ、何それ、ものすつっこい腹立つ！ あれですか？ デート
を邪魔した腹いせですか？ このシスコン野郎がああああ？？？

んん?? もしかして……今までの会話も含めてワザとだったりする?

沖田さんの背に黒い翼が見えた気がした。

電話のかけ先は万事屋だった様で、呼び出された銀さんが、私の隣に腰を降ろす。

「大親友の坂田銀時君です。さあ旦那、ちよつと小粋な遊び場に繰り出しやしようか」

前振り無しでいきなりそう告げる沖田さんに、銀さんは腕を伸ばしその頭を掴むと、問答無用で机に打ち付けた。

鈍い音を立てて震える机にザマーミロと、私はほんの少し溜飲を下げる。

「何コレ、どういう集まり?」

「大丈夫?」と心配するミツバさんに「大丈夫です」と返す沖田さん。

そんな背景を小気味良いほど無視し、銀さんは眉に皺を寄せこちらに疑問を投げつける。

「友達のいな……あー栄光^{沖田}ある孤立^悟と同盟^{友情を深めよう}を結ぼうの会?」

ここまでされてもミツバさんを気遣い、言葉を濁す私を誰か褒めて欲しい。

けれど、銀さんは褒めるでもなしに、聞き終わるやいなや立ち上がり、入り口に向かい歩いて行こうとする。

すかさず着流しを掴み引き止める。そうは問屋が卸さない。

銀さんは露骨に嫌そうな顔を向け、着流しを引っ張る。引っ張り返す。

「銀さん忙しいの。友達いないもん同士、仲良く遊んでなさい」

「冗談でも、そーいう事言うの止めてくんない? 古傷が痛むから」

「勝手に古傷にしてんじやねーよ。真実つてのはな、常に耳にも心にも痛エんだよ」

だから! そういうの本気で止めてよね!

ほら、ミツバさんが「まあそうなの?」とか言っちゃってるじゃない。違うからね!

「ごんのクソ天パ。じゃあ銀さんにも耳の痛い話してあげようか？
千円この前貸したよね？」

私は最終手段を講じる。

すると銀さんは、顰^{しか}めていた顔を一転、真面目な顔をして椅子に座り直す。

「……ダチつてのは貸した借りたの算段を超えた所に成り立つもんだと、俺は思うわけだよ」

あーあ、なんだかここへ来て見たくもない姿ばつか見ている気がする。

まあ、こんなんだとは知ってたけどさ、知ってたけど……ねえ？

色々と開き直った銀さんが、行儀悪くテーブルに肩肘を付き、胡散臭そうにこちらを見つめる。

「にしても……なんかお前、今日は珍しく積極的じゃねエ？　なんか企んでんの？」

「企むなんて人間きの悪い。友好の輪を広げよーと思っただけですよ」

「友好の輪ね……」

常に受け身である私が、強引な手段まで使って引き止めた事が腑に落ちないのだろう。

友達なら艱難^{かんなんしんく}辛苦、人生の辛^{から}さも一緒に味わうべきでしょ？　別

に、自分一人が貧乏クジを引いたのが許せないだとか、そんな子供地味な事なんて考えちゃいない。新しい糖分の味わい方を伝授してあげようという親切心だ。

銀さん御用達の団子屋もまだ見つけれないしね。

そんな本心を押し隠し、疑いの眼差しに、にっこりと微笑む。なんとはいくるめて連れて行って貰おうか。

それから、腹ごなしにゲーセンに行つて、久々に腕がなるぜとガンシューにコインを入れれば、ドエスにフレンドリーファイアの猛火を浴びせられ、いい加減堪忍袋の緒も限界だったので、そろそろ決着をつけようかと誘った格ゲーで無限コンボに嵌めてやる。

そうして腹とストレスを消化した所で、団子屋に向かえば、ミツバさんを前に銀さんが火を吹いて……日は暮れる。

「へへー。お揃いですねえー」

「そうね」

帰り道を歩きながら、クレーンゲームで勝ち取ったお揃いの熊のキーホルダーをミツバさんと二人見合わせて笑う。

「何が嬉しいんだか、女ってそーいうの好きだよなあー」

銀さんは相変わらず捻くれたことを言いながら、それでもその行為を否定することなく、横目に揺れるキーホルダーを見ていた。

「姉上、月が綺麗です」

「ほんとう。まんまるだわ」

沖田さんが空を指差す。

差した方向では建物に隠されていた月が顔を出していた。ミツバさんの言葉通り本当にまあるく明るい月。

その月明かりに照らされながら大きな屋敷の前に辿り着く。

「送ってくれてありがとう。今日は楽しかったわ」

「いえ、こつちこそ楽しかったです。また遊びましょうね。そうそう結婚祝いになるかどうかは分かりませんが」

ミツバさんの目の前に握った手を差し出す。

「何かしらっ？」

じっと見つめるミツバさんに、「よく見てくださいね」と片目を瞑る。

クルリと回した手に生み出したのは、一輪の白い牡丹。

「まあー」

「稀代の魔術師キリちゃんからのプレゼントです。見た目も綺麗ですけど、香りもいいんですよ？」

その花にも負けない笑顔を浮かべたミツバさんの手にそれを渡すと、確かめる様に鼻を寄せる。

沖田さんですら驚いた顔をしているので、全くもってしてやったりという感じだ。

「本当いい匂い。なんだか、心なしか呼吸も楽になった気がするわ。

それに、お揃いね？」

「そうです、お揃いです」

「ふふっ、ありがとう」

「どーいたしまして」

着物の柄を覚えていてくれたのだろう。男二人が分からないといった顔をしているのを、ミツバさんは秘密めいた顔で笑う。

その笑顔から生まれた、冷たく重い鉛を押し隠す為に私はへらりと笑った。

「それじゃあ、姉上これで」

「あつ……そーちゃん」

惜しむ頭を下げた沖田さんに、ミツバさんは惑う様に声をかける。

しばしの無言の後、続けられた言葉に沖田さんは分かりやすい程、表情を強張こわばらせた。

「……あの人は？」

「あの野郎は」

沖田さんの言葉は車のエンジン音にかき消される。

「オイお前ら、こゝで」

十メートル程離れた場所に止まったパトカー。その扉を開けて降りてきたのは黒い隊服に身を包んだ山崎さんと……土方さん。

満月とはいえ、ヘッドライトに慣れた目には私達が良く見えなかったのだろう。数歩歩いたところで土方さんは声をかけた人間が誰かという事によく気付く。

そして——影縫い——影の代わりに黒い姿を琥珀色の瞳に縫い付けられる。

「十四郎……さん？」

ミツバさんの手が僅かに震えるのが見えた。

全ては動きを止め月の光さえ硬く凍りつく。

「姉上、夜は冷えます。早く中へ」

鋭く尖った沖田さんの声がそれを打ち砕く。

再び動き出した世界で、土方さんは開いた瞳孔を結び、縫い付けられた体を引きちぎるかの様に背を向ける。

「山崎、出直すぞ」

「えっ、でも副長」

鈍い音を立てて閉められた車のドアが意味するものは拒絶。

もう一度車内から響いた「山崎!」という声に、山崎さんは二人を交互に見つめ、結局はぺこりと頭を下げ車に乗り込んだ。流れ去る赤いテールライト。

それを見送るミツバさんの横顔は深く傷ついた様な、愛おしむ様なそんな表情を浮かべていた。

「そーちゃんの言うとおり日が暮れると少し寒いわね」

ミツバさんは今しがたの出来事など何もなかったかとも言うように、そう言つて笑うと、「じゃあまたね?」と別れを告げる。

僅かな軋みを上げて閉ざされた門。

「もしかして昼ドラ的な展開?」

「そんなんじゃないです」

空気を読んでくれお願いだから。怖いもの知らずな銀さんから吐き出された言葉に、沖田さんは嫌そうに顔を歪める。

「旦那、今日はありがとうございやした」

「ねーちゃん……大事にしてやれよな」

「言われるまでもねーですぜ」

去つていく沖田さんの後ろ姿が、道の向こうの暗闇に混じり消えていった。

後に残されたのは私と銀さん。

「じゃあ俺等もけーるとすつかね」

「そーだねえー」

方向的には一緒なので、途中まで同行する事にした。

繁華街から離れたここは車の通りも少なく、虫の音だけが響く。

満月に照らされた木々は影を作り、夜だというのにこぼれ落ちる木漏れ日が幻想的な美しさを作り出していた。

空に浮かぶ綺麗な月がミツバさんの横顔と重なる。

このまま二人は相容れないまま終わるのだろうか? 例え今回の嫁入りが上手くいかなかったとしても、次は? そうしていつかミツ

バさんは私の知らない誰かに嫁いで行くのだろうか？

そんな事を考えていた私は、「あれなんなの？ 略奪愛？」なんてい
いながら歩く銀さんに、うつかりと「そんなんだったらいいんだけど
ねえー」と呟いてしまい、怪訝そうな顔をされる。

「お前なんか知ってるの？」

「……知らないけど、まあ、女の勘って奴ですよ」

「女の勘ねえ。お前にも女の部分なんてあったんだなあー」

わざわざ足まで止めて、頭の中から爪先までをじっと眺めた銀さん
は関心するかの様な口調で人の事をこき下ろす。

「ありますよそりゃあー、乳は無いですけどね」

もうなんだか色々疲れてしまつて、そんな銀さんへの対応もいつに
も増して投げやりになる。

八つ当たりの意味も込めて、晴れない気分を空に向つて放つ。

「天パに隕石降つてこーいー！」

唐突に叫んだ私に銀さんは少し驚いた後、片眉を上げて「お前、天
パに恨みでもあんの？」と、いけしゃあしゃあのたまと宣う。

「嫌だなあ、恨みがあるのは天パの下にある頭にですよ」

「そーいう無差別テロは止めるよな。全国の天パが眠れない夜を過ご
す事になるじゃねーか」

にこやかに笑う私の攻撃対象を不特定多数に水増しした銀さんは
「隕石なんかより、餅でも降つてこねーかなあー、餡子の入ったあんな
い奴」と空を見上げぼやく。

視線の先は餅のように丸い月。

「月、本当に綺麗だねえー」

「そーだなあ」

餅でも何でもいいから降つて来ればいいのにな。

命と選択を

くわっと大きな口を開け、欠伸をする。並んだ大きな牙が肉食獣だと言う事を思い出させる。

「君、絶滅危惧種の肉食系男子?」

そう問えば「わふっ」と答える定春。

言葉分かってるのかなあー。背伸びしてようやく届く頭に手を伸ばし、わしゃわしゃと撫でる。

「お前は素直でいい子だねえー。どっかの肉食系を気取ってるマヨネーズ系男子とは大違いだ」

うっかりすると噛み付かれそうなので、そこは注意する。

「何がいてーんだよ」

煙草を噛み締め、睨みつけるマヨネーズ系男子に「別にい〜」とゆるキャラ系女子を気取った返事を返す。

カモメが甲高い声を上げて頭上を飛び回る。

錆びたコンテナに紛れたマヨネーズは至極苛ついた様に、まだ長い煙草をもみ消すと、場所を移そうとする。

その後をついていく私。早まるマヨの足。負けじとペースを上げる。

「ついてくんな」

「土方さんが私の前を勝手に歩いてるんじゃないですか」

「じゃあ、先を行けよ」

足を止めた土方さんに促される。

「え? ヤダッ! それ、レディーファーストのつもり? きくも〜い〜」

ギャル系女子の仮面を被れば、土方さんは刀の柄を抑えた手を震わせ「抜いたら負けだ、抜いたら負けだ」と自己暗示を繰り返す。どうやら精神攻撃は良く効いている様だ。

深く息を吸い、精神の均衡を取り戻した土方さんは一拍置いた後振り向く。

「どーいうつもりだ」

「ドーいつつもりも何も意味なんてありませんよ。ただの散歩なんですから。ねえ定春？」

「わふっ」

首を傾け定春を見上げれば合いの手を入れてくれる。本当にいい奴だ。

潮騒に沈む港。諦めたのか、再び手に取った煙草の煙が海に流れていく。

「結婚式明日なんだって」

ミツバさんの病状の回復。原因不明のそれに、誰もが首を傾け、けれど良かったと喜んだ。

そんな中で弾かれた蔵馬のソロバン。原因が不明ということは、再び病状が悪化する可能性もあるということ。

早まった結婚式の日程に、利己的な思惑が見えた。

「だからドーした」

「別にいゝ」

土方さんの米神の血管が一瞬、イラツとした様に震えた。

啜えた煙草の先がジワリと灰となって落とされる。

「私、猫の手ぐらいにはなるよ？」

「何の話だ？」

微動だにしない表情に青写真を透かして見せれば土方さんは眉を寄せる。

「喧嘩の話」

開いた瞳孔、ザリツと足元のアスファルトを鳴らし重心を変える。からかい巫山戯ていた時とは違い、副長としての顔がこちらを見つめていた。

結婚式の為、取引を部下に任せ屋敷に留まる蔵場。取引現場を直接抑えようと考えていた土方さんの計画は変更を余儀なくされた。

もし今日それを行うのであれば……屋敷への討ち入り、暗殺。そーいう類の手段しかなく、現に山崎さんが進入路の確保の為に駆り出されている。

カモメの鳴き声が高く高く響く。

定春の頬を両手で撫でながら私はその遠い声を聞いた。

「テメエは何を知ってるんだ？」

「何にも知らないよ。何で沖田さんがサドなのかも、何で近藤さんがケツ毛ゴリラなのかも……何でどっかの馬鹿は一人、勇み足を踏もうとするのかも、私には何に一つ分かりやしないんだ」

山崎さんは、土方さんが一人で乗り込む気であるなんてこれっぽっちも思っちゃいないだろう。無謀過ぎるからだ。戦術家である土方さんを信頼している山崎さんはその可能性を否定するだろう。

でも、私は知っている。土方さんは沖田さんに刀を砥げとは言わなかった。

ミツバさんの目の前でであろうと斬り殺す気だ。

その業を全て一人で背負って、それで護れるとでも思っているのだろうか？ 侍ってのは本当に馬鹿な生き物だ。

胸の鉛の重さが増した気がした。

「お前は……何だ？」

引き絞られた矢の様な瞳に、潮の匂いすら薄れ、空気は停滞する。敢えて私はそれには応えず、建て前を口にする事で青写真に修正を加えようとした。

「沖田さんに借りがねえ、あるんですよ。私は真選組でもないし万事屋でもない。だからっ！」

「だからなんだ？ テメーの貸し借りに人を使おうとすんじやねえよ。んなもんはテメーで返しやがれ」

けれど土方さんは続く言葉の先を拒絶し、背を向ける。黒いその背には何が乗っているのだろうか？ ちっぽけな鉛など及びもつかない様なものを乗せながら、それでもただこの人は行くのだろうか。

ミツバさんがその背を諦めなければいけなかった理由が分かった気がした。

「土方さん！」

掛ける声にすらもう足を止めることなく、私はその背を追うことが出来なかった。

「定春……大人って面倒臭いね」

不思議そうに首を傾げる定春に抱きつく。獣臭い。

「きゃうんっ！」

「心配してくれてるの？　ありがとう。でも大丈夫だよ」

鳥と一緒に飛んでいけなかった海、拾った犬。

諦めましたよどう諦めた、見捨てられぬと諦めた。そんな唄を口ずさむ。

再び月が空に上がる。貌かんばせは僅かに陰り、それでも白く美しい。

月に照らされ影は濃く深まる。

影を体現したかの様な黒い姿。

刀を吊り下げ、静かに歩く。

一軒の大きな屋敷の裏手。

土方さんが、本来閉ざされているべき勝手口に手を掛けると、オーブン・セサミの合言葉も不要で、戸は音もなく開いた。

「お巡りさんが不法侵入とは世も末ですなあ」

弾かれる様に振り向く。

手から離れた戸がパタンと軽い音を立てて閉まった。

「何しに来た」

「んー。しにというか、どちらかと言えば帰る感じかな？」

「ならとつとと……」

帰れと言おうとした言葉は私が持っているモノを見て吐息となつて消えた。

「お巡りさんがお探しなのは、金の首ですか？　銀の首ですか？　それとも汚ねエーこの首でしょーか？」

蠟で出来た人形。そう思わせる程に冷たく白くなった蔵場の首を掲げる。

「何でテメエーが！」

続かない無音の怒りが黒く鋭く、心を抉えぐる。

「怖いなあー。勘違いしないで下さいね？　拾ったんですよ。その道端で。びつくりですよ、暗がりの中におっさんの首がポーンと一

つ。ホラーですよ。あ、こういう話へーキでしたっけ？ 失礼、聞く必要も無かったですね、鬼の副長さんがホラー苦手とかどんな冗談かかっていう話ですよ。で、どうしたもんかと思っていたら、土方さんの姿が見えたんで、もしかしてこの首落としたの土方さんだったりするのかなあーと思つて後を追いかけたつて訳なんですよ。どちらにせよ落し物はお巡りさんにつて相場が決まつてますしね？」

量を増すことで軽さを増した言葉は届かず、憐憫れんびんと後悔で研ぎ澄まされた瞳が濁る。

「ガキがンなもんぶら下げてんじゃねエ」

そして、低く絞り出される様な声に闇が深まる。

「んなもんつて仏さんに失礼でしょーに。ああ、ついでにこんなメモも拾つちやいました。なんか幕府の要人らしき人の名前がちらちらと書かれた取引書類？ まあガキには良く分かりませんね。これもお渡ししときます。ちゃんと仕事して下さいよ？ 税金泥棒さん」

返される言葉はなく、その軽さをもつて濁りを薄めようとした行為は失敗に終わる。

しかたなくそれ等を押し付けるように渡すと忌々しげに舌打ちを返され、本当に嫌になる。

「それじゃあ私はこれで」

けれど、それ以上引き止められなかった事が幸い。

闇に紛れ私は海へ跳ぶ。

代わりに鳴いてくれるカモメは夜の海にはおらず、薄い雲が月を隠す。

光を失い、のつぺりと墨を流した様な海に全てが流れれば良いと願った。

もののけ侍

ケチャップのかかったオムライスが食べれなくなるだとか、サスペンスドラマが見れなくなるだとかそういう事を少し恐れていた私は、一切変調をきたさない己の図太い神経に呆れ果てる。精々、バイト先でレジを二重に通してしまったり、釣り銭を間違えたりその程度。日常の範囲を超える事はなかった。

そして気になった事件の行方は、闇取引の利益を発端とした仲間内の犯行という事で手打ちとなった。

結婚前夜に何者かに殺害された蔵場、捜査線上に浮かび上がる不正取引。マスコミが群がりそうなネタだけれど何故か騒ぎにはならず、税金泥棒も仕事をするんだなあーと納めたこともない税金の使い道に関心を寄せる。あ、消費税ぐらいは払ってるっけ？

けれどまあ、それで全てが丸く収まったという訳でもなく……。

「定春借りるね」

ソファアで寝そべりながらジャンプを読んでいる銀さんに声を掛けると、身を起こし、こちらを向いた。

「最近定春とやけに仲いいな。神楽が拗ねてっぞ」

「ペットブーム再来中なの知らない？ 流行に敏感なんですよ女の子は」

頭をぼりぼりと掻きながら問われる言葉の返事を、先日やっていたテレビの中に見つけ出し、答えとした。

己が定春を連れ歩く理由がそれだとは明言してはいないから、まるっきりの嘘という訳でもない。

「俺ア嫌いだね。そーいうペットをアクセサリーか何かと勘違いして連れ歩く様な風潮。大体、テメーのモンじゃねーんだよ。金とるぞ、レンタル料」

「あげてるおやつ代請求するよ？」

「銀さんとしてはやっぱり、勝手に住み着いた野良犬見てえなモンに金取るってーのは」

「がふっ」

無駄口を叩く銀さんが定春に噛まれた。中々に賢い。

「定春ー行くよー」

「わん」

「テメー、今日こそはどつちが上か分からせてやるよ」と息巻いてる銀さんを置いて私は定春の縄を取り階段を駆け下りる。

「定春ー、今日は何処に行こうかー」

「わん」

「そつかそつか、じゃあそこに行こうかー」

分かりもしない返事に適当に目的地を決めてぶらりと徘徊。一本杉の立つ江戸が見渡せる丘。

少し歩くには遠いけれど、天気の良い日は風が気持ち良い。

「定春、天気いいねえー」

「わふう」

少し眠そうな定春の頭をかき混ぜると迷惑そうに首を振るい、手を払いのけられた。

「なんだよケチいなあー」

だらりと寝そべる定春を見習って、その腹に私も背を預ける。

見上げた空。雲が流れていく。

水、三十五リットル。炭素、二十キログラム。アンモニア……それら全てを足せば命の重みになるのだとしたら人の命のなんと軽い事か。

この手で奪った命の重み。

「定春ー、人間って怖いねえ。つい最近の事なのにもう忘れちゃいそうになるよ」

忘れちゃうと口には出したものの、それは嘘だった。はなから分かっちゃいけないというのが正直な所。けれど、それを認めるには甚だ私の精神は脆弱で、言葉の分からない獣に愚痴る事すら出来なかった。

薄れつつある記憶を反芻して思い出そうとする。砂袋に粘土を詰めた様な重み、冷たいゴムの様に感じた皮膚……。ペしつとしつぽで叩かれる。

「なに？ 煩うるせいって？」

しつぽを動かす事すらもう面倒臭いのか、身を少し振よじって返事を返す。そーいう所は飼い主によく似てる。白い姿も。

少しゴワゴワしている真っ白な毛を撫でながら獣の匂いを嗅ぐ。

私も少し寝ようかなあー。体を白い毛に埋めると、その白に侵食される様な妄想を抱き、それが本当ならばいいのにと、生命の鼓動と温かさに安心して目を閉じる。

ほかほかの日差しに微睡ましろむここは、平和の象徴だった。

覚醒する意識の間で、陽だまりの匂いを嗅ぐ。太陽に干された獣の匂い。

目を覚ますと、丁度、太陽が西に沈んでいく所だった。

立ち上がり、「帰ろっか」と定春を振り返ると、反対側を気にするような仕草。回りこんで見ると、白い毛に保護色の様に沈み込んだ銀さんが寝ていた。

後をつけてきたのだろうか？ でもさ、普通、寝るかなあー。もうちよつと隠れたりしない？ まあこんだけ堂々としてくれると、こつちも気を使わなくていいんだけど。

私の気配を感じたのか、その瞼がぴくりと動く。

「銀さーん、帰るよ」

その声に銀さんは、一度硬く目を絞ったのち、目を覚ます。

「ふわー。よく寝たな。お前、いー場所知ってんじやん。流石ホームレス」

大きく開いた口と空に向って伸ばされた腕。銀さんは、ぐるりと首を一周させると寝起き特有の少し柔かい目で、こちらを見上げた。

「借り暮らしだよ借り暮らし」

「どつちでもいいじゃねーか」

「横暴だな。銀さんは」

なんだかその柔かい仕草が銀さんの優しさを表している様で、苦笑しながら、距離を取りたくなる足を押し留める。

「にしても……こんなどこまで来て昼寝とほいい身分だなあー」

一本杉の根本、白い獣、太陽。風に吹かれそよぐ草。

銀さんの言葉通り最高の贅沢だろう。けれどそれを享受きやうじゆしたのはなにも私だけではない。

「そうですねえ、銀さんの可愛い寝顔も見れましたし？」

「エロいなお前」

「今更？ 遅いよ銀さん」

いつものペースを取り戻しながら、追ってきてしまったこの人に何を返せるのかを考えるが、返せるものなど何もない事に諦め、手を貸す事にした。

「銀さん行こうか」

銀さんは、差し出された右手にニヤリとイタズラを思いついた様な顔をする。

私がそれに疑問を覚える前に、右手は銀さんの大きな手の平に掴まれ、ぐいっと予想外の力で引っ張られた。

「わっ」

視界が真っ白に染まる。鼻孔をくすぐ擦るのは獣とお日様と……少し汗臭い銀さんの匂い。

飛び込んでしまった銀さんの胸の中。引かれた腕の力強さに、私と銀さんの性別の違いを改めて認識する。

そんな事を意識した途端、なんだか恥ずかしくなってしまうて、慌てて体を起こそうと背筋に力を込める。「びっくりした、急に止めてよね」と照れを誤魔化す準備をしながら。

けれど、起き上がろうとする私の努力は腰に回された腕に邪魔をされ、ついでに反対の手が頭を押さえつけるように髪をかき混ぜるせいで、ますますもって思考は混乱をきたす。

「意外と髪、柔かいのなあー」

「ぎ、銀さん？」

何!? 冗談? 嫌がらせ?? 疑問符と感嘆符に侵された私が上げる声はみっともないほど上ずり、逃げ出そうとひねる体は上手く動いてくれない。

「それになんだ? 獣臭い」

「ツツ!?!」

スンと鼻を鳴らす音が耳の傍で聞こえた。本当何!? 性的な嫌がらせ?

「銀さんもだよ!」

「え? 何嗅いでんの? エロおー」

叩き付ける様に上げた声は、気の抜けた平坦な声に相殺され、そこでようやくからかわれている事に気付く。

なんだか一人だけ意識している事がバカバカしくなって、強張らせていた体の力を抜く。

「そっくりそのままお返ししますよ」

腹筋だけで支える上半身は中々に辛く、姿勢を少し直し、迷った末、腕を銀さんの首に回す。

何か惑えばいいと仕返しのな物を考えたが、意に反して一ミリ足りとも動揺を見せない姿に、何か…:尊厳的なものが死んだ気がした。

まあ、そんな物を見せられても困りはするのだが。

定春の匂いなのか、銀さん匂いなのか、私の匂いなのか、もう誰のものかも分からなくなった獣の匂いに包まれる。

「獣もいいけど、人間だって悪かねーぜ?」

声が振動し私の内側に直接響く。そうあからさまでは無かったけれど、避けてしまったのは確かだったから、聡いこの人が気づかない訳はないのだ。

あーあ、銀さんの手口にまんまと引つかかってしまった。

そう自覚はあるけれど、押し売りを専売特許とする悪徳業者から逃げる事は難しく、諦め混じりに口を開く。

「人間はきらい」

「おめーも人間だよ」

「嘘。銀さんがきらい」

「ちよつとちよつと何かしたっけ俺?」

「セクハラ、現在進行形で」

温かな体温が私を溶かしてしまう。

縋り付きたくなる様な温度と、優しさ。

顔を埋めた肩が私を背負ってくれようとしているのだと思うと嬉しくて、反面、苦しくなる。

「本当はね、私、優しい人間が嫌いなんだ」

優しい人間は、傷ついた私を見て傷つくでしょう？ 獣は心配はしても傷つきはしないから、獣がいい。種族の違いに救われる物だつてあるんだ。だから、獣がいいんだよ、銀さん。

僅かに残された芯の硬さで、弱さを押し曲げる。

「残念だったな。人間つてーのは優しさだけで出来ちやいねーんだよ」

「そうだね、銀さんの半分はマダオで出来てるしね」

低く、囁くように。回した腕に力を込めれば、無理に言わなくてもいいとでも言うように、背を優しく叩いてくれる。

「ちげーよ、何かもつとこー燃えるもんで出来てんだよ」

ふわりとした、諦めの籠った遠い響き。そんな声だった。

無理に引き出そうとしない優しさと、それに耐えうる強さを銀さんに感じた。

「燃えるねえ……ジャンプとか？」

ジャンプの主人公らしくない、それでいて誰よりも主人公らしいこの人が愛おしくなる。

「確かにジャンプは燃えるけど、お前せつてー違う意味で言ってるだろう」

そんな本心を押し隠した言葉は伝わる筈もなく。

「バレましたか」

「バレバレだよ」

ああ、銀さん。無理に背負わず温度を分けてくれるだけの行為が、どれだけ私を救っているか分かるだろうか？ 私がどれだけその優しさに感謝しているのか、ちゃんと伝わっているだろうか？

私、今、とつても幸せだ。

自然と込み上げる笑い。

「人間も悪かないねー銀さん」

「だろ？」

顔を上げると、綺麗な灰色の虹彩まではつきりと分かる距離に、少しドキリとする。けれど、それすらなんだか可笑しくて、クツクツと体が揺れる。

「いつまで笑ってんだよ。オラ、行くぞ」

私を持ち上げ立たせてくれる銀さん。それはまるで、立てなくなっていた私を助けてくれた様で、全てを吹き飛ばす様な風が心に吹いた。

それに返せるものなど何もないので、私はただ「ありがとう」と口にする。

「わんっ」

「おわっ」と

後ろから定春に頭で押され、私は無様に転ぶ。そのまま定春に押し掛かれ、顔を舐められる。

「ごめんごめん、忘れてないよ。定春もありがとうね」

何度転んだって助けてくれる物がこんなにも沢山ある。

重さは分からないけれど、その温もりだけははつきりと分かった。

だから、それでどうか許してはくれないだろうか？

指を斬る

「新八くーん」

「うわっ……な、何するんですか!？」

ソファアーの上で折り目正しくテレビを見ていた新八君の首筋に腕を回し、横から抱きつく。するとワタワタと所在しよざいな無く手を動かし、耳から、首筋から、おおよそ染まりやすい所は全て真っ赤にして面白い程焦り出す。

予想通り過ぎる反応に、私はにまりと顔の締りをなくした。

「銀ちゃん。きーやんと新八が嫌らしいことしてるアル」

「ほっとけほっとけ。そのうちメガネをケツに二、三匹連れて歩き回るだろーよ」

神楽ちゃんと銀さんが、テーブル向こうのソファアーに並んで、鼻を穿ほじりながらこつちを見ていた。

公開プレイ……興奮するじゃないの。

「新八君、メガネの生産……しちやう?」

「な、なななに言ってるんですか!」

「それとも私じゃ嫌?」

「キ、キキキキりさんンンン!？」

耳元で囁ささやけば、生産される物がメガネで有ることへのツツコミも忘れた悲鳴が上がる。

「良かったアルな。夫婦仲良くメガネ屋でも始めるヨロシ」

言葉と口を尖らせる神楽ちゃんだけれど、その目は面白くもないニュースを垂れ流すテレビに向けられていた。

んー……。これはアレですかね。

「神楽ちゃんもやーらしいことする?」

笑って聞けば「きーやんがどうしてもって言うならナ」と言っておらずと近づいてくる。

そんな神楽ちゃんを新八君と一緒に腕の中に閉じ込め、抱きしめる。

神楽ちゃんの華奢な肩に腕を回すと、丸い形の良い頭が鼻先を掠かす

め、ふわりとお花の様な匂いが漂う。使っているシャンプーはきつと銀さんも神楽ちゃんも一緒なのだろうけれど、糖分を大量摂取する白髪侍よりも、神楽ちゃんは甘く香る。

「触りすぎアルヨ。これ以上は有料ネ」

照れくさそうな顔に頬を寄せ「酢昆布一箱でいかがでしょうかお姫様？」そう問えば「二箱アル」と顔を染めながら抱きついてくる。

先ほどまで逃げ出そうと身を振よじっていた新八君は諦めたのか、されるがままに黙りこくり、それでもこちらを見る勇氣は無いのかそっぽを向いていた。

新八君は牛乳石鹸だ。

「銀さんもくる？」

流石にこれ以上は腕が回らないけれど、頑張ってみましようかと、誘う。

「おめーのチチがもうちつとあればなあー。あとケツと色気も」

一言も二言も多い言葉に俄然がぜん、闘志を燃やす。

「リーダー。反逆者に対する刑はくすぐりの刑が妥当だと思いましたがどうでしょうか？」

「甘いアルな。圧殺の刑も追加するヨロシ」

にやりと二人で顔を見合せると、ほんのり汗を流し、銀さんは腰を浮かす。

「銀さんほら、アレだよ。用事思い出した……」

「問題無用アル！」

「いや、それを言うなら問答って、や、やめろ。そ、そこは！ ギャハハッ」

神楽ちゃんが逃げようとした銀さんを床に取り押さえ、すかさず私は抱きつき脇腹をくすぐる。阿吽の呼吸が織りなす連係プレー。

それに乗じて、新八君も悪い顔をしながら脇を担当する。日頃の鬱憤うっぷんが溜ためまっていたのだろう。容赦のない責めに、声を上げて銀さんは悶え、苦しむ。

一通りくすぐったあと、息もたえだえな銀さんに追い打ちをかけて、三人でのしかかる。

「ぐえっ……キリ……テメエ後で覚えておけよ……」

「乳の事？ 尻の事？ ちゃんと覚えてますとも」

「じゃあ、追加しておけ。乳も尻もねえーくせに体重だけは……ぐはっ」

失礼な！ 誤解を招くような銀さんの発言に腹を立てた私は、鳩尾みぞおちに拳を突き立てた。

「馬鹿アルな」

「懲りないですね」

ノックダウンした銀さんを下敷きに、神楽ちゃんを背負って、新八君を右腕で抱き込んで、少し高めの温度に幸せを感じた。

「熱イー」そう言いながら銀さんがソファアの上で寝転び、私は神楽ちゃんに並んで、新八君は「お茶入れますね」なんて台所へ。

コトンとテーブルに置かれたお茶に「ありがとう」と返す。

「急にどうしたんですか？」

新八君が私の前に立ち、そう言う。

神楽ちゃんも同意する様な目でこちらを見ていた。

「何が？」

確証を持った問いに素直に応える訳にはいかず、問い返す事でそれを回避する。

「何がってまた、そーやって……。大体キリさんはいつもいつも……」

「なんのことやらさっぱりですねえ。天気もいいしちよつと運動でもしてこようかなあ？」

その先を遮る様に立ち上り、壁に立てかけられた竹刀を手取る。

「まったくもう……」

ため息混じりの声を後にし、靴の踵を潰して外へ出る。

少しだけ甘えて見せれば、そこに付け入れられる。そんな隙を見せてしまっている自分の弱さを棚に上げたままに、本当に良く出来たコピーだと文句を垂れ、振り返った万事屋銀ちゃんの看板。なんだかキラリと光った気がした。

新八君から逃げ出しやってきたのは、かぶき町から程近い河川敷。ザリツと粒の大きい砂を踏みしめながら、竹刀袋から竹刀を取り出す。握りの部分が黒く汚れた使い古された竹刀。新八君からの借り物であるこの刀はきつと色んな人の手に渡り、今ここにある。

志村剣——新八君のお父さん——、尾美一塾頭おびはじめ、その他の門下生達。その人達みたいに強くなりたい。

丁寧に構え、無心になるまでじつと動かず心を鎮める。

そして教えてもらった型を丁寧に繰り返す。

汗ばみ、呼吸が上がってきた頃、ゆっくりと竹刀を降ろす。

「あら、もうやめるの?」

気がついたらミツバさんが、土手から降りる階段の丁度真ん中辺りに立ち、こちらを見ていた。

「こんにちは。今日はこの辺で……。バイトもありますし」

いつから見られていたんだろうか。長いことあの三人を見てきたこの人に竹刀を振るう姿を見られるのは、なんだか恥ずかしかった。

お世辞にも上手いとは言えないし……。

布でぎつと汚れを拭った竹刀を袋に仕舞う動作で、照れを不自然じゃない程度に紛らわす。

「そうなの残念ね。結構好きなのよ、見てるの」

そう言いながら階段を降りてきたミツバさんは、キラキラ光る川の先に目を細めた。

近藤さんや、沖田さん……土方さんを送った目。

「好きですか……」

「ええ、好きよ」

風がミツバさんの髪を巻き上げる。着物の袖がたなびき、その姿がセピア色に染まる。

「武州、帰るんですってね」

沖田さんから聞いた話。

「出戻りって恥ずかしいわ。あの人もあんな事になってしまったって……。なんて、キリちゃんにこんな事を言っても仕方ないわね」

どこか寂しげに笑う姿に罪悪感が過る。

何を言えればいいのだろうか？

「……見送り、行きますよ」

迷った末に口に出たのは別れの言葉だけだった。

慰める権利すら失ってしまった私は、この人の背を送り出す事しか出来ない。

「いいの？ そーちゃんも送ってくれるって言ったんだけど、仕事あるじゃない？ 断っちゃったのよ。しよぼくれて可哀想な事をしたわ」

「私は大丈夫です、予定必ず開けておきますから」

「ありがとう。一人で行くのはちよつと寂しかったから、嬉しいわ」

あの屋敷で一人暮らすのだろうか……。

病室で来るはずのない人を待っていた己と重なる。

「じゃあ、約束ね」

「はい」

けれど、笑って小指を差し出すミツバさんに、重なっていた幻影はかき消され、指に指を絡ませ、約束とした。

ミツバさんと別れてから数日後。

武州行きの電車が出る駅前。青い瓦屋根が付いた銀色時計の下が、待ち合わせ場所だった。

枯れ木も山のなんとやらの精神で、ダメ元で銀さんを誘ってみると、「暇だしなあー」なんて捻^{ひね}た事を言いながら付いて来てくれた。

他人ならばちゃんと見送れるというのがなんともこの人らしいと、少し呆れる。

「ミツバさん遅いなあ」

「時間か、日にち間違えたんじゃないの？」

「いや……そんな事は……」

取り出した携帯のスケジュールを確認する。うん、間違いない。

それから体内時計で小一時間、それでもミツバさんは現れなかった。

「何かあったのかな？」

「実は嫌われてんだよお前。可哀想に、銀さんがチューペット奢ってやつから元気出せ」

「そんな訳ないじゃん。ミツバさんと私はラブラブなんですうー。ヤキモチ焼かないでくれますうー？」

「誰が！」

「銀さんがだよ。今何時？」

もう一度、頭上の時計を見上げる。念の為に確認した携帯の時計とも合っていた。

約束をすっぱかす人じゃない、事件とか事故とか……。

丁度、目の前。シヨツピングモールの壁に設置された巨大モニターに、緊急速報と赤いテロップ付きで映像が流れる。

「銀さん……あれ」

指さした方向を見た銀さんの眉が険しくなる。

モニターに映し出されたのは、病院の窓から顔を出した一人の男と、喉元に刀を突きつけられた人質。

画像が荒くてはつきりと顔の判別は付けられなかったが、髪の色や、背格好がミツバさんに良く似ていた。

「私、行ってくる」

「オイ、待て！」

後ろから銀さんの声が聞こえたが構わずに走りだす。なんで？

歴史のぶり返し？ 世界の修正力とか何か？ いや、それはない。だって鉄矢さんは大丈夫なんだ。

跳んだ先では病院の入り口に立つ警官の姿。入り交じるのは真選組。

「ぎげんな！」

一般人の立ち入りを禁止するポールの向こう側に、土方さんの胸ぐらを掴んでいる沖田さんの姿があった。

「頭を冷やせ、状況を見ろ。あれは人質を開放する気なんてねえ、テメーごと吹っ飛ばす気だ。避難を優先させろ」

「うっせーそんなのわかったもんかよ！ 今すぐ突入させろ!!」

「総悟！」

「もういい。テメエの許可なんて要らねえ、俺一人で行く」

「待て総悟」

胸ぐらを離し行こうとする沖田さんの肩を土方さんが掴む。けれどそれを振り払い、まるで親の敵であるかの様な瞳で沖田さんは睨みつける。

「離せよ。なあ、土方さん。アンタは、そーやって土道だがなんだかしんねーもん掲げる振りして、結局のところテメエや、隊士^{アイツ}等の命惜しさに斬り捨て……ッッ!？」

鈍い音と共に、沖田さんの頬に土方さんの拳が飛ぶ。派手な音を立てて吹き飛ぶ沖田さんに、一瞬注目が集まるが、土方さんに睨まれ、その視線は四散した。

「痛えじゃねーかよ。凶星つかれて拳振り上げた……」

「オイ、原田。コイツの代わりに持ち場につけ」

「テメツ！」

「総悟。お前はもう帰れ。邪魔だ」

倒れこんだ沖田さんが土方さんを睨みつけるが、土方さんはそれを振り返る事なく、次々と指揮を飛ばす。

慌ただしく動く現場。病院の入口から次々と患者や、医療関係者らしき人達が出てくる。悲鳴と怒号が入り混じり、騒然としていた。

子供が転び、手を離してしまった母親が叫ぶ。点滴を吊り下げた台車が倒され、溶液がぶちまけられる。

それなのに、なんだよこれ……こんな沖田総悟を私は知らない。

駄々っ子の様に周りを見ずに当たり散らし、指示を無視し、無茶を……我儘を口にする沖田総悟なんて私は知らない。

「クソツタレ」

沖田さんは唾を吐き捨て立ち上がると、服についた汚れを払うことなく、ポールを飛び越えこちら側へやってくる。唾には血が混じっていた。

視線が合う。

「へっ……笑いたきや笑やーいい。身内一人救えない無能なお巡りさんってなア」

あれはやっぱりミツバさんなのか……。でも……。

「まだ助からないと決まった訳じゃ」

「時間がねえーんだよ。奴ア爆弾もってやがる。時限式だよ。四半刻もすりゃあーこんな建物なんて木っ端微塵でエ。なのにアイツは……一般人の避難だ？ んなの糞食らえてえーんだ」

苛立ちの中に見え隠れする悲痛な思い。

「お前も巻き込まれる前にどっかに避難しな」

「沖田さんは……？」

「俺ア行くぜ、アイツの言う事なんか聞くかよ」

人でごった返す正面玄関以外の進入路を探すつもりなのだろう。

ダメだ……行かせてはダメだ。だって沖田総悟は、真選組は……そんな存在じゃないだろう？

「沖田さん！」

「聞いてねーのかイ？ とつとどっか行けつってんだろ！」

怒声と震える肩。

沖田さんも少なすぎる残り時間にそれが無理である事を分かっているのだ。

「私、約束したんだ。ミツバさんの見送りに行くって」

「何言ってやがる」

振り返った沖田さんは迷子の子供の様に見えた。

「その時、聞いたんだ。ミツバさんはちゃんと伝えた筈だよ。自分の事より仕事を優先してって」

「うっせー黙れ!!」

歪め見開かれた目は怒りと迷い……。最後になるかもしれない願いが沖田さんを縛り付ける。

その絆でもって沖田総悟をたぐり寄せる汚さを私は是とした。

「黙らないよ。ねえ、沖田さん。私、沖田さんとも約束するよ。貴方の代わりにミツバさんを助けるって」

振りほどけない糸に絡み取られ、沖田さんの燃え立つ様な姿が揺らぐ。

「んな戯言俺ア信じねーぜ。いざとなりやーテメエ可愛さにケツま

くって逃げ出すのが人間だ」

「そうかもしれない。でもそんな人間ばつかじやないってことは貴方の方がよく知ってる筈でしょ？」

ミツバさんが見つめてきた背をその側で見てきた沖田さんなら、誰よりも知っている筈なのだ。

それを敢えて知らぬ振りで押し通そうとするのは、失いそうなモノを己が手で取り戻すため。だから、私はその建前を打ち崩す為に言葉を尽す。土道なんぞ知らねエと背を向けながらも、建前がなければそれから逃れられぬのが沖田総悟なのだから。

「……んな事は……」

「知らないとは言わせない」

逃げ道を塞げば、悔しそうに言葉を迷わせる。

「だからつってどこの馬の骨とも知れねーテメーがそうだなんて事を俺ア……」

「信じろよ！　ぐだぐだと屁理屈捏ねないで今は信じろよ！　私は……私は沖田ミツバの友達だ!!」

豪語した言葉の重みに心臓が早鐘を打つ。

沖田さんからギシリと歯が鳴る音が聞こえた。硬く握り込まれる拳。

薄い瞳は、爛々らんらんとギラつき、骨の一本一本、筋肉の軋みも、心さえも見透かす様に私を探る。

瞬き一つで殺される様な心持ちで、だが負けじとその視線を受け止める。

息を止め見つめる先で、ゆっくりと、口の形を変えるのがハッキリと見て取れる程ゆっくりと。

「……認めねえーよ。テメエみてーなのが姉上の友人なんて俺ア認めねエ……だが……破ったら針一万本飲んでもらうから覚悟しろイ」

瞳は強い光を宿す。

「沖田さんもサボらないで仕事するって約束してね。破ったら針一億本だよ」

「飲むかよ。俺を誰だと思ってる」

「真選組一番隊隊長沖田総悟だぜい」

黒い隊服の裾をたなびかせ、もう一度向こう側に戻った沖田さんは「そこは俺の場所だ」と言いながら、原田さんに蹴りを入れる。

それでこそ沖田総悟だ。

花束の女

病院を見上げ、一気に跳ぶ。

ミツバさんに刀を向けている男の背後に立ち、その手首を刀ごと抑え、電撃を打ち込む。

「なっ……」

ビクリと体を震わせ、ズルリと滑り落ちた。

ミツバさんを傷つけぬ様注意を払い、力の抜けた手から刀を取り上げる。

「キリちゃん……いつの間にも?」

「秘密です。魔術師はタネを明かさないもんですよ」

不思議そうなミツバさんにつこりと微笑みながら室内を見渡す。けれど、爆弾らしき物は見当たらない。外からは未だに人々の声が絶えず聞こえてくる。寝ている男をチラリと見るが、目を覚ます気配はなかった。

しまった、順序を間違えたな……。

「後はどうにかするんで、帰りましょうか?」

取り敢えずミツバさんだけでもと、手を差し出すがフルリと首を振る。

「どうしたんですか? 先に逃げるのが申し訳ないとか? いやいや大丈夫ですって。こー見えてもちゃんと後片付け出来る子なんですよ?」

思い至った理由に、それが不要である訳を説明しながら一步近づく。

けれど、ミツバさんは同じだけの距離を後退^{ずさ}る。

「ミツバさん?」

「違うのよ、キリちゃん」

トンと窓枠に背をついたミツバさんが、そつと着物の襟元を広げる。その隙間から見えたアクセサリーというには無骨過ぎる鈍色^{にびいろ}の首輪。

つるりとした装飾のない『輪っか』という表現が似合うそれは、ぴっ

ちりと隙間なくミツバさんの首を回っていた。

無骨さにダサさを加えているのはペンダントトップに代わりの、デジタル表記でカウントダウンされる数値。

見つからない爆弾とその輪がリンクする。いやいやいやいや……。二度嵌めたら取れないんですって、その人が言っただわ。ねえキリちゃん、出口から一番遠い所ってどこかしら？」

窓の外を覗きこむミツバさんの肩は震えもせず、明るい口調にはどこか慰める様な響きすら籠っていた。

「ミツバさん冗談きついですつてば……」

甲子園の決勝戦で一発逆転ホームランを打たれた投手というのはこんな気分なのだろうか？

無理やり壊す？ そんな考えが頭に思い浮かぶが、それで爆発しないという保証はない。

なら、首輪だけどこかへ……だけど少しでも位置がズレたら？ 首から吹き出した血に染まる己が見えた。

正しい選択肢はミツバさんを遠いどこかへ連れて行く事……。冷たい計算に裏打ちされたそんな考えを否定しようと、約束を思い出す。ミツバさんと同じ琥珀色に揺らめく瞳を、握りしめた拳を。

口の中はカラカラに乾き、反対に手の平はじんわりと気持ちの悪い汗を掻く。

「いいのよ。キリちゃんも逃げて」

柔かい微笑みはいつかの着物を差し出す時と変わらず、窓の外からは赤子の泣き声が聞こえる。

私は……背負いたくないだけなのだろうか？ その責を、咎を、命を。

「心配しないでください。稀代の魔術師に出来ない事はないんですよ？」

表層だけで、へらりと笑う。

「いいのよ、大丈夫。きつとバチがあたったんだわ」

窓枠から離れたミツバさんは、そつと私の頭を撫でる。

バチって……何の？ 心当たりがあるとすれば受けるべきは私で

……。

戸惑う私の表情を見て取った様にミツバさんは言葉を続ける。

「私、本当はもつと前に死ぬはずだったの。随分前からお医者様からもう長くないって言われてたのよ」

知っているだつてそれは……私が変わえたんだ。

「だから今死ぬのも大丈夫だつて言うんですか！ それは違う！」

優しく頭を撫でるミツバさんを強く否定する。

それに対してミツバさんは柔らかく、その否定も全て優しく包み込む様にコクリと頷いた。

「そうね、折角助かった命だもの大切に生きなきやダメよね。でもそうじゃないのよ。死ぬって聞かされた時、私思ったの、不幸な私のまま死ぬ訳にはいかないって。そーちゃんの為にも幸せにならなきゃって……。だけど……」

言葉をそこで区切ったミツバさんは顔を少し逸し、遠く、何か綺麗だった物を探す様な目で淡く微笑む。

「当馬さ……蔵場が手を差し伸べたのは、善意からだけじゃないって事、なんとなく知ってたのよ。でも長くないのだから大丈夫ってそう思ってた。だから、病状が改善したって言われた時ね、私……どうしようって。覚悟していた筈なのに。でも、今更取り止める訳にもいかず……。そしたらあの人死んで……。私、私……ほつとしてしまったの。酷い話よね」

ミツバさんの透明な肌に一滴流れた涙。

ミツバさんの頬に伸ばそうとした己の手が止まる。べつたりと付いた赤い錯覚が見えた。

私が汚してしまったモノ。

「だからいいのよ」

綺麗に笑い、犯人が取り落とした刀に手を伸ばす。

あまりにも綺麗だったから、私はその手を掴む事を躊躇してしまった。

「来ないで」

自ら刃を首に当てて。じりじりとドアに向って下がる。

その刀を取り上げる事は簡単だけれどその後には？

ミツバさんは後ろ手で扉を開ける。

「待ってくださいー！」

迷いを含んだ声では制するには力が及ばず。

「さようなら、そーちゃんによろしくね？」

閉じる扉。追いかけれなかった。

なぎ倒された診療器具、跳ね上げられた布団が並ぶベッド。壁に掛けられたモノトーンの時計が針を刻む。

私は……何を選ぶべきだったのだろうか。

右手で救って左手で殺す事の無意味さと残酷さに一步も動けなかった。

不意にドアがバタンと開く。

ビクリと体を震わせ見るのは、扉に片手を置いて肩で息をする……

銀さん。

「てめエ……はあ……はあ。勝手に先走ってんじゃねーよ」

「……残念ながら先走れる様なモンなんてついてないよ」

今は会いたくはなかった。だって……。

「アイツは？」

護ろうとするだろうこの人なら、届かない物を背負ってしまう。

逡巡する私に何かを見て取ったのだろう。

「答えろー！」

強く、拒否できない力強さで問われる言葉に、私は鳥を飛ばす。

院内を巡る鳥が見つけたのは屋上で遠い、黒い背を探している姿。

「屋上に。でも、首に爆弾が……外せなくって」

心の底に銀さんならどうにかしてくれるだろうという思いが隠されていた事を知る。

天下無敵の銀髪侍。いつだってこの人は私のヒーローだったのだから。

でも……。

息を荒げる姿に、汗を垂らす姿に、必死で駆け抜けて来たであろう姿に、ああ……この人も人間なのだ。と今更ながら認識する。

救えない物を拾って歩きただの人間だ。

「そうか」

「待って！」

それだけを言っただけで再び走りだそうとする姿を引き止める。

「行って、行ってどうするの？」

こちらを振り返った銀さんは、澄んだ灰色の目でただ笑う。

「知らねーよ……お前、先帰ってろ」

積み上げたジェンガの一番の底。私が今指を掛けている物の正体を知る。

『そーちゃん……近藤さん……』

鳥が拾った声。続く名前は誰も聞いていないというのに音にすらせず、ただ思いだけを抱えて……。

私は。

「万事屋さん、依頼だよ。この人、警察に突き出して来てくれないかな？」

よっこらせと、伸びた男を引きずる。

銀さんは浮かべた笑いを収めて、こちらをじつと量る様に見つめる。

「……依頼料は？」

「激辛せんべいなんてどうでしょう？」

「人助けただ働きよかはなんぼかましか……なあキリ」

「あと一つ頼んでもいい？ 大丈夫だって言ってる？」

遮り伝えた願いを銀さんは迷っていた。

口にするだけで、私が何かを選ぶことを感じ取ったのだろう。

「万事屋さん？」

私は断れない重りを付ける。

「でーじょうぶだ」

「ありがとう」

ひたつとこちらを見つめ、ハッキリと迷いなく口にした言葉に勇気

づけられ、私は跳ぶ。

びゅうびゅうと風が鳴る中、ミツバさんは一人、金網に指をかけ見
ていた。

人の顔の判別なんてつかない遠くの一点を見つめて。

「ミツバさん」

「キリちゃん……逃げてって言ったのに。今からでも遅くはないわ」

沖田さんにそうするように、困った様に眉を下げ、優しく諭す様な
口調でミツバさんは私を慮おもんはかった言葉を発する。

いつだって最後までこの人はそうなのだろう。

「もう、逃げません。私、沖田さんと約束したんです。貴方を助けるつ
て」

「キリちゃん……」

金網にかけていた手を取ると冷たく震えていた。怖くない筈がな
いのだ。

一人……ただ一人逝くことが怖くない筈がないのだ。

「だからミツバさん。私に命、預けて下さい」

その日、江戸に汚い花火が上がった。

剥き出しの鉄筋が飛び出たコンクリート片。割れたガラス。汚れ
たヌイグルミ。

かつて病院だった瓦礫の山に持ってきた花を添える。

手を合わせ、何を祈ろうかと思っただけけれど、相変わらず死の向こう
側を知らない私は何に祈れば良いのか分からず、結局形式だけの黙禱
を捧げた。

砂利を擦する音がした。

「そりゃ、何の為の花束でイ」

目を開けて振り向くと、いつもの気だるさを纏まとった沖田さんがい
た。今日は非番ではない筈なのに、現に隊服を身に着けている。

「そりや……鎮魂の為にきまつているじゃない」

そう口にしたものの、魂の存在を信じていない私の言葉は薄っぺらく感じた。

実は二つ在った爆弾。

緊張で震える手を叱咤し、「でーじようぶ」という言葉を糧に処理した終えた一つ目の爆弾。

二つ目、気を抜いていた私はそれに対処出来なかった。

ミツバさんを連れて逃げる事が出来たのは、爆発箇所が一階で、その余波が来るまでに僅かばかり時間があつたというだけの事。

銀さんや、真選組、その他大勢の人達の事を思い出せたのは、その後。

「この辺で交通事故が起きたなんて話、俺の耳には入ってきちゃいねーがねイ」

「そりやそーでしようとも」

理解不能だと、沖田さんは訝いぶかしげな顔をする。

煙と埃で真っ白な着流しを黒く染めた銀さんは、それでも犯人をちゃんと連れだしてくれた。

そして、沖田さんも約束をちゃんと守ってくれた。

「人は死んでなくても、窓辺に飾った鉢植えとか、祈りを込めて折った千羽鶴とか、そーいうのあるでしょ?」

私は汚れたヌイグルミを拾って叩き、申し訳程度にその汚れを落とす。薄茶けた埃が舞う。

そして、花束の隣に添えた。

「てめえーは一々そんなモンに花供えて回ってんのかイ。そんなんじゃ、江戸が花畑になっちまわア」

馬鹿にした様な言葉で、けれど銀さんに少しだけ似た、澄んだ瞳でそれを見つめていた。

「流石に全部について訳じゃないよ。昔ね……私、大人になれないって言われてたんだ。それで結構長い事、病院にお世話になっていて。だからかな、病院つてのは私にとって家みたいなものだったから、そこに在った物つてのが人ごとには思えなくて」

再び瓦礫の山に視線を移したせいで、沖田さんがどうという顔をしてその言葉を聞いているのかは分からなかった。

残してきた冷蔵庫のプリンや、ゲームのセーブデータ、きつと私は今、そういう物の為に祈っているのだろう。

「今は平気。奇跡が起こって、私はここにいる。つまりはさ……ミツバさんを助けたのは、ミツバさんに私を重ねてたってだけなんだよ」「んでイそりゃ」

苛立った様な声だった。

「お礼とかそーいうのは要らないって事だよ。借りも在ったし、何より私は、寸前で迷った。だからそーいうのは要らない」

振り返ると案の定、沖田さんは苛立った表情をしていた。

「馬鹿だろイ、お前。たとえお前が何を思っようが俺は知ったこつちやねーんだよ。そもそもだ、テメエに礼なんてするかよ」「そうだね」

へらりと笑った私に沖田さんはもう一度「馬鹿だな」と嫌そうに顔を歪めた。

きつと沖田さんは礼を言った所で、私がそれに意味を見出せないという事を知ったのだろう。

彼も優しい人間だ。

それを黙って受け取れる強さがあれば良かったのだけど、そうはできなくて、私はいつだって優しい人間を傷つける。こここの所は、そうしないで済む様に生きていたつもりだったけれど、結局の所、人間の本質というものはなかなか変えられない。

「沖田さん、一つだけ教えておいてあげる。土方さんの煙草、火、ついてなかったよ」

謝罪の代わりにあの日気づいた事を伝える。

「はっ、んなの知ってらア。ついでに言うとな奴の足元、火もつけちゃいねえー煙草の吸殻で山が出来てたぜ」

けれど、沖田さんはそれを鼻でふんと笑った。てつきり気づいてないと思っていたのに。

「なーんだ知ってたのか。あれ？でも、私が見た時はそんなもの

……沖田さんがそれに気づいたのっていつ？」

「あ、そろそろ仕事の時間じゃねーかい。今日はどうやって土方の野郎をぶっ殺そうか」

「いや、沖田さん、それ仕事じゃないから。ってかアンタが仕事する所この前見たのが初めてな気がする」

付けてもない腕時計を見る振りをした沖田さんは、私のツツコミを無視して背を向ける。

「総悟でイ」

聞き間違えかと思った。けれど追加された「姉上も俺も同じ沖田なんで、紛らわしいや」という言い訳が、聞き間違えではない事を証明した。

礼の代わりにそう呼ぶ事を許してくれたのは彼の優しさなのだろう。

「了解、そーご……さんっ？」

去っていく筈の背が振り向き刀を抜いた。よほど嫌だったのか、眉間に皺を寄せ、眉がハの字になっている。

いや、私もどうかと思ったんだよ？ でも一応礼儀的にはと思って……しかし、口にして気付くその破壊力。

ゾワツと気持ちの悪いものが私の背を走り抜けていった。

「人間に首つて必要だったっけなア」

「いや、絶対的に必要だと思いますよ、総悟」

言い直すと「そーいやそーだったな」と白々しい事を言つて、今度こそ路上駐車していたパトカーがサイレンを鳴らし走りだす。

「総悟……ね」

もう一度、口の中で転がした名前は、それはそれでむず痒いものではあるが、まあその内慣れるでしょうと、首を必要とする私は、彼の優しさを受け取った。

三つ葉のクローバー

道でばったりと土方さんに会った。

病院での爆弾魔事件を抜かせば、先日の蔵場の一件以来の再会。爆弾魔事件も一方的に私が見ていただけなので、再会という意味合いからすると、蔵場の一件以来で正しいのだろう。

「……なんだ、そのアレだ……健勝か？」

「おかげ様で元気ですよ。土方さんもお元気そうで何より」

なんなんだろうその微妙な問いは。

立板に水を流すついでに、その他諸々も記憶の中から流したフリをして挨拶を交わす。

「オイ、ちよつと面貸せ」

深々と溜息を付いてしまったのは何も私が悪い訳ではないと思う。着流しを着ているって事は、非番なんだろうに、まったくもって鬼の副長殿は仕事の鬼でもあるようだ。まあ、私も用事があったので良いのだけれど。

そんな土方さんの後を追って辿り着いたのは一軒の茶屋。

店員に目配せした土方さんは案内もなしにそのまま奥へと入り、個室へ上がり込む。

後から付いて来た給仕さんは、お盆に乗ったお茶を出すと注文も聞かずに一礼し出て行った。

四畳程の広さに床の間が造り付けられた個室は、良い雰囲気という奴ではないでしょうか？

「出会い茶屋とかそ〜言うやつ？」

「ブツ〜」

思いついた単語を口にしたとたん土方さんがお茶を吹いた。あーあ、豊シミになんないといいけど。

「……ちげーよ」

「なーんだ」

残念。待合茶屋とか引手茶屋とか色々呼び名はあるけれど、少し興味あったのになあー。流石に陰間茶屋まで手を出す勇氣はないが、今

度探してみようか。

「お前、今、碌な事考えてねえだろう」

「なんの事やら」

ジト目で見つめてくる土方さんから視線を逸しすつとぼける。

「まあいい。先日大江戸病院で爆弾騒ぎがあつてな」

「それで？」

はいはい知ってますう。とは心の中だけで、表面上はやる気のない返事を返す。

「爆弾処理は間に合わず、犯人の目論見通り病院は爆破。寸前でどっかの馬鹿が犯人だけ連れて出てきやがったが、肝心の人質の姿はなく、死んだと思われていた。だがな、死んだと思われた人質がいつの間にか何者かの手によつて救出されていてなア。しかもだ、人質もなんで助かったのか頑がんとして口を割らねエ。覚えてないの一点張りだ」

「良かったじゃないですか何にせよ助かつて」

適当な相槌を打ちながらズズズツとお茶を濁す。
ミツバさんも総悟もどうやら私の事は黙ってくれてた様だ。ついでに言えば銀さんも。返した筈の借りがまた戻ってきてしまったなあーと赤を付ける。

「残念ながらな、それで済まねエのがお役所仕事つて奴だ。ほうぼう聞き回つて得られた唯一の証言が屋上にチラリと見えた桃色の着物。お前が良く着ている奴に似てやがる。なあ、何か知つてんじやねーのか？ あん時お前も居たんだろ？ あそこに」

そんな赤字決算に突入した私の帳簿を覗きこんでくるのは、剣呑な瞳。

「知らないですつて、同じ色の着物なんてそこら中にありますよ」

「だろうな」

じつところこちらの表情を伺う瞳にニツコリと微笑めば、やけにあつさり返される。

肩透かしを食らった様な気分で、煙草に火を付けた土方さんを見つめる。

「何、鳩が豆鉄砲を食ったような顔してんだよ」

「いや、用事ってそれだけですか？」

わざわざこんな場所まで連れてきたにしてはあっさりし過ぎている。

「んな訳ねーだろ」

やっぱり。「こっからが本題だ」と前置きした土方さんは、言葉を続ける。

「犯人……転海屋の残党だった」

「そう……」

攘夷浪士か、はたまた頭のイカれた野郎かと思つて気にも止めてなかったが……繋がっていたのか。

「……討ち漏らした奴がいてな。アイツがオレ等に情報を流したんじゃないねーかつー根も葉もない噂を信じて、逆恨みした拳句、どうせ手が後ろに回るなら一人でも多く道連れにドカン……そんな計画だったらしいぜ」

ギョツと灰皿に煙草を押し付けた土方さんは忌々しそうに顔を顰めた。

予定通りであればどうだったのだろうか……似た様な事は起きたのだろうか？

「勘違いすんじゃないぞ、明らかにこっちの手落ちだ」

「何を勘違いすると言うんですか。私は拾い物をしただけで、アンタ等の不始末なんて知りませんよ。大体、そんなミスしてるから税金泥棒だつて言われちゃうんですよ」

「……そうだな」

ツラツラと辛辣な言葉を投げつけても鉄仮面はピクリとも動かない。

「反論しないんですね」

「何を言つても結局お前には無駄なんだろ」

言い切りの形に、確かにそうだなと頷く自分がいた。

何か手を打てた筈だと嘆ける程自惚れてはいないし、この未来を予想できたかと問われれば首を横に振るしかない。

それでも全くの無責任でいられるかと言われれば、関わった以上無

理だった。

けれど、そんな自虐プレイを堂々と見せつけられる程、羞恥心は失っていないので、当て擦る事こすで誤魔化そうとしたが、あの夜と同じくこの人には通じなかった。

「土方さん、なぜそれを私に伝えに？」

これ以上無様を晒すのも嫌なので、話を変える。

「流石にこんだけの騒ぎだ、上も全て黙らせる訳にはいかねエ。俺が伝えなくてもその内ニュースか何かでテメエは知るだろうよ」

ようやく彼の意図を知る。唐突に知らされるよりはと、気を使ったのだろう。

その親切を無駄にする様な行為に、今更ながら罪悪感が芽生える。かと言って己を曲げることも出来ず、礼を言うのも違う様な気がして、冷めてしまったお茶を啜り相槌の代わりとした。

「まあ、話はそんだけだ。ここの善哉ぜんさい、なかなかに旨いって評判だぜ」最後に土方さんはそれだけ言うと言を上げた。

食ってつけて事だろうか？ 相変わらず不器用だなと思う。

きつと払ってくれるのであろう善哉の代金と引き換えるには無粋も過ぎるが、伝えずにはいられなくて口を開く。

「ねえ土方さん。私、一つだけ分かった事があるんだ……。人の命つてのは案外簡単に失いやすく、暖かいって事をさ。土方さんはそれを知っている筈なのに、なんで自分の命ばっか勘定して反対側の天秤に相手の命を乗せないの？」

草履をつっかけた格好で土方さんは動きを止めた。

「何の話だ」

「ミツバさんの話だよ」

「……………」

野暮に拍車を掛ける事を知っていながらも、逃げ道を塞ぐ。

「ミツバさん、本当はあの夜、病状が悪化して死ぬはずだったって言ったら信じる？ 爆弾首に付けられて助け損なう所だったって言ったら信じる？ 神楽ちゃんと言ったよ、最後の時また笑えたら上々の人生だって」

「お前に何が分かる」

この人は、普通に結婚して、普通にガキ産んでそれが女の幸せだと、それを護る事がミツバさんの幸せに繋がるのだと、信じているのだから。

真選組を背負い込んで振り返らない生き方こそが、ミツバさんに報いる唯一の方法なのだと思ってるのだから。

「何も分からないよ……だけど、女の幸せってのは、男には分かんないって事だけは分かるよ。最後の時、アンタが傍に居なくてもミツバさんはちゃんと笑うよ」

何が正しいか正しくないか。

正解を決めるのはきつと未来のミツバさんなのだと思う。

「……とりあえず、病院の件、礼だけは言っておく」

「土方さん、私は……」

受け取るべき礼などない。

「テメエにじゃねーよ。どっかの救出劇のヒーローにだよ」

まわり回って最初の会話がここに来て意味を持つ。私が断れない理由を作るためだったのか。

不器用なだけだと思っていたが、案外強したたかだったようだ。流石鬼の副長殿。

無責任な発言をぶちかました己の責を問う。

きつとその責めを負うのは未来の私だ。

人々が行き交う駅前で、一組の男女が銀色時計の下に立っていた。肩と肩との間を拳八つ分程空け、お互い視線を合さないよう常に前を向いている。

傍から見れば知り合いとは思わないだろう。

同じ場所で別々の人物を待つ、赤の他人にしか見えない。

ハシバミ色の髪を持つ女が頭上の時計を見上げる。

「……すっぽかさされたんじゃねーのか」

男は相変わらず前を向いたまま、ぶっきらぼうに言い放つ。

「そういう貴方こそ、かれこれ一時間はここにいるじゃない？ すっぱかされたの？」

「ちげーよ。一時間前行動が江戸での常識なんだよ」

黒髪の男は、いつの間にか懐に入っていた「駅前の銀時計前、三時。

Byマヨネーズの妖精」という怪文書を思い出しながら、苛ついた様に組んだ腕を指でトントンと叩く。

リゴーン、リゴーンと時計の鐘が四度鳴った。

「電車、行っちゃまうぞ」

「次の電車に乗るわ。それよりいいのよ？ 煙草吸っても。お医者様からもう大丈夫だって言われているから」

腕を叩いていた指が止まる。

「……禁煙週間なんだよ」

「あら、そうだったの」

鳩が首を揺らし歩いている。ゆっくりとした歩みが左から右へと通り過ぎる。

「すっぱかされたんじゃねーのか」

「さつきもそれ聞いたわ。そうかも知れないわね。でも、いいのよ。最初にすっぱかしたのは私だったもの、もう少し待ってみるわ」

ふふつと笑い、女は手に持った風呂敷を抱え直す。

女に気付かれぬ様、男は一瞬だけ風呂敷に視線を移し、気にする素振りをした。

「……すっぱかされたんじゃねーのか」

「貴方それしか言えないの？ 大丈夫よ、見た目程重くはないから」

組んでいた腕を解き、男はガシガシと頭を搔いた。

「……いつまで待つつもりだ」

「さあ……。でも、待つのは慣れてるから、いいのよ」

「お前はいつもそうだな。いいんだっていいんだって全部他人に譲ってばっかで、少しはテメエの事を考えやがれ」

そこで男は初めて女を向いた。

女は少し驚いた様に琥珀色の目を丸くし、やっぱりふふつと笑う。
「いいのよ。譲らない物、一つだけ決めたから」

「……何をだ」

「教えて上げないわ。女同士の秘密よ。それにしても遅いわ、何かあったのかしら？」

正面に設置された巨大モニターに目を移すが、CMが流れるばかりで特になにも情報は得られなかった。

「なあ、お前が待つてるのは……」

「キリちゃんよ。知ってる？ 不思議な子よね。なんでもお見通しだって目をしているのに、何か一生懸命で」

男はメモ書きをクシヤリと握り潰した。

「……なあ、待つてる間、善哉ぜんさいでも食うか」

「いいわね。美味しいところ連れて行ってくれる？」

「美味しいかどうかはしらねーがな、近くにあるよ善哉屋」

貸せと風呂敷包みを奪った男はスタスタと後ろを気にする事なく歩きだす。

善哉以外、女に何を与えたら良いのか分からぬ様を、相変わらずねと笑いながら、女は男の後をついて行く。

天国の中心でアイを叫べなかった狐 閃光花火

ダンボール一箱とギシギシ軋むメリーゴーランド。それが私の居場所であつた。

慣れてしまえば、この開放感あふれる住まいもなかなか良いものだ。

「んー。やっぱりもう着れないねえこれは」

傷んだシャツをそれでも捨てきれずに、ダンボールの奥底に仕舞う。

大切な物は失つて気付くというのならば、まさに私がそれだつた。わざと乱暴に扱つた覚えはないけれど、丁寧に扱つた記憶もなかつた。普通に、その他の物と同じように扱つていただけ。

思えば、意識的にそうしていたのだろう。大切に扱わない事で、大切では『なかつた』事にしようとしていた過去の私。気づいた時には手遅れで、向こうから持つてこれた唯一の服は着ることができなくなつていた。

失う事でその大切さに気付く事ができる。

もしそれが真理であれば、失つても大切に思えないモノは、大切なモノではなかつたと言う事だろうか？

町内会のチラシがバイト先に貼られているのを見つけ、ご自由にと書かれたパンフレットを一枚手に取る。

祭りかあ。皆を誘つて行つてみようかな？

「だからバーさん所いって来いよ」

「嫌アル。ババアに着せてもらつたら折角の浴衣がババ臭くなるアル。銀ちゃんやってヨ！」

「銀さんを犯罪者にする気ですか！ できるわきやねーだろ！ じゃあ、妙のところ行つて来い」

「姉上もう出勤してますよ」

「よし、新八。お前はやれば出来る子だと思ってたんだ。後は頼んだ」
「面倒臭いからって、僕に押し付けられないで下さいよ!」

「ごめん下さい」の返事代わりに返ってきた声。首を傾げながら上がり込むと、帯をぐるぐると体に巻きつけた神楽ちゃんを囲んで、銀さんと新八君が言い合っていた。

「どうしたの?」

「いいところにきたな」

「いいところにきましたね」

「えっ?」

掛けた声に、銀さんと新八君がこちらを向いた。

「なるほどね、依頼人から貰ったんだこの浴衣。神楽ちゃんちよつと手あげて、そうそう」

「まったく依頼料払えないからって現物支給すんじゃない?」

私が誘う前にもう祭りに行く事を決めていたらしい三人。

折角の祭りだからと、以前、依頼人から貰った浴衣を取り出したものの、駄々を捏ねた神楽ちゃんを二人は持て余していたらしい。

神楽ちゃん曰く、お登勢さんの着付けはなんだかババ臭いから嫌アルとの事。想像するに、昔気質のきつちりとした着付けなんだと思う。

それはそれで私は好きなのだが……神楽ちゃんもやつぱり女の子だから、たまにはチャラついた物が羨ましくなるのだろう。

閉じた襖の向こうから聞こえる銀さんの声が、それを説明してくれた。

そう言うことならと張り切って、帯を少し今風にアレンジ。お花を後ろで作ってあげる。ついでに襟を少し抜いて大人っぽく。

「ひゃっほい!」

姿見の前でくるくる回って嬉しそうにしている神楽ちゃんを見て私も満足だ。

「もう開けていいですか?」

遠慮がちな新八君の声に「いいよ」と返せば、開いた襖の間から一

振りの浴衣がすつと差し出される。

「どうしたのコレ?!」

「お登勢さんから借りてきました。古いけど、まだ着れるだろうって」視線を落とすと、伝統的な紺色に朝顔模様。でも、お登勢さんが着るにしては……もつと若い世代が着るような柄。

若い頃着たのだろうか。経た年を考えると痛みの少ない布地に、大切にされてきた事が予想できる。

辰五郎さんと祭りに行くこともあったのだろう。年月に思いを馳せる。

私に着ろという事なんだろうけど、そんな物を……いいのか？

「使わねーとこーいうモンは余計傷んでくんだよ。使ってやれ」

そんな思考を読んだかの様な銀さんの声に、そつと手に取る。

「ありがとうね、新八君。後でお登勢さんにもお礼言わなきゃ」

「どういたしました」

再び閉められた襖の奥で、浴衣を広げ着付ける。帯は神楽ちゃんと同じ様に。「お揃いアルナ!」と嬉しそう笑う神楽ちゃんに「そうだね」と笑い返した。

銀さんと新八君も浴衣に着替えた様で、ついでに借りてきてくれた下駄を鳴らし、祭りへ向かう。

「焼きそば、焼きそば、ボソボソの焼きそば!」

神楽ちゃんは楽しそうに繋いだ手を大きく振る。

「お前の腹満たせる程ウチの家計は甘くねえんだぞ、ほどほどにしroy」

「それもこれも、稼ぎをパチンコでなくしてくる、どつかのクソ天パのせいですけどね!」

「ばーか、あれは夢を買ってんだよ。別になくしてる訳じゃねえよ。コレだから童貞は」

「それ今関係ないでしょおおお!?!」

減らず口は健在で、新八君の皮肉もどこ吹く風という銀さん。

果たして、銀さんはどんな夢を買うのだろうか？ 一年分のいちご牛乳？ 一生分の糖分？ 彼が求めそうなものはそのぐらいで、結局夢と言っても消費前提の物なのだろうから、新八君の「なくす」という表現もあながち間違いではない。

銀さんは求めない人だ。伸ばされた手を掴むだけ。だけど、大切なものが何かきちんと分かっている人。銀色の月の周りを回る温かい光り。それが銀さんの大切な物だ。

偽りの光りをそれに混ぜてくれるのは、求めるからなのだろうなあー。

「あれ、旦那じゃねーですか。旦那達も祭りに？」

「ガキ共の付き添いだよ」

隊服を着た総悟は、たこ焼きと水風船を抱えて、りんご飴を舐めながら。頭にはひよつとこのお面までかかっている。

なかなか祭りを満喫しているようだ。

堂々たるサボりっぷりに、ある意味敬意を表したくなる。

「オイ、それ寄越せヨ」

「三遍回ってワンと言ったらくれてやってもいいぜ」

「誰が！ お前が言えヨ」

遠慮なく手を伸ばす神楽ちゃんの頭を抑えて、総悟はたこ焼きを死守する。

そろそろ手が出そうなので止めに入る事にした。いつもの服ならともかくも、浴衣で暴れては酷いことになるだろう。

「神楽ちゃん、焼きそば一緒に買いに行かない？」

「行くアル!!」

振り向き目を輝かせた神楽ちゃんは「お前には、その冷え切ったたこ焼きがお似合いよ」と、大人びた口調で総悟をムフツと笑い駆けてくる。

「あそこの屋台がお勧めネー！」

手を引っ張られた先には『大盛り、大江戸一番』とノボリが立つ屋台。頭が輝かしい大将が盛る焼きそばは、確かに大盛りで、透明のプラスチック容器から溢れんばかりだった。

「どうやら総悟も私達と一緒に祭りを回ることに決めたようで、戻ると、あそこの焼き鳥は固いだの、あそこのクジは当たりが入ってないだの祭り談義に花を咲かせていた。」

「きーやん、きーやん。次は次はっ！」

「神楽ちゃん、少し休憩〜」

強請ねだられるままに手を引かれて歩けば結構な運動量で。「僕が一緒に行きますから、少し休んでたらいいいですよ」と言う新八君にバトンタッチ。

人混みから少し離れた境内の階段で、駆けていく姿を見送った。

銀さんと総悟も付いていくのは面倒と思ったのか、特に追いかける事なくその場に留まる。

座ろうかと少し悩んだが、浴衣を汚しそうだったので、立ったまま川の流れに流れていく人を眺める。

祭りばやしと、どこかノスタルジックな屋台の明かり。

「若いつていいなあー」

「自分より若いやつにそれ言われるとイラツとすんのはなんでだろうな」

思わず呟いた私に、銀さんは階段に腰掛け、いつの間にか買ったのか赤いかき氷を掬すくいながらそんな事を言った。

「年寄りの僻ひがみじゃないですかね」

「年を気にする様になった人間は皆年寄りなんだよっ」

その言葉は最初に言い出した私を揶揄しているのだろう。

銀さんは掬い損ねた氷を舌を伸ばし受け止める。シロップに染まった舌は赤く、なんだか……。

ボヨンボヨンと水風船で遊ぶ総悟に視線を移す。

「総悟、そろそろ戻らないでいいの？ 後で怒られるよ」

「大丈夫でエ、今日は奴は非番でイ」

今日は鎖はついていないのか……。どうりで教育係がいつまでたっても飛んでこない訳だ。

総悟は何かを探す様に人混みの中を見ていた。

そう言えば途中途中も何かを探している風だったのを思い出す。

「誰か探してるの？」

「いやね、姉上も祭りに来てる筈なんだが……てつきり俺はお前と一緒にだとはかり……」

一際大きく跳ねた水風船が地面に当たり、ばしゃんと割れた。

「あの野郎……」

総悟が見つめる先には、黒い着流しと、はしばみ色の髪。

階段を駆け下りた総悟は、土方さんの後ろから肩を叩く。固まる土方さんに何かを言っつて、言い合いになって。それを見つめるミツバさんは笑う。

「ミツバさんが土方さんになったら私、土方さんの事を十四郎さんと呼ばなきゃいけないかったり……うわっ最悪だ」

思い至った未来に、顔を顰^{しか}めてしまう。

「くっそ、コレだからストレートは！ 銀さんだつてなストレートだったらなあ!!」

一方の銀さんは、土方さんがモテる理由の全てをストレートに込めて、シャクシャクと氷を潰していた。

土方さんに似ていると言われた銀さん。

口では色々言うものの、果たして銀さんは……恋をするのだろうか？

私の思う坂田銀時という人物は、恋愛なんて平和ボケしたものからは、ほど遠いところにいる気がした。

別にそれは剣呑な雰囲気身をまとっているとか、硝煙と葉莖の匂いを漂わせているとかそういうことではない。

例えばだ、ある日とても可愛くて非の打ち所のない娘さんから愛の告白を受けるとする。

この男はどうするだろうか。きつと、勘違いだとか言っつて言い包めるか、目の前でケツの穴を見せるような最低な行為をしてそれ有耶無耶にしてしまうだろう。

それか、そんな面倒くさい事になる前に、そつと距離を取るに違いない。

なぜか？ 自分にはそんな真つ当な恋は似合わないでも思っつて

いるのか？ それとも単純に恋愛なんて面倒くさいと思ってしまうのか？ どちらでもある気がする。

では逆だったら？ 銀さんが誰かに恋をする。あり得るのだろうか。

あり得ない。率直に思う。理由はすぐに浮かばないけれど……遥か遠くにそんな感情は置いてきてしまって、代わりに重苦しい、身を縛る鎖にも似た、護るといふ感情を抱いてるからか。そんな誰かの大切を護ろうとする銀さんが、自分だけの大切な物を作るような……恋なんてしない。そんな気がした。

「ねえ、食べにくいんですけど、俺の顔になんかついてるんですかー」
ストローをくわえた銀さんが目を横に伸ばして、見つめていた私に文句をつける。

「銀さん、好き」

考察を検証する為に、私は告白を試してみた。

すると銀さんは、少し嫌そうな顔をする。

「お前ね、そーいう心にもない事言うんじゃないよーの」

「いや、好きだよ？」

それは嘘ではなかったので繰り返すと、深い溜息をつく。

「お前の好きはそーいう好きじゃないでしょ」

「そうだねえ」

銀さんは正しく私の好きを読み上げて、私もまたそれを正しいと認識する。

「銀さんだから良いものの、若い娘がそーいう事を簡単にいうんじゃないよー」

「あれ？ お母さん？」

「誰がお母さんだ！」

「銀さんが」

「まったくこの子は」と更にお母さん発言を繰り返す銀さんは、もう一度シャクツとかき氷を掬う。

シャクシャクと掬って、最後の一欠まで全て食べきった、空の容器を少し持て余す。

銀さんはそれでもまだ物足りないのか、屋台を遠目に眺めていた。

「キリ、金貸して」

「いやだよ、銀さんに貸したら返ってこないじゃんか」

「じゃあ、奢りで。アイツ等には散々奢ってやってんじゃねーか、俺にも奢れよ」

「子どもと大人と一緒にしないでよ」

「ケチくせえなー。懐と胸の大きさは比例すんだな、コレだから胸の小さい女は」

「もう絶つつつ対貸さない！」

「どうせ貸す気ねえ癖に」

あーあと、銀さんは意地汚く、ストローを啜えてぶらぶらとさせる。

「お前さー、アイツ等に甘すぎんじゃねーの？」

まだ戻ってこない二人の事を指して、銀さんはそう言った。

「……子供はさ、甘やかされるべきなんだよ」

少し過分に甘やかしているという自覚はあったので否定はしなかった。

「そーいうもんかねえー」

「そーいうもんですよ」

思いを巡らせ、それは私の後悔なのだ気付く。

大人になれない私は、早く大人になりたかった。そして大人になつてしまうと気付くのだ。

もう、子供には戻れない事を。

だからまだ子供である彼等を甘やかしてしまうのだろう。

「どっちかつーとお前の方がお母さんじゃねーの？」

「あんな大きな子供いてたまるもんですか！」

「その台詞、年寄り臭えよ」

「若かったり年寄りだったり、どっちが本当の私なの！」

「間を取ってババアなんじゃねえ？」

パーソナリティを見失った私は悲鳴を上げ、銀さんは投げやりな回答を寄越す。

ヒューに続き、ドンツと心臓に響く様な音が鳴る。

銀さんの白い髪が七色に染まり、頭上を見ると夜空に綺麗な花火が咲いていた。

「たまや〜」

「かぎや〜」

あちこちからそんな声が飛ぶ。

「おっ、始まったな」

「綺麗だねえー」

暗い空を美しく彩る花火は、その一瞬に死力を尽くし大輪を咲かすから、人々の目を引きつけて止まないのだろう。

ダラダラと死の延長線を生きる私には、真似る事のできない美しさだった。

そうやって空を見上げていた私は、だから銀さんがどういう目をして私を見ていたか知らなかった。

花火が終わる頃、神楽ちゃん和新八君は戻ってきた。途中、始まった花火と一緒に見ていたのだと言った。

帰る人々でゴった返す中、はしやぎ疲れた神楽ちゃんを銀さんは背負う。

それを見ながら思う。

もし私が銀さんを好きになったら、銀さんは私から離れて行くのだろうか？　そして、それを少しは大切だったと思ってくれただろうか？

水心あれば石に心あり

いつもの河川敷で竹刀を振る。

川のせせらぎをBGMに、型をなぞり、足捌きを加え、縦に横に。剣道部とか憧れたよなあーとベッドに縛り付けられた日々を思い出す。自主練とかかつこ良くない？俺カツコいいとうぬぼれてみる。

最近筋肉が少しづつついて来たようで、筋肉痛になることも減った。手の平が少しザラついてタコらしきものも出来た。それを思うと少し気持ちが向上する。

そうやって気を散らしてしまった所為だろう。

「何かエロいことでも考えてんですかー、お嬢さん」

雑になってしまった態度を見咎められてしまった。

手を止め、土手の上をちら見上げると、気だるげな態度で、片腕を着流しに掛けた銀さん。

もうこの河川敷使うの止めようか？色々恥ずかしすぎる。

どうするか悩んでいつも通りの態度を探す。

「さっきから丈の短い子のパンツがチラチラ視界に入ってるね、なかなか」

「え、まじで？見えんの？そこ穴場スポット？」

驚愕の新事実_に銀さんは目を開き、「えっ、どうしようかなー。ちよつと降りてみる？いや、別にあれだよ？パンツが目当てって訳じゃないよ？ただ正しい竹刀の持ち方をだなあ。あ、この竹刀って別に深い意味があるわけじゃないよ？って、何言いついてんの俺？」なんてブツブツ呟きながら不審者っぽい動きで、くるくる回る。

本当、男って馬鹿だなあー。

「嘘だよ」

「嘘かよー」

侮蔑を込めて新事実の真実を突きつけると叫びを上げた。

「銀さんはまたパチンコ？夢、買えた？」

手に持った紙袋を見てあたりをつける。

「おー、買った買った。珍しく大勝ち」

ザツザツとブーツ鳴らしながらそこそこ急な土手を駆け降りてくる。着流しの白い袖が後ろに流れ、改めてこの人の身体能力の高さを思い知る。

紙袋をゴソゴソ漁って投げられたそれはパックに入りたいいちご牛乳。

「いーの?」

「まだあるからいーの」

土手に腰を下ろすと、拳三つ分の距離を開けて隣に銀さんが座る。パックからストローをベリツと剥がし、差し込む。まだ冷たいそれは、ここから程無い所に出来た新装開店のパチンコ屋に寄ったことを意味している。

チュウツと吸うと乳白色のストローの中を、ピンクの液体がせり上がり、口内へなだれ込む。トロリと人工的な甘い味が口に広がる。上品とは言えないそれが結構好きだったりする。

銀さんは時々優しい。私にだけ特別ななんて思うことは馬鹿げてるけれど、少なくとも新八君や、神楽ちゃんに対するよりは、分かりやすい甘やかしを私にくれる。

「甘ったるー」

「お前なあ……貰っておいて不満かよ」

「ただ事実を述べたまでですよ」

「だったらもつと嬉しそうに言えよ」

「甘ったるー!」

「テンションだけじゃなくて、言葉を変えろ!」

いちご牛乳の甘さに隠してその甘さに文句を付ける。

「銀さん、石をびよんぴよんって水面跳ねさせるやつできる?」

この前通りがかかった子供がやっていた遊びを思い出す。

どうやったらそうなるか不思議で、子供達がいなくなった後、こっそり真似てみたけれど全然できなくて、見ていたホームレスのおっさんに笑われる羽目になった。悔しくて、裏ワザを使って対岸まで飛ばしてやったら、驚いていてぎまみろと思った所でなにやってんだろ

と落ち込んだ。

「石をびよんびよんって水切りのことか？」

「水切りっていうんだアレ」

あの行為に名前がついていたことに驚く。

「水切り銀ちゃんの異名は伊達じゃねーぜ」

「初めて聞いたよ？ 今つけたでしょ」

「うっせーなあ、名前つてのは名乗ったモン勝ちなんだよ。元祖とか本家とか頭につけなきゃいけない意味、考えて見ろよ」

色々怒られそうな事を言いながら、銀さんはしゃがんで河原の石を幾つか拾う。

拾った内の二三個はポイポイと捨てて、吟味した後、横に構えてすつと投げる。

水の上を石がびよんびよんと10回以上跳ねてった。

「すごっ」

私のアレはノーカウントとして、子供たちがやってた時は精々6回が限度だった。

「どうだ恐れいったか」

得意顔の銀さんに素直に凄いと褒めると石をぽんと投げられた。

「やってみ」

「私は見てるだけでいーや」

無様な醜態を晒すことは目に見えていたので、それを投げ返す。

「いいからやってみろや」

それなのに土手に腰掛けていた私の腕をぐいつと引っ張るとその手に無理矢理石を握りこませる。

しぶしぶ貰った石を見よう見真似で投げるとやはりポチャンと音を立てて跳ねることなく沈んでった。

「笑えー」

そんなもんだよなーうんうんと一人で勝手に納得している銀さんにイラっとして、笑うことを強要する。

「まあ、初めてだとそんなもんだよなー」

「人を未通女おぼこみたいに言うの止めてくれるー？」

無意味な反抗心。

「だって本当のことだろ？ お前、こーいあの教えてくれそうな友達いなそーだもんなあ」

そんな心なんてまるっとお見通しだとばかりに、弱い所をチクチク突かれる。

そりやいなかつたさ、一人寂しく引きこもる日々でしたよ。

ぐさりと心に突き刺さる言葉にむくれる。

「もうちつと手の平を寝かせて水をこーう切るように投げんだよ」

そんな私を見た銀さんは「しかたねえなー」という枕詞を置いて、握った石を私に見せ、ゆつくりともう一度投げる。石を探して私もそれを真似て投げると、ぴよんと僅か一回ではあるが跳ねた。

おー！ できた！

「そんな感じだよ」

調子に乗って二個三個と石を投げていくと跳ねる回数はずぐさま増えていった。

「水切りきーやん名乗ってもよくね？ これ」

一人はしゃいできると、その隣で大人げなく対岸に届こうかとばかりに水を切る銀さん。

「水切りの名を名乗るにはこんぐれーできねーとな」
にやつと笑う顔が凄いイラツとした。

エレメンタル・パレード

今日も夕食の相伴を預りに万事屋へ向かう。すると何やら三人がお登勢さんのスナツクの前で揉めていた。

「だーかーら、怖いなら怖いって言ってくれば、僕等二人で行きますよ？ その代わりアンタ明日から米、一粒も食べれないと思ったださいね！ 働かざる者食うべからずです！」

「こ、怖い？ んな訳ねーだろ？ 幽霊なんざ今どき三歳児でも怖がらねえよ。それよかお前らに任す方がよっぽど怖えよ」

「銀ちゃん、背中に……」

「のわっ!？」

「綿埃ついてたアル」

指についた埃をふうと吹いてにやりと笑う神楽ちゃん。

盛大に飛び退いた銀さんは「あ、あれだよ反復横跳びの練習！」なんて苦しい言い訳を繰り返している。

「こんにちわ、どうしたの三人で」

「あ、キリさん」

「ギーやんー!」

「聞いて下さいよ」と新八くんの口から語られるのは、幽霊退治の依頼を受けた事。

廃墟になった遊園地に現れる人影とチラチラ光る不審な光。

不法侵入した近所の悪ガキだと思った管理会社の職員は、連絡を受ける度、何度もその人影を追いかけたらしい。

けれど何度追いかけても、行き止まりや、隠れ様の無い場所で見失ってしまう事から、実は人間ではなく幽霊じゃないか？ と話が発展。お祓いをしたり、御札を置いたりしたが効果はなく……その内に悪影響もないからと放って置かれることとなった。

けれど、最近持ち上がった再開発計画を前に、憂い^{うれ}を断とうと万事屋に依頼を持ってきたとの事。

「ダメ元っぽい態度が気に食わなかったんですが、前金も頂いちゃいましたし……。大体、幽霊なんている訳ないんですよ。どうせ見間違

いか、無能な職員の言い訳だと僕は思うんですけどね」

「だよなー、銀さんもそー思うわ。ところでさっき食べた饅頭があったみたいで、腹の調子が……」

まったく信じていない様子で、新八君は腹を抑えている銀さんの腕を取る。

「だから今日は遅くなるんで、お登勢さんのところでご飯食べて下さいね。ほら銀さんもごねてないで行きますよ」

歯医者を嫌がる子供の様な銀さんと、それを無理やり引っ張っていくお母さんの様な新八君を笑いながら見送る。

その姿も見えなくなり、降っていた手を下ろす。

さてと、幽霊ねえー。

聞き覚えがあるというか、見覚えがあるというか、身に覚えがあるような……。

死んだ人間が生きているという事は、幽霊みたいなもので、当たらずとも遠からずという推理に拍手を送る。

取り敢えず問題を先送りにして、腹が空いては戦はできぬの精神で、『スナックお登勢』の暖簾をくぐった。

「すみませーん、今日のお勧めなんですかー？」

「つたく、ここは定食屋じゃないんだよ。新八といいアンタといい、何か勘違いしてやいないかい？」

「あははは、新八君何かいってました？」

「アンタが来るはずだからなんか用意してやってってくれってね」

そう言いながらもお登勢さんはサンマ定食を出してくれる。

眼鏡のお母さんと、かぶき町のお袋さんの好意によりありついた夕飯を食べながら、どうしようかなーと思案する。

そんな事を考えてたせいで箸が遅れていると、「そんな不味そうな顔して食べるぐらいだったら、食べるの止めな」と怒られる。

済みませんと謝り、姿勢を正して食べたご飯は、お米がふっくらしていて、サンマも油が乗っていてとても美味しかった。

日がとつぷり暮れ、上弦の月が夜空を飾る。
いつもどおりの手順で帰宅。

こつそり穴を開けておいたフェンスをくぐると騒がしい三人の声
が聞こえてくる。

「こんだけ探しても見つかんねえーんだ。見間違いだよ見間違い、そ
うに決まってる。って事で依頼は完了。とつととけーるぞ」

「見間違いにしても、何度も見間違える様な事ってありえます？ と
りあえず原因だけでも突き止めないと……。何も収穫なしってのは
万事屋の名が廃りますよ」

「廃る様な名なんてあったアルか？ もうすでに腐りきって腐敗臭ぷ
んぷんヨ。銀ちゃんの足と同じ臭いしてるヨ」

新八君の肩に手を置いた銀さんは、口こそいつも通りだが、落ち着
きなく辺りをキョロキョロと見渡し、なんだか可愛い。

何度も「帰ろう」を繰り返す銀さんに、神楽ちゃんが「うぜえアル」
と毒を吐き、新八君が「そんなに怖いんだったら一人で帰ればいい
じゃないですか」と分かった上で無茶を振る。

街灯一つない、キイキイと鉄が軋む廃墟と化した遊園地を、しかも
幽霊が出るという噂付きで……。銀さんが帰れる訳がない。

クスクス漏れそうになる笑いを耐えながら、三人が下を通り掛かる
のを木の上で待つ。

「そう言えば、名前を呼ぶと出るっていいですよね」
「で、出るって何が」

怯えた声は銀さんの声。

「幽霊ですよ」

「幽霊に名前なんてあるアルか？」

接触が悪いのか、点いたり消えたりする懐中電灯の豆球を覗き込
み、スイッチをパチパチと神楽ちゃんは入り切りしていた。

「うーん、代表的な名前だったらお岩さんとか、キクとか花子とか
……」

「だせえアルな。そんなん名前付けられたから恨み崇って出るアル
ヨ。私ならもつと格好いい名前付けるネ」

三回目ぐらいで付かなくなってしまった懐中電灯を神楽ちゃんはぶんぶん振る。

「例えばどんな？」

「ウルティモストロンジャーとか格好いいアル」

中々のネーミングセンスを唱えた神楽ちゃんは、振り回し過ぎて真つ二つに折れた懐中電灯を眺め、伸び放題の生け垣の中にそれを隠す。

「いや、どんな名前だよそれ。そもそも幽霊の名前って生前について名前でしょう？ 後から名前付けるなんて話……」

「ウルティモストロンジャー!! ウルティモストロンジャー!!」

新八君のツツコミを無視したまま両手をメガホンの様にした神楽ちゃんは、その名前を繰り返す。

「ばっ、呼ぶんじゃねーよ。本当に出たらどうするんだよ！」

「いいじゃないですか。探してるんですから、出てもらわないと困りますよ」

銀さんに口を抑えられた神楽ちゃんは、抑える手を引き剥がしもう一度叫ぶ。

「ウルティモストロンジャー!!」

「呼んだあ？」

「うわあああ!!」

「およ?」

「……!!」

がさりと音を立てて、目の前に逆さ吊りでぶら下がれば……。

「び、びっくりした。キリさんじゃないですか」

「きーやん! きーやんも一緒にお化け退治するアルか?」

「退治されては困るんだけどね……。あーあ、銀さん伸びちゃってるねコレ」

弁慶宜しく立ったまま白目を向いている銀さんを見ながら、よつと木から飛び降りる。

「もしもーし、銀さーん」

返事がないただの屍の様だ。やり過ぎた……かなあ?

「う……あ?」

首を振り起き上がった銀さんに、「気がついた?」と笑えば、何かを思い出す様に視線を上に向け、「そ、そうだ奴は、幽霊は!」とガタガタと音を立てて、寝ていたベンチから落ちそうになる。

落ちかけた腕を掴み起こせば、ようやく目の前の光景に気がついた様で……。

「幽霊の正体って……もしかしてお前?」

「ご名答」

眩いばかりに偽装されたメリー・ゴランドが軋みを上げながら回る。

白馬に乗った神楽ちゃんは、王子様よりサドステイックに「荷馬車の様にくるくる回れヨ」と命令を下し、楽しそうに笑っていた。

新八君は新八君で、前のめりになる神楽ちゃんを後ろから支えて、それでも天上を彩るフレスコ画と天使の彫像に目を奪われている。

「真夏の夜の夢って奴ですよ」

ナイトパレード。

色とりどりの明かりと幻想で、生前の姿を取り戻したメリーゴランド。最後となる夜に別れを告げるには良い催し物になったんじゃないだろうか?

「お前……本当にホームレスしてたんだな」

「なに? それ嫌味? 借り暮らしだって言ってるじゃん」

頭をガリガリ搔きながら銀さんは少し言い辛そうに、そう言った。ベンチの背に体を預け、足を下ろした銀さんは、目の前の光景に「綺麗だなあ」と目を少し生き返らせる。

空いたスペースに私も腰掛ける。

「万事屋さん、新しい依頼引き受けてくれる?」

「んー?」

間延びした返事。

「お家探してくれない? 二万平米ぐらいで、馬が付いてて、満点の夜

空が見えて、夜は静かで、幽霊付きの物件」

「ばーか、んなんあるわきやねーだろう」

「ここ以外にそんなのある訳ないだろう」そう付け加えられた銀さんの言葉は、少し後悔が含まれていた。

「嘘だよ。本当はどこでもいいんだ。保証人と身分証なしで借りれる所、ボロっちくてもいいや。依頼料もう払っちゃったし、キャンセルはなしだよ」

その後悔を消したくて、メリーゴーランドを指さし笑えば頭をぐしやりと撫でられた。

「お前、本当に馬鹿だなあ……」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだよばーか。でも、本当にどこでもいいんだ。私、あんまり拘りないから」

気に入っていたのは本当。でも、今更そんなモノを大切にしようとは思えなくて、だから私は笑う。

遠い未来。私は失った事を後悔する事ができるだろうか？

「銀ちゃーん」

白馬から飛び降りる神楽ちゃん。

神楽ちゃんに捕まっていた新八君は、バランスを崩し白馬から転げ落ちる。

「だからお前はダメガネなんだヨ。だせえアル」

その姿を笑いながら神楽ちゃんは、「銀ちゃん！　銀ちゃんときーやんも一緒乗るアル」と着流しの袖を引っ張る。

「しゃーねーなあ」

「じゃあ、今度は馬車に乗ろうか、何色がいい？」

「白ー」

「白好きだねえ神楽ちゃん」

手を引かれ乗り込んだ馬車。新八君は「定員オーバーアル」と閉めだされ、「べ、別に乗りたいたいなんて言っていないでしょ！」と言いながら拗ねる。

それを笑いながら見ていた最後の夜。

白い馬の目も優しそうに笑っていた。

ダンボールを持って余す

お登勢さんの知り合いを介して借りた古いアパート。古いと言っても手入れはちゃんとされていて、畳だつて入れ替えられている。家賃も割安。ワンルームのバス・トイレ……一緒。

いや、拘こたわりはない。うん、無い。一人暮らしなら十分だ。

「ギーやん。これ、どこに置いたらいいアルか」

「あー、そこに置いて貰える？」

リサイクルショップで買った冷蔵庫を流しの隣に置く。洗濯機をベランダに設置して、布団——これは新しく買った——。ダンボール一箱分の荷物を置けば引越はしは終わり。細々としたものは後で買い揃えれば良い。

案外簡単なものだ。

「荷物意外と少なかつたですね」

新八君が細々こまこまとした所を雑巾で丁寧に拭いてくれる。

「まあこんなもんでしょ……借り暮らしましたし」

「はいはいそうだったアルなー」

「いつまで言い張るんですか、それ」

神楽ちゃんはホコリだらけの手にうへと顔を顰しかめながら、新八君は雑巾を洗いながら。

「買い物行くとき付き合いますから言っして下さいね」

「お願いするね」

「泊まりにきていいアルか！」

「しばらくは無理だけど、落ち着いたら来てね」

夕飯を一緒に食べる約束をして、後で行くねと伝える。

手を振って玄関から送り出せばもう本当に終わり。

ざっと眺めると6畳の部屋が広く感じた。

諦めるのには慣れていた。大切なモノは作らない様にしてきた。諦める為の努力をしてきた過去の私。

それでも大切なモノを作ってしまうのが人間で、それを失つて……もう一度大切を作るには、まだ時間が必要だった。

失う時、失わない為の努力をする必要性を感じるモノ。

それが大切なモノの定義だとすれば、私の大切は、一振りの着物と温かい体温、ダンボール一箱には収まらないおつきな白い犬。それだけだ。

いつか二人の様に躊躇なく大切なモノを作れる人間になれると良いなあと、抱いた思い。

けれど、それが願望なのか、羨望なのか判断はつかなく、『人は急には変わらない』その言葉の正しさを知る。

何も無い流しに、ダンボールから洗面具を取り出して並べる。

コップ、お皿、買わないと行けないものをメモ帳に書いていく。

窓から見えるのは知らない景色で、聞こえてくる音さえも知らない音に聞こえた。

——ブー……ブー

聞きなれない音に、一瞬遅れて玄関ベルの音だと気づく。はいはいと言いながら出ると、ダンボールを抱えた銀さんがいた。

「あれ？ サボリじゃないの？」

いつの間にかいなくなっていたから、てつきり引つ越しの手伝いが面倒臭くてサボってるのかと思った。

「お前なー。何だと思ってるんの俺のこと」

「マダオ」

「帰る!!」

「嘘嘘、ごめんごめん」

手を合わせて謝ると、銀さんは玄関にブーツを脱ぎ散らかして、ダンボールをドサツと置く。

「神楽ちゃんと新八君、先帰ったよ」

「途中で会ったから知ってるよ。アイツ等もお前と同じ様なこと言いやがった。お前等が普段どういう目で銀さんを見ているのか、良くわかりました!」

「何これ、見てもいい?」

不機嫌全開の銀さんに話題を変える。

ぷりぷり怒りながら目だけで返す合図。テープの張られていない

ダンボールの蓋を開くと、お皿やコップ、お鍋。

「気の利く銀さんがご近所さんから貰ってきてやったんだよ。感謝しろ」

「おー。銀さんやる時はやるんだね」

気遣いが照れくさくて、ついつい逸らした話題に戻ってしまう。

「もつと感謝しろっーんだ」

ぶつくさ言いながら、銀さんは何もない畳のにゴロンと寝そべると、腰いてーと全然痛そうにもない腰を気遣う。

うっかりと出そうになった、マツサージしてあげようか？ という言葉を飲み込む。

大切なモノをもつと大切にしていまいそうで。そうして、結局のところ諦められる距離を計っている自分に気付く。

「お前はさー、もう少し自分を大切にしなさいな」

持ってきてくれたものを仕舞っているとそう言われた。

振り返ると、銀さんは片肘を枕にしながら、一箱のダンボールを見ていた。目は相変わらず死につばなし。

大切にね……。

死んでもその大切さが分からなかった私は、つまるところ手遅れで、「無理だよ」と答えればこの人はどんな顔をするのだろうか？ 未来予知は働いてはくれず、ぼやけた白い姿しか思い浮かばなかった。「そう思うんだったら少し手伝ってくれませんか？ その戸棚、手が届かなくなつてさ。踏み台買わなきゃな」

どちらにせよ、それが他人を傷つけるだけの代物だと知ってはいるので、答えにならない答えを返すに留める。

「人使いの荒い依頼人だこつて。依頼料もつとふんだくっておけば良かったなア」

体を起こし、銀さんは、貸せよと言つて、ひよいつと鍋を戸棚の上段に仕舞う。

「これもお願いね」

「そーいやさ、貰つてきて気付いたんだけど、お前コレ使えんの？」

フライパンを手渡すと、思いついた様にそう漏らした。

いや、だから上段に仕舞おうとしてるんですけどね？

視線を逸らした私に何かを悟った銀さんはふかーいふかーい溜息をつく。

「……お前それどうなの？ 女としてどうなの？ チチもねーし」

「チチの大きさを女の価値量るとか最低く」

胸を隠して軽蔑の眼差しを向ける。

「すげーイラツとするから止めてそれ。大体、隠そうとしても、隠すもんねーから！ それに女じゃなくて、人間としてもダメだから！」

「うわっ、銀さんに人間としてはって説教されるとは思わなかった。あ、ヤバイなんか急にヤバイ気がしてきた。どうしよう、新八君に今度料理習おう。うん、そうしよう」

「そうしろそうしろ、あーあ、もうなんか色々疲れた」

そう言うと銀さんは、空になったダンボールを足で寄せ、両手を伸ばして畳に倒れこむ。

「マッサージしてあげようか？」

『大切に努力始めました』そんな看板でも出してみようか。

「出来んの？」

疑いの眼差し。

「性感マッサージなら？」

「……」

「……」

沈黙に耐え切れず手をわきやわきや動かすと、

「はー。お前ダメ！ 色々ダメ！ 全部ダメ！」

どたりと寝がえりを打って銀さんは本格的に寝始めた。

隕石ふってこーい。投げやりに窓から叫んだ午後三時三十分。

閑話 眼鏡を通して見たキリという人間

「ちよつと待つてええええええ!!!」
「え？」

次の瞬間にはスパンと切り落とされた人参のヘタ。

「新八君、私にも作れそうな料理、なにか教えてよ」

そんなキリさんの一言から始まった料理教室 IN 万事屋。

色々不安ではあつたが、姉上を超える料理人もそうそういないだろうと高をくくっていた。いたのだけれども……。

「こわっ、指落ちてませんよね!? ってか猫の手とか聞いたことないんですか、なんでまつすぐに指が包丁の前に飛び出してんですか!」
「猫の手? にゃーお?」

「ぜんっぜっつん可愛くないですから! 腹立つから止めて下さい!」

「はーいにゃ」

「まじめに!」

「さーせんしたー」

顔の横で、拳を握り猫真似をするキリさん。全然ちよびつとも可愛くないんだから! そんなんで、許されると思うなよ。

調理台の上に置かれたまな板には、人参以外切れたものは見えず、ほつと息をつく。

ドキドキする心臓をなだめ、包丁の握り方から教える。

「包丁は指をこう添えて握り、左手は丸めて猫の手みたいにして食材を抑える。最初はゆっくりでいいんで同じ大きさになるように注意して切つて下さい。大きさがバラバラだと火の通りが変わつてしまふんで」

「はい、先生」

シユタツと挙げられる手に不安を覚えたが、「変わつて変わつて」と子供がねだるような姿に、つついっ包丁を渡してしまう。

「本当に料理したことないんですね」

「まあ、箱入り娘だったからね」

「ごつちを見ない！ 包丁ちゃんと見て!!」

「はい」

乱切りにされる人參から離そうとする視線に注意する。

いつも飄々としているので誤魔化されがちだが、キリさんはふとした拍子に、非常識というか世間からズレたような面を見せる。

それは料理をしたことがないだとか、着物をあまり付けたがらないだとかほんのちよつとした一面だ。

最近よく着るようになった着物について言及したら、着物の美しさに目覚めたと、脳にオムライスでも詰まったんじゃないかと思うような回答を返された。

「先生、人參切り終わりました!」

「じゃあ、次はジャガイモで、真ん中で二回切つて後は一口大にこうやって」

「ふむふむなるほど」

物覚えが悪いという事はない、だから今までそれを教えてくれる様な人間がいなかったという事なのだろう。

キリさんは他人を頼らない。

それは孤独に慣れた、一人で生きなければいけなかった人間特有の癖だ。姉上や、銀さんを見てきたからそれが分かる。

それでも姉上や、銀さんはキリさん程顕著ではない。あの人達は頼るといふか……使うという言葉が正しいが、使えるものは使つてしまえとばかりに他人を利用するから。

キリさんにはそれが無い。

お人好しだと言えば綺麗だが……他人を利用する事すら自身に許さない、そんな苛烈とも言える思いを抱いているのではないかと、僕は考えている。

「次は何を切ればいいのか?」

「危ないから包丁を持った手を上げない」

「はいはい」

「はいは一回」

「はい」

「じゃあ、次はですね……」

だから、こうやって少しづつでも頼るようになってくれた事が嬉しい。

「これで終わり？」

「そうですね、後は味を整えて煮込むだけです」

「鷹の爪入る？」

「入れますけど、よく知ってましたね」

包丁も握れない人間がなぜそんなことを？ と疑問をそのまま口にする。

「この前入ってたの見てたからね」

「よく覚えてましたね」

鷹の爪の入った袋を渡すと、一掴み分。ちょうど僕がいつも入れている分量に近しいだけの量を入れた。

記憶力が良いと言ってもそれは本当に見ていないと分からない筈で……。

「んー。私、新八君の料理結構好きだからね」

「そーいいながら地味地味いっつも言うじゃないですか」

照れてしまった事を隠したくて、ついつい普段の言動を蒸し返してしまう。

「地味なのは本当の事だからね」

「それ馬鹿にしてるんですか？」

褒めたいのか、貶したいのかどっちなんだよ！

からかわれていると分かっているも振り回されてしまう。

「地味だけど大好きなんだよ」

けれど、次の言葉に毒気が抜かれ、あまりにもストレートな物言いに、

「はいはい、分かりましたから、鍋吹きこぼれないように見てください」

思わず視線を逸らし、まだ煮立ってもいない鍋に注意を促す。

「またまたそんなこと言って、嬉しいくせにー」

「止めて下さいー！」

キリさんはケタケタと笑い、うりうりと脇をつつく。

キリさんは……こちらが恥ずかしくなってしまうほど、他人への好意を隠さない。

他の全てを隠そうとするキリさんが唯一おおっぴらにして憚らない感情がそれだ。

ストレートにぶつけられたこっちの身にもなってみろというのだ。周りにはそんな人間がいなかったから、本当に対処に困る。

「何かいい匂いしてきたアル」

醤油の臭いに釣られて、我が家一番の大食い娘が暖簾をくぐり台所に入ってきた。

「味見する?」

「きーやんが作ったアルか……?」

神楽ちゃんは猜疑の眼差しをキリさんに向ける。

「そうだけど?」

「やめとくネ。まだ死ぬには早すぎるアル。新八、私、今日の夕飯卵かけごはんがいいアル」

神楽ちゃんは、残念そうな顔を隠そうともせず、台所を出ていこうとする。

「まあ待ちなさいって」

「いやアル」

「私の肉じゃがが食べれないというのか」

「私の口はデリケートゾーンアル。危険物持ち込み禁止ヨ!」

「騙されたと思って」

「そんなこと言う奴はみんな騙そうとする奴だつて銀ちゃんが言つたアル!!」

ジタバタと暴れる神楽ちゃんに、小皿に取った煮汁を押し付けるキリさん。

最後は根負けした神楽ちゃんが口を開き、煮汁を流し込まれた。

「……美味しいアル」

「だから言ったでしょ?」

少し悔しそうな神楽ちゃんに、キリさんは笑って頭を撫でる。

「もつと」とおかわりを要求する神楽ちゃんを宥めながら、キリさんは「意外と私料理の才能あるかも」なんて胸を反らしていた。

キリさんはどっちが年上なのか分からなくなるほど子供っぽくて、でも僕等が子供である事を感じてしまう程度には大人だった。

見送りを何度も拒絶したキリさん。

ホームレスだという言葉を半ば僕等は信じていなかった。キリさんには、長谷川さんや武蔵っぽい人のような擦れた『らしさ』がなかったから。

だから、何か事情があつて家を知られたくないのだとそう思つていた。

キラキラ光るメリーゴーランドを前で呆然とする僕等にイタズラっぽい笑みを浮かべて、秘密基地みたいで格好いいでしょとキリさんは笑った。

きっと依頼を受けたのが僕等でなければ、それを知ることにはなかったのだろう。

脳天気にも、不安になるほど、キリさんは明るく笑つていた。強い人だと思う。そんな尊敬すら抱いた僕に、銀さんは「アイツを羨ましがってやるな」と言った。

その時は意味が分からなかったけれど、抱える孤独にそういう事なのだなと今は意味が分かった気がする。

「お前等、銀さんのけ者にして何食つてんだよ」

続いて入ってきたのは銀さんだった。

「銀さんも味見する？」

エプロン姿のキリさんを見た銀さんは、若干顔を青ざめて一歩、後退した。

「俺、腹の調子悪くていちご牛乳以外受付られねえんだった。悪いな」
すぐく残念だと見え透いた演技をして逃げようとした銀さんが、キリさんに捕まる。

襟首を抑えられて羽交い締めにあつた銀さんはジタバタと往生際悪く逃げようとするが、神楽ちゃんの助力もあり逃走に失敗する。

「いや、まじ無理。ホント、今日の俺の腹、サイクロンジェットって感

じで……」

「大丈夫大丈夫、キリさん特製肉じゃが食べたら治るって」

「いやいやいや、本当勘弁して」

「観念した方がいいよ」

「したら死ぬだろオオオオオ!!」

「意外といけネ銀ちゃん。騙されたと思って食べるアル」

「それ絶対騙されるふひゃぐ……んぐっ」

冷や汗を流した銀さんの口を抑えてむりやりこじ開けたキリさんは、肉じゃがを流し込む。

慌てて吐き出そうとするも、手の平で口を塞がれ叶わない。だが次第にその抵抗も収まる。

「あ、意外と……」

「でしょ?」

ふふんと得意そうなキリさんの脇を通って鍋を覗き込んだ銀さんが、肉を狙う。

「ダメだって、後は夕飯」

「チツ……しやーねえなあー」

ペシツと伸ばした手が叩き落とされ、ガリガリと銀さんはその手で頭を搔く。

なんだかこうしてみているとまるで家族のようにも思えた。うつすらと記憶に残る母上を思い出す。

それはキリさんが無条件で僕等を甘やかしてくるからでもあり、隠そうとしない愛情のお陰でもあった。

「きーやんオセロやろー」

神楽ちゃんがキリさんのエプロンを引っ張る。

少し困ったような目でこちらを見るキリさんに、頷き返す。

「後はやっておくので大丈夫ですよ」

「ごめんね」

少し申し訳なさそうな顔をして、エプロンを脱いだキリさんは、壁のフックにそれをかけ、神楽ちゃんに手を引かれるまま台所を出て行く。

「神楽ちゃん今日は何色にする?」

「白!」

廊下から響く声は楽しそうで……。

「何にやにやしてんの。むっつりですか!」

「なっ、してません! にやにやなんてしてません! つてダメですって。さっきも言われたじゃないですか!」

そうやって人をおちよくる銀さんは鍋の中を覗きこんで、やはり肉を狙っていた。

「んだよ。お前等二人して、お母さんかつーの」

諦めた銀さんは、菜箸を投げ出しそんな事を言った。

「銀さんは……キリさんの家族の話とか、ここへ来る前の話とかって聞いたことありますか?」

「アイツが言うわけないだろ」

「そう……ですよね」

馬鹿な事言っつてんじゃねーよとばかりの声質に、気まずさを隠す為、まな板を洗うべく手に取る。

「それにな……もしキリがそれを言うとしたら俺じゃなくてお前等にしろうよ」

それはどういう? と聞き返すよりも前に、銀さんはバリバリと頭を掻きながら台所を出て行ってしまった。

一瞬見えた、死んだ目に隠された不機嫌な色。その言葉が真実であるとすれば、銀さんはそれが……不満なのだろうか?

まな板を流れる洗剤の泡を見ながら、ふとそんな事を考えた。

アルテミスはバツカスより多くの人を救った

ブブブツと震える携帯電話を取り出し開くと、見知らぬ番号。少しだけ迷った末、受話ボタンを押す。

「もしもし?」

『今から十五分以内に屯所まで来な——ブツツ——ツイッター』

耳から離れた携帯は待ち受け画面——変顔をした神楽ちゃんと定春——に戻る。

脅迫電話だと受け取っていいのだろうか? けれど届け出る警察が通話相手であった場合、届け先はどこになるのだろうか?

聞き覚えのある声に頭を痛める。

そもそも私の番号をどこから入手したんだろう??

大きく構えた門。『真選組屯所』と書かれた看板の脇には、警杖を携えた隊士が一人立っている。

無茶な呼び出しに応じてしまったのは、総悟を内側に入れてしまった私の甘さだ。

神楽ちゃんと食べる予定だったおやつが詰まったビニール袋を引っさげて、立ち番の隊士に伺いを立てる。

「総悟います?」

「沖田隊長ですか? いることにはいますが……」

酷く驚いた顔をしているのは、総悟を訪ねてくるような知人などいないからなのだろう。

流石ボツチ。

「総悟に呼ばれて来たんですが、入ってもいいですか?」

「失礼ですが……その……酔昆布……さんですよね?」

「まあそうですね」

酷く微妙な名で呼ばれた。隊内ではその名で通っているのだろうか? 自分で名乗ったのが原因とはいえ、凄く嫌な気分になった。

「付いて来て下さい、案内します」

疑わしげな態度を隠そうともしない隊士に付き添われ、屯所内へ足を踏み入れる。

指名手配犯として追われた過去と、攘夷浪士の仲間と疑われた一件。まだら模様の前科を考えるに、まあ、自由に歩かせて貰える身分ではないねと納得した。

考えれば、総悟の部屋なんて知るはずもなかったもので、結果的に良かった。

板張りの長い廊下を歩く。時折すれ違う隊士達がチラチラ見るのは、例の手配書を覚えていいるからなのか、それとも普段の女つ気のなさ故か……。

カサカサと音を立てるビニール袋がやけに場違いに思えてきた。

「失礼します、お客様がお見えになってます」

「入れ」

「はっ」

一礼した隊士が障子戸を開け、中へと促す。

「おせーぜ、十五分つったろう」

「いや、いきなり呼び出しておいてその時間制限は無茶でしょう」

総悟は行儀悪くちやぶ台に肘をついたまま、煎餅を齧っていた。

バリツという音を立てて碎かれる煎餅が、タイムオーバーを許してくれた返事だと受け取り、部屋の中へと足を進める。

こちらを振り返った総悟の肩越しに見えたテレビ。ブラウン管は、女同士が相手を上げながら、下に置くという器用なトーク模様を映していた。

その中のどの女よりも高みに存在する総悟は、当たり前だが座布団を出すなどという真似をする筈もないので、自分で隅に転がっていた座布団を引っ張ってきて隣に座った。

「食べるかい？」

差し出されたのは『激辛せんべい』。

「こいつち食べるからいい」

この前興味本位で少しだけ齧ったが、その時に二度と食べないと心に誓ったので、誓いを遵守すべく、ビニール袋から、んまい棒を取り出す。

「見たことねー奴だな」

「新作だつて」

「寄越せよ」

総悟の手が焼き鳥味と書かれた袋に伸びる。遠慮なしの行動が、どこことなく神楽ちゃんに似ている気がした。

「嫌だよ、こつちならいいよ」

神楽ちゃんならともかくも、総悟に譲る理由はないので、それを避け、元々は神楽ちゃん用にと買ったサラミ味を差し出す。

「チツ、仕方ねえな、それで勘弁してやらア。あ、お前もういいぜ？」入り口で固まっている隊士を振り向いて、総悟がそう言うのと、ピシヤリと激しい音を立てて障子を閉めた隊士は「た、大変だ、お、沖田隊長に、沖田隊長に!!」と大声を上げて駆けていった。

無言で総悟が手帳に何やら書き込んでいる。俗にいう殺害計画書デスノートという奴だろうか？

ご愁傷様にと口の中で転がしつつも、変な噂が広まるのは私も嫌だったので止めはしなかった。

伏せてあつた湯のみに勝手に茶を注いで啜り、んまい棒の袋を破いて独特の食感を楽しむ。

「何か用事があるんじゃないの？」

いつまでたつても話を切り出さない総悟に、こちらから話を振る。

「用つーか何つーか……ちよつとお前、土方の奴とデートしてこいよ」珍しく歯切れの悪い言葉の先は、どう受け取ったら良いのか分からない命令。

先日の祭りの件がこじれにこじれた結果の三段論法なのだろうか？ もさもさする口の中を茶で洗い、途中経過を推理するが、ブラツクボックス化したインとアウトの間を見通す事はできず、諦め理由を聞く。

「なんで？」

「なんでも」

その言葉とほぼ同時に、障子がスパンツと音を叩いて開いた。

「総悟おおおお!!」

怒りを貯めに貯めた声の主は土方さんだった。

隊服姿だったので、サボりか？ と疑ってはいたのだがやはりサボりだった様だ。

「そんなに怒鳴んなくとも聞こえやすぜ？ 誰かと違ってまだ若んですから」

「人を年寄り扱いすんじゃないやねー！」

「誰も土方さんの事だとは言ってねえですぜ？」

「てんめえええ」

悪びれない総悟もどうかと思うのだが、典型的な手に引つかかる土方さんもどーかと思う。

私がいる事など眼中に無い様で、土方さんは感情のままに拳を震わせる。

「土方さん、これでいいだろイ」

「あ？？」

そんな土方さんの怒りを涼しい顔で受け流し、総悟はそう言う。「じゃあ、俺仕事に戻るんで」と言って立ち上がり、土方さんの傍を通ってそのまま部屋から出て行った。

そのままコントが続くのかと傍観していた私は引き止めるタイミングを完全に失い、土方さんは土方さんで総悟の行動が予想外だったのか、一瞬遅れて部屋を出て行った総悟を追いかける。

「オイ！ 総悟！ ちよつと待て」

部屋に取り残された私。

分かった単語は、土方、デート。

全くもって意味が分からない。んまい棒をもう一つ手に取り、総悟が消し忘れたテレビを眺める。

華やかな女性達は、華やかなトークに棘を混ぜて咲き誇る。例えるならばバラだ。

そんなバラの花束よりも私が綺麗だと思うのは一輪の白詰草。

何がどうなっているのやら。取り敢えず、話の流れからすると総悟か土方さんがもう一度部屋に戻ってきてくれるだろうと踏んで待つことにした。

「コンスタート味を食べ終わり、三本目に手を伸ばそうか迷っていた時だった。」

「入るぜ」

了承の返事を返す間もなく、土方さんが部屋に入ってきた。

「総悟は？」

「……逃げられた」

顰めた顔はバツの悪さ故だろう。

まあ、そんなところだよ。おおよその行動パターンから推測できた現在に、んまい棒をもう一本取り出す。

「取り敢えず座ったら？ 食べる？」

土方さんは憮然とした表情のまま、総悟が座っていた座布団に腰を下ろした。

「で？ お前はどうすんだ」

納豆味にマヨネーズをたっぷり掛けるという暴挙を成し遂げた副長は、「うまいな」と言いながらそう聞いてきた。

「で？ とは？」

「総悟から何も聞いてないのか？」

眉間に皺が寄る。

「土方さんとデートしてこいだけ聞いた」

「アイツは……」

頭を抱えた土方さんが羨ましい。私の方こそ頭を抱えたい。

「実はな……」

そう切り出した土方さんの説明を要約するところだ。

巷を騒がすカップルを狙った辻斬。おとり捜査を執行する事となり、女役として白羽の矢が総悟に立った。

帯刀出来ないため、万が一を考え土方さんが組む事となったが……元より乗り気ではなかった総悟はそれを聞いた途端、本気で逃げ出したと。

そりやまあ……しょうがないよねえ。

「女装の一つや二つ……。覚悟が足りねえんだよ、んなんで武士やつ

てんじやねーぞ」

ピンと来ていない土方さんには悪いが、私でも逃げ出すよそりや。「他に誰かいなかったの？」

「残念ながら、背格好の都合上な。ザキの奴は別の案件で手が離せねえーし……近藤さんがやけにノリノリだったが、ありやあ犯人の方が逃げ出すわ」

げんなりした口調で告げられた第二案に、私もげんなりする。犯人の前に逮捕した方が良い人間が出る所だった。

「いいよ、引き受けてあげる」

あの総悟が貸し借り抜きで頼み事をしてきたのだ。苦渋の選択だったに違いない。

しようがないと割り切った返事でもあった。

「言つとくが遊びじゃねーんだぞ？」

「んー、それは私を護る自信がないと受け取ってもいいんですかね？」

「はっ、バカ言つてんじやねえ」

土方さんはそう鼻で笑い飛ばし、私の挑発に乗ってくる。

剣呑に笑った顔に、『鬼の副長』その二つ名を見た。

借り物の衣装と化粧を施した私は、まあそれなりの見てくれになったのではないだろうか？

「お前……意外と化けるもんだな」

着替えるために借りた部屋から出ると、土方さんが驚いた様にそう言った。

「馬子にも衣装つて奴じゃないですか」

「自分で言うか普通……やっぱりテメエはテメエか」

溜息と共に吐き出された言葉の意味を問いただすより前に、「行くぞ」と声をかけ、土方さんは先に歩きます。

あれですかね、『いかなる時も自分を見失わない、超格好いいなお前』という褒め言葉ですかね？ ポジティブに受け取った私は、その後を付いていく。

屯所を出た後、しばらく歩いてついたのはうら寂しい通り。
もつとくつつつけという指示の元、撓垂れ掛しなだかる様にして歩く。

「なんか照れますねコレ」

「お子様には、刺激がきつかったか」

「冗談」

そんな会話をしながら、あたりに注意を払いゆつくりと歩く。

普段着ることのない、体のラインが出るような青いドレス。むき出しの肩は心持ちなく、タイトなスカートがまわりついてどうも歩きにくい。しかも調子に乗って履いたハイヒールが歩きにくさに拍車をかけている。

だが言い出した手前、そんな事を愚痴る訳にもいかず演技を続ける。

ふと……思いついた考え。

「この姿、ミツバさんに見られたらなんて言い訳しよう」

流石にこんなうらびれた通りにミツバさんが来るわけは無いが、言い訳を考えてしまう。

「……なんでアイツの名前が出てくんだよ」

いや、なぜと言われましても。

「祭り会場で仲良くしてたじゃん」

「ごっほ、ごっほごほ」

盛大に咽た。

「……あ、あれはだな……アイツが江戸に不慣れだと言うからっ!？」

かさこそと揺れるゴミ袋に注意を払うと飛び出てきたのは黒猫。

なーんだと思うも、目の前を横切って行くのはやめて欲しかった。

「言うから?」

「……やめねーか? 噂をすればなんとやら……っか、お前だってこんな姿知り合に見られたくはねえだろ?」

「そーですね」

言い訳じみた物言いに納得したフリをする。

まあ、他人の惚気話を聞きたいかと言われれば……聞きたいかも知れないけれど、目に見えて硬くなってしまう態度に免じて許してあ

げよう。

不意にひつぱられ、なんだと思うと誰かが吐いた汚物。

うえっ勘弁ッ。

「それよりもお前、いつの間に総悟と仲良くなったんだ？」

「仲良くなんてなつてないよ」

「そうか？ アイツが他人に頼み事するなんざ聞いたこともねえーぜ？」

「じゃあ、仲良くなったんだよ」

「どつちだよ！」

予定調和通りの土方さんをケラケラ笑い、喪失感の大きさを測る。

仲良くなつて離れていったが正解だ。

総悟は一瞬だけ悔しそうな顔をしていた。それは私に対する負い目から来たものだど気づきたくないのに、気づいてしまった。

私は総悟にそう大して貸したつもりはないけれど、それは『私』という係数が掛かったものを見ているからで、総悟は違う。

貸しと借りで危ういバランスを保っていたのが私達の関係ならば、表面張力ギリギリに水を張ったコップ。そこに落としたり一滴。それが今回の貸しだ。縁に留まっていた水は次々と流れていく。

それを寂しいと思ってしまうって事は、私が総悟を思いの外、大切にしまつていたという事なのだろう。

空いた隙間の距離を測り、ノギスに刻まれた数値が取り戻せるものなのか、諦めるべきものなのか何度も角度を変え考える。

そして、手を伸ばせば手を伸ばす程、離れて行くしかない距離に、諦めるべきものだという結論に辿り着き、それが諦めの良さ故に出した結論なのか、それともそれが真実なのか、と次は悩む。どちらにせよ、その距離は己の欠陥が生み出したものであるから、結論は変わらなかった。

空の酒瓶が詰まったケースが積み重ね、見通しの悪い曲がり角からフラツと人影が出てくる。

手を離して身を硬くするとそれは見慣れたくるくる天然パーマだった。

「デメエツ！ 紛らわしいんだよ」

離れた身をぐいつと寄せられ、死角に入る様、隠される。

関わりあいになる前に、そう思ったんだらう。銀さんを避けて歩き出そうとした土方さん。

「オイ、なにイチャモンつけて勝手に行くこうとしてんだよ。ストレートだからって調子こいてんですかー？」

ストレートをまだ根に持ってたんかいつて、しまったなこれは面倒臭くなるパターンですかね。

土方さんの肩が掴み引き寄せられる。

ただでさえ慣れないヒールで足元が覚束ないというのに、その腕に寄りかかっていた私は引きずられ、バランスを崩す。

「わっ」

「おっと、危ねえ」

慌てて壁に手をつこうとするがその前に、銀さんに腰を支えられ、それを回避する。

壁が汚くて触りたくなかったので、心の中で感謝を送る。ただし、原因は銀さんなので口には出してやらない。

「オイー・難癖つけんのもいい加減にしろよー！」

総悟にも良く無視される土方さんの声は、当然の如く銀さんにも無視される。声に運命という物があるのならば残念な星の下に生まれたのだらう。

腰が引き寄せられ、顔に吐息がかかる。そこで銀さんは産毛まで銀色なのだとまた一つ発見をした。

トロリと死んだ挙句、発酵を始めた目。その眼下はほんのり赤い。漂う酒気。

「なあ、そんな野郎放って置いて、俺と一発……じゃなかった一緒にいーところ行きませんか、おねーさん」

あれあれ？ 気付いてない？

んー？ 酒が回っているとはいえ、髪型とメイクを派手なものに変えただけなんだけど？ もしかして私のメイクテクニクつてなかなかイケてる？ そう悦に浸っていると、土方さんが銀さんと私の間

に割って入ってきた。

「テメー飲み過ぎじゃねえのか！」

「うっせーなー、俺がどこで何しようが俺の勝手だろ？ ストレートはお呼びじゃねえんだよ」

当然の如く逆上した銀さんは、土方さんを睨みつけ、「やんのかコラ」とボルテージを上げる。やっぱりこうなったかと私は内心溜息をついた。

仕方なく私は銀さんを押しつけ、土方さんの腕を抱きしめる。

「ごめんね、お兄さん。私、天パで、甘党で、お金がない人嫌いなもの」
「えっ……ちよつと待って！ 天パそんなに悪くないよ！ ってか俺ピンポイント!? 食わず嫌いは良くないよって！ ねえちよつと」

一瞬固まった銀さんの隙について、腕をぐいぐい引つ張り歩く。

後ろから「天パの何が悪いんだああああ」という悲しそうな声が聞こえてくるが、身を切る思いで切り捨てた。

一番気になったのが天パってどんだけコンプレックスなんだろうか。

「任務続行しましょうか？ 副長殿？」

角を二つ曲がった辺りで、必要以上に縮めていた距離を離し、少しあっけに取られていた土方さんを見上げる。

「良かったのか？」

「いや、ちよつと可愛そうだけど、あれ以上は面倒くさいじゃん」

「お前がそういうならいいんだけどよ……」

面倒くさいことを回避してあげたのに、いまいち吹っ切れない感の土方さん。もう少し感謝しろよ。

結局その夜のおとり捜査は空振りに終わった。

ねだり奢って貰ったラーメンを、屋台のガタついた椅子に並んで腰掛け、ずるりと啜る。

なかなか美味しい。

土方さんオススメとの事だが、元が何か分からなくなる程のマヨネーズを掛けた上で、なぜ味が分かるのか不思議だ。

熱で融けだしたマヨネーズを視界に入れないよう、細心の注意を払

う。

「礼代わり、本当にこれで良かったのか？」

「煮玉子二個も入れてくれたじゃん。十分十分」

「欲がねえなあ」

「そんな事は無いんだけどねえー」

必要のない借りで、貸しを返す行為のどこが欲がないというのだろうか？ 大切な物を削っていけば、必然必要な物も減り、相手の返す手段を奪う。けれどきつと、そんな思考回路そのものが人間的欠陥だ。後遺症というべきものでもある。

「んー。じゃあ今度はフレンチフルコースでも奢ってもらいましょうか」

「調子にのんじゃねーよ」

欠陥は排除されるべきで、隠すものであるから私は強欲にならざるを得ない。くるくると回ったロジックの結論は、人間の煩惱は百八つでは足りないという事だ。

その煩惱を全てかき消そうと思えば、除夜の鐘をつくお坊さんは一生鐘をつき続ける事になるに違いない。

「じゃあ、これで」

化粧を落とし、借りていた服を返し元の姿に戻った私は、門の前まで見送りに出てくれた土方さんに別れを告げる。

「世話になったな」

「ああ、最後にいーことを教えてあげるよ土方さん」

本当は黙っておくつもりだった。けれどこれ以上貸しを作られるのは嫌で、喋^ぐんでいた秘密を暴露する。

「総悟が今回の件嫌がるのはさ、女装云々よりもアンタが原因なんだよ」

「どういう意味だそりゃ」

いまいち分らないという顔を笑う。

「総悟ってさ、ミツバさんと良く似ているよね？」

女装なんてもんをすれば尚更だ。

敬愛する姉上に恋慕した男。その男と姉上そっくりの姿でくついで歩くなんて事は、拷問以外のなにものでもないだろう。

ましてや、気に食わないと普段嫌悪している相手になんて。

「……なっ」

口をパクパクと開けて打ち上げられた鯉になった土方さんをゲラゲラ笑い、屯所を後にした。

出会った場所からほど近い所で、銀さんが「天パが……天パが……」と呟いて蹲うずくまっていたのを見つけ、拾って帰る。

どこかで酒をハシゴしたのだろう。酒量を増していた。

「銀さん重い。少しは歩いて〜」

「天パの何が悪いんだあああああ」

「うっさい、耳元で怒鳴らないでよ。あと本気で歩いて、重い」

銀さんの腕を抱えて引きずり歩く。

「キリも飲もうぜ、飲んで忘れよう。もう一軒、もう一軒行こう」

へべれけになつて歩くのもままならないというのに、まだそんな事をいう。

大体そろそろ夜も開ける時間帯だ。今からどんなお店に行くというのだろうか。

「銀さん、ほら見て月が綺麗だよー」

明るくなりだした空に浮かぶ月を指さす。

子供だましの必勝法。気を逸らす。

「すげーなあー。今日は月が一つ、二つ……バーゲンセールですか、コノヤロー！」

そんな月に向かって絡むのは銀さん。

「そんなに沢山見えるなんてお得だねえ。でも、飲み過ぎだよ。今度からお酒は控えるんじゃないの？」

「控えるよ控える。銀さん、もう絶対酒なんて飲まねえーよオ」

夜が明ければ、その言葉も、背負って帰った事実もなかった事になるのだろう。

無遠慮に回された腕と、もたれかかる重さ。

貸しも借りも、百八つを超える煩惱も、全てチャラにしてしまう酒
というものは偉大だと、哲学した月下のかぶき町。

エビでたい焼きを釣る

心にもない「ありがとうございました」と繰り返すこと数時間。壁にかかった飾り気のない時計が終わりを告げる。

無機質な鼠色のロッカーが並ぶ更衣室に戻り、支給されたエプロンを外すと、エプロンのポケットに入っていた携帯電話がブブツと震えた。パカリと開けば、マヨと書かれた着信画面。

総悟に頼むのを止めたマヨネーズ野郎は、代わりに私を使うようになった。一般市民を巻き込む事を躊躇しないのは、護り通す自信の現れか、それとも八方美人っぷりを発揮してしまった己に非があるのか……。

だがそんな事よりも、バイトが終わる時間帯を計ったかのようにかかってくる着信に、電話番号だけでなく、どこからかバイトのシフトまで漏れている事を感じずにはいられなく、頭を痛める。

アンコウさん——店長が恐らく漏らしているのだろうと当たりを付けているが、確証もなく……問えば素直に答えてくれそうだが、それはそれで人間不信に陥りそうなので聞くのを躊躇ちゆうちゆうしている。

個人情報保護法的な何かはこの世界にないのだろうか？

震え続ける携帯の受話ボタンを押し、耳に当てた。

『俺だ。この後時間あるか？』

答えなど分かりきっているにもかかわらず、白々しい問いに、わざとらしい溜息をつきながら私は了承の返事を伝える。

せめてもの抵抗だ。

お決まりの衣装に身を包み、相変わらず治安の悪そうな通りを散歩する。車が一台通れるか通れないかといった道幅。右隣は木塀が続き、反対側は如何わしいお店が暗い雰囲気を作り出している。

そんな通りを土方さんの腕により掛かり歩くのは、もう片手では余るほど。そろそろ当たりクジを引いても良いのになあーと愚痴を零す。

「税金、無駄使いし過ぎですよ。めぼしい出現場所を絞り込むとかできなんでしょうか？」

「出来たらとつくにやってるよ」

苦々しい声で前を見据えたまま土方さんは答える。

そんな会話も、もう数える程にした。

「旦那、またご鼻屑に」

「おう、近いうちになあー」

なんて言いながら、店から出てきた草臥れた男が一人、フラフラとこちらにぶつかりそうになる。

二手に別れそれを避ける。

丁度真ん中に倒れこんだ男は、「注意しろ、バカヤロー」なんて難癖をつけ、上手く取れないバランスに、立ち上がりはコケ、立ち上がりはコケを繰り返して遠く離れていった。

「人はなぜ、ああにまでなって、酒を飲むのか」

それを見やりながら、馬鹿だなあと呟く。

「飲まずにはいられない事情でもあんだろ」

「例えば？」

どんな事情だと見上げれば、土方さんは眉間に皺を寄せ、口をへの字に結ぶ。

「そりゃ……仕事で上手いかねえとか、色々あんだろよ」

空いた右腕でバリバリと頭を搔く。

どんな理由にせよ、だらしなく酒を飲む姿を正当化するのが憚れたのだろう。

「大人は色々大変なんですなえー」

だから私は分かったような口を利いた。

「大変なんだよ。色々とな……」

いつしか両隣は模様を変え、硬く閉ざされた木戸が並んでいた。

平屋作りの長屋は手入れが足りないのか、そもそも人が住んでいないのか、木造の壁は傷み、時折崩れているような、そんな場所だった。

「……武州では桜の下で集まって、まあ良く飲んだなあ」

「河川敷とかで？」

「ああ、でっけー川が近くに流れててな。酔った勢いで飛び込むもんだからあぶねーっの」

気がつけばそんな話になっていて、

「なあ、お前はどこなんだ？」

「どこといいいますと」

「郷だよ郷。お前にも郷ぐらいあんだろよ」

ここではないどこかだよ。

そう答えようとしたのだけれど、こちらを見下ろす土方さんのその向こう。真つ暗な空にぽつかりと浮かんだ月は、雲に隠されぼんやりと優しい光を届ける。

どの世界でも変わらない月に、だから……。

「ここからは少し遠くてね、きつと知らないよ。東京って所」

「トウキョウ？ 聞いたことねえな」

「でしようとも」

首を捻る土方さんに、そう言って笑った。

流石に、「どんなところなんだ」という問いは曖昧にせざるを得なかつたけれど、腕を引けば、バリバリと頭を搔いて「転ぶぞ」と子供に言い聞かすような口調で溜息をつかれた。

猫一匹、人一人通らぬ、丑三つ時。

「当たり前クジですかね？」

ヒタヒタと付いて来る足音に気付いたのはそれから間もなく。

「……………チツ」

けれど土方さんの顔はそう嬉しそうでもなく、舌打ちすら混じる。

「オイ、走るぞ」

「えっ、ちよつと待って……………うわっ」

腕を掴まれ引つ張られる。けれど、ヒールにつんのめる私に気付いたのか、逡巡の後、小脇に抱え直された。

歯を食いしぼる必死の形相からは、冗談だとか、何かの作戦だとかそんなものは見えず、振り向けば着崩した浪人が刀を抜き追いかけて来る。

「土方、逃げるのか！ 貴様それでも武士か！」

「うつせー。今、取り込み中なんだよ」

息を切らしながらも、土方さんは律儀に答える。

名指しするということは、土方さんを狙って？ 別件？ 攘夷浪士なのだろうか……。

帯刀していない真選組副長など、正体がバレれば格好の標的であろうと納得するものの、一つだけ疑問が。

辻斬犯であろうと、攘夷浪士であろうとなぜ斬り殺さない？ いや斬り殺す為の刀がないのは十分承知のだが、もし追い掛けて来るのが浪士ではなく、辻斬犯だった場合、どうやって取り押さえるつもりだったのか。

詳しく聞かなかった捜査方針が徒となる。

「降ろしてー！」

「無駄口はいいから黙ってろ、舌嚙むぞ」

徐々に狭まる浪士との距離と苦しげに上がる息。

仕方ないと覚悟を決める。

腕を引き剥がすように振りほどき、抱えられた脇から転げ出る。

「何をっ!？」

「とっとなっ……」

引きとめようと伸ばされた腕を避け、崩れたバランスのまま片膝を地面についた。

邪魔なヒールを脱ぎ捨てる。

「観念したか……。オイ、そっちの女、敵の敵は味方っていうだろ？ 見逃してやるからそこをどいてな」

ニタリと気持ちの悪い笑みを浮かべた浪士は、刀を構えゆつくりとこちらに向かい歩いてくる。

敵の敵？ どういう意味だ?? 浮かんだ疑問は頭の片隅に追いやり、今やるべきことに集中する。

距離にして四メートル。

「くそっ」

「下がってて」

前に出ようとした土方さんを制し、浪士の懐へ飛び込む。

「待て！」

後ろに聞こえる土方さんの声。

「——っつ!?!」

ブンツと風切り音を立てて振り下ろされた刀はドレスの裾を掠め、青い端切れが飛んだ。

驚愕に目を開き、だが、身についた闘争本能がそうさせるのである。降ろされた刀はそのまま横薙ぎに迫る。その柄を抑え、力まかせに奪い取る。

足払いをかけ、どさりと仰向けに倒れた首に刀を当てれば、憎々しげな双眸がこちらを睨みつける。

「クツ……」

倒れた拍子に飛んでいった片方の草履。脱げた足の踵が月の光に照らされ、やけに生白く見えた。

「土方さん、隊の人に連絡を」

「……あ、ああ」

男から視線を逸らさず、背後にいるであろう土方さんに声をかける。

戸惑った声はやがて副長の声に戻り、黒鉄を思いおこさせるような冷徹な響きをもって、携帯を通じ指示が飛ぶ。

「と、取引をしようじゃねーか」

そんな最中、男がそう声を上げた。

「取引？」

「とぼけなくてもいい、お前が連中に近づいて何かしようつてのは俺等だつて知ってるんだ。だが、気付いているか？ それを知っているのは何も俺等だけじゃない。泳がされてるんだよお前は。俺を逃がせ。そうすりゃあ、お前の逃走も手伝ってやらないことはない」

声を落とし私だけに聞こえるように囁かれた内容は、今一なんの事か分からず、脳内で台詞をループさせる。

連中、泳がされている、逃がせ……敵の敵は味方。

連中とは恐らく真選組の事、何かしようとしているという言葉の意味はとんと覚えが無いが……泳がされているというのはどういう意

味だ？

「貸せ」

携帯を切った土方さんが、背後から手を伸ばし、刀の柄に手をかける。
る。

男の双眸が、何かを訴えるように合図する。

だが、その合図に応える必要性を見いだせず、私は刀の柄から手を離した。

絶望した浪士が体の力を抜くのがわかった。

「どこの手の者だ」

土方さんはそれに気付いていないのか、ヒタヒタと首を脅し、問い詰める。

硬く閉ざされた口。

「まあいい。後でじっくりと聞かせてもらおうか」

やがてサイレンを鳴らしやってきたパトカーに押し込められた男背は丸く、俯いた顔は陰りその表情を見て取ることはできなかった。

遠く退けられた筈の疑問が、重要なパズルのピースであると気づいたのは後日のことであった。

再び鳴る携帯を手取る。

『俺だ』

「土方さん。聞きたい事があるんだけど、少しいいかな？」

これ以上茶番に付き合う事は耐え切れなかった。

『なんだ？』

「おとり捜査って何に対するおとり捜査？」

「……決まっているだろう、辻斬犯のだ」

戸惑うような気配が電話越しに伝わる。

「ねえ……辻斬犯なんて本当にいるのかな？」

辻斬犯への対応方法が用意されていなかったのは、そんなもの存在しなかったから。

気安い会話は情報を引き出す為のもの。

悔しそうな顔。総悟も……知っていたのだろうか？

『……………』

無言の返事がそれを全て肯定した。

「流石に私も、私の為の捜査には協力できないや。善哉奢ってくれるっていうんだったら付き合ってもいいけどね。じゃあね」

電話というのは便利だ、用件だけを伝えればその後の気まずさをボタン一つで断ち切る事ができるのだから。

何も知らずに踊る私を裏で笑って——は、いないな。そういう人達じゃない。

かぶりをふって、久しぶりに万事屋に寄る事を伝えるため、アドレス帳を開く。

目についた、マヨとサドの文字、削除ボタンに指を掛け、迷った末に、そのままボタンを二回押して万事屋の文字を選択する。

「あ、新八君？ 今日寄ってもいいかな、夕飯自分で作るの面倒臭くて」

そして、たい焼きでマダオを釣る

伝統にのっとりやけ食いをする事に決めた私は、大量のたい焼きが詰まった袋を抱え、公園に向かう。

空には薄く雲が広がり、噴水が足りない日光をテラテラと反射していた。

その真向かいに位置するベンチに座り、取り出しやすいよう紙袋の口を、ビリビリと広げる。袋の縁がふわふわと毛羽立ち、その中に詰まった魚が虚空を見つめていた。

それからの私の行動は、たい焼き袋と化した腹を抱えて、気持ちの悪さに消去法は誤りだったと後悔する。そんな予定だった。

「ちよつと、勝手に食べないでよ」

「いいじゃねえか、どうせそんなに食べねえだろ。手伝ってやんよ」
右から伸ばされた手は、紙袋の一番上に乗った——恐らくアンコだったと思う——たい焼きを奪い取る。

どこからともなく現れた、くるくるパーマは一万歩ぐらい譲って存在を許すでしょう。砂糖に群がる蟻のようなもんだ。だけど……。

「キリちゃん、おじさんも一ついいかなあ？ 昨日からなにも食べてなくってさア」

なんでマダ……長谷川さんまでいるのだろうか？ しかも、たい焼きを食料としかみなしていないマダオっぷりを発揮して！

ちよつと想像して欲しい。左右をマダオ共に囲まれた私を……。思わずたい焼きを餌に逃げようかと思った。

けれど、先に座った私なぜ逃げねばならぬのだろうかと考え直したい焼きを犠牲にする事で、問題の解決をはかる。

「あげてもいいけど、あそこのベンチに座ってもらえますか？」

「そ、そりゃないよキリちゃん。キリちゃんとおじさんとの仲じやないかつー！」

「どんな仲だよ。ほらさっさとあっち行く。あ、あと銀さんもね」

吹き出すのをこらえ、肩を震わせていた銀さんを振り返り、ピシッとベンチを指さす。

「えっ、俺もなの？」

驚愕に見開いた目にコクリと頷き、もう一つたい焼きを手にすると、銀さんの視線がたい焼きとベンチの間で彷徨う。

結局、たい焼きを手に取った二人は隣のベンチへ移って行った。大の大人二人が背を丸め歩く姿は、哀愁漂うものがあつたが、我が身可愛さに捨て置く。

問題が片付いたところで、袋に手を伸ばし、程よく冷めたたい焼きを二つに割る。

良く頭派か？ 尻尾派か？ と揉める話があるが、私は二つに割る派だ。一度アノコだと思つて食べたやつが、クリームだった時があつて——店員がどうやら間違えたらしい——それから割ることになっている。

想像した味と違う味に驚いて、一口目を味わい損ねるのが嫌なのだ。

遠目に見ると、銀さんは尻尾派で、長谷川さんは頭派らしい。

チラリと、バトミントンのラケットが、銀さん達が座るベンチ裏の茂みの間から見えた。

帯に挟んだ、鳴らない携帯電話に意識が移る。

「クリームはもう少し滑らかな方が……バニラももう少し効かせた方がいいね。あと……甘すぎる」

もごもごと口を動かし、屋台レベル百円の平均的な味に文句を付ける。

総悟や土方さんとは別段友達という間柄でもなく、休戦協定を結んだだけの関係だった。優先するものがあれば協定は破棄されるのは分かっていたし、その優先順位を誤る二人なんて見たくもない。

だから、何も問題はないのだ。

腹の真ん中から尻尾に向かって口を動かし、尾ひれまで食べ尽くした所で、頭に移る。

問題があるとすれば、それは思いの外ショックを受けている自分だ。

私は、総悟や土方さんの事を好ましいと思つている。二人にしたつ

て私に対し別段、敵愾心てきがいしんを持つていているという訳でもないだろう。どちらかといえれば好意的な感情を抱いていると考えて間違いない。

ただ、彼等には彼等の優先順位があつて、私がそれに勝てない事など分かりきつた事で、どこに問題があるのだ？ と、並べ立てた正論を前に割り切れない感情が問題なのだ。

最後に残しておいた唇にデイーブなキスをして、キープ君に乗り換える。

二匹目の腹を割ると、薄緑のうぐいす餡が顔を覗かせた。

零れそうなあんを先についばみ、本命君と同じく真ん中から尾っぽに向かつて食べ進める。

選んで欲しかった訳ではない、優先して欲しかった訳ではない。と、頑なに否定するつて事は、逆に肯定しているのだろう。

いつの間にこんなに贅沢になつてしまったのか……。

甘つたれた己に腹を立てながら、半分を食べきつた所で、口の中の甘さに辟易する。

なんとか残りの頭を口に押し込み、紙袋を除き込めば残り三つ。

どうやら私は、私自身を過剰評価していたようだ。

「だくかくら、長谷川さん。あそこのパチ屋は手前の台の方が出ると言つたじゃねえの」

「そんな事言つたつてさア……。前座つてた人間がじゃんじゃん出してたら出ると思つちまうじゃない。あーあ、あん時隣に座つていたら今頃は……」

マダオとマダオはマダオ談義に花を咲かせ、マダオに拍車をかけていた。

少し近づくのをためらつてしまふが、たい焼きに罪はないので、立ち上がる。

「はい、一個づつ取つて。スペース開ける」

差し出した紙袋を前に戸惑う二人。

もう何もかもがどうでも良くなり、結局はマダオ二人の間にどかりと腰を降ろした。

「……なんかお前、今日機嫌悪くね？ つてか理不尽が過ぎねえ？」

やや引きつった笑みを浮かべた銀さんが言う。

そんな銀さんに、理不尽を増大させて私は問う。

「ねえ、銀さん。仕事と私、どっちが大事?」

「えっ!? どっちがって……これ答えないといけないの?」

「うん、まじめに答えて」

ぐっと詰め寄ると、銀さんは「ほら、あれだよ銀さん仕事も私生活も両方大事にしたいというか、別に俺お前の事……いや嫌いって訳じゃないけどね。この場合なんか変な意味になっちゃわない?」とグダグダしだした。

「銀さんがそんな男だったなんて、幻滅した」

もう見たくもないたい焼きを無理やり口に頬張り、苦勞しながら飲み込む。

「キリちゃん。それ男が一番答えに困る質問だから止めてあげて……。俺も昔、ハツにそれ聞かれてね……凄く困ったなあ」

見かねた長谷川さんが口を挟み、聞いてもない昔話を始めた。

「なんて答えたの?」

「少しだけ興味がわく。」

「あー……当時はさ、ほら仕事人間だったっていうか、結構いい感じで調子づいていたというか……」

「なんて答えたの?」

「誰のおかげで食ってけると思ってたんで……」
「さいてー」

予想以上の最低な回答に、軽蔑の眼差しを向ける。

煤けた背を丸めた長谷川さんは、ベンチの上で膝を抱えると「ハツ……ハツ……確かにあん時は、俺が悪かった。だから戻ってきて……ハツうゝ」と男泣きに泣きだした。

「どうやら急所に触れてしまったようだ。」

「にしても、んなこと聞くって事は……キリさんいい男でもできたの?」

親指についたアンコを舐めながら銀さん。

「銀さんにはできたように見えるんだ?」

これまでの会話で、なぜその結論に辿りついたのか。

「いんにゃ、どちらかと言えば振られたように見える」

「違いますうー振ってやったんですうー」

ニアピン賞に輝いた銀さんを睨み、残りのたい焼きを無理やり口に詰め込む。

「え、まちで？ そのかわいそうな相手だれ？」

「銀さんまでそいつの味方するんだ？」

「いや、お前に惚れた頭のかわいそうな奴……ふべしっ」

銀さんの顔に空になった紙袋を叩きつける。

「あーあー。私、好きになるなら長谷川さんみたいな人が良かったな」

「えっ、嬉しいけど、お、俺にはハツが……」

その言葉に、顔を上げた長谷川さんが、オドオドしだす。

「比較しなきゃいけないような仕事なんて持ってないし」

「きりちゃんンンン!？」

いつから私、仕事と私どっちが大事？　なんて言うような我儘な女になっちゃったんだろう。

全部どれもこれも銀さんの所為だ。私を甘やかすから。

薔薇には棘があり、苺にも種はある

元の世界よりも発達しているからくり達。古き文化。
入り混じったこの世界にも大分馴染んできた。

——カチカチツ

火打ち石を打ち鳴らして皆を見送る。

切り火。お登勢さんに教えてもらったおまじない。安全に帰って
これるように。

電信柱の影に山崎さんが見えた。

相変わらず監察はついて回る。とっととお暇しなければ。家の前
を掃くたまに挨拶をしながら、万事屋を後にした。

今のところ不味いことは起きていないけれど、銀さんは合法すれす
れな事件にも手を出さだろうし、白夜又だとバレるには時期尚早だ
し、うっかり訪ねてきた桂さんが逮捕されるなんてもっての外だし。
万事屋に寄る回数を減らしたほうがいいのかもかもしれない。

優しい朝の光に照らされた道を歩く。時折見かける黒服。

報告書に『なんだか落ち込んでるようでした。あれ？ 作文』と記
載される事を見越して、地面を見つめ、わざとつま先で地面を蹴るよ
うにして歩く。罪悪感でのた打ち回れば良いのだ。

そうやって歩いていると、どこからか耳障りな笑い声が聞こえてき
た。

「ギャハハハ、誰だこのヘタレはー」

馬鹿にするような雑言ぞつごん。殴りつける様な音。

そんな音に発生源を探り首を回す。

遠目に見えたのは、くたびれた浪人の様な人達が一人の人間を囲ん
で、蹴りあげている姿だった。

日光に反射し光る刀に気がついたら駆け出していた。

「多勢すいぶんに無勢とは随分すいぶんと卑怯臭くない？」

刀を抜いた人間の鳩尾みぞおちに拳を叩き込む。そのままかかって来た人
間を奪った刀の峰で殴り飛ばし、後は逃げるに任せた。

「大丈夫ですか？」

振り向いたそこには頭を抱え蹲うずくる——土方さん？ 視線を巡らせると冷たい視線を向ける、一人の男がいた。

黒い隊服に身を包んだ銀縁メガネ——伊東鴨太郎いとうかもたろうだった。

「何事かと駆けつけてみれば、女に護られてるとは……何をやってるんだね土方君」

「伊東……」

絶対零度の視線が交差し、始まった物語をそこで知った。

「囿捜査ですよ。あーあ、どっかの誰かさんの所為で逃げられちゃったなあー」

蚊帳の外に置かれ始めた私の存在を主張するように、手をひさしにして、遠くに見える攘夷浪士の背の原因を伊東さんに擦り付けてみる。

「囿捜査？ ああ、なるほど、それは申し訳ない事をした。とてもそうは見えなかったもので……。失礼したね」

伊東さんは、あからさまな言いがかりに心外だというように片眉を動かす。反論するかと思っただけ、含むような言い方に留め置く。

そして一礼すると真横を通り過ぎ去っていった。去り際の後を引くような笑みが印象的だった。

立ち上がり手のひらの砂を払っている土方さんは、忌々しげな目でこちらを睨んでいるし……。

助けてあげたというのに、全くもって心外だ。

「駅前いき、パフェ専門店できたんだよねえー」

大きすぎる声に、舌打ちが一つ追加された。

目の前にそびえ立つ赤と白のツインタワー。赤い宝玉が頂上を彩っていた。

冷たい銀色のスプーンを手に取り、どこから攻め入ろうかと思案する。

崩落事故を防ぐには、頂上のイチゴを取り除く事が先決ではあるが、エース不在で後半戦を挑むのは、愚考だとも知っている。ならば、

手前側のイチゴを先に攻略、次いで空いたスペースを使い、計画的に崩していくというのはどうだろうか？ 見た目の美しさは損なわれるが……。

「テメーは一体全体、何を考えてんだ」

「そびえ立つ牙城の攻略法を」

「ちげえよ!!」

テーブルに打ち付けられたコーヒーのマヨが揺れる。

お願いだからコーヒーにマヨをぶっこむの止めてもらえませんかねえ？ 味を想像しないのがこういう時のコツだと知ってしまう程度には付き合があるものの、視界からの精神汚染というものは中々食い止められない。

「んだよ」

じつと顔を見つめると、不気味に思ったのか土方さんは身を反らしてたじろぐ。

「定期的に記憶がなくなる、気がつけば身に覚えのない物を購入している、今まで興味もなかったテレビ番組を予約してしまう」

「……………」

ざわついた店内の声が大きくなり、窓から差し込む日光が、信号待ちのトラックに遮られ影を落とす。

瞳孔が広がった。

「———どれか一つでも当てはまった貴方は二重人格者です。仕事や、命を狙われる等のストレスが原因と思われます。一時的な休養をオススメします」

十分な間を置いてビシツとスプーンを突きつければ、土方さんはがっくりと肩を落とし溜息をつきかけ——はたと顔を上げる。

「適当な戯言にしては的を射すぎている事に気がついたのだろう。」

「なあ、本当にお前は何を知っているんだ」

パフェのグラスからツーツと水滴が垂れた。

てっぺんの一番大きなイチゴをつまみ上げ、口に放り込む。

「なふいも」

半分に切られたイチゴが六粒、手前の三つを順番に片付けていく。

酸味が強い――。

糖分補給も兼ねてストロベリーアイスと生クリームの適度な割合を探る。ハーフハーフが妥当か。

「自分の立場分かってんのか？」

脅しつけるような目で睨まれた。恐喝？ 警察が？ まさかね。

三分の一程食べ終えたそこに、ほど良く溶けかかった生クリームとイチゴを落としていく。

「私はさ、アンタ等の敵じゃない。今のところは」

崩し終えたところで、まあ見た目はアレだが味は変わらないだろうと、残りの分量とイチゴを調整し食べていく。

『今のところ』なア。それはいつか変わるのか？」

「変わるかもしれないし、変わらないかもしれない。約束はできかねるよ」

真選組という組織を敵に回す必要性というものは今のところないが、いつかという可能性を否定出来るほど、私は優秀ではない。

彼等が彼等の優先順位を持つというならば、私も私の優先順位をつけさせて貰って構わないだろう。

それがフェアというものではないか？

「結局、そうやって煙に撒いて逃げるのか」

「なんのことやら」

土方さんは、何かを薄々勘付いているのだろうか？ 確信たらしめる証拠を与えている訳ではないが、ノーヒントと言えるほど全てを隠し通せてはいない。

むしろ、一本の糸が原因となり、一枚の布が解けていくようにボロボロと解れていくようにも思える。

現にこうやって必要性という意味では、無意味な問答の中にも答えは緋なまい交まぜまになっまっている。

「甘いなあ。済みません、コーヒーを一つお願いします」

飲み込めない、水でも流しきれない甘さに、店員を呼び止め注文をつける。

オーダー表に何かを書き込んだ店員が去っていった。

その背中をなんとなしに見つめていると、予想外の人物の名が土方さんの口から上がる。

「高杉晋助——たかすぎしんすけ奴はお前の味方か？」

「もう江戸に来てるんだ？」

「ふざけるなよ」

探るような目つきに笑い返すと、低く唸るように叱られた。

味方かどうか。どうも私が疑われているのは事実無根の冤罪という訳でもなさそうだ。

攘夷浪士に私の存在が漏れている事を考えれば、江戸に入ってきてると思われる高杉との結びつきを考えるのは、なにも不思議なことではない。

紅桜の一件。アレでも疑われてはいたのだから。

「高杉が私の味方かどうかはさておいて、私は高杉の敵でもないよ。今のところは」

おまたせしましたと、コーヒーが運ばれる。

カチャリと音を立てて啜る。程よい苦味が、舌の上にしつこく残った甘さを消していく。

「敵」なア」

「言い直そうか？ 味方でもないよ、今のところは」

どちらにせよ同じだ。どうにも土方さんの神経を撫で上げてしまいたくなるのは、前の一件を引き摺ってしまっているのだろう。

たい焼きと共に消化したと思っていたものがまだ胃の底に溜まっているとは、私もまだまだですなあ。

半分ほど飲み干したコーヒー。これ以上飲む気にもなれず、最後のパフェを救い上げると、空になったグラスにスプーンを投げ込む。

「もしさ、仕事を休めないって言うんだったら。万事屋行ってみなよ。それが私にできるアドバースかな」

「おい、待て、お前やっぱり何か知ってんだろ。どういう意味だ」

伸ばされた手を避け席を立つ。

「パフェ」馳走様々。今日の件はこれで相殺つてことで」

手をヒラヒラ振りながら、後ろから聞こえる声を無視して外に出

る。

店内の空調とパフエで冷やされた体に日差しはなかなか心地良く、午後からのバイトも気持ちよく出来そうだと背伸びする。

そういえばバイトって有休って使えるのかな？ 無断欠勤ってクビになっちゃう？

慣れてきた職を失いかけるというのはこういう気持ちなのかと、マダオの気持ちに同調してしまった。

Mパート 豚にフィギュア

——それはキリさんがいなくなる少し前の事だった。

買い物から帰ってきた僕は、『万事屋銀ちゃん』の看板を見上げて、迷うように辺りを見渡す女性を見つけた。

年の頃は二十代。山吹色の着物に、赤い帯。ショートカットの髪はどこかで見たことのあるような色だった。

「万事屋に何か用ですか？」

背後から声をかけて驚かせてはいけないと、少し回って声をかける。

斜め前に立つ僕にその人は、ヒナギクのような笑みを浮かべると、「ええ」と応えた。

「銀さん、仕事ですよー」

階段を上がり、立て付けの悪い玄関の戸を、ビニール袋を持った手で不格好に開ける。

三和土たつきの端に立って、さあ入って下さいと促すと、綺麗な所作で草履を脱ぎ、しゃがみ揃える。そして、お邪魔しますと遠慮がちに頭を下げた。

銀さんや……いや、あの人は無理か。せめて神楽ちゃんには見習わせたい仕草だった。

「済みません、僕、台所にこれおいてくるんで先にどうぞ。奥にぎん……社長がいると思うので、話はそちらに」

ビニールを掲げてそう言ったものの、社長という言葉が口の中で泳いでいた。事実社長ではあるのだが、銀さんと社長という単語はどうにも上手く結びつかず、食べ合わせの悪いものを口に含んだような気分になった。いつものことではあるが、どうにも慣れない。

そんな僕にお姉さんは、

「じゃあ……そうさせてもらうわね」

少し迷った末、柔らかに頷いた。

買ってきた物を冷蔵庫にしまい、お茶を淹れるためお湯を沸かす。

どんな依頼なのだろう？ 浮気調査……とか？

半月前にやった依頼を思い出し、あんな美人を差し置いて浮気なんてするだろうか？ と首を捻る。

流石にお客さんに出廻らしを淹れる訳にもいかず、急須の茶葉を入れ替え、湯を注ぐ。

立ち上る湯気に、ふわりと独特の甘い香りが混じる。新しく茶葉を入れ替えた時にだけ強く感じる事ができる香りに、せめて三回に一度はこうだったら良いのにと、溜息が漏れた。

たつぷりと時間をおき、薄緑色の綺麗な色が出てるのを確認しながら、温めた湯のみに順番に回し淹れていく。

お盆の上には湯のみが四つ。客用と、銀さん、神楽ちゃん、僕。

帰ったと同時に玄関の靴を確認し、誰が家にいるか把握するのはもう癖である。うっかりと誰かを抜かしでもしたら、煩わしい嫌味が止まらないのだ。

そうやって準備したお茶をこぼさないようゆっくりと居間に向かっていると、神楽ちゃんの驚いたような声が聞こえた。

「お前あのサドの!?!」

お客さんにお前だなんて。聞くかどうかは別として、後で注意しようとして心に留める。

けれど、気になったのは「サド」という単語。サドと言えば沖田さんしか思い浮かばないが……どこかで見たと思った髪色、沖田さんにそっくりだ。目の色も。もしかして、血縁者？ それに気付いた時、綺麗なモノがガラガラと崩れていくような幻が見えた。

いやいやいや、血がつかつてるからといって性格まで似るとは限らないし、偏見は良くない！

「失礼します」

一応声をかけて居間に続く引き戸を開く。沖田さんの血縁というだけで、なんかもう色々遠慮が要らなくなったような気もするけれど、客は客だ。

銀さんと神楽ちゃんが並んでソファに座り、その向かい合わせにお姉さんが座っていた。

「どうぞ」

コトンとお茶を並べていく。

「アイツが……ねえ」

片足をもう一方の足に乗せながら、銀さんは、もの凄くイヤそうな顔をしていた。

「あら？　万事屋さんはなんでもしてくるんじゃないかな？　かしら？」

「します。します。しますよーなんでも。ただ、男のケツ追っかけるってのはなア〜」

そう言うとき銀さんは背を反らし、頭の後ろで腕を組み天井を見上げる。

銀さんとお姉さんはどうやら顔見知りのようで、気安い言葉が飛び交う。

「どんな依頼なんです？　あと、名前伺ってもいいですか？　僕は、志村新八といいます」

神楽ちゃんの隣に腰を下ろした僕にお姉さんは「沖田ミツバ」と名乗った。

「沖田さんの……？」

「そーちゃんの姉になります。もう、そーちゃんったら本当、何も言ってくれないもんだから。あそこは怪獣酢昆布とメガネ掛け器が怪しく蠢く魔窟だーなんて言うもんだからどんなところかと。こんな可愛い女の子と男の子がいるならそう言ってくればいいのに」

「いや、僕男ですから、可愛くというか、誰がメガネ掛け器だ！」

ふふふつと口に手を当てて笑うミツバさんは、やっぱりどこことなく沖田さんに似ていた。

けれど心配したような沖田さん特有の刺々しきはなく、最初の印象通り、柔らかな笑い方だった。

「あ、それで依頼というのは？」

離れた本題に、銀さんを見れば、

「ああ、なんか多串君の様子が変だから原因探ってくれて」

銀さんのしかめっ面の原因がわかった。犬猿の仲である土方さんの素行調査なんて楽しい筈もないだろう。それにしても……。

「変……ですか？」

この前見かけたのはいつだったか……。

確か三日前、仕事帰りに見回り中の姿を見た気がする。その時は、特段変わった様子は見えなかったけれど。

「ええ、突然プレゼントを渡してきたと思えば、間違いだってそれを奪い返そうとしたり……。時々何かを隠そうとしていたり。それとなく聞いてみたのだけれど『何でもない』の一点張り。本当は私なんか口を挟むべきではないと思うのだけれど、どうも様子が変なの。何か変なことに巻き込まれてるんじゃないかと心配になって」

ミツバさんは、口元に揃えた指を当て、言葉を選びながら話す。

その口ぶりから察するに、ミツバさんは土方さんを良く知っているようだった。いつだったか沖田さんと土方さんは同郷だと聞いた覚えがあるから、ミツバさんも恐らくそうなのだろう。けれど、それだけではないような……。

「女よ女。他に女ができたのよ。古い女より新しい女。男はいつだってそうよ！」

「か、神楽ちゃん!？」

僕が聞くのをためらったことを、神楽ちゃんはそれ以上に踏み込む。

表情は小憎たらしく、どうフォローしようかと頭を悩ますのだけれど、そんな神楽ちゃんに怒るでもなしにミツバさんはコロコロと笑った。

「名推理ね。でも、きつと違うわ」

「なんで分かるアルか？」

「だって、あの人、そんな事ができるほど器用じゃないもの」

思わず、ご馳走様と言いついそうになった。これはもう確実にアレだ……。

下世話なことを考えそうになった思考の雲を振り払い、提示された依頼料で購入すべきものの優先順位を考える。

いつだって食料品や、生活必需品が先に立ち、買い換えなければならぬものは後回しにされるが、機会を見て細々と買い揃えなければ

いけないものは意外と多い。

捕らぬ狸の皮算用ではあるけれど、どうしたって必要な物は必要なのだ。雲や霞を食べて生きていけやしない。

「じゃあ、よろしくね？ あとこれ良かったら食べて？」

お登勢さんの店の前まで見送りに出た僕に、ミツバさんは手のひらを差し出す。なんだろう？ と受け取ったのは、手鞠色のあめ玉。かぶき町という街は大人も子供もなく、常に生存競争に必死だ。こういう扱いは久しぶりに受けた。

少し無然としてしまったが、微笑むミツバさんにその毒気も抜ける。

沖田さんをそーちゃんと呼び、可愛がるこの人にとっては僕も弟——子供のようなものなのだろう。

じゃあと、日差しに、きらきらと髪を輝かせ、どこか儂げな背中を見送った。

手のひらの上のあめ玉を転がし、三つあるって事は僕だけが子供扱いされた訳じゃないと言い訳のような事を考える。

それからしばらく日を置いて。

浮気調査にしろ、素行調査にしろこういう依頼に対する対処法というのは自おのずと決まってくる。

源外さんに借りた無線から、雑音混じりに銀さんの声がした。

『メガネ、ザツ——…ンマンこちらシルバークロック。状況はどうだ？ どうぞ』

「こちらマン——」

「ちよつと待てええええー！」

とんでもない事を口走ろうとした神楽ちゃんの言葉を遮る。

「アンマン！ アだから、マジやないから！」

「アもマも似た様なモンネ」

「字面は似てるけど、そこ変えると酷い事になるから！」

雑音で聞き取りづらかった音を勝手に解釈し、返答しようとした神

楽ちゃんを慌てて止める。

『オイ、気づかれんだろ』

銀さんの声にはつとターゲット——土方さんに視線を走らせる。どうやら気づかれてはいないようだ、胸を撫で下ろした。

現在、神楽ちゃんと僕とで土方さんを尾行中。銀さんは銀さんで違う場所から追跡している。

狭い裏路地に肩を並べて、こつそり様子を伺っていると、ターゲットはどんどん繁華街の方へと歩いて行く。

「銀さん。どうやらターゲットは繁華街の方へ向かってるようです。先回りお願いします。どうぞ」

『ちーげよ、シルバークロックつってんだろ。どうぞ』

「英語にすればなんでもかんでもかっこいいと思ってるんじゃないよ！

それに“時”はクロックじゃなくてタイムだからね！ どうぞ」

なんだよシルバークロックつて。かっこいいつもりか!? 入れたツツコミに応答は少し間を置いて返ってきた。

『……ジョークだよジョーク。アメリカ的なの？ どうぞ』

英語だけにつてか。ジト目で手に持った黒い無線機を見つめる。

絶対素で間違えたに違いないと、確信する。

そんな僕の横から神楽ちゃんが割って入ってくる。

「アイツどこ行ったアルか？ どうぞ」

「あつー」

中二臭全開のコードネームに気を取られすぎた！

休日の賑わいを見せる通りに出て、キョロキョロと辺りを見渡すもその姿は見えない。

人混みに紛れたのか？ 目を凝らすと黒い隊服はかなり目立つにも関わらず、ごった返す人々の間にその姿を見つけることはできなかった。

「済みません、見失いました。どうぞ」

どうせ何か嫌味を言われるだろうと踏みながら、仕方なしに報告する。

その間にも横を黒い人影が通り過ぎて行くが、振り返るとスーツ姿

の天人だった。

『これだからダメガネは……安心しろこっちで捕捉した。三丁目の角を曲がったところだ。どうぞ』

良かった。ほっと胸を撫で下ろしたが、その物言いについついと反論してしまう。

「誰のせいだと思ってるんですか！ どうぞ」

『ちんたら喋ってないで早くこい。どうぞ』

「……いま向かってます！ どうぞ」

どうせ僕の言葉など聞きやしないのだ。

ささくれだった感情を飲み込みつつ、示された場所に急ぎ向かうと、銀さんの言葉通りに土方さんの姿が目止まる。

けれど、見上げるお店の看板は明らかに似つかわしくなく、ミツバさんが『どう』変なのか言い迷った理由が分かった。

お店の名前は『大江戸ホビーワールド』。

同じオタクでも、アイドル系オタクとは指向性の違う、美少女やロボットが好きな、いわゆるアニオタ向けグッズの老舗だと記憶している。

もしかして、そういう姿は仮の姿で、実は、攘夷浪士達の潜伏場所だったりするのだろうか……？

ショーウィンドウに張り付く姿からは、どう考えても店内に蠢く豚共と同じ臭いしかないのだけれど、あの土方さんに限ってまさかそんな事。

あ、店の中に入っていた。

『こちらシルバー……タイム。メガネ、お前なら中に入っても目立たねえだろ。店中入って様子をみてこい。どうぞ』

下ろした右手からガガツという音と共に、銀さんからの指示が飛ぶ。

結局言い直してんじゃねーか！ やっぱり素で間違えてただけだろ!?

思わずツツコミたくなるけれど、そんな事より問題は！

「アイドルオタクとアニメオタクを同列に扱わないでくれませんか。

どうぞ」

低く、不機嫌が声にも出てしまう。

同じオタクでも、二次元なんて妄想に囚われた奴らと一緒にされるのはまったくの不本意だ。

これだから素人は……。

『目くそ鼻くそだろうが、さっさと行って来い。どうぞ』

「全然違います！ どうぞ」

いい機会だ。お通ちゃんがどれ程偉大で、低次元に生きるアニメキャラなんて輩とは比べる事すら間違っているということを、素人にも分かりやすく説明してあげよう。

そう思った僕の背後から神楽ちゃんがせつつく。

「影の薄さをこういう時に使わないでいつ使うアルか？ グダグダ言っていないで行けヨ。どうぞ」

「誰の存在感が空気だ！ そういう神楽ちゃんの方こそ、玩具屋に入っても違和感ないんじゃないの？ きつと可愛いお人形いっぱいあるよ。どうぞ行っておいでよ、どうぞ」

「あんなゴミムシ共の巣窟に、可憐な花が混じったら目立つに決まってるダロ。お前がどうぞ行けヨ、どうぞ」

『どうぞ、どうぞ譲りあってねえでいいから行けよ。どうぞ』

結局、神楽ちゃんは「なんか臭そうアル」と頑なに入店を拒否したため、僕一人で自動ドアを潜る。

ガラスのショーケースには美少女フィギュアが並び、天井からはタペストリーが吊り下げられていた。

軽薄でチャラついた店内に顔を顰めそうになるが、それをどうにか押し留める。

掲げたアニメ雑誌の影から、フィギュアの品定めをしているフリをしながら——こちらを伺う視線を感じる。

今の視線は「コイツはオタクか、一般人か？」という新参者に対する索敵だ。動揺を見せれば即座にエネミー認定され、冷やかな対応で遠巻きにされるに違いない。そうなれば店内で悪目立ちし、必然、土方さんからも見つかってしまうだろう。

ここは、僕が探しているのはエルフやフェアリー、猫耳娘であり、お前等なんて下級オーク共に興味はないんだよという風を装わねばならない。そして新参者だろうと、自宅のコレクションアイテムを眺めるが如くふてぶてしく、けれどどこか不安げに、それがシャイなオタク共に味方だと示す為の合図。

ファツションオタクなんてニワカ共が蔓延る昨今、敵味方を注意深く観察するのは必然ともいえる。

常に味方を探しながらも、敵には堅く門を閉ざさずには生きていけない性に、一瞬、共感めいたものが生まれるが、今はそういう場合ではないと打ち消す。

土方さんは……いた。

美少女系コーナーの壁に貼られたポスターを見ながら、DVDの発売日をチェックしていた。

こちらに背を向ける格好になっており、気づかれてはいない。

こうしてみると、本当にその趣の人間にしか見えないのだけれど……。

「来月入荷のものはこれとこれと……。予約特典どれにするか悩むでござるなあ」

「ござる!? ござるって何!? 一瞬間こえた単語に耳を疑う。」

「フリだよ……ね? 周囲に溶け込むためのフリだよね?」

本棚の影からこっそり伺っていると顔見知りなのか、赤ら顔の男が一人肩を叩き声をかけてきた。

親しげに話す様はこの常連であることを匂わせており、はつきりと、ここにいる土方さんの姿が、任務や、捜査といった、偽りからきいたものではない事を確信させる。

内心の動揺をひた隠しにして、店を後にした土方さんを追い、僕も店から出る。

「どうだった? と聞いてくる銀さんと神楽ちゃんにありのままを伝えるがにわかには信じてもらえず、それから追跡は続いた。」

Mパート ソールイーター

「はい、え？ 急ですねまた。分かりました。じゃあ何かあったら連絡下さい。え？ 妖刀？ なんですかそれ。はあ……分かりました気をつけますけど、何をどう気をつければ？ あつ、ちよつと！」

切られた受話器を3秒ほど見つめ、結局はチャリンという音を立てて受話器を置いた。

『妖刀に魂を取られないよう、気をつけて』

意味の分からない——警告なのか忠告なのか——そんなものを残してキリさんからの電話は切られた。

真夏の怪談でもあるまいし、妖刀って……。

そんなことよりと、雑に放り出された写真に視線を落とす。

二重人格——そう思えるほど、土方さんの態度が変わることを気づくのに、そう時間はいらなかった。

銀さんのデスクの上には、メイドカフェに入っていく土方さんや、握手会——有名声優らしい——に並ぶ土方さんの写真が散らばっていた。原因をという依頼ではあったが、原因ははまだ掴めないでいた。

『銀さんどう思います？ おかしいと思いませんか？』

『どう考えたっておかしいだろ、このマヨネーズの量。無理だろこんなん、味覚死んでんじゃねーの』

メロンソーダの上の白い物体——残念な事にアイスクリームではなく、マヨネーズをスプーンですくっている写真に、銀さんはうへつと眉を擡^{しか}めていた。

『違うだろ！ 明らかに目をつけるのそこじゃないだろ!!!』

その次の写真は、メイドさんとじゃんけんを繰り返している姿。

『新八イ。男は皆、趣味の一つや二つ隠して生きてんだよ。お前も大人になったらわかる。かくいう俺だつてなア……ナスが好きだ』

そんな言葉は馬耳東風とばかりに、銀さんはホジツた鼻くそをピンと写真に飛ばし、したり顔でこちらを見る。

アンタのは全然隠しきれてないだろおおおというツツコミが飛

んだのは言うまでもない。

そんな会話をしたのは昨日の事で、とりあえず現状を報告しようとしてミツバさんと待ち合わせをしたのだが……受話器に置いた手をそのままに、壁にかけられた時計を見上げる。黒い針が丁度三時を指していた。

そろそろ時間だから取りに行くのは後にするとして、アレは明日の昼食にと、冷蔵庫の中身を脳内で仕分けする。

「キリか？」

そんな僕に、銀さんが声をかけてきた。

考え事をしていた僕は、半テンポ返事が遅れる。

「あ、ええ。なんでも旅行に行くから、しばらく家を開けるそうです。冷蔵庫の中身、好きにしているから処分してくれて。合鍵はポストに入れてあるからと。後で原付出してもらっていいですか？」

本題はそこだったようで、妖刀の話はおまけみたいなものだった。本題よりも気になるおまけ。一体全体どういう意味なんだろう？

「あ？ それはまた……急だな」

読んでいたジャンプから顔を上げ、銀さんが訝しげに顔を傾ける。

「なんでも友達に急に誘われたとか。チケットが余ってるからって」「友達イ？」

電話口で聞いたことをそのままに伝えれば、信じられないと目を見開きながら、アイツにそんな人間いんのか？ とはなはだ失礼なことを呟く。

まったくの同感ながら、完全に同意するのも可哀想なので、返答の代わりにふと思いついたことを口にする。

「友達と言いながら彼氏とか……まさかそんな訳ないですよね」

自分でいいながら、乾いた笑いが後ろについた。銀さんは凄くつまらない冗談を聞いたように顔を顰めて^{しか}いる。

そうだな、キリさんに彼氏なんてもんができるなら、僕だって……。そう考えたと同時に、玄関ブザーが鳴った。

ミツバさんだろうか、玄関へ向かう。

「?? 今開けます」

玄関の磨りガラス越しに見えた姿は、黒く、ミツバさんではなかった。

依頼人だろうか？ 万事屋にしては珍しい盛況ぶりに嬉しく思う反面、約束に被ってしまうと悩みながら戸を開けた。

そこに立っていたのは……土方さんだった。

「酔昆布いるか？」

苦虫を噛み潰した顔で告げられた名は、今しがた旅行に行くといった人物で――。

「いえ、さつき連絡があつて一週間程旅行に行くつて言つてました」

「くそっ……なあ、アイツから……」

舌打ち混じりに何かを言いかけた土方さんが、急にストンと表情を落とす。

――変わる。

確証を持つその通りに、今現在の場所がどこなのか惑うように辺りを少し見渡した土方さんは、オドオドとした態度で――先程までの姿からは想像もつかない――あのーと僕を見つめる。

「いま、何時でござるか？」

「あ、えつと3時です」

「!! いかん、始まつてしまつてござるー!」

「えつ、ちよつと何か用事があつたんじゃありませんか?!」

始まるつて何が？ そんな僕の疑問を余所に、慌てて踵を返し階段へ走り向かおうとする。そこへ……。

「十四郎さん？」

階段の縁に足をかけたまま土方さんは止まり、ぱつたりと鉢合わせしたミツバさんは瞳と口を丸くしてこちらを見上げていた。

ソファアーに並ぶ土方さんとミツバさんを眼前に見ながら、僕等は座っていた。

あの後、固まる土方さんに、ミツバさんがここに来た理由を何度も聞くが、土方さんはしどろもどろに言葉にならない言葉を返すばかり

で、罎が開かず――。

首をかしげるミツバさんと、あーとか、うーとか声を上げる土方さんのにらめっこはしばらく続いた。

「――とりあえず、中に入りますか？」

しびれを切らした僕の声に、振り返った土方さんがブンブンと勢い良く首を縦にふり、今に至る。

出廻らしではないお茶が徐々に冷めていく。

何という因果だろうか？ 土方さんは肩を縮め、俯いたままもじもじとしている。心なしか頬が薄っすらと染まり――気持ちが悪い事この上ない。

そんな土方さんの隣で、ミツバさんはニコニコと笑い座っている。

どちらか一方だけでも帰せば良かったと、選択肢の誤りに嘆く僕の心などお構いなしに、銀さんと神楽ちゃんのヒソヒソ話が隣から聞こえてくる。

「銀ちゃん今日のマヨ、三倍増しで気持ち悪いネ」

「そうか？ いつもあんなんだつたろ？」

本当にそう思うなら、銀さん、アンタの目は死んでるところか腐り落ちてますから。

ツツコミを入れる気力もなく、ただただ気持ちの悪い土方さんから視線を逸らす。

「あ、あのー、それですね」

本人がいる目の前で話すのもどうかと思うが、やけくそで写真を並べる。

「こ、これは……」

やっぱりまずかっただろうか。目を見開き、土方さんが写真を見つめる。

「かおりんぬではござらんか！ この姿！ この角度！ 先日は惜しくもシャッターチャンス逃した次第……ぐぬぬぬ！ 是非ともこの写真を譲ってくださいらぬか！」

両手で掴み掲げた写真は、握手会後のプチ舞台を『女はさ、やつぱケツだよケツ。あ、振り向くんじゃねーよ』とどっかの阿呆が仕事

そつちのけでシャッターを切った一枚だった。余談だが、続けた何枚かは、ドアップでピントの合っていない——腕を伸ばして自撮りした——神楽ちゃんの写真だ。

真剣ににじり寄る土方さんに思わず背を反らしてしまう。

「……………」

ずいっと乗り出す身にそう申し出れば、

「ありがとうでござるー！」

と、心底嬉しそうに写真を抱きしめ再びソファアに腰を降ろした。トプトプトと赤い液体が湯のみに注がれている。

「やはり、かおりんぬは歌って踊れて……スタイルも良いでござるなあ！ 特にこの時の衣装は、ジャンネルのデザイナーがかおりんぬに惚れ込んで作ったと言われる一点もの！ この腰から太ももにかけてのラインはかおりんぬの見せ方を研究し尽くした人間にしかできない最高の出来栄え！ まさに声優界の真珠でござる!!」

興奮する土方さんの背後で湯のみが真っ赤に染まっている。煮え湯をいれたつもりはないのだが、ぐつぐつと煮立つような幻影が見えるのはなぜだろうか？ 血の池地獄のような湯のみがそつと差し出された。

「喉かわきませんか？」

「おお、そういえば、恩にきるでござる。……………ふうふううう!!!」

ミツバさんが差し出した湯のみを疑うことなく受け取った土方さんは、迷うことなく口をつけ、血のような色のお茶を吹き出し、のたうち回る。

湯のみを渡した本人はというと、まあ、大丈夫？ と澄ました顔で地面に這いつくばる土方さんの背を撫で、更に劇物を押し付けようとしていた。

前言撤回……やはりこの人は沖田さんの姉だ。

神楽ちゃんと銀さんはその光景を鼻をホジリながら見ていた。僕は……絨毯に溢れた元お茶がシミにならない内に拭き取ろうと雑巾を取りに行くことにした。

雑巾を取り、戻ると、何やら土方さんと銀さんが揉めていた。

「てめーに言うことなんざ、なんもねーよ」

「そーやって意地はつてねーで、いーかげん全部ゲロっちまえよ」

唇を真つ赤に腫らした土方さんの手首を捕まえ、銀さんがにやにやと笑っている。

僕は絨毯の上に被せた雑巾を踏み、染みを抜きながらそれを眺める。

「どうやら『いつもの』土方さんに戻ったようだ。どういう仕組みなのだろう?」

「なんもねえつつてんだろ」

「なんもねーのに、こーんな……。へーそー、いい趣味してんじやねーの、ええ? トツシー君」

「誰がトツシーだ! いっとくけどなア、盗撮は立派な犯罪だぞ? しよっぴかれたくなかったらそれを渡せ」

平静を装いながら、土方さんが掴まれた腕を振り払い、ぴらぴらと銀さんが掲げる写真に手を伸ばす。それを見越した銀さんは後退り……取っ組み合いの喧嘩を始めていた。

「どうやら何もかもが面倒臭くなった銀さんが洗いざらい吐けと土方さんに迫っているらしい。」

依頼の解決方法としてありなのだろうか? 混沌とした目の前の現状にうんざりしながらちらりとミツバさんを見る。

「やっぱり男の子っていつまでたってもこうなのね」

「脳みそにエロとジャンプと糖分がつまってるのが男子だって銀ちゃん言ってたネ。いつまでたってもほーんとガキで困るわよねえ」

いや、脳みそが生ゴミなのは銀さんだから……。

訳知り顔の神楽ちゃんと肩を並べて「羨ましいわ」と呟いているのを見る限り、どうもミツバさん的には『あり』らしい。

その後すったもんだの末、写真を渡す代わりに事情を喋るという事で決着がついた。

「妖刀?」

半信半疑の眼差しで銀さんが土方さんの刀を見つめる。

「……俺も最初は信じていなかったがな。このざまだ」

笑いたきや笑えと吐き捨てる。

この時分に妖刀なんて……と、疑う気持ちがないと言ったら嘘になるが、常識では考えられない土方さんの様子に鑑みるとまったくのデタラメだとも言い切れない。普段を知る人間からすると更にだ。

それに……。

「……なあ、アイツから何かきいちゃいねーか？」

「あいつ？」

「酢昆布だよ酢昆布」

土方さんの言葉に、銀さんが、キリ？ と首をかしげていた。

電話越しのキリさんの言葉が蘇る。

「そう言えば、『妖刀に魂を取られないよう、気をつけて』そう言っていました」

「やっぱり奴は何か知ってやがったか。他には？」

「いえ、他には何も」

僕の言葉に、土方さんはくそつと悪態をつき、頭をかきむしる。

魂を取られる。このまま放っておけば土方さんの魂が妖刀に食われる。そういう意味なのだろうか？

思ったより深刻な事態に慌ててキリさんに電話をかけるも、『現在電源が入っていないか、電波が——』という無情な自動アナウンスが流れるだけだった。

結局それ以上は何も分からずじまいで、キリさんと妖刀。両者の間に横たわる謎の線だけが残った。

「邪魔したな」

玄関先で僕等はピシヤリという音と共に、土方さんの出て行ったドアを見つめる。——写真はしっかりと回収していった。

これからどうするのだろうか？ 僕と神楽ちゃんは銀さんを見上げた。

「依頼料は……」

「万事屋さんは、アフターサービスも万全って聞いているわ」

これで仕事は完了とばかりの銀さんに、ミツバさんはっこりと笑う。

見た目に反して、中々ちゃっかりしているようだ。

「それ、誰が言ったんだよ。キリか？ 碌な事いわねーなアイツ。大体なにか知ってんだったら、もつとまともな情報残しておけっつーの」

バリバリと頭を搔く銀さんに僕と神楽ちゃんはこっそりと顔を見合わせて笑った。

それにしても……キリさんは本当にただの旅行なのだろうか……？

——現在、電源が入っていないか、電波が届かない場所にいるため通話をお繋ぎする事ができません。

無機質なアナウンスが不吉な予感を暗示させるように思えて仕方がなかった。

携帯電話の電波が届かないような、コンビニすらない田舎にいる事を願った。

Sパート 地獄の旅の一里塚

気が乗らないが仕事は仕事だと、あちらこちらに聞き込みを重ねるが、妖刀なんて見たことも聞いたこともないという回答ばかりだった。

「銀さん、鉄矢さんなら何か知ってるんじゃないですか？」

ほうほう 方々聞きまわって3日目。新八が俺にそう言ってきた。

他に良い案もなく、提案に通じ鍛冶場を兼用した自宅に向かう。モノがなければ話にならないだろうと——どうしても刀を手放さないのでおまけも一緒に引きずっていく。

ついでに事情を話せば、手がかりがあれば直接聞きたいとミツバも付いてきた。

神楽が機嫌良く頭を振りながら前を歩いていた。ミツバに飴を貰ったらしい。

それを見ながら、これから限定品の列に並ぶのだと駄々を捏ねるトツシーの襟首を掴み、引き摺り歩く。

「そういうえば、お仕事どうしたんですか？」

俺の背後、トツシーに向かって新八が問う。

「——クビになったでござる」

ミツバから視線を反らし、言いづらそうに言った。

クビ……。

「えっ？ ええええええ!? そんな!？」

新八が騒ぎだす。

ミツバを見れば、顔色を悪くしていた。どうやら知っていたらしい。

互いの様子に、それについて一悶着あった後というのが俺の判断だった。商売柄、複雑な人間関係というものを色々見てきはしたものの、知った顔の裏事情なんつーもんは見たくないというのが本音だ。

そして、他人が口を出す事でもないので放っておく。口を出したいものでもない。

「坂田氏！ 今日発売のトモエ5000のフィギュアは限定生産版で

！ 買い逃すと!! 聞いているでござるか!!」

暗くなつた空気を読まずに、ずりずりと引き摺る後ろでトツシーが騒ぐ。

「誰かこいつを黙らせ——……」

キツと派手な音を立ててパトカーが目の前に止まる。

何事かと立ち止まる俺等の目の前で乱暴に扉が開き、どたどたと黒服の男——真選組の隊士等が飛び出してきた。

「副長！ いましたか!!」

そのうちの一人がトツシーの腕を引く。必然、俺に襟首を捕まえられていた奴の首が締まる。

「がはっ……く、苦しっ」

「遊んでる場合じゃないです。山崎が『酢昆布』に殺されました!」

隊士の言葉に緊張が走る。新八と神楽の視線が隊士に集中した。

「く、さ、坂田氏……いい加減離すで……」

「おい、どういう事だ?」

襟首を捕まえる手に力が籠もる。『酢昆布』——真選組の連中がキリをそう呼んでいた事をおぼろげながら覚えていた。行方をくらました事といい、不穏な伝言といい、やっぱりアイツ何か噛んでやがる。

「そのままの意味だ。副長、隊に戻って下さい!!」

「ごほっ……ごほっ……は、離すでござっ……ぐふっ!!」

こちらに冷たい一瞥を寄越したと思うと、なおも隊士等はトツシーの腕を引く。仕方なく手を離れたとたん——皮膚が粟立つ様な気配を感じ、咄嗟に野郎を蹴り飛ばす。

「あべしっ!」

不細工な悲鳴を上げ、手について前のめりに倒れる。——蹴り飛ばす前に奴が立っていた場所。そこには幾本もの刀が突き立っていた。

何が起こったのか考えるよりも前に、野郎の片足を掴み、隊士がいる方向とは真反対の裏路地へ駆け込む。

新八と神楽も遅れじとついてくる。ミツバは神楽が抱いていた。

ベコンベコンと背後から何かと何かがぶつかるような音に悲鳴が混じるが無視する。

「あべべべっ、き、坂田氏、輸送はもつと丁寧……がはっ！」

ひとときわ盛大な音を立てたかと思うと声は聞こえなくなった。

「銀さん、どういう事だと思えますか!!」

「わからねえ」

息を乱しながら新八が聞いてくるが、分からないのは俺も一緒だった。山崎とキリそして殺されかけた『真選組副長』。ミツバも当惑した表情を浮かべており、何かを知っているという様子はない。

真選組内で何かが起きていると見るべきか。

ポリバケツや、積まれたダンボールをすり抜け、裏路地の出口——
明るいそこへ出たとたん。

——ギョルルルツ!

明らかに俺等を轢き殺そうと迫るパトカーを、神楽が両手を突っぱねて止める。ボンネットがぐしゃりと潰れ、靴底が長い線を引いた。

新八が投げ渡されたミツバの下敷きになり、尻もちをつく。

背後を振り返ると、刀を抜き追いかけてくる隊士連中が見えた。

ぼやぼやしている暇はねえ——。

「ひいひいっ! ギゃあっ!」

パトカーの運転席を俺が、助手席を神楽がこじ開け、中にいた隊士を殴り飛ばし放り出す。気を失った燃えないゴミは後部座席へ投げ込んだ。

新八とミツバも慌てて乗り込む。

アクセルを目一杯踏めば、急発進する車に轢かれまいと投げ出された隊士が四足で転がるように避ける。追いかけてきた連中も振り切り、めくらめっぼうに車を飛ばす。

「神楽、サイレンつけろ」

「はいヨ〜!」

ウーウーと回る赤色灯に、渋滞の列が割れる。そのど真ん中を走りながら考える。何が起きている?!

「うっ、あああ? ……ここは?」

どうやらもう一方が起きた様で、ルームミラー越しに、鋭く睨みつける目と視線が合った。

「なあ、『酔昆布』がジミー君を殺したとよ。お前、何かしらねーか？」
嫌な予感はしていた――。

自然、ハンドルを握る手に力が籠もる。

状況がのみ込めないのか土方の野郎は二度三度頭を振り、考えこむような素振りをした後、重々しく口を開いた。

「――もし、それが本当なら、奴がどうとう尻尾を出したって事だろ。奴は――攘夷浪士と繋がっている」

「そんな馬鹿な！　どこに証拠があるんですか！」

激昂した新八が土方の襟首に手をかける。

「そうアル！」

助手席に座っていた神楽も振り向き、座席の背もたれを掴みながら声を荒げる。

攘夷浪士――キリが？　俺からすれば与太話の類にしか聞こえなかったが、鼻のイカれた犬共はそうは思わなかったようだ。

「うっせーな。それを調べる為に山崎を付けてたんだよ」

キリの足が遠のいたのはそれが理由だったのか。

『繁忙期でね――でもさあ割増賃金分がうちの店で酔昆布に変わるつてのは……変な永久ループ入ってるよね……』

そう複雑な顔で笑っていた。野郎……随分と作り笑いが上手くなってるじゃねーか。

「お前、キーやんを疑って!!」

まなじり 瞋を上げて神楽が怒り散らす。それを土方はやけに冷めた目で見ていた。

「生ぬるい事言ってるじゃねー。白か黒かつけるのが俺等の仕事だ。白なら白、別に困りやしねーだろ。事実無根ならな。だが、それが殺されたとあっては、そう思うよりしかたあるめエ。山崎の野郎……下手踏みやがって」

「そんな……キリさんがまさかそんな……」

土方の言葉に、力の抜けた新八の腕が振りほどかれる。

真つ赤な夕日がチラチラと車内を照らす。

薄つすらと暗く染まり始めた空。その先に向かう道がどこに続く

のか分からないまま、車は甲高いサイレン音を立てて走り続ける。目を突き刺すような斜陽がビル群に隠れ、影を作った。

車内に落ちた空白に、らしくねえじゃねーかと胸の内で呟く。

「新八。お前メガネどっかに落としてきたのか？ 本体落としてきたらただの新八になっちまうだろーが」

「つな！ 新八になっちまうって僕は産まれた時から新八ですけど!?」

「だったらな、目に見えるもんだけじゃなくて、心の目でちゃんとする。あんな税金泥棒改め、ヤクザ警察の言葉を真に受けてんじやねえ。お前が見てきたものを信じろ」

前が見えなくとも歩いてきた道なら見えてる筈だろ。なあ？

ガガツと無線から雑音と共に声が聞こえてくる。

『土方は見つかったか』

『お前何番た……もがっ！』

新八が土方の口を抑え黙らせる。押し殺した声で「静かに！」と注意が飛んだ。

流石ぱっつあん。わかってんじやねーの。

ハンドルを片手に、左手で無線機を取る。

「あーあー、こちら三番隊。さーせん、取り逃がしました」

『……今、土方の声がしなかったか？』

「気のせいでありますアル。どうぞ」

『そうか？ ……まあいい。なら、一刻も早く奴を見つけ出して始末しろ。近藤暗殺が成功したとしても、土方がいては伊東さんの計画が狂う。気づかれるなよ？ 万が一これが伊東さんの計画だと知られば、真選組は二つに割れ、組織としての力を失う事になりかねない。それは伊東さんの望む所じやない』

舌打ちしたくなるのを押し留める。要約すれば一連の流れは全部真選組コイツラの内部抗争じゃねーか。

俺の持つ無線機に神楽が割り込み、代わりに応答を返した。

「了解しましたアル」

『近藤は今頃何も知らずに首を落とされてる頃だろう。愛する武州故郷に

向かう電車の中でな。後は土方のみだ。気を引き締めて事にあたれ」
ブツツと切れた無線を叩きつけられるように戻す。

「これから、どうするアルか銀ちゃん」
不機嫌6割、困惑4割といったところか。神楽が口をへの字に曲げる。

「どうするかねえ」

大体の全容は見えてきたが、いまいち見えないのはキリ。何をどこでやってるのやら。

フロントガラスから見える景色はいつの間にか青味を強くして、ヘッドライトを付けた車の列が魚群のようにギラギラと光っていた。

新八も思うところがあつたのか、土方を押しえつけている事を忘れ考え込んでいた。

その手を土方が掴み、強引に外す。

「つぷは。いい加減離せ！ 万事屋、車をそのまま武州に向けろ」
さも当たり前のように告げられる。

「おいおい、これタクシーじゃないんですけど、お客さん」

「うっせー、タクシーもパトカーも行灯あんどんつけるかサイレンつけるかの違いで大した差はねーだろ」

「うわっ、この人本当にこの前まで警察官やってたんですか？」

土方の滅茶苦茶な言い分に、新八がツツコミを入れる。

「いいから向かえ、時間がねえ！」

焦り——すが縫ぬうようにすら聞こえる声と命令口調に、既にストレスが最高潮だった俺の何かが切れた。

ハンドルを手放し振り返る。視界の端で神楽が慌てて運転席に移動する。

後部座席に座る野郎の襟首を掴み引き寄せる。

「テメー等の尻拭いに、人を当たり前のように巻き込んでんじゃねーよ。テメーのケツはテメーで拭け。虫が良すぎんだよ」

何も持たずに幸せだと笑う人間を悪戯に追い回した事を怒っているのか、それを悪びれもなく開き直るこいつに切れてるのか——そもそもこれが怒りなのかすらも分かつちやいなかつたが、とにかく腹が

立った。

あるいは大事なモンを失いかけてるこいつに何かを重ねたのか――

「うっせー時間がねーんだよ」

再び繰り返される土方の言。

「あ？ ゴリラの首が落とされるかもってか？ それこそ知ったこっちゃやねえ。剥製にして飾って貰え」

睨み付ける瞳の力は失っていないものの、何か耐えるように眉を寄せ、顔を歪めているのにそこで気づく。さして高くない室温だったが、額に冷や汗のようなものが浮かんでいた。

「違エ、そうじゃねー……。なあ万事屋。テメーに頼み事なんざ、それこそ死んでも嫌なんだが、そうも言つてられねーみてエだ」

クソツタレが。

『十四郎さんがもう丸一日あの状態なの……。私、このままいなくなっちゃうんじゃないかって……。』

不安そうにミツバが伝えてきたのは今朝方だった。

呼吸を乱し、どこか諦めた表情を浮かべる野郎に腸が煮えくり返り、体の中でモツ鍋パーティーでも開けそうな気分になる。

「関係ねエよ」

堅く握りしめた拳の指を一本一本引き剥がすようにして、手を離す。ドサリと座席に尻をついた奴は、忌々しそうにこちらを見上げた。そのまま殴らなかつた俺の忍耐力を讃えろと言いてえ。

「……最後まで嫌な野郎だな。だがお前等しかいねーんだよ。近藤さんを、真選組を護ってくれ」

その言葉を言い終わるか終わらないかの内に、パシんツと乾いた音が車内に響いた。音の発生源は今の今まで沈黙を保っていたミツバだった。

「土方十四郎ともあろうものが、情けないこと言わないで下さい！ 組を他人に任せるなんて！ そんな無責任なこと言わないで下さい！！」

興奮のためか、荒く息をつき、奴の頬をぶつた手は真っ赤に染まっ

ていた。震える手を胸の前で抱きながらきつく睨みつける。

美人が怒ると怖いと言うが……。

首を持つていかれた奴が頬に手を当て、やけにナヨナヨしくこちらを向いた。

「……な、殴ったでござるな……親父にも打たれた事がないで……ぐふっ！」

今度は平ではなく拳が飛んだ。

顔を鼻血で染めながら蹲るトツシーに、怒りと悲しみを湛えた瞳が注がれる。

あれが奴の遺言かねえ……。情けなさすぎて反吐が出る。

「坂田さん」

揃えられた膝の上で、ギョツと拳が握られる。

切り込み隊長さん似の顔が、何かを覚悟したかのように視線を真っ直ぐに上げていた。

美人に真剣に見つめられりやあ、男は皆馬鹿になるしかあるめえ。

「……送り届けるだけだ。それ以上は面倒見切れねーよ」

妥協案を提示する。——キリの奴も気になった。

「構いません。後は捨て置いて下さい。土方十四郎の墓場は戦場です」

その姿は凜と——まるで研ぎ澄まされた守り刀のようだった。

「へっ？。い、いやで……ひっ！」

それでもまだ、うだうだとぬかす野郎をひと睨みで黙らせる。

白夜叉なんて呼ばれちゃいたが、本物の前ではそんな名、恥ずかしいばかりだ。

「銀ちゃんー」

神楽の悲鳴。

右へ左へと蛇行し、対向車線に飛び出そうとした車のハンドルを腕を伸ばしギョツと回す。

「途中下車すんなら今のうちだぜ？」

神楽が退いた席に座り、そう言えば。

「私が最後まで付き合わないでどうするっていうんですか」

迷いのない言葉にやれやれと肩を竦める。流石、武州の女。肝まで据わ^すっていやがる。

クラッチを踏み、キュルキュルと音を立てタイヤを滑らせる。けたたましいクラクションを鳴らされるが、気にしない。

そのまま車を反転させ——地獄の三丁目まで死に損ないを運ぶ。

タクシーになったり霊柩車になったり……元はパトカーだったのを忘れちまうんじゃないだろうか？

くるくると回る赤色灯がその名残を残していた。

ねこひろい

——時は遡る。

ジミー君が今日も今日とて後をついてまわる。カバディブームは終わりを迎えたようで、今週からはミントンのラケットを振り回している。初心に返ったらしい。

流行は巡ると言うが……。もう1週してもどうにもならないのであれば何か手を打とうと考えながら、私は私のマイブーム——茶色い縞の三毛猫を探す。

雑木林との境目に連なる茂み。その茂みから様子を伺うような頭が見えた。

公園に居着いたこの猫は警戒心が強く、俺は猫王になるっ！ と暇にかまけ公園の殆どの猫を陥落させた私をもつてしても未だ落とす事ができずにいる。

気づいたのか、吊り目がこちらに向く。少し上がったお尻の先で、ゆらつと尻尾が揺れた。

「ちちちちつ、怖くないですよー」

ヤバイ薬をキメたかのような猫がパッケージジされたオヤツを振りながら、ゆつくり手を伸ばす。もう少しというところで……バツと、地面を蹴るように逃げていった。

手を伸ばした格好のまましばし休憩。ため息を堪らえ屈んでいた背を伸ばす。秋波を送ること両手で余るほど。それを全て素気無く袖にされてきた。

ドラッグ猫とにらめっこする。

こいつが悪いのか？ 『今、一番売れています！』とPOPが打たれていたのだが……。

——みぎやーお

いつの間に来たのか、両耳のちぎれたふてぶてしい顔をしたボス猫が足元でこちらを見上げていた。

愛想の欠片もない顔で早くよこせとばかりに鳴き声をあげる。

お前に上げるつもりじゃなかったんだけどねえ……。仕方なしに、

座り、袋を逆さにする。

細長いジャーキーがバラバラと地面に散った。

それをガツガツと貪るボス猫の頭を撫でる。

「7貫つたらせめて3は返すべきだよね」

ああ、でも奴はプラスもマイナスもゼロでイーブンだと、一人納得する。

地面に落ちた最後の一欠もなめとるように食べたボスは満足気に口の周りをべろりと舐めめすると、のっそりと立ち上がり、茂みの中へと消えて行つた。

空っぽになつたビニールをくるくると丸め縛り、よつこらせと立ち上がる。

高くなつた視線の先、折れた茂みの先へ消えていく茶色と白の尻尾が見えた。

「別にストーカーって訳じゃないよ？ 敵を知り己を知れば百戦危うからずっていうじゃない？」

誰も聞いていやしないけれど、言い訳を呟いて、奴の行動をリサーチするためにその後を追う。

公園を抜け、大通りを横切り、裏路地、塀の上、サザンカ山茶花の枝を伝い降りたそこは……。

——カリカリツカリツ

手ずから猫に餌をあげる真選組参謀——伊東鴨太郎がいた。

裏庭に面した縁側に胡座を組み、その膝の上に猫を乗せている。

どうりで見た事がある訳だ。ここが真選組屯所だと気づくのに間があつたのは、ここが普段立ち入る事のない裏手という事もあるが、猫に連れられ人が通らない、通れない猫道をひたすら歩かされたせいでもある。

「——誰だ？」

伊東先生が顔を上げる。サザンカ山茶花の木の影に隠れていた私に気づいたのだろう。

「ああ、済みません。怪しいモノじゃないですよ？ 猫を追っていたらこんな所にたどり着いてしまいました。すぐ立ち去るのでお構い

無く」

「君は……この前の？」

私の口上など右から左へと聞き流し、先生は眉を寄せる。

それにしても……慣れてるな。餌を食べ終わった三毛はゴロンと腹を見せ、気持ちよさそうに先生の手に撫でられている。

嫉妬心がむくむくと沸き起こる。まっつたくもって……解せない。

「あー、立ち去る前にその子、撫でさせて貰ってもいいですか？」

眉の影が更に濃ゆくなったが気にはしていない。

だって……この機会を逃したら、こんな姿を拝めるのは、いつになるか分からないじゃない？

嫉妬心は放りなげて利己的になろうと決めた昼下がり。

どうも先生がいれば私が近寄っても平気なようで、膝の上で香箱を組む猫の頭を撫でれば、嫌がる素振りも見せず「なぐご」と欠伸をした。

けれど、私なんて空気のような扱いで撫でる手なぞ存在しないかの様。

じつと伊東先生の手のひらを見つめる。大きさか？ 厚みか？

温度か？

骨ばった細い——白い傷跡が幾つかついていて——手と己の手と見比べる私に、先生はため息を吐いた。

「分かんないな」

「何がです？」

首を傾げれば、ますますもって不可解そうな表情を浮かべる。

「君は土方君側の人間ではないのか？」

暗に自分が土方さんと相對する人間だと告げていた。

まあ、先日的一件をみれば幼子でも仲が良いなどとは思わないだろう。

「土方さん側？ 本当そう思ってます？ 監察付けられますよ？ 私」

「だからだよ。あれは彼の甘さだ。僕なら問答無用で斬るがね」

鬼の副長よりも怖い参謀様は剣呑な目つきでこちらを見つめる。

「白か黒かも分からないのに？」

「白か黒かを決めるのが僕等の仕事だ」

ピシヤリと言いつき不敵に笑う。

香典を組んでいた猫がむくりと立ち上がる。

——ナァ——

首を振り、後ろ足で頭を搔くと、ピヨンと地面に降り立つ。そして、一度だけ振り向きそのまま山茶花サザンカの木を駆け上がって行ってしまった。

あーあ、残念。最後まで満足させられなかった事が悔やまれる。

「ねえ？ 鴨ちゃんまた来ていい？」

鼻白んだ。

「何故だ」

「友達になりたいからかなあ？」

にゃんと声真似をする私に、鴨ちゃんは「分からん」と渋い顔を浮かべた。

何度目かの訪問。流石に、監察付けられたまま正面突破できるような凶太い神経は持っていないので、ビニール袋を持って扉に手をかける。猫缶の入った袋がガサガサと鳴った。

まあ、礼儀みたいなもんだよね。ジミー君を撒いても良い正当な理由ができたとかそんな事は思っちゃいない。

顔を覗かせ、安全を確かめた後、トンと降りる。

「懲りないな君も」

「いやいや、もうちよつとって気がするんですよね……」

抱き上げようとして逃げられ、撫でる手は無視され——けれど、餌は食べてくれるようになった。

「何が目的だ？」

目的……目的……。

「取り敢えずは鴨ちゃんの膝から降りてこつちに来てもらおう事ですかね？」

「目標だろうそれは……僕が聞きたいのはっ！」

ポリウムを上げた声に驚いた三毛君が鴨ちゃんの膝の上から逃げ出す。地面に降り立ち、迷うようになーごと鳴き声を上げた。

鴨ちゃんを見上げる視線を遮るようにしやがみ、そろりと手を伸ばすと……脱兎の如く逃げていった。

「惜しい！」

残り5cmの距離にパチンと指を鳴らすと、おでこを手で抑えた鴨ちゃんが首を振った。

「君といると疲れるな。僕の弱みでも握れば見逃してやるとでも言われたか？」

「土方さんがそんな事言うと思う？」

「……思わんな」

視線そむけ顔を歪めた。

そうでしょうとも。司法取引を得意とするのは鴨ちゃんの方だ。

「ああ、目的って訳じゃないけど、一つだけ」

「なんだ？」

期待してはいないが、一応聞いておこうというような、そんな表情を鴨ちゃんは浮かべる。

「近藤さんの暗殺やめとかない？」

ビュツと今しがたまで私の首があった場所を刀が通り過ぎていった。

見事な抜刀術だ。

避けられると思っていなかったのか、驚いたように目を開く。その目がスツと細まり、僅かわずにあった余裕が消え去った。

「危ないなー、人間には首が必要なんだよ？ 鴨ちゃん知らない？」

「……もう一度問おう、何が目的だ？」

綺麗な構え。新八君が真っ直ぐに伸びた若竹だとしたら、鴨ちゃんにはピンツと張った弦だ。触れれば切れそうな程の。

「友達になりたくて」

「まだそんな痴れ事を……ならば、それを理由に死ぬ。猫一匹分の価値しかない命とは随分衰れなものだ」

踏み石に足をおろし、ゆつくりと近づいてくる。靴下の布地に食い込んだジャリがばらばらと落ちる。

切っ先が太陽を受け、神経を削ぐような光を放つ。

「哀れ？ そうかな？ まあ、命の価値ってのは人それぞれだから。あ、でもさ、その命に鴨ちゃんの価値も乗せといってくれないかなあ？」
ヒタリと歩みが止まった。

「……どういう意味だ」

「鴨ちゃんとも友達になりたいって事だよ」

へらりと笑うと、銀色の光が煌めいた。

袈裟懸けに振り下ろされ——後退して避ける——。喉元を狙った鋭い突きが頭上を通り過ぎて行った。

白刃が振るわれる度に徐々に私は後ろへ後ろへと追いやられ——とんツと白壁に背が付いた。

「もう後はないぞ」

握りがギシリと鳴った。

眼鏡の下の眼光が鋭く射抜く。

「本当にそう思う？」

挑発への回答はビュツという空気を切り裂く音となつて返つてきた。

その刀が私の首に届く直前——へらりと笑う。

「そこにはいないよ」

惑うように動きを止めた黒い背が勢い良く振り向き、距離を取る。今度は鴨ちゃんが白壁に背を付けた。

「……どんな仕掛けだ」

構えを解かぬまま、油断なく私を見据える。

鴨ちゃんからすれば、文字通りかき消えたように見えたであろう。

『瞬歩』^{ミステイレクション}って奴。視線誘導による視界攪乱と一子相伝の特殊な足運びによる相対的な——瞬間移動。今まで『瞬歩』を捉えた人間はいない。誰一人として。逆に言えば『瞬歩』からは何人たりとも逃れる事

はできない」

へらりと笑う私とは対照的に、鴨ちゃんの米神から汗がツーンと流れ地面に落ちる。

「という、本当のような嘘でした」

「君はっっ！」

怒鳴りつける声にもう一度笑う。

「また来るね。今度はドライタイプを試してみようかな」
「待てっ！」

静止する声を見殺しして、もう一度私は『跳んだ』。

ホワイトフオックス

塀に手をかけ、顔を覗かせる。

「本当にくるとは」

「約束したからね」

鴨ちゃんは黒い隊服姿で、縁側に腰掛けていた。

それを見ながら、懸垂の要領で腕に力を込め、塀を飛び越える。

ジャリが敷き詰められた内庭の上に飛び石が三つ。縁側に向かうその上を辿る。

いつもの時間、いつものように、いつもの場所で。違うのは三毛がないという事だけ。

「三毛、今日はいないね」

「君と違ってあの猫は賢いからな」

カチャリと刀を鳴らし、立ち上がった鴨ちゃんは私の前に立つ。動きやすい服装。黒光りした革靴が地面を擦る。刀が抜かれた。

そんな鴨ちゃんに私は笑う。

「それでももしかして、もしかして、私が賢くないと言っている?」

「土方に動きはなかった。他の隊員等も何かを掴んだような様子はなかった。君がどこでどうやって情報を仕入れたかは知らないが、誰にも協力を仰がずに、僕にそれを告げたのは軽率だったな。腕によほど自信があるのか、それとも単なる阿呆か……いずれにせよ、その過信が原因で命を落とす羽目になるのだから——賢くはないだろう」

鴨ちゃんが左手を上げると、それが合図となったのか、ダダツと建物影、死角となる場所から五人。統制のとれた隊士達が鴨ちゃんの前を並ぶ。

整然と一列に並び構えられた銃口がこちらを狙っていた。

『瞬歩』とかいうモノがどういう仕組みかは知らないが、分間1000発を誇るこの最新銃の銃を前に……果たして通用するかな?」

上げた左手が落とされると同時に銃弾がばら撒かれる——のだろう。よく映画とかで見るやつ。

マフィア顔負けだなあーと鴨ちゃんの上げた手を見つめてしまう。

猫を撫でていた手と同じ、骨ばって細い、刀傷のある手。

「ここって一応警察の敷地内だよな？」

「助けがくるとでも？　生憎と土方君は会合に出ててね、君が懇意にしていた沖田君も同じく。最後にもう一度だけ聞こう——君の目的は何だ？　そしてどうやってその情報を手に入れた？」

そーいう意味じゃないんだけどね。

何も映さない瞳が冷酷に光っていた。

友達の友達のそのまた友達は友達であると仮定する。ボス猫と私は友達であり、ボス猫と三毛君が猫友だとしたら、その三毛君と友達である鴨ちゃん是我的の友達である。つまりは人類皆穴兄弟。

「友達は多い方がいいよね」

その理論からいけば友達百人もあつという間だ。

それが分からない鴨ちゃんは不敵に笑う。

「訳の分からんことを。答える気はないとそう捉えて良いのだな？」

「少し違う。ねえ、鴨ちゃん。猫の手借りてみない？　なかなかだと思っただよね私の『瞬歩』もどき」

へらりと笑う私にぴくりと眉が動いた。

「つまらん手だな、それが目的という訳か」

「ん、んー？　スパイか何かと勘違いしてる？」

沈黙と静寂が耳に痛い。空に伸びた手は上がったまま。薄く青い空は遠く、鴨ちゃんと私の距離もまた遠かった。

遅々として進まないゲームにカードを一枚切る。

「山崎退——彼、気づき始めてるよ。私も邪魔なんだよね。どこに行くにしても付いてきちゃう。信用できないっていうのなら手土産にその首を証拠として持ってきてあげようか？」

細まっていた目が広がる。ピンと伸びた指先がピクリと動いた。

「命惜しさに、味方を売ると？」

「違うよ。言ったでしょ？　私は土方さん側じゃないって。大体こんなものは——」

落とされる手。爆竹の束を火に投げ込んだかのような音と共に地面を銃弾が穿つ。山茶花の枝に、葉に、飛び石に弾は容赦なく降り注

ぎ、暴力的な爪痕を残していく。

そんなのごと粉碎せんとばかりの一斉乱射が唐突に止まった。鴨ちゃんの指示ではない。

止まった銃声の代わりに切り落とされた銃身がガシャンガシャンと音を立てて転がる。

最新鋭の銃器に身一つで打ち勝った私は悪役じみた笑いを零す。

ジリツと——十分に訓練を積んでいる筈の隊士等が後退る。動揺を隠し切れない5人分の瞳がこちらを見つめていた。

『化ケ物』そんな恐怖にかすれた声を聞いた。

それら全てを無視して、私はへらりと笑いながら鴨ちゃんを振り返る。

「言ったでしょ？ 誰にも捉えられないし、誰一人として逃れる事はできないって。私はさ、鴨ちゃんを『取る』事もできたんだよ？ 今回も、前回も。そこんどこちよつとは考慮してくれてもいいんじゃないかなあーなんて」

苦々しく鴨ちゃんは——それでも刀に手を携えたまま対峙する。

「信じろと？」

「よく言うじゃない、信じるものは救われろって」

打つ手なしの状況で、ゆるゆると刀から手が離れる。

「違えるなよ」

「必ず」

背を向けて立ち去る鴨ちゃんにおどけた調子で敬礼を取った。

ふつくらとしたレモンの様な月。

障子紙から光が溢れ、白く光っていた。戸の縁に手をかけ、すうーつと開く。真選組屯所——鴨ちゃんの私室。

「こんばんは〜」

声をかけると、文机で書き物をしていた鴨ちゃんが筆を置き、振り向く。

「君か……もう、こないかと思ってたよ」

壁時計の針は今日が終る15分前を指していた。

「意外と手間取っちゃってね。ご注文の品はこちらになります」

丁寧に風呂敷で梱包したソレを差し出すと、鴨ちゃんは正座したまま受け取り、躊躇なく解いていく。

畳の上に解かれた風呂敷包み。その中心にあるのは真選組監察、山崎退——の生首。

穏やかな表情である。枕に寝かせ、布団でも設しつちえば、誰もが寝ているだけだと思おうだろう。

「確かに」

向きを変え、二度、三度検分した鴨ちゃんは納得したように頷くと一言そう言った。

シウルシウルと衣擦れの音を立てながら元通り首は包まれていく。

「信じてくれた？」

ズズツと部屋の隅に風呂敷の塊を追いやった鴨ちゃんはそれでも硬い表情を浮かべたままだった。

「何が望みだ」

首を持つてしても信頼には足りない……か。

手持ちのカードはそう多くはない。どれを切るべきか切らざるべきか……。

「友達にだって言っても信じてはくれないよね？」

場に捨てられたカードをもう一度拾う。

「分からん。なぜ君はそうもして僕に肩入れする。土方への恨みか？」

そうだと答えたとしてそれを信じてくれるか、それとも疑心を強めるだけか……。

能面を貼り付けたような顔からは何もうかがい知ることはいできない。

止めていた息を吐く。参謀様相手に読み合い化かし合いなんてやる方が間違っている。そういう土俵で戦ってはいけないのだ。

「昔話をしようか、ある日ある所にいた女の子の話だよ」

鴨ちゃんは口を開きかけ、結ぶ。続けて良いという意味だろう。

「その子には弟がいたんだ。女の子の方は病弱で大人を不安にさせる事もあったけれど、弟君は元気で、賢くて、跡継ぎとしては申し分なかった。そんな弟君がいたお陰で皆安心していた。そうそう、女の子の家はちよつと古いお家でね、そういうのに少しだけ煩かったんだ」
遠い記憶。熱を出せば苦しい？ と見よう見まねで看護しては、伝染るからと追い出されて悲しそうにしていた、小さな手。

重くならないように、揺れないように慎重に声を出す。

「だけど、その大事な弟君は事故で死んじゃうんだ。大好きな姉にザリガニを見せてあげようと、雨で増水した用水路に落ちて。それから大事な跡取りを亡くしたお家は大騒ぎ。嘆いても悲しんでも戻ってこない弟君が死んだ責任は誰にあるのかって。ザリガニが釣れる用水路を教えた父親が悪いのか、目を離れた母親が悪いのか……。でも、全てはいらない子に、その女の子に押し付けられた。ザリガニを見たいと言わなければ良かったと。女の子はただそれだけを責められ、追いやられた」

終の家と呼ばれたそこは——出ることの叶わないそんな病院だった。忌み嫌われた子を見舞うものなど誰もいなかった。

「……同情でもして欲しいのか」

揺れる。私じゃない……鴨ちゃんの声が。

少しだけ似ていると私は思った。鴨ちゃんもそうだろうか？

兄と弟、姉と弟という違いはあれども、認められなかった方が逆だったとしても。

「違うよ。誰にも言っていない私の秘密。友達にだけ教える秘密。だからさ、いい加減疑うの止めて友達になつてくれない？」

鴨ちゃんは少しこわばらせた表情を浮かべていた。

「君は一体何を知っている」

「知ってる事だけを知ってるよ。……鴨ちゃん見て、今日も月が綺麗だよ」

障子戸を大きく開けて柔らかい月を見上げる。

「そうだな」

それつきり鴨ちゃんは何も言わなかった。

閑話 いちご畑に会いに来て

金色の冠が乗ったお姫様と、お姫様に連れられた一匹の白い獣がテーブルの上に放り投げられていた。画用紙にクレヨンで描かれたそれは神楽ちゃんの将来の夢らしい。

えいりあんはんたーになるんじゃないの？ と聞いたら、えいりあんはんたーを兼任したお姫様になるのだと、なんとも贅沢な夢を語ってくれた。

「銀さん、これ何の影響？」

つつつと銀さんに画用紙を指先で寄せて尋ねる。神楽ちゃんは、遊びに行くとかかけていった。

秘密基地に行くので大人はのーせんきゅーべいべーとのこと。最近、ハマりだした秘密基地ごっこに大人は混じってはいけならしい。

「あー、神楽がいつも遊んでる奴がどうも遊園地に行ってきたらしくて、その自慢話の影響」

ソファアーに腰を下ろしながら、しかし嫌そうに顔をしかめてるあたり、大方私も連れてけとねだらされたのだろう。まあ甲斐性なしの مادオには連れて行く金などないので、その思いは画用紙に発散されたと推測する。

お花に囲まれたお姫様は幸せそう？ ……口裂け女も顔負けな大口を開けて笑って？ いた。

キラキラした子供の夢。思い出す。

「そう言えばさ、小さいころ将来何になるのかって宿題があつて凄く困ったなあ。なりたいものなんて無かったから、家にあつた金魚鉢の金魚が目についてね。金魚になりたいって書いたんだ。そしたら先生、困った子供を見るような目で見つめてくるもんだから、なんだかおかしくってね」

四匹いた金魚はいつの間にか三匹になって、最後の一匹になった。

ぷかぷか浮かぶ金魚を大人たちは「可哀想な事をしたね」とか、「こういう生き物は寿命が短いから」なんて言い訳をして、全然悲しくな

さそうな顔で新聞にくるんで生ごみに捨てた。

最後の一匹になった金魚が、作り物の水草の間を縫って泳ぐのを見ながら、暑い夏の日に書いた作文。蝉の音が煩かった。冷たい麦茶を入れてくれた。幸だった記憶。

「そりゃ困るだろ。金魚になりたいなんて、その子の将来不安になんだろうよ」

ひとり言のつもりだったけれど、律儀に銀さんは相手をしてくれた。小馬鹿にした目がおまけについてきたが。

でも全くの同意だったので、気にはならなかった。

「そうそう。今思えば悪いことしたなーって思う。でもさ、宿題はやり直させられなかったから、先生はそれを伝えて子供の夢を壊したくなかったんじゃないかなーとも思うんだ。子供だって人間が金魚になれない事なんて分かるのに、大人はそれが分からないんだから、おかしいよね」

目の前のコップから水滴が垂れて水たまりを作った。ピンク色に染まったグラスは銀さんのもので、優しくない今日の銀さんは分けてはくれなかった。

最後の一杯だったってのもある。大概に置いて最後の一杯は譲ってくれない。大人げない大人だ。

それが持ち上げられ、コクリと飲まれる様を見つめる。

白い喉仏が動き、透けたその先にピンクの液体が落ちる様子を想像。ピンク色の胃袋で波打ついちご牛乳は、届かぬものだど諦めテーブルに落ちた水滴で、へのへのもへじを描く。

「今は何になりたいんだ」

あまりにも私がいじまし気なものだから、銀さんは誤魔化すようにそう言った。

「今はね……ライ麦畑で子供を捕まえる係になりたいな」

「なんだそりゃ」

「それじゃなかったら、そうだな……銀さんのお嫁さん!!」
「ぶっ」

机の上にピンクの飛沫が飛ぶ。お姫様の顔にも跳んだソイツは、画

用紙に点々とした染みを残した。

「汚いなあ……」

落ちるかな？ とティッシュで上から叩いてみるが、ジワリとした染みが広がっただけで、あーあ神楽ちゃんに怒られると人ごとの様に
眩く。

「とんでもない事ぬかすからだろお前が」

口端に垂れたいちご牛乳を拭いながら、銀さんは私に責任を擦り付けようとする。

だから私は反論する。

「定番じゃないですか、お父さんのお嫁さんになりたいっての」

「いつから俺はお前のパパになったんだよ」

「今日から。パパ、お小遣い頂戴。300円でいいから」

「やらねーよ!!」

ねえ、知ってた銀さん？ 人間はそうなりたいと思った人間にしか
なれないんだよ。

幸せそうなお姫様にも、金魚にも、子供を捕まえる係にも、まして
や銀さんのお嫁さんなんて脇より酸っぱいモンにもなれない私は、何
になるのだろうか？

そんな思いだけが、画用紙の染みのように残った。

フオックスハンターハンティング（上）

枕木を乗り越えるゴトン、ゴトンとした振動が心地よいリズムとなって体に響く。電車の屋根にごろりと寝転んだ私は、ヒューヒューと耳元でなる風の声を聞いていた。

「ふわあ……暇だなあー。鴨ちゃんもうちよつとお仕事くれてもいいのに」

『一般人である君がどうどうと乗り込んでいては近藤に怪しまれる。それまでは身を隠して……そうだな、運びこむ荷物に紛れて貰うか……』

むさ苦しい野郎共の荷物に挟まるなんて御免被りたいので、自分でもうにかすると言い捨て、電車の屋根に乗ったのが一時間程前。やることもなく、ぼーっと空を眺める。

雲が流れていく。

赤焼に染まった空が徐々に輝度を落とし、地面に伸びた影の輪郭がぼやける。

懐に入れた携帯——借り物——がブブブツと震えた。お仕事の時間だ。

窓枠に掴まり、足先から順当に車内に滑りこむ。

「キリちゃん!? なんでえ!？」

行儀悪く、座席を踏み台にして降り立った所で、そんな声が上がった。

正面を見れば、近藤さんが、刀を抜いた隊士等の隙間から驚いた顔を覗かせていた。

「ちよつとしたバイトみたいなもんです。それで、鴨ちゃん私のお仕事は?」

「えつえつ、仕事つて、えつ? えええええ!？」

みつともなく動揺している近藤さんを見無視して鴨ちゃんに問う。

「君の言った通りだったよ。沖田君がここへ向かっている。その相手をしてくれたまへ……並の人間じゃあ務まらないのだろう?」

「ドエスだけど、それでも一番隊隊長ですからね」

「総悟が!？」

その名にガタリと近藤さんが腰を浮かせた。同時にプシュツと扉が開き、結合部分から総悟が姿を現す。

鴨ちゃんに予め忠告をしておいたのが功を奏し、無駄に刀を向けるものはいない。

「なんででめえがここにいる!？」

私に気づいた総悟が声を荒げる。

「近藤さんにもそれ聞かれたんだけどね、アルバイトだよアルバイト。スーパールの仕事だけじゃちよつと懐が寂しくて。ああ、名も知れぬ隊士君、ちよつと刀借りるね。流石の私も隊長殿相手に徒手空拳はちよつと辛い」

了承も得ず、近くに居た隊士の手から刀を取り上げる。

「山崎を殺ったつてのは本当かい?」

ギロリと睨めつけるような目だった。

「ザキが!? どういう事だ総悟」

ジミー君の首を取った次の日の朝にはもう、私がそうした事が一般隊士連中にも伝わっていた。伊東派、土方派問わずに。唯一知らないのは意図的に情報隔離された近藤局長ただ一人。

鴨ちゃんとしては完全に退路を封じたつもりなのだろう。土方派に寝返ったとしても、そこに私の居場所はない。

疑り深いなあーと心の中でため息をついた。

「もし山崎殺しが本当だとしたら?」

「テメエも斬るだけだ」

絶対零度の炎というものがあれば、きつとその瞳はそれを固めて作られたのだろう。キンツと定まる。

呆然と立ち尽くした近藤さんを尻目に、総悟の刀が音もなく抜かれた。

対峙する私も刀を構える。

「ちよつと待って二人共! 展開早くて追いつけないんだけどおおお!! ザキが死んだって何? 初耳なんだけど。えっ、何? キリちゃんが犯人なの? 意味わかんない」

「近藤さんは黙っててくだせえ、男と女の問題でさあ………………。アンタ、無理やり突っ込まれるのと、いたぶられながら突っ込まれんのどっちが好きだ？」

「念の為に聞くけどナニを突っ込むの？」

「決まってるんだろ……………」

続きは白刃となって返ってきた。

ガギンツと火花を立てて刃が合わさる。総悟はそれをまるで魔法の様に滑らせ軌道を逸し、がら空きとなった胴を薙いだ。距離を取りかわす。

互いに、離れた間合いの隙を窺う。ジリジリとした心理戦——に紛れ、総悟の手が隊服の懐に差し込まれる。カチツと微かな音を捉えた次の瞬間——。

——ドオオオン

劈く様な音と共に電車が揺れ、車内灯がパチパチと瞬き、消える。暗闇の中、動揺が広がったその隙を掻い潜り、近藤さんが駆け出すのが見えた。総悟が追手を斬り倒し、援護する。

「爆弾!? いつのまに! クソっ…………追えッ!!」

状況を判断した鴨ちゃんが、間髪をいれず指示を飛ばす。

何人斬られた!?

辺りを見渡せば三人。近藤さんを逃がすことを優先して、幸いに傷は致命傷に至っておらず、まだ息はあった。

混乱に乗じ、許されるギリギリの止血を施し、苦悶に呻く姿はそのままに、総悟を追う。

「総悟は任せて、鴨ちゃんは残って指示を」

「あ、ああ…………おい! 列車を止めるな!」

「で、ですが…………」

鴨ちゃんと連絡係らしき隊士が採める声を扉がぶつ切りにする。

鮮やかな手口に恐れをなしたのか…………追っ手は今のところ私一人のんびりと時間をかせぐ事にする。

ゆつくりと散歩するような速度で前に進んでいると、やがて追いついてきた奴らが偉そうに「何をしている！ さっさと行け」とせつづく。

それを無視して歩くのもそろそろ面倒臭くなったので――。

「そー」

わざとらしく死角となった座席の影を指さし声を上げる。すると偉そうな態度を翻しバツと距離をとる。

「……に、いたらどうする？」

予想を超え、お約束通り過ぎる態度に、クスクスと笑いながら振り向くと、「ぎけんじゃねーぞ」「犯すぞこのアマ」なんておおよそ警察らしくない罵声が飛んだ。

片耳に指を突っ込み、それらを聞かなかった事にする。

「じゃあさ、先頭どうぞ？ ああ、気をつけて下さいよ？ 怖い怖い隊長さんが死角に潜んでるかもしれないので」

通路の端に寄り、手を揃えて促せば、肘で互いをつつき合いながら、「お前いけよ」「いやお前が」と小競り合いが始まる。

あーあー、やつぱり白だろうと黒だろうと真選組は真選組だと――握った刀が重くなった気がした。

局中法度第二十一条だっけか……。なんで真選組の仲間でもないのに覚えてるんだか。

誰も先に行くものはいなかったたので、道先案内人としての責務を果たすべく再びゆつくりと前進する。最後の車両――正確に言えばそれより前に車両はあったが、すでに切り離された後だった。

「君、急ぎ後方へ戻って、鴨ちゃんに近藤さんと共に列車が切り離されたと伝えて」

手近にいた一人を掴まえ、早くと押し出す。

遠ざかる車両の中で、近藤さんはガラスに顔をべたりと貼り付け、届きもせぬ腕を必死で振り上げていた。

それを背景に、もう道などないというのに総悟は、何人も進むことは許さないと立ち塞がる。

私を抜きにしても、背後に連なる人数に鑑みれば決死の覚悟とも取

れるが、その瞳は勝機を失ってはおらず、むしろ――。

「これで心置きなく殺れんなア」

低く構える姿勢に気圧され、生存本能がアラートを上げる。

気がつけば一歩後退していた。

カラカラに乾いた唇を舐め、そんな本能を宥めすかす。

「赤ずきんちゃんベビーフェイスは狼に食べられるって相場が決まってるんだよ？

知らない？」

「大人しく食べられる赤ずきんだけじゃねーって、狼もそろそろ覚えて方がいぜ？」

カチャリと刀が構えられる。

「その腹ア……食い破る!!」

狼はどちらであつたか……。目を見開き怒声と共に刀が振りぬかれる。距離は一瞬にしてゼロとなり、ガギンツと鉄と鉄がぶつかり火花が散った。その火花が消えるよりも早く、続けざまにカチ上げられる。

体を逸し避けた腹に――蹴りが飛ぶ!? 慌てて空いた片腕で受けるが、予想よりも遥かに重い一撃に、重力から切り離される。吹き飛び、何名かを下敷きに止まったそこに容赦なく追撃が迫る――。

ビタリと喉元に突きつけられた刀に総悟は止まる。

互いの喉元、皮一枚に突きつけられた刀。

倒れた体勢から繰り出した一突きであつたが、総悟の勢いを殺すには十分だったようで、バクバクと脈打つ心臓に、まったくもって気を抜いている場合ではなかつたと唾を飲み込む。

抜いたつもりはなかつたが……そう簡単にトツプギアに入れない。こちらら素人なのだ、自分に言い訳をして起き上がる。

総悟もまた、距離をとつた。

「乳歯じゃ食い破るのにも苦労するんじゃない？」

「予想よりも、皮下脂肪が分厚くてな……狼というよりこれじゃあ豚だろイ」

苦し紛れの軽口だったが、ニヤリと笑い返す姿には余裕すら見え

これではどちらが優勢か分かりやしない……けれど、

「油断してると痛い目見るよ。狼は一匹とは限らない」

ガタンゴトンと枕木を踏み越える音とは別の低い重低音が外から響く。ドドドドツと土煙を上げて車列をなす群れ。河上万斎が先頭を率いる――。

「鬼兵隊……」

さして驚いた様子もみせず、ただ総悟はその姿を視界の隅で追う。

そして――期待していなかったと言ったら嘘になるが、その後にくボロボロのパトカーに取り零すなよと祈りを込める。

タイムリミットが近いのは私も同じだった。

「いこうか」

掛け声に無音で――音が追えぬほどの抜刀だったが――。

「甘いよ」

影すら捉えられなかっただろう。

総悟の懐に潜り込み、刀を突き出す。勢いの乗った一撃はそのまま総悟の体を持っていき――激しい音を立て、行き止まりの扉に背を打ち付ける。

ガラスに蜘蛛の巣が広がった。

痛みに顔を歪める総悟であったが、己の腹に突き立った刀と湧き出るように溢れる血液を信じられないかのように見つめ……やがてズルリと身を崩し倒れこむ。

「ま、気合入れればこんなんもんよね」

一瞬垣間見えた暗い瞳を努めて冷静に受け止めながら、総悟の腹から刀を取り返す。

ビチャリ、ビチャリと血痕が後を引いた。

「連絡係、君だっけ？ 『裏切らず』にキリは沖田隊長を取りましたって伝えてくれる？」

呆気にとられる面々の内一人の肩を叩く。

「いつから……知って……」

零した言葉は、自ら見張りだと認めたようなもの。鴨ちゃんの二重、三重の予防策にはハタハタ恐れ入る。

気まぐげに背を向けて取り交わされる無線連絡のやり取りが終わったのを確認し、紫電を飛ばす。

「なっ……」

痙攣し、それでも伸ばされた腕は無線機を掴むことは叶わず、手から溢れ落ちた無線機が床にぶつかり鈍い音を立てた。

バタバタと崩れ落ちた全員を屯所^{ベッド}へ送り届け、血だまりに沈む総悟を見る。

「バイバイ、総悟」

フオックスハンターハンティング（下）

誰もいなくなった車内。唯一残された血だまりの上を歩き、連結扉——先が切り離された——を蹴り飛ばす。

扉は想像以上にあっけなく、そして想像以上に激しい音を立ててはじけ飛んだ。

ぼつかり大口を開けた開口部に立ち、顔を出す。はためく風に髪が乱れる。

それを押さえ見れば、遙か遠く、点になった先頭車両に向かい、鬼兵隊の車が列をなしていた。その後を、白黒ツートンが追いかける。

鬼兵隊の車のケツ——しんがり殿に噛み付こうとするパトカー。次の標的を捉え、見据える。

べたりと血糊がついた刀を振るうと、ビツと飛び散った。——力任せに使用された侍の魂は、見るも無残に齒は溢れ、汚れていた。鞘に収めようとするが、入らない。歪んでいるのだ。

仕方なく、抜身のまま手に持つ。

ベコベコに潰れ、ガタガタと見るからに乗り心地の悪そうなパトカーが一台、進路を外れ、並走を始めた。

徐々に速度をあげ、追い越し、線路の上、前方を走る。

「きーやんそこで何してるアルか!？」

神楽ちゃんが後ろ向きに、トランクに立ち、叫ぶ。「旅行先に向かう途中だよ」といつものように誤魔化すには、あまりにも真剣で、心配そうだったから、私はその言葉を飲み込むしかなかった。

少し迷った末、事実だけの為に口を開く。

「一足遅かったね。土方さ……あつと、今はトツシーなのかな？ 総悟、結構頑張ってたよ？ 後で勘定方に掛けあつて残業手当付けて上げてね？ 受け取れるかどうかは別だけど」

「何言ってる……アルか……？ つつ!？」

距離が更に近づき、床を流れる血を見たのだろう。神楽ちゃんが動きを止める。

「まあ、そーいう事だから今は。こつちに構つてると本丸取られちゃ

うよ？ それとも先に相手して欲しい？ 残念ながらモテモテキリちゃんも予約が一杯でね、悪いけど後回しにさせて貰うよ。知り合いだからって融通しないのがキリちゃんの良い所。——じゃあね」

「ギーやんっっ！」
軽口を垂れ流し、神楽ちゃんの呼び声を断ち切るように私は跳ぶ。戸惑ったような新八君、目を見開いたトツシー、口を抑えたミツバさん——銀さんは幸いにして運転席に座っており、前を向いていたので顔が見えなかった。

それにしても、ミツバさんは……想定外だったな。目を見開き、わなわなと震える手にズキリと胸が傷んだ。

がらんどうの鉄の箱と化したパトカーを前に、鬼兵隊の車輛が並ぶ。

「……真選組の連中をどこに隠した」

車輛から降りてきた一人が油断なく距離を置きながら聞いてきた。「さあ、どこでしょう？ マジックの種を知りたいなら、相応の対価が必要なんじゃない？」

「ふざけてるのか……チツ、予定より早いがやっちゃまうか。悪く思うなよ。呪うならテメエの不運を呪え！」

振り下ろされる刀よりも早く、一閃。

「悪いね、お兄さん。呪うなら自分の不運を呪ってね？」

クビレから上を失い、ダイエットの必要の無くなった体が、ゴトリと倒れる。

「貴様っ！」

色めき立つ面々を前に、死神然と立つ。

——ギユルルルツ

土煙を上げ、砲台を付けた車輛が向かい来る。一閃。

首を切り落とされた体が前のめりに倒れ、引っかかったハンドルがギユルンと回った。そのまま方向を変えた車は木にぶつかり、ブスブスと黒い煙を上げる。

砲撃が飛ぶ、向かい来る刀、轢き殺そうと特攻する車。全てを一閃。椿の花のようにぼろぼろと首が溢れ落ちていった。

ひっくり返った車輛。地に伏した死体。流れ出た血が、地面に吸い込まれていった。

「そして誰もいなくなつた？　なんて——嘘。銀さん久しぶり」

くるりと振り返ると、白い着流しを靡かせながら一人、立っていた。走ってきたのだろうか、いつかの様に荒い息をつき、片手に木刀を引っさげながら——。

想定外に想定外が重なる。本当、世のことというのは中々思い通りにならない。

「伝言聞いてなかった？　何しにきてんのさ」

「溢れ落ちそうなモン拾いにきた」

握った刀は更に汚れを増していた。

馬鹿だなあ……。なんで銀さんがそんな痛そうな顔してんのさ。

拾うべき物を拾わずに、ガラクタばかり拾って歩く。でもそれが坂田銀時なのだなど、得心した。

したが、

「拾うべきモンなんてここにはないよ。銀さんが拾うべきモンは向こうだ、万斉の相手は神樂ちゃん和新八君じゃあ荷が重いよ。それに——ああ、土方さんは大丈夫だね」

溢れかけた魂はミツバさんと近藤さんにすくわれた。安堵の息を漏らす。

「お前、何をみてる」

鳥の事か、未来の事か、両方か。

「何も、何も見えないよ——。ただ、前を向いて歩いて行くだけ。そうでしょう銀さん？」

「そうやって見透かす様に、何でも知ってますうーって顔してる奴が一番腹立つんだよ。嫌いだね、俺ア、そーいう奴」

「でも……私は銀さんのこと好きだよ？」

「俺は嫌いだったんだろ」

繰り返される嫌いという言葉は、好きになれるようにどうかしろ

と言っている様に聞こえた。

「ごめん……銀さん」

「そうじゃねエ。なあ、何でも相談しない。何で一人で解決しようとする」

少し苛立ったような声だったけれど優しかった。いつだってどんな時にだって、引き上げる為の腕を伸ばすのだこの人は。馬鹿だなあ。

「私は一人でいきたいんだ。だから、私の道は私が決める。行って銀さん。皆、銀さんを待つてるよ。大切なものを間違えないで」

鴨ちゃんと土方さんが斬り合いを始めた。万斉から——、追加投入された鬼兵隊から——、近藤さんを護るべく、神楽ちゃんと新八君が相手取る……けれど、ミツバさんまで庇いそれは時間の問題。

「お前は……」

何と言おうとしたのだろうか？ 強制的に坂田銀時の戦場に戻された声は最後まで聞く事はできなかった。

「ばいばい、銀さん。来てくれてありがとう」

そして、私は、私の戦場に跳ぶ。

——キント……

高い音を奏でながら鴨ちゃんと土方さんが打ち合う。

近藤さんを追って、追い詰めた、護ろうとした先——切り離された先頭車両の中。双方狭い空間をもともせず、突き、弾き、斬りかかる。座席が切り裂かれ、飛び散ったクッション材で死角となった狭間を刀が縫う。

乱暴な、試合とはおおよそ呼ぶことのできない殺し合い、暴風の如く荒れ狂う間に、私はスルリと滑り込む。

「はいはい、ちよつとそこ、通れないんでいてくれますか？」

「おま……っっ!？」

土方さんの襟首を掴まえ、放り投げる。座席と座席の間に落ち、したたかに背を打ち付ける。息が詰まったのか、声にならない苦悶の声

を上げていた。

「邪魔をするな！」

ギラギラと目を輝かせながら、まだ味方であるはずの私へ、鴨ちゃんが刀を向ける。興奮し、血走った目は、土方さん以外見えていないのだろう。

その手首を掴まえ、足を払い、地面に縫い止める。

「ぐっ……なんの……つもりだ」

斬り殺そうとした鴨ちゃんが今、それを言う？　と思っただが、寛大なキリ様はそれを見逃してあげる事とする。

まあ、見逃そうとも、そうでなかりうともやることは一緒なのだが……。

「鬼兵隊がね、裏切っちゃった」

「なんだと……」

——ドオオオン

進行方向から、家でも吹き飛んだかのような爆発音が響き、カタカタと車輻が揺れだす。その揺れが段々と激しくなり、金属と金属がこすれる音を立てながら、次第に車体が傾いていく。

「まさか……」

「くるよっ、捕まって」

がしやんとも、どしやんともつかない、破壊音を轟かせながら横方向からの重力に、真つ二つに斬られた座席や、割れた照明、その他諸々のガラクタが流れていく。

ごおおんと鈍い音が最後に鳴り響き、終る。

「……うっ、どうなってる……土方は!？」

脱線し、地面に横たわる列車の中で、割れたガラス片を踏みしめ、鴨ちゃんが顔を上げた。平衡感覚がおぼつかないのか、あらぬ方向を向いた座席に手をつき、ふらふらと立ち上がる。

見渡した先、少し離れた瓦礫の間から手足が生えていた。それがピクリと動く。示された生存反応に鴨ちゃんはほくそ笑む。

「はい、すところっ」

そのまま行こうとする鴨ちゃんの腕を引く。

「いい加減に……!?!」

良い所を邪魔するなとばかりに振り向いた鴨ちゃんの喉元に、歪んだ刀をビタリとつけた。

「なんの真似だ」

掠れた声は戸惑いを含んでいた。

「言ったよね? 鬼兵隊が裏切ったって」

「ふっ、そんなもの……計画を立て直すだけの話だ。土方さえ殺れば後はどうとでも……だからその刀を引け」

「そういう事じゃないよ。そもそもさ、私、鴨ちゃんの計画なんてどうでもいいんだよね。鬼兵隊とお近づきになるのに良い機会だと思っただって言ったらどうする? 色々ややこしい事になってるけど、手土産に鴨ちゃんの首、持って行けば仲間にしてくれちゃったりしちゃったりしないかな?」

輝きを失った刀の下で、コクリと喉仏が動いた。

「……裏切る気か」

「裏切るも何も、鴨ちゃんも私の事信じてなかったじゃない。お相子だよな?」

咄嗟に振りぬいた刀を弾く。くるんくるんと三回回った刀は、天井

——今は壁になっているそこに突き刺さった。

「鴨ちゃんと私の仲だから特別に痛くしないで置いてあげる。だから動かないで。手が滑っちゃう。初めてが無理やりの強姦沙汰なんて嫌じゃない?」

「ふざけるなっ」

逃れようとのけぞる体を押し倒す。押さえつけようとすると、必然、座席の側面に背を付けた鴨ちゃんの腰の上にまたがる格好となった。

絶望を浮かべた顔に、刀を振り上げる。その腕をめがけ、銀色の煌めきが飛んだ。刀と刀がぶつかり、衝撃で取り落とす。

「人の得物を横取りするのもいい加減にしろよ。これで何度目だテメー」

ゆらりと立つ。額から血を流し、ギシリと睨みつける黒い双眸。

白いスカーフは流れ出た血で染まり、解けかかっていた。

「何度目だっけ？ ま、どちらにせよどうせ殺すんでしょ？ 誰が殺^ヤつたっていいじゃない」

取り落とした刀を手取る。その隙に逃げようとした鴨ちゃんの背を踏みつける。背を踏まれ、腹ばいになり逃げようとした鴨ちゃんは恥辱にまみれ酷く歪んだ顔をしていた。

頬を地に付け、首を捻りにこちらを見上げる。

「こんな真似、許されると思ってるのか。後で後悔……ぐがっ」

「今、土方さんとおしゃべりしてるから、ちよつと黙つてて？」

押さえつける足に力を込めるとカエルが潰れたような声をあげた。

一方の土方さんは、弾かれ突き刺さったままだった鴨ちゃんの刀を抜き、脅すように構える。

「首の取り合いでもする？ 負けないよ？」

「取り合うも糞も、ソイツは俺が殺るって決まってるんだよ。いいからそこを退け」

「んー、でもさ、大人しく譲っておいた方が土方さんにとつてもいいと思うよ？」

「どういう……」

土方さんの言葉が言い終わるか言い終わらないかのうちに、空に向かい口を開けた窓の上から強い光が差す。

眩しさに手をかざし、上空を見上げた土方さんは、目を見開く。

激しい音を立てて旋回するヘリコプターと、それに搭載された鈍い光を湛^たえた銃口^{くち}がこちらを向いていた。

「くそっ……」

咄^{とつ}嗟^さにさがった土方さんの判断は正しかった。つい今しがたまで土方さんが立っていた場所に、一瞬遅れて銃弾が降り注ぐ。

「鬼兵隊の目的は、真選組の壊滅。土方さんも鴨ちゃんも皆、舞台上で踊らされてるだけなんだよ。妥協案で手を打っておいた方が賢いと思わない？ 交渉ついでに、土方さんが逃げる間ぐらいの時間稼ぎはしてあげるよ」

「ぎげんなよ……」

椅子の影に隠れ、銃撃をやり過ぎした土方さんからそんな声が漏れる。際どい角度で土方さんを狙っていたへりは、上手く射線が取れなかったのか、一度離れていった。

「また来るよきつと、だから——……」

「ふぬううううううううっ！」

聞いたことのある声とともに、金属が破裂するような音をたてて、土方さんの背後、横向きの扉がはじけ飛ぶ。扉の向こうに立っていたのは、近藤さんと、ミツバさんそして——神楽ちゃんと新八君。

「キリさん！」

「ギーやん!!」

私の刀が向いている方向、押さえつけている人物、それを捉えた新八君の口が「なんで」と、動いた。

そんな二人の間をぬって、近藤さんが土方さんの側に寄る。

「トシ！ どうなってるー！」

「どうも——もねエよ。伊東の首を手土産に、鬼兵隊に取り回るつもりらしいぜ、奴は。近藤さん、アンタは早くここから離れてくれ。大層なもんぶら下げたへりがさつき通り過ぎてった、また戻ってきたら皆、蜂の巣だ」

「トシ、お前は どうするんだ」

困惑した表情を浮かべながら近藤さんは言った。

「……先、行っててくれ。アイツとの決着をつけたら俺も行く」

「何を言ってるやがる！ お前を置いて、行ける訳ねえだろ！」

「それでも……行かなきゃなるめーよ。アンタは真選組オレ等の魂だ。組織体が幾ら残っていても、魂がなくなりやデク人形に成り下がっちゃう。ほら煩いハエの音が聞こえてきやがったぜ」

視線を合わさない土方さんに、近藤さんは激昂する。しかし、そうなる事を予想していたのか、土方さんは言い捨て刀を構える。

言葉通り、バラバラというローター音が段々と大きく、聞こえてくる。

時は金なり。何か言いたげな鳴ちゃんを一瞥し、私も切っ先を上げる。

「土方さんの言う通りだよ。賢く生きた方が長生きできる。私としては土方さんにも賢く生きて欲しいんだけどね」

「馬鹿で上等。人様の喧嘩に水差した奴がどうなるのか……身をもつて後悔させてやるよ！」

言い終わるや否や、倒れた座席を足場に駆ける。間合いに入った瞬間——振り抜かれると思った刀は素通りし、身構えてた私は一瞬その姿を見失った。伸びきった腕。そのがら空きの脇を狙い刀が迫る。手の平で打ち払う——あまりの手応えのなさに違和感を覚えた。だがその狙いを考える間もなく、低く取ったその姿勢から足——鴨ちやんを押さえつけている——を払われた。

「っっ！」

ピクリとも動かない軸足に悲鳴を上げたのは土方さんの方だった。

だが、腐つても鬼。突き刺そうと振り下ろした刀を、転がりながら避ける。

「足に鉛でも仕込んでんのか……」

「タイムリミット」

対峙する土方さんの言葉には答えず、空を見る。

頭上高く、銃口が光る。火を噴く。

チン、チンと始めは明後日の方向に当っては弾かれるだけだったが、狙いがついたのか次第にそれも収束していく。

「近藤さん！」

まだその場に留まる近藤さんへ土方さんから怒号が飛ぶ。近藤さんは迷う様に瞳を彷徨わせる。けれど、何かを決心したのかギョツと引き結び、刀を抜いた。

土方さんの横を抜け、真っ直ぐに上段から討つ。受けた半身が沈むような重い一撃。

ギチギチと虫が鳴くように刃が鳴った。

「俺ア、難しい事は分からねえ。だが真選組の魂が俺だと言うなら、お前らは全員俺の体の一部みてえなもんだ。それを見捨てて逃げるなんてやつばできねえ」

「近藤さんっ！ くそっ」

追って、土方さんが補佐するように回り込み、刀を突き入れる。近藤さんの刀と十字に交差し、防いでいる刀の柄から片手を離し、平で、迫る刀を押しすように弾く。好機と見たのか、ここぞとばかりに近藤さんが力を込める。それを片腕一本で払いのけ、そのままの刀で土方さんへ迫ろうとした。

——チユンツ

弾が目の前を掠め、踏みとどまる。

へりからの音ではない。

紫の番傘の先から煙が出ていた。

「神楽ちゃん、ここは危ないよ。先に帰ってて」

「きーやんも帰るなら帰るヨ。でも違うんだロ？ だったら私も帰らないネ」

強く射抜くように傘を構える。

「重心はぶれてるし、残心もできていない。そんな剣を教えた覚えはないですよ、僕。帰ったら素振り千回。きっちり稽古つけてあげますから覚悟しておいて下さいね」

木刀が向けられる。

「聞いてなかった？ 私の用があるのは鬼兵隊の方、ごっこ遊びはもう……」

「知りません」

「知らないアル」

赤と青が飛び込んでくる。土方さんの刀に刀を合わせ、鏢で近藤さんの突きを止める。振り下ろされる木刀——手首を捕まえ、勢いを利し、番傘を弾く。文字通り四方から迫られ、刀を手を、あらゆる手段を駆使して——足元の違和感。

ミツバさんが鴨ちゃんの服を掴み逃がそうと懸命に引き抜こうとしていた。

上空からばらまかれる鉄の弾。メガネが弾け、近藤さんの肩を、神楽ちゃんの頬を掠める——。

「自らの手で裏切り者斬るのがそんなに重要？ 武士の誉れって奴？」

柄で腹を打たれ仰け反ったそこに一太刀、土方さんが吹き飛ぶ。開いた空間に近藤さんが飛び込んでくる。

「言っただろ、こいつらは俺の腕だ、足だ、はらわた腸だってよお！」
斬撃。切り結ぶ。

「裏切り者だよ」

「関係ねっ……ツツ!？」

「近藤さん!」

足を撃ち抜かれ、膝をつく。新八君の悲鳴じみた声が飛ぶ。

「次はどこが飛ぶか分からないよ? いい加減引きなよ」

「だからどうした。替えの利かねえモンが目の前にあんだ……俺のどこ弾け飛んでも見捨てねえ、見捨てられねえ」

剣を支えに、足を引きずり立ち上がる。

「先生、済まなかった。俺あ……あんたの期待に応える事ができなかった無能な将だ」

「なにを……何を言っている」

抜け出そうとしていた動きを止め、その姿を食い入るように鴨ちやんは見つめていた。

「将が打たれりや戦は終めえーだって言われたけど、そんな馬鹿だから解らねーんだ。兵、見捨てて勝つ戦なんてしたくねえんだ。先生、俺はアンタともつと……」

「何を言ってるんだ! 君達は何をしてるかわかっているのか!! 僕は君を殺そうとした裏切り者なんだぞ!!」

「それでも、俺にとっちゃあ同じ酒を酌み交わした仲間だ」

動きの鈍った近藤さんを契機と捉えたのか、一点に弾が集中する。

「近藤さん!」

「ゴリラ!」

神楽ちやんと新八君の悲鳴が響く中、列車に上った土方さんが助走をつけてへりに飛びかかる。

鋭い一刀によりローターが切り飛ばされる——へりは浮力を失い傾き地面に落ちていく。土方さんもまた同じく。

「土方ああああ!!」

今更どんな手を打っても遅いというのに、渾身の力を込めて鴨ちやんは抜けだそうと藻掻く。
だから、私は跳ぶ。

キツネを包む

巻き上がる爆炎。むせるような油の匂いと共に黒煙が辺り一面を覆い尽くす。

抱えていた荷物を地面に下ろせば、無然とした態度でこちらを睨みつける。

「テメー、何を考えてやがる」

「口には出せないような卑猥な事とかとか……。それより土方さん、人生は選択の連続だっていうけれど、マヨラーと化ケ物どっちが遮蔽物として有効だと思います?」

もう一機。煙る空の合間に見えた。センターに搭載された銃器が真正面を捉えていた。

地に落ちたへりは炎を上げている。荒野のど真ん中。木も岩も、遮るものは何もない。

ゆつくりと、銃弾が吐き出される。

劈くような音と共に、土煙が上がる。霞む視界。

それが収まると――両の手を広げた黒い背中が見えた。

「正解は、真選組の参謀様でした」

「――!?」

土方さんの目が見開かれる。

鴨ちゃんもまた、自身の体を見て、まるで信じられないかのように呆然と立ち尽くす。

標的を避けるように、くつきりと境目を残して、銃弾が地面に跡を残す。

次弾が装填される。

帳尻合わせの為に必要な命を一つ加算する。

「止める!!!」

振りかぶった刀に、私の狙いが何なのかを悟った土方さんが静止をかける。それを振り切り、投げ打つ。絶望に染まった操縦者の顔をしっかりと目に焼き付けた。

コントロールを失ったへりは斜めにバランスを崩し、そのまま落ち

ていった。

「答え合わせの時間としよーか」

立ち尽くす大人二人を前に、へらりと笑う。

近藤さん、土方さん、鴨ちゃん。神楽ちゃん、新八君、ミツバさん……そして、ボロボロになった体を引きずって、鬼兵隊の車に乗って追いかけてきた銀さん。

横転した列車の前に並び立ち、様々な思いを乗せ、視線を向けていた。

「やあー、そんなに熱心に見つめられたら照れちゃうなあ」

へらへら笑う私と対照的に皆、黙りこくっていた。

視線から逃れるように見上げると、暗い夜空に糸のように細い月が浮かんでいた。

耳が痛いほどの沈黙。こじ開けるように、溜息をつき、話を繋ぐ。

「鴨ちゃんの狙いは近藤さんを囮にした鬼兵隊の殲滅。——今回の作戦は、秘密裏に独断で行われたもの。誰も何も知らなかった。上手く乗せられた隊士等も誰も。近藤さんが大根なのは分かっていたし、土方さんに反対されるのは目に見えていたから。越権行為ではあったけれど、その効果は著しく、鬼兵隊の戦力を削ぐ事に見事成功。そして……獅子身中の虫ともいうべき、裏切り者の炙り出しにも成功した」

「その裏切り者っていうのは……」

「私」

当惑した近藤さんの言葉にきっぱりと答える。

しんと静まり返る沈黙が重く、動かない世界にどうしたものかと言葉を継ぎ足す。

「んーっと、それなりの犠牲はあったものの作戦は成功に終わったので、結果オーライって事で。乗せられちゃった隊士達は、まあ抜き打ち検査みたいなモンだから、罰として屯所を十周ぐらい……」

「ぎげんなよ」

「えーつと、成果が足りなかったとか？ 土方さんは知らないかもだけど、それなりの数の鬼兵隊は打ち取れたと思うよ？ 犠牲者ゼロで最大限の成果。流石、真選組の参謀様が立てた作戦」

戦場に残してきた死体の山を思い出す。ざっと一個中隊はいたんじゃないかと思う。

「ふざけてんじゃねーぞ」

怒りが押し込められていた。

静かにその言葉を受け止める私に、土方さんは続ける。

「下手な嘘に付き合ってる暇はねえんだよ。テメーの目的はなんだ」

「鬼兵隊と手を組んで国家転覆とか？」

「斬るぞ」

土方さんの手が刀に向かう。

「それで気が済むのなら？」

大きく手を広げ受け入れる体勢を取る。

今にも抜かんとばかりの刀は怖くなかった。それが脅しであるとか、そんな事実関係なしに、今更死ぬのが怖いなんて……。ただ、神楽ちゃんや、新八君には悪いなと思った。

「二人共もう止めるんだ」

そんな土方さんを押し留めたのは近藤さんだった。刀を握る肩に手を置き、引く。だらりと離れた。

後ろに退った土方さんに代わり、澄んだ瞳が見つめる。この目が苦手だ。真っ直ぐで、誤魔化しも嘘も……。なにもつけなくなる気がする。

「キリちゃん……裏切り者は斬らなきゃならない……例えそれが誰であろろうが」

「……だからどうぞって言ってるじゃないですか」

近藤さんの言葉に、余裕を取り繕えなくなり、苛立つ。

「キリちゃん君だけじゃない……先生……伊東もだ」

局長の顔で近藤さんが見つめていた。

視線を逸らすことなんて出来るはずもなく、切り離れた心で何が足りなかったのか薄らばんやり考える。

並べた嘘の数か——命の数か……。

「だから正直に答えてほしい。キリちゃん……君はどうしたかったんだい？」

「……………」

どうしたかったのか？ 決まっている。斬らないで欲しいのだ。

確かにこの人は、太陽だと思った。真芯を溶かしてしまいそうな、温かな熱を含んだ言葉に、喉元まで出かかった言葉を飲み込む。

——甘えだ。

彼等が斬るべきだと判断するのなら、そうあるべきなのだ。

「伊東」

土方さんがそう一言声をかける。

隣立つ銀縁メガネの奥は覚悟を決めたようだった。武士らしく、凜と、物悲しく、しかし、どこか満足そうに。

「腹ぐらい切らせて貰えるのだろうか？」

「精々、派手にかっさげ」

連れ立って、静かに背を向けて、行ってしまう。

「待って！」

肩越しに向けられる視線に狼狽え、後退る。

諦めるのは得意だった。諦める為の努力には慣れていた。

「……えつとほらさ、連れて行くなら私も一緒じゃないと。手錠とか嵌めてみる？」

それなのに……時間を引き延ばす事もできないような御託を並べて、何をしているんだろうか。

立ち止まり、土方さんが振り向く。

「テメーなんざ捕まえても税金の無駄だ。どこの馬の骨とも分からねえ……そんな奴捕まえた所で扱いに困るだけだ。いらねえよ」

足りない。何もかもが足りない。手札は全て切り終え、空っぽの手にどうしたら良いかわからなくなる。

フラッシュバックする死体の山。絶望に彩られたヘリの操縦者の顔。何も……意味がなかった彼等の死。一人の命を救うために百を捨てた。それでも救えなかった……。間違いだったと心が告げる。

それを認める事ができずに、

「首が！ 事態の收拾をつけるための首が必要だっていうなら……私の首だって！」

「行くぞ」

届かない。言葉すらも。

「待ってってば!!」

駄々を捏ねる子供に戻ったようだった。足搔き、喚き散らす。

諦めきれない子供だった。

「しつげーぞ。お子様の遊び場じゃねーんだよ、戦場は」

見下すように、土方さんはそんな子供を見つめる。

「……違うー!」

反発する。大人になりきれない、子供なのかもしれない、でも——
軽い気持ちでいじくり回した訳じゃない。ちゃんと覚悟はあった。
信念もあった。

遊びなんてそんな気持ちでそうした訳じゃない!

「どこが違うっていうんだ。何がしたかったのか説明もできず、周りぶん回して、耳障りのいい嘘八百並べたてて、それを信じろってか?

お人形遊びしてんじゃねーよ」

「そんな事……」

違うと言えなかった。そうだろうか? そうなのだろうか? 都合の良い未来を信じて、都合の良いように捏ね回した。

最後まで言い切れなかった私を追い詰めるように、土方さんは続ける。

「違うってんのなら、口にだしてちゃんと見え。何のためにお前が事を起こしたのかはつきりと。逃げてんじゃねーよ」

「護りたかった。救いたかった。そういえばいい? それで満足?」

するつと溢れた。自尊心が言葉をコーティングする。棘のように身を包み、最後の一线、縁ぎりぎりにしがみつく。だが、そんなもの——。

「満足? するかよ。生ぬるすぎて、ヘソで茶が湧かア。満足させたきや、泣いて喚いて、這いつくばって、まげ 跪け! 護りたいなんて世迷

い事口にすんだったら、みつともなく這いずりまわって最後まで手を
尽くせ!!」

容赦なくぶつけられる言葉に、剥ぎ取られる。取り繕って大人ぶつ
て、それでいて大人になりきれない甘えを木っ端微塵に打ち砕かれ
る。

そして、土方さんの正しさを知る。

分かっていたいなかった、覚悟したつもりだった。そんなもの、おべん
ちやらも良いところだ。

全てを投げ打って頭を下げ、許しをこうべきなのだ。そうすべきな
のだ。だって……殺したのだから。

真っ赤な柔らかい臓腑を、むき出しにして、自ら削り取らねばなら
ない苦痛。アイデンティティともいえる部分を、そうして切り取って
売りに出さねばならないのだ。その為に、殺したのだから。

「……お願い……鴨ちゃんを斬らないで」

歯を食いしばり、頭を下げ、地面を見つめる。

ふつと抜ける息の音。

「伊東、テメーはもっかい平からやり直した。近藤さん囷にするなん
ぞ許されねーよ。本来なら切腹モンだが……手柄に免じて降格って
所が妥当だろ、なあ近藤さん」

「そうだなトシ」

そんな頭上に、棒読みの台詞が降ってくる。大人に始末をつけられ
た。そして、私の『為』の茶番なのだとそこで気づく。無理矢理ギブ
スを嵌められて正しい位置に骨を戻されたような気持ち悪さ。

全てをボロボロに剥ぎ取られ、どういう顔をしたら良いか分からな
い私の頭にぼんと手が乗せられる。

「けるぞ」

頭を上げると、銀さんは相変わらず死んだ目で、何事もなかったか
のような顔をしていた。新八君と神楽ちゃんはどこか怒った顔をし
ていた。

世界は再び回りだす。

ぞろぞろと動く面々。そんな中、近藤さんがこちらを向く。

「総悟とザキは？」

「屯所で寝てる、皆も」

「そうか……」

肩の力を抜き、近藤さんはそこでようやく弛緩し、笑う。

「待つてくれ！ 確かに僕は……見間違える筈は！」

「きつと狐につままれたんだよ」

そして、いつもの自分を幾つか取り戻し、かぶりを振る鴨ちゃんを、私も笑う。

少し向こうで三人がこちらを振り返り待っていた。

「銀さん！ 私……先、帰ってるね！」

けれど、完全には戻れない私はそう言うしかなかった。

混ざれない、そう思ってしまったのだ。そして跳ぶ。

「胸糞悪イ……」

土方はそう言うのと、つい先程までキリが存在していた場所に舌打ちし、がごと、転がっていた列車の破片を蹴った。それでも鬱憤は晴れないのか、苦々しげに、胸ポケットを漁ると、取り出した煙草に火をつける。ふわりと煙が広がった。

それを痛ましげな表情で、近藤が見つめていた。

「助けられたんだろうな……僕は」

狐につままれたと言ったキリの言葉を胸の内で反芻して、伊東はひとりごちる。

本当に欲しかった物——器を満たす理解者などではなく、共に酒を酌み交わす仲間を、気づけなかった大切なものを、自ら失う寸前で拾われた。まるで本当に狐に化かされたようだと思った。

出会いは偶然だった。元がつくが参謀としての威信にかけて、あれは演技なんかではなかったと伊東は断言する。あれが演技などであれば、もつと器用に立ち回ることもできたであろうと。

ドミノ倒しの様にパタパタと偶然と思惑が重なり、命を拾った。

「あそこまでいけばもう、病気だろ。万事屋ア……気をつけるよ。す

るつと抜けてくぞありやあ」

立ち去ろうとした銀時へ、土方は空に煙を吐き告げる。

「分かってるよ」

十分に知っているると断言する口調で、苛立たしげに銀時はそう答えた。

見上げる二人を連れて、銀時は帰路にたつ。

真選組もまた。

のつぺりとした海を見ながら、私は足を投げ出す。

埠頭に月が浮かんでいた。

ふわりと、光を作る。一つ、二つ、三つ。

灯笼流しの時期なんて知らないけれど、それが死者を見送る為のものだという事ぐらひは知っているの、一つづつ海に落としていった。

十を超え、一本の糸のように連なる光を見ながら思い出す。

一直線を示す心電図、病室に眠る私、ヘリの操縦者の絶望に染まった顔、殺した鬼兵隊の面々。

連想ゲームに失敗する。違う、最初にヘリの操縦者が順序としては正しい。誤魔化そうとただけ。

不思議と人を殺した自分を恐ろしいとも、許せないとも思わなかった。確信犯だからだろうか。あんなに殺したのに。時間が立てば自分の恐ろしさに震えがくるのか。

そこでようやく自分が殺したものの事など何も考えていないことに気付いた。ゆっくりリアルに考えようとしてそれすら失敗する。殺した人達に愛する人がいたとか、残してきたものがあるだとか、こんな卑怯な手段で殺されたのだからさぞや無念だろうとか……どれもありアリティに欠け、悲しむ為にそう考えようとしている事そのものが馬鹿らしくなる。

キラキラと連なる光はとても綺麗で、葬儀の作法なんて知らないけれど、幽霊が本当に存在するこの世界で何かの慰めになればいいと

思った。

どのくらいそうしていただろうか。月が沈む程度の時間。鎮魂歌を知らない私は、ありったけの歌を歌う。

「それなんつー歌？」

背後に立つ気配。

「現状ディスプレイストラクション。知ってる？」

「知らねーなあ」

どうでも良かったのか、興味を放り投げた銀さんはそう答えると、背中を合わせ、どんつと体重をかけ、座る。

前のめりになった体。体重をかけ返し、起こす。

「ここにいるって、よく分かったね」

「銀さんは何でも知ってたんだよ」

「そつか……そりや凄いや」

もたれかかってくる背中に、銀さんの体温を感じた。生きている人間の温度。

振り返る事なく、朝日に紛れ見えなくなった光を追う。

「私が勝手にした事だから」

「そうだな」

無意味なやり取り。きつとそう言ったところで背負ってしまうのだらうこの人は。

——残酷な命の計算。

それを叱りもせず、問い詰めもせず、止めれなかった事に対する詫びも入れず、一緒に背負ってくれるつもりなのだ。

二人で背負えば悲しみは半分と良く言うけれど、私はそう思わない。私の悲しみや苦しみは私のものだし、銀さんのものは銀さんのものだから、結果的に言えば単に二倍になるだけ……。合理的な私の脳味噌はそれを無駄だと切つて捨てる。

けれど銀さんは穏やかに波打つ海の様で、余りにも美しすぎるから、心が惹かれ、同調し、凧いでいく。

朝日がすっかり辺りを照らし、眩しい光に目を細める——。
「お前、伊東に惚れてたのか」

あまりにもゆつくりとした真面目な声でそう言うものだから、思わず吹いてしまった。

「銀さんが読み誤ることなんてあるんだね」

「お前、人のことなんだと思ってるの」

「銀さんは私のことなんて全部するっとお見通しだ！ とか思ってた」

「何でもかんでも分かってたまるか」

「さっきと言ってることが違う」

「人間ってのはズリイ生き物なんだよ」

「そうでしたねー」

ケラケラと笑う私に、銀さんが後頭部に軽く、ゴチンと頭をぶつけてくる。

銀さんがあまりにも私の事を分かってくれるから、本当はいつも言葉が足りてなかったのかもしれない。意識していつもの自分より長く言葉を紡ぐ。

「鴨ちゃんはもう一人の私なんだ。そうなっていたかもしれない私。鏡に恋愛できるほどナルシストじゃないよ。でも、鏡の中の自分を可哀想だっと思う程度にはエゴイストなんだ。まあ……結局は鴨ちゃんを好きって事なのかも知れない」

「なんだ当たってんじやねエかよ」

「そーかも」

打算から始まった腐れ縁は、醜いエゴイズムで終わったのだろう。失った絆に胸が少し痛む。

「ねエ銀さん。鬼兵隊の事も嫌いじゃなかったって言ったら怒る？」

ポロリと漏らした本音。

「何股かけるつもりだ、おめーは」

「仕方ないよ、愛は世界を救うんだから」

怒りはしなかったけど呆れられた。

銀さんのその懐の深さが羨ましい。

私の物差しはそれが間違っていると示すのだから。

「ちよつとこっちききて」

「あ？」

体を回し、銀さんの襟首を捕まえて、引き寄せる。

「アニマルヒーリング！」

「いっつええええ！」

嫉妬に駆られた八つ当たりで、わざと傷口をえぐる角度で抱きつく。

「それに、愛があれば怪我なんて治っちゃうんですよ」

唐突にぱつと離して立ち上がる。

「お前の治療は痛えよ、くそつ。迎えにきた銀さんをもつと労りやがれ。だいたい、この場合どっちが動物なんだってんだ」

「銀さんに決まってるじゃん、男は皆狼なんですよ」

やっぱり見透かされていた私は、それに軽口で応える。

傷口を確認する銀さんを置いて先に立つ。

銀さんが来てくれる前に色々自分の中で決着は付いた。

でも、誰かからの愛を欲してたのかもしれない。失ったものの代わりに。

それをくれた銀さんにお返しをする。愛はそうやって世界を救うのだと思う。

「ねえ……銀さん私いくね」

「……どっか」

震えた声に銀さんが幽霊以外に怖がるものなんてあるのかと今更ながら新しい一面を知る。

ある意味幽霊なだけどと思った所で笑いがこみ上げる。

「……大丈夫、必ず戻るよ」

叫び声を聞いた気がした。

メニー・マニー・メリー

ゴウン……ゴウン……と低い音を響かせながら船が飛ぶ。薄い雲の上、海洋の真つ只中。

磨き上げられた甲板の先頭、船首に、派手な着物を着た男——高杉が煙管片手に立っていた。

「珍客だな」

「お主は……」

突然現れた私に、高杉は驚くでもなく。

その隣に立っていた万斉もまた、サングラス越しに視線を向けるに留める。

「知り合いか？」

吸った煙を吐き出しながら高杉が万斉に首を向ける。

「伊東の手駒。……今思えば、本当にそうであったかは怪しいでござるが」

手駒という単語に、高杉がほうと息をついた。

——万斉とは一度だけ顔を合わせた事があった。

隠れ家のように潜む料亭で行われた作戦会合。鴨ちゃんが熱弁を振う部屋から抜け出し、庭先で一人月見をしていた時、声をかけられた。

眠っているのか、動かぬ鯉が沈む池の淵に立っていると、背後から人の近づくと気配がした。

「貴様か？ 伊東の言っていた新顔というのは」

「耳が早いですね。ご指名ですか？ ご主人様」

猫を三重にも着て、首を傾け、振り向く。

『……………』

『あれ？ ご主人様より、お館様やかたさまの方が好みでした？』

痛いほどの沈黙は続く。

どうしたものかと、悩んでいると、万斉が先に口を開いた。

『がらんどう』

『？』

『がらんどうでござる。木のうろを風が通り抜けるような、がらんど
うの音』

『ん？ んー？ ラブソングの間違いじゃない？』

『こんなもの、音楽とは認めぬでござるよ』

そう言い捨て、裏戸から暗闇に消えていった。

それっきりの縁だったが、覚えているとは……全くの光栄である。
「で、そんな奴が何の用だ？」

高杉がカツンと灰を落とした煙管を懐に仕舞い、問いながら一步前
へ出る。だらりと下った手は、腰に吊るした刀をいつでも抜けるよう
に見えた。

高杉は万斉から聞いて、知っているのだろうか——私の事を。

「約束しにきた」

私の答えに、カチャリと音を立てて高杉の刀が引かれる。

「そんなものは——閻魔とでもしてろ」

刀は空を切り、切っ先が床板につき刺さった。

振り下ろされた刀を受け入れることは簡単だったけれど——詫び
るには、私は何も知らなすぎた。

万斉が獲物に手をかけ、転移した私の正面、高杉の背を護るよう
に立つ。

それを静かに見つめ、ゆっくりと口を開く。

「生憎と、死ぬわけにはいかないんだ。だから高杉、約束するよ——も
しこの世界に留魂録。そんなもんがあればきつとそれをアンタに届
けるよ」

高杉は刀を床から引き抜き——これ以上殺り合う気はないのか——
納める。

「リュウコンロク……？」

確かめるように口の中で、その単語を転がす。

そうか、高杉も知らないのか。ならソレそのものは存在しないのか
もしれない。

しかし——。

「約束したから。ついでにコレあげる」

借り物だった黒い携帯電話を放り投げれば、高杉はパシリと片手で受け取った。高杉と携帯、似合わないことこの上ないが、これを機会に、文明開化でもすると良い。

一方的な約束だけれど、それが償いになれば良いと思った。

二人、残される。

「万斉……ありやあなんだ」

「わからぬ。だが……変わったでござるな」

雲を切って、船は飛び続けた。

跳んで帰った、しんと静まり返った自室。なんだか色々疲れてしまつて、布団も敷かずそのまま倒れるように眠った。

目を覚ますと日が再び暮れたようで、真つ暗な部屋の中、手探りで明かりをつける。ブオンブオンと安物の冷蔵庫の音を聞いて、腹が思い出したかのようにきゆうーと鳴いた。

がこつと白い扉をあけると、ほぼからつぽで、そう言えば新八君に処分してつて頼んだつくと遅まきながら思い出す。

唯一、チルド室に残された魚肉ソーセージを手に取り、端を噛みちぎり、つるんと剥く。モシヤモシヤと齧った。

味なんてしないもんかと思つたけれど、しつかり安つぽい味を舌は拾い上げてくれた。

半分。食べ終えた所で、それを啜えたまま、行儀悪く、また畳に仰向けに寝転がる。

体から、硝煙の匂いがした。——鉄の匂いも。

舌は生きていたけれど、鼻は死んでいたようだと思つづく。

復活した臭気に、しかし風呂に入る気にもなれず、怠惰に身を任せ、いつもの手をつかつて、それを拭い去る。

鼻の奥に、しつこくこびり付いた匂いもやがて感じなくなり、魚肉ソーセージも食べ終え、残ったビニールをゴミ箱に放り捨てる。

人心地つく。

ゴロンと寝返りを打つたところで、胸にしまった異物にああ、と手

をやった。

ガラス管。短い、それこそ小指の第一関節程の長さ。

黒いゴムで閉鎖されたソレを振れば、トポンと留めた時間その時そのままに、掠め取った赤い液体が揺れた。

輪っかになつた蛍光灯に、それを透かしてみる。

考えた事があつた。

——もしこの世界が、確約された運命を辿るなら、今は何周目なのだろう？ と。

目を凝らしてみても、異物なんて見えず、存在してもしなくても、まあナノと言うのだからとても小さなものなのだろうと、納得する。

遠い物語の終わりに思いを馳せ、とりあえず今日はもう一眠りしようと思つて目を閉じた。

それから一週間。寝たり、ジャンプを読んだり、TVを見たり、寝たり。ゴロゴロしたり。たまに買い物にでかけ、適当に食べて、自堕落のままに過ごした。

昼と夜を逆転させた生活が続け、徐々にずれていった時間。陽の光に、目を覚ます。

「良く寝たなあ」

筋を伸ばし、時間経過でリセットされる都合のいい頭を振って、のそりと立ち上がる。

夜ばかり過ごしていたせいか、無性に陽の光が恋しくなった。

ドアを開ければ、さんさんと煌めく太陽が世界を明るく照らしていた。

温かな日差しは心地よく、昼飯なのか朝飯なのか分からないものを近場で済ませた私は、透明の自動ドアを潜った。

レタス、トマト、パプリカ、
緑、赤、黄色。

整然と並べられた生鮮野菜が、やさしい畑の如く目の前に広がっていた。

「いらっしやいませ、今日のお買い得品は——」

「あの一」

「はい、なんでしよう」

後ろから声をかけると、揉み手をしながら振り返る。胸の店長と書かれたバツチが体と一緒に揺れた。

アンコウさん、客に対しては愛想いいんだよねえ。

「バイト、まだ募集してます?」

『レジ募集(※時給要相談)』と壁に貼り付けられたチラシを指差しながら、目の前で揺れるアンコウの提灯を見上げる。

するとアンコウさんは、頭のとっぺんから、つま先まで値踏みするよう眺め回したあと、ふむと頷いた。

「君、土日勤務大丈夫?」

「土日祝日全然お一けーですよ」

「じゃあよろしく頼むよ。実はねえー前の担当者がとんずらしちゃつてね、本当困ってたんだよ」

それはアルバイターの風上にもおけない奴ですなえと相槌を打ちながら、やつぱり顔覚えてなかったかと、新しい職場を探す必要性のない幸運に感謝した。

悪いけど人手足りてないからさっそく頼むよと、着慣れたエプロンを手渡され、レジ操作の簡単な説明を聞いた後、慣れた仕事をこなす。

向かい合うレジで仕事をすると同僚と視線が合い、胡乱な目を向けられたが、次々と並ぶ客の列にそれもやがて忙殺される。

ロッカールームで、「復帰したんだ?」と探るような口調で言われたが「何の事ですか?」と返せば、勝手に何かを納得したようで、またレジを共有する同僚に戻った。

真っ赤に染まった夕日の道を家に向かってテクテク歩く。

そして——刺された。

「きやああああああ」

あちらこちらから、黄色い悲鳴が上がり、逃げるように人が消えていく。

腹から冗談のように突き出る刀の柄と、それを握る人物。暗い瞳を思い出す。

「うつあつ……………」

がくりと膝を折り、倒れこむ私に容赦のない言葉が降り注ぐ。

「3点」

転がった私の腹から引きぬいた刀の先を、シャコシャコと指で押し縮めながら総悟が言った。

伸びたり、縮んだりする度に、血糊がピューピューと飛ぶ。

それが地面に転がる私の顔にびちゃびちゃと降り注ぐ。

完全な嫌がらせだ。

「いつまで寝ているつもりでイ、今度は股に垂らすぞ」

セクハラも良い所だ。

しかし、本当にやりかねないので、立ち上がり、顔にべっとりついた血糊を着物の袖で拭う。改めて自分の体をみると、全身血塗れで、とても往来を歩ける姿ではない。

「ずいぶん酷くない?」

「スタンガン仕込まなかった優しさに感謝しろイ」

その言葉にもう一度体を見下ろし、やられたら二倍どころか、千倍にして返す総悟だから、それはもう、菩薩のような心をもった対応なのだろうと、相対比で自分を無理やり納得させた。

しかし、このままでは帰ることもままならないので、その菩薩心になかった事にする。

赤い色がどこかに失せていくのを、総悟は色のない目でみていた。

「じゃあ、これで貸し借りはちやらって事で」

そのまま帰ろうとする私の腕をつかむと、そのまま総悟は正反対の方向へ引つ張って歩く。

「脳味噌ちゃんが入ってんのかイ? こんなんで、終る訳ないだろ。山崎の野郎は『温泉旅行に当たりました』なんて見え見えの詐欺に引つかかってどっかの山奥でラケット振ってるわ、報告書と始末書と、配置転換のための残業で、寝る暇も無いほど働かされるわ……土方ぜってえー殺す」

吐き出した台詞に、過ぎ去った地獄を思い出したのか、総悟は悪魔のような顔でほくそ笑む。

「どこに連れてく気？」なんて無駄口を叩こうものなら、土方さんに向けられた殺意がこちらに向きそうなので、私は口を噤んでただ、手を引かれるままに付いて行く。

ついた先は、商店街の端っこ。記憶では空き地となっていた筈の場所。

そこに――。

「おお、きたか」

近藤さんが手を振り立っていた。

近藤さんだけじゃない、

「いつまでかかってんだ」

「そう思うなら、土方さんが直接行ったら良かったんでさア、ついでに二度と帰ってくんない」

土方さんも、

「……久方ぶりだな」

鴨ちゃんも、

「……………」

見たことのある隊士等が頭を下げた。

そして、その背後には、塗装を施されたメリーゴーランドが、落ちかけた日の中で、じっと、命が吹き込まれるのを待つように。

一匹一匹を見分けられる程に付き合った、まごう事無き……私の家だった場所。

小さな、デパートの屋上を模したようなその場所には、作りかけのカフェや模擬店、ベンチが並んでいた。

「減給処分者が大量に出たせいで予算が浮いてしまつてね……使いきれないと減らさるんだよ。かといって、使う宛もなく、建設中のここに遊具を寄贈する案を採用したつて次第だ。いつまでも、チンピラ警察という評判じゃあ僕も困るんでね」

クイツと眼鏡を指で押し上げながら、長つたらしい言い訳を鴨ちゃんほろりと語る。

遠目に、贈呈真選組と書かれたプレートが見えた。

そんな言い訳は右から左に通り返し、なんで？ という疑問に侵さ

れる。

だって、だって……。

「偉そうに言ってるが、その処分者の中にテメーも含まれてる事を忘れてんじゃねーよ、ただの伊東さんよオ」

「ふっ、副長という肩書がそんなに偉いと思ってるのかい？ 下あつての上だろう？ 土方副長殿」

バチバチと火花が散るのを景色の一部と捉え、呆然と立ち尽くす。終わったと思ったのに、何一つ変わらないものがちやんとそこにあった。

そんな私に、ああ話の途中だったと鴨ちゃんが再び口を開く。

「明日、引き渡し予定なんだが……なんだ、その……引き渡す前に試運転をするべきだろうと、渡した後には動かないんじゃあ、真選組の沽券に関わるからな。その試運転に一般市民を代表して君に……」

「鴨ちゃん!!」

気がついたら駆け出していた。

どんっと体ごとぶつかるように、激しく抱きつく。視界は黒に包まれ、ぎゅつと手を回せば、確かに腕の中にあつた、温かなモノが。足掻き掴みとつたものがちやんと繋がっていた。

「お、おい！ 離れる!!」

「やだ」

「やだって、子供か君は!! 君達もみてるんじやない!!」

片手で私を引き剥がそうとしながら、もう片一方の手を振り回してひゅーひゅーと飛ばされる野次を鎮めようとする。

剥がされまいと必死で抱きつく私に、ますます声は大きくなる。

その声に紛れ、

「いーもん見れるからこいって、これの事かあ？」

「公共の場でいちやついてんじゃねーヨ」

「まったくです、風紀の乱れは心の乱れ、警察が風紀乱してどうするんですか」

腕は離さぬまま、声のした方を向く。

やれやれという顔を揃えて、三人立っていた。

「人数も揃ったし、そろそろ始めるか」

近藤さんの一言で、慌ただしく作業が始まる。
輪になって、

「三・二・一……点灯」

ぱっと付いた明かりは、幻想よりも美しく、綺羅びやかに。

「一番手は誰だ？」

わざとらしく斜にかまえる土方さんはムカつくけれど、温かい雰囲気
に寛大にもなろうというもの。

「鴨ちゃん行こう！」

仕事は終わったと、道を譲る鴨ちゃんの腕を取る。

「ちよつ、僕は！…こんな子供だまし……」

「お姫様には王子様のエスコートがないと、ほら！」

嫌がる鴨ちゃんを引きずって、白い馬の前に立たせる。

手を差し出して強請^{ねだ}るように見上げると、その手を素通りし、腰を
かかえられ乗せられた！

「……………」

「……ちゃんと捕まってるかと落ちるぞ」

往生際悪く、逃げようとする鴨ちゃんを、不満気に馬の上から見下
ろして、ぱんぱんと馬のケツを叩けば、諦めたのか、それでも仕方な
いという態度は崩さず、後ろに乗ってくれた。

神楽ちゃんや、新八君も乗り込んで……やがて回り出す。

オルゴールの音と、キラキラと瞬く光。

回転する景色の中に、一人、総悟がこちらを向いてニヤリと笑って
いるのが見えた。

手にした怪しげな、いかにもなスイッチ。

嫌な予感がする。

後ろへ流れていく総悟がボタンを押した瞬間！

「うわアアアア!!」

「ちよつとつオオオオ!!」

吹き飛ばされそうな程の高速回転。振り落とされそうになった体
が後ろから支えられた。

ってか、いつからメリーゴーランドは絶叫マシンの一員に加わったんだ!!!

「あんのくそぞえすうううううううう!!!」

ドップラー効果を遺憾なく発揮して、絶叫が響き渡る。

ちゃんと根に持つてるんじゃねえかあんちくしよおおおおお

!!

「……ぜえぜえ」

ぶすぶすと煙を立てて止まったメリーゴーランドを背景に、総悟が土方さんにこんこんと説教されている。

ダルそうにポケットに片手を突っ込んで、へいへいと聞いている姿からは、反省の色は見えない……が、後ろから神楽ちゃんが傘を構え近づいている事から、お仕置きは任せたと私は、ベンチの背に体を預けた。

そのベンチには先客が居た。

総悟と神楽ちゃんの喧嘩に巻き込まれ、破壊されていく周囲のモノに悲鳴を上げる、近藤さんと土方さん、頭を抱える鴨ちゃんを鼻をホジリながら、銀さんが「ご苦労なこつて」と見ていた。

「銀さんでしょ」

「何が？」

「わざわざこんなもの残しておかなくて、ちゃんと帰ってくるよ。約束したじゃない」

「何のことかさっぱりだな」

すつとぼける下手人はピンツと鼻くそを飛ばす。

真選組は知らない筈なのだ。朽ちかけた町外れの遊園地の事など。「万事屋さんはアフターケアもばっちりなんですねぇ」

星が瞬き始めた大江戸かぶき町の一角で、鬼が笑った。そんな話。

天国、そして日は昇る……か？
一千回と死んだ猫

「きゆうひやくきゆうじゆうはち……きゆうきゆうじゆうきゆう
………せーんっ!!」

千を数え上げ、そのまま床板につつぶした。腕が産まれたての子馬だ。女子力皆無な姿勢で見上げると、厳しい顔をした眼鏡がキラリと光っていた。

立てと？ 立てと？ ああ、はいわかりました済みません。

のそりと起き上がり、ともすれば、竹刀を落としそうな腕で構え、最後の一礼をする。

そして今度こそ本当にへたり込んだ。

「はい、お茶です」

「置いておいてくれると助かります」

新八君がお茶を差し出すが、今、握力ゼロのこの手で受け取ればぶち撒けること必然。

お盆に乗せたお茶が、寝転がる私の傍らに置かれる。

それを視線の端で捉え気づく。……ねえ、新八君。湯気………凄くない？

「許した訳じゃないんですからね」

不機嫌そうな声で、ぼそりと言われた。

約束通り、素振り千回を言い渡された日の午後だった。

へたりこんだ私の隣で、ピンと背筋を伸ばし、新八君が折り目正しく座る。

「知っていますか？ 命を大事にとって、その辺に転がってる勇者だって初期装備してるんですよ？ それに、「妖刀に気をつけて」って、ヒント与えるにしても、もう少しマシなヒントなかつたんですか？ それにそれに、実は私がラスボスでしたらって風体で突然現れても、アドリブ効かせて合わせられると思うなよ！ 空気読むにも限界があるんだよ！ それにそれにそれに、キリさんはいつもいつも人が心配し

てるのに、そんな気も知らないで、振り回されるこっちの身にもなつてみるっていうんだ!!! ねえ! ちよつと聞いてるんですか!!!」

「はい、聞いてます、済みません」

勇者はその辺に転がってないってツツコミを入れる間もなく、身を引き起こされ、こんこんと説教をされる。

「謝らないでいいです」

想定外の返事に、土下座の体勢から首をひねって、新八君を見上げる。

緩みのない顔。真剣に続ける。

「いくら言っても、どうせまた勝手に行動しちゃうんでしょ? 諦めたんで、僕」

「いやあー、そんなことないような、あるようなー」

「あるんですね?」

「いや、ないような?」

「じゃあ、誓えます?」

うづつと言葉を詰まらせる。誓って二度としないなんて……言えないねえ。

ほらみると、胡乱げに新八君が見つめてくる。

いや、だつてさ、ほらさ、女の子には色々秘密があつてね? 言い

訳は色々頭のなかでぐるぐる回るが、どれもこれも口に出せば更に説教が長引きそうな場当たりの物ばかり。

にらめっこは続き、首が痛くなってきた頃、ずずつと一人だけ美味しそうにお茶を啜り、新八君は言う。

「だから僕決めました。勝手に心配し続けます」

「普通……逆じゃない?」

腹筋だけで体を起こす、結構辛い。

「いいんです。心配するのやめたら、アンタ勝手にどつかでくたばつてそうなんで、心配だけする事にしました……だからちゃんと帰ってくるってそれだけ約束して下さい」

「はーい」

「返事は短く」

「はい」

「よろしく」

ようやく納得してくれた新八君に、胸を撫で下ろす。

それにしても、帰るかあ……。なんとも言えない居心地の悪さを感じながらも、喉の渇きはやまない。

その手に持つてる湯のみをちよつと私の口に差し出してはくれな
いだろうか？

じつと見つめる視線に気付いたのか、ため息をついて横に退けてい
た私の湯のみを手に取り、口元に持つてきてくれた。

わーい、新八君優しい。

でも、まだ熱かったので、もう少し角度を緩めてくれると嬉しい
……。

二人羽織でもやつてるような奇妙な体勢でお茶を飲み終えた後、パ
ンと膝を叩いて気合をいれ、新八君は立ち上がる。

「じゃあ、これ片付けてくるんで、床拭きとあと、竹刀片付けておいて
下さい。終わったら買い物行くんで、荷物持つの手伝って下さいね」
「えっ、ちよつとま……」

無常にもお盆を持った新八君は去っていった。

床に置かれた二本の竹刀と、無駄に広い剣道場。そして……子馬は
まだ生まれて30分ぐらい。

最後の返事を伸ばしたのが悪かったのかなあ？

床を拭いているのか、雑巾を引きずっているのか分からないような
有様で、床拭きを終え、竹刀を片付け、買い物についていく。プルプ
ルと震える腕を見かねた新八君が、ティッシュスーパーだけ持たせて
くれた。

優しすぎて涙でそう……持たせないという選択肢はないようだっ
た。

そして辿り着いた万事屋の台所で、買ってきたものを冷蔵庫に閉
まっていた新八君が悩ましげに首を傾げ、やがてはあーとため息をつ
いてバタリとドアを閉めた。

「どうしたの？」

冷蔵庫の中身がスツカスカなのは今に始まったことじゃないよ？

予想できる心配事がなんともさもない。

「いえね……最近、冷蔵庫に仕舞ってあった筈のものが勝手になくなるんですよね」

「プリンとか、アイスとか？」

「まあ、それだったら犯人は一人しかいないですし、勝手に自滅するんで別にいいんですが……最近なくなるのは魚とかハムとか、どうもらしくないというか……」

神楽ちゃんのプリンを盗んだ銀さんがどうなるかは推して知るべし。

それにしても魚とかハム……か。確かに銀さんらしくはない。ならば犯人は……。

「ご飯足りてないのかなあ……」

深い深いため息をついて、新八君は夕食の準備に取り掛かる。

もやしに豆腐に、こんにやく、おから。

かさを増した食糧事情にも関わらず、盗難が止むことはなかった。

そして——ちくわに、サンマに、フライ用のアジと、盗まれたライオンナップに、二人ではたと首をかしげる。そのままでは食べられない物を盗んでどうするというのだ？

お登勢さんにそれとなく聞いても、それらの食材が持ち込まれた形跡はないし、他所よそに調理を頼むというのも……おかしい話だ。炊いてある白米や、卵には手を付けず、それらを盗むのはどうもらしくないというの二人で考えた結論だった。

電信柱の陰から、こそこそと様子を伺う。

「どこへ持っていく気なんでしょうね？」

「この先は確か神社だったよね？」

「ええ……といっても社務所しゃむしょもないような小さな神社ですが……」

視線の先——揺れる番傘を持った手の反対側には、一切れの鮭が握

られている。

石で作られた飾り気のない階段をのぼり、境内の裏手、軒下を覗き込んだ神樂ちゃんは、チチチチツと何かを呼ぶように舌を鳴らした。

「ごはん持ってきたアルヨ」

やがてのそりと、大きなお腹をかかえた一匹の白猫が姿を現した。見た目はなんともないのだが、昔に何かやったのか、生まれつきか、後ろ足を引きずりながら、ヨタヨタと進み出る。身重で、足がそれでは、エサを取るのにも苦勞するだろう。神樂ちゃんが食糧をくすねる理由が分かった。

「一杯食べて、元気な子供を生むんだヨ。このグラさんが名付け親になってあげるネ。きつと強い子に育つアルヨ」

ガツガツとむさぼり食う白猫を撫でながら、神樂ちゃんはそんな事を言う。神樂ちゃんが名付け親になったのなら、それはもう強い子になるに違いなかった。新八君も同じことを思ったのだろう、顔を見合わせ、クスクスと笑う。

「行きますか」

音量を落とした新八君の言葉に、覗いていた草むらの陰からそつと立ち去った。

帰り道。

「無事生まれるといいですね」

「夜兎の工場長様が名付け親になるんだから、きつと大丈夫に決まってるじゃない」

そんな事を言いながら、新八君は明日はめざし買ってこようかななんて、私は生まれてくる子猫の毛色を想像したりなんかして、何も――不安なんて感じてなかった。

今にも雫を生み出しそうな、重く真つ黒な雲の下を私は走っていた。家を出る時までには晴れていたのに!! 寝坊して天気予報を見忘れた事を後悔しながら、バイト帰りの道をダッシュで駆け抜ける。

けれど道半ばという所でポツリ。

ああつ、くそつ！

悪態をついても、ポツリ、ポツリと粒は大きくなっていく。どこか雨宿りできる所と視線を巡らすと、身重のお母さん猫が住み着いている神社の石段が目に入った。新八君の話では、まだ生まれてはいないらしく、早く生まれてくれないと家計に負担がと、困ったようにため息をついていた。

私も母猫共々お世話になろうと、石段を二段飛ばしで駆け上がった
そこで――。

――ぎやあ、ぎやあ

「止めろ！ お前ら!! あっちへいくアル!!」

空を舞う複数の鴉。からす

傘を振り回しそれらを追い払う神楽ちゃん――石畳に倒れ伏す
母猫の姿。

「あっちへいけえええ!!」

怒りをつのらせた神楽ちゃんの叫びがこだますると同時に、鴉達は
チリヂリに飛び立っていった。

本格的に降りだした雨が、傘を武器として振り回していた神楽ちゃん
のチャイナドレスを濃く染めていく。石畳に流れる血が、薄く流れ
ていく。

パシヤリ。

「きーやん……私、護れなかったヨ」

足音に気づいた神楽ちゃんがグシヤリと顔を歪めた。

雨は止まない。

タオルケットに包まれた子猫がみーみーと鳴き声を上げていた。
万事屋の一角。ダンボールで作られた仮宿の中で、丸くなって2匹。

結論からいうと母猫は手遅れだった。そして兄弟5匹の内3匹も
――。

「定春、食べちゃダメアルよ」

神楽ちゃんはそれでも歯を食いしばり、銀さんから財布をひったく
り、猫用のミルクを買って、湯たんぽを作って、雨で濡れた子猫達の

世話を甲斐甲斐しく焼いていた。——新八君は私達が帰ってくる前に家に戻ったらしい。冷蔵庫に鯖が一切れ入ってるのを見つけてしまった。

「お子様は寝る時間だ、肌が曲がるぞ」

時計の針が十時を回る頃、眠い目を擦りながら、子猫たちをじっと見張る神楽ちゃんの背後から、銀さんがそう言った。

「今日の工場長は二十四時間連続シフトヨ」

「どこのブラック企業だそれは」

「給料3ヶ月滞納している会社よりは全然ホワイトヨ」

それでも神楽ちゃんはダンボールの前から頑かたくなに動かない。二匹の内一匹、デコ——おでこが猫なのに広いからだそう——の鳴き声が心なしか弱くなっている気がした。

神楽ちゃんの隣に銀さんがどかりと腰を下ろす。

「おっかさんが命張って護った命だ。そう簡単にくたばりやしねーよ」

「本当にそう思うアルか？」

「……………何かあったら呼ぶからお前はもう寝ろ。ガキの世話つてのは毎日が戦争なんだよ。母親がンなんで明日の戦場を生き残れると思ってるのか？」

「明日…………」

「ああ。嫌になる程続くぞ？ 24時間連続シフトどころか24時間365日連続フル出勤だよ」

「とんだブラックアルな」

「まっくろけっけよ。だから休める時は休め」

「……………何かあったらちゃんと呼べヨ」

「ああ」

不安げに見上げた神楽ちゃんの瞳をしっかりと受け止めて、銀さんは頷いた。

神楽ちゃんを押し入れに押し込め、時計の針の音だけが響く万事屋で、銀さんはダンボールの隣に陣取り、定期的にミルクをやったり湯たんぽの位置をずらしたりと神楽ちゃんの代理を務めていた。

「飲まないよ、お前でかくなれねーぞ」

深夜1時を回ったあたり、銀さんは角度を変えたり位置をずらしたり試行錯誤していた哺乳瓶を、コトリと床に置いた。中身は減っていない。難しそうな表情でデコを見ていた。

梅子——眉間に梅干しの様な皺がある——はきちんと飲んだというのに。

「……ダメかもしれねーな」

覗き込んでいた私に、ボソリと銀さんはそう言った。「トイレ」と、銀さんが席をたつ。残された私と2匹の猫。離れまいとするようにくつつき、互いに互いの温もりを分け与えていた。

血を分けた存在、家族だという事を猫も分かるのだろうか？

「ミ——!!」

梅が強く鳴く。呼応するデコは弱々しい返事を返した。鼓舞しているのか、それとも——別れを告げているのか。

そつとデコを抱き上げる。

「ミ——ミ——」

「ミ——……」

「ちよつと借りるだけだから、大丈夫すぐ戻すよ」

抱き上げた子猫は暖かかった。降りしきる冷たい雨。神楽ちゃんがこの子等を抱いて万事屋に走る中、私は土饅頭をこねていた。境内の傍らに埋められた母猫と、名付けられなかった兄弟たち。

産後直後を狙われたのだろう。それでも母猫は、体力を失った体で、子供らを護ろうと力を振り絞り、戦った。飛び散った白い毛がそれを証明していた。

そして、雨で濡ればそり、冷たくなった毛皮が生命の終わりを告げた。

新八君だったらどうするのだろうか？ 相手が子猫だろうと容赦なく、最後まで諦めるなど叱りつけるだろうか？ そして、冷たくなった毛皮に、涎ですとかなんとか言っちゃって、目から涎が出るかよと仕事^{ツッコミ}を奪われて、無力さに拳を握るのだろうか？ あれで案外泣き虫な所があるから。その癖いじっぱりだ。

私は彼の強さを学べただろうか？

「お前、生きたい？」

「……ミィー」

否定か肯定か、猫の言葉なんて分からないから、その返事を都合よく解釈した。

温度高めに、タオルケットにくるみ直されたデコにミルクをやる。砂漠で行き倒れた旅人のように、デコは哺乳瓶ごと飲み尽くさんとばかりにしゃぶりつく。哺乳瓶の中身は、勢い良くかさを減らしていった。

戻ってきた銀さんは黙って座り、見ていた。

最後にげっぷをして、満足そうなデコに重なるようにして、梅も丸まり眠りつく。

「なあ——」

空になった哺乳瓶を振りながら銀さんは続ける。

「なんで、お前迷った？」

相変わらず咎める響きは籠っていなかった。神楽ちゃんの不安心な瞳も見えていただろうし、やるせなさに歪む顔もみていただろうに——。

だから私は素直に答える事ができた。

「デコはさ、死ぬことが分かってたみたいなんだよね」

「動物は敏いからな」

「そうそう。だからかなー」

「なんだよそれ」

「折角死ぬことを覚悟したのに、その覚悟を善意で奪うのって好意の押し付けみたいで嫌だった。そう思ったらそのまま殺した方がいいのかなって。死ぬと思ってたものを生かしても、生き方なんて分からないだろうしさ」

「……その考えがエゴだよ」

「そうだね。押し付けはいけないね何事も」

その返事を聞いて、洗つてくると哺乳瓶を持った銀さんは、台所に向かった。

廊下へ去っていく銀さんの背中を見ながら思うのだ、最後まで美しく生きる生き方だけが正しいとは思いたくないのだと。

それは過去の過ちを過ちだと認めきれない己の醜さだった。

翌朝、ミーミーと元気に鳴く2匹に、神樂ちゃんが戦争を生き抜くコツを叩き込むべく特訓を始めようとして、出勤してきた新八君にまだ早いと止められるのはまた別の話。

よだかの太陽

『からくり堂』とかかれた看板は傾き、ところどころ瓦も欠けていた。

本当はもつと早く来る予定だったのだけれど、慰安旅行に出かけると張り紙が貼ってあったので諦めたのだ。その後も、子猫の里親探しに奔走して……今に至る。

それにしても、指名手配犯が町内会の慰安旅行とは、随分呑気な話だ。

オイル染みがついた地面を踏みつけ、開けっ放しの戸を潜る。

「済みま……」

声は途中で途切れた。

組みかけの部品や、工具が散乱する暗い室内。

「ふっかけんなア……腕だけじゃなくて、値段も江戸一番ってか？ オイ」

「馬鹿いつてんじゃねー。急ぎ仕事だつて無理を言ってきたのはあなたの方じゃねーか。大の男がびーびーガーガーケクセエ事言つてんじゃねーよ。まあ、仕上げに問題がありやあ別だが？ どうだ？ その価値はねえか」

やれやれといった風にスパナで肩を叩く源外さんに対峙する、黒い外套を羽織った一人の男。癖の強い茶色の髪が肩まで伸びていた。

外套から伸びた腕は、硬い金属に覆われている。——鉄矢さんと同じだ。

源外さんの言葉に、男は義手を握ったり開いたり、確かめる様な動作を繰り返す。紫色の番傘が傍らに置かれていた。

「……つたく安月給の身にもなつて欲しいもんだぜ、おら持つてけどロボー」

取り交わされる金銭。用はそれで終わりだとばかりに、男が振り返る。

——阿伏兎。

視線が合った。片眉を上げた阿伏兎は、源外さんへ視線を移す。

「客か？」

「まあ、そんなとこだ。なんだ、遊びにでもきたか。鉄の字の奴なら寝てるぞ、なんせ三日連続徹夜でこいつ仕上げたからな。俺も相手できねーぞ？ 流石にこの歳での徹夜は堪える」

アクビをしながら源外さんは阿伏兔の義手を指さした。

神威かむいとやり合った後なのか。それとも別の……？

動揺を悟られないよう、慎重に言葉にする。

「失礼ですが、その腕は……事故とかで？」

「まあ、事故つちやあ事故だなア。労災保険、おりてくんないもんかねえ」

ため息をつきながら阿伏兔はもう一度確かめるように拳を作り、手首を回す。

労災。やはり神威か、なら既に吉原に？

邪魔したなど、私の横を通り過ぎ、阿伏兔は陽の当たる明るい通りへ、傘をさし出で行った。

「で、お前さんは？」

パイプ椅子を軋ませる音に、ふっと現実に戻される。

椅子に腰掛けた源外さんが隈の浮かんだ顔でこちらを見ていた。

「え、ああ。頼みたいことがあったんだけど……」

「どっ？」

口の中で言葉が絡まる。

「お疲れのようだから、また今度お願いするね」

「いいのか？」

「急ぎじゃないから」

「そうかい、ならそーしてくれろと助かるわ……ふわああ、俺アもう寝るぞで」

奥へさがっていった源外さんの背中を見送り、一人残される。

背負い過ぎず逃げ出さないと決めた。

手のひらの中で、握りしめていた試験管を転がす。

「ログポーズ……降つてこないかなあ……」

油臭い部屋の中に眩きが響いた。

賑わいを見せる表通りはちんどん屋が姦しく、店先では値段交渉の舌戦が繰り広げられていた。

私の横を子供が駆け抜け、母親が追いかける。

「お母さん早く!!」

「待ちなさい、そんなに急ぐと転ぶわよ」

追いついた母親が子供の手を掴み、仲良く連れ立って歩いて行っていくた。

「お母さん……かあ」

遠い昔に置いてきたものは、他人の物であり、ホームドラマの登場人物でしかなかった。

じつと足元を見下ろす——地下に広がる桃源郷。そこにも『誰か』のお母さんがいるのだろうか……。子猫達を里親へ送り出した万事屋はいつも通り三人と一匹。増えることも、減ることもなく、通常運転、開店休業中だった。

結論を保留としたまま、流れに身を任せ、行き着く場所を目的とする。

絶望に染まったへりの操縦者と、硬い骨を削りながら血肉を切り裂く感触を思い出し、現実が遠くなるような感覚に陥った。

通りを歩く人間に混じる一匹の幽霊。

「——!?!」

背後から突然腕を捕まれ、ビクリと体を震わす。振り向くと、なんだか少し焦ったような顔をした鴨ちゃんが、隊服姿で立っていた。

「びっくりしたー。鴨ちゃんじゃん、どうしたの?」

「ああ、いや……」

歯切れの悪い言葉に、目的地を決めた。

「デートしようか?」

「で、でー……!?!」

ちんとんしやんと、涼やかな音楽が鳴り、朱色の化粧が施された建物が立ち並ぶ。ここが地下だという事を忘れてしまいそうな美しさ。遊女たちが「やだ、まあ」と艶やかな紅に桜色の爪を揃えて、旦那方の袖を引いていた。

「真選組の旦那、ちよいと遊んでいきませんか？」

ふふふつと見惚れる程の笑みを浮かべた遊女に、鴨ちゃんも袖を引かれていた。

「仕事中だ。掴むな！ 行かないと言ってるだろう、やめっ……うわっ、どこを掴んで、あつ、くっ……オイッ行くぞ」

最初は素気無く断っていた鴨ちゃんだったが、断れば断る程、面白がったお姉さん達が増えていき、きやいきやいと囲まれていた。それをほうほうの体で抜け出したかと思うと、私の手を取り走りだす。

敵前逃亡とは漢が廃りますよ？

「っはあ……ここまでくれば……」

建物と建物の中の裏路地に逃げ込んだ鴨ちゃんは、頬を流れる汗を、袖口で拭い、辺りに目配せする。

「意外、てつきりこの手のあしらいなんて慣れてるもんだと思った」

「君なあ……。はあー、まあいい、何か探したものか？ 手伝うぞ」

じつと眼鏡の奥から鴨ちゃんの目が静かに見つめていた。

「なんで分かった？」

「どこの世界に、デートで吉原に出かける馬鹿がいるんだ。それに……何かを探しているようだった」

「さすが元、参謀様。ご名答。晴太せいたって男の子。少し探すの手伝ってくれない？ お巡りさんなら探すの得意でしょう？」

何かが助かって、何かが助からないなんて事が、とてつもない不公平に思えたのだ。

少し、思案する仕草をした後、鴨ちゃんは口を開く。

「迷子の子供を探すのなら管轄外だ……と言いたいが、君が吉原ここで探そうとしている子供が、ただの子供とは思えない。訳アリなんだろう？ ほんとうに君は……食えないな」

「んー。食べられるかどうかは、食べてみないとわからないよ？

チャレンジしてみる？ 折角の吉原なんだし？」

「やめておくよ、腹を下しそうだ」

鴨ちゃんはゲンナリとした表情で、仕方ないと心よく了承してくれた。

「ここは地上うえのルールは通用しない。闇雲に首を突っ込んでいたら目を付けられるだけだ」

表通りに出た鴨ちゃんは言い含めるようにそう言うと、一つの店に向かう。

暖簾をくぐったそこは、薄暗い料亭のような雰囲気で、入り口にカウンターが一つ。

「何か……御用でしょうか？」

しゃがれた声でした。

カウンターの向こうは小上がりになっており、そこに敷かれた座布団に座った老婆が発した声だった。

「ミミズクを一羽」

鴨ちゃんがそう言うと、

——パンツ

しわくちやの手から発せられたとは思えない張りのある音に呼ばれ、一人、芳しい香を身に纏った女が出てきた。

こちらにと、カウンターの横に伸びる階段の上へと招かれる。

階段を登りながら、鴨ちゃんに「彼女は？」と聞く。

「吉原界隈の情報を流す情報屋、といっても窓口でしかないのだが」

「元締めは誰？」

「それこそ知らぬが仏、知った人間も仏だろうか」

そりゃあ物騒な事で……でも、蛇の道は、蛇というか、やはりキツネの住処はキツネに聞くに限るね。

先導された先は、二階の最奥にある客間だった。

「あんまり見てるんじゃない」

枕が二つ並べられた布団をジロジロと眺めていたら、鴨ちゃんに窘められた。

そーいうお店でもあるんだ一応。

女はその隣に座していた。

「夜の鳥を太陽の下に引きずり出し、求めるモノはなんでございましょうか?」

大人びて見えていたが、声色は年若く、化粧で作られたモノだという事に気付かされる。

「それは彼女から」

鴨ちゃんが私の背をスツと押した。

「人を探しています、晴太という男の子。日輪に通じる子です」

「日輪姉様の……。そこまで知っておられて……。ならば何も申し上げる事はありません」

日輪の名に、女は一瞬動揺を浮かべたがすぐにそれを収め、立ち上がる。

「鳳仙が怖い?」

「……………」

畏怖と憎悪。見下ろす瞳と、握りしめた拳をそう読んだ。

「手は貸せないか」

鴨ちゃん言葉にも、女は首を振る。

「いくら恩のある旦那の頼みでも……堪忍下さい。ここは女の世界、吉原桃源郷。しかし、それを牛耳るのは夜王鳳仙——ほうせん——この女はその身を鎖で縛られているのでございます。私も——、私だけならまだなんとでもなりましょう。けれど、日輪姉様は皆の太陽。その身になにかあったらこの世界は本当の苦界に落ちてしまいます。晴太——貴方がそう呼ぶ子を存じております。今、危うい状況にいる事も。ならばこそ何も言う事はできません」

「待って、危うい状況って!?!」

「知ったうえでここへこられた訳じゃっ——何も聞かなかった事にしてお下さい!」

一瞬浮かんだ、失望した様な表情を見逃さなかった。

踵を返し、きびす部屋から出ていこうとする腕を捕まえ、引き止める。

「は、離してください」

「晴太君は今どこに? 鳳仙の元にいるの?」

「言えません」

「日輪は太陽。私は貴方と日輪さんの関係を知らないけれど、貴方にとつてもそうなんじゃない？ 貴方の口ぶりでは、晴太君はそうとうまずい状況にいるみたいだ。だから期待した。誰かどうにかしてくれないかって勝手な希望を抱いた。もしかしたら私達がそうなんじゃないかって、違う？」

「違います！ 何も知らない癖に！ ここがどういう場所かも知らない癖に！ 地上の女が知ったような事をいわないで下さい！！」

悲痛に顔を歪ませ、叫ぶ。腕を無理やり振りほどき、襖の向こうへ逃げるように走っていった。――指を回した腕は細かった。

ジジツと蠟燭が音を立てる。ぽっかりと空いた襖の先の廊下は暗く、トタトタとした足音もやがて消える。

確かに彼女は何も言わなかったが、態度で分かる事もある。そうか、晴太君は鳳仙の元にいるのか――。

「思案中の所悪いが、そろそろ事情を説明してくれないか？」

地下の王国、吉原桃源郷。その頂に存在する最高位の遊女、日輪。王国を取り仕切る夜王鳳仙。先ほどもまでは、ポーカーフェイスを気取っていた鴨ちゃんだったが、頭が痛いとはかりに米神を抑えていた。

いや、だって、最初に言ったらついてきてくれなかったでしょう？

気になって、開きっぱなしの襖を閉める。

膝を付きあわせて、おおよその概要を鴨ちゃんに伝える。日輪さんと晴太君の関係性、鳳仙。そして――春雨。全ての話聞き終えた鴨ちゃんは、頭を抱えていた。

「春雨が吉原を手中に納める為に動いていると……？ 一体君は何を考えているんだ？ これは個人の手に負える問題じゃない。一旦隊に戻って――」

「戻って、どうするの？」

「対策を考える」

「そんな時間はない」

「——なら、せめて応援を」

「連れてこれるの？　ここは女の世界、地上のルールは通用しない、そう言ったのは鴨ちゃんじゃない」

「……………」

親指の爪を食み、他に何か策はないかと鴨ちゃんは苦悩していた。まいったなあ、頭の良い鴨ちゃんの事だ、ここでは真選組という肩書が、邪魔にしかならないという事を分かってくれると思っただけでも……………」

気遣いは無用だと、切り捨てられぬ程に入れ込んでしまっている身としては、その苦悩はありがたいが。

「大丈夫だよ、鴨ちゃん。そんなに心配しなくても。結構強い知ってるでしょ？」

「分かっているのは君だ。ことの次第では命が無事でも地上うへに戻れるかどうか——。それに晴太という少年が、君に一体どう関係するところなのだ。その話では顔すら知らないようじゃないか。そんな危険を犯して——」

「鴨ちゃんそこまで。どうやらお迎えが来たみたいだよ？　大丈夫だって、きつとそんな事態にはならないから」

視線を上げると同時に、スパンつと襖が開かれた。

戦装束を身に纏った女性達。その先頭に立つのは、死神太夫——
月詠つきよ。

「きな臭い匂いに駆けつけてみれば。火がないところに煙は立たないとは、よく言ったものであります。大火事になる前に、火の元は消しませんと」

煙管の代わりに、クナイが握られる。

「吉原自衛団百華。どうして——ミミズクか!？」

ガタリツと腰を浮かせて、鴨ちゃんが刀を握った。

呼び声に答えて、ミミズクと呼ばれていた女が、百華衆の後ろからと顔を覗かせ、申し訳なさそうに頭を下げる。

「例え旦那様でも地下の法を犯せば、上へ戻る事はかありません。恩義に背くことお許し下さい」

それを一瞥し、庇うように前に立つ鴨ちゃんが、私にだけ聞こえるように囁く。

「——どうにかできるか?」

「逃げるだけならね。でも、その必要はない。月詠さん」

「なぜわつちの名を?」

突然の呼びかけに、片眉をピクリと跳ね上げる。

「百の華を束ねる頭。そのご高名を知らない方がモグリつてもんでしよう。そんな事よりも、取引をしませんか?」

「命乞いか?」

「まあ、そんなものです。この人は私に利用されただけの男。なんにもできやしません。大人しくする代わりに、この人は帰してあげてくれませんか?」

「オイ——」

「動くな!」

振り向こうとした鴨ちゃんに月詠さんが一喝する。今にもクナイを投げ打ちそうな雰囲気、鴨ちゃんは動きを止めるしかなかった。

「ふっ、好いた男を身をもって庇うか……美談だが——」

「違いますよ、なんで皆、男と女が揃っていればそーいう風に見るんです? 見ての通り、この人は真選組です。百華としても、真選組と表立って争いたくはないでしょう? 真選組にしたってそう。なーんもできやしません。これは正当な取引ですよ。そっちにもちゃんとメリツトはある」

「ふむ——確かに一理あるな」

邪推も過ぎる。

私としては正論を主張しただけなのだけれど、鴨ちゃんにとっては違ったようで——。

「何を言ってるんだ!」

「動くなとっておるだろう!!」

——ガガッ

「くっ……」

放たれたクナイが足元に突き刺さり、再び動きを止められる。

た。
ミミズクに連れられ、口惜しそうに去っていく鴨ちゃんへ手を振つ

マミーコンプレックス

——カリカリ……——カリ……カリ……

畳を搔く音がやけに耳につく。壁際にある、黒く艶やかな仏壇には真新しい線香が立っていた。『中』にスイッチを合わせられた扇風機にあおられ、立ち昇る煙が開け放たれた軒先から外へと逃げていく。吊り下げられた風鈴がチリンと鳴った。

——夢だな

そう判断できたのは、何度も見た夢だからだろう。

視線を落とすと二人。

紋付きの黒い着物を着た女がこちらに背を向け、伸し掛かるように、黒いワンピースを着た女の子に跨っていた。

女の子の足が、股の間から突き出ていた。ジタバタと藻掻くように畳を蹴るせいで、幼い、レースで縁取られた黒靴下の片方は脱げ、もう一方もみつともなくずり落ちていた。

目が痛くなる程に白い襦袢が、めくれ上がった着物の裾からはみ出し、生々しく波を打っている。

——夢だな

もう一度確信をもって頷く。なぜならその子供は『私』だったから。畳を引つ搔く音は、その子から発せられていた。映画でよくあるカメラワークのように、ぐるりと視界が回る。丁度真下、女の子の顔を見下ろすような位置で、止まった。

女の子は顔を真っ赤にして、左手で首を締める女の手の平をひつき、もう一方の手で逃れようと、畳を搔いていた。

——カリツ……ガリツ

畳を搔く音がやけに耳につく。

『おか……さ……』

女の子の口から懇願するように零れ落ちた。

これが『私』なのだとしたら、見えるハズのない光景で、しかし、記憶と照らしあわせ、現実とそう違いはないだろうと冷静に判断する。

鬼のような形相で髪を振り乱し、女は——と言った。

パチンと、シャボン玉の飛沫が弾けるように覚醒した。

夢が続くようなカリカリという音に身を起こすと、視界の端でチユツと鼠が鳴き、割れたコンクリートの隙間から逃げていった。サクレだった畳がさらに齧られ、見るも無残な姿を晒していた。

視界を反転させると、木の格子が目飛び込んでくる。

夜王城の地下に位置する、座敷牢だった。立派なのは格子だけで、敷かれた畳はところどころ腐り、ささくれ、カビ臭い。木と木の隙間から外を見ると、左から右へ、打ちつばなしのコンクリートで出来た通路が続いていた。飾り気のない裸電球がポツリポツリと付いている。

鴨ちゃんと別れたあと。

店から連れだされた私は、そのまま裏路地へと歩を急かされる。迷路の様な薄暗い道。奥へ奥へと進む先は、まるで地獄へと続くようだった。

事実——腐ったゴザに埋もれるようにして笑い続ける女。生死の判別のすらつかない枯れた老人。びちゃびちゃと、錆びた配管から漏れた汚水が地面を汚していた。泡沫うたかたの夢から覚めた、吉原の現実がそこにあつた。

死体が一つ増えたところで誰も気にしないだろうな、と思った矢先。慌てた様子で、一人駆け込んでくる。格好から、百華の一員だろうと推測した。

その人が何か耳打ちしたかと思うと、とたん月詠さんは表情を険しくし、私を部下に預け、その人と共にどこかへ行ってしまった。

そして、残された者達により、私は、打ち捨てられるようにここに押し込められた。トラブル発生の為、処分を一時保留した——という事か。

「てつきり人目につかないところでこうグサツと——」

「始末されるとでも思ったか」

残りを引き取ったのは、月詠さんだった。右手から歩いてきた月詠

さんは、牢の前で歩みを止める。

「まあ……。あつ、情報を引き出すための拷問でも？ 鞭打ち、木馬、蝋燭責め……。はい！ はい！ S Mプレイは初心者なんで、ソフトな物からお願いします！」

「たわけ」

正座して、シユタツと手を挙げた私に、月詠さんが形の良い眉をヒクリと歪める。

啜っていた煙管を手にとると、ふうと煙を吐いた。カシャンと、牢の隙間から鍵が投げ込まれる。

電球の光に反射して煙管が鈍く光り、間延びした私の顔が写っていた。

「??」

「これから騒ぎが起こる、その混乱に乗じて逃げよ」

投げ込まれた鍵を手に取り、訝しげに首を傾けた私に、月詠さんがそう言った。

「何が起こるんですか？」

「ぬしの知るところではない。己の身だけ心配しなんし。逃げろとは言ったが、その後は関知せん。地上までの道は遙か遠い——それはもう酷くな」

意味を問う前に、「牢から出たら、三番目の角を右に真っ直ぐいきなんし」そう背を向け、月詠さんは行ってしまった。

手の平に残された鍵を見つめる。さてはて——月詠さんは『何をするつもり』なのだろう？

ただ寝てたという訳ではない。一応の情報は拾っていた。

私が拘束されたのと時を同じくして、晴太君が何者かの手引により、春雨——神威の元を脱走した。程なくして捉えられたが……。手引した人間は日輪さんを慕っていた花魁の一人だった。その人は、虫ケラのように呆気無く殺された——百華の手により。月詠さんではない、彼女が手を出す前に終わってしまった。

そして——晴太君は再び逃げることないよう、神威等の手の中、奥へ仕舞い込まれてしまった。子供だと思って舐め……。いや、面倒臭

かったのだろう。手を抜かれていた以前と違い、それこそ鼠一匹逃げ出せないような警戒態勢の中、捕らえられている。神威は——春雨は吉原を諦めていない。

物語は今後どう進むのか？ 万事屋に晴太君はこなかった。阿伏兎は義手を手に入れた。それに月詠さんの何か覚悟を決めたような態度。私に対する行為が、罪滅ぼしのようにも見えた。

牢の間から手を伸ばし、鍵を開ける。キィと耳障りな音を立てて戸が開き、腰を屈めそこをくぐった。

薄暗く続く廊下の先。

三番目の角を素通りし、奥へ奥へと進む。

間違つても天国には続いてないだろうとボヤキながら、上へと伸びる階段を登っていく。やがて、爆音や、悲鳴、怒号が響いてくる。焦げ臭い匂いに鼻をひくつかせた。

どうすべきなのか、何をどうしたら良いのか。速度をあげる。

酷い有様だった。

「あーあーあー……おねーさーん生きてますかー、死んでますよね、そうですね」

ポツカリと腹に風穴を開けた人間。転がる腕、足、飛び散る、血、血、血。

どこも生臭くていけなかった。

騒ぎは右手、左手と、攪乱するようになるところで起こっていた。決死の覚悟で晴太君を連れだそうとした花魁に感化され、引き起こされたクーデター。首謀者のトップは月詠さん……か。

だが、どう鼻肩目に見ても——形勢は不利だ。現実的じゃない。

「こんな見せかけだけの桃源郷てんごく、嫌になっちゃいますよねえ」

しゃがみ、恨めしげに見開いていた目を片手で閉ざす。

網膜に直接映しだされるような映像を元に、命がけの鬼ごっこに興ずる月詠さんと合流することとした。

「くっ……」

振り向きざまにクナイが放たれるが、開いた傘に阻まれ撃ち落とされる。

「吉原で遊ぶならもつと粋な遊びに興じたいとこだが、悪いなあ、こつちも商売なんぞでなっ」

振り下ろされた傘を横転し、避ける。その一撃は破片を飛び散らせ、床板に酷いひび割れを作り出す。

月詠さんを追うのは阿伏兔。

私は、柱に突き刺さったクナイを引き抜き、そして、遠く、廊下の先にいる阿伏兔に狙いを定め——打つ。

「……つと、なんだあ？」

阿伏兔は半身を反らし、眼前のクナイを見送った。

「その腕、労災保険降りた？」

体を捻りこちらを振り返る阿伏兔へ問いかける。

「あん？ お前はあの時の……」

「月詠さん、今のうちに」

何かを思い出したような阿伏兔の背後で、険しい表情を浮かべ臨戦態勢を取る月詠さんを促す。

「一人で相手しようってか？ おいおい、そりゃあちよつと人生を甘くみすぎだぜ……アンタもなっ」

阿伏兔の気が逸れた隙をつき、特攻をかけた月詠さんだったが、腕を取られ、抑えこまれる。

「ぐっ……あああああ」

阿伏兔の手が月詠さんの頭を握りつぶさんとばかりに締め上げる。持ち上げられ、月詠さんの足が空をかいいた。

——バギャンツツ

金属片が舞う中、拘束から抜け落ちた月詠さんを抱きとめる。

阿伏兔はバチバチと火花を散らす義手をしばらく不思議そうに眺めていたが、不敵に笑うと、ガラクタと化したそれを付け根から引きちぎり、放りなげる。

「やってくれんじゃねーか」

殺意を滾らせた阿伏兔に肌をチリチリと焼かれる。

「悪いね、源外さんところにもつかい頼むんだつたら安くなるように口ききしてあげるから、許してくれない？ 月詠さんは貸し一っことで、利子膨らむ前にちよつと頼みを聞いてくれないかなあ」

「……何を」

月詠さんは痛むのか、苦しそうに眉を顰めながらも、戦意で尖らせた瞳を油断なく阿伏兔に向けていた。その瞳を一瞬こちらへ超越す。

「ここは任されてあげるから、晴太君を日輪さんに会わせてやってくれないかなあ」

我ながら他力本願な物言いだと思った。その言に、月詠さんは忌々しく顔を歪める。

「……この状況でそれをいうか。地上へ逃すこともままならんというのに」

「そんなこと言わないでよ、いい女は無粋はいわないもんでしょ？ そっちの誰かと違つてっつ！」

次々と繰り出される暴風のような強襲をいなす。絶え間なく襲い狂う、フェイント、本命である回し蹴りからの、脳天を狙ったかかと落とし。

「人が話してるときは割りこんじゃいけませんってお母さんに習わなかったの？ 阿伏兔ツツ!!」

どてっぱらに掌底をまともに受け、もんどりうった阿伏兔は三部屋の襖を巻き込み、沈黙したかのように見えた——が、破片をばらばらと撒き散らしながら身を起こす。

「どう考えても、戦場のど真ん中でくつちやべってんのが悪いだろ……つっても返り討ちにあつてりゃあ世話ねえがな。アンタ何モンだ？ ここの連中とは随分、毛並みが違うようだが」

首をコキコキ鳴らしながら立ち上がる姿は、大したダメージを受けたようには見えなかった。さすが歴戦の夜兎……不死身か。

「月詠さん」

「……あまり期待せんことだな」

気配が離れていったことを確認し、向かい合う。

「意外。素直に行かせてくれるなんて」

「白々しい。追いかけてさせる気なんてこれっぽっちもねーだろ。前言撤回するぜ、甘く見過ぎてたのはこっちの方だったみてえだ。鼠の一匹二匹いったところで鼠捕りに引っかけたって終わりだ。それよか、アンタを団長のとこいさせる方がやべえ……折角寝かせつけたモンが起きちまいそうだ」

「勃っちゃうって？ いい女だものしよーがない」

「団長の趣味はしらねーが、俺から言わせて貰えば、いい女と呼ぶには色々コンパクト過ぎる」

貫手、二本の指が、目をえぐりにくる、腕を払い、避ける。一蹴りで柱を折り、拳が木片を粉碎する。背にしていた欄干を乗り越え、階を下る。阿伏兔が迫る。空中での乱戦、絡み合い、階を二、三飛ばし、地面に激突。足が首に回る。外す間もなく、持ち上げられ、叩きつけられるッ！

床材がまるで飴細工かのように飛び散り、もうもうと埃が舞う。追撃が――迫る。身を引き起こし、逸らし、いなし、隙について回し蹴りを叩き込む。

体をくの字に折り、阿伏兔が吹き飛んでいった。

「痛っつ……くっつそつ、あーあ、一張羅が台無しじゃねーか」

畳がひっくり返り、座布団やら、布団やら、衝立やら、盛大に散らかる部屋の中心で、阿伏兔が後ろ手について体を起こす。

折れ飛び散った障子戸の一部が、背中の方から肩に突き刺さっていた。それを、手を回し引き抜き、放り捨てる。

「もう少し評価を上方修正した方がいいんじゃない？ 希望的観測は身を滅ぼすよ。身の程弁えて引いてくれないかな？」

「冗談。確かにアンタはつええが、そんだけだ。足りない」

落ちていた傘を拾うと、阿伏兔は唸りを上げて上段からそれを振り下ろす。目の前を暴力的な風が通り過ぎていった。

「足りないって何が？ 色気？ ああ、なるほど。健全な少年誌の限界はこのぐらい？」

応酬に次ぐ応酬。突き出された傘。腕を取り投げ飛ばし、間合いが

離れた隙をついて、捌きにくい着物の裾を引きちぎり、身を軽くする。くるりと回り、下品にならない程度の丈である事を確認する。

「はっ、ちんちくりんが多少露出上げたところで、色気もクソもねーだろ。アンタに足りないモノは——絶対的な恐怖だ。アンタの攻撃からは、生命の危機つてのをこれっぽっちも感じやしねえ。そんなんで、夜兎を殺せるか？ 兎どころか鼠一匹殺せやしねえ。むしろ鼠の方が怖えぐらいだ。危機に瀕した動物つてのは予想外の力を発揮するもんだからなア！」

離れた間合いを一気に詰め、横薙ぎの傘、続けぎまの回し蹴りをかき、避ける。足払いを狙った蹴りは、スカされ、体勢が崩れたそこへ、突き刺すように傘が降ってくる。両手で先頭を握り、眼前で止める。

力勝負で押し負けた阿伏兎をそのまま持ち上げ、振り払うように——一寸前、自ら傘から手を離し、飛び降りた阿伏兎は距離を取る。

手の中に残った傘を阿伏兎へ、放り投げる。思わずと言ったように受け取った阿伏兎は、何を考えてるんだと、眉を寄せた。

そんな阿伏兎へ告げる。

「恐怖が足りないか、確かに——そうかもしれない。でもそれで十分なんだよ。私の目的は殺す事じゃない。足止めだ」

「おいおい、んな呑気な事言つてていいのか？ アンタのお仲間が向かった先にああ、とびつきりの化ケ物がいんだぜ？ みすみす仲間を犬死させる気か？」

「いいんだよ。化ケ物がおとなしく檻に入つてると思う？ 阿伏兎」

バキリと、破片を踏み潰すような音がした。

「なーんか派手な音が聞こえてくると思つたら、おもしろそーな事してんじゃん。俺も混ぜてよ」

振り向くと、笑みを浮かべたとびつきりの神威バケモノが立っていた。その笑みは、どっかの誰かにどことなく似ていた。

夜兔を追うものは殺される

後頭部に垂れた三つ編み。黒い中華服に身を包み、にこにこ人好きのする笑みを浮かべたこの少年が、悪逆非道の宇宙海賊春雨、その第七師団の団長だとは誰も思わない。

頭が痛いとはかりに、眉間を揉んでいた阿伏兔だったが、溜息をつく。

「団長、アンタあのガキどうしたんですか」

「ああ、アレね。ビービー煩かったし、丁度良い子守が現れたんで預けてきた。泣きわめくしか能のないガキって嫌いなんだよね」

「オイ、人の苦勞をなんだと……ああ、くそっ……。いや、俺が悪かった。団長に子守なんてもんができると思ってた俺が悪かった。はあ……帳尻をどう合わせようかねエ……」

悪びれない台詞に、阿伏兔は情動を押さえるように頭を掻きむしり、もう一度深い溜息をついた。

それに神威はしれつと言いつつ。

「そっちは阿伏兔に任せるよ。面倒くさい事も嫌いなんだ」

「誰がその面倒を増やしていると思ってるんだ！ このすつとこどつこい！」

無責任極まりない神威に対し、阿伏兔はギリギリと拳を握る。

それを馬耳東風とばかりに聞き流した神威は、前屈を二三繰り返して、一度跳ねると、楽しそうに笑った。

神威の言葉に嘘はなかった。月詠さんは晴太君の手を引き、廊下を走っていた。鳳仙に組みする者共が行く手を阻むが、その度に方向を変え、牽制し、倍の時間をかけて頂上を目指す。

鳳仙は——映像が切り替わる——吉原の夜景を肴に、物見台のように張り出した露台で盃を傾けていた。ゆるりと立つ。向かう先は——

豪腕が唸りをあげ、迫る。それを掴む。

「神威、あんたじゃ私に勝てない」

「……………」

拳を、蹴りを、受け止め、掴み、離す。ただそれだけを繰り返す。最初は楽しそうに笑っていた神威だったが、やがて笑みは消え、苛立ちが浮かび、表情が消える。そんな癖も、神楽ちゃんにそっくりだった。「阿伏兔が言ってた、私には恐怖が足りないって。強き肉体と、強き魂を兼ね備えた人間を強者と呼ぶなら、私は強いだけの人間だ。今の君が望む『最強』という名はあげられない」

「随分と知った口を叩くね。それに、舐めてるの?」

拳を双方掴み、膝打ちを膝打ちで相打ちにし、回し蹴りが腹に突き刺さるが、一歩足りとも引いてやる事はできなかった――。

やがて手を使い尽くした神威は攻撃を止め、棒立ちになる。

「神威、引いて欲しい」

「俺では不足とでも?」

「違う。これが私の底だ。神楽ちゃんを知ってる? きつと君の知る彼女よりも、大きくなったよ。姿だけじゃなく器も。私は、彼女に救われたんだ。だから私はアンタに拳を振り上げる事ができない。真正銘、これが私の限界だ。だから拳を収めてくれないか? これは脅しじゃなくて、懇願だ」

「なんだ……とんだ期待はずれじゃないか」

こちらを見据え投げつけた言葉は、失意の音を持っていた。戦いの意味を無くしたのだろう。酷くつまらなさそうだった。

そこに割って入ったのは今まで傍観に徹していた阿伏兔だった。

「おいおい……そりやあねエだろ。こんだけ掻き回しておいて、敵対する意思はねエって言ってるのか? その上で自分のやりたい事だけ押し通すって、どんだけだ」

「海賊が道理を説くの?」

「そりやそうだが。はいそうですかって引く訳にもいかねエだろう」

「いかないの?」

「いかねエ……なア」

「日輪さんと晴太君がお茶する時間をくれって言うただけだよ? いかない?」

「それだけで済みやあな」

「済むよ。それ以上は私の手に余る」

そう、余るのだ。

その言葉に、ふむ。とアゴに手をあて阿伏兔は思案するが、すぐに顔をあげ首を横に振る。

「ダメだダメだ。鳳仙^{ジョウセン}が機嫌そこねりや、折角取り付けた約束も反故にしかねない。んなバクチ、御免こうむるぜ」

やはり素直に引く訳にはいかないか……。あーあ、面倒くさいなあ
と溜息を一つつく。

押してダメなら押し倒せ？

「じゃあ、こうしよう。鳳仙の代わりに、私があんた達と交わした約束を履行する」

「そりやどういう意味だ」

訝しげに、阿伏兔が眉を寄せる。

「あんた達は、吉原の金と権力が欲しい。そうでしょう？　なら私が代わりに鳳仙から吉原を買い取って、それを提供しようじゃないか。そもそもおかしいと思ってたんだよね、吉原^女桃源郷^国のトップが筋肉マツチヨのご老人なんてさ。やっぱ女心つてのは女にしか分かんないよ。そーいうものじゃない？」

私の答えに、阿伏兔が怒気を滲ませる。

「……ここまで人生舐めてる奴ア俺は初めて見たぜ。アンタ自分が何を言ってるか分かってんのか？」

それに、「分からないよ」と返答したくなる口をつぐむ。

阿伏兔は、鳳仙から吉原を買い取ると言った私の言葉を、法螺だとか、夢物語などという言葉で否定しない。先のやり取りで出来ると踏んでくれたのだろう。

だが、同時に私の甘さも正しく認識していた。兔の尾を踏んだか。硬直状態で睨み合う中――。

「おもしろいじゃないか。いいよそれで」

「团长!!」

神威が同意するように手を打った。それに阿伏兔は非難するような声を上げる。

それを無視して神威は続ける。

「つまらない仕事はとつと終わらせるに限るよ。それに、おもしろそーな見世物の特等席もくれるっていうんだ。乗らない手はないでしょ」

「オイ、コラ勝手に決めんな！」

「こつちだよ」

リスクとリターン。それを考え、同意するのであれば阿伏兔の方だと思っていた。それが蓋を開けてみれば、先導するのは神威で、俺アもうどうなつても知らねーぞとぼやいているのは阿伏兔だった。

本当、現実というのはままならない。

象と蟻。そう例えたのは誰だったか。

日輪さんが閉じ込められている分厚い扉の前で、月詠さんが晴太君を庇い、鳳仙と対峙していた。

「もう気はすんだか。夢というものはいつか覚めるものだ。敗者は敗者らしく鎖に繋がれていれば良いものを。今一度問う。再び鎖に繋がれるか、それともそこで永遠に覚めない夢をみるか」

「……ぐっ」

月詠さんの戦装束は血に染まり、右腕をやったのか、だらりと垂らし、利き腕でない手でクナイを握る。その目は既に——己の敗北を悟っていた。

「最後を美しく飾り付ける方がいいか、最後まで美しく生きる方がいいか——敗者にはその選択肢すらないときだ。現実つてのは随分世知辛いもんですね」

私の声に鳳仙が振り向く。深く刻まれた皺、白銀の髪は、老いた狼を思わせた。

「神威——お前の客か？」

「違いますよ。あなたに用があるというんで、俺は道案内をしたただけです」

「ふん、口だけが達者になりおつて——回りくどいことはいい、何用

か」

問われたので端的に応える。

「吉原を買いに来た」

瞬間。ぞくりとする笑みを浮かべた。

見るもの全てを支配下に置くような、反射的に命乞いをしたくなるような、笑み。

ともすれば、好好爺然こうこうやぜんとした、俗人的にも見えた鳳仙だったが、皮が破れ、血塗られた夜の王が顕現けんげんする。

「冗談にしては面白くないな。この吉原くくにを買うと？ 女でも酒でもなく、この吉原くくにを買うと？」

冷気のようなものが這い寄る。神威と阿伏兔は涼しそうな顔をしているが、月詠さんの手に持つクナイは細かく揺れ、その後ろの晴太君は座り込み、ガチガチと歯を鳴らしていた。

私もできればそうしたい所だが……。

「もう一度言う必要があるの？ それとも耳が遠くて聞こえなかった？ ご老人」

——爆発。

凍てつくような殺気から一転して、魂ごと消滅せんとばかりの熱波が襲う。

振り下ろされた傘の衝撃は、私という存在を押し潰し、足元の床材を巻き込んで、二段、三段と下の階までをも貫いた。

それを受け止めた私に鳳仙は目を見開く。

「……………」

「対価は私の命をもってと言いたい所だけど、それでは買った商品の行方がなくなってしまう。代わりに望むモノを——」

「ふんっ！」

横薙ぎに払われる。まともに受けたのならば吹き飛ばしかない一撃を躲す。

「酒、女、金」

商品を並べ立てる私の言葉。攻撃は止まない。

「太陽にも乾かない肉体」

ピタリと眉間に傘が突きつけられ止まった。

「痴れ言を……」

「嘘じゃない」

突きつけられた傘、その一点から死が這いよる。閻魔の前に突き出された罪人にでもなった気分だ。背中にじんわりと脂汗が流れる。

脳髓を浚うように見つめていた鳳仙だったが、突然笑い出す。

「フハハハハハハッ！ 身の丈を弁えぬ愚かな小娘かと思いきや、狂人か？ 物狂いか？ この鳳仙に施しをなそうなどと——笑止！」

『施し』その言葉に、冷水を浴びせられた。

はっとした次の瞬間に飛んできた一撃をかわし損ない、壁に叩きつけられる。その隙を逃すまいと攻撃が浴びせられる。

頭を捕らえられ、何度も壁に叩きつけられる。鉄の塊であつたとしてもひしやげ飛ぶような一回。それが繰り返された。

たまらず、転移した。

「ゲホッ……ガホッ……」

三半規管をやられ、立つことすらままならず、膝をつきその場に吐き戻す。

主人から離れてもなお、握りつぶさんと怨念のごとく張り付いた腕をはぎ取り、血で汚れた顔面を袖で拭った。

鳳仙を見れば、転移に巻き込まれもぎ取られた腕など気にする事もなく、目を血走らせて、獲物を探していた。くるりと振り返り、目が合った瞬間——。

それからは言葉など交わす暇もなかった。執拗に、執拗に、相手を喰らう事しか能のない獣のように、思考は全て相手を喰らう為に、三肢は欠けた痛みを相手にも負わさんと——。

気がつけば、鳳仙が血まみれで横たわっていた。

必死だったのだ——言い訳にしか過ぎない。精神は物理を超える。絶対的な安全地帯を侵される恐怖——。

負けたとは言いたくない。だが、勝負には負けたのだ。

足を折られ、腕を潰され、骨が見える程に深手を負い、だが爛々とねめつける双眸は戦う意思を失っていないかった。

「鳳仙、私は奪いにきた訳じゃない」

「ふっ、盲目の……娘よ。己の手を見るがいい……血に塗れた腕を。奪い合わず……どう得るといふのだ」

「……………」

荒く息をつき、食いしぼる齒の間から鳳仙は真実を告げる。

一つのりんごをまるっと欲しがると子供同士が分かち合うことはない。それを成し得ない人間が吐き出す言葉など綺麗事に過ぎない。

だから鳳仙は言う。

「殺せ」

「まだ貴方は負けを認めていない」

「認めぬよ、死んでも認めぬ。己の綺麗事を確信したまま……殺せ」

それが礼儀だと、己の罪科だと、そういうのだろう。

だが、ここが吉原である限り、私は負けることはできない。

「殺さない。再び奪いにきて、その時はきつと——」

——血が飛び散った。

パシャパシャと、顔にかかる血しぶきに、一瞬何が起きたのか分からなかった。

空から降ってきた番傘が、鳳仙の頭を穿ったのだ。急所を一発で、躊躇なく。

上を見上げると、神威が傘を振りぬいた格好でニッコリ笑っていた。

「神威いいいいいいいいいいいいいい!!」

吹き抜けを最上階まで一気に跳躍し、怒りのまま拳を振り上げた。振り下ろす瞬間——幻影を見た。

「残念」

咄嗟に逸らした一撃は、空間を穿ち、その衝撃波で建物の一部を吹き飛ばす。

落ちる。飛び上がったのだから当然だ。

遠く離れていく中で、神威が呟いた言葉を聞いた。

フエイタルチルドレン

戦闘の傷跡が生々しく残る廊下や階段を突き進む。私がそこへ辿り着いた時には、神威は既にその場を立ち去っていた。

月詠さんは晴太君を庇いながら扉を背に、構えを解かずにいる。

「阿伏鬼」

牽制する。

「そんな怖い顔しなさんな。これでも『ビジネスは誠実に』をモットーとしてんだ。おたくが約束を守ってくれる限り、手は出さねえよ」

「アンタの上はそうでもなかったみたいだけど？」

べったりと粘ついた^{おわり}澱が口から溢れ出るようだった。

上の尻拭いをするのが下の役目だというのなら代わりに――。そんな愚にもつかない言葉が後を追って飛び出そうになるのを堪^{こら}える。

阿伏鬼は耳に突っ込んでいた小指を顔の前にもってくると、ふっと吹いた。

「団長が殺らなきや。俺が殺ってた。そうじゃなきやあるいは――。自ら幕を引くつてのも悪かねえがな。どの道、結末はたいして代わりやしねえだろうさ」

どくんと心臓が跳ねた。皆、間違ってる――咄嗟に思い浮かんだ言葉は、自己弁護に過ぎない。

「……………」

「いちいち睨むんじゃねーよ。夜鬼つてのはそういう生きもんなんだよ。だからアンタは甘いのさ。ま、団長はあわよくばと思つてたかもしれないねえが、それこそオマケみてえなもんだろうよ。これに懲りたら、中途半端な覚悟で大人の世界に首突っ込むのは止めるんだな。次、首搔っ切られるのは、そのガキかもしれねーぜ。これはビジネスパートナーからの忠告だ」

痛み入る。そう返した声は掠^{かす}れていた。甘いのは分かつていた。だが、知らない事を知らないのだ。それを身につまされる。何を以って美しい生き方とするか。その認識が違えば、無様に散らせるしかない。甘い。全く以^もつてその通りだった。

すれ違い様、私にしか聞こえない声で「三日後、上の店で」と言った。上の店。阿伏兎と私が知っている店といえば『からくり堂』のことだろう。そう言えば、口利きをすると約束をしたのだった。

「何がどうなったのかは知らぬが、ぬしは——敵か？」

月詠さんが目の前で困ったような顔をしている。ああ、彼女はまだ何も知らないのだ。

「女の敵は女って意味ならそうかもしれない。だけど今は通して貰えるかな？」

月詠さんが身を引いた。その後ろに隠れていた晴太君は怯えるように後退る。

無理もない。

鉄芯の入った分厚い扉が、何者をも通すまいと、目の前に立ちはだかる。作らせた人間の妄執を具現化した姿に、地下の座敷牢が生ぬるく感じた。

力仕事はうんざりだったので、内側の門を外し、扉を押す。丁寧に手入れされていたのか、音も立てずに開いた。

行灯が、板張りの6畳と、そこに並ぶ鏡台や布団、衝立を照らしている。その真中で、こちらをひたりと見据え、一人の女性が座っている。高く結い上げた髪に、金の簪を幾本も刺し、品の良い朱色の着物が長く足元を覆い隠していた。

「日輪さんですね？」

確認の言葉に、日輪さんは警戒を露わにして、眉を寄せる。チラリと後ろを振り返ると、恐る恐るといった風に晴太君が部屋を覗いていた。

「……そうだけど。アンタは？」

「どっかの馬鹿の代理人です。少し、失礼します」

「ちよつと、なにをするんだい」

足元に跪き、その着物の裾を捲る。静止しようとして手が伸ばされるが、その手が辿りつく頃には、踵に刻まれていた十字の傷は痕跡を消していた。日輪さんを縛り付ける為に、夜王鳳仙が奪った羽だ。

消した後、跡ぐらいは残しておいた方が良かったのかもしれないと

気付く。夜王が藻掻き手に入れ損なつた証拠を。

「……なにをしたんだい」

確かめるように、震える指先で足の腱に触れる。続いて、足首をゆっくりと傾ける。

「日輪さん、貴方に会つたら一つだけ聞きたかつた事があるんだ」

「……あんたには返さねばならない礼がたんとできたみたいだね。私に答えられる事であればなんでも聞いとくれ」

「もし、もし子供を殺そうとした母親がいたとしたら、それはどうしてかな?」

命を賭して子を護ろうとしたこの人なら何か分かるのではないかな? と思つた。

足を撫でていた日輪さんの手が止まる。息を押し殺し、何かを選ぶように時間をかけて答えは返つてきた。

「愛憎は表と裏。どちらが本当の理由なんてわたしには分かりやしないよ。だけど、どんな事情があるにせよ、子を殺す母は、それはもう母親じゃない何かだ」

——それでも子供にとっては母親なのだ。

その言葉を飲み込む。

「答えてくれて、ありがとう。晴太君!」

「!?……な、なんだよ」

突然の呼びかけに応える声は上ずり、どことなくぎこちなかつた。

「お母さん、会いたかつたんじゃないの?」

「なんでアンタがそんな事を知つてんだよ」

「知つてるから知つてるんだよ。流石天下の日輪太夫。お茶代は少し高かつた。無駄にしないでね?」

私は坂田銀時にはなれない。朗々と語る言葉はなく、ぎこちなく歩みよる二人を置いて部屋を出る。

部屋から出たところで、腕に包帯を巻いている月詠さんと目が合った。

「ぬしはこれからどうするつもりじゃ」

「上に帰るよ。門限過ぎちやつたけど、夕飯残しておいてくれたか

なあ？ 最近、眼鏡のお母さん厳しいから」

「気をつける、ぬしが思っているよりも吉原の闇は深く暗い」

「皆して、口々に諫めにかかるのはなんでだろう？ でも、気をつける。ありがとう」

月詠さんは、顔を顰め、最後に包帯をギュツときつく絞ると、懐から煙管を取り出す。だが片手では火がつけられない事に気付き、啞えるだけにとどまる。

「火、借りる？」

指先に灯った火を差し出すと、月詠さんは臆することなく顔を寄せた。

「ぬしのそれはなんじゃ、奇術か妖術か？」

味は変わらないんじゃないかと、確かめるように煙を吐き出しながら、月詠さんは問う。

「天女の羽衣。そーいつてた人がいた。じゃあ、私本当にそろそろ帰らなきゃ。人様の家、荒らすだけ荒らして悪いんだけど、後始末お願いしていいかな？ やりくりも任せるよ。あ、でも立場私上私が責任者って事になってるから、何か揉め事が起きたら、かぶき町の『万事屋銀ちゃん』ってお店に来て」

「待ちなんし。ぬしの目的は果たせたのか？」

後ろを見る。

晴太君が懐から取り出したお金に、日輪さんが理由を問いただし、頬をひっぱたく。あまりの剣幕に泣き出した晴太君につられ、日輪さんも泣き出した。涙を流しながら抱き合う二人は、他人の承認なんてなくとも、立派な親子だった。

「十分果たせたよ」

月詠さんが紫煙を吐き、そうかと笑った。

そんな三人を置いて地上に戻れば、冷蔵庫の中にコロツケが2つ、キャベツの千切りと共にラップされ残っていた。

あの騒動から三日後。約束通り私は『からくり堂』の前にいた。

『からくり堂』からは、やいのやいのと、やり合う声が表まで響いている。何をやってるんだか……。

「オプシヨンパーツとして、超高速ドリルへの変形と、高枝切り鋏のジョイント、ついでに今なら出血サービス、この不動丸の腕もつけて、どうだ」

「ほう、そりやお得だねエなんていうと思ってるのか？ 耄碌もろろくジジイ。つか不動丸ってなんだア？」

「文字通り動かねえ失敗作のロボットだ」

「誰か消費者庁の番号を教えてください」

「ふむ、なら粗大ごみの回収費用を相殺して、こんなもんか」

「そうじゃねえ、オプシヨン全部外せ」

電卓を弾く源外さんに対し、阿伏兎はげんなりした口調で返す。ごめんくださいの言葉で二人が振り返った。

「オイ嬢ちゃん、安くするつったのはどこの口だ？ このジーさん、安くするどころか、ふっかけてきやがるんだが？」

「口利きはするけど、安くなるとは言ってない」

「……そう言われればそうだな。ジジイ、これでどうだ？」

電卓を奪って金額を提示する阿伏兎に、源外さんが難しそうな顔を一つして、奪い返した電卓を弾く。

「人の自信作を即壊したに飽きたらず、また急ぎたー、随分な話じゃねえか、こんなもんだろ」

「思ったよりも出張が長引いてな。残してきた仕事如山積みだ。とはいえ、二回目だ。こうなるハズだろ」

「馬鹿言うんじゃないやねえ、そう簡単な話じゃねえんだよ、これぐらいが妥当だろ」

それからしばらくやり取りは続き、どうにか折り合いがついたのか、お互いを認め合うような硬い握手をして商談が終わった。

「とはいえ、日程的にギリギリだな、早速仕事に取り掛からねえと間に合わねえ。まずは買い出しからだ。悪いが、店番頼了。オイ、鉄の字、行くぞ」

源外さんはそう言うと、奥にいた鉄矢さんを引っ張って、店から出

て行ってしまった。

「と、部外者もいなくなった事だし、仕事の話に移るとするか」
適当な木箱に腰掛けた阿伏兔は、足を組みこちらに向いた。

「単刀直入に言う、吉原は今後どうなる？」

「そうだな、過去の事例から考えるとまず足がかりに下つ端共が『用心棒』として店に入り込む。で、繋がった先から、薬、非合法サービス、人身売買を手がけ、まあ後は生かさず殺さずつとこだな」

腐っても海賊って事か。

「金だけで解決はできない？」

「やり方次第だが、メリツトがない。そんな面倒を押し付けるのであれば、何かしらの旨味がなけりやあなあ」

旨味、メリツト、リターン。阿伏兔が欲しい物はなんだ？ 人か？

金か？ あるいは情報は情報——例えば天導衆や元老院の。いや、違う。春雨ならともかくも、第七師団が欲しがるか？ 火の粉を撒き散らすだけだ。商品になりはしない。

ならば——。

「一回。一回だけ、どっかの海賊王を目指す馬鹿の尻拭いを手伝ってあげる。それで手を打って貰えないかな？」

ダンボールに、銅線やら、基盤やら、モーターやらをつめて源外さんと鉄矢さんが帰ってきたのは、阿伏兔が店を後にしてから、しばらくしてからだった。

「オイ、それはそつちじゃねえ。まずは、上腕部の部品を削りだしてこつちとくつつけて、違う、ガチガチにする奴があるか、そこは、そうそうだ」

「はい！ 師匠!!」

「うっせーつってんだろ！ 返事はいいからとつと手を動かせ」

鉄矢さんが火花を散らしながら部品を削り出す傍らで、源外さんは何やら複雑な配線で電子基板を組み付けていく。

割り込むのも悪いと思ったが、これ以上の先延ばしは躊躇ためらわれたの

で、懐から試験管を取り出し、源外さんに声をかける。

「忙しいとこ申し訳ないんだけど、もう一つ頼まれてくれないかな？」

「商売繁盛、貧乏暇なし。なんだ？ 無茶は程々にして欲しいがな」

「これ見て」

手を向けて、赤い液体で満たされた試験管を、源外さんに見せる。

「なんだこりゃ」

「血液」

「血液？ 俺の専門はからくりだぞ。そういうのは医者に持つていけ」

源外さんは一旦手を止めて、試験管を不可解そうに見ていたが、自分の守備範囲外の代物だと知るやいなや、しっしつと追い払うように手を振った。

「違う違う。調べて欲しいのは、血液そのものじゃない。含まれている筈なんだこれに——ナノマシンが」

「ナノマシン？」

疑わしげに、語尾を上げ、貸してみろと試験管を奪い取った源外さんはそれをクルクルと回しながら観察する。

「ナノマシンを無力化する方法を探して欲しい。出来るだけ早く」

「出来るだけ早くつつたつてな。まあいい、やれるだけやってみるさ」

「ありがとう」

用が済んだのだ。これ以上邪魔するのも悪いだろうと、引き上げようとした時だった。

「おまえさん、あんまあの男に深入りすんじゃないぞ。ありやあそうとうにヤバイ相手だ。身持ち崩すどころか、使い潰されて地獄を見るぞ」

一瞬遅れて、源外さんが言う、『深入り』の意味を察した。

「違うから。そーいうんじゃないから」

「ならいいがな。気をつけろよ」

「はいはい。じゃあ、それお願いね。絶対だから」

「あいよ」

何重にも念を押して店を出る。この世界が一周目でない事を祈り

ながら。

酒と泪と雲と月

「その様子だと無事戻ってこれたようだな」

無断欠勤に対する遠回しな嫌味を乗り越え、流れ仕事バイトを終えた後のことだった。スーパーの通用口を出たところで、見知った顔に出くわす。

銀縁メガネをかけたどことなく柔和な表情は、そう日が経っている訳でもないのに、懐かしい気さえした。

「言つたでしょう？　そう大事にはならないって」
「そうだな」

立ち話もなんだしと。ついでにおごつてやると、銀マダオさんには存在しない甲斐性を見せてくれた鴨ちゃんの後について、居酒屋の暖簾を潜る。とたん、居酒屋特有の喧騒が押し寄せてくる。

ガチャガチャと食器が触れ合い混み合う店内で、案内係を待つ間、意外だなど隣に立つ鴨ちゃんの顔を見上げる。

「なんだ」

その視線に気がついた鴨ちゃんは首を傾かしげる。

「いや、一見さんお断りな料亭とか、高級クラブとかそーい場所に来て行かれるかと思つた」

「そつちの方がよかつた……か？」

「違う違う。むしろそんなところ連れてかれたらどうしようか心配した」

「そうか」

どこかほつとした姿に、なんだか面白いモノを見た。お仕着せられた子供の逆バージョンというか。慣れない様子で、身の置き場に困っている姿が面白い。

そうして、店員に連れられ席に案内される途中。

「あれ？　キリちゃんじゃないの！　それに、先生も。珍しい」

「近藤局長。先生というのは……」

「ああ、悪い悪い。どうも癖が抜けなくてね……カモね、カモ」

鉢合わせした近藤さんは、ボリボリときままり悪そうに頬を掻き、カ

モ、カモと繰り返す。

「近藤さんは一人で？」

「いや、総悟とトシも一緒だ。良かったら一緒にくるかい？」

「それならお言葉に甘えて。いいよね？」

「ああ……」

二つ返事で了承して、鴨ちゃんと一緒に、近藤さんの後を追う。

「いいじゃないですか。元は国民から絞り取ったアブク銭なんだから。弾けさせて還元しやしようぜ」

「だったらテメエの財布だけ弾けさせりゃあいだろう、そのすつからかんな頭ごと」

「あつ！ いっつけね……そういや今日、財布忘れてきたんだつた」

「てめえ、最初からたかるつもりだっただろ」

「いやだなあ。そんな訳ないじゃないですか。うっかりですよっかり」

小上がりになった座敷にたどり着くと、襟首を捕まえようと手を伸ばす土方さんと、身を引いて避ける総悟の姿があつた。忌々しそうな表情を浮かべた土方さんとは対照的に、総悟は人を小馬鹿にするような笑みを浮かべていた。

「おお、盛り上がってるな」

近藤さん……盛り上がる方向が違うと思いますよ？ とは心の中で、机の中心に置かれた一升瓶を見つめる。

「純米大吟醸——あべつ??? なんて読むのこれ」

手に取り、くると回してみる。しかし、名前の読み方や、由来など売り文句は一切なく、代わりに、艶のない黒々とした瓶と、巻かれた金の飾り紐が、中身の品質を保証するかのようだった。

「ほう、これは……」

「知っているの？」

肩越しに覗き込んだ鴨ちゃんは頷くと、「良くこんなものが」と、睨み合う二人——間に入った近藤さん越しに、土方さんが一方的に総悟を睨んでいるだけだが——に水を向ける。

「いやね、いつも懇意にしてくださってるからって、店長じきじきに

持ってきてくれたんでさあ」

「押し付けに来たの間違いだろ。大方、仕入れたはいいが、高過ぎて誰も手が出せなかったんだろうよ」

ぶすくれた表情でタバコに火をつけた土方さんはしかし、一息つくど、こちらを見る。

「だがま、こんだけの酒だ。俺等だけで飲むにやもったいねえ。飲んでくんだよな？ もちろん」

渡りに船だと、にやりと笑う顔に、元からそういうつもりだったが、逃げられないなと顔を見合わせる。

「それじゃあ、お疲れ様です。乾杯」

近藤さんの音頭で、カチンとグラスが合わされる。いい酒は後からだど、とりあえず注がれたビールをチビツと舐める。

苦ツ！ 良くもまあみなさんこんなものを飲んでいられるモノだと、盛られた刺し身に箸を伸ばし、騙し騙し消化していると――。

「そういや、近藤さんが呼んだのか？」

土方さんに話を振られる。

「呼んだというか、たまたま会ったから、誘われただけだよ」

「こいつも一緒にか」

行儀悪く、土方さんは鴨ちゃんに箸を向ける。

「そうだけど……？」

「ふくん」

何？ そのにやにやした顔……。何を想像したのか予想はつくが、否定が肯定の意味になりかねないので、声を荒げたくなるのを堪える。

そこに、やり取りを見ていた総悟が割り込んでくる。

「気持ち悪く煮崩れた顔を止めるか、副長止めるか、いつそのこと副長の座だけ残して溶けて消えてくれやせんかね」

土方さんはそれに、何か言い返そうとして、結局何も思い浮かばなかったのか、チツと舌打ち一つで、タバコを灰皿に押し付ける。

ナイスだ総悟！ 心の中で拍手を送りながら、チラリと鴨ちゃんを見る。机の向こうで、近藤さんに酒を注ぎながら、照れくさそうに

笑っていた。生憎と、二人の声は周りが煩くて聞こえなかった。

土方さんはあまりつまみが必要としないタイプなのか、箸を手元に置いたまま、杯だけを重ねていく。総悟が手を伸ばし、唐揚げにレモンを絞る。タバスコを仕込まれる前に、横から箸を伸ばしつまむ。うまつ！

どうにか半分飲み干したグラスを置くと、その隣に空になったグラスが並べられる。

「総悟、注ごうか？」

「お、悪いな」

手酌でビール注ごうとしていた総悟に手を差し出す。するとそのまま、茶色の瓶はこちらに渡ってくる。

水滴が浮いた瓶を見よう見まねで傾けると、にゅつと伸びた口からとぽとぽと、金色の液体が零れ落ち、飾り気のない寸胴のグラスに注がれ——アレ？

「うわっ、おしぼりっ!!」

総悟の悲鳴と共に、泡が盛り上がるように膨らんでいったかと思うと、ダバアつと縁を越え、さながら堤防が決壊した川のような勢いで、机上に広がる。バタバタと四方から投げ渡されたおしぼりが土囊の様につまれ、机の端から零れ落ちる寸前、惨劇は食い止められた。

「……………」

手を伸ばし、おしぼりを抑えながら、総悟が恨めしげに見上げてくる。

「ごめんごめん」

手を合わせ頭を下げると、「下手くそ」という悪態一つで許してくれた。

雑に、おしぼりの山を脇に避けた総悟は、グラスの底に残ったビールをすする。顔を顰め、至極不味そうな表情を浮かべていた。

ビールというのは、そもそもがまずい飲み物なのだという言い訳を心の中にしつつ、店員を呼び、おしぼりを変えて貰う。ついでに『鉄板とろとろチーズオムレツ、プロバンス風味』という、なんとも食欲をそそる一品を頼む。

そう言えば、よく聞くが『プロバンス』ってどういう意味だろう？
聞けば良かった。チビリとグラスを傾ける。ほらやっぱり苦い。
程なくして運ばれてきた、熱々の鉄板に乗ったオムレツを独占しな
がら食べていると、総悟が横から箸を出してくる。

——ガチッ

それを箸で受け止める。

「いいじゃねえか一口ぐらい」

「嫌だね。食べたいなら自分で頼めばいいじゃん」

「俺ア、それが食べたいんでイ」

「小学生か！」

「じゃあ、いらねえ。そんな、牛の乳が腐ったモンを混ぜた食べ物、食
うやつのがしれねーや」

「ふっ、愚かな。この熟成されたチーズと半熟卵の奏でる二重奏を理
解できぬとは」

「……などと考えたのは過去の話。隙あり！」

「だが甘い！」

それから二三応酬の後、一步も引かない私に折れた総悟が、店員を
呼びつけ追加で注文する。

「そろそろいくか」

頃合いを図っていたのか、区切りの良いところに打たれた土方さん
の言葉で、瓶の蓋が回される。

酌しようか？ と手を伸ばしたが、その上を素通りして、鴨ちゃん
が皆の分を注ぐ。——解せぬ。

目の前。グラス半分に注がれた、透明に透き通る液体。花ともフ
ルーツともつかない、だが優しく柔らかな甘い匂いが鼻に抜けてい
く。恐る恐る舌をつける。

「あ、これは意外に」

コクツと飲むと、喉の奥で蕾が開くように開花する。だが、それは
しつこく残る事もなく、程よい余韻を残して溶けていった。これは好
きかもしれない。

「お、いい飲みっぷりじゃないの。もう一杯いつとく？」

「いくー！」

空にしたコップを突き出せば、局長自ら酌をしてくれる。良き身分だ！

「おい、近藤さん」

「硬い事言わない。ほら土方さんもかんぱーい！」

止めに入る土方さんに無理やりグラスを持たせ、カチンと合わせる。

「お前、酔ってるだろ」

「んー。少し？」

そう言えば、体がフワフワするし、なんだかとても愉快だ。なるほど、酔っているのか私は！

ケラケラと笑いが止まらなくなる。

「これどうすんだ……その辺にしておけ」

「やだあー、土方さんのケチい、総悟おー、土方さんが私のお酒取るのぉー」

「土方の奴はいつもそうだ。肝心の場面でケチくせえ、その点俺は違うぜ？ ほら、飲めよ」

「やったー、総悟大好きー」

けちくさいマヨネーズ野郎を押しつけて、総悟がお酒を注いでくれる。

「くそ、俺は止めたからな。シラフになった時、自分の言動に身悶えろ」

「土方。キリ君、酒は強いのか？」

「知らん」

心配顔で鴨ちゃんが机を回り込み近づいてくる。乾杯とグラスを掲げれば、ノリ良く付き合ってくれる。なにがどうという訳でもないのだが、総悟が面白い。

気持ち良くグラスを傾けると、喉の奥で花が咲く。雰囲気に乗せられ、ますます気持ちが悪くなって、酒が進み……………。

気がつけば、体が揺れていた。ぽかぽかとした体に夜風があたつて気持ち良い。どうやら誰かにおぶわれてるようだ。

まだ少しふわふわする体でバランスを取りながら身を起こす。最初に視界にはいったのは、総悟の髪より一段色の薄い、跳ねた後頭部。

「気がついたか？」

「んー……鴨ちゃん？」

視点が定まらないまま返事を返す。

どうやら寝てしまったみたいだ。途切れ途切れになっている記憶を繋ぎあわせ……そのまま頭を壁に打ち付けたくなる衝動を堪^{こら}える。お酒って怖い……。

そんな私の葛藤を知ってか知らずか、鴨ちゃんは首をよじりこちらを見る。

「気分は悪くないか？」

「大丈夫……。それより他の皆は？」

おぶってくれる鴨ちゃん以外は見当たらなかった。

「近藤局長もそうとうに酔ってたからな。沖田君と一緒に土方が連れて帰ったよ」

「そーいえば、何か衝撃的なバナナ的な何かを見たような……？」

「忘れた方がいい」

溜息混じりの口調は、既に悟りを開いた人間のものだった。

だが、モザイクのかかった記憶に、アレに比べれば己の醜態など瑣末な事だと気を持ち直す。

ゆらゆらと揺れる背中に頭を預ける。再び寝落ちてしまっそうだ。

アクビを噛み殺しながら、流れる風景に目をやる。へんてつもない木塀、時折、電信柱とすれ違う。街頭はないのに、道は明るい。空を見上げると、ふっくらとした月がかかっていた。満月まであと少し。

「なあ……」

「んー？ なーに？」

溜息のようにも聞こえる、ともすれば聞き落としそうだった。ちゃんと聞き取った事を伝えるため、返す。

「君は……天女か？」

場に沈黙降りる。

「ぷっ……ぷっ……ぷっ……、鴨ちゃん……天女って！ 天女って!! まるで僕のために舞い降りた天女のようなだって？ あれ、これ口説かれてる？ さては鴨ちゃんも酔ってるでしょ！」

バシバシと鴨ちゃんの肩を叩きながら、体を揺らす。はつきりと目が覚めた。

「……『酔っているよ、君に』とでも言えればいいか？」

「そー言えばいいよ」

あーあー。つまらない。折角楽しかったのに興醒めだ。体を逸し、空を見上げると、焦った声と共に、鴨ちゃんが腕に力を込める。

「危ないから大人しくしてくれ」

「鴨ちゃん……。鴨ちゃんはさあ、どこまで知ってる？」

『天女』その単語に行き着いたのならば――。鴨ちゃんは苦々しくその口を開く。

「昔、この世界は多重構造になっていると唱えた学者がいたらしい。具体的な仕組みまでは理解できなかったが、上位の層から下位の層へ物質を移動させ、その時に生じる位置エネルギーを流用した対天人用兵器。そんな攘夷戦争時代（過去）の異物がまだ生きていたとはな……」

何度も実験が繰り返され、失敗し、実現しなかった、一人の男の夢

――『天ノ羽衣計画』

三次元が二次元よりも高位に存在するなんて、妄言だ、ばかばかしい夢物語だと捨て置けば良かった。

だが、打ち捨てられた研究を『今』になって拾い上げた人間がいた。

――田宮厭衛門。

金を注ぎこみ、干からびた研究を復活させた人物。それは転換時に発生するエネルギーを利用した爆弾を開発するに至った。

初の実用実験。それが行われたのは私がこの世界に落ちるとの丁度同じ頃。

「テロ。あったんだって？ ビルが爆発して多数の死者が出た。過激派攘夷グループは捕まり、事件はそこで終わった。真相なんて知らないよ。証拠もない」

あの時、攘夷浪士が潜伏していた場所に存在していた資料はついでに奪い、燃やした。他にも二、三実験施設があつたがそれも不幸な出来事があつて、吹き飛んでしまった。

天網恢恢疎にして漏らさずとは良く言ったものだ。

「君は……」

「だから、鴨ちゃんもしらんぷりしてたらいい。私だつて知らない。誰も知らないことは存在しないのと一緒なんだよ？」

ゆらり、ゆらり。足を揺らす。鴨ちゃんの体に合わせ、揺れているのか、振り子のような足に共振した鴨ちゃんが揺れているのか。

「……帰りたくはないのか」

「帰れないよ。羽衣を奪われた天女は帰れない。知らない？」

「……済まなかつた」

ああ、嫌だな。もうちゃんと自分の中で終わらせたのに。燻った残り火が、他人に飛び火する。

ちゃんと月は綺麗だし、お酒だつて美味しい。江戸は楽しい。それでいいじゃないか。病室には何もなかつた。こんな温かな背中も、酒を注いでくれる手も、それを止める腕も、一緒に笑ってくれる友人もいなかった。

ならば、私は奪われたのではない。——事実を確認する。干からびて尽きる命。それを拾われたのだ。

「そーいえば、こっちの方向つて……」

つい話に気を取られおぼわれるままに来てしまったが、この先は自室が存在する年季の入ったアパートではなく……。

角を曲がつたそこ。街頭の下に銀色に煌めくクルクル天然パーマを見つけた。

「誰も君の家を知らなかつたのでね」

なるほど、だから万事屋に向かつたと。ついでに、誰だ？ 銀さんに告げ口したのは、フォロ方か？

「オオトラの世話、ご苦労だつたな」

「なに、誘つたのはこっちだ。最後まで責任は持つさ」

月はちようど真上に上がっていた。夜半から呼び出された割りに

はべつだん機嫌を損ねた風もなく、銀さんは街頭の下に立っていた。どの道を通っても必ず通らなくてはならない場所。そこで待っていたのだろう。抜け目のない事だ。

かがんだその背から降りる。

「鴨ちゃん、ありがとね……つと」

肩から手を離れたときに、足を少しもたつかせた。

「オイオイ、大丈夫か？ 背借りるか？」

寝る直前だったのか、いつもの着流しではなく、甚平にサンダルをつっかけた格好の銀さんが言った。

「んー、大丈夫かな？」

いつもの手を使って酒気を抜いた私に、鴨ちゃんが咎めるような顔をした。だが、銀さんの前でおおっぴらにソレを指摘する訳もいかず、口をつぐむ。

「勿体無いことするなお前」

鴨ちゃんとは別の意味で、銀さんは顔を顰める。そこからくどくどと、いっぱしの酒飲みつてのはな？ と始まった説教を、片耳に小指を突っ込んで聞こえないフリをする。

「じゃあ、僕はもう行くぞ。くれぐれも変な気を起こすなよ」

「気持ちの悪い気の使い方すんじゃないやねー。んな気起こそうだったって、起きやしねえよ」

「この前神楽ちゃんから、タマ○ン握りつぶせばどんな男もイチコロよって習った。そのテクニクを今見せる時？」

「ヤメテツ。それ本当に一つコロつといっちゃってるから！ うわつ、想像したらなんか股の間がひゅんってなった」

ふつと鼻に抜けるように笑って、鴨ちゃんは今度こそ、手を挙げて来た道を戻っていった。

それに手を振り返して、前に進む道と、来た道、両方について思案する。

「銀さーん、今日泊まっていい？」

「そーしろ。俺も、この時間からお前ん家まで送りたいかねーよ、地味に遠いっ」

元からそのつもりだったのか、銀さんは先に万事屋への道に足を一歩踏み出す。それに二歩遅れてついていく。

「ん？ 帰るって言ったなら送ってつてくれるつもりだったんだ?？」

「そりゃ、こんな時間から女一人で歩かせる訳にやいかねえだろ」

「へー、ほー」

銀さんが、もう大丈夫だな、バイバイと手を振って見送るなんて薄情な事をするとは思ってもいなかったが、そーいう理由で送ってくれるなど……。

「何、背筋寒くなるような笑い方してんだよ」

「してませんー。銀さんこそ、気持ちの悪い気の使い方しないでくれますう？ ちょっと身の危険を感じてしまったキリなのであつた……」

「気持ち悪いのはどっちだよ。なに意識しちやつてんの、これだから男に免疫のないガキは……」

「いい年して、女に縁のないマダオには言われたくありませんー」

それからぎゃあぎゃあ言い合つて、途中、うるさいとどこかの家からどなられて、小声で言い合いながら万事屋に帰った。そこでまた、どっちが布団で寝るか奪い合いになって、起きてきた神樂ちゃんに怒られた。

「月はやっぱり綺麗だった。」

閑話 ガムと風船

その日、万事屋を追い出された銀時は、かぶき町をぷらぷらと歩いていた。

「ちよつと晩のおかずを一品増やしてやろうと思ったただけだつーのに」

生活費として分けておいた金に手をつけたのがまずかったのか、それともここ一週間ばかりまともな仕事をしていないのが悪いのか。キリが聞いたなら両方だと答え、二人と一匹だけつれてファミレスにでも行くだろう。

アイツ俺には容赦ないからなと、銀時は更にぶちぶちと文句を垂れる。

「アレ、旦那じゃねーですか。今日もプーしてんですかイ？ いい身分ですが、まったくもって羨ましくねーや」

「出会い頭になに毒吐いてくれちやってんの？」

黒い隊服を着た、毒を撒き散らす男。コレが真選組一番隊長つてんだから世も末だと銀時はぼやく。沖田が膨らませたチューインガムがパチンと弾けた。

「ああ、コレ？ さつき駄菓子屋でオマケに貰ったんですよ。貰います？」

銀時の視線に気づいた沖田は、ガサゴソとポケットを漁ると、果物の絵が描かれた、真四角の白い箱を銀時に投げ渡す。

「んだよ、てめーもプラプラさぼってんじやねーか、不良警官」

渡されたガムを「まあ、貰うけど」と口に含みながら銀時も同じようにクチャクチャと噛む。

「ところで旦那、吉原の上が変わったって話、聞きやした？」

「上って、新しい太夫でもデビューしたの？ そんな金がかかりそうな女にや、縁がねエ生活をしているもんで、残念ながら顔すら知らねーよ」

「違いますよ。更の上、夜王と恐れられていた男、鳳仙。それが倒されたって話でさあ」

「そりやまた……物騒な話だな」

どちらにせよ、銀時にとつては別世界の話に過ぎず、そんな事よりも、今をどうやり過ごすかが問題で、反応は至極薄いものだった。

しかし沖田はそれに頓着せず、

「ま、ここではなんですから場所を移しやしようか」

一方的に言い放ち、すたすたと先に歩いて行く。

「何を食ったら、そんなマイペースに育つんですかね」

「旦那みてえに、甘いモンばっか食つてた訳じゃねーのは確かですぜ」
道すがらそんな応酬を重ね、幾つか角を曲がり、町の外れにある、道路工事の資材置き場。沖田は人気ひとけのないそこで止まる。

『立入禁止』と書かれた看板がぶら下がった鎖を無視し、跨ぎ入った沖田は、置かれていたコンテナによつと腰を下ろし、「さっきの話の続きですがね」と、口を開いた。

「下克上。それ自体は別段大した話じゃねえんですよ。世の中、上には上がいるし、勝負事なんてそれこそ時の運。単にババ引いちまつたつてだけかもしれねえ」

「だったらんな面倒臭エ話なんて放っておけよ」

「そうしたいのは山々なんですがね……最初にこの話を探つたのは、土方の奴なんですさア。妙にコソコソしていて、こりや様子がおかしいなって、山崎掴まえて吐かせたら、後釜に座った人間、表向きは春雨の連中だつて事になってるみてエですが——実は地球人らしいですぜ」

天人に実権を握られて久しいこの江戸で、『吉原』という巨大な果実——熟れ過ぎて腐りかけと言ってもいい——それを手に入れたのがこちら側と言うのならば、今までボス猿に独占されていたソレを、指を咥え黙って眺めていたお歴々方も黙ってはいまい。それが沖田の推測だった。もつとも、斬ることを専門としている沖田には、それが実質的にどのような影響を及ぼすのかまでは解らなかつたが……。上との繋がりが多い土方ならまた別の見方をするだろうと、考えもした。

「ふーん」

だが、銀時はガムを噛み、膨らませては弾けさせるを繰り返す。手が届かぬ（主に金銭面で）女の世界や、政治の話など、やはりどうでも良かった。

「興味ねえですか？ 俺は面白いと思ったんですがねイ。ソイツ『女』だって噂ですよ。俺ア、この江戸に、夜王を下せる女が存在するなんてこと知りやせんでしたぜ——ついこの前までは」

プシュンと、マヌケな音を立てて、膨らます途中のガムに穴が空き、銀時の口元に張り付く。

「それはまあ——随分なやり手だな、将来はお局つぼねさん一直線じゃねえの」

「そうかもしれやせんね。けどまあ、案外上手くやっていくかもしれやせんぜ？ 女心なんてモンが分かるのは、同じ女って生き物でしょうから」

そこで「知ってやすか？」と、沖田は銀時の顔色を伺う。

「何を」

「吉原は今、『膝枕屋』に『耳かき茶屋』『添い寝楼』なんてモンが乱立してるって話ですぜ。マニアな連中が流れてきて、それなりに繁盛してるらしい。俺にや理解できやせんがね。けどまあ、随分と生きやすくなったんじゃないですか？ あっちの世界でしか生きられない女達に、出来るだけこつちに近い場所を用意してやったんでしよう。アレならやりそうな話じゃねエですかイ」

「……………」

アレというのが誰を指しているのか。名を口にせずとも、二人は共通の認識を持っていた。銀時は、先日、キリがバイトをサボった事を思い出した。アレがそうだという保証はないが——。

「とまあ、この話はここで終わりです。俺に感謝してくだせエよ？ わざわざ骨を折って伝えに来たんですから」

座っていたコンテナから飛び降りた沖田は尻を払う。

「するかよ。俺に何をさせてえんだ」

「アレ、バレてやした？」

「わざとらしいんだよ」

銀時は味の無くなったガムをプツと吐き出した。狙いが逸れたガムは、ブーツの先につき、嫌そうに地面に擦り付け落とす。

「アイツを護ってやってくれやせんか？」

沖田は真っ直ぐな目を銀時に向ける。それを受けた銀時もまた、真っ直ぐにそれを受け取る。

「てめエが護りたいモンを他人に押し付けてんじやねーよ」

「俺等じゃ護れねエから言っでんできア。俺には背負わなきゃなんねーもんがある。アイツを護るにはどうにもね、ソレが邪魔になりそうなのがするんですよ。二つに一つ、それを選ばなきゃなんねエ時が来たら、俺は迷わず真選組を選びやす」

迷いなく、恥じる事なく、沖田はいい切る。

「全部テメエの勝手かよ。……貸し一つだ」

「前払いしやしたぜ」

至極嫌そうな顔をした銀時に、沖田は地面にへばりついたガムを指差した。

「安いな、オイ」

「妥当でしょう。アイツを頼むのに、それ以上のモンが必要なんですかねイ？」

「それもそうだな」

したり顔の沖田に、銀時は、吐き捨てたガムに目をやりながら同意を示す。

交渉成立ついでに、「もう一つ」と、沖田は付け足す。

「人斬りつてのは二種類いると俺は考えていてね。斬った分だけ荷を増やして引きずって生きてく人間と、斬った分だけテメエの命を軽くしていく人間。ただでさえ、自分を軽く見る人間がソレを軽くしちまったら、そのうちどっかに飛んでいくしかねエ」

「知った口叩いてんじやねーよ。テメエも人斬りだろうが」

「旦那もねイ」

今度は同意する事なく、銀時はチツと舌打ち一つに留める。返事を期待していなかった沖田は、自身もガムを吐き捨てると、それに土を蹴って被せた。

沖田も銀時も、己は薄汚れた人斬りだと、その業からは逃れられぬと達観していた。けれど――。銀時の脳裏に、花火を羨ましそうに眺めていた人間の顔が浮かぶ。

「別に説教垂れてくだせエなんて言うつもりはねエーんですよ。ただ、飛んでつちまわねエように掴まえてちやくれやせんかね。どうも俺にや無理そうなんでさア」

滅多に吐かない弱音を口にした沖田は、お手上げなのだと言った。キリにとつての沖田総悟とは――友人であり、他人だ。身内にはなれない。絶対的な境界線を踏み越える事ができない。それがあの日、分かってしまった。

揺れる列車の中で、刀を交え、突き立てられた――優先すべきモノの為には、斬ることを厭わない己と、斬られることを厭わない人間。どうしたって無理なのだ。

「なんでそれを俺に言うんだよ。テメエが無理だつてんなら、神楽か新八、アイツ等に直接頼め。お角違いだ」

投げ渡された荷を投げ返す。銀時もまた己には荷が勝ちすぎると――思っただのだ。

沖田は一拍置いた。

「旦那、気付いてやすか？ アイツのやり方はアンタに似てんだ。それをしちまうって事は、アイツにとつてアンタは特別って事じゃねーですかイ。それが出来るのはそういう『特別』なモンだけでさア」

「そりゃ、テメエの勘違いだ」と咄嗟に返そうとした言葉は、「本当にそうか？」と、問いかけるもう一人の己に制された。

『斬れなくても護れる物はあるんだってなんで分かつてしんないの!!』『優しい人間が嫌いなんだ』『大丈夫だと言つて?』『ただ、前を向いて歩いて行くだけ。そうでしょう銀さん?』

時間を置いて、その台詞を口にできぬ程には心当たりが多過ぎた。だが、どうしろと言うのだ。

酷く狼狽えたような目を沖田は見ていた。それは坂田銀時という人物にしては、珍しい姿だった。

「頼みやしたよ」

頭を一つ下げ、敷地の入り口に張られた鎖を跨ぎ出ていく沖田を、
銀時は黙って見送った。

閑話 一万本の赤いカーネーション

『今日の一番運勢が悪いのは——』と、テレビの中で、結野アナが言つてたのを気にしたという訳じゃない。

——ラッキーアイテムは赤いカーネーションです。

という言葉をも、たまたま花屋のショーウィンドウを見た瞬間思い出したというそれだけである。それがなければ、バナナで滑り、恥ずかしいポーズで死ぬでしようなんて——全くもって信じちゃいない。

「済みません、コレください」

指を差したそれに、二、三注文をつけて十分程待つと、ピンクと赤を基調とした可愛い花束が出来上がる。流石、プロのお仕事。

受け取った花束を手に、自動ドアを抜けながら、はて、どうしようかと考える。家に帰るつもりだったが、花瓶なんて気の利いたものがない事に気付いた。あるとすればコップなのだが、花束の大きさにアンバランスになること必死だ。十中八九、バランスを崩す。

となると——。空を見上げると日差しは高く、晴れ渡っており、切り花にとっては良い天気とはいいいない。誰かに持つていくにしてもそう遠くまではいけない。

赤いカーネーションの花言葉はなんだったか、そんな事を考えながらいつもの公園を通り過ぎ、屯所に向かう角を通り過ぎ——迷ったが、野郎のところに花なんぞ持つていっても嬉しがる人間はいるのか？ と選択肢から消去した。程なくして、スナックお登勢の看板が見えてきた。

準備中と書かれた札が目止まったが、この時間なら店の掃除と仕込みをしているだろうと、引き戸に手をかけるとビンゴ。カラカラと軽い音を立てて開いた。

「まだ準備中だ……なんだあんたかい。どうしたんだいそんな花束なんか持つて」

カウンターの内で、鍋を火にかけてながら登勢さんが顔を上げる。出汁の良い香りが店に広がっていた。

「ちよつとね……差し入れ的な。花瓶つてありますか？」

「今日は何かの日だったかね。まあいいさね。ちよいと見ておいておくれ。確か奥にあると思うけど、あんたじゃ探せないねえ……沸騰してきたら、火を弱めるんだよ」

カウンターの前に手招きされ、回り込むと菜箸を差し出される。菜箸の代わりに、花束を受け取ったお登勢さんは、店の奥——普段お登勢さんが生活している部屋へと続くドアへと消えていく。

小さな泡がくつくつと湧き、落し蓋の下で大根が踊る。今日の付き出しは大根の田楽だろうか？　そういえばしばらく口にしていけない。お登勢さんの作るそれは、心に染みるような優しい味がするのだ。本人に直接それを言えば「馬鹿いつてんじやないよ」と照れたように顔を背けるのだが……。

「あつたあつた。花より団子つて連中ばつかだからね……しばらくぶりに出すもんで探しちまつたよ」

奥から出てきたお登勢さんが手に持つ、ガラスの花瓶は、玉ねぎを縦に伸ばしたような形で、それがどこことなくいびつに歪んでいた。

「それ……誰かの手作りなんですか？」

市販品ではない雰囲気、問いかける。

「昔ね、世話してやったガキがいてね、自分の就職祝いに持ってきたんだよ。笑つちまうだろ？　どこに自分の就職祝いで他人に物を持っていく奴がいるんだ。しかもこんな下手くそな作品、よく持ってたもんだよ」

そう言いながら目尻に皺を寄せて、お登勢さんは懐かしそうに笑う。今は一端のガラス職人になったそうさ。

埃のついた表面を洗い、水を入れ、花を活けると入り口に向かったカウンターの端に置いた。少しだけ浮いた雰囲気、持ってくる花の間違えたかと焦ったが、「花なんてひまわりも薔薇も区別つかない連中ばつかなんだから気にすることないよ」という闊達とした言葉に、いつも酒を飲んでる連中を思い浮かべ、そもそも花がある事にすら気づかない可能性に気にするのをやめた。

「これ、田楽にするの？」

菜箸を渡しながら立ち位置を変える。

「ああ、少し持ってくかい？」

「んー、こっちで食べてつてもいいかな？」

「構わないよ」

くつくつと、鍋の音だけが響く店の中、手持ち無沙汰になった私は、客席側へと回り込み、カウンターチェアに腰を下ろす。

落し蓋が落とされ、やさしい時間が流れていく。

「母の日……だったかねえ」

ぽつり、眩いたお登勢さんの言葉を、頬杖をつきながら聞いた。

天国に告ぐ 飴ふらし

飴売りというのを知っているだろうか？ 時代劇や、小説では見るものの、真実目するまではソレを専門に商売するなどという事をあまり信じてはいなかった。

四つ竹の小気味良い拍子に合わせ、唄を歌い、キラキラと光る飴が次々と袋に詰められ、笑顔浮かべる子供達の手に渡っていく。まるで本物の魔法のようだ。

その魔法を分けてもらおうべく、子供等にまじり、飴を選ぶ。

どれにしようかと目移りする飴をどうにか選び終え、袋に詰めて貰った時の事だった。ありがとうと手を出すも、一向に品物が受け渡されないのに疑問を覚え、顔をあげると、

「月というものは……。月というものは空で唯一輝くから美しい、そう思いませんか？」

頭巾の下で、アルカイツクスマイルを浮かべながら、飴売りはそんな事を唐突にいい出した。

なかなか詩的な事を言う飴売りだと思ったが、どう答えるべきか？ と戸惑う私が答えを出す前に、もう一度笑みを深くすると、「変なことを言っただけじゃありません。お詫びです。これからもご贔屓に」と、一瞬漂わせた空気をかき消すように、オマケを袋に追加し、再び四つ竹をかき鳴らすと、客を集め集め、行ってしまった。

「お邪魔します」

返事を待たずに、靴を蹴つ飛ばし脱ぎ捨て、どたどたと廊下を突き進み、居間で丸まっていた定春に抱きつく。

「綿飴食べたい、りんご飴食べたい、ラーメン食べたい、ピザ食べたい、寿司食べたい。新八君オムライス作って地味味のっ！」

思考に引つかかったものから、片っ端から口に出す。

呆れたような三人の視線は無視した。

「いきなりどうしたんですか？ またご飯でもたかりに来たんですか？ いい加減自立しないと婚期逃しますよ？」

自立？ このセクシーな二本のおみ足が見えないの？ 眼鏡の度数あつてないんじゃない？ 新八君の台詞は聞こえないフリをして、ぐしやぐしやと定春の毛をかき混ぜる。

「落ち込むなヨ。料理の腕だけが女の魅力じゃないネ」
「卵かけご飯しか作れない奴が言っても説得力ねーよ」

首をひねると、銀さんは銀さん専用の椅子に座り、行儀悪く机の上に足を投げ出してジャンプを読んでいた。神楽ちゃんはソファアで、バタバタと足を投げ出し、お煎餅をかじっている。

ポロポロと零れ落ちる煎餅屑を見て、新八君は眉を潜めた。

「ダラッダラ、ダラッダラ、アンタ達は……少しはシャキツとしたらどうなんですか！ 背筋を伸ばしてきりきり働く。それが正しい人間ってもんでしょ！」

「働くつたつてなあ〜」

「依頼ゼロ、連続記録更新中ヨ」

神楽ちゃんが指し示すカレンダーは真っ白。指折り数えてみるが、記憶が正しければかれこれ一ヶ月近く依頼らしき依頼はない。『たかり』と言われたが、現在、万事屋で消費される食糧のほとんどは私の差し入れで賄われている。どうだ偉いだろ！ 土下座して、靴を舐めろ。

「くうん」

べろりと定春に頬を舐められた。

親の敵かのなにかのように、カレンダーを眺めていた新八君だったが、何かを決心したよう領くと、くるつとこちらを向いた。

「だったら……」

続くお小言はりりんりと鳴り響く黒電話に中断された。銀さんから神楽ちゃんへ、神楽ちゃんから私へ、私から定春を素通りして新八君へ、お前取れよという視線がリレーされる。

深い溜息をついて、アンカーとなった新八君は、苦勞人受話器を取った。

「依頼!? は、はい! 承ってます! なんでも任せて下さい! 来週の月曜日ですね!!」

食い気味でまくし立てられる言葉に、銀さんと神楽ちゃんが聞き耳を立てる。口ぶりからするに仕事の話だろう。来週、来週と脳内のスケジュール帳を捲ると、丁度バイトは休み。神楽ちゃんとケイドロをする約束は延期するとして……墓でも参ろうか。そろそろ四十九日とかいう奴。夜兎にそんなものがあるかは知らないけれど。

そんな事を考えていたら、チリンと音を立てて受話器が置かれた。どうやら話がまとまったようだ。

「聞いてたと思いますけど、来週月曜日、仕事が入りました。依頼内容は大掃除! 忘れないでくださいね。特に銀さん、二日酔いで仕事にならない、なんて勘弁して下さいよ」

「わーってますう、来週月曜日ね。はいはい、二重丸と」

念を押すように、指をビシツと指した新八君に生返事を返した銀さんは、机の上の筆立てからサインペンを取り、キュツとカレンダーに二重の丸をつけた。

その二重丸をじつと新八君は見ていた。

注文通り作ってくれたオムライスのケチャップの残りを水で洗い流しながら、新八君と並ぶ。

泡を付けた皿をリレーしながら、会話をリレーする。それが途切れる。会話の代わりに、水音と食器の触れ合う音だけが台所に響く。

そういえばと、ふと思い立ち口にする。

「来週月曜日、なんかあった?」

「えっ」

驚いたように、新八君の肩がゆれる。

「カレンダー、悩ましげに見てたじゃない」

「なにかって訳じゃないですけど……」

更に追求すると、眉を八の字にしながら、言いよどむ。その表情はなにかあると言ってるようなものだった。

ふむ……。

「来週月曜さあ、丁度バイト休みなんだ。用があるなら、代わろうか？」

「いえっ！ 仕事なんですから！ 代わるだなんて、そんな！」

「やっぱり用事あるんじゃない」

うぐつと喉を詰まらせた新八君はしぶしぶという感じで、口を開いた。

「実は、お通ちゃんの記念ライブが……」

「ごによごによとした口ぶりの後には、仕事は仕事、趣味と混同させるのはと、自身に言い聞かせるような未練がましい言葉が続いた。結局、「悪いですってそんな」「いいじゃんいいじゃん、たまには」などという応酬の末に、押切り勝ちで、新八君は鉢巻しめてお通ちゃんのライブへ旅立っていった。

依頼日当日。若手実業家を名乗る依頼主の後についていけば、由緒正しそうな白壁に黒い瓦屋根のりっぱな倉。その扉をあけると、葛籠や甲冑、掛け軸だろうか？ 長筒物が雑然と積まれていた。

「お宝！ お宝！ ひやっほい！」

「はしやぎ過ぎてモノ壊すなよ」

テンションの上がった神楽ちゃんに、銀さんは念押しするよう釘を刺していた。私も、多少興奮気味に、あるところにはあるもんだなあと、上に下にと目を走らせる。

そんな三人の背後から声をかけられる。

「今日は、倉の整理をお願いしたくて……。丁寧にお願いしますね。それでは——」

「あつ、オイ、戸は開けて……」

入り口に立つ依頼主は、そう言い残すと、銀さんが止める間もなく、ボタンと倉の戸を閉めると去っていった。

外界と隔絶し、一気に暗くなった室内に、しかたねえなあと銀さんは閉められたばかりの戸に近づく。

それを尻目に、薄暗いひんやりとした土蔵どぞうに積み重なる葛籠つづら。その

一つをなんの気なしに開けると――。

「これって……銀さん！」

「あれ？ 開かねえ」

私と銀さんの声はほぼ同時だった。嫌な予感が――。

低く鈍い爆発音と激しい振動が、一週間前まで『売家』と看板が立っていたその敷地を襲ったのはその直後だった。

「災難でしたね、ガス爆発に巻き込まれるなんて。水道管と間違えてガス管切っちゃったんですって？」

万事屋の居間の中心に置かれたテーブルにコトンと淹れたばかりのお茶を出しながら、新八君は眉をへの字に曲げていた。

事件の後、警察の事情聴取などというものに巻き込まれ、ようやくの帰宅。ウキウキ気分で帰ってきた新八君は、告げられた内容に、テンションを下げてしまっていた。

「まったくヨ。うっかりにも程があるアル」

神楽ちゃんは湯呑みを手に、ふんつと鼻息荒く、ぷりぷりと怒っていた。銀さんも、銀さんで、

「まったくよ、依頼人もどつかばつくれやがるし、まじ災難。いやあキリがいてくれて助かったわ。まじで、いや、まじまじ」

「ああ、えつと、うん」

四人分だされた茶請けの饅頭。私の分だと出してくれたであろう饅頭が銀さんの口の中に放りこまれるのをぼんやり見ながら、生返事を返した。お通と焼き印が押されたそれは、新八君のおみやげだった。

見え透いたおだてじゃあ、ごまかされないよ？ と奪い合う気にはどうしてもなれない。

倉にあつた葛籠つづらの中身――。黒い――まるで花火をバラして遊んだ時に見たような粉。それがぎっしりと詰まっていた。ガス爆発ねえ……。

「どうしたアルか？」

あれ、バレてない？ と首をひねる銀さんの饅頭を神楽ちゃんがこつそり奪い取り、もさもさと口を動かしながら首を傾ける。

「なんだか疲れたみたい。今日はもう帰るね」

苦笑まじりの言葉を合図に、自分の取り分が神楽ちゃんの胃の中に収まっている事に気付いた銀さんが取っ組み合いを始める。

「おう」というのは、銀さんで、「はいヨ」というのは神楽ちゃん。タバタとやり合う合間に交わされた言葉を背に戸に向かう。

「まったくもうあの二人は……。気をつけて帰って下さいね」

唯一、玄関先に見送りに来てくれた新八君が、ぼやきながら告げる。

「新八君も気をつけてね？ 火の始末とか、ガスの元栓、ちゃんとね」

「はははっ、そうですね。昼間に続いてうっかりなんて、シャレにもならないですよ」

冗談交じりに、けれど不安を含んだ視線で挨拶を交わし、万事屋を後にした。

シグナルはイエロー

ガス爆発。

そんなものじゃないというのは明白だ。もし、私と新八君が入れ替わらなかつたら？ あの時、葛籠の中身に気づかなかつたら？ 判断が一瞬でも遅れていたら？ IFというのはつきない。誰がなんのために、誰を……。

何か厄介事に巻き込まれたか？ だって万事屋だもの、いや、いや、それよりも可能性として大きいのは——。ぐるぐると思考を巡らせ、最近起こった出来事を順に辿る。そして、『蜘蛛』という単語を思い浮かべ——

『月というものは空で唯一輝くから美しい、そう思いませんか？』唐突に、ひらめくように、その言葉を思い出した。誰の言葉だったか——逡巡のち、これといって特徴のない、頭巾の下に笑みを浮かべた男。飴売りの顔を思い出す。

月が昇った江戸の下、ぱつと地を蹴り、駆け出す。

あの男がいたのは……。三つ角を曲がり、小間物屋を過ぎたあたり。閑散とし、人気のない道には誰もいなかった。

月明かりの中、とうの昔に店じまいを済ませた長屋を両手に立ち尽くす。

——地雷^{じらいあ}。

顔を変え、名前を変える彼が犯人ならば、鳥など役に立つまい。

ギシリと音がるほどに、握りしめた手が汗ばむのを感じた。夜の道を睨みつける。見通すことのできない暗闇の向こうにうすら笑いを浮かべる男がいるかのようだった。

「なんでイ、こんなところで、夜遊びかい」

足音が近づいていく事には気づいていた。

振り向くと、いつもの隊服姿で総悟が立っていた。

「そー」

「……何かなくしものでもしたのかイ」

私の想像以上に、私は切羽詰まった顔をしていたらしい。片眉を上

げた総悟は、慮おもんばかるような口調でそういった。真選組なら政府との繋がりも多いだろう。かつて將軍に仕えていた御庭番その情報も何か所持しているのではないか？ そう考えた。

「実はさ……。えっと、昼間だったかな？ 500円玉落としちゃつて。一度は諦めたんだけど、やっぱり見つからないねえ」

協力を仰ぐことで、事態は悪化するのではないか？

咄嗟に言葉を変えて、へらりと笑いながら答える私に、総悟もまた「そーかい」と、温度を落とした返事をした。

ズキリと胸が痛んだ。

総悟は明らかに私の嘘を見抜いたし、私もまた、見抜かれると知った上で関わらないで欲しいというメッセージを言葉に込めた。それは、拒絶と何が違うのだろうか？

差し伸べた手を払われる痛みを顔に出さず、総悟はなんでもないと風な顔をしていた。迷う——。一度翻した言葉を、更に翻し、彼の善意に頼る事も今ならできるだろう。けれど結局。

「やっぱ、夜に探しても見つからないや。総悟、500円見つけたら半分あげるから、取っておいて？」

「そーいうのは、早いもの勝ちだろイ」

「いやいやいや？ ネコババする気？ 仮にもお巡りさんだよね？」

「それとこれとは別だろイ」

どこが別なのか、苦笑を浮かべる私に、総悟は「もう夜も遅いからけーりな」と帰宅を促す。私はそれに素直に頷きながら、総悟と道を別れた。

溜息をついた私を咎めないで欲しいと願う。

地雷亜は、なぜ私を標的と見定めたのか。例の一件は、見せしめか脅しか、その意図をハッキリと見通す事はできないが、碌でもない意図が込められているに違いない。クリスマスプレゼントにしては随分物騒だ。

未来が不確かなこの世界で、うっかりと何かすがに縋すがってしまおうには、私は弱すぎた。

不夜城。ちんとんしゃんと何処かから漏れ出る宴の賑わい。それを耳にしながら私は、かつての夜王の街を歩いていた。蜘蛛の巣を探すなら、かつての古巣。そこからだと考えたのだ。

「月詠ツツキいる？」

藍色の暖簾を潜る。

「珍しいね、アンタからこっちにくるなんてさ」

「あ、キリ姐」

気安い言葉で出迎えてくれたのは日輪さんだ。日輪さんはいつまでも昔の人間が上にたつてちや伸びるものも伸びないと、現役を引退し、今は後進の教育にあたっている。

後ろからひよこつと顔を出した晴太君も、引退を決めた理由の一つだろうと私は思っているが、それを聞くのは野暮というものだろう。「月詠ならもう少ししたら戻るだろうさ。ちよいと、茶の一つでも飲んで待っていなよ」

普通の茶屋として営業している店先で、待たせてもらうことにした。軒下に配置された椅子に座り、日輪さんが淹れてくれた茶を啜る。

「そーいや、天井空けないとなあ」

昼間のように明るい地下世界の空を見ながらそんな事を思った。そばに座った晴太君が、私の言葉に疑問を覚えたのか首を傾げる。

「天井？」

「そう、天井。吉原はさ、船のドックを改造して作った場所だからね。ぱかーんと開くんだよあそこ。きつと、お月さまきれーに見えるよ。お月さまだけじゃない、夏になれば花火だって見れるかもしれない」「随分マニアックなことを知ってるじゃないか。そうだね、空けてもいいかもしれないね」

何かを偲ぶような目で、日輪さんも空を見上げた。許可もでたので、合いの手を打つ。

「皆でお月見しようか！」

「オイラ、団子作るの手伝うよー！」

いいね、いいね、楽しそうじゃん。後で、月詠さんに相談してみよう。短冊に願い事を書こうかと言えば、晴太君にそれは七夕だとツッコまれ、じゃあ七夕も一緒にしようという話をしていたら、月詠さんが戻ってきた。

「随分と楽しそうな話をしておるの」

「やつほー、久しぶり」

「久しぶりじゃの」

手を振ると、笑った顔を向けてくれた。

「月詠ツッキー、戻ってきてはつかで悪いんだけど、少し付き合ってくれない？」

「ああ、構わぬが、どこにじゃ？」

「それはねえ……秘密」

月詠姐つくよねえばつかずると騒ぐ晴太君に、じゃあ今度は、二人つきりで秘密の遊びをしようと耳元でささやくと、顔を真っ赤にするものだからおかしくって笑っていたら、日輪さんに、「あまりからかうんじゃないよ」と窘たしなめられてしまった。

「で、どこに向かうんじゃない」

「いや、だから秘密……というか私もよくわかんないだよねえ」

「なんじゃそれは」

訝いぶかしげな月詠さんをまあまあと宥なだめる。そうやって二人して歩く吉原は、かつての桃源郷の趣のままに、淫猥で、放蕩的な賑わいを見せていた。そーいう生き方しかできないという意味をよく知らないままに、踏み込む覚悟を決めきれない私は、色々なものをそのままにしてしまっていた。日輪さんは、急に人は生き方を変えられるものじゃない、そうするべきだと言うのだが。

「月詠様、今日もお疲れ様であります」

声をかけてきた遊女は、艶やかな姿で笑っていた。軽く会釈をした月詠さんは、その遊女が通り過ぎると、眉を寄せ、顔を難しくした。「どうしたの？」

気になって聞けば、

「匂いが……な。独特の甘い香り、夜幻香やげんこうの匂いがした。香とは名ばかりの、最近ここ界隈で流行っておる一種の麻薬じゃ。馬鹿め。一時の快楽に手を染めれば、後に待つのは転がり落ちるような地獄だというのに」

酷く苦々しい口調で、月詠さんは吐き捨てるようにそう言った。
「鳳仙がいなくなったから？」

確認の体を装っていたが、今更何をというもう一人の私の声がどこかでしていた。暴力的抑止力ともいえる絶対君主が倒れば、治安は悪化し、また別の犠牲が生まれるだろうと覚悟していた。覚悟していたが、いざ目になると身につまされるものがある。

「主が気にすることではない。人は希望がなくては生きられぬ、例えそれがまやかしだろうと……。真に悪しきはそこに付け入る悪党ども。それをのさばらせてしまっているのはわっち等の不手際だ」

首を振りながら、月詠さんは店と店との間の暗がりへ視線をやる。その奥に踏み込めば、幻想から一転、吉原の現実があるのだろう。吉原の闇は深いか……。一言万鈞いちごんばんきんとは良く言ったものだ。そこには私では踏み込むことすらできない闇が蠢うごめいているのだろう。

チラと月詠さんを見る。その闇に、かつての師が加担していると知ったら、彼女はと思うだろうか？

「どうした？」

「いい女は苦悩する表情もまた色っぽいなあと」

「なに馬鹿なことを」

ほんのり頬を染め、照れながら月詠さんはそっぽを向く。いや、半分は本心なだけだなあ。

わざとらしく、大人のおもちや屋さんを指差して、何の店？ と聞く、実際は良くわかってないのだろう、しどろもどろに苦しい説明するのが面白くてついついあれやこれやと質問を投げつけてしまう。そんな中、物取りが出たと、助けを求められれば、瞬く間に犯人を掴まえてしまう。私のなんちゃって忍法とは裏腹に、幼いころからのたゆまぬ努力によって培われた技術とそれに奢らぬ心、日輪さんとはま

た違う輝きに皆が惹きつけられるのだなと思った。

「それじゃあ、またね」

「本当に主は何をしに来たんじゃ……まあ良い、いつでもきなんし。吉原は誰にでもその懐を開いておる」

別れ際、呆れ半分に月詠さんはそう言ってくれた。結局のところ、いいアイディアも浮かばなかった。分かったのは麻薬の密売が横行しているということだけ。紅蜘蛛党をあたってみるかあと漠然としたものを考えながら、帰路につく。

吉原から地上に出るための昇降機。その中で、一人の男と一緒になった。中肉中背、どこと違って特徴のない、中年の男。帰り客だろうと気にもとめず、その後ろ姿をぼんやり眺めていた。

「探し物は見つかったか？ 『天女』」

唐突な言葉に、一瞬何を言われたのか理解ができなかった。息を呑み、言葉を探す間に、男はゆっくりと振り向き続ける。

『天女』などとは名ばかりの醜く愚かな存在が……。ああ、愚かだからこそか。芸術を解せぬ。その汚い手で触っている物がなんなのか、その罪を知らぬ」

こちらを向いた顔は見知らぬ顔だった。だが、薄っすらと浮かぶ笑みとは対象に、眼光は臓腑の底から人を寒からしめるような凍てついた鋭さを持っていた。

「……地雷亜」

またの名を——とびただんぞう 鳶田段蔵。月詠さんを月詠さんたらしめ、一時的には手を取り歩みを助けた人。呻くような掠れた呼び名に、地雷亜は感嘆の意を表わした。

「俺を知っていたか。仕掛け糸が断たれるのも道理。愚かだが知恵はあるようだな。だが、逃れられると思うなよ。いつの間にか絡め取られ、身動きが取れなくなるのが蜘蛛の糸というもの」

「例えば、吉原に張り巡らされた犯罪組織とか？ お登勢さんを狙う無頼漢とか？ 万事屋に持ち込まれるやっかい事とか？」

「あるいは……その内に存在する力とかな。田宮たみやいえもん厭衛門。奴はお前を探しているぞ。江戸中を浚ってでもお前を欲っさんとしている。居

場所を知られれば、もう安寧とした日々は送れまい」

くつくつと笑う地雷亜を殺そうと思った。なんの気概もなく、そう選択しようとした己に震え、踏みとどまる。

「嫉妬深い男つてのは、嫌われるんだよ。束縛系？ 光源氏計画？

理想の女が欲しいんなら、AVかエロ本の中を探しなよ。こんど長谷川さんにでもとっておき聞いておくからさ。やっぱり金髪色白系が――」

「戯言は十分だ。素直に吉原を明け渡せ。信頼を裏切られ地に落ちればアイツも再び輝きを取り戻すだろう。いや、以前よりもまして、その姿は美しく映えるかもしれぬ。そうなれば、お前には礼を言わねばならないな」

地雷亜の顔は喜色に富み、堪らえきれない喜びを表現するように、両の手を広げさえもした。

「いやだね」

「断るか。しかし、再び合う頃には返事も変わってしよう」

地雷亜はそう一方的に言い放つと、地上へついた昇降機ドアから外へと消えていった。地雷亜の望みを考えれば、取引など望むべくもなく。困ったなあと呟いた声は、夜の闇に消えた。

相打ち御免

——おちやらかほいほい、おちやらかほい、おちやらか、おちやらか……

自室の昼下がりに。窓の外から子供等の声が聞こえてくる。窓に吊り下げた風鈴がリインと鳴った。まどろみの中、新八くんの小言と、それに伴う銀さんの言い訳、神楽ちゃんの小しズレた追撃を聞く。

『アンタ、また味噌汁にガムシロップとか……カブトムシでももつとマシな味覚してんでしようよ』

『ぼっか。塩スイーツ的な感じでうまいんだって、ほれ、分けてやるから感謝して食うように』

『わああああ、何してくれてんですか！ 麦茶入ってたコップですよ!?! 麦茶と味噌汁とシロップが混じり合ってカオスってる！ 牛乳拭いた雑巾みたいになってる!』

『牛乳含ませた雑巾は床掃除に使うといいネ』

ワイワイがちやがちやと食卓の上で会話が行き交い、流れで羽交い締めになされた新八君の口に麦茶と味噌汁とシロップが混ざった新食感スイーツが押し込まれる。

そこに重なるように響いてくる声。

『月詠姐つくよねえつてば、オイラにも修行つけてくれよ。スーパーサ○ヤ人になんたいんだよ!』

『たわけ。スーパーサ○ヤ人というのは、修行してどうこうなるものじゃない。クリオンを殺された怒り、苦しみがスーパーサ○ヤ人を生むのじゃ。なろうと思つてなれるものじゃない』

『……やけにドラ○ンボールに詳しいんだけど。月詠姐つくよねえもしかして、オイラのドラゴンボール読んだ？ その目の下の隈つてもしかして……』

『ご、ごっほごっほ……それより晴太、お前に必要なのは修行などよりも勉強だ。勉強に励んで立派な大人になる。それがなによりの親孝行だと思わぬか』

『かあちゃんは関係ないだろ！ 俺がなりたいのは立派な大人じゃな

くて、月詠姐みたいな皆を護れる人間なんだよ!」

さらに上書きされるように、響く。

『ババア アレ クダサーイ』

『あれじゃわかんないよ。あれってなんだいあれって』

『アレハ アレデスヨ アレ アレダツテバアレ』

『たまちよつと翻訳しておくれ、何言ってるかさっぱりだよ』

『過去のデータから推測するに、「給金はまだかど腐れババア」といいたいんでしよう』

『あんだって!?!』

『チ、チガイマース』

『あ、済みません、データが古かったようです。今年のデータを加える
と「ババア最近シワが増えたんじゃないか?」でした』

『月詠姐!』

『あんだってええええ』

『それよりも……』

『銀ちゃーん』

『あ、ダメだこれ』

うわんうわんと鳴り響く副音声ならぬ三重音声に首を降って全部の音を遮断する。心なしか頭痛までしてきた。地雷亜の取る手段が見えない中、どうにかその糸を断ち切ろうと試行錯誤してみるのだが、全てを監視するのは無理だ。どうしたものか……。地雷亜の目的は月詠さん。というか、己自身。それに気づいてるのか気づいていないのか、だがそれを指摘したところで、彼の月詠さんに対する執着は消えやしないだろう。多重音声と同じように絡まる思考に嫌気がさして気分転換という名の現実逃避に出かけることにした。

かぶき町をぶらつく。鬱々とした気持ちとは反対にからりと晴れ上がった空が憎らしい。隕石でも降ればいいのに。

「500円見つかったかい」

どーしてこうも会いたくない時に限って会いたくない人間に出会うものなのか。

「見つからない。総悟ばくった?」

「ぱくるかよ。俺ア、お巡りさんだぜイ」

あまり見ることにない着物姿の総悟は、心外なという表情でそう言った。意外と律儀に探してくれてたりしたのだろうか。

「ご飯食べた？ 一緒しない？」

方向性を見失った罪悪感ワンコインは、500円の蕎麦に姿を変えた。

ズルズルと蕎麦を啜る。いつもなら互いに相手の話を適当に流しながら、喋りたいことを喋る筈なのに珍しく、無言で蕎麦を啜っていた。そんな調子で食べるものだから一杯のかけ蕎麦なんてあつという間に食べ終えて、普段は飲まない汁まで一滴も残さず飲み干してしまった。

仕方なしに善哉ぜんざいを注文して、それすらも食べ終えて、手持ち無沙汰になった私は、コップの中の氷をくるくる回す。

「失恋でもしたのかイ」

からんと氷が鳴ったタイミングで総悟はそう口にした。

「しないよ。なんで男つてのは女が悩んでたら原因はそれだと決めつけるさ」

「古今東西、女の悩みつてのは、そーいうものつて相場が決まってんだろイ。でなきや、便秘かイ」

「ちがいますうー」

コップの氷を口の中に放り込み噛み砕く。なんでこーもデリカシーがないのか。

「たいして違わねえーだろイ。糞がつまったような顔してんぜ。出してもだせねえつてんなら、手伝ってやろうか」

「総悟っていつから悩み相談受け付けるようになったの？」

デリカシーがない。全くもってデリカシーが足りてない。そしてそんな返答を返す私自身も、デリカシーというものが足りていない。結論、デリカシーなんてものはちり紙に包んで便所へ流してしまうべきである。

番茶を音をたてて啜る総悟の顔色を伺う。

「んでい」

「大切なものを護るために、大切なものを犠牲にするのは正しいのか？」

「間違ってるに決まってるだろ」

間髪を入れずに返ってくる潔さが気持ちよかった。

「それしか方法がねえなんて目つむって斬り捨てるやり方が正しいってんなら、最後は何も残りやあしねーぜ。斬って斬って斬り捨て御免の人生なんて碌な人生じゃねーや」

続けて返ってきた言葉は、重く、見てきたかのような実感が籠っていた。

「ならば、大切でないもつとえば、斬ることではか救えない何かを斬り捨てるのは正しいか？」

「……間違ってるだろ」

間が一瞬空いた。酷い言葉を投げつけている自覚はあった。これは総悟自身に対する自己否定だ。

「私は、そーやって何かを護る事は正しいと思う」

「間違ってるよ」

今度は間が空かなかった。確信をもって伝えられた言葉は、総悟自身を否定し、私を否定しようとしたのだと思う。反対に私は総悟を肯定し、これからの私自身の行動を肯定しようとした。合わせ鏡を相手にするような左右ちぐはぐの滑稽なダンスを私達は踊っている。

どちらがより正しいかというパワーゲームを生き抜くコツは、そんなものを始めない事だ。

「総悟、私は総悟の事好きだなあ」

総悟は虚をつかれたような顔をして、口をへの字に曲げた。まるで苦手なものを食べてしまったかのような顔だった。ケラケラと笑う私に、ぶすくれた表情で総悟は言った。

「アンタはアンタしか見てねえ。アンタのやり方ってのは、土方さんが言ってたお人形ごっこまんまだよ。テメエーがどうしたいかしかねえ。周りがテメエに対し、どうしたいかなんてちっとも勘定に入っていないやしねえ。そーいうのは他所でやってくれ。そんなものに人を

巻き込もうとしてんじゃねえ」

怒りすら滲む辛辣な言葉を返した総悟は、勘定といって、私が払うべきものを奪って店から出ていってしまった。それが意趣返しだと気付くのに、しばらく時間を必要としたのは、私が思いの外、総悟の言葉にダメージを受けていたからなのだと思う。

総悟は、気まぐれなんかじゃなく、真剣に私を救おうとしてくれていたのだ。手痛いしっぺ返しを食らいそれを知った私は、しばらく茫然自失となっていた。

晴れ時々眼鏡

紅蜘蛛党を探せば、一ヶ月ほど前に、潰されたという情報を耳にした。何がどうなってそうなったのかわからないが、ともかく、存在しないものは探せない。

人間関係の不和という問題を更に抱え、私は頭痛を通り越して、脳溢血でも起こしたかのような頭を抱えていた。

総悟は、総悟らしからぬ優しさまで尽くして、私を助けようとしてくれたのだ。それを私は有耶無耶の内になかったことにしようとした。ようは気持ちだけを受け取って、流そうとしたのだ。だから腹を立てたのだ……と思う。理由が明確なのであれば、改善し、頭を下げて許しを乞えばいい。頭を下げた相手を許さない程に、総悟は短慮ではない……と思う。

思う、思うと推定の内を出ないのは、私が総悟の内側に上手く踏み込めていない所為なのだろう。総悟を好ましいと思っていたのは事実だけれど、その身の内に深入りする程に、私は総悟を知らなかった。遅まきながら気付く。どこか、総悟とは友人というよりも、共犯者のようなシンパシーを感じていた。総悟が優しいのは知っていたけれど、互いに引いた暗黙の線を飛び越えてくるとは考えていなかったのだ。

と、そこまで考えて、彼の怒りがただの八つ当たりのように思えてきた。なんだって私はそんな押し付けがましい好意に悩ませられなければならぬのだろうか、腹を立てること3分。許さざるを得ない事を悟るのに5分。解決策に悩むこと1時間。

諦めて放り投げた。

「万事屋さくくん、友達と喧嘩した時の解決方法をおしえてよ。ついでに万年痔主の居場所も教えてよ」

万事屋に乗り込んだ私は、銀さん専用の椅子に腰掛けた銀さんの前にある銀さん専用の机に手を突き、身を乗り出すようにせがむ。

「万事屋さんはドラ○もんじゃありません。なんでもかんでも他人の手を借りて解決しようと思うな」

「確かに、万事屋さんはドラ○もんほどに有能じゃないね。少しはドラ○もんを見習って欲しい」

「同意するのはそこじゃねエよ」

ドラ○もんじゃないと言いながら、銀さんは読んでいたジャンプを降ろした。

「喧嘩って誰だよ相手」

「総悟」

「……お前、後ろから刺されるなよ」

「総悟は刺さないよ友達なもの」

「どっから湧いて出んだその自信」

総悟は刺すとかそーいう直接的な攻撃じゃなくて、もっと地味に精神抉えぐつてくるような攻撃をするに違いない。銀さんは分かってないなあー。それよりもだ。

「そっちはまあいいんだけど……痔のつく忍者しらない？ 万年痔に

悩んでてボラ○ノール手放せない奴」

「万年痔に悩んでるねえ……ああ、三丁目の飯田さん」

「飯田さんが悩んでるのは便秘だね」

飯田さんは厳つい見た目に反して、ストレスを抱えると便がでなくなるというナイーブな大工の棟梁だ。まったくの人違いだ。掠りもしていない。あーだこーだ悩む銀さんの頭の中は糖分しか詰まっていないのだから無理かと考える。

「銀さん」

「……な、なんだよ」

更に体を乗り出し、身動ぐ銀さんをじつとみつめる。

「前から思ってたけど、銀さんパーマいららずで経済的だよな」

「……何、馬鹿にしてんの？」

「それにさ、意外とこまめに爪手入れするよね。深爪気味だけど」

「だから……なんだよ」

「あと、銀さんの目って時々光って綺麗だと思う」

「ふーん」

「私、銀さんのこと好きだなあ」

「へ、へえー」

銀さんがやや引き気味で相槌を打つたと同時に、ガタガタ、バキツバキヤツと激しい音がして、天井から何かが降ってくる。

「あ、あああああなた!! 私の銀さんにな、ななななにいつてるのよ!」

天井から降ってきた謎の物体X——さっちゃんは、銀さんを指差し当たり散らす。天井から降ってきた時の衝撃で、外れた眼鏡が私の足元に転がっている。それを取り上げ差し出す。

「はい。さっちゃん、眼鏡」

「あら? ありがとう」

「どういたしまして」

「じゃなくて!」

差し出した眼鏡をスタイリッシュに装着し、くるりと反転、こちらを向き、さっちゃんは再度ビシリと指差すと、言い直す。

「アンタさっつきのはど——」

「ねえねえ、さっちゃん、服部全蔵の居場所知らない?」

「なんで私が、というか知ってもアンタなんかに教える訳ないでしょ! というか人の話聞きなさいよ!」

さっちゃんの台詞を遮って問えば、激おこですと言わんばかりに頬を膨らませる。素直に答えてはくれそうにもない雰囲気、ニンジンをつぶら下げしてみる。

「教えてくれたら今度銀さんがデートしてくれるって」

「……おい」

主人公は抗議の声を上げ、さっちゃんはさっちゃん「デート」という単語に過剰反応を起こす。

「えっ、そんな……本当? いえ、そんなの嘘よ! 騙されないんだから! 今まで押しても倒しても乗っかってもつれなかつた銀さんがそんなこと……ははーん。そういうプレイね。二人で結託して持ち上げるだけ持ち上げて、落とす感じ? いいわよ。望むところよ。それもまた……KA・I・KA・NNNNN!」

両腕で体を抱きしめると、さっちゃんは、体をクネクネを揺すりな

がら「いいわよ、いいわよ」と呟き始めた。なんだろう？ この残念な感じ。さっちゃんだからしょうがないといえば、しょうがないのだが……。

「もう一度聞くけど、服部全蔵の居場所に心当たりない？」

「全蔵は……えっ、言っちゃう？ 言っちゃうの？ キャツ」

「そーいうのいいから早く教えて」

「しようがないわ。教えてあげる！ 全蔵は最近、吉原のブスっ娘クラブに嵌ったみたいで入り浸ってるから、そこに行けば会えるんじゃないかしら。ああん、言っちゃった。早く！ 早く！ 早く私を罵って！ 都合の良い馬鹿な雌豚だと罵って！ さあ早く！」

なんというか、階段を三段踏み外した感じの色っぽさで身悶えるさっちゃんにお礼を告げて、私は万事屋に後にする。背後から銀さんの怒鳴り散らす声が聞こえてくるが、「男なんて用が済んだら、ポイヨ。ポイ。まあ、たまに再利用してあげてもいいけどお？」と言っていた神楽ちゃんかぶき町の女王様の台詞に習い、総無視だ。大人の階段を一步上れた気がする。

再び地下へ。なんだ最初の選択肢が答えに近かったんじゃないか。急がば回れということわざの虚しさを噛み締める。かぶき町を思わせるような一角。看板を確認し、間違いないと暖簾を潜る。

「すみませーん」

「いらしゃ……なによ、客じゃないの？ 働きたい口？ ダメダメあったみたいなお中途半端。この店じゃ通用しないわ。個性がないのよ個性が」

出会って三秒の他人を否定するだけはある。個性的な顔をお持ちの店員が、店の入り口に立つ私を値踏みするように、上から下へと視線を走らせると、ため息をつきながら首を横に振る。無個性で中途半端という言葉がジワリと心に染み入るが、何事も平凡が一番だと、自分で自分を慰める。

無駄に凹んでいる場合ではないのだ。

「いえちよつと、人を探していて。服部全蔵さーん居たら出てきてもらえませんかー」

「ちよつとー!」

大声で呼びかける私を止めようと手を伸ばす店員、構わず呼び続ける私。外れたか? と思ったところで、店の奥からのそりと一人の男が出て来る。薄茶色のざんばら髪が目元を覆い隠し、短いあごひげを持つ男。

「やかましいな。人がいい気で酒飲んでる時に、なんだ?」

「すみません。すぐおとなしくさせますので。ほら、店からでて」

ぐいぐいと私の背中を押しし、店から出そうとする手にあらがい、

全蔵さんに告げる。

「摩利支天服部全蔵さん。地雷^{じらいあ}叩^{まりしてん}つて知ってる?」

「なんでもいいから、早く出ていきなさいよ……ぐぎぎぎぎ」

店員が私を押し出そうと更に力を込める。だが、それを止めるように、全蔵さんが肩に手を置いた。

「店騒がして悪いね。そいつはどうも俺絡みの客のようだ。俺ア、ブス専うたってんだがね……。箸にも棒にも引つかからなさそうな女がどうして釣れちまうのやら」

「日頃の行いじゃない?」

どいつもこいつも失礼な。冷ややかな視線と共に、嫌味を口に乘せるが、全蔵さんは全く意に介した様子もなく、肩をすくめるだけで私の脇を通り、店の外へと出ていく。まあ、店の中で話したい話題でもないしと、私もその後を追った。

いと、いとわしく、いとおしく

「アンタ、奴とはどういう関係だ？」

どこへ行くつもりなのか？ と考えながら、全蔵さんの後をついていくと、そう言われた。

「火サスの犯人と被害者みたいなの？」

「被害者元氣すぎだろう。火サスの被害者なら崖から落ちて海に浮いてんのが相場じゃねえーのか。いや、火サスそんなに知らないけど」

「うーん、私、加害者。被害者はあっち」

「んあ？」

疑問符のついた言葉で、理解し得ないと全蔵さんは首を捻る。

「ほらよくあるじゃん、脅した相手が悪くて、逆上されて殺されちゃうみたいなの」

倦怠感を漂わせ歩いてきた全蔵さんが歩みを止める。

「オイオイ、夢を現にする吉原だからって、大ぼら吹いていい道理はないんだがな。地雷じらい。その名を知ってんなら、奴の二つ名、蜘蛛手の意味も知ってると思っただがねえ」

「もちろん、その上でだよ。試してみる？」

逡巡のち、首を振った。

「いや。例えお前さんがホラ吹いてようが、シャコガイ吹いてようが俺には関係ねえ話だ」

「それもそうだね。ところで全蔵さん、ここって……？」

裏路地を三度曲がり、一本奥まった通りを抜ける。吉原にも裏に回れば、生活地味た場所はある。その中でもうらびれた一角、一軒のあばら家の前に立つ。木戸は傾き、割れた板塀からは雑草が顔をだしている。

「三日前まで奴さんが巢を作ってた場所だ。今じゃ空っぽだがな。ここを調べるのに使った人間が三人、再起不能になった」

『再起不能』の意味を考えていると、全蔵さんは「死んじやいねえよ」と言葉を足した。どこか尻の座りが悪くなるような言い方だった。何かを見透かすような――。

「ところでお前さん。奴の情報に何を支払う？」

こちらを向いた。調子は軽いというのに、髪に隠された見えない視線が酷く心をざわつかせた。

「……言い値で」

幾分粘つくような口を開き答える。覚悟を問われているのであるのであれば、私もそれなりのモノを差し出すべきだろう。金銭がそれに値するかは、人それぞれだが。

「言い値……ねえ。まあいい、忍つてのは高く買ってくれる人間にづくものだ。出すもん出しやあ誰にでも膝を折るさ。それに……うぐつ……」

全蔵さんは体をくの字に折り、そのまま崩れるように蹲うずくまるとケツを高く上げ、抑えた。ああ、痔病か……。一瞬前まで忍云々語っていた人物とは思えない姿で、身を振よじるように震えていた。ケツに振動を与えないようにか、妙な震え方をしているのが哀れを誘う。

ケツを抑える手とは反対の手を懐に差し込んだかと思うと、これまた震える手で札と、白い折りたたまれたメモを差し出してくる。

「わ、悪イ……薬を……」

ダラダラと変な汗をかいていた。使いにいけと？ これでは、どちらが雇い主かわからない。だが、哀れみを誘う姿で伸ばされた手を振り払う程に、私は鬼ではない。

「承知しましたよ。筆頭殿」

吉原にだって薬屋ぐらいはあるだろうと、受け取り、表通りへ向かった。

それに気付いたのは、通りへ出る少し前。てつきり愛用の薬名が書いてあるのだと思い、開いたメモに書かれていたのは、ある場所の名前だった。今はもう使われていない、小さなドック。吉原の片隅に残るそこは、忘れ去られた記憶の欠片のようでもあった。明るい灯と賑やかな囃子は遠く、錆びた鉄壁に張り付くようなむき出しの蛍光灯が、切れかかる寸前のように瞬いていた。

壊れた工作機械、コンテナ、ベルトの無くなったコンベア。そういった朽ちかけたモノ達の間を縫って歩く。一見倉庫にも見えるが、崩れかかったポットの残骸や、シャトルの椅子などが転がっているのを見るに、かつてはちゃんとしたドックだったのだらうと思いを馳せる。

——ゴーン

鈍い音にそちらを向けば、天井から吊り下げられたフックが揺れていた。壁にでもぶつかった音だらうと見当をつけ、振り返ったそこに……

「蜘蛛の糸を手繰り寄せ、わざわざ地獄へ来るとは」

積み上げられたコンテナとコンテナの間。暗く、沈んだ影に埋もれるように地雷亜が立っていた。

——ぴちやり……ぴちやり

水音。鉄錆の匂いの根源は鉄屑だけではない。暗闇に慣れた視界に入るのは、苦無から滴り落ちる血と、足元に広がる水溜り。十を越える屍が地雷亜の背後に横たわっていた。

「それは……？」

息を押し殺し、動揺をさとられまいと問うと、気だるげに、さしてたいした事のないような返事が返ってきた。

「犬にも劣る、屍喰らいの鴉どもよ。腐肉を漁りに常世まで来るとは。あまりにも煩かったのだな」

横たわる死体達の着物を着崩した姿は一見浪人のようにも見えるが、鬚まげや、顔立ちにいささか品がありすぎるようにも見えた。それに――。

「て、天に楯突いて……ぐがっ」

辛うじて息のあった一人。地雷亜は、スルリと袖口から滑り落とした苦無をためらいなく投げ打ち、トドメを刺す。

「少々、餌の匂いを嗅がせ過ぎたようだ。お前という存在をちらつかせただけで、この有様だ」

『天』と言った。そして『鴉』とも。それに繋がる存在といえは――だが、今は。

「地雷亜。人は地へ、月は空へ、蜘蛛は森へ。あなたの居場所はここにはない」

「そして、お前の居場所もここにはない」

「私の居場所は私が決める」

身勝手だという自覚はあったが、地雷亜は私の言葉を聞き流し、一歩、歩みを進める。

「アレは俺の作品だ。依る所を持たず、頼る者を持たず、孤独の中、私を滅して敵に刃を向け続ける。そう在らねばならない。そう在るべき俺の作品だ」

「月詠は月詠だよ。それ以外の何者でもない」

「愚かな。アレの何を知っているというのだ。アレの技は俺が仕込んだ。アレの道は俺が作った。アレの存在理由を決めるのは俺だ。夜王がいなくなり、敵は去った。ならば新たな敵が必要だ。敵はだれだ？ 俺か？ お前か？」

冷たい双眸が私を断罪するように、見つめていた。

——斬ることでは救えない何かを斬り捨てるのは正しいか。

総悟はそれと誤りだと言ったが……。

「私はそんな役どころごめん被るし、月詠はやっぱり月詠だよ」

「ならばその役は俺が貰おう」

——キュリ

微かにそんな音がした。

とたん襲いくる圧。思えば、地雷亜の後ろに転がる死体は丸太を鋭利な刃物で切り刻んだような体をなしていた。鋼線——地雷亜が得意とするそれが、私がここにくる以前から張り巡らされていたのだろう。

しかし、プツツ、その音を皮切りに、はらはらと、糸が落ちていく。

「ほう……鋼をも切り裂く俺の糸を絶つか」

油断なく苦無を構えながら、地雷亜は腰を低くする。

「地雷亜やめにしよう。アンタでは私には勝てない」

「そのようだな。だが——目的を達するのであれば何も打ち勝つ必要はない。そうだろうか？ 月詠」

私の背後へ発せられる言葉に思わず振り向く。月詠さんは、忍び装束を身に纏い、白粉も紅もさしていないというのに、遊女達にも引けを取らない貌を凜と上げ、そこに立っていた。

「月詠。どうしてここに？」

「どうしてもこうしてもありません。『ここに行けと』と、場所とそれだけを書かれた文が届いたというか、あれは投げ入れられたというのが正しいか。来てみれば——キリそいつは誰じゃ？ なぜ刃を交えておる」

その文の主というのは恐らく全蔵さんだろう。そうか月詠さんは知らないのか。今の地雷亜は、私の知っている姿をしていた。その名を告げるべきか、迷っていると、地雷亜がくつくつと笑いだした。

「久しいなあ月詠。随分と技を磨いたな。その苦無で何度敵を切った？ 何度日輪を守った？ だが——俺の化粧はまだ見破れなんだか」
ペリペリと、爪でこそぎ落とすように地雷亜はその化粧を解いている。四分の一。丁度右目から額にかけての化粧を落とすと、焼けただけれた浅黒く赤い肌と、眼孔の縁、めいっばいに見開いたぎよろぎよると——子供が見たら悪夢に魘されそうな、そんな目玉が姿を表した。

「……師匠？」

現実をにわかには受け止めきれないような眩きが月詠さんから発せられる。

「そうだ。思い出したか？ 月詠」

「なぜ……なぜ師匠、あなたがここにいる！ 生きていたのならなぜ！ なぜ！」

それはダムが決壊したような。幼子の慟哭だった。

糸繰りの歌

目を見開き、わなわなと震える月詠さんに対し、地雷亜は目を細め、懐かしそうな顔を崩さなかった。

「何故かと……。そうだな、お前を救いに来たといえればいいか。月詠、その頹落はなんだ。かつてのお前もつと美しかった。かつてのお前はもつと鋭かった。その様はなんだ。その姿はなんだ。安寧に身を落とし、墮落しきつたその姿はなんだ。俺の、俺の作り上げたお前は……。そうじゃない。」

一転、怒りと侮蔑が籠った声に、月詠さんはビクリと身を震わせる。「……み、未熟の致すところ承知。言葉もござんせん。けれど、決して鍛錬を怠つたことはなく……」

なんとか言葉を紡ごうと、唇を震わせる月詠さんに、地雷亜は首を振る。

「そうじゃない、そうじゃない……。俺が聞きたいのはそんな言葉じゃあない。なあ、月詠、その女を殺せ」

「師匠!？」

信じられないというように、目を見開く月詠さんに、地雷亜は言葉を続ける。

「その女、ソイツがなんなのか知っているか？ ソイツは種火だ。油のたっぷり染み込んだ種火だ。やがてその火は、江戸中を巻き込んだ大火を引き起こすだろう。お前は護りたいと言つたな。だから俺は技を授けた、だから俺はお前を育てた。ならばお前は、その任を真つ当しなければならぬ。そうだろう?」

「どういう……」

「人の身をしているが、ソイツはその身には莫大なエネルギーを宿している。この地球ほしの政権を覆す程の力。誰も彼もが、血液一滴、骨の一欠までを奪い合い、欲するほどの力だ。月詠、護りたいものがあるならその女を殺せ。でなければ、やがてその火は吉原をも飲み込むだろう。燻る種火の今だからこそ護れるのだ。なあ月詠、その女を殺せ」

「お……お言葉ではありんすが……」

「殺せ」

言い募る月詠さんに対し、地雷亜は他に方法はないのだというように、強く断言する。奥歯を噛み締め、月詠さんは惑うように私に視線を寄越した。

「地雷亜、アンタの欲しいもの当ててあげようか？」

私の言葉に、月詠さんを見つめていた地雷亜が顔をこちらに向けてる。

「俺の欲するものがお前に分かるというのか……面白い」

「写し身。アンタが欲しいのは写し身だ。己の写し身……。私を殺す？ 悪いけどツツキーには無理だよ。ツツキーはそんな非情な女じゃあない。アンタが思ってるよりずっといい女なんだよ」

「……聞く価値もない戯言だったな。月詠！ 苦無を抜け!! 構えろ!!!」

強い怒号に、脊髄反射のように月詠さんは苦無を手にした。そして、手にしてしまった自身を呪うかのように顔を歪めた。

「師匠……わっちは……」

「狙えー!」

重ねて告げられる地雷亜の言葉に、ギチギチと、まるでゼンマイの巻かれた人形のように、月詠さんは私と相對する。まるで見えない糸に絡め取られ操られているかのような姿に迷った。何が正しいのか？

と、カツン、カツンと、堅い足音が木霊す。

「吉原一二を争う美女交えて乱交パーティーやってるって聞いてきたんだが……コイツ指してそれうたってんなら過大広告もいいところだろよ、オイ」

振り向けば、壊れた機械や、コンテナの間から、にじみ出る人影。ゆるゆるの銀髪パーマメントで、シリアスをぶっ壊しにきたとばかりに、木刀を肩にかけ、銀さんは鼻をほじっていた。

「わらわらと羽虫がよくも群がってくる」

忌々しげに地雷亜が言い捨てる。

「おたくがうんこくせー顔してつからだろ？ 羽虫どころか蠅だってたかるだろうぜ」

言葉と同時に銀さんが鼻くそを飛ばす。

カーンと、地面に降ろした木刀の先甲が高い音を立て、響いた。その音に呼応するように、地雷亜は自身も苦無を抜く。

「……何匹たかろうと同じこと。的が増えたに過ぎん。お前は俺が相手してやろう。月詠、続ける」

——ダメだ。

そう強く思った。

「地雷亜!!」

再度強く呼ぶ。

——ギンツ

地雷亜の手から放たれた苦無が、木刀に弾かれ鈍い音を立てる。

ダメだダメだダメだダメだ。何か、何か!!

「地雷亜!! 私!! 私に仕えろ!!」

ガキツと苦無と木刀が交差する境目。瞼のこそげ落ちたギョロリとした目と視線が合った。

ギチギチとしばらく力比べのように押し付けあった苦無と木刀が離れ、距離を取った地雷亜が値踏みするかのように私を見つめる。

だが、

「月詠」

静な、淡々とした声であった。

「来い」

「……師匠」

迷うような素振り一度月詠さんはこちらを向いたが、やがて暗闇の中に溶けていく地雷亜の背を追い消えて行った。

因果ハ応報ス

耳に痛いほどの静寂が場に満ちる。

「フラれちゃった」

てへぺろと、軽く濁してみるが、付け焼き刃の刀ではシリアスの空気を切り裂くには力及ばず、生ぬるい空気に包まれる。

深い溜息とかぶりを振った銀さんは、何かを言おうとして、口を開きかけ、眉をしかめたのち、つぐんだ。

ならば、代わりの答弁を紡ぐのは私の役目とばかりに口を開く。

「いや、アレだよ？ 選ばれた理由は、胸の大きさとかじゃないと思うよ？ 体の相性とか大事じゃん？ うんうん」

「もういい。なんか疲れた。けーるぞ」

けれど、銀さんはガリガリと頭を掻くだけで、木刀を脇に刺し、酷い現場——惨殺死体やら、半分切り落とされ今にも崩れ落ちそうなコンテナやらを尻目に、私の手を引き地上を目指し歩きだす。

倉庫から離れ、朽ちかけたあばら家の連なるスラム街のような場所を通り抜けると、ちんとんしゃんとかき鳴らされる三味線の音と共に、桃源郷は桃源郷たる姿を見せ始めた。

そういえばと思いつく。

「あー……日輪さんになんて言おうか」

頭が回っていない時というのは回っていないという自覚すらできない事を知った。

「日輪？」

誰だそれとばかりの銀さんの声に、私は言葉を足す。

「日輪太夫。吉原一番の大太夫……元がつくけど。取りまとめ役というのかな？ まあアレやこれやをお願いしていて月詠さんの事をどう言うべきかなあ？ と。師匠と二人で愛の逃避行と伝えてもいいけど、納まりが悪いじゃない？」

「……………」

返事がないことに訝しんで顔を上げると、銀さんは目を細めて呆れ果てた様な表情を浮かべていた。

ああ、そういえば吉原のことは何も伝えていなかったのだ。失言を悟る。本当に頭が回っていない時というのは、頭が回っていないのだな。うん。

「そ、そーいや銀さんはなんでここに？」

「どつかの誰かさんが吉原によく出入りしているって見聞きした奴がいて、身売りすんじゃないかねーかってご近所さんが噂しててよおおおお？」

とつさに変えた話題は更に墓穴を掘った。ピキピキと浮かんでいる血管は見間違えであつて欲しい。そんな噂が流れているとは……。新八君や神楽ちゃんはずいぶん煩かっただろう。

「ま、まあ、人には色んな事情があるし……？」

「そーですねー」

無理やりの責任転嫁を棒読み口調で許してくれた銀さんは、「で？」と顎をしゃくった。

「で？ とは？」

イマイチその意味を汲み取れず首をかしげる。

「これからどうすんのお前」

「これからって、いやほらどうにかするよ？ ちちんぷいぷいって」

「具体的にはどうすんのかって聞いてんだよ」

「いや、聞いちやう？ 聞いたら面倒臭くなるよ？ ほら、面倒臭いの

銀さん嫌いじゃん？」

「いや、もう十分面倒くせーから」

投げやりな口調とは裏腹に、銀さんの目は座っていた。本当に失敗したと悟ったのはこの時だった。

「ごめんください」

そんな銀さんを連れて本日二度目のひのやの暖簾を潜る。ちょうど客が退けたところなのか、年季の入った木の椅子と机が並ぶ店内は閑散としていた。

端の方で紫の座布団を椅子の上に敷き、書き物をしていた日輪さん

が私の声に顔をあげる。

「おかえり。おや、月詠は一緒じゃないのかい？」

日輪さんは月詠さんの姿を探すように視線を外し、「入れ違ったのかね？」と首を傾げた。どう伝えようか一瞬迷った末、ゆっくりと言葉を口にする。

「月詠さんは、地雷亜と一緒に行ってしまったよ」

「じらい……なんでその名前が……。最初から訳を話して頂戴」

動揺を一拍に封じ込め、日輪さんは芯の通った表情を作る。一連の事件をどう説明すべきか、私は言葉を悩ませながら口を開いた。

「実は――」

事実と、想定と、過去の記憶を混ぜないよう説明するのは困難を極めたが、日輪さんが地雷亜と旧知の仲でもあったことに救われ、一通りの事件について説明を終える。

かくかくしかじかうんまい棒はうまい的な説明を重ねる度に、後でまとめて説明するからと捨て置いていた銀さんの表情がどんどん抜け落ちていき、最終的には何を考えているのか良く分からない、目が2つあって、鼻と口が一つある顔に落ち着いた。怒っているのか呆れているのか、はたまた何かを考えているのか……。

対して日輪さんは口惜しそうな表情を浮かべていた。

「馬鹿だねえあの子も。今更なんで……」

『今更』という言葉がやけに重く響いた。一度そこで日輪さんは言葉を切るが、「それはそれとして」と続ける。

「月詠は今どこに？」

まるで私がそれを知っていることが当たり前のように聞かれた。

「……鳳仙の城」

隠しても仕方がないとゲロる。

鳳仙城と呼ぶべきか、地下にありながら至上人が住まう場所だったそこは、事件の後、使用不能の廃墟となっていた。取り壊すか、再利用するか迷い放置していたその場所に地雷亜と月詠さんはいる。放った鳥からの映像は、薄暗い室内。朱塗りの柱と、金箔が張られた豪華な建具を映していた。そこは――吉原を一望できる城の最上階。

壁にもたれ何かを考えるような地雷亜に対し、月詠さんは膝をつき命を待つかのようじつと伏せている。

結局そこにいきついてしまった。

「そうかい」

日輪さんはそう告げるだけで、どうしろとも、どうするんだとも言わなかった。

「心配しないで、私、ちゃんと月詠ツッキを取り戻してくるから。銀さん、いこうか」

日輪さんを見続けられなくなった私は、銀さんへ視線を移し告げる。現状手一杯である私ができる贖罪しやぎだった。

「しゃーねえなあ、手伝ってやるよ」

やれやれという顔で、銀さんはそれに応える。

ひのやを出た私は言ったはものの、果たして本当に、月詠さんを取り戻せるのだろうか？ と考える。ちんぷいぷいの魔法は、人の心をかどわかすのには全く不向きなのだ。

「はあ〜」

ため息が思わず漏れた。それに反応したという訳ではないのだろうが、銀さんが「なあ」と言った。

一歩後ろを歩く銀さんは特有の掴みどころのない表情を浮かべていた。

「なに?」

「お前、何も変わってねーよ」

怒っていたのか。半オクターブ低くなった声は私を責めていた。

「人はそう簡単に変わりません〜」

語尾を延ばし嘯うそぶく。

昔の样にも感じる。かつて、真選組の屯所から出た私は銀さんに拾われた。応酬の後、打ち砕かれた私は何か変わったと思ったのだけだ……。やはり人は簡単には変わらない。

私にはどタマから股間をまっすぐブチ抜いて存在する様な器官は

無い。代わりに、真つ直ぐに立つために外殻を作った。今更それ無しでは生きられないのだ。

だから肯定する。銀さんの怒りは正しいと。

開き直るのが正しいか？　と言われたら――

「お前は……そんなにお前が嫌いか？」

張り巡らした嘘を断罪するような言葉だった。聞こえていた三味線の音が途絶え、一瞬の空白を作る。こういうの、天使が通ったっていうんだっけ？　銀さんの問いから逃避するかのように思考は巡り、五歩進んで答えを得る。

猥雑な人混みの中、すれ違った花魁の白粉が^{けぶ}烟る。

「銀さんのそーいうところ、嫌いだなあ」

これはあの日。私が魔法を使えなくなったあの日のリピートだ。

人が一番暴かれたくない嘘を、白昼の元に晒す行為。その先は――

「答えろよ」

逃げることを許さないというような声に、私は悔恨を口にする。

「私の母さん自殺したんだ。私の目の前で。揺れてた」

線香が立ち上る仏壇と、回り続ける扇風機。

首を締められ気を失い、再び目を覚ました時――鴨居にぶら下がった母が私を見下ろしていた。

――赤く腫れた顔。

――だらし無く開いた口から垂れる舌。

――ガクリと折れた首。

――飛び出した目。

『鮮明に覚えていた』

三味線の音が再び鳴り響き始める。

喧騒に声がかき消されてしまえば良いのにと、吐露した言葉を後悔すると同時に、暴き立てた嘘の代償を償わせると、胸の内から湧き上がる怒りが私を突き動かす。

「私が聞いた母さんの最後の言葉。『お前なんか生まれてこなければ良かった』って、母さんが私の首を締めながらそう言うんだ。私ね、どうしてか、その言葉が今も耳に残って離れないよ……。銀さん！」

言い切ると同時に振り向くと、驚いた銀さんはたたらを踏む。

「ねえ、銀さんもさあ、そーいうの覚ええない？」

疑問系の形を問いながら確信をもっていた。銀さんも、あのひとの言葉をずっと、ずーと覚えているでしょう？ その上で、私に何を言うの？

「それは……」

珍しく銀さんは次の言葉を紡げずにいた。目がいつもより開いている銀さんを見て、人意地の悪い私は、安堵にも似た満足感を得る。

「だから私は救われたくないんだ。行こう、月詠さんが待つてるよ」

ダメ押しのように伝え、人々が行き違う道の先。そびえ立つ牙城のてっぺんを見据え、再び歩き出す。

そうか、私は救われなくなかったのか。言葉に出した答えが、すっと胸に落ちた。結局のところ、私も地雷亜と同じだ。

同族ハ嫌悪ス

崩れかけた階段をのぼり、割れた床板を避けながら、最上階を目指す。あの後なんとなく気まずい雰囲気になってしまった銀さんとは口を聞いていない。後悔は先に立たずとは良く行ったものだ。昔の人は凄いなあと、江戸むかしに住まう自身を柵上げる。

木くずと埃の混じった最後の段を踏みつける。

上りきった最上階そこから見える街は宝石箱をぶちまけたような輝きを放っていた。

開け放たれた障子戸を背に、月詠さんは私達を出迎えるように伏せている。まるで、地雷亜に仕えるように。

「やつほー月詠ツッキ、遊びにきたよ」

私の声に月詠さんはピクリと反応肩を震わす。が、それだけだ。代わりのように傍らに立つ地雷亜が月詠さんに視線を向ける。

「月詠」

その言葉に、月詠さんがゆっくりと、顔をあげる。

視線が合う。覚悟を決めたような目だった。

そのままスクリと立ち上がると苦無を構えた。

「地雷亜、分かっているとと思うけど、月詠さんじゃあ私の相手にはならないよ」

「……月詠」

私を素通りした地雷亜の言葉に、月詠さんの踵が浮き、前傾姿勢となる。

殺気に反応して、銀さんが半身をズラしたのが分かった。

「月詠ツッキやめようよ」

「その名で……呼ぶな！」

ダンツと音が鳴るほど力強く地を蹴り、月詠さんが迫る。

射線上に飛び出してきた銀さんの木刀と、苦無が交差する。

「……どいつもこいつも腐れた縁に囚われやがって」

「知ったような口で……そこを退けっ!!」

声と同時に、ひとときわ力強く振るわれた苦無を銀さんが逸らす。

「……!?!」

「銀さん、上!」

気がそれた一瞬の間に飛び上がり、銀さん視界から逃れた月詠さんは、頭上から無数の苦無を投げ放つ。

声に反応し、曲芸のように銀さんは崩れた姿勢から無理やり木刀を振るう。計八つの苦無が放たれ、五つが木刀に弾かれた。残り三つ、急所を外れ、だが間違いなく命中すると思われるそれは、見えない壁に阻まれたかのように軌道を変える。

間髪をいれず、両の手で苦無を握りしめた月詠さんが降ってくる。だがそれは、龍翔閃よろしく、打ち上げられた木刀に阻まれ、打ち返される。

もんどり打って着地した月詠さんは痛そうに顔をしかめつつも油断なくこちらを見つめていた。

それに相対する銀さんもまた、護るように私を背にし再び構えを取る。

「強襲、追撃……さすが吉原の女、どつから何が飛び出てくるか分かりやあしねえ。怖工エなあ、オイ」

「ならばそこを退け。わっちの用があるのはその女だけじゃ。退くのなら悪いようにはせん」

どこかすつとぼけた銀さんの口調に、月詠さんが険のある言葉を返す。

しかし、背後から飛んできた地雷亜の言葉に、月詠さんは顔を歪めた。

「生ぬるいことを……。月詠、お前はまだ分かっているいな」

「……申し訳……ありません」

「女に戦わせておいて、てめえは高みの見物ってか？ 随分といい身分じゃねえか」

「……………」

返す銀さんの言葉に、地雷亜は無言を貫き通す。

再び始まった剣戟。ガギン、ガギンと、苦無と木刀が合わさり、弾け、また合わさる。たまに弾き損なったモノは、私が補う。互いに決

定打を打てず、時間の経過と共に体力を消費し――

「ハアハア……」

「……ハア……ハア」

息を荒げ、にらみ合う。

「地雷亜、こんなの無意味だよ」

「月詠」

地雷亜の言葉に、僅かに下がっていた苦無が、構え直される。

「月詠!!」

静止の声を合図に、再び苦無が振るわれる。

「止めるか。ならばなぜ、お前は殺さない」

初めて地雷亜がこちらを向いた。容赦のない言葉は続く。

「お前の力を持つてすれば殺すなどたやすいだろう。なぜ終わらせない。無意味な戦いを続けさせているのはお前の方ではないのか」

「私はそんなに優しくくないんだよ。地雷亜、私があんたに仕えるって話もつかい考えてみない?」

「まだそんな戯言を……」

「月詠よりは腕が立つと思うんだよ?」

――ギンツ!

ひとときわ高い音をたてて苦無が弾けた。手持ちの苦無が尽きたのか、無手になった月詠さんは体術を駆使して、銀さんへ攻め打つ。

「下らん」

肉体と木刀がせめぎ合う音をBGMに、地雷亜は私の提案を一蹴した。

「残念、結構似た者同士、相性もいいと思ったんだけどね。でもさあ、なんでそんなに月詠ツッキに拘るの?」

「アレは俺が手塩にかけて育てた作品だ。作品を愛さぬものなどいないだろう?」

「本当にそう? あんたも見たんじゃないの? どんな闇の中でも決して輝きを失わない綺麗なお月さんを」

「……知ったような」

「それとも、あんたの死んだ妹を重ねてるの?」

「口を叩くなッ！」

吠えるような答えと共に、鉄鋼に覆われた拳が飛ぶ。寸前に避けた私を続けざまに蹴り上げる。転を打ってそれも避ける。畳み掛けるような応酬を相手にとり、私は地雷亜を責め立てる。

「知っているから叩いてるんだよ！」

「お前に何が理解できるっ!!」

鉄線が私を絡め取ろうと宙に舞う。敢えてそれを巻取り引き寄せた。

羅刹のような形相を浮かべた地雷亜を眼前に、啖呵を切る。

「弟が死んだ。母親も死んだ。私が殺した！ だから分かるよ！ アンタのそれは孤独を乗り越えた強さなんかじゃない！ 歪んだ自己愛を他人にぶつけているだけだ！」

「黙れ！ 黙れ！ 黙れえええ!!」

バチツと鋭い音をたてて鉄線が地雷亜の手から切り離された。地雷亜は三步距離を取り、飛び上がると、宙に張った鉄線を足場に縦横無尽に駆け巡る。そこから放たれる苦無は、三次元的に飛来し、実際の数の倍の倍にも感じられた。

それを手にした鉄線で絡め取り防ぐ。

背後に位置するであろう地雷亜を振り向こうとした瞬間、ビシツと音がして頬が切れた。

ブラフか。よくよくみると、狙いを外し床に突き刺さった苦無には細い線が繋がれており、私を取り囲むように張り巡らされていた。

「だから無駄なんだってば」

ビン、ビンと糸を切る。と、同時にからくりでも施されていたのか——四方から逃げる隙間も無いほどの苦無が部屋中にばら撒かれる。

「銀さんっ!!」

「畏だった!? 慌てて振り向いたそこには——月詠さんをかばい、銀さんが全身をハリネズミと化していた。」

「なぜ……」

戦慄くように呟かれた月詠さんの言葉は、銀さんに向けられたものだったのだろうか？ あるいは——

「……つてえな、オイ」

ぼとりと、血の塊が落ちた。うめき声と共に、銀さんは肩から苦無を引き抜くと投げ捨てる。カランカランと乾いた音をたてて、地面に転がる苦無は真つ赤に濡れていた。

「血迷ったか……。その腕ではまともに剣も握れまい。時代遅れの武士道精神でも掻き立てられたか」

「違えよ」

カンツと再び引き抜かれた苦無が地面を跳ねて転がる。

身を起こした銀さんは、一つづつ苦無を引き抜くと、びっこを引いた足で、地雷亜に歩み寄る。対して宙に張った糸の上に立つ地雷亜は、目を細め、月詠さんへ視線を向ける。

「月詠、何をしている立て、構えろ」

「……違う。こんなのは間違っている!」

「月詠、お前には特別目をかけたつもりだったんだがなア」

地雷亜と、月詠さんの問答に割り込んだのは地の底を這うような銀さんの声だった。

「……じろ」

「その傷でまだやる気か」

「閉じろ」

「……何を」

「その薄汚たねエ口を閉じろつってんだよおおお!!」

咆哮と共に地雷亜に木刀が叩き付けられる。死に体とも取れる動きから一転、床板に罅が入る程の踏み込み、跳躍。反応しきれず地雷亜はもんどり打って地に落とされる。

「……ぐっ」

「切り捨てた分際で、使えろと判断したら拾って、焚き付けて。外道が。テメエなんざが師を名乗ってんじやねえ!」

うまく着地もできず、剣を支えに膝をつき息を荒げる姿。だがその双眸は爛々と輝きを失わず、地に落ちた地雷亜を睨みつけていた。

「負け犬が……。続きは地獄で吠え続けろ」

身を起こした地雷亜が、トドメを刺そうと獲物を手に振り下ろそう

とした瞬間、風切り音が鳴った。

「月詠……お前まで裏切るか」

地雷亜の利き手に突き刺さった苦無は、月詠さんが投げ打ったもの。

「師が誤った道を行くのなら、止めるのも弟子の役目」

「そうか、なら……死ね」

地雷亜は己の手の平に突き刺さった苦無そを引き抜くと、月詠さんに向ける。

——潮時か

だが、放たれる筈の苦無は、力を失った手の平から零れ落ち、足元に転がった。

「師匠？」

「……がはっ」

心臓に一突き。拾った苦無を投げたので、それが元は地雷亜のものであったのか、月詠さんのものだったのかは分からなかった。

倒れ落ちそうな地雷亜に駆け寄った月詠さんはその身を支え、地面に寝かせた。困惑を含んだ表情でこちらを見つめるので、私はコクリと頷く。

「恨むなら恨んでもいいよ」

「恨むなど……滅多なことを言うもんじゃない」

「地雷亜はさ、月詠ツッキが離れていくのが嫌だったんじゃないかなあ」

「知っておる。キリ……わっち は弱いな。わっちがもっと強ければまた違った結果があったのだろうか」

まだ暖かいであろうその身に触れる月詠さんは苦渋に満ちた顔をしていた。違った結果こそが正しいと知っていながらも、そこに至る道を辿れなかった私は、その問いを曖昧に濁すしかなかった。

「どうだろう。私には分かんないや」

「済まぬが、しばらく二人きりにしてもらえぬか」

「うん。銀さん、立てる？」

「……ああ」

フラフラと身を起こす銀さんを支えながら、私は牙城を後にした。

「銀さん、月が見えないや」

「……上に戻りやあ見えるさ」

「そうだね。お月見したいなあ」

寓話 かぐや月夜

半額のシールが貼ってある団子をパックごと並べて。ススキは時期じゃないから、代わりに猫じゃらしを。そもそも十五夜っていつなのだろうか？ まあ、そんな月見もいいんじゃない？

「オイラも買ってきたよ!! 吉原で今一番人気の団子屋なんだ!」

「これ、団子つーかア○ルビー」最後までいわさねーよ!」

銀さんのアダルテイな言葉を遮ったのは新八君。隣で晴太君が斬新な形の団子——串の代わりに紐で繋がれている——を取り出し、並べる。

包には芋虫団子と書いてあるが、粘ついた透明のタレといいどころはどうみても……まあ、そんな月見もいい……かもしれないあく。

錆びついた機械に手間取りながら、吉原の空は開かれた。

「吉原で月が見れる日が来るなんてねえ」

日輪さんが嬉しそうに目を細めていた。

「そうじゃの」

月詠さんも並び立ち、同じように目を細め月を眺めている。

月詠さんはあの後人知れず地雷亜の墓を作り弔ったそうだ。本来は墓など作らないとは全蔵さんの談だったが、どうやら見逃してもらえたようだった。

一週間ばかり、気落ちしたようにも見られた月詠さんだったが、徐々に元気を取り戻し、銀さんの怪我が直った快気祝いだと月見をする次第。

「いい月ですなあー」

「いい月アルな」

知ったような顔で私の言葉に相槌を打つ神楽ちゃんは、モサモサと両手に団子を抱えており月なぞ見てはいない。

「オイ、何どさくさに紛れて俺の分も食おうとしてんだ」

「成長期ヨ。銀ちゃんと違って多感なお年頃ネ。いろいろ入り用アル」

他人が買った団子の奪い合いとはさもしいものだど、横目にみつ

つ、すでに確保してあった自身の団子を一口。芋虫団子は、銀さんと神楽ちゃんに譲ろう。そつと、奪い合いの中に混ぜると、ドサクサに紛れ口をつけ、二人して咽っていた。

「月詠はどれが好き？」

「そうじゃな、みたらしか……いや、あんこも……」

「オイラよもぎ！」

「コレ晴太そのぐらいにしときなさい」

「つちえー、じゃあこれラスト」

日輪さんに窘められ、晴太君が舌打ちをする。

月詠さんはそれを見ながら、結局のところあんこを手に取り口にす
る。

「じゃあ、わたしはみたらしを貰おうかな」

「うまい……なあ」

「そうだねえ〜」

みたらしのタレが服につかないように上向きに顔を上げていたら「なあ、キリ」と呼びかけられた。丁度タレが垂れてくるところだったので、私は振り向けず、口をあけたまま、「ああ？」とブサイクな返事を返した。

「団子というのはこんなに美味しいもんだっただか」

どこか遠い過去を思い出すような視線に、返す言葉を探せず、私はそのまま宙に浮かぶみたらし団子の二つ目を口にしました。

三つ目を口にする前にどうか言葉を返そうと口を開くが音にならず、結局は噤むしかなかった。

「おかしなことを言ってますまなんだ。久しく食べてなかったんでな、とうに味を忘れてしまっただけでありんす」

かぶりを振る月詠さんに、数日ほど前突然万事屋にやってきた様子を思い出す。涼しい顔で、何事もないかのようにお月見会の設営を依頼してきた月詠さんは、「頼まれてくれるじゃろ？」と言った。

万年金欠の万事屋はにべもなく頷き、私も断れずに頷いた。

何を思っているのか、想っているのか、とんと聞けずじまいだった。

「私の母さんさあ、月にいるんじゃないかって思ってた」

「……？」

「私は月から来たお姫さまでさ、地球のお母さんは本当のお母さんじゃなくて、本当のお母さんは月にいるんじゃないかって」

子供の頃の夢物語だ。弱くて小さい私は、「嘘」の世界に逃げ出すしかなかった。

唐突に始まった夢物語に当惑したように月詠さんは眉をひそめる。

「それは……」

「変なこと言つてごめんね。私は弱くつて、今も多分。私はあの頃とそう代わりないかもしれない。だからかな。他人に頼るつてことがなかなかできないでいる」

「そんなことは……」

「月詠はさ、強いせいで誰にも頼ることができないでいる。でも本当に強い人はさ、ちゃんと頼り方を知っている人なのかもしれない」
「……」

押し黙ってしまった月詠さんが何を思っているのか私は知らない。見くびるなど怒っているかもしれない、お前が何を言うんだと呆れているのかもしれない。

「ねえ、月詠。月はいつだって綺麗だね」

「……そうじやの」

硬質な返事は、私の預かり知らない感情だった。

天国に祝杯を エリー、と

吉原の事件の後、クビにはならなかったものの、無断欠勤常習犯として目をつけられてしまった——ロツカーを共同で使うパートのオバサンに。悪い人じゃないんだけど曲がったことが嫌いな人で、「あんたのためにいつてるんだよ？」から始まった説教はぐうの音もでない正論で、しばらく静かに誠実に過ごそうと心に決めたのだった。

ポイントカードはお持ちですか？ レジ袋は必要ですか？ お会計は……ただただそれを繰り返す機械になろう。相棒はこの赤い光線を出すバーコードリーダーだ。ハードボイルドに生きよう。そう心に決めたそんな折、

「ポイントカードはお持ちですか？」

「生憎と、ああレジ袋は結構です。シールだけで。それとは別で、ちよつと署までご同行願えませんか？」

ハードボイルドに生きると決めた矢先ではあるが、ハードボイルドな台詞がまさかスーパールのレジカウンターで聞けるとは思っていなかった。

お茶でもしませんか？ というノリで放たれたセリフに対する回答よりも先に、思わず使い慣れた言葉が口をつく。

「ポイントカードお作りしますか？」

「いえ結構です」

「合計は三百十五円になります」

「後ろに車停めているので、一緒に来てください」

「おつりとレシートになります。クーポン券がでておりますので、次回お使いください」

「ふむ」

「では、またのご来店をお待ちしています、ありがとうございました」
「こちらとしても穏便に済ませたいところなんです……おとなしく一緒に来てくれませんか？」

眼の前の男は、薄茶色の髪をなでつけ銀縁のメガネの奥から鋭い視線を投げかける。

胡散臭い笑みは鴨ちゃんに通ずるものがあるなど、一人で感心しながらスーパーのロゴが入ったエプロンを外す。

「すみませーん、休憩入りまーす。帰ってこれないかもしれないので後頼みます。お並びのお客様、申し訳ありません隣のレジに並んで頂いてよろしいでしょうか?」

「えっ!? ちよ、ちよっと!? 店長! 店長! またあの子が勝手してます!!」

多少の混乱を無視した私は、男に先導されるがままにスーパーの裏手に向かう。

「念の為に聞くけど、ささきいさぶろう佐々木異三郎で間違いない?」

「おや、よくご存知でいらっしやる。そのとおりですよ」

みまわりぐみ見廻組長官は——非番なのだろうか袴姿で、片淵メガネの奥から涼やかな視線を投げかけた。

言葉通り、スーパーの裏手に止められた車の後部座席に座らされた私は、目的地不明のミステリーツアーに強制参加させられる。

乗り込む前、一応の抵抗を示したのだが口弁でこの人に敵うわけもなく……。

「いいかげん、目的地教えてくれないんじゃないの?」

「見てみたほうが早いでしょう。もうすぐつきます」

さつきから言葉を変えやりとりした行為だが答えてくれる気はないようだ。そうこうしているうちに、車はある工場の前にたどり着く。異三郎の目的地はどうやらそこだったようで、路肩に止めた車から降り大きく間口を開けている表口から中へ入っていく。

溶かされた鉄が鋳型に流され成型され、ベルトコンベアの上を流れていく。その先で工場で働く人達によって、それが部品の形に組み立てられていく。

「(ト)は?」

「普通の町工場ですよ。どこにでもあるね」

異三郎の言葉通り、たしかに普通の町工場のようなだった。イマイチ要領の得ない回答にうなずきながら、異三郎の後ろについて工場の奥へと歩みを進める。

「ふざけるなっ！」

そう荒げる声が聞こえたのは、工場の奥、事務所に続くであろうドアの前であった。何事かと訝しむ私を置いて、異三郎は迷いなくそのドアのノブに手を掛ける。

「こんにちは」

昼行灯のようなのそりとした動きでドアをくぐった異三郎に、男二人の視線が向く。

「あんたは……」

「これはこれは、ちようどいいタイミングで」

男のうち一人、作業着を着た男性は誰だ？ と誰何すいかする一方、もう一人の男……ライオンの顔をした天人はにこやかな笑みを異三郎に投げかける。

「いやあくね、こちらの工場長が頑固で頑固で、どーしてもこちらの話を聞いてくれないものですから、管轄違いだとは重々承知なんです
が、顔を立てると思って少し話を聞いていってくれませんかねえ？」

工場長、こちらはほら前に言っていた僕の知り合いで、政府の……ね」
ライオン男の場違いにも感じるさわやかな笑みとは対照的に、工場長と呼ばれた男は渋面を作る。

「政府のおえらいさんが、寂れた町工場になんのようだ」

ぶすくれた態度に、ライオン男は言葉を重ねる。

「いやあく僕まだ地球の『法律』に詳しくなくて、ほら、色々難しいでしょう？」

「どういう意味だ……」

強調された『法律』の言葉に、工場長が反応する。

「この前言ったほら、あれ、やっぱまずいんじゃないかなあ〜って」

「あれは！ あんたらがそうやれって言ったんだろう!？」

「いやねえ〜。あとになってやっぱまずいんじゃないかなあ〜と思っ
ちやって、それで話を聞いてもらおうと」

「ふざけるなっ!!」

話の内容から推測すると異三郎はこのライオン男に呼ばれてここに来たのだろう。工場長とは初対面のようなようだ。そしてライオン男と工場長は過去になにか法に触れるようなことをした——あるいはグレーゾーンな事を。疑問に思うのは、共犯であるはずのライオン男が、なぜ異三郎を連れて裏切るような真似をしたのか？ ということだ。

「怒らない怒らない。僕と異三郎君との仲だから、やつぱりまずいつて事になったらここだけの話にしておいてくれるんじゃないかと。もちろん工場長も僕と今後も仲良くしてくれるなら、異三郎君もちやんと分かってくれると思いますよ？ あくまで確認ですよ確認」

「くそっ……」

舌打ちする工場長と、さわやかな笑みを浮かべるライオン男。

つまりこういうことか、ライオン男はこの工場長を脅しているところ……。異三郎は脅すためのブラフ。そこからの続きは工場の買収のための交渉。それは言うまでもなくライオン男に有利な条件で締結され、工場長は被っていた帽子を握りしめて悔しさと怒りで顔を歪めていた。

工場から出た私達は再び路肩に止められた車の中に戻ってきた。だが、エンジンを始動させることなく異三郎は口を開く。

「普通の町工場だったでしょう？」

「普通の……ね」

「どこも同じですよ。同じようなことが場所を変えて、人を変えて行われている。……すべてをひっくり返すには途方も無い力がある」
「それではないスーパールの店員味方につけて決起でも起こそうという訳？ そーいうのはどこぞの攘夷志士じやういしにでも任せておけっすよ」

「ふむ……まあいいでしょう」

あくまでしらを切る私に、それ以上言い募るでもなく異三郎はエンジンを始動させた。

そして再びスーパールの裏手に車は止められた。

「ありがとうございます」

「これは独り言なんですがね」

社交辞令を口にしながら車から降りる私へ、窓を開けた異三郎から言葉が投げつけられた。

「はあ……」

独り言なのだから、返事をするのもいかなものか？　と思いはしたが適当に相槌を打つ。

「当事者じゃない人間が手を出すのは良い結果を生み出さないと思うんですよ。人にはそれぞれ居場所ってもんがあるでしょう。できれば私は……いや止めておきましょう、では」

座りの悪い言葉だが、独り言というのであれば文句を言うのも筋違いであるわけで、まあなんとするか、異三郎の意図を理解しえぬままに私は彼を見送った。

ハイオク満タン焼酎も

本日の業務も終わり、更衣室のロッカーから携帯を取り出した時だった。珍しく着信ランプがついているのに気づき、画面を開く。

また子だろうか？ 高杉に渡した携帯はなぜかまた子に渡ったようで、罵詈雑言から始まったメールのやり取りは時を経て、今日の夕飯の写メを送り合う仲へと進化した。唯一のメル友と呼んでも良い。今日の夕飯はなんだろうか？ 昨日は肉だったから魚かな？ と想像しながらメールの受信画面を開くと……。

『キリたんお疲れさま。ちようど今近くのスタバいるんだけど、キリたんもどうか？ 待ってるヨ（・ω・）』

怪文書だった。

無視して帰ろうかと思ったが立て続けに鳴る着信音に反射して次のメールを見てしまう。

『さっきのメールだけど、さぶちゃんからでした☆突然でびっくりした？ ごめんね（・ω<） 新作のフラペチーノ美味しいお（^o^）／』

更に着信音が鳴る。誰か携帯電話を握りつぶさないでおいたことを褒めて欲しい。何度目になるか分からないが、個人情報保護法を一から勉強して頂きたい。仮にも警察だろう。

震え続ける携帯を鞆に押し込み、職場をあとにする。

「待ってましたよ」

相変わらずの私服姿で、コーヒーチェーン店のカウンター席に佇む様は場違いじみたものを感じさせるも、このおもちゃ箱をひっくりかえしたような江戸の中においては私の感覚などあてにならない。現に、周りの人間は距離を置くでもなく普通に過ごしている。単に関わり合いになりたくないという可能性も否めないが。

「そこは丁度今来たところってというのがジェントルなんじゃない？」

「ふむ……」

カウンターでアイスコーヒーを注文するついでにそう声をかける。

注文し終え、

『丁度今きたところだお／＼(・o・)／』

携帯の画面にそんなメールが届いた。

『本当?・よかった!!／＼(・ω・)／』

コーヒーを受け取りながら、そんな返信を返す。何やってんだらう……。

「それで、今日はどんな用事なんですかね?」

カウンター席の隣に座り、ぞんざいになりつつつつある口調でそう尋ねると、今日は今日ととある反物問屋と一緒に来て欲しいという話だった。ふむと頷きながら、

「そこってどんな店なんですか?」

そう問うと、

「どこにでもある普通の問屋ですよ」

という答えが返ってきた。ズズズと、ストローでわぎと音を立ててコーヒーを啜れば、嫌そうに異三郎は顔をしかめた。

いい気味だと、更に音を立てて啜る。

「もう少し上品に飲めないものですか? 仮にも女でしょう貴女」

「上品に振る舞う相手ぐらい選びますうー」

結局だ、そのままのらりくらりと押し切られ、まあ想像どおりの『普通の』反物問屋に連れて行かれ釈然としないまま車から降ろされる。

「これっていつまで続くんです?」

「さあ……私はしがない公務員ですからねえ、上の命令に従うだけですよ」

愛想の欠片もない顔で言い放たれた言葉は予想通りで、どうしたもんかと頭を捻らせる。付き合う気もないのに曖昧な態度を取るの相手にも失礼だろう。相手が慇懃で無礼であることは諦めるより仕方ないとしてもだ。憎めないというのはずるい特性だと思うのだ。

結局のところ、流されるままにアパートまで送ってもらい、異三郎の運転する車を見送った。

そんなしつこい勧誘の翌日。バイトの休みということもあって、絶対に携帯を見ないという誓いのもと電源を切り、散歩がてら街をうろつく。

呉服屋や、乾物屋、金物屋、商店街とも違った専門店街がならぶ大通りに沿うように流れる川。それをなんと気なしに眺めていると、川にかかる橋が何やら騒がしい。野次馬根性よろしくちよつと見物しにいこうと近づいていく。

「ビームサーベ流！ ビームサーベ流はいかがですか〜！」

「今流行りのビームサーベ流。映える！ バズる！ 間違いなし！ さあさあ寄ってらっしゃい見てらっしゃい」

不穏な単語が聞こえないでもないではないが、まあおおよそ記憶が間違いなければアレだ。

案の定、目の前で光が天を貫き、轟音とともに橋を打ち壊した。

「ビームサーベ流ねえ〜」

場所を移し、志村家にて紙の輪っかで作った飾りの下、陽気にカラカラと笑う男を見ながらひとりごちる。

ざんばら髪を一つに束ね、額から右頬に斜め走った傷が特徴的な男はオビワンこと、尾美一^{おびはじめ}。かつて志村道場の塾頭を努め、ターミナルの転送事故に巻き込まれ行方不明となっていた人物。

転送事故で銀河彼方へと転送され生死の境をさまよった後、体の半分をサイボーグ化する事で生き長らえ、紆余曲折のち地球にようやく戻ってきた……んだと思う。思うというか……まあ、事情を知っているこつちからするとあれだ……。

「いやあ〜。門下生が入るたび、昔もこうやってよく騒いだもんじゃ。ほんま、懐かしいのう。お妙ちゃんも大きくなってからに。じゃが、昔から男勝りではあったが……そんなところまで男勝りにならんくてもよかよかに」

「あら？ そんなところってどんなところでしょうか？ オビワン兄

様???

お妙さんの手元の徳利が割れる事にも気付かぬようで、呑気に尾美一は笑い続ける。

その前には対照的な二人。柳生九兵衛——九ちゃんと、近藤局長が呪い殺せるんじゃないかこれ？ という目つきで尾美一を見つめている。

「お妙ちゃんの……お妙ちゃんの……」

「恨、恨、恨、恨」

その背景には、にこやかな新八くん、ただ酒だと思つて酒をかつ食らう銀さん、良くわかってないが騒ぐのが好きな神楽ちゃん。まあ、いつもの面子にラー油を垂らしたような面子で賑やかに会は進行していく。

「ワシは銀河一の剣豪になる！ちゅー夢を……」

転送事故後、自身の身に起こったことを説明している最中、まるで電池でも切れたかのように硬直した尾美一は、そのまま前に体を傾けて倒れていく。

「尾美オビワン一兄様!?!」

「一兄!はじめにい!?!」

「どうしたアルか!?!」

お妙さんの悲鳴を皮切りに、新八君、神楽ちゃんの声が響き渡り、周囲の空気が逼迫したものになる。

「銀さん手伝ってくださいー！ 神楽ちゃん！ 源外さんを!!」

寝室に運び込まれる尾美一。しばらくして、源外さんが神楽ちゃんに担がれるように運ばれてくる。

慌ただしく駆け回る面々を、私はどこか冷めた目で見つめていた。

エネルギー保全の法則

源外さんにより、尾美が倒れた原因ダイクマターは取り除かれたものの、肉体の半分が失われていることを知ったシヨックか、見送る新八君もお妙さんも口数は少なかつた。

睡魔に負けた神楽ちゃんを背負って、銀さんは万事屋への帰り道をテクテクと歩いていく。

私はというと、「新八君に付き添われて家まで帰る」か「志村家へお泊り」の二択を迫られどちらも選びようがなく、「万事屋へのお泊り」を選び取り銀さんの後を追う。

お互いに無言でテクテクと歩く。時折、街頭にぶつかる羽虫がパチパチと音を立てていた。

「明日、源外さんにさ、詳しく聞いてきてよ。身内じゃ言いにくいこともあるだろうからさ」

釘を刺す必要性と、自身の罪悪感の間で迷い。そう銀さんに伝えたのは大分後の事だった。

「……そうだな」

気負いのない抜けた声で銀さんは返事を返すと、神楽ちゃんを背負い直す。ゆすられた衝動で首を揺らした神楽ちゃんは一瞬目をさますものの、すぐにまた目を閉じる。

「先にいっとくけど、私じゃどうにもなんないから」

それを見ながら言い訳が口をつく。

「誰も責めねーよ、んなこと。ってか誰かに何か言われたか？」

「新八君にお妙さんのいないところでこっそりと。どうにかならなかったって……。無理って伝えた」

奇跡のような万能の力なんて鼻で笑ってしまう。まがい物だ。

本当の奇跡ってのは、手のひらからじんわり溢れてきたり、つんざく劈くような叫びの末に生まれるものだと思う。

「おめーが落ち込んでどうするんだよ。幸いサイボーグだがなんだか知らねエが、ピンピンしてんじゃねーか。気にするな」

明日になればその言葉が気休めにしかならない事を銀さんも知る

だろう。

毘夷^{ビームせいじん}夢星人がテロ声明を発表し、その核とも言える兵器、星間波動ビーム砲が尾美一の体に埋め込まれている事を知るに違いない。それを止めるため、斬らざるを得ない事も。

「……嫌だな」

「嫌ってお前な」

ぐちぐちと説教臭く口数の多い銀さんの声をBGMに考える。

どうするのが正しいのか？ どうなるのが正しいのか？ 私はどうしたい？ 彼はどうしたい？ 彼は彼のまま死にたい？ それとも奇跡に賭けて、運に未来を託したい？ 私が彼なら――。

説教を続けていた銀さんがふいに立ち止まり、こちらを振り向いた。

「……なあ。何か知ってんのか？」

本当に嫌だなあ。嘘を重ねるべきか、誤魔化すべきか考えている間も銀さんはじつとこちらを見ていた。

「……私はあまり関わりにならない方がいいと思う」

耐えきれず本心を告げれば銀さんはわずかに身じろいだ。

「随分冷てエじゃねえか……何があるっていうんだ」

「明日、源外さんにちゃんと聞いてきて。何度も言うけど私は無理だからアテにしないで」

「無理だからって、手を貸さねエってのは……」

「違うー！」

思わず強く言い返すと、銀さんはなんとも言えない表情で「そうかとだけ告げ、再び歩き出した。

嘘ではない。言い訳をさせて貰えば、死者を生き返らせる事が正しいか？ という倫理的な問題を問題としている訳ではない。この中途半端な力はどちらを“生かす”か解らないのだ。5分5分。いや、ケノファイが優勢なのであればもっと分が悪い気がする。勘でしかないけれど。

試して、そうして、殺すのか？

――生まれなければ良かった

あの人と同じだ。

夜が明けて、ニュースは毘夷夢星^{ビームせい}の話題で持ち切りだった。地球から惑星同盟の星々に向けられたビーム兵器。発射されれば地球と惑星同盟の戦争が始まってしまいうだろう。犯人はテロリストを名乗るビーム兵器開発国である毘夷夢星^{ビームせいじん}人。

ビーム兵器の輸出入、開発を禁止する法案を提出した地球への逆恨みだ。

私はそんな混乱を尻目に、バイトのシフトが入っていたので、赤いビームを出す相棒を片手に目の前の列を片付けていた。今日の仕事場は人々がティッシュペーパーやら、トイレットペーパーやら、果ては紙おむつまでを買い占めて長蛇の列をなしていた。集団食中毒だろうか？ オムツ生活はちよつと勘弁。私も気をつけよう。

だって、どうやって星をぶつ壊すような兵器を前に、それらが役に立つというのだ？

そんな私の前に一人。

「ポイントカードお作りしますか？」

「いえ結構です」

「お会計は……の前に商品持って並んで貰っていいですか？」

「それが既に売り切れてましてね」

「では次回入荷をお待ちください」

「代わりにとってはなんです、ちよつと責任とって一緒に同行して貰っていいですか？」

「いやいやいや？」

「ああ、丁度いいところに、私こういうものでして……」

私の意思を無視して通りがかった店長を捕まえた異三郎は「ちよつと、代わりに」という一言で、トイレットペーパーの代わりに私をお買い上げなされた。

これなんて人身売買？ そんな事を思う暇もなく、私は車に連れ込まれる。

「忙しくないの？ 今、大変じゃない？ こんな事している場合？」
「知ってましたか？ 現場が忙しい時というのは存外上は暇でしてね」

どこに向かうというのだろうか。言葉とは裏腹に、口調の中にいつもとは違う剣呑な雰囲気を含みながら異三郎は車を走らす。

「どこに向かうの？」

「さあどこでしょうね……。逆に聞きたい。今話題の星間波動ビーム砲、どこにあるか知りませんか？」

「知るわけないじゃない」

「ふむ、貴方の周りが煩かったものでね、てつきり知っているものかと思っていました、宛が外れましたかね」

車の外の景色はくると移り変わり、既にもう歩いて帰れと言われてもどこをどう歩いて帰ればよいかわからぬ状態だ。

新手の脅しだろうか？ 答えるまで帰さないよ。

「どうやったら一介のスーパーの店員がビーム兵器なんて持つてるとこのさ、ここは修羅の国ですか？」

「昔は侍の国と呼ばれていたそうですよ」

やがて車は大きなビルの地下へとたどり着く、そこからエレベーターを上がって最上階まで登る。ついたのは品の良い調度品がならんだ応接室だった。

江戸の街が一望できる大きな窓の手前にソファアが向かい合わせに一組並んでいた。

そのソファアにこちらを向いて座る男が一人。私達が部屋に入ってくるのに気づくと、立ち上がり人好きのする笑みを深めて歩み寄ってきた。

「足労だった、何分非常事態でな」

「はあ」

手を差し出しそう伝える男に、社会人としての礼儀として私も手を差し出す。

「非公式だ。楽にせよ」

男は自身が座るソファアの対面に位置する場所を指し示すと、こち

らの返事を待たずに再び座り直した。

まあいいんですけどね。

「それで？」一橋家の筆頭様が一介のスーパーの店員呼び出してどんな用？ 一橋喜喜ひとつばしのぶのぶ」

座る気にもなれず立つたまま睨めつける。

目の前に座る男。この江戸において徳川家と双壁をなす政権の一つ、一橋家の筆頭——徳川喜喜とくがわのぶのぶとも呼ばれることになる男。その人だった。

「私を知っているか。話が早い。怖い怖い、そういきり立つな。これから話すことは貴様にとつても悪い話じゃない」

悪い話じゃない？ そう切り出される話は大概詐欺だと、隣のベッドで寝ていた鈴木さんは言っていた。詐欺師というのは言葉を交わしてはいけない。そうも言っていた。NOと言おうがYESと言おうが言葉を発したらその手管に巻き込まれるのだとも……。

その忠告に従い黙りこくった私に構わず喜喜は言葉を続ける。

「今、巷を騒がしている毘夷夢星人ピームせいじんと渡りがついてね、彼等の要求は『星間ビーム波動砲の禁止法案の棄却』。地球政府が大見栄切って提出した法案だ。テロリストに屈して法案を下ろすなど、今更できやしない。交換条件として持ち出したのは現在開発中の新兵器の提供だ」
「なるほど、それは災難だったね。折角開発した兵器をよそにくれてやらなきやならないなんて。だけど、そーいうのをスーパーの店員に愚痴ってどうするのさ。まさか、ミッションでポツシブルな諜報機関とスーパーを勘違いしてる？」

何がどうなつてこうなつたのやら。とんと身に覚えのない話に嘯うそぶくが、喜喜は目を細めて笑った。

「往生際が悪い……。が、最初に言っただろう『悪い話じゃない』と。我々だってテロリストなんて犯罪者に膝を折つたりしないさ。兵器を提供するフリをして、向こうに渡り彼等の組織を無力化するつもりだ」

「なるほど？ じゃあせいぜい頑張つて——」

「勿論、彼等も馬鹿じゃない。空のアタッシュケースを貰つてノコノ

コとお家には帰ってくれないだろう。そこで君にはアタツシユケースの中身の役割をお願いしたい。なに、簡単なことさ。ちよつとした威力実験に付き合ってもらい、後は相手の巣の中で人暴れしてくれるだけでいい。容易いことだろう？」

やんわりと無関係を主張してみるも素気なく無視される。桂さんとは違うタイプだが、コイツも人の話を聞かないタイプのようだ。はて、どうしようか――。

「何度も言わせないで欲しいのだが『悪い話じゃない』と言っただろう。君にも見返りがある。君が暴れまわって焼いてくれたせいで苦労したがね、アレに関する資料の復元に成功したんだよ。それを応用すれば、一方通行だった天女の国とこちらの国の双方向通行だって不可能じゃない」

「不可能だよ」

私は喜喜の言葉を否定する。騙されるものか。

酷く難解な資料だったが、書いた本人に直接読み解かせればそう難しい話じゃない。私を呼び出してくれた研究所の代表を名乗る男は確かに言った「元の世界に戻るのには、理論上は不可能ではない」と。理論上と但し書きがつくからには、現実的には不可能なのだ。それを成し遂げるには――。

「可能だと言っただらどうする？ 君がこの資料について知っているのなら話は早い。気にしているのはエネルギー総量の問題だろう？」

「私は何かを犠牲にしてまで、何かを成し遂げたいなんて大層な意思なんてもつちやいない。だから『悪い話』なんだよこれは」

そうだと胸の中で答える。滝の上から水を落とすのは酷く簡単だが、水を滝壺から滝の上に流そうとなると難しい。そういう理屈だ。水を下から上に流そうとするとするならば、落とすときと同じだけのエネルギーが必要だ。その総量は『アルタナ星一個分に相当する』男はそう言っていた。理論上は可能だが、現実的には不可能な理由。アルタナが豊富な星というのは、生命が豊かな星ということだ。この地球もまた――。そんなものに手を出してまで戻りたい理由なんてありはしない。

「君は何か勘違いしているようだね。エネルギーというのはなんだって良いのだ。例えば今発射されようとしている全宇宙惑星同盟に向けられた『星間ビーム波動砲』のエネルギーだってね」

ケノフィ、尾美「……。新八君——何かを犠牲にしてまで何かを成し遂げたいなんて大層な意思なんでもっちゃいない。

だけど、もしがあるなら。

「……条件が一つある」

詐欺師とは口を聞いてはいけない。鈴木さんあなたの忠告は存外役にたたなかつたよ。詐欺師つてのは口を開かすことにも長けているようだから。

汎用人型決戦兵器彼女

二度目の宇宙旅行は新婚旅行と決めていたんだけどなあーという愚痴も無視され、バーカ、ハーゲと小学生並みの悪口に移ったあたりで、プシュツと音を立てて開く扉に、SF江戸時代風冒険活劇コメディだったねと思いを馳せ、雰囲気的に口を閉じる。

「おお、これはこれは……」

そのセリフを吐いたのは某世界的有名SF映画に出てきそうな耳の尖ったしわくちやの毘夷夢星人^{ビィム}。相対するのはお目付け役としてつけられた役人と私。

「して、何も持っていないように見えるが……肝心の新兵器とやらはどこに？」

名乗りもそこそこに、そう問われた役人はズイとこちらを示す。

「……ふむ、装具品のたぐいか？ よくわからんな。もつとよく見せて見ろ」

「装具品というか……生体兵器のたぐいですよ。私自身が新兵器となってます」

役人は説明する気がないのか突っ立ったままだし、話が進まないと言を聞く。

「ふむ……」

それにヨー○顔の毘夷夢星人^{ビィムせいじん}はこちらを疑わしそうに頭の先からつま先までゆっくり視線を移動させる。

「まあ、こんな美少女が生物兵器とか信じられないのもしれないけど？ まあ、事実は小説より奇なりってね？」

首をかしげてみるが、どいつもこいつも冗談を解す感性をお持ちでないらしい。無機質な書類のやり取りを経て、稼働実験と相成った。

「ちようどよい。あの隕石群を攻撃してみろ」

甲板の窓から見える大小の岩を指して毘夷夢星人^{ビィム}はそう言った。

「試着は大事だよな。私もこの前、同じ暖色だから大丈夫だと思って買った上着がどうにも合わなくて難儀したわー」

「早くしろ」

軽口を返してくれることもないらしい。へいへいと頷き、それらしく手をかざす。

左から右へ次々と爆発していく隕石群におおーとどよめきが走る。「お気に召されたでしょうか？」

慇懃に腰を折れば、にやりと笑みが返ってきた。

「ふん、我々の開発した兵器に比べれば……だが、使い方次第というところか……商談は成立だ」

「支払いは……」

初めて声を発した役人だったが、その声はそこで途切れる。

「冥土の土産だ、取っておけ」

頭を打たれ即死した役人へコインが投げられる。

打ったのはもちろん毘夷夢星人側^{ビームせいじん}。私も背中に銃を突きつけられる。

「わしらと来るか？ 来ないならばここで廃棄処分だ。待遇は悪くはないぞ。地球では味わえないような待遇を用意してやる」

「わーお。三食昼寝、おやつ付きっていうんだったら心惹かれなくもないんだけど……」

「ふん、そんなちやちな待遇ではない。わしらと来るのだったら国……いや、星の一つでもくれてやる」

星の一つもねえ……。

「それなら、白い大きな犬と可愛いチャイナと、メガネがいる星がいいな……ついでに糖尿病寸前のマダオもつけといて」

「どういう……う？」

「反転攻勢開始ってことだよっ！」

しゃがみ込んだ頭上を銃弾が掠め飛んでいく。背後にいた兵士の足を払い、狙いをつけた別の兵士を殴り飛ばす。

「銃を撃つな！ 味方に当たる！ ショックガンを持って来い!!」

エマーージェンシーのシグナルが鳴り響く中、配備された兵を沈め、追加投入された兵も排除する。残るはリーダーただ一人。

「緊急事態だ！ ケノファイ！ ケノファイ！ 至急司令室までこい！ ケノファイ!!」

——ザッ……ザッ……ザー

通信機に向けた声に応える者はいない。

まだ、通信妨害が効いているのか……。好都合。

「さて、ここからが本当の取引だよ。オビワン……ケノフィの設計図渡してくんない？」

「はっ、何を言うと思えば……そんなもの……ぐあっ……」

足に打ち込まれた弾に膝をつく。

「次はその長い耳。その次は指、肩、膝って一番撃たれたら痛いらしいけど、知ってた？」

「ま、待て」

「待たない」

「ぎゃあああ!! あ、分かった！ 分かったから！」

ちぎれた耳から紫色の血を流し、操作盤にすがりつく。

悪あがきのように小細工をしようとするのを止めつつ、一枚のディスクにデータが転送された。

「これで……だが、そんなもの……奴は既に……」

「あとは……」

ついでのおまけを頂き、縄で縛り上げた頃、近藤さんと、九ちゃんが入ってきた。

「キリちゃん……?」

「どうして君が……」

この船を止め、尾美一を救うつもりだったのだろう。

「被疑者死亡のまま書類送検……といきたいところだけど、そっちの手柄も必要だよね、うん」

「なにを言ってる……?」

「近藤さん、この人の処分お願いしていい？ 私は私でやらなくちゃいけないことがまだ残ってるから」

「何を言っている!! 君はどうしてここにいるんだ!」

九ちゃんの声に、ごめんと一言伝え、私はそこを後にした。

命と選択を

電話が繋がらなかった時——私は何を伝えたかったのだろうか？
ごめんなさい、ありがとう、さよなら、どれもこれも手のひらから
こぼれ落ちる水のように、最後に残る言葉はなんだろうか。

それを私が知ることはあるだろうか？ 知りたいだろうか？ 何
もないと知って再び後悔するだろうか？

「……一本。そこまで」

崩れかけたビルの中で、静かなお妙さん声ときが刻を告げる。

吹きさらしになった壁面からおぼろ月が見えた。

天堂無心流とビームサーベ流。新八君の剣に応え、最後に勝ったの
は尾美一。

蠟燭の火が消えかける寸前、強く燃えるように彼は侍の意地をかけ
て戻ってきた。

だが、彼自身の肉体は一度波動砲が放たれば、それに耐えうるこ
とはないだろう。

「尾美一さん。空の船は止めました」

「キリさん！」

「きーやん！」

柱の影から姿を表した私に気づき、新八君と神楽ちゃんが声をあげ
る。

新八君に体を預けていた尾美は「そうか……」と、安心したように
笑った。

「なら、わしも最後の一仕事とするか、坂田塾頭、後を頼むぜよ。新坊、
お妙ちゃん……ここに帰れて、二人に会えてほんまに良かった。宇宙
を旅してちいとは強くなった気がしていたが……。ここに来てよう
やく本当の強さちゅーもんに近づけた気がするぜよ。サンキューベ
リーハムニダ」

「尾美一兄様」

「一兄」

剣を杖代わりに立ち上がろうとするのを新八君が止めようとし、そ

の手をそつと尾美が外す。

何も言わずともお妙さんも新八君も、この時間がもう長くはないことを分かっているのだろう。

「またな、新坊、お妙ちゃん。ビームサーベ流の教えを忘れたらいかんぜよ」

よろめきなながら立ち上がった尾美の言葉にお妙さんの口が固く結ばれる。

けれど――

「安心してください。いつまでも泣き虫のまま私達じゃありません。ちゃんと覚えていますから」

「そうです。僕ももう。だから安心してください」

笑って顔をあげる二人に、尾美は驚いたように目を見開き、くしゃりと顔を歪めて笑った。

「そうか。ほんま敵わんなー。強うなったの」

「はい」

「うん」

互いに笑う三人。

その姿に、私は私が迷っていたことを認めることができた。詐欺師というのは本当に心の隅をついてくる。

同じ貉だろうとも、私は私の罪をちゃんと背負って生きよう。

「きーやん……?」

訝しげに呼ぶ神楽ちゃんに笑みを返す。

「尾美一さん、少しいいですか?」

「悪いが……野暮用でな。ちいとばかり時間がない」

私の言葉に、困ったような表情を浮かべる。けれど、続く言葉に目を細めた。

「緊急停止の信号装置を貰いました」

「それは……」

設計図のおまけに貰ってきたモノだ。追加の弾が二、三発必要だったけれど、やはりあった。

「キリさん、それがあればオビワン兄様は……」

お妙さんの言葉に、尾美が困ったように首を振る。

「お妙ちゃん……」

「ここへ来る前に源外さんのところに寄ってきました。ケノフィと尾美一。再び目覚めた時、どちらが目覚めるか分からないと……」

「そんな……」

お妙さんは握った手を震わせる。一度希望を見出しただけ、その落差は激しいだろう。

「停止している間にゆっくりエネルギーを放出し、害が出ないレベルまで減らします。目覚めさせることができるまで、10年、20年、あるいはもつと……どのぐらい掛かるかは分からないですが……」

彼のエネルギーは彼を生かすためにも使われている。取り外すことは死を意味するとも言われた。

源外さんが頭を捻って考えてくれた唯一の方法だ。それに尾美は首を振る。

「骨を折ってくれて申し訳ないが……わしは」

「もし再び目覚めた時、貴方が貴方でなかったら……私が貴方を斬りましょう。それに貴方は言ったじゃないですか『またな』と。侍は約束を破っちゃいけないんです」

尾美の願いをすり潰すように、言葉を紡ぐ。

きっとこれは彼の為ではない。私の為の言葉だ。

そんな言葉が届く訳はないけれど……。

「キリさんにそんな事はさせません。その時は僕が再び斬ります」

「私も再び見届人となりましょう……それにオビワン兄様は約束を違える人じゃないと信じてますから。『また』ですよ……『また』お会いしましょう」

そつと二人が寄り添ってくれた。

「ほんま敵わんのう……迂闊な言葉は言うもんじゃないな。それに……」

何か眩しいものを見るように目を細め、未来の二人を見たくなくなってしまったと続いた言葉は十分過ぎた。

尾美が決心したように顔を上げる。

「尾美一さん、『またな』です」

「ああ、新坊も、お妙ちゃんも『またな』」

「はい、『また』」

「『また』です。一兄い」

装置のスイッチを入れる指はもう迷わなかった。

呉越同舟ただし泥舟

尾美一は源外さんのところに預けられることになった。そして私は事後報告のため、自主的に喜喜に会いにきている。相変わらず眺めの良い大きな窓からは江戸が一望でき、青空が眩しい。こんなに眩しいのに暑さを感じないということはUVカットとか何かお肌にいい感じ処理がされているのだろう。高そうだなあ。

いやー。こんなに嬉しくないお家デートはないね。付き添いの異三郎は何を考えているか分からないし、なんでか信女ちゃんはいないし。清涼剤が欲しい。切実に欲しい。

「やってくれたな」

「お褒めに預かり光栄です?」

開口一番そう告げられ。褒め言葉として受け取れば、忌々しそうに眉を潜められた。

「素直に回収したビーム兵器をこちらに渡せ」

「え、嫌ですけど?」

「個人が持ってて良いものではない」

どこからバレたんだろう? いや普通に毘夷夢星人だな。それに私がここに居るということは兵器からエネルギーを取り出してもいないという事になる。うん。QED証明終了。

「喜喜さんはさ、アレを手に入れてどうしようってのよ?」

「取り戻す——侍の国を」

結局は、攘夷志士と変わらない。それが幕府の手によるものなのか、そうじゃないのかの違いだ。

「同じ阿呆なら、踊らにや損ってか? でも本人に踊っている自覚がないなら質が悪い」

「私が操り人形に見えるか——存外阿呆でもないようだ」

「ありや、自覚があたりで」

煽りに腹を立てるでもなく、口の端をあげるに留める。

「貴様には護らねばならないものが多くあるように見える。だがそれを護りきれるとでも思うか?」

「お登勢さんのところにトラックが突っ込んできたり、吉原の女達が不当に逮捕されたり、銀さんが糖尿病に倒れたりするってか？」

「——最後のはなんだ」

「いや、冗談ですよ。まあ、なんですかね、私と戦争を始めるつもり？」

私は、私の大切なものを護るためなら、全てを敵に回したってかまわない。それこそ——この国を売り飛ばしたって構わないんだ。貴方にその覚悟はあるか？」

じつと見つめる先の目はブレない。

「貴様こそこの国を売り飛ばすなんて覚悟があるようには見えないがな——まあ、いい。無駄な犠牲を互いに払う必要もない。今は準備期間だ。その時が来たならばこちらについて貰おう。貴様だって田宮たみやに恨みの一つだってあるのだろう？ あれは——」

「現將軍の重鎮だって？ そんなの知っている。だから捕まらなかった。だから今も野放しになっている。研究こそ頓挫したけど、次の手を考えている」

「人さらいのようなものだ。代わりに頭を下げよう」

偉そうに言い放つ姿は全く頭が下がってないけど——今のところは手をだす気はないようだ。準備——準備——將軍を暗殺した後と——ということだろうか。そこまでの計画をこの段階で立てているのか？

疑念は尽きないが——。

「覚えておいて。私は、私の大切なものを護るよ。何をおいても」

清涼剤が欲しい。新八君オムライス作ってくれないかなあ——本当に。

天国と釜の蓋

J K へ常識とは考えるな感じろへ

バイト先に異三郎は現れなくなった。恐らくだが、アレは私を戦力に取り込むための行動なのだろう。正面切つて戦うには分が悪いとあちら側も分かつてはいた筈だ。あの会話は売り言葉に買い言葉つて奴。

目の前を子どもたちが走り回る。

「まさか吉原に託児所が作られるとは……」

「しかも、公金でなんて。にわかには信じられないわね」

月詠さんと、日輪さんの言葉に拳突き上げる。

「働き方改革ですよ！ 働き方改革！ やっぱり女性が多い職場にはこういう施設も必要じゃないかと！」

毘夷夢星人ビームせいじんとの取引に条件を一つつけた。それを喜喜は律儀に守ってくれたようだった。政府公認といううたい文句が逆に胡散臭く聞こえたようだが、疑念を抱く母親達を月詠さんと日輪さんが説得してくれた。

遊女から産まれた子供は殺されるか、捨てられる。免れてもその出生からまともな道は歩めない。

そんなしきたりはふざけんなどぶち壊した訳だけれど、じゃあ子供達をどうするのか？ といえば、百華で面倒を見てもらっていたのが人手があまりにも足りなかった。

ならば、託児所を私が作ろうとも思っただが、吉原の土地というのはここNY？ 上海？ というぐらい高い。春雨への上納金やら、吉原の立て直し費用やらで出費が嵩み。お得意の手法で金を準備しようにも——額が額だけに市場の価格崩壊を招きそうで……。

唯一治外法権的な場所がここ。旧政府庁舎があつた場所らしく金では解決できないが——逆に言えば金がなくとも解決できる場所だった。

「オイラは運が良かったんだな……」

晴太君が見つめる先では、身寄りのない子供達が集められ、併設する養護施設へ迎え入れられるところだった。

皆、ボロボロの服を身に纏い、子供らしからぬギラギラとした目をしていた。

専門家が必要だったが、吉原に来てくれる専門家の宛などなかったのも、どうしようといふと日輪さんに相談していたのだが、喜喜はそれも手配してくれた。まあ、喜喜とは限らないが。きっと部下に気の利く人間がいたのだろう。馬面した片淵メガネのいけ好かないどつかの長官とか。

この頃の喜喜というのは、利用されるだけのボンボンという印象だったのだけれど——損得勘定ができる頭はあるということだろうか？ 予想外。

それはいいとして——。

「保健体育の授業は早すぎるでしょ!!」

びしつと指し示した場所では、幼稚園児達が雄しべと雌しべのぬいぐるみを見ながら先生の周りで体育座りしていた。

いくらなんでも早すぎるとツツコミを入れると、したり顔で月詠^{ツツキ}が首を振る。

「子供の内は物覚えが早い。折角の機会なので子供のうちから英才教育を施してやったほうが後々こやつらの為にもなる」

「どんな英才教育?!」というか、月詠^{ツツキ}は子供がどうやってできるか知ってるの?」

「も、もちろんじゃ——雄しべと雌しべがじやなこうなんかこう、いい感じになつて、キャベツ畑で産まれた卵が人体の中で子供に——」

「なるかああああ、そんなんで生まれるのは寄生虫だああああ!!」

知つて欲しい大人が一番知識がなかった。

幼稚園児の後ろに月詠^{ツツキ}を並ばせると、それに続いて百華の連中も続く。いやお前らもなのか——?」

「月詠は小さいころから修行に明け暮れて、ちゃんと習つてこなかったからね。あの子達もなんとなくは知っているけど、知らないのよ。子を授からないようにと効きもしない御札を握りしめる——そんな

連中ばかりなのさ」

頭を抱える私に、日輪さんはそう言つて悲しそうに微笑んだ。

お前の常識は世界の非常識じゃないが、なんか悪いことをしたな。彼女達が自身に与えて欲しかった知識もを子に与えようとしているだけなのか——と思つていたらなにやら怪しい道具が並び始めた。

「すとーーーーふ!!!」

流石にそれは止めた。そこから大人達を説教して、保健体育は小学校——ここでいう寺子屋で教えて貰うことにした。

「疲れた〜」

「お疲れ様でした」

万事屋に戻り机に突つ伏す私の隣にコトリとお茶が置かれる。見上げれば新八君が笑つていた。

そうそうこういうのだ。最近の私、働きすぎだ。こーいのが必要なんだ。うん。

「気持ち悪い顔してんじゃねーよ。しんぱちー、かぐらー気をつけろよー。ロリコンつてのは見境ないらしいからな」

そんな私に銀さんがいつもの机に座り、ジャンプを読みつつぞんざいに言葉を投げつける。

「きーやんはロリコンじゃありませんー。イケ専ですー。大体ロリコンつて言った方がロリコンなんだよ。新八君も神楽ちゃんも気を付けるべきは銀さんの方だからね」

やられたら倍返しだという気力もないので、1・2倍を目標に返す。

「イケ専つて何アルか？」

「イケメン専門の略」

「はっ、鏡みてからいえよそういうことは」

「銀さんも結野アナを見る半分でいいから鏡見た方がいいよ」

ぐでーつと延びながら続く軽口を応酬する。

時計の針は午後3時を指していた。5時からバイトが入っている。

「夕方からバイトかあーいきたくない。なぜ人は働かないといけなののか」

「命題ですね。あ、銀さん、雨降りそうなんで洗濯物取り入れるの手伝ってもらっていいですか?」

「洗濯物と私どっちが大事なの?」

「今は洗濯物だな」

二人は私を置いていってしまった。神楽ちゃんは再放送のドラマを見ている。机のそばで寝ている定春の尻尾が足にあたっていた。

世知辛い。

月に願いを

最近働きすぎだと自覚のある私は「温泉いかねえ？」という銀さんの言葉に一も二もなく頷いてしまった。

そして、デツキブラシで露天風呂の床を磨く羽目になっている。「いや、疑うべきだった、うん。万事屋にそんな金があるわけないじゃんね」

リゾートバイトと言えば聞こえがいいが、普通に依頼だった。

現在男湯と女湯に分かれて清掃中。私は神楽ちゃんと一緒に女湯担当だ。

「こうなったら元を取るまで温泉飲みまくってやるネ。きーやんもお肌がむちむちぷりんになるまで飲みまくるアルヨ」

「うーん……ちよつと遠慮したいかな。それよか、後でアイス買ってあげるから、とつとと掃除終わらそう」

「ほんとうアルか！」

「本当、本当。私が洗剤撒いてくから、神楽ちゃんは磨く係ね」

私としては無難な役割分担だと思っただが、気合の入った神楽ちゃんを甘くみていた。「うりやあああ」という掛け声の元、凄い勢いで磨き始めた神楽ちゃんに追い回される羽目になった。

「ひと仕事終えた後のアイスは格別アルな。きーやん食べないアルか？」

「脇腹が、脇腹が痛い……。マジムリ。神楽ちゃん……。どうぞ……」

全力で走り回ったせいで、死ぬほど脇腹が痛い。とてもじゃないがアイスを食べられる状態じゃない。

温泉宿に併設されている売店の前にあるソファで脇腹を押さええ蹲る私をおいて、神楽ちゃんはアイスを両手に持ってご満悦だ。

「おいおい、サボリとはいいいご身分だなあ」

そんな私の元へやってきたのは元凶である銀さんだった。

清掃中だろうか？ 手ぬぐいを頭に巻いている。

「サボリじゃないアル。掃除ちゃんと終わらせたネ」

「そうだ、そうだー……。もつといえ神楽ちゃん」

反撃は神楽ちゃんに任せた。

「うつせー人が汗水垂らして働いてる時にアイスくってんじゃん、いいなあー俺もアイスくいてーよ」

「食えばいいネ、そこで売ってるアルヨ、好きなだけ食えばいいヨ」

「いいなあー俺も人の金でアイスくいてーよ」

「ほら新八君が呼んでるよ、掃除途中なんじゃないの?」

恨めしげにこちらを見つめる目に負けてはいけない、しっしつ、と追い払えばくそと悪態をついて銀さんはどこかへ行った。

「きーやん大丈夫アルか?」

「なんとか……。神楽ちゃんは元気だねえ」

「若いからな」

「あー、温泉たらふく飲もうかな。少しは若返るかも」

「そうするネ」

真っ白なマシユマロみたいな肌を目指そう。神楽ちゃんはアイスを食べるのに夢中でほっぺたをぶにぶにしても意に返さない。役得。

「ふいー、疲れたあー」

「お疲れ様。はい、新八君と銀さんの分」

掃除を終えた二人に透明なビニールに包まれたアイスキャンデーを手渡せば「あんがと」「ありがとうございます」と返ってきた。

それから夕食の支度をして、宴会の片付けを終えたところで一日の仕事が終わった。

「終わった〜」

あてがわれた部屋でぐでーと伸びると、同意するように新八君も頷いてくれた。

「終わりましたね」

「ん〜、ん〜、あー、う〜」

「神楽ア、ちゃんと布団で寝ろ〜」

銀さんも流石に疲れたのかダルそうだった。神楽ちゃんは半分寝ながら隣の部屋に用意された布団に潜り込むとそのままいびきをか

いて寝始めた。

「疲れたけど、まかな賄いとお風呂だけは良かったね」

「さすが老舗旅館……その分お客も多くて大変ですが」

「三食飯風呂付き、嘘は言ってるねエだろ」

「労働付きとも聞いてないけどね」

寝転がりながら鼻をほじる銀さんに文句の一つや二つ、三つも言いたい……。

「ふわあ、私も眠い。おやすみ」

「あいよ」

「おやすみなさい」

ふすまを閉め、オレンジ色の豆球の明かりに包まれると自然と意識が落ちていった。

何時だろうか。体感的には深夜、いつもよりも早い時間に寝たからか変に目が覚めてしまった。

しばらく寝る努力が続けたが、諦めて神楽ちゃんを起こさないように、そつと寢床を立つ。

ふすまの向こうでは新八君と銀さんが寝ている筈だったが、その一つは空っぽだった。

もう一つの寢床では新八君が枕元にメガネをおいて、すやすやと寝息を立てている。

お手洗いだろうか？

あてがわれた部屋は旧館にある。お客さんに出くわしても面倒くさいので、どうしようか悩んだ後、裏庭を散策することにした。

明るい月が庭を照らしていた。池は枯れているが、松の木が風に揺れて風光明媚ふうこうめいびという奴かもしれない。

深く吸い込むと、シンと冷えた夜の空気が肺を満たした。

「いい月だなア」

そう声をかけられたのは、月に目を凝こらしていた時だった。

「綺麗な月だよねえ。トイレだった？」

「ん、ああ」

銀さんも同じく寝付けなかったのだろうか。歯切れ悪く頭をかいていた。

「年をとると朝が早いらしいよ」

「そりゃ、てめえが年寄りだと言いたいわけか」

「私がババアだったら銀さんはジジイだね」

「へいへい、言ってる」

あれから——自分のことが嫌いかと聞かれたあの日から、銀さんはそれについて何も言うことはなかった。

何も変わらない日常が過ぎていく中、私は都合よくそれをなかったことにしてしまった。ひどい言葉をぶつけてしまったと思いはするものの、お互い様だという気もしている。

銀さんは——どう思っているだろうか？

「銀さん」

「ああ？」

私が熱心に月を見ていたものだから、銀さんもつられるように月を見ていた。

「私さ、昔っから兎が探せないんだよねえー」

それを見ながら兎探しを続ける。

「お前、馬鹿だろ、ほらあそこが頭でだな……」

銀さんはそう指差すけれど、遠い月を指す先はあやふやでどこをどう指しているのかが全く分からない。

「ほれ」

ぐいっと頭をあげられ、横から伸びた腕が視線を誘導するように顔の横を通って月を指し示す。

背後に体温を感じた。

「あつちが頭で、こう胴体があつて」

「餅は？」

「あんこ、食いてエなあ」

「砂糖醤油もいよいよねえ」

兎そつちのけで、食いたい餅の種類があがる。

なぜ人の体温というのは泣きたいように染みるのだろうか。背中からじんわりと広がるぬくもりに身を浸す。

私は私のことを好きになることができない。けれどそれを知った上で銀さんが私を忌避しないものだから、なんだかそうしても良いのだと言われているような気がして、そうしたらなんだか——。

「銀さん、私さあ。最近は自分のことそう嫌いでもないんだ」「そうか」

「あの時はごめん——八つあたって」

ぐしゃりと頭をかき混ぜられた。

許してくれたのだと思う。

「一つ聞いていいか？」

「んー？」

背中から離れて、月を見上げながら銀さんはそう聞いた。

「なんで、尾美に……手を貸した？」

「ああ……。結論だけ言えば、欲をかいたからかなあー」

月に手のひらをかざす。透ける筈もなく、届く筈もないのになんだかそれがとても悲しかった。

「欲？ 奴を助けたかったなら……」

良くわからないという顔をして銀さんが続けようとしたのを制す。

「尾美さんは関係ないよ。むしろ私は……彼が死ぬことを肯定すらしていた……彼が彼のままに、彼らしく終わることが良いとすら思ってしまった」

それは、羨望であり、願望だ。

ぼこりぼこりと泡立つように言葉が漏れる。言葉を交わすことで、銀さんと私の境界が溶けて交わる気すらした。

「帰りたい。私は……帰りたいんだ。そのためには星間波動ビーム砲のエネルギーが必要だった。だから助けた……だけどそれを取り出すには彼を殺さないといけなかった。だから諦めた」

帰りたい、冷たく暗い部屋のなかで、境界をはっきりと示し、私が私でいられたあの場所へ帰りたい。

誰もこない部屋で、来るはずのない人を暗澹と待つあの部屋へ帰り

たい。帰りたいのだ。

新八君も神楽ちゃんも銀さんも定春も、誰もいないのに、私はあそこへ帰りたい。

「ごめん」

謝った私の頭を、もう一度銀さんはぐしゃりとかき回した。

「初めて聞いたきがするよ。お前の願いを」

「そうかな……？ いつもいつてる気がするよ？ オムライス食べたとか、300円欲しいとか、定春に埋もりたいとか」

「そーいうんじゃねーよ」

困ったような奴だという風に鼻をならして、さらにぐしゃぐしゃに頭をかき回す。

「かき回しすぎー！」

「多分、困るよ。神楽も新八も……お前が帰っちまったら」

やりすぎだ！ とはねのけようとした手を避けて、銀さんがそんな事を言いだした。

そんな訳……あるかもしれないが、言いくるめられてたまるかと私は反論する。

「確かにさ、私がいなかったら今回の依頼も女湯の掃除神楽ちゃん一人でやることになっただろうし？ そしたら色々壊しちゃって依頼料より修理費用が高くてちやったりするかもしれないけどさ。でもさ、そんなの一次的なことで、少し寂しいなあって思って、そして、いつかいい思い出になるんだと思うよ」

我ながら完璧な推論だと、頭を開放され、ぐしゃぐしゃになった髪を整えながら言えば、

「なんねーよ」

真剣な声が降ってきた。

見上げたら、銀さんが目をいつもより開けて、もう一度はつきりと「ならない」と告げた。

「アイツ等はいつまでも、お前を待つよ。俺も」

「そんなの……困るよ」

そんなのは止めて欲しい。そんなのは……私と一緒にだ。ぐしゃり

と何かが潰れる気がした。

誰もこない部屋で、来ない人を待つ私と重なる。それは……とても困る。

「じゃあ、困ってる。そしてそれでも帰りたいつーんだったら、ちゃんとケジメつけて帰りやがれ。だけど俺等はお前の事をいい思い出なんかにしちやんねーよ」

折角整えた髪をもう一度ぐしゃぐしゃにかき回した銀さんは一言一言を私に刷り込むように告げる。

月の光が銀さんの髪の毛にあたって、キラキラと光っていた。

「そーいうの苦手」

誰かの重しになったり、誰かに想われたり、誰かに愛されるのはとても……とても苦手だ。

重く感じているだけがいい、想っているだけがいい、愛しているだけがいい。互いにそれをしてしまえば、境界線がぐずぐずに交わり、溶けてなくなってしまうようになる。境界線から何かが漏れ出して、私が私じゃなくなってしまうような気がする。そうしたら、戻れなくなってしまうような気がする。

「諦めろ。お前が苦手だろうがなんだろうが、日は昇るし、他人つてのもお前が思ったようには動いちやくれねーんだよ。お前がそうして欲しいって願ったところで、俺もアイツ等も素直に聞くとお前つてんのか？」

「聞いてよ」

やめて欲しい。そんなのは。けれど、私の都合なんてお構いなしに、銀さんは言葉を刷り込み続ける。

「聞かぬーよ。お前がどこにいきこうが、俺らはいつまでもお前の居場所を空けて待ってるよ。泣きべそかいて帰ってこれるようにちゃんとな。お前が嫌がろうが、耳を塞ごうがなんべんだって言うてる」

泣きたいような、叫びたいような、膝を抱えてうずくまりたいような、走り出したいような訳の分からない情動が波のように押し寄せてくる。

指の一つでも動かしたら、それが私を突き動かして、取り返しのない何かを叫んでしまいそうになる。

反論の一つも言えなくなった私に、銀さんは「明日も早えんだからもう寝ろ」と、もう一度頭をぐしやりとかき混ぜて宿へ戻っていった。

しばらく動けなかった私は翌朝寝坊して、女将さんに怒られる羽目になった。

星に誓を

真選組屯所。黒々とした墨で書かれた看板を前に声をあげる。

「たのもー」

「あ、酢昆布さんですね、隊長は今訓練場じゃないかな」

立番の人に顔パスをして貰える程度には通いつめている。

でも、今日は総悟じゃなくて――。

「かーもーちゃん!! あそびましょー!」

そんな鴨ちゃんは、兵法書だろうか? 縁台で本を開いて膝に三毛

を抱えていた。

ついでになぜか頭も抱えていた。

「君は……」

「どうしたの? 頭痛い?」

「分かってやっているだろう」

「まあ」

スキンシップって奴ですよ。親しみやすさというのが鴨ちゃんには足りないと思ったので添加してみたが、どうやら鴨ちゃんはお気に召さなかったようだった。

座布団を端から引つ張つてきて隣に座る。

お土産のおやつを振ればのそりと鴨ちゃんの膝から三毛は移動してきてくれた。

「それで話つて? あ、ジジ抜きする?」

万事屋でぶちブームが発生しているトランプを取り出しながらそう聞いてみたら、いやいい。とやんわり断られた。

そういうところだよという説教は心の中にしまう。

「上が動いている。君に接触があつたそうだな」

ああ、そーいう話。

「んー、まあ、でも大丈夫だと思う」

「否定しないのだな」

まあ、証拠ばつちり抑えているだろうし? ここでウダウダ誤魔化しても、言い負かされるだけだ。意外そうな鴨ちゃんの顔に、その

予測はあたっていると確信する。

「鴨ちゃんって性格悪いって言われたい？」

「君のように正面から言ってくる人間は少なくともいないな」

ほら、やっぱり鴨ちゃんには『親しみやすさ』って奴が必要なんだ。

それはそれとして、

「心配してくれてるのはありがたいけど、一橋家は將軍への足がかりが欲しくて私を利用しようとしているんだと思う。けど、それは私も分かっているから安心して。いつか土方さんにも言ったんだけど、私は真選組の敵にはならないよ」

「そういう心配はしていない。ずいぶん甘く見られたものだな」

無然とした表情に話の運び方を間違ったのだと気づく。

「ごめん、ちよつと機嫌が悪くて、機嫌というかまあ、なんだろう。とにかくごめん」

なんと説明をしたらいいのだろうか。他人の好意を好意として受け取るのが難しいというのか。

三毛は最後の一欠を食べたところで、ナーと鳴き声を上げてどこかへ行ってしまった。

「まあ、いい。君が敵に回るといいうのもぞつとしない話だからな」

「意外とジジ抜き強いよ？ やる？」

もう一度ランプを取り出してみれば、先程とは少し違い迷うような顔を見せた。

「いいねえー、やろうぜー、負けた人間は俺の奴隷な」

三毛は賢いといったのは誰だったか、DS魔王の降臨を感じ取っていたのか？

振り向けば、総悟がオデコにアイマスクを引っかけて立っていた。

「んー。総悟の奴隷つてのはフェアじゃないから、一抜けした人間の奴隷つてとどこでどうよ」

「いいぜ」

バチバチ火花が飛び散る中、腰を浮かせた鴨ちゃんの肩を押さえる。

「まあまあ、ゆっくりしていこうよ」

「そうだぜ、親睦って奴を深めようじゃないか」

一度目は負けた私が土方に告白してこいよという総悟の命令を断れず告白したところで、ネタバラシついでに土方さんも加わって、二度目の試合は鴨ちゃんは勝ち、負けた総悟にジューズを奢って貰っていた。

三度目は今度こそ土方さんに詰め腹斬らせようと総悟が意気込んでいたが、差し入れにきたミツバさんが加わり、ミツバさんに負けた総悟が頭を撫でられていた。

そんなこんなで私以外は平和にトランプ大会は幕を閉じたのだったまる。

「くそ、生き恥を晒した」

「おめーは演技が下手くそなんだよ。なんだよありや、首取られるかと思つたわ」

片付けが終わつたあとお茶を飲んでいたら、土方さんはそう言つて首をさすつていた。

どうやら甘い雰囲気という奴を作り出すように失敗していたようで、あつけなく玉砕した私に総悟は不服そうであつたが人選を誤つたときかいいようがない。

この経緯を聞いたミツバさんは怒るでもなく、「あらあら」と笑つてくれたのでセーフ。

「子供の遊びだと思つていたが……意外と面白いものだな」

カードをパラパラとめくりながら鴨ちゃんがそんな事を言った。

「私もいつぶりかしら。そーちゃんと小さいころはよく遊んだわ」

ミツバさんと総悟が遊んでいる風景を想像すると、互いに相手に負けようと苦戦する姿が目に見えかぶようだった。

ミツバさんと総悟が連れ立って帰って行くのを見送って、さて私も帰ろうかと思つたところで、土方さんに呼び止められた。

「話がある」

「え、告白の続き？ やっぱり惜しくなつたとか？」

「ちげえよー」

そんな全否定しなくても。「これ、断ったら俺殺されるのか？」と真

顔で聞かれたのは先程のこと。そんなに嫌か。

ここではなんだからと部屋に呼ばれたものの、障子の戸は空けとけという台詞は矛盾していませんか？ 紳士と捉えるべきか。

「全治半年」

ピンときていない私に「毘夷^ビ夢星^ム人だ」と付け加えられ、ああ、と納得した。

「あの時は必死だったからね。見逃して欲しいのだけど？ 正当防衛的な」

「弾は全部綺麗に貫通していたそう。奇跡的に太い血管を避け、臓器にも当たらずに。医者がいうには隕石に当たるほうが容易いとのことだ」

まあ、そうなるようにしたからね……とは心の内で、土方さんの顔を伺うに怒ってはいないが、なんだか眉を寄せ難しそうな顔をしている。

「不幸中の幸いだね」

「そういうことになっているが……違うだろう」

おー、勘がいい。拍手を送ろう。

手を叩いていたら睨みつけられた。心外だ。

一睨みで私を黙らせた土方さんは続ける。

「お前と会った後ぐらいか……。政府お抱えの研究施設が幾つか襲撃を受けた。犯人は不明。攘夷浪士のテロ行為と推定されていたが、捜査は上からの圧力で止められた。もっぱらヤバいもんでも研究していたに違いないって噂だった」

「へー」

ヤバいものね……。地球破壊爆弾とか？ それはヤバい。

軽口を叩きそうな顔でもしてしまったのだろう。土方さんの眉間のシワが深くなった。

「お前……郷は『トウキョウ』だったよな」

「うん？ まあ、そうだね」

どうしてそんな話がでるのか……と聞きかけた口は差し出されたソレを目にして止まった。

どこにでもあるようなプリンのカップ。外れかけたフィルムの蓋に印字されたプリンが美味しそうだ。

ソレはご丁寧に札までついて、重要な証拠品のように丁寧に梱包されていた。

エル知っている？ プリンってのは卵と砂糖とその他諸々でできているらしいよ？ それを知るための成分表の欄の横には本社所在地が書かれている。有名なお菓子メーカーの本社の住所が。

「東京都中央区京橋……江戸ではなく東京の京橋をお前は知っているか？」

「知ってるような知らないような？ まあ、京橋なんてどこにでもありそうな地名じゃない？」

「お前の姓は何だ？」

「確か黒島とか？ まあ、家柄で人間が決まるわけでもなしに？」

くつきりかつきり黒いマジックでかかれたプリンの蓋に書かれた文字。『黒島キリ』。

共同の冷蔵庫に入れるものには名前を書くルールだったからね。

「襲撃にあった施設から見つかった研究資料だよ。金庫に嚴重にしまわれていたおかげで焼けるのを免れた奴だ」

「きつちりかつきり燃やしたつもりだったのになあー」

「証拠品だと押収したことが功を奏してな、その存在を上は誰も知らねえだろうよ」

「そりや良かった」

乱雑に倉庫に突っ込まれたせいでザキが見つけなきや、永遠に見つかることもなかっただろうと付け加えられた。

点と点が結びついて線になったというところか。

「お前は何だ？」

「異世界から呼び出された対天人用汎用人型決戦兵器……にされかけたスーパーの店員だよ。つまりは、ただのスーパーの店員」

ピラピラと手を振るけれど、土方さんの眉間のシワが浅くなることはない。

「謝罪する」

「何に？ 田宮を捕まえきれなかった事を？ 私を疑った事を？
嘘、ごめん忘れて。土方さんが謝る必要はないよ」

硬質な自身の声に気まずさを覚える。違うのだ……。何を言い訳しようともこぼれた声は戻らない。

哀れみや、負い目を感じてほしくはないのに。許すなど、怒り狂う獣が私の中から叫び散らす。

「すまない」

再度謝罪する土方さんからの謝罪をかわし、屯所をあとにする。

獣は白いだけで十分なんだけどなあ……。ねえ、銀さん。